

早稲田大学審査学位論文（博士）

「思想の科学」の思想およびその方法

The Thought and Methods of 'Shisō no Kagaku' (the Science of Thought)

早稲田大学大学院社会科学研究科  
地球社会論専攻 日本文化論研究

横尾 夏織

YOKOO, Kaori

2014年3月



## 目次

序章	1
1. 本論文の目的、問題提起	1
2. 従来 of 議論	4
3. 本論文の視座——対象、方法、概念規定	7
4. 構成	9
第1章 「思想の科学」の概略	12
第1次 (1946.5 - 1951.4)	12
第2次 (1953.1 - 1954.5) ・ 第3次 (1954.5 - 1955.1)	16
第4次 (1959.1 - 1961.12)	19
第5次 (1962.4 - 1972.3)	24
第6次 (1972.4 - 1981.3)	27
第7次 (1981.4 - 1992.12) ・ 第8次 (1993.1 - 1996.5)	29
第2章 戦争体験と世代——「実感」論争から見えてくるもの	35
1. はじめに	35
2. 中間文化論・「実感」論争とその時代	36
2-1 大衆社会論、中間文化論	36
2-2 「戦後派」の「実感」	39
2-3 実感信仰と理論信仰	41
2-4 「実感」論争	42
3. 「実感」を超えて——『思想の科学』における試み	46
3-1 鶴見和子の生活記録理論	46
3-2 鶴見俊輔の「実感」	49
3-3 「実生活者」と「市民」	51
3-4 「実感」の消失と日常の思想	53
4. おわりに	56

## 目次

<b>第3章 転向研究会概観——前史、活動、成果</b> .....	<b>59</b>
1. はじめに	59
2. 『共同研究 転向』に至るまで——会報から	60
2-1 初期の活動	60
2-2 それぞれの体験	64
2-2-1 戦中派	64
2-2-1-1 鶴見俊輔	64
2-2-1-2 判沢弘	66
2-2-2 戦後派	67
2-2-2-1 魚津郁夫	67
2-2-2-2 横山貞子／高島通敏／しまね・きよし	70
3. 『共同研究 転向』各論文の検討	72
3-1 立場と方法（鶴見俊輔）	73
3-2 状況概説（藤田省三）	74
3-3 各論	78
3-3-1 「虚無主義の形成——埴谷雄高」（鶴見俊輔）	78
3-3-2 その他の論文	80
4. おわりに	83
<b>第4章 転向研究会の共同性——インタビューから</b> .....	<b>87</b>
1. はじめに	87
2. 鶴見俊輔を通して見る共同性	88
2-1 戦争体験とサークル	88
2-2 モチーフの発生と「孤立」の空間	90
2-3 成功要因——アイデオロジー・フリーな党内党	92
2-4 歴史はバイオグラフィーである	95

## 目次

3. 石井紀子を通して見る共同性	99
3-1 経歴	99
3-1-1 転向研に出会うまで	99
3-1-2 「思想の科学」・転向研との出会いと活動	99
3-1-3 転向研以後の「思想の科学」との関わり	101
3-2 人生の倫理と「思想の科学」・転向研	101
3-2-1 自立の志向	102
3-2-2 信条の模索	104
3-2-3 女性として	108
3-2-4 「実務家」として	110
4. おわりに	114
<b>第5章 2つの天皇制特集</b>	<b>118</b>
1. はじめに	118
2. 同時代の思想状況——天皇制論概観	119
3. 丸山真男の「普遍的原理の立場」	123
4. 鶴見俊輔と生活綴方	126
5. 「天皇制」特集号	128
5-1 内容	128
5-2 反響	130
6. 小田実の「人間」の原理	132
6-1 「見えない人間——私と天皇」	132
6-2 「くらしとしてのファシズム」	137
7. 「日常意識としての天皇制」	140
8. 女性の視点	145
9. おわりに	149

## 目次

第6章 階級の解体と主体のゆくえ	154
1. はじめに	154
2. 中間層へのまなざし	155
2-1 「討論・新中間階層」	155
2-2 戦前の中間階級論	157
2-3 欲望ナチュラリズムと階級意識	159
3. 主体のゆくえ—1960-1980年代の『思想の科学』から	162
3-1 市民と「伝統」	162
3-2 実務と人間	165
3-3 人間とは誰か—暮らしと「サブカルチャ」の視点	167
4. おわりに	170
終章 「思想の科学」の変遷と意義	173
参考文献	183
資料 インタビュー	194
1. 鶴見俊輔氏インタビュー	195
付・質問用紙	224
2. 石井紀子氏インタビュー	
① 第1回	226
② 第2回（付・追記）	253
③ 第3回	287
付・質問用紙	321
あとがき	324

## 凡例

### (1) 資料の引用

- ・ 旧字体、旧かな遣いは、原則的に新字体、新かな遣いに改める。
- ・ 前後一行空きで引用する場合、中略は（略）、文の途中から引用した場合は冒頭に「……」を記す。
- ・ 引用文中に引用者が注釈を加える場合は亀甲〔 〕を使う。
- ・ 参考文献の書き方は **SIST**（科学技術情報流通技術基準）02 に準拠する。

### (2) 表記のルール

- ・ 思想の科学

本論文で、思想の科学を二重鍵括弧で囲んだ場合（『思想の科学』）は雑誌を指す。  
一重鍵括弧で囲んだ場合（「思想の科学」）は雑誌と思想の科学研究会の両者を含めて指す。

- ・ 人名（鶴見俊輔／鶴見和子／鶴見良行）

本論文で、鶴見という表記は鶴見俊輔を指す。

鶴見和子あるいは鶴見良行を指す場合は、姓名併記ないし文脈から分かる場合は名のみ（和子、良行）を記す。

### (3) 時期区分

雑誌『思想の科学』は下記のような版元の変遷を経る。その都度創刊言が付され、号数が改められるなど、前の刊行期と画する意識が見られたが、1972年以降、「第〇次」という名称が定着した。

すなわち、1966年のシンポジウム「思想の科学の二十年」において、先駆社時代を第1期、建民社版『芽』を第2期、講談社版を第3期、中公社版を第4期、自主刊行以降を第5期と規定し、さらに1972年3月号において、自主刊行以降の10年間を第5次と位置づけ、次月から第6次を刊行すると宣言した。それ以降、過去の発行分についても第1次～4次と表現・表記するようになる。

本稿も便宜上この区切りを踏襲して論を進める。

## 凡例

第1次	1946年5月～1951年4月	先駆社
第2次	1953年1月～1954年5月	建民社
第3次	1954年5月～1955年5月	講談社
第4次	1959年1月～1961年12月	中央公論社
第5次	1962年4月～1972年3月	思想の科学社
第6次	1972年4月～1981年3月	思想の科学社
第7次	1981年4月～1992年12月	思想の科学社
第8次	1993年1月～1996年5月	思想の科学社

号数の記載は SIST02 の簡略記述方式に準ずる。

例) 第4次1号、通巻45号 → 4(1), (45)



## I 序章

### 1. 本論文の目的、問題提起

1946年5月、渡辺慧、武谷三男、都留重人、丸山真男、武田清子、鶴見和子、鶴見俊輔の7人の同人により雑誌『思想の科学』が創刊された。この題名の直接の名付け親は、当時和子と親交のあった経済史家・上田辰之助であることが鶴見姉弟の回想によりほぼ明らかだが、その含意に関しては創刊同人間で当初から一致していたわけではなく、それから半世紀続く刊行の歩みの中で変容もしていった。本論文の目的の一つは、「思想の科学」が意味するところの変遷過程を明らかにしていくところにある。以下、変遷の一端を紹介しつつ具体的な問いを提示する。

初発における彼らの意図はどのようなものだったのだろうか。創刊号の巻頭には以下のような「創刊の趣旨」が掲げられている。

1. 本誌は、思索と実践の各分野に、論理実験的方法を採り入れる事を、主なる目標とし、これに伴う方法的諸問題を検討したい。
2. 本誌は、上記と同様の方向に動く世界の思潮を、わが国に移入することに専念し、先ずその出発点として、英米思想の紹介に尽力する。
3. 本誌は、外国思想の紹介を行うに際し単なる解説に終わらぬよう注意し、これらに対して、批評的態度を維持したい。又更に進んで、これら外国思想が、日本社会の分析及批判の具として、如何に使用され得るかをも考えて見たい。

この文言からは、彼らにとって「思想」は観念的なものではなく、論理実験的に「科学」し得るものであることが想定されており、日本社会を、都留、武田、鶴見姉弟の学問的ルーツともいべき英米の諸科学により批判的に分析しようとの意図が読み取れる。

だがそれから8年後の1954年5月、第3次『思想の科学』の創刊号では、編集長に就いた竹内好が以下のように「読者への手紙」を書いている。

思想とは、何か外界にあるもの実体のようなものではなくて、私たちが生きるために、よく生きるために、それを使うもの、という風に私たちは考える。(略) それには、

## 序章

専門家だけが書齋の中で孤立して考えたり、外国の本をよんでそれを読者に紹介する  
今までの雑誌の形ではダメなのである。どうしても生活の中にはいり、そこから問題  
をくみ取り、協同して法則を探求しなければならない。そういう思想運動の手段とし  
ての雑誌を私たちは考えているのである。

上記の文では、先の「創刊の趣旨」に見た、日本の社会を分析するために外国の理論を  
積極的に紹介しようという意図はむしろ否定されており、思想運動として、人々の生活の  
中に入り、そこから問題をくみ取るべきだとの認識が窺える。このような転回はどのよう  
な経緯で、どのような動機からなされたのか？そしてその帰結はどのようなものであった  
のだろうか？

1959年1月、第4次の創刊言を見てみよう。

1 わたくしたちは「思想」本来の力をとりもどしたいと思います。いままで日本で  
は「思想」が一部少数の、とくにアカデミズムの中の専門的思想家に、独占される傾  
向がありました。その結果、実生活者は「思想」に縁ないものと誤解し、専門的思想  
家は、「思想」と生活をむすびつけないために、生産的の仕事ができませんでした。こ  
の問題の解決のために、この雑誌を役立てたいと思います。

2 その方法の一つとして、ちがった生活、立場、考え方の人たちが「思想」をぶつ  
けあうことが必要です。(略)

3 (略)

4 思想を対話の中から生み出したいと考えます。生き生きした思想は孤独の密室の  
なかでは生まれません。その意味で、新しい小集団が対話のなかから思想を生む努力  
を試みている事実注目します。小集団はこの雑誌をささえる最も大きな力の一つと  
なるでしょう。

ここでは、従来の「思想」の排他的担い手としての「専門的思想家」と、そうでない「実  
生活者」という新たなカテゴリーが導入されている。そしてそのような違った属性のひと  
たちが思想をぶつけあう、対話の場としての「小集団」の可能性と、その効果の雑誌への  
反映の期待が見て取れる。既成の「思想」ないしそれを「科学」する方法を紹介する雑誌  
でないものを志向していることは明らかであり、異なる属性のものが小集団を組み、そこ

での対話から生れる思想が雑誌に還流してくるという動的な思想の創出を目指していることが分かる。

しかしここで注意すべきは、連繋、対話の前提に、属性の相違において互いが切れているという意識が濃厚に窺えることであろう。そうであるならば、切れているという意識と連繋への意欲はどのような関係にあるのだろうか？あるいは切れているという現実を受け、連繋を可能にする仕組みはどのように働いたのだろうか？そこに参入してきたのはどのような人たちであったのであろうか？

そして、「思想の科学」が専門的思想家と実生活者、さらには様々な立場、考えの人たちの対話から思想を紡ぐ思想運動であったとして、その成果はどのようなものであったのだろうか？1996年、創刊50周年を節目に『思想の科学』は第8次を終刊して「休刊」期に入り今に至っている。終刊にあたって、当時思想の科学社の社長職にあった上野博正は、「この雑誌に刺激されて『考える』民衆が育ったか」との問いを發し、「わたし一個としては否定的な気分傾向」との見解を述べた〔『思想の科学』編集委員会編 1996: 335〕。

対照的に丸山真男は、「思想の科学」の運動の独自性につき、90年代に入って以下のようにコメントしている。

創刊はじめごろはともかくとして、その後、「思想の科学」の中でだんだん勢いをましてきた庶民主義というか、一種の大衆主義にたいしては、ぼくはいつも批判的でした。

(略) かつて〔鶴見〕俊輔さんと対談したときも、意地悪なことばかり言いました。けれど今日はそのころとまた大きく変わりましたね。文化の拡散もいいところで、反知識人主義とか、反エリートとかいくらきんでも、その肝腎の知識人や知的エリート自体が見えなくなっている。(略)「思想の科学」だって、大衆主義に見えた時期でも、実際は少数者運動だったし、それでいいんじゃないですか。それは「片隅異端」に居直る、という意味ではなくて、そういう少数者グループを、いってみれば「思想の科学」の細胞組織を、方々に作っていく努力を気長にやっていく、ということです。

[丸山 1992: 207]

丸山は、「思想の科学」の「大衆主義」が多数者としての大衆を取り込むものではなく実は少数者運動であったこと、その大衆性の欠如と持続こそが、90年代の知の拡散状況の中で意味を持つと示唆している。これをいま少し敷衍すれば、知の拡散状況という変化に

## 序章

もかかわらず、大衆主義を持続していることこそが、「思想の科学」が本質的に大衆性を欠いていることの証左であるとも言えるだろう。しかし周知のように丸山こそ、自身も述べているように大衆に迎合することには常に批判的であり、その意味では戦後の論壇ならびにアカデミズムにおいて知識人然とした知識人であったとの評価が妥当しよう。そうであるなら、戦後、一つの雑誌の同人として言論活動のスタートを切った鶴見と丸山という2人の知識人が、やがて轍を分っていった要因は何なのだろうか？

この問題を伸張してゆくと以下のような問いも生起する。丸山が示唆するように、「思想の科学」は本質的に知識人である少数集団が大衆を注視し続けた、そのような営みだったのだろうか？「思想の科学」における知識人と大衆の相互影響関係はどのようなものだったのだろうか？あるいは知識人と大衆以外の、第3の存在と呼べるような主体は存在しなかったのだろうか？それは50年間の歩みの中でどのように変化し、「思想の科学」以外の論壇の変容、そして社会の変容の中でどのような位相を示したのだろうか？

本論文では、「思想の科学」をもっぱら鶴見俊輔ら知識人の営為として取り扱うのではなく、多様な主体の参加と相互関係、その変容の過程として捉える。それにより、上記の問いへの回答を得た上で、思想運動としての特性を抽出し、その意義と可能性を明らかにする。

## 2. 従来の議論

日本の知識人や戦後思想に関する研究においては、「思想の科学」は、中心人物である鶴見俊輔の思想に関連して言及されることが多い。

小熊英二は、「戦後思想」とは「戦争体験の思想化」の営為であったとする。そして鶴見の場合、軍属として配属された先で生じた、「被害」と「加害」の二分的思考への懐疑、「日本人」という概念の束縛への抵抗感、さらには知識人や為政者が「平和主義」から「戦争賛美」、そして敗戦を機に「民主主義」へと転換したことへの失望が、知識人と大衆、日本人と人類の枠を取り払う一種の普遍主義としての「根底」への志向と、転向研究、生活記録をはじめとするサークル運動、安保運動に際しての「無党無派」の市民の運動といった新しい組織論を生んだとした [小熊 2002: 717-752]。

坂本多加雄は、鶴見が「自らの立場を、思考することについての科学的探究という意味を込めて『思想の科学』と称し」、その意図に賛同する人々を結集して雑誌『思想の科学』

を創刊したとしている。坂本は、鶴見たちにとって、戦中の硬直した思想状況の現出は、言葉に対する科学的アプローチの欠如に由来すると考えられていたと指摘する [坂本 1996: 300]。

たしかに、戦争体験を基底とする鶴見の思想が、言葉への関心なканずく「根底」としての日常語への信頼を形づくり、それが『思想の科学』の内容に反映されていたことは否めない。ただ、ここで十分に明らかにされていないのは、鶴見の意図に賛同して新しい組織論によって組織された人とは具体的にどのような人であったのかということだろう。そもそも、ここでは鶴見の意図と組織論が予めあったことが前提されているが、はたしてそうだろうか。

戦争体験とともに言及されるのは、鶴見のアメリカ体験である。吉見俊哉は、いずれもアメリカに学問的ルーツを持つ鶴見姉弟と鶴見良行の3人の戦後の思想的展開を追い、俊輔の視座は「近代天皇的な、冷戦構造的な思考に対する徹底的な批判」であって、それゆえに「日本」、ないしその帝国主義的性格を引き継いだ、「アメリカ」による覇権体制としての冷戦構造を越えることができなかつたと示唆している。他方和子は、天皇制にもアメリカによる占領にも対抗し得る民主的な主体を、日本の女性たちのなかに創出しようとし、のちに内発的発展論と柳田民俗学にも学んで、日本の「芯」らしきものの発見を試みるが、日本とアメリカの「殻」を破ることは難しかった。やがて南方熊楠を対象としたのは、アメリカや中南米、帝国の周縁と紀州田辺を重ねる仕方で日本とアメリカの殻を同時に越境する可能性を内包していたためであると指摘する。この2人に対し、良行が1980年代にアジアを歩き抜くことにより作成したエスノグラフィーは、19世紀中葉以来のアジアの長い「戦時」の終結と「戦後」の到来を先駆的に看取しており、近代天皇制やアメリカニズムを前提としない地平に自らを向ける試みであったと評価している [吉見 2012]。

戦中の天皇制と戦後のアメリカニズムに帝国主義の連続性を見て「相互抱擁の構造」を指摘する吉見の見解は、鶴見姉弟が対抗しようとしたものの歴史的重層性ととともに、冷戦後における、ある限界を明示しているといえよう。しかしながら、声なき声の会、ベ平連など反政府、反米の市民運動には、鶴見以外にも「思想の科学」のメンバーが多く参加し、『思想の科学』でも運動論を展開していたが、吉見は鶴見姉弟と良行の思想を対象としているので、当然、『思想の科学』に登場する他の著者には論が及んでいない。

「思想の科学」の評価にあたっては、鶴見俊輔の戦争体験、アメリカ体験といったものだけではなく、同時代の状況が考慮されなければならない。「思想の科学」の主要な成果

## 序章

の一つである『共同研究: 転向』(以下『転向』)は、先ごろ平凡社の東洋文庫に入り新たな装丁で出版されたが、そこに付された成田龍一による解説は、転向が「状況の中の作品」であることに注目している。すなわち成田は、『転向』は天皇制を核とする日本ファシズムに対し、ファシズム批判と戦争反対の実践がなぜ挫折したかを転向／非転向という問題系で探ろうとする試みであったとするが、その際、戦前から天皇制批判を掲げ、非転向を貫いた党员を擁していた日本共産党が、コミンフォルムからの批判により分裂抗争に陥り、敗戦直後に知識人から得ていた信頼と支持が揺らいでいくという 1950 年代半ばの状況を重視する。そして『転向』の執筆者たちも「強弱や距離の取り方に差異こそあれ、こうした状況とは無縁ではない」[成田 2012a]。

本論文は、『転向』を戦前の蹉跌を踏まえて戦後の主体と運動のあり方を問う主題を扱ったものと捉える成田の見解と、基本的な視座を共有するが、成田が指摘する、『転向』執筆者の「運動」や「党」といった状況との距離の取り方や強弱の差異を、『転向』以前のそれぞれの体験とそれ以降の展開も含めて、より詳細に見ていく。

加藤典洋は近年、「外国の優れた思想を移入することを主軸に、日本の進むべき方向を見出そうとする思想」を「戦後民主主義思想」、これに対し戦争と戦後の「日本の現実」に立脚して進むべき方向を見出そうとする思想を「戦後思想」とする分類を設けている。前者には丸山真男、加藤周一、桑原武夫ほか、後者には吉本隆明、鶴見俊輔ほかが入る。そして戦後思想は、戦後民主主義思想に代表される、外来思想に学び、少しでも既成の知的階梯を上昇しようとする、周辺国、後進国の上昇志向の知識人たちがもつ根源的貧しさへの抵抗であったとして、ポストコロニアルの文脈で、外国や次代の人間に伝送することを提案している。と同時に、冷戦以後、そして 9・11、さらに 3・11 という出来事を経て「世界の有限性」の問題が意識にのぼせられている今、「戦後思想」を越える新しい思想の構築が必要であると主張している [加藤 2013]。

加藤は、日本の戦後思想について考えることで、ポストコロニアルというあり方の内容をも、非西洋・非欧米の部分を中心にして更新させる可能性にも言及している。たしかに、日本の戦後思想をポストコロニアルの文脈で見ようとする加藤の視点は示唆的だが、「上昇志向」は非西洋の敗戦国である日本と西洋・欧米の間のみならず、大衆と知識人の間にも働いていたのではないだろうか。本論文では、「思想の科学」の中にそのような複層的な流れが生じていたことを示す。

福間良明は、日本戦没学生記念会(わだつみ会)と思想の科学研究会のメンバーの重な



りを指摘した上で、同会が 1960 年以降に直面した戦争体験の伝承の困難の理由を、戦中派世代とそれ以下の世代＝戦後派・戦無派世代との体験、教養、そしてコミュニケーションの断絶に求めている [福間 2009]。

たしかに、戦争体験の相違、さらにはその有無による世代間の理解の困難は、60 年代、とくに大学紛争時にいっそうあらわとなる。しかし「戦後派・戦無派」とまとめて、「戦中派」との断絶を強調する福間の視点は、戦中派と戦後派の間の提携の様相を見えにくくしてはいないだろうか。

世代論に関連して、ヴィクター・コシュマンは、鶴見俊輔と久野収の共著『現代日本の思想』における「戦後派」への評価を引きながら、敗戦を契機として「戦後派」が深めた実存的な傾向と、主体性論争における役割に注目するが [コシュマン 2011: 85-86]、鶴見が評価した「純粋アプレゲール」としての「戦後派」と、荒正人ら戦後に登場したという意味での「戦後派」を混同している。

以下、これらの諸説をふまえて、本論文の視座ならびに対象および方法を確定し、さらに「戦前派」「戦中派」「戦後派」について概念規定を行う。

### 3. 本論文の視座——対象、方法、概念規定

本論文は、「思想の科学」をもっぱら鶴見をはじめとする知識人の営為に還元する立場をとるものではない。もちろん、鶴見の思想が「思想の科学」の論調、性格の無視できない部分を形成していることは明白であり、常にこれを参照した上で、他の主体の参与が「思想の科学」の性格に与えた変容を測ってゆく。また、それら多様な主体の営為だけでなく、「思想の科学」の論壇での位相を把握するために、当時「思想の科学」を取り巻いていた知的状況、とくにマルクス主義に拠る人たちとの影響関係に留意する。

なお巻頭の凡例に示したように、思想の科学を二重鍵括弧で囲んだ場合 (『思想の科学』) は雑誌を指し、一重鍵括弧で囲んだ場合 (「思想の科学」) は雑誌と思想の科学研究会を含めた運動体を指すこととする。

対象とする論点は、「実感」、「中間層」といった、従来の社会科学とは異なる見方をしたことによって「思想の科学」が独自性を示した論点、また、「市民」、「人間」といった、「革命」を導く前衛と率いられる大衆という構図を揺るがす主体概念、そして、知識人と大衆、特殊と普遍、日本と西洋、日本とアジアといった範疇がせめぎ合う場としての「天

## 序章

皇制」を取り上げる。

文献としては、雑誌『思想の科学』、会員向けの『思想の科学会報』（以下『会報』）、それぞれの論者の著作ほか、他誌も出来る限り横断的に扱う。なお『会報』は、雑誌の休刊期も含め「思想の科学」の活動を同時期に伝える重要資料だが、もともと会員への配布を目的としていることもあって、1971年の分（第69号）までしか復刻されていない。バックナンバーは思想の科学社に保管されており、残部が複数あるものはシンポジウム等の機会に販売されることもあるため、できるだけ現物を入手するよう努めた。復刻されていない号から引用する際は、文章の趣旨と前後の文脈が分かるような形で引用する。

これらの文献調査に加え、「思想の科学」の方法と組織論が顕著に表れた場として、「転向研究会」（以下、転向研と略す）に着目し、鶴見俊輔ならびに他のメンバーへのインタビューを行う。また、転向研の活動期は雑誌の休刊期にあたるため、各メンバーの報告等を含め、活動内容を知るために、『会報』を活用する。

時期的には、1946年の『思想の科学』の創刊、1949年の思想の科学研究会の創立から、1996年の休刊までを視野に収めつつ、転向研究会が活動した1950年代後半から60年代、それに引き続いて自主刊行移行後の1970年代までを重点的な検討対象とする。

前項でみたように、「戦後派」という概念には混乱、ずれが見られる。文学の分野に限って言えば、それは戦後に文壇に登場した作家としての意を持つので、必ずしも生年や戦争体験の有無は関係してこない。しかしながら、1950年代の『中央公論』をはじめとする媒体で立ち上って来た「戦中派」というカテゴリー、その前後の世代としての「戦後派」、「戦前派」は、戦争責任の問題とも相まって、生年、すなわち戦争への動員の可能性や、敗戦による価値の転換の受け止め方の相違を生んだ、軍国主義以前の体制の記憶、ひいては「教養」の有無といった要因が介在してくる。

たとえば、戦後思想史研究における一つの指標となる小熊英二の定義は、敗戦時年齢を基準に、1921年から30年生れを戦中派、その前後を戦前・戦後派としている〔小熊2002: 599〕。また福間良明は、敗戦時年齢10歳未満を戦後派世代、終戦後に出生した「戦無派世代」と呼んでいるので〔福間2009: 8〕、生年でいえば1935年で戦中派と戦後派、1945年で戦後派と戦無派が分けられることになる。

本論文では、久野収と鶴見俊輔による、軍国主義以前の体制の記憶の有無と、動員可能性、さらには戦時に小学校教育を終えて社会的自覚を持ったか否かに基準を置いた分類を基本的な指標とする。すなわち、久野と鶴見は、生年1919年から28年を「第一次戦後派



(戦中派)」、1929年から33年を「第二次戦後派(純粋アプレゲール)」、合せて1919年から33年を「戦後派」としているが[久野・鶴見 1956: 190]、本論文では1919年から28年生れを「戦中派」、それより前の生れを「戦前派」、1929年から33年生れを「戦後派」とし、この分類から逸れる場合は適宜コメントを加える。なお、久野と鶴見が第一次戦後派(戦中派)と第二次戦後派(純粋アプレゲール)、本論文の定義でいえば戦中派と戦後派を合せて広義の「戦後派」とした意図については、第2章で詳述する。

#### 4. 構成

本書の構成は序章と終章を含む全8章から成る。

第1章『思想の科学』の概略では、次章以下の議論の基礎となる「思想の科学」の歩みを概観する。それぞれの時期の中心となった論点と、特徴的な試みを押さえるとともに、第3次終刊と、それから4年間にわたる休刊の動因となった事件、および第4次の版元である中央公論社と袂を分かつことになった事件<sup>ii)</sup>にも着目して、主に会内の反応を見ることによって、「思想の科学」の孕む組織上の問題を提起する。それらの問題が直接的にそれ以降の「思想の科学」の性格を決定したわけではないが、それらの事件を受けて生じた会内の対話と摩擦が、彼らの「思想」の内容およびそれへのアプローチの方法としての「科学」の変容の契機ともなっていることを示す。

第2章「戦争体験と世代」では、1950年半ば、「戦後」は終わったとの言説に触発されて「戦中派」、「戦後派」の別が立ち上がるさまを跡付け、「思想の科学」内外における諸論点との関わりを整理した上で、「思想の科学」における戦後派の「実感」の主張と、それを繰り入れようとした戦中派の意図を明らかにし、さらに、実感/理論の止揚の試みと、二項対立の枠組の消失の過程を追う。

第3、4章では「転向」という主題に戦中派と戦後派が共同で取り組むことで新しい連帯が模索された転向研究会に注目をし、「思想の科学」内における戦争体験の差異と、思想的ならびに組織上の特徴の一端を明らかにする。

第3章「思想の科学の転向研究」では、転向研の活動を『会報』から跡付け、その前史ともいべきそれぞれのメンバーの戦中の体験を見たうえで、『転向』の内容的特徴につき考察する。

第4章「転向研究会の共同性」では、インタビューの成果を織り込んで、転向研究会の

## 序章

共同性につき考察する。第1節では、中心的人物であった鶴見俊輔の個人的モチーフに端を発しながら、共同研究へと発展し、成果を出すまでのプロセスを精察する。さらに、鶴見の「転向」に対するまなざしの変容から、当時の転向概念をとりまく状況を浮かび上がらせる。第2節では、転向研では数少ない女性であり、戦後派にあたるメンバーで、思想の科学研究会や思想の科学社の出版部に多くの貢献をしてきた石井紀子に注目し、戦中の体験と、転向研究会への参加の動機付け、そこで得たものとその後の人生における影響を追う。その上で転向研究会あるいは「思想の科学」という場の意義と、そこに孕まれていた階層性——知識人と実生活者、学者と非学者——の問題に言及し、そこにおける「実務家」の役割を明らかにする。

第5、6章では、『思想の科学』における議論を中心に扱いつつ、論壇、ジャーナリズム、アカデミズムにおける議論に広く目を配り、その中での定位を試みる。

第5章「2つの天皇制特集」は、戦後における天皇制をめぐる議論を概観した上で、『思想の科学』における天皇制に関する議論を精察する。まず、『思想の科学』の創刊同人であり、戦後いち早く天皇制について論じ、その後も様々に論及した丸山真男の主張を、『思想の科学』における発言を交えながら概観して問題系を抽出し、次に鶴見の立場を確認した上で、『思想の科学』の特集と連載を時系列で追い、問題系の変化や新たな視点の導入の過程を跡付ける。それにより、『思想の科学』の特質の一端を明らかにするとともに、知識人の態様の変容についても考察する。

第6章「階級の解体と主体のゆくえ」の前半では、1950年代の中間層をめぐる論争と、1970年代の「総中流化」に関する言説を、その前提となる戦前の中間階級論も含めて概観する。後半では、階級を超える主体としての「市民」、「人間」、そして第4章でみた石井のそれと重なりつつ力点の異なる「実務の中の思想」というカテゴリー、さらには1970年代後半以降の女性たちの暮らしの中の思想、あるいは「サブカルチャー」の観点から取り上げられた異議申し立てを、『思想の科学』を中心に概観し、さらに、「思想の科学」から離れていった人びとの側から、「思想の科学」の持つ特徴と問題点を明らかにする。

最後に終章で、各章の議論を横断して通時的に総括し、「思想の科学」の思想運動としての特徴を明らかにして、戦後思想史における意義につき考察する。

巻末には、参考文献に続き、資料として鶴見氏ならびに石井氏へのインタビューのスクリーンショット全文を添付する。

---

<sup>i</sup> 題名につき鶴見和子は、「名付親は、経済史家でクェーカーの上田辰之助さんである。上田さんは、ラテン語にも造詣の深い教養人であり、英語の達人でもあった。」[鶴見和子 1982: 10] と述べており、同様に鶴見俊輔も、「題名となった『思想の科学』は、そのころ鶴見和子がしばしば会って話した中世経済史家・トマス・アキナス研究家の上田辰之助氏が、新しい雑誌の出ることをきいて、提案された題名である。」[鶴見俊輔 1985: 18-19] と述べている。

<sup>ii</sup> 『思想の科学』事件、天皇制特集号廃棄事件、『思想の科学』天皇制特集号事件、『思想の科学』天皇制特集号廃棄事件などとも言われるが、本稿では天皇制特集号事件で統一する。

## 第1章

### 第1章 「思想の科学」の概略

序章で見たように、『思想の科学』という題名にはある種の矛盾が含まれているが、その点に同人が言及するようになるのは後年のことであり、創刊当時に意識されていたとは思われない。終戦から数年の間、自然科学と社会科学、人文科学を問わず学問を「科学」として追究することは知識人に共通の課題であった。

その中でもっとも広範かつ大規模に活動を展開したのは、1946年1月に創立された民主主義科学者評議会（民科）であろう。創立宣言は、戦後間もない時期において「科学」が含意したものを示している。すなわちそこで、自然科学者、社会科学者、技術者、教育者といったいわば広義の知識人は、戦前の「日本封建主義、軍国主義」を支えた「似而非科学」を排して、「民衆の〔ママ〕役立つ真の科学」を育てるべきであるとされた。同宣言は、すでに国民は民主主義的建設こそが自己を解放する「唯一の道」とであると自覚して蹶起し始め、その意味で「民主主義革命」はすでに進行しており、知識人はこれに協力する使命と責任を負っているとされた〔歴史科学評議会 1968: 4〕。

この宣言や、『民主主義科学』、『国民の科学』といった民科の機関誌にも見られるように、この時期「科学」は、マルクス主義、社会主義の「革命」のみならず、戦前の封建的、軍国的なものを否定し、新しい社会をつくる理念としての民主主義と適合していた。またそれは、当時進行していた占領下における民主化政策と合致するものであった。

近年、藤野寛は、1945年から46年の時点に焦点を当てて、「フランクフルト学派」と『思想の科学』に共通点を見出している。すなわち、両者はともに①敗戦国の戦後の社会的・思想的立て直しの一翼を担おうとしたという意味において啓蒙的であり、②戦前・戦中のファシズム体制を支える思想的基盤を提供した哲学の批判を主要な課題とし、③戦勝国アメリカから帰った学者たちを中心メンバーとして、敗戦国において学問的空白を取りかえす役割を担い、④アメリカのプラグマティズムに色濃い影響を受け、⑤マルクス主義に共感を表明しつつも共産党からは距離を置くスタンスを守り、⑥学際的共同研究集団たろうとし、⑦大衆文化を中心テーマの一つとした。両者においては、ファシズムという深刻な政治的体験が科学批判、具体的には哲学批判および言語批判として遂行されている。鶴見の場合も、初期には「言葉のお守りの用法について」に代表される言語分析的なアプローチで「思想の科学」化を推し進めたが、「ひとびとの哲学」の発想が動因となって「思想」から「科学」の縛りが外れていったと指摘している〔藤野 2009〕。

たしかに、『思想の科学』初期の取り組みにおいてはアメリカの言語分析学や社会心理学に影響を受けた「科学」的なアプローチが濃厚である。そこには、前近代的、封建的、いわば戦前的な日本と日本人を批判し、主としてアメリカの学問をさかんに紹介・導入しながら新しい哲学ないし言語を創生しようとの意図が窺える。よってその意図においては先に見た民科と大部分を共有しながら、方法としてのアメリカ由来の科学がマルクス主義との距離、藤野の言う⑤の特徴を鮮明にしていく。

藤野が指摘する、鶴見において「科学」の縛りが外れていく過程と、すでに前章で見た加藤典洋の提起する「戦後思想」と「戦後民主主義思想」の分岐の過程は、ほぼ同じ軌を描くといっていいただろう。民科の宣言に見たような「科学」＝「民主主義」という文脈で見れば、なおさら納得のいく解釈である。

しかし本当に鶴見の思想から「科学」の縛りは外れてしまったのだろうか。だとすれば1950年代以降、『思想の科学』という題名の半分は実体を失くしたまま刊行を続けたことになるのだろうか。もちろん市場に流通する商品として、あるいは社団法人としての団体の同一性を維持するために名称変更は好ましくないという実際的な理由も働いたとも推測される。しかしながら、『思想の科学』が哲学・思想雑誌であり、思想の科学研究会が、鶴見はじめ言葉へのこだわりの強い人の集まりであることを考慮すれば、名称が雑誌の内容と研究の方向性を示す主要な表現となる側面も看過できない。

以下では、「思想の科学」という名称に内包された矛盾が露わになっていく過程を明らかにし、次章以下の議論の基礎を提示する。

## 第1次 (1946.5 - 1951.4)

第1次では、思索・実践分野への「論理実験的方法」の導入に加え、外国思想、とくに英米思想の紹介が目標として掲げられ、経験主義を選択の規準としつつ、パース、デューイなどのプラグマティズム、カルナップ、ノイラートなどの論理実証主義主流、モリス、ラスウェルの記号論、ハルの新行動主義心理学、クラックホーンの社会人類学、ラスキの社会民主主義政治学、スウィージーのマルクス経済学、エリスの性科学などの書評が掲載された。これに対しては、外部から「資料の独占」との批判<sup>ii</sup>も出たが、『思想の科学』ではこの批判を本誌に掲載<sup>iii</sup>した上で、「海外の新刊書の内容について知る事は、外国書を手しにくい今の日本人にとって必要なこと」であり、「今後この雑誌が、資料紹介者として

## 第1章

更に役に立つように、工夫したい」<sup>iv</sup>として、戦中の欧米の知識に対する閉鎖状況から解放されたものの、依然輸入書の入手が困難な状況にあって、入手できる者はそれを公に紹介すべきとの認識を明確に打ち出した。次号には、それを裏付けるように計 20 本に上る書評が掲載された。

英米の経験主義的な手法を、実際に「日本社会の分析」の具として適用した試みが、「ひとびとの哲学」である。この面接質問調査は、①思想史から観念・原理のカテゴリーを抽出し（宇宙論における一元論、二元論、多元論、人間観における性善説と性悪説、認識論における理性主義、直観主義、権威主義など）、②これを人々から引き出すための質問書を作成し、③記号論理学を用いて人々の答えを整理する「質問書解読の鍵」を作って、④各職業別、そして「平均人」の哲学的な位相を読み取ろうするものである。鶴見俊輔と良行による報告では、これにより職業別、さらにはそれらを統合して「平均人」の思想傾向が弾き出だされたものの、最後は「哲学の面白みわ [ママ]、結局わ [ママ] その個人差にある」<sup>v</sup>として、「変り種のケース」が 2 例挙げられて締め括られた [研究部 1948]。後日鶴見は、ひとびとの哲学の調査では「記録のマトメ方が不成功だった」、統計だけで終わらせずに「一貫した映像を作って見せる」ことができなかつた<sup>vi</sup>と、困難を述べている。

他方で「ひとびとの哲学」では、著名人へのインタビューや、大衆小説、映画、落語、浪花節などを対象とした大衆文化研究も行われた。ここでは著名人の言説や作品内容を、人びとの思想・態度の形成に影響を与えるもの、また後者については人びとの理想・願望の反映としても捉えており、いずれについても分類・分析といった手法ではなく聞き書きと内容要素の記述を主たるアプローチとしている。これらの成果は思想の科学研究会の編書として単行本<sup>vii</sup>にまとめられている。その意味で、初期の「思想の科学」の代表的な仕事と呼べるだろう。

このように「ひとびとの哲学」の取り組みの中で成否が分かれる中、鶴見の対米観、さらには「科学」観も揺らいでいく。もとより鶴見は、『思想の科学』創刊号掲載の「言葉のお守りの使用法について」で、戦時中の「八紘一字」や「肇国の精神」に替わり、戦後は一転して政治家や評論家が「民主」、「自由」、あるいは「唯物」といった言葉を使い始めたとして、占領軍と共産党という両方の権力に対して批判的なまなざしを向けていた [鶴見 1946]。1940 年代末になると、米ソの対立を背景に占領政策の焦点は民主化よりも経済復興と再軍備化に移っていく。そのような中鶴見は、「アメリカ」と、それにすり寄る者にいっそう警戒するようになる。たとえば今村太平の「漫画映画論」に向けられた、「一等国



アメリカ」に比して日本は三等国か四等国であり、文化に至っては「等外」だとする批評に対し、鶴見は『『アメリカ』というコトバ』を、「フィクションのように使」って「同国人中の獨創的思想家をおとしめる」文筆・雑誌業者の風潮を批判した。しかし「ただ抵抗してアメリカを拒否するのでは、戦前の日本思想に戻る事に」なるという認識から、「アメリカに対して如何に抵抗し、如何に学ぶか」を課題に据えることになる<sup>viii</sup>。鶴見がアメリカの学問のうち最も評価し、学ぼうとした点は、アメリカの哲学雑誌が、「左右両翼の人々が協力して」、経験主義の一点における一致により企画・編集されているという「"ワリキリ主義"の伝統」にあった<sup>ix</sup>。

1949年7月、社団法人「思想の科学研究会」が立ち上げられる。その際に示された「社団法人思想の科学研究会創立に際して」と題された趣意書は、会の目的が「思想の科学」の研究にあるとしたうえで、その対象は「思想家が文章に書いた固定した思想」のみを指すのではなく、「むしろ、歴史の創造に直接または間接に参加する多くの人々—そうして現在においては、それは何よりもまず大衆である—の頭の中であって、これらの人々の行動を現実の規定し、その行動として現れてくるもの」であり、だからこそこの「科学的研究」すなわち「思想を単純に思想的な観念的存在として、言わば形而上学的に取り組むのではなく、思想を経験の世界に属する現実的な存在として、経験科学的に取り組むこと」が重要であるとした。よって彼らの研究には、「人々の思想」に関心をもつ各研究分野のみならず、「数学、論理学、統計学、その他科学の一般的基礎的諸問題について協力しうる学者の協力」が必要であることが強調されていた [川島 1950]。この点、アカデミズムはもちろん、在野の研究組織として見た場合にも、各分野が部会ごとに分かれている民科の「科学」とは異なり、今日の言葉でいえば学際的な研究が志向されていたといえることができる。

しかし「専門別の垣」は鶴見らの想像以上に高かったものと推察される。1948年4月号、49年の5月・7月・10月号には、「この雑誌わ [ママ] 一つの流れとして読んでいただきたいのです。」と題する主張が繰り返し掲載される。ここでは読者から「哲學雑誌でもないし、言語學の雑誌でもないし、社会学の雑誌でもないし。何お [ママ] 目的とするのか、はつきりしない雑誌だ」との批判があったとした上で、「これまでの雑誌お [ママ] 一つのものとして見ていただければ、自分たちの仕事が今までになかった新しい思想の流れお [ママ] 作っている事に気がついていただけたらと思うのです。日本の思想界に大きな位置お [ママ] 占めて来た哲学の伝統から、思い切って離れた新しい哲學の道お [ママ] 開くのが私達のねらいです。」と、従来のアカデミズムにない学際的なアプローチ、各分野の交点に立

## 第1章

って新しい思想、新しい哲学を拓こうとする意図を強調する。

また 1950 年 4 月号の「編集前記」は、次号に梅棹忠夫の「或村の生態学」以下「思想について生物学見地から研究を試みたもの」3 本を掲載することを予告し、これを「日本の専門のユガミを正すための努力」と位置づけた上で、以下のように自分たちの研究の困難を述べている<sup>8</sup>。このような「総合科学的な仕事」は従来日本では疎まれてきた。このような研究は、「個別科学と個別科学の間の踏みならされていない道に行く」「冒険」であるがゆえに、時には「ジャンプ」を必要とする。失敗して「ブザマに落ちこち」るかも知れないが、あえて「具体的な問題ととりくんで、ジャンプを試みる人」の方が、『人間の思想は歴史的、社会的に決定される』とゆう公式を一つオボエ的にくりかえして安心している人よりどれだけ学問を進めるかしのれない。このように「思想の科学」はアカデミズムの専門主義とマルキシズムの公式主義の双方を批判し、「戦後世代の研究者」として「前の世代に見られない捨身の構え」を貫こうとする。

しかし専門の垣を破ろうとする鶴見らの意志とは裏腹に、雑誌の売り上げは落ちてゆく。敗戦直後は新興の非ファシズム系の出版社には紙の割り当てが優遇されていたものの、経済復興が占領政策の第一義的な目標とされる中、給紙状況は次第に厳しくなった。他の多くの小出版社同様、先駆社は倒産する。1 年の空白を経て 1951 年 4 月に出たガリ版刷りの最終号の「通信」欄では、経営の行き詰まりが告げられると共に、これまでの仕事の振り返りと今後の活動の方向性が示された。6 年間の仕事のうち、外国思想の紹介、大衆文化研究は、外部からさまざまな批判があったものの、逆に大出版社、「商業的な大雑誌」に「もつと巧みに利用されるように」になり、自分たちの仕事としては影の薄いものとなった。しかし、「ちがった分野から世界にせっしている人々の意見を集め、それらをつつき合せることによって、哲学の新生」をはかることと、「日本の人々の大多数の心」に達することは端緒についたばかりだとして、「専門の穴」に閉じこもる学界の風潮を批判し、「狭小な穴から出て、互いに同作業をする」という「異端」の思想運動として努力を続けることが確認された。

### 第 2 次 (1953.1 - 1954.5) ・ 第 3 次 (1954.5 - 1955.1)

第 2 次と後から呼ばれるところの『芽』は、1953 年に建民社から出版される。社長の高橋甫によると、この会社は敗戦後に海軍相の命で復員援護事業として旧軍人・役人を収



容するために事業化され、GHQ に解散を命ぜられた後も株式会社に改組して運営されていた。高橋は軍備問題に関する自著を出版しようとしたが版元が見つからないため、同社中に出版部を立ち上げる。同部編集長の加藤子明から『思想の科学』で機関誌をだしてないから、機関誌をだしてくれないか』との打診を受け、高橋は承諾し刊行した〔加藤，しまね，市井，高橋，多田，山田，後藤宏行，後藤文利，鈴木，大野，鶴見，森，北沢，加太，見田，安田，渡辺，伊藤，判沢 1966: 125-126〕。

『思想の科学』がその名称を変えて刊行されたのは半世紀の内この『芽』の1年余のみだが、その理由につき鶴見は「出しても又すぐつぶれるんじゃないか、二号か三号でという気が非常にあった」と述べた。やがて講談社が版元を引き受けるが、内容としては生活綴方、身上相談、「庶民列伝」など、講談社版『思想の科学』の特集となったものはすでに『芽』で扱われており、一続きのものとして理解することが出来る。鶴見はその内容につき、「先駆社時代から中断の時期にかけて進むべき方向はだいたい固まりかけていた」、「その結実が『芽』の時代だったと思える」と述べている〔加藤，しまね，市井，高橋，多田，山田，後藤宏行，後藤文利，鈴木，大野，鶴見，森，北沢，加太，見田，安田，渡辺，伊藤，判沢 1966:136-137〕。すなわち、説明的なアプローチから記述的なものへ移行した結実として生活綴方、伝記の方法を捉えているといえよう。

このような移行は「思想の科学」に限ったものではなく、マルキシズムをはじめとする進歩派の中に起りつつあった文化戦略の転換とも呼応していた。すなわち、国際的な東西対立のあおりを受けて、国内でいわゆる「逆コース」が進行し、共産党の内部対立と急進化が濃厚になる中、民科では石母田正ら歴史学者が、地域や職場における学習サークルの組織化を進め、歴史学のテキストの講読を通して「科学」的歴史観を普及する国民的歴史学運動を展開した。またサークルは、生活の困難を記述し、その因ってくる構造と克服する方途を討論する生活記録運動の場ともなったが、それは竹内好が提唱していた国民文学論の実践の意味合いも持つ。1954年5月発刊の第3次『思想の科学』は竹内を編集長に据え、同年7月発刊の『思想の科学会報』は民科に籍を置く三浦つとむが編集を担当したのには、以上のような状況の中での民科と「思想の科学」の近接が反映されているといえよう。

第3次創刊号の梅棹忠夫「アマチュア思想家宣言」<sup>24</sup>は、従来思想というとプロ思想家が西欧由来の体系的な思想のみを論じてきたが、本来、思想とは生活という大きな体系の一要素であり、日本で生活を営んできたところの「土民」の使用に委ねるべきだとして、

## 第1章

「アマチュア思想道」を提唱した。それを具現化するかのようになり生活綴方を含めて投稿の掲載数が大幅に増え、上坂冬子、佐藤忠男、大野力といった、後に編集に携わることになる書き手も現れる。また、毎号巻末には入会案内が載せられ、会費納入以外はとくに義務がなかったため入会者が増加した。すると、丸山や武田、石本新ら初期会員から、会員の増加による会としての連絡の困難や、研究の質の低下が指摘された<sup>xii</sup>。とくに、講談社を版元として大衆性を重視するようになった第3次では、会員の居住する地方や職業の幅が広がり「アマチュア思想道」にふさわしい多様性を備えたものの、研究上の訓練の足らなさを、実力の格差から、鶴見を始めとする会の中央と辺縁の乖離が広がっていく。これへの対応の一つとして、英文『思想の科学』というべき“the Science of Thought”がつくられ、学術的・理論的な探求はそちらに譲ることとなった。これは1954年9月と56年2月の2回刊行され、鶴見、武谷、石本、中村元、上山春平らが執筆した。

1955年に入ると、思想の科学研究会は講談社と契約更新のための話し合いを持ち、当初更新の見込みだったものの、その後「突然」、契約更新をしない旨通告を受ける[鶴見1955]。その後まもなく、3月13日付『サンデー毎日』、3月17日付『東京日日新聞』に、鶴見が新人原稿料から「天引き」して私的に流用しているとの記事が掲載された(『サンデー毎日』事件)[思想の科学研究会1955a: 2-3]。のちに鶴見は、この事件には「共産党の内紛と民科の内紛」が絡んでおり、研究会を再編しようとした三浦つとむが『サンデー毎日』と結びついたとの見方を出しているが[鶴見、『思想の科学』五十年史の会2005: 194-195]、この時点では事件の詳細は判明せず、事件の收拾に追われている間に契約が切れ、『思想の科学』は再び休刊となった。

休刊後に行われた思想の科学研究会の1955年度総会における討論では、まず会長の竹内好が、今回の事件は『芽』以来の、大衆思想運動としての形と、純粋な学術研究の間にある「溝」が影響しているのではないかとの見解を出した。そして大衆思想運動として発展させるべきだという意見も、政治運動にまで発展させるべきという意見と、学問の立場を崩さない線での大衆運動を支持しようとする方向に分かれているとする。竹内はこのうち後者に立ち、「直接政治運動に参加するというのではなく、大衆思想の研究という一線は守ってゆきたい」と発言した。これを受けて討論では、評議員層と一般会員、東京の「文化人」と「地方人」との「ぬきがたい断層」の存在も指摘された<sup>xiii</sup>。これに対し鶴見は、この「断層」を「論理学研究と生活誌研究とが隣り合わせになっているというような」「構想の脱落」と捉え、この脱落により「組織の面で、今後も必ず何か問題がおこるに違いない」

と予測を立てつつ、「構想の立派なものに成長する骨格としてのグロテスクな現在の形に愛着をもって、脱落にたえて頂きたい」と答えた〔思想の科学研究会 1955: 4-6〕。会員間の断層、研究の内容における脱落を孕んだまま、雑誌は休刊期間に入った。

こうして「思想の科学」はアメリカ由来の「科学」から、思想以前のレベルの記述を重視する方向へドラスティックに転回したものの、その実践におけるマルクス主義との近接は会の膨張をもたらし、分析する観点としての「科学」をめぐるマルクス主義との相克が研究会自体の存続を危うくした。

休刊期における活動の詳細については次章に譲るが、大づかみに言えば、この期間は「思想の科学」の運動のあり方を模索しながらゆっくりと形成してゆく時期になっていく。すなわち、会報上や総会において会の方向性が話し合われて規約が作成される<sup>xiv</sup>とともに、小集団における共同研究という方法が確立していった。

#### 第4次 (1959.1 - 1961.12)

1958年の春には、嶋中鵬二が社長を務める中央公論社から『思想の科学』が発行される見通しが立ち、武田清子、日高六郎、永井道雄、関根弘に加え、高田佳利、片桐譲、松尾紀子といった、一世代若く、思想の専門家ではない会員が編集委員に入り、「応援」として鶴見俊輔も参加して、作業が進められた<sup>xv</sup>。第3次終刊から3年半余を経た1959年1月、遂に復刊が成る。創刊言では、本来の「思想」は生活と結びついた「実生活者」の思想であるとして、「ちがった生活、立場、考え方の人たちが『思想』をぶつけあうこと」の重要性が述べられる。そして、無名の生活者の、いまだはっきりとした形をとらない思想や思いつき、過去のわすれられた人間の言葉や文章といった「思想のかくれた鉱脈」を発掘したいと述べる。また、小集団が対話の中から思想を生む努力を試みている事実への注目と期待が述べられている〔「思想の科学」編集委員会 1959〕。鶴見は「読み手がつねに書き手に転化しうるような創造的な読者である」ような雑誌、「書き手と読み手のあいだにはっきりした区分線がない」雑誌を目指し、第2・3次にも増して「雑誌の開拓線」としての投稿を重視した〔鶴見 1959c〕。

第4次の主題である「思想のかくれた鉱脈の発掘」は、歴史的人物、事象の思想的意味の問い直しや、従来「進歩的」ではないとして顧みられなかった思想(家)への新たな着目へと向かった。連載「日本の鉱脈」をはじめ、「近代日本の原型」4(6), (50)、「見のがさ

## 第1章

れている農本主義」4(18),(62)、「明治維新の再検討」4(35), (79)などの特集がこの範疇に入る。また集団の組み方、特に小集団の可能性も検討される。休刊中の1956年4月から、関根弘、武田清子、鶴見俊輔が執筆担当者となり「思想の科学研究会」の名義で『中央公論』に連載されていたサークル誌紹介欄「日本の地下水」が引き継がれるとともに、特集でも「集団の組み方について」4(7), (51)がこの点を掘り下げた。また、特集「実践運動の記録と思索」4(9), (52)では零細な中小企業における労働問題を扱い、上坂冬子の連載「職場の群像」4(2), (46)～4(5), (49)が大企業の労務課勤務という立場から労使交渉を観察し記録するなど、多様な賃金労働の現場に密着して問題を可視化する試みがなされた。そして、戦争体験と戦後体験の再検討もこの時期から本格化してきた。第1次、第2次では1回ずつ、第3次には組まれなかった戦争体験に関する特集が1959年と翌年の8月に生まれ、戦後体験に関しては特集「戦後思想のもちこされた主題」4(12), (56)、「戦後革命の挫折から」4(16), (60)などが、戦後思想と実践の蹉跌を洗い直す延長線上に、新しい思想と実践への道筋を見つけようとしている。他方、大衆文化への興味も持続し、「忠臣蔵: この共有財産をどうみるか」4(24), (68)や、思想の科学研究会内のサークル「大衆芸術研究会」が選んだ「大衆芸術名作百選」を紹介する「大衆芸術」4(36), (80)が年末特集として組まれている。

前述のように、思想の科学研究会が政治運動に直接関与すべきかどうかについては会内で賛否の分かれるところだった。しかし新安保条約の強行採決に際しては、条約締結に対する賛否は別として、「さまざまな思想の多元的交流の中からみのりある成果をえようというわれわれの会の運動精神と原理的に矛盾する」ことから看過しえないとして、「国民に対してと同時に自己の行為とその結果に対して責任をもつ新しい政府が生れることを要求する」との声明〔思想の科学研究会 1960a〕を出した。緊急特集「市民としての抵抗」では、鶴見が「根もとからの民主主義」と題する論考において、「私の中にたくみに底までくだつてゆけば国家をも、世界国家をも批判し得る原理があるということへの信頼」に拠って、それぞれが「私の根にかえって、そこから国家をつくりかえてゆく道をさがす」ことを提唱した。敗戦後の時期ですら旧保守勢力の戦争責任を追求することができなかった共産党を含む反保守勢力に与するよりも、「無党無派の市民」による公的政策のつくりかえこそが、敗戦をはさんで持続してきた官僚主義を打破する「根本からの民主主義（ラジカル・デモクラシー）」を実現することができるとする〔鶴見 1960〕。鶴見はこの「無党無派の市民」の論理を、会員の小林トミ（主婦、画家）が始めた、いずれの組織にも属さない人が歩く

という行動だけで参加できる「声なき声の会」のデモにおいて実践する。今までにない新しいスタイルのデモを新聞、週刊誌などのマスメディアも取り上げたことで<sup>xvi</sup>、「思想の科学」は「市民主義」の代表と目されるようになった。

1961年2月、『中央公論』に掲載された深沢七郎の小説「風流無譚」掲載に憤慨した右翼の少年が、中央公論社の嶋中社長の自宅を襲い、夫人に重傷を負わせ、手伝いの丸山加禰を殺害した（嶋中事件）。中央公論社は、はじめ「社業を通じて言論の自由を守る」との社告を出したが、結局は『風流夢譚』の内容が不適切だったとの「お詫び」を出した。対照的に思想の科学研究会は、「ことなつた思想の交流からみのりを生むことを会の原理として活動してきた団体」として、「言論の自由の場を守り、殺人によって人間の思想を抹殺しようとする勢力に反対」するとの声明を出し、これを盛りこんで特集「説得と暴力」を編んだ<sup>xvii</sup>。

嶋中事件以降、中央公論社では人事替えなどがあり、編集・出版方針に変更が生じていた。『思想の科学』についても、編集内容については思想の科学研究会が選出する編集委員会に一任し、中央公論社は発行のみを引き受け、内容の責任の所在を対外的に明らかにするため研究会から編集長を出すとの取り決めが交わされ、当時研究会会長を務めていた市井三郎が編集長を兼任することとなった。市井によると、1962年の新年号を「天皇制特集号」とすることは61年8月末には編集委員会で決まっておろ、中央公論社側も了承していた。ところが、印刷・製本まで完了した段階で、中央公論社は研究会側に刊行中止を申し入れ、製本済みの新年号を断裁廃棄した〔市井 1962a〕。研究会側は評議員会を開いて対応を協議し、12月27日に①相手の苦境を理解しこれまでの発行に感謝し②編集を完了した後の発売停止は出版の慣行からみて遺憾との見解を示し③今後、会は自らの努力で言論の自由を守る、との「両者間の確認事項」〔思想の科学研究会 1961〕を公表した。ところがその直後、中央公論社が断裁廃棄したはずの特集号の一部を右翼幹部に渡し、公安調査庁係官にも閲覧させた事実が判明する。研究会側は事実関係を確認した後、評議員会での決定を経て、1月29日に抗議の意を伝え、これに対して中央公論社は2月3日、公式に謝罪文を書いた〔市井 1962b〕。

一般紙において事件をいち早く報じたのは、12月28日付け『毎日新聞』であった。「『天皇制特集号（思想の科学誌）』を廃棄 “微妙な立場” から 発売元の中央公論社」と題し社会面に掲載された8段抜きの記事では、中央公論社が嶋中事件以来「微妙な立場」にあり、公判中にこのような特集を出すのは「時期的にまずい」という理由で発行中止を思想



## 第1章

の科学研究会に申し入れ、同会が同社の「立場を考えて」申し入れを了承したと報じられている。そして、「出版の慣行に反する面がないわけではないことを知りながら、“業務上の都合、という理由で発行がとりやめになったケースははじめて”であるとして、本件の特殊性を強調している。

同日付で『読売新聞』もこの件を2段組みの小さい記事で伝えており、ここでも嶋中事件以来、中央公論社が「微妙な立場」にあり、それへの配慮から発売中止を決め、思想の科学研究会に申し入れ、同会が了承したと報じられている。31日には読者欄で、匿名の会社員による投書が掲載され、「くわしい事情はわからない」としながら、「『天皇制機関説』が騒がれたあの暗い時代を連想させる」として、この問題のような「言論不自由化のきざし」は「全国民の問題」であると捉える。

書評紙はこの問題を言論ないし思想の自由に関わるものとして、一般紙よりも大きく誌面を割いて、持続的に取り上げた。

『日本読書新聞』は年明け1月8日に第1面で中央公論社刊『思想の科学』が天皇制特集号の発売中止により廃刊となり、思想の科学研究会がこの号の復元による復刊を目指していること報じるとともに、研究会が発した上記「確認事項」を掲載していた。1月22日号には研究会の会員であり評議員でもある日高六郎の論説が掲載され、確認事項に盛り込まれた中央公論社への「理解」と、それゆえに「絶縁」した趣旨が述べられていた[日高 1962]。これらを受け藤田省三は、2月19日付『日本読書新聞』第1面に掲載された「自由からの逃亡批判」において、中央公論社に「理解」「感謝」を示す研究会の「親切過剰」と、一連の対応が総会も拡大評議員会も開かれずに決められたことの非民主性を鋭く批判した。藤田は「縁を切るか、切らないか」は二次的な問題であり、「雑誌を勝手に廃棄することによって、天皇制批判の自由という市民的自由の根幹を崩落させたことの、社会的責任をはっきりさせること」、「その上で、今いかにしてこの自由を守るべきかについて思想団体らしい方針を掲示すること」が問題だと指摘した[藤田 1962]。

3月5日付の『週刊読書人』は、「転機に立つ思想の科学研究会」と題した特集を組み、1面全面に竹内好の論説を載せるとともに、2面では2月25日に開催された思想の科学研究会の臨時総会のもようを報じている。竹内は研究会の処置の妥当性を主張するとともに、中央公論社が第三者、とくに公的機関に当該特集号を閲覧させた事実を重視して、「全国民の権利を不当に犯した違法行為」だとして「厳重に抗議する」構えを見せた[竹内 1962]。藤田は臨時総会でも上記と同様の批判を展開し、結果、藤田らが加わって新たな声明が起

草・公開された。ここでは、中央公論社が雑誌を廃棄したことは、思想・言論の自由の基礎となる「批判の自由」を大きく損なうものであることと、公安調査庁の係官に当該特集号を閲覧させたことが、出版社と国家権力が「なれ合っているかのような印象を与え、」「批判の自由に対する社会的タブー意識」を強めたとし、これを除くためには「全市民の努力」が必要だとし、思想の科学研究会としては「雑誌を自主刊行し、復刊第一号を廃棄された天皇特集号と同じ内容のものとすることによって、その責任の一端を果たしたい」とした〔思想の科学研究会 1962a〕。先の「確認事項」よりも中央公論社への非難を強め、かつ「言論・思想の自由の問題」であり、「全市民」に関わる問題であるとの認識を打ち出しつつ、自らの社会的責任の果し方は、天皇制特集号を自主出版することにある旨明言している。

他方、臨時総会では、質問に対する会長の答弁が、「一般組合員」と「執行部」の討議のしかたのようだと批判が出た。鶴見和子はそれに対し、「今度執行部という言葉が出て来て、私はとてもびっくりして、もう私は思想の科学をやめなければならないのではないかと考えている。執行部という言葉はやめて戴きたい。思想の科学は始めサロンのなかたちで悪口を云われていたが、とうとう執行部ができるような大きな団体になってしまった。」と戸惑いを述べる。しかしまた一方で、「それだけのズレができたのは、会が大きくなったからだけではないように思う」とも述べ、「会が始めから持っていた原型は、むずかしいものではなく、三つか四つの小さな約束だった。この常識の域を出ないような簡単なことを、守れないようなところへ来ているのではないか」〔思想の科学研究会 1962b〕と、単なる規模の問題に帰すことが出来ない、問題の複雑さを示唆した。同じく評議員を務める関根弘は、後日『日本読書新聞』で臨時集会の様態を報告し、会が示した「理解」は右翼の暴力に対する中央公論社の恐怖についてであって、雑誌の販売停止については是認していないからこそ袂を分かち自主刊行しようとしているとして、「会は原則を守った」と会の対応の妥当性を主張するとともに、事件の渦中における一般会員の無関心と、「執行部」の孤独を指摘して、藤田の批判に反論した〔関根 1962〕。

こうして、天皇制特集号事件をめぐっては、対応の是非を問うものと、対応が決められたプロセスへの批判が出された。後者については、第3次の幕引きの時に指摘された「溝」と同様の問題を孕んでいるともいえるが、鶴見和子の発言からは、戦後社会の変容の中で、「思想の科学」内で以前は「常識」であったものが共有され難くなっている状況が窺える。また事件が一般紙でも報じられ、主に書評紙を舞台に経過報道と評議員らの主張が繰り広

## 第1章

げられたことは、この事件が思想の科学研究会と中央公論社の二者間の問題にとどまらず、社会的な意味を帯びていたことを示していた。

### 第5次 (1962.4 - 1972.3)

1962年3月、有限会社「思想の科学社」が立ち上げられ、『思想の科学』は自主刊行に移行した。「復刊のことば」では趣旨とともに、言論の自由を自ら守る決意が表明されている。

雑誌『思想の科学』は、現実に関わり立つ、生きた思想を追求します。もっとも高度に学問的な思想の研究と、大衆がそれを生み、それを使うことのできる生活の中の思想を同時に追求します。(略) 思想の科学研究会では、「自らの努力で言論の自由を守ることに、さらに積極的でありたい」むねを声明いたしました。その努力の一部として、ここに、新たに思想の科学社版「思想の科学」を継続発刊する次第です。

断裁破棄された天皇制特集号を自力で復刊することは、読者への責任を果たす意味を有していた。すでに、新日本文学会、新劇人会議、東京唯物論研究会など16団体が参加する「政暴法に反対する文化関係団体連絡会」から、復刊ののち万一、右翼からの脅迫などがあった時には協力するとの申し出があったため、復刊に先立ち、思想の科学研究会と思想の科学社は、連名で「復刊に際しての挨拶」を各文化団体、新聞、出版社などに送付した。この挨拶文では、この問題を「孤立した問題」とせず、「これを機会に言論界にこういう問題を持続的に取り上げ共同して事に当れるような場がつけられることを訴え、復刊の挨拶にかえる」として、なるべく広い連帯を組んでいきたいという意向を対外的に示した [高島 1962a: 15-16]。

第5次においては、「大衆がそれを生み、それを使うことのできる生活の中の思想」という従来から「思想の科学」が重視する「思想」に加えて、「もっとも高度に学問的な思想」をも同時に追求しようとする。とくに前者の追求のため、「読者の自発的な参加」すなわち投稿を重視する姿勢を示し [佐藤 1962a]、投稿の紹介批評欄が設けられた。自主刊行移行後初期の編集委員を務めた佐藤忠男は、「自主刊行を決意した以上、従来とは違って、雑誌は会の機関誌としての性格をより強く持つ」としつつ、思想の科学研究会が「研究サー



クルの連合体」のという面を持っている点を指摘し、「サークルでの研究成果の発表機関として雑誌があるのが望ましい」とした。実際、自主刊行に移行して3号目の「ユートピアをさがそう」、5号目の「現代の虚業」は、それぞれユートピア研究会、オーガニゼーションマンの会の成果が軸となっていた。さらに佐藤は、研究活動を全国規模で推し進めることを主張し、「編集者はすすんで各地を歩きまわり、主題と筆力をもった人を発掘し、組織するところまでゆくべき」だとして、「移動編集部」の計画を提示する。自主刊行後の雑誌の発行人を務めた鶴見俊輔は、各地を精力的に回って講演会や読者懇談会を行っていた。その行った先々で、地元の読者、有志らに働きかけて研究グループをつくってゆき、その成果を雑誌に発表してゆくという計画である〔佐藤 1962b〕。実際、6号目の「日本民主主義の原型」はそのような経緯でつくられた仙台グループの企画編集によるものだった。以後、翌年にかけて京都、熊本、名古屋での移動編集が実現している。

しかし、売り上げは順調ではなかった。天皇制特集号こそ世人の関心を得て1万4千部を売り切って増刷もされ、その後も毎号約1万部を保っていたものの<sup>xviii</sup>、自主刊行に移行して2年近くが経った頃、当時営業を担当していた鶴見良行は会報上で、前年夏以来売上げが落ちて来ていると報告し、「いったん落ちはじめた売上部数を伸ばすことは、現在の取次店機構からいって、なかなかむづかしい」と苦渋をのぞかせる。そして、会員に「折りおりあるごとに、街の書店で『思想の科学はどこにあるの?』と質問してください。」「そして、財布に余裕があれば、たとえあなたが執筆寄贈を受けたり本社から直接講読されている場合であっても、買取ってください。」と「苦肉の策」と断りつつ「お願い」をしている〔鶴見良行 1964〕。

1964年5月号からは見田宗介としまね・きよしが編集委員となった。見田は計4号をしまねと編集してその任をいいだ・ももに譲るが、しまねはそこから1967年10月号の約3年半、編集長を務めた。その任期はおそらく『思想の科学』がはじまって以来の長期記録であった〔鶴見 1967〕。その初めの仕事は、「特集、学生運動」であり、しまねはその目的を「新人会以後の運動史を、その当事者自身の目で記録する形による通史をつくること」、「学生運動の意義を日本社会全体の中で、思想史的に分析すること」「現在の学生運動に焦点をあてた未来への見通しに関する部分」の3つであると述べる〔しまね 1964〕。当人の回顧による歴史の再構築と、俯瞰で観察した思想史上の意義、そして現時点からの未来の展望と、多角的に掘り下げようとする意図が見える。しまね編集長のもとでは、この後もとくに学生運動、大学のあり方、マルクス主義に関する特集が繰り返し編まれる。そ

## 第1章

れは当時の『思想の科学』の主たる読者層である 20 代の選好に対応していたが<sup>xix</sup>、他方で、「生活の中の思想」の追求は置き去られていった。

1967年11月号からは鶴見俊輔が編集委員となり、室謙二、那須正尚が加わった。新しい編集陣での最初の号は、「特集, アメリカ」であった。鶴見と室は、ベ平連（「ベトナムに平和を！市民連合」）に共に参加し、脱走兵援助活動にも携わっていた。雑誌上では安保、基地問題、反戦・平和運動とその思想に関する特集がそれぞれ複数回組まれた。また大学紛争の高まるなか、学生運動も特集された。鶴見は 60 年安保闘争の際に東工大を辞してから同志社大学に移っており、セクトによる対立も端近に見ていたが、「学生が学生仲間以外の意見は受けつけない、という気ぐみをもってつくる自治」は「一九三〇年代に、大学が国家主義の干渉で危機に面した時にはなかった」と評価し、「いまの自治の思想を、自分の派以外の学生に拡大していくことをとおして、戦前になかった新しい道がひらける」と [鶴見 1968b] 期待を含んだまなざしを向けていた。

69 年に入ると大学に機動隊が導入されて、大学紛争は新たな局面を迎えた。思想の科学研究会では 2 月に評議員会を開き、大学紛争のいくつかの局面、たとえば「封鎖戦術」に代表されるような「全共闘運動」の突出した局面、それへの学生間の対応としての「封鎖実力解除」あるいは大学の対応としての「機動隊導入」、さらには公権力の対応としての「強制調査」などが示す基本的な問題の一つは、思想の科学研究会が目的としてきた「異なる思想のぶつけ合い」ということを否定するとして、「暴力と言論」をめぐる討議の場を設けることを会員によびかけた。その背景には、「多くの会員が直接の『当事者』」であり [思想の科学研究会評議員会 1969]、諸局面の評価をめぐる会が「まっぴたつにひきさかれた」状況にあるという認識 [鶴見 1969] があった。しかし会内からは、会の目標と大学紛争の諸局面を直接に結びつける見方に対して疑問も呈された<sup>xx</sup>。

1970 年当時事務局長を務めていた丸山睦男は、雑誌は「社会的公器」であるから雑誌の印象が研究会への印象もかたちづくるが、それへの批判に対して会内の了解だけでは回答にならず、よって個々の会員が「屈折した『思想の科学』への批判」を持っていると指摘した [丸山 1970: 5-6]。この問題に対し、「シャドー・キャビネット」と呼ばれる「助言研究集団」を研究会から編集委員会に送ったり<sup>xxi</sup>、編集委員会の公開の原則や、武谷が提案した第 1 次以来の編集における慣行である「提案権」、すなわち拒否権の禁止を徹底させるなど [丸山 1970: 7]、研究会と編集委員会のつながりを回復して、研究会の成果を雑誌に反映させようとする試みが持たれた。しかしもとより、「公器」としての雑誌は、商業シ

ステムに組み込まれたものであり、20代を主とする読者層の想定からしても、長文の本格論文を掲載するには不適であった。これへの対応として、69年10月には、『別冊・思想の科学』が創刊され、以後ほぼ1年1冊のペースで刊行されることになる。別冊は地方を含め各サークルが編集し、月刊誌には載せにくいまとまった分量の研究論文が掲載された。しかし研究会と雑誌の位置づけに関する齟齬は埋まらず、自主刊行10周年を機に、より根本的な機構改革が行われる。すなわち、研究会から社を切り離し、研究会からは編集代表だけを送り、企画・編集は社に委託するという形態が採られることになった。

### 第6次（1972.4 - 1981.3）

新しい編集体制のもと第6次『思想の科学』はスタートする。創刊言では、「商品化の波にさらわれることなく」「それを突破する活きたことばと思想を創りだしていききたい」という文言に続き、以下のように宣言された。

私たちは、思想を、何よりもまず、人びとの日常生活のなかで生きてはたらいっているものとしてとらえる。私たちは、管理され操作されている日常性に批判的に対峙しつつも、そのかたくなさの底に息づいている生の豊かさを見定め、日常生活に根ざした自主的な思想を創造するために、〈思想の科学〉の認識の方法をよりいっそう鍛えていきたい。人々のことばにならない生きざまや、いまだことば化されない体験を、思想の内容と方法にとって重大なものと考え、それを日常の言葉で表現していく道を、ねばり強く見つけていきたいと思う。

ここでは、第5次においては重点的に取り組まれなかった、生活のなかで生きてはたらいっているもの、日常生活に根ざしたものが「思想」であり、それを捉え、創造するために「〈思想の科学〉の認識の方法」を鍛えていくとして、第5次で目標とされた「高度に学問的な思想の研究」とは異なる認識への志向が示されているといえよう。

現代社会の性格を「管理社会」と規定するのには、大学紛争の時までは発揮されていた強圧的な国家権力の発動の仕方が影を潜め、一部の技術を使いこなせるエリートがそれを駆使して人々の日常を柔らかく管理するという手法に転換しているという状況認識があった。特集では「管理をくずすスタイル」6(17), (225)、「暮らしの中の科学」6(21), (229)な

## 第1章

ど、管理社会とそれを支える技術を踏まえ、それをやぶる運動の形が模索された。また、女性の新たな書き手を迎えて「女を生きぬく女たち」6(37), (245)、「女のつくる世界＝女のとらえる生の視点」6(58), (266)などの特集が編まれている。「いま子どもはなにを」6(16), (224)、「青年はいま何を」6(34), (242)、「教師たちは、いま」6(60), (268)、「いま、主婦とは何か」6(75), (283)、「わたしは老いる...あなたは？」6(125), (333)といったように、様々な年齢や属性で新たな思想の可能性を捉えようとしている。「〈正常〉を疑う」6(27), (235)、「差別を考える」6(66), (274)、「現代社会の規範はどのようにつくられるか」6(73), (281)、「なにが犯罪か」6(85), (293)などの特集は、「常識」を逆照射して社会内に存在するいくつもの境界と周縁を可視化する。さらに「放浪と定住」6(4), (212)、「国を越えるつきあい」6(26), (234)など、越境への着目も出てくる。

1980年3月号「特集、80年代に向けての『思想の科学』」の「編集前記」では、ようやく商業的に成り立つようになった『思想の科学』ではあるものの、これを刊行し続ける意義がどこにあるのかが改めて問い直されている。ここでは自らを「聖ジュスト」<sup>xxiii</sup>になぞらえ、『思想の科学』の首は落ちたのか?と問う。『思想の科学』の首とは、「戦後思想の申し子としての、我々の運動」がこだわってきた、「戦後的課題」に他ならない。他のジャーナリズムの「80年代論」の多くが、高度経済成長後の繁栄の中、前向きの色調で展開されていることに触れ、「戦争を全く知らない世代に、三分の一世紀前の問題提起を投げつけることの空しさと、無力さを痛感し、主観的な志とは別に、客観的にはいよいよ、戦後は終わったのだという実感をもたざるをえない」、すなわち『思想の科学』の「首は落ちていく」という認識のもと、それでも「切り落とされた首をかかえて、それと自問自答し続ける聖ジュストの執念」を問う。そして研究会から編集代表だけを出して、具体的な編集・企画を社の現場に全面的に委託する雑誌のあり方への疑問が示唆されている。ここで注目されるのは、わずか見開き1ページの「編集前記」で、「戦後思想の申し子としての、我々の運動」「戦後三十四年間続けてきた思想運動団体」など、繰り返し「戦後」の「思想運動」として自己を定義していることである。

60年代終盤、『思想の科学』の第5次終盤は、「戦後民主主義の欺瞞」を衝こうとする全共闘への評価をめぐり、「当事者」としてこれを重大なものとして受け止める者と、そうでない者で会内は割れた。また少数の編集委員で編集される雑誌が、多くの意見を含み込む研究会のイメージを代表することに対する違和が存在した。第6次はこの問題を一旦解消して、社の企画編集で、多様な書き手と新鮮な視点の導入に成功したものの、「首」は意図的に置

き去りにされた。ここで『思想の科学』は「首」を取り返す決心をする。81年3月、第6次の終刊にあたって、思想の科学研究会と思想の科学社は連名で「終刊のことば」を出し、「研究会から編集代表を送りこむだけで、主として思想の科学社の責任と負担で、雑誌『思想の科学』を発行してきた、第六次の形態に終止符をうち、研究会本来の思想運動の原点に立った、表現活動としての雑誌のあり方を、模索してみる」と宣言する。もちろん雑誌である以上、「流通機構の中で生きていく商品」であることも踏まえ、「理念と現実の接点に、思想雑誌として静止できるか否か」が「第七次の課題となる」との認識を出した〔思想の科学研究会，思想の科学社 1981〕。

### 第7次（1981.4 - 1992.12）・第8次（1993.1 - 1996.5）

前掲の決意を受け、第7次は「反ファシズム」を掲げる思想雑誌として再出発する。

雑誌第七次『思想の科学』は、反ファシズムを目標として作られる。

ファシズムとは企業と国家権力が結んで、民主主義を否定する政治形態である。（略）  
.....反ファシズムを目標とするといっても、そのための実際運動をおこなう人たちの機関誌ではない。反ファシズムに理論的根拠を与えようとする雑誌である。〔加太 1981〕

80年3月の「編集前記」では戦後の思想運動としての自己を確認したが、ここではファシズムを「企業と国家権力が結んで、民主主義を否定する政治形態」と定義し、反ファシズム、反・反民主主義に理論的根拠を与えるという運動目標を明確にした。そのために女性問題、教育問題、不況や失業といった経済問題といった現実的な問題や、深層心理をかたち作るもの、マスコミがあおる神秘主義でない、歴史的に「正統な」反科学主義であるところの宗教、形而上学にも取り組んでいくとする。同号の編集後記で、鶴見は以下のように第7次の趣旨を述べた。

りんかくのとらえにくくなった今の時代のりんかくをとらえようとする努力をくりかえす雑誌でありたい。ひとつのりんかくをこの雑誌の主題でおしつけることに終わらず、りんかくのとらえかたについての意見のちがいがから、対話があらわれることを望



## 第1章

む。対話より大切なのは現実による検証であり、検証を求めて歩けるだけ歩いてゆこう。

論壇ではマルクス主義が完全に失効し、かわって近代主義の普遍性を「解体」「脱構築」する「現代思想」ブームが起きつつあった。しかし鶴見は、大きな物語が失効した時にあって、あえて一つの見方を出すことを目指す。その見方を統一する必要はなく、アプローチの違い、立場の違いから「対話」が生まれること、さらにそれよりも「検証」の過程そのものを重視する。

渡辺一衛は同欄で、80年3月号の「首は落ちたか」の議論を敷衍しつつ、「少しずつ意見の異なる人達が、共同して一つの場をつくって行く。そのあり方を示し探っていく場所として、思想の科学はまだ大きな意味を持っている」と、雑誌を多元主義の実践の「場」として捉え返す。しかし『『あれもいい、これもいい』の多元論ですまないことも明らか』として、「多元論と一元論をどう統一し、多元論——戦後民主主義の発想法を、この一元論的な日本の風土の中で、どう位置づけ、生かしていけるのか」が課題であるとする。ここでは、多元論を「思想の科学」を含めた戦後民主主義の発想法としながら、これになじまないものとして日本の思想的風土が規定されている。その当否は別として、多元主義の持つ問題として、横並びの相対主義に墮する危険性と、一元主義を包摂する困難が指摘されていることが注目される。

第7次では自らの立場が戦後民主主義からの一貫した反ファシズム、反・反民主主義であることを確認したうえで、「戦後」とは何であったか、戦後的な価値をいかに現在に切り結ぶかが大きな主題となる。「くずれゆく戦後の前提」7(1), (338)、「ファシズムへの抵抗線」7(2), (339)、「戦後からわれらは何をまなぶか」7(3), (340)、「戦後民主主義から生まれた我々」7(8), (345)といった、「戦後民主主義」の立場からの戦後の捉え返しや、「ナショナリズムとファシズム」7(14), (352)、「国家とは何か」7(18), (355)、「愛国とは何か」7(33), (370)、「ファシズムの日本語」7(54), (391)、「全体主義の哲学」7(72), (409)など、国家とファシズムを国民のレベルで、戦中の体験から捉え返す特集が組まれた。また「原子力の帝国と辺境」7(10), (347)、「等身大の科学技術へ」7(30), (367)、「環境破壊と〈現在〉」7(107), (444)など、戦後の成果でもあり、犠牲でもあるところの技術と環境の問題も取り上げられる。また、「資本主義という思想環境」7(11), (348)、「マルクス主義のバランスシート, 1-3」7(142)(144)(153), (479)(481)(490)など、日本の「戦後」を導いた両モデルの検討も行われ

た。第7次終刊間際の92年11月号の特集は「戦後ってなんだったの？」であった。

第6次の、多様な属性の人びとの紡ぐ思想は、第7次に至ってまなざしの交錯も含んで複層化する。「働く女がつくる生活」7(38), (375)、「単身者」7(45), (382)など新しい生活スタイルへの目配りに加え、「女が女を見る」7(17), (354)、「女が見た男の一生」7(80), (417)、「日本の中の「アジア」」7(106), (443)、「異国語としての日本語」8(26), (522)などの特集は、視点、立場の交錯によりさまざまな角度、方向から光をあてて対象の輪郭を捉え直し、概念を更新することを試みている。

第7次からは黒川創、1987年頃からは加藤典洋も編集に加わっており[加藤典洋 1996]、若い世代や、研究会に入らずその周辺にとどまる視点を入れることで、言葉づかいや視点の清新さが得られた<sup>xxiii</sup>。コラムや連載小説などの連載ページも増え、書くことを専門にしない多彩な顔ぶれをそろえることで、「アマチュア」思想の雑誌の性格を打ち出し、同時に誌面に軽さと多彩さをもたらした。しかしながらこの軽みが、「反ファシズム」という方針との乖離を鮮明にした感もある。

第8次の前半は「有名になりたい」8(7), (503)、「彼女がほしい」8(8), (504)、「お金がほしい」8(9), (505)の三部作や、「ヒューララ感覚」8(6), (502)、「わたしの好きなもの」8(16), (512)、「カラオケは世界のかたちをかえる」8(18), (514)などの、より若い読者にアプローチするような感覚的、サブカルチャー寄りの特集が目立った。50周年へ向けて1年を切る頃からは、「在日することの視座」8(28), (524)、「失言の肖像」8(29), (525)、「いま憲法をどう考えるか」8(30), (526)、「ナショナリズムとリベラリズム」8(31), (527)、「アジアの日本の体験」8(33), (529)の「戦後検証」シリーズ、「日本人のソ連体験」8(38), (534)、「日本人のアメリカ体験」8(39), (535)といった、『思想の科学』と日本の戦後を総合的に検討しなおす企画が中心となる。

第8次終刊号の編集後記で思想の科学社の余川典子は、若者の投稿欄「セルフ・ポートレート」に今号は27本の原稿が集まった点を評価しつつ、「もう少し若い力が形になった時、雑誌を復刊できると、思っています。その日のために雑誌を休み、力をつけます。」として、雑誌を担う「若い力」が必ずしも充分でない様相をにじませた。一方上野博正は、この雑誌と諸サークルは「生きる意味を問う人びとの梁山泊のような憩いの場」の役割を果たしてきたと評価し、そこに集う人々は「組織から孤立した少数者、脱落者」であり、「組織合理性、形式性に対する反抗、無力感」から来る「正義へ向けての一種のアナーキーな英雄主義」が「庶民の正義感」と底のところで共通していたとする。しかし「この雑

## 第1章

誌に刺激されて「考える」民衆が育ったか」という運動全体の評価に関しては、「私一個としては否定的な気分傾向」として「若い人の継承を望む」と結んだ。

50年間のうちで「思想の科学」に参加した人たちは、鶴見という抜きん出た存在を意識しつつ、自らの知を磨き、社会に向けて発言しようと試みた。それは国家が強制したり、知識人が啓蒙する「思想」とは異なる一つ一つの声の集積であった。また生活綴方、安保闘争、そして雑誌の刊行という営為も含め、「思想の科学」は政治運動とは近接しながらも一線を画して、独自の実践のあり方を提示した。よって戦後のある時点までは「思想の科学」はユニークな思想運動としての命脈を保ったと言える。

次章以下では、「思想の科学」が同時代の論壇の中で提示した議論と、「思想の科学」内で組まれた小集団の活動を精察し、その意義と問題点を明らかにしてゆく。

---

<sup>i</sup> 例えば都留重人は自分たちの運動を振り返り、『『思想の科学』の第一歩は、私たちの使う言葉の定義をはっきりさせること、そして出来得るかぎり、ひとびとが日常的に使う言葉でもって思想を語ること』であったとしつつ、字義的には「思想」とは「個々の観念や理論ではなく、人生や社会についての一つの全体的な思考の体系および態度」を指し、「明らかにそこには体系性が含意されている」ため、『『思想の科学』という題名が本当に私たちの意図した思想運動にふさわしいかどうか、疑念を抱かないではなかった。なんとなく術学的感じがした』と述べている [都留 1983: 10-11]。

他方、鶴見和子は、「思想の科学」は「思想をわかりやすく表現することばに、日本語をつくりかえてゆく、という実践的ないみ」をもっていたとして [鶴見和子 1982: 10]、「思想の科学」のうちどちらかという「科学」の新規性において自分たちの運動を捉えている。

また鶴見俊輔は、雑誌の名付け親となった上田辰之助の知的なバックグラウンドを考えればエンゲルスの「自然弁証法」からとったものではなく、「ヨーロッパの中世哲学の述語であったラテン語をくぐり抜けた言葉」であり、「ドゥンス・スコトゥス、オカムなどを経て近代の論理分析と実証の方法にむかう流れを日本に移し植えようという考え方」、「それまで日本の官学でかえりみられなかった英・米・仏の実証的な学風を日本に移し植える雑誌という、控え目な目標」を示すものであったと述べる [鶴見俊輔 1985: 18-19]。すなわち鶴見は、従来のアカデミズムで重きを置かれていたドイツ観念哲学、それを批判的に継受したマルクス主義とは異なる、論理分析を主とした実証的な学風の移植という創刊当初の意図を示すものとして題名を捉えている。

<sup>ii</sup> 中野好夫は以下のように批判している。「ちか頃資料学者というのがある。アメリカ帰りの若い自称思想科学者とやらの間に流行しているそうだが、(略)つまりこれら資料の独占さえあるうちは大丈夫だ。」『文藝春秋』1948-12, p.34

<sup>iii</sup> 「反響」『思想の科学』1(18), (18), p.66

<sup>iv</sup> 「編集前期」『思想の科学』1(19), (19), p.71



v 鶴見は当時、日本語表記の簡明化のため、助詞の「は」「を」を「わ」「お」で代替して仮名を少なくするなどの試みをしていた。

vi 「編集前記」『思想の科学』1(21), (21), p.15

vii 思想の科学研究会編 1950.『ひとびとの哲学叢書, 1, 私の哲学』中央公論社; 思想の科学研究会編 1950.『ひとびとの哲学叢書, 2, 私の哲学, 続』中央公論社; 思想の科学研究会編 1950.『夢とおもかげ: 大衆娯楽の研究』中央公論社

viii 「編集前記」『思想の科学』1(21), (21), p.14-15

ix 「米国の哲学雑誌」『思想の科学』1(7), (7)

x しかし経営難からその後1年間雑誌は出ず、1年後に出た最終号にも梅棹の論文は掲載されなかった。実際に梅棹が論文で初登場するのは第2次に入って間もなくの1953年7月号「アジア意識と近代化」である。

xi この論文は、自主刊行に移行した直後の1962年5月、それまでの主要論文を収めた「『思想の科学』の主題」特集号にも掲載された。同論文は「思想の科学」の主題の一つである反アカデミズム、アマチュアリズムを最もよく表した論文の一つである。

xii 「研究会ニュース」『思想の科学』2(3), (26), p.31

xiii 福島県在住・農業の渡辺務の発言

xiv たとえば思想の科学研究会 1958年度総会では「思想の科学研究会の性格と方向について」をテーマとするパネル・ディスカッションが持たれ、その速記録が『思想の科学会報』(22)に掲載された。また『思想の科学会報』(23)には、会の目標と規約の草案が載せられているが、「ちがった生活や立場、違った考えの人たちが、思想をぶつけ合うことによって初めて思想を新しく生きいきと発展させることができる」、「専門家と生活者の交流」など、第4次以降の目標がすでに具体的な形で出ている。規約には、第2・3次においては不要であった、会員2名による推薦という入会要件が明記された。

xv 「かねて三年来の懸案となっており、種々画策して参りました雑誌発刊の件も、四月以来軌道にのり、この十二月から中央公論社より発刊のはこびとなりました。第一年度の編集人として、武田清子、日高六郎、高田佳寿〔引用者注: 正確には佳利〕、永井道雄、関根弘、片桐譲、松尾紀子の諸氏が選任され、尚当分の間、鶴見俊輔氏も応援することとなりました。目下鋭意編集中であります。」「編集後記」『思想の科学会報』(21), p.18

xvi 『毎日新聞』(1960.6.20)、『週刊朝日』(1960.7.3) ほか。

xvii 嶋中事件と特集の経緯については、当時の中央公論社側の編集担当者による著書〔中村 1976: 10-83〕に詳しい。

xviii 「出版界上半期の話題: 思想の科学事件」『日本読書新聞』(1162), p.7

xix 1963年の山田宗睦の報告によると、読者の60%は21~30歳の層であった。〔丸山睦男 1970〕

<sup>xx</sup> 「よびかけ、にこたえて」『思想の科学会報』(62), p.2-22 のうち市井三郎、久米茂、百瀬正昭、稲葉正也、ゆりはじめ、加藤秀俊、金子勝昭らの意見。

<sup>xxi</sup> しまね・きよしはこの点につき、「研究会と雑誌の関係は、大部分は雑誌に対する会員の執筆という形で保たれている。(略) このときに、編集委員会は研究会とのつながりは、個々の編集委員と個々の研究会員とのつながりに還元されるので、編集委員会としては情報をキャッチするネットワークがある程度限定されてくることは事実である。その間隔をうずめる存在として、シャドー・キャビネットの意味がある。」と述べる。[しまね 1966]

<sup>xxii</sup> ルーベンス作の「聖ジュストの殉教」には切り落とされた自らの首を抱えてなおも歩き続けながら自問自答する聖ジュストが描かれている。

<sup>xxiii</sup> 黒川は読み手から書き手、そして編集者になった「思想の科学」の典型例であるが、加藤典洋は最後まで研究会に入会しなかった。

## 第2章 戦争体験と世代——「実感」論争から見えてくるもの

### 1. はじめに

前章で、「思想の科学」の「科学」が、第1次から第2次への移行に伴い説明から記述に重心を移し、第3次には組織的にも膨張して破綻していく過程を見たが、『思想の科学』の休刊期に当たる1950年代半ばから後半の時期における論壇の動きは、第4次以降の『思想の科学』にどのような影響を与えたのだろうか。ここでは、戦争責任の問題をはらんだ世代論や運動論との関わりで展開された、「実感」をめぐる議論を取り上げる<sup>i</sup>。

1945年の敗戦から被占領期間を含む「戦後」10年の日本社会の第一義的課題は復興であった。55年、各経済指標は戦前の水準を回復する。翌56年の論壇では中野好夫が「もはや『戦後』ではない」と書いたのを皮切りに「戦後」は終わったとの認識が見られるようになる<sup>ii</sup>。

「戦後」の終りは「戦前派」「戦中派」「戦後派」のカテゴリーの立上げを促した。村上兵衛（1923-2003）は自分たち戦中派は戦争の傷は受けたが責任はないとして、傷も責任もない戦後派との「断層」と、戦前派の国家指導者に戦争責任を問う姿勢を明らかにした〔村上 1956〕。同年に吉本隆明（1924-2012）らは『文学者の戦争責任』を上梓する。

また松下圭一（1929-）、加藤秀俊（1930-）らによりアメリカ由来の「大衆社会論」が「戦後」以後の社会を説明する理論として紹介されたが、その是非、特に「新中間層」の性格と位置づけをめぐる論争が起きた。これらの論争に関連して戦後派ないし新中間層の価値意識・行動原理として用いられたのが「実感（主義）」という概念である。さらに丸山真男（1914-96）が「文学の実感信仰」と「社会科学の理論信仰」の問題を指摘してより〔丸山 1957〕57年から翌年にかけて「実感」は社会科学から文学を巻き込む論争テーマとなった。

大串潤児は50年代後半に戦後日本の世代論の一つの山があるとし、戦中派の「戦争体験」論と、大衆社会論をふまえた「戦後世代」の意識・行動の解析の二方向に大別した〔大串 2008〕。前者につき小熊英二は、戦中派は崇高な理念への信奉が敗戦で打砕かれたという「特権的な敗戦観」と戦争体験で直に触

## 第2章

れた「大衆の生活実感」を掲げて年長世代を撃つ様式で自らの主体を構築したとする〔小熊 2002: 598-610〕。後者につき大橋健二は、大衆社会論は従来の階級観を否定したため政治的な争点になったと指摘した〔大橋 2009: 113-115〕。マルクス主義の「革命」と「主体」のあり方に対する疑念と修正は戦前の「政治と文学」論争以来幾度も呈されてきたが、それが特に浮上したところに 10 年間の「戦後」がアメリカ依存の復興であったことと左翼理論の行き詰まりという時代背景があろう。

敗戦後の混乱期としての「戦後」が終わった時、知識人たちはどのように戦争、敗戦と「戦後」の体験を捉え、未来の社会のイメージと行動のプログラムを立てようとしたのか。現時点までを指す長い「戦後」を支えた社会システムが揺らぐ今、その出発点における議論を確認することは、現在から未来のヴィジョンを描く上でも重要であろう。本章ではこのような観点から、世代論と絡む形で提起された「実感」をめぐる議論とそれに連なる問題を、『中央公論』をはじめとする総合誌、新たな判型として部数を伸ばしていた新書、「実感主義者」と目される主な人々が在籍していた思想の科学研究会ならびに雑誌『思想の科学』を中心に見ていき、「戦後」の知識人に課せられた課題と問題性、現代的意義を検討するための基礎的作業を行いたい。

### 2. 中間文化論・実感論争とその時代

#### 2-1 大衆社会論、中間文化論

まずは第二次世界大戦後のアメリカの大衆社会論と、日本における展開を概観する。

「大衆社会」とは大衆が政治、経済、文化のあらゆる領域で無視できない勢力になっている社会を指す<sup>iii</sup>。大戦後のアメリカでは、民主主義国家、高度資本主義における新たな権力の偏在の様相と個人の無力化が指摘され始める。C.W.ミルズは、政治のデモクラシーとは裏腹に、権力は連携を強めた軍産官複合体の各組織のトップ（パワー・エリート）に集中し、議会は権力の第2次集団に転落しているという。よって「大衆」の選挙を通じた意思表示は無力であり、個々人は権力を回復する術がない〔ミルズ 1958〕。これに対し D.リースマ

ンは、権力はむしろ政府・財界・軍トップではなく、議会と政府を動かす各種圧力団体が拒否権集団化することによって拡散傾向にあると指摘した。「他人指向型」の個人は政治的に無関心で、意思の表明をする際にも圧力団体の利害を離れては不可能だが、圧力団体は政治を動かすのに十分な力を持ちながら実際の政治への責任の自覚が希薄であるとする [リースマン 1964]。両者の権力モデルは異なるものの、大衆社会においては民主主義が成熟しているかに見えて、実はその基盤、正当性の根拠である大衆、その中の個々人が無力化していることが問題となっている。

日本ではすでに社会学の分野において清水幾太郎が大衆社会現象を「機械文明」必然の社会病理と捉えていた [清水 1950]。これに対し松下圭一は、マルクス主義の発展史観をベースに「病理学的分析とは異なった、より構造的な理論化」を試みる [松下 1957a: 60]。松下は 19 世紀的「市民社会」から、20 世紀には「新中間階級の出現もふくめた圧倒的人口量のプロレタリア化」により「大衆社会」に移行したとし、「市民ナショナリズム」もまた、義務教育の普及と大量生産・大量伝達が「国民意識の新旧中間階級から労働者階級への深化・拡大」をもたらしたと解する。コミンテルンはこのような「大衆的国民意識」を批判してインターナショナリズムを唱導したが、フランスにおける国民的シンボルを伴った反ファシズム戦線の成功は国民意識と市民的自由の再評価を促し、コミニズムは「国民統一戦線型デモクラシー」への「決定的転換」の一步を踏み出した。松下は「今度のスターリン批判に伴う革命コースの複数性の再確認」はコミンフォルム時代における複数路線の理論上の承認と現実の硬化を逆証明したと説明し、日本の左翼政党については「転換の画期性を、充分理論的に把握しえていない」と批判する。「革命的伝統の稀薄な日本においては国民的シンボルは積極的内容をもちえ」ないため「消費的大衆娯楽」への吸収が急速に進んでいると危機感を示しつつ、「大衆社会的状況を前提」にコミニズムの立場から「歴史的に特殊的な国民的伝統を再編成」すべきだと主張した [松下 1957b]。

一方、1 年半のアメリカ留学から帰国した加藤秀俊は、松下の文章が掲載された『中央公論』同号から、日本に起りつつある大衆社会現象を「中間文化」と名付けた文章を発表し始め、同年 9 月にこれらの文章<sup>iv</sup>に書下ろしを加えた

## 第2章

新書判『中間文化』を出す。ここで加藤は、松下が「前提」としながら警戒感を示した教育と大量伝達の機能や、それがもたらした新中間階級の拡大を肯定的に評価する。加藤によると、教育とマス・コミュニケーションの進展により知識人と大衆の溝は狭まりつつあり、現代は高級文化、大衆文化に続く「中間文化の時代」である。それは新書や週刊誌、ムード・ミュージックに代表され、以下のように定義される [加藤 1957: 3-19]。

中間文化とは、高級文化と大衆文化の中間を行く妥協の文化である。それは、常識主義によって支えられ、適度の政治的好奇心とゴシップ精神、そして趣味的中間性を特徴とする。そして、その担い手、使い手は日に日に増大する社会的中間層である。[加藤 1957: 19]

さらに加藤は「中間的大衆化＝あたらしい市民層の誕生」と言い換え、これが「戦後派世代」において実質化しつつあると主張する。加藤は農村や工場の若者と「われわれプチブル・インテリ」が「向上心の質」や趣味嗜好の点で「相当に平均化」しているとする [加藤 1957: 27-33]。

このことは、われわれ戦後派が、それ以前の世代と根本的にちがう集団であることを物語るものであろう。われわれは、職業・身分のいかんにかかわらず、かなり共通の生活価値をもって生きている。[加藤 1957: 33]

労働者・農民層と中間層の所得は接近し、工場のオートメ化により労働内容の差も縮まりつつある。また労働運動を通して中間層も労働者の意識を持つようになった。加藤は「ふつうの市民の経済生活の中心ラインは相当なひろがりをもった均質的なものになっている」と指摘する [加藤 1957: 38-48]。しかし革命の論理には「『大衆』の変貌」がほとんど考慮されていない。加藤は日本の革命運動が支持を得ないのは、インテリと大衆の「ディスコミュニケーション」、つまり「革命家の言い分が、民衆にはさっぱりわからず、また「民衆の生活の実感を革命家は知ろうとしな」いためだとする [加藤 1957: 49-51]。一つめは中間文化が解消しつつあるが、二つめはどうか。

こうした平凡な、あたらしい市民層ぜんたいが、無理をしないで出し合えるような、日常の生活の実感のかけらをしっかりかき集めることを私たちは真剣に考えなければならない。これからの日本の社会や文化をつくってゆくとき、この市民群のなかにいろんな差別をつけること、つまり、お前はホワイト・カラーだからダメ、君はインテリだから頼りにならない、などと資格検査をして、仲間はずれの分子を作成することをやるのは、あまりいいことではないように思う。[加藤 1957: 51]

このように加藤は、あたらしい市民層の誕生を肯定的に描きつつ、この変化をふまえないマルクス主義を批判し、革命理論の修正の必要を示唆した。

## 2-2 「戦後派」の「実感」

「実感」の強調は加藤が最初ではなく、国家主義から民主主義へと価値を反転させた敗戦がすでに用意したものだった。後藤宏行(1931-89)は1954年から「戦後派」の価値意識について論考を発表し、57年10月に新書判『陥没の世代: 戦後派の自己主張』を出す。後藤は自分たちの世代は「戦中の抵抗感覚」が皆無だったため価値転換についてゆけず「自己の肉体感覚」のみ残ったとする[後藤 1957: 16-28]。

われわれにとっては、社会性を捨象した具体的個人を、この肉体的感覚で体得したのである。それは実存主義のうけ売りでもなければ、観念のなかで形成された個人主義思想でもない。体験と実感に裏うちされた個我意識である。[後藤 1957: 29]

「アプレ」はその無軌道ぶりや放埒さが年長者に批判され、あるいは「不幸な時代」に育ったためと同情的に擁護されてきた<sup>vi</sup>。これに対し後藤はアプレは「タブーのすぐれた批判者」だとし、ニヒリズムの徹底による「自己誠実性」、「実感」の成否を実行し挫折から「生活の智慧」を汲む「行動的主体性」、個々のモラル選択を認める寛容と結果に責任をとる点を評価する[後藤 1957:



## 第2章

33-87]。後藤がアプレの「正当化」を試みたのは55年頃からの革新陣営の戦術転換で「戦後十年間、旧世代の歯車にあわせていた青年達」が「ふたたび敗戦直後と同じような精神的苦悩を負わされている」という認識にあった。後藤は「戦後の価値再編」にアプレの論理を取込むことを主張する〔後藤 1957: はしがき〕。

後藤たちの世代を「陥没された世代」と名付けたのは鶴見俊輔（1922-）である〔後藤 1957: はしがき〕。本書に先立ち鶴見と久野収（1910-99）は、アプレ犯罪を典型とする「戦後派の実存主義」が、「自分で選んだことにたいしては自分で全責任を負う」という点と、「実感のうらうちある反国家主義」となる可能性に注目していた〔久野・鶴見 1956: 190-202〕。また『思想の科学』1955年4月号の討論で後藤は、日本で革新陣営が勝てないのは「戦前の精神主義」同様「なんでも自分と同じような社会感覚を具えてくれる」というように考え、「近くにおいて、ちがう」立場を考慮に入れないからだ」と指摘した。これを受け久野は、日本のインテリが「戦争の協力者」になったのは「目的というものは、外から与えてくれるもの」という安易な考えに引きずられたためだとし、「抵抗の拠点を本当に主体的な意識において、その中から刻一刻、行動の基準の目的をくみ出していくという姿勢」が必要だとする〔久野・畑中・後藤 1955〕。久野と鶴見は所与の目的でなく自らの「実感」により行動する「戦後派」に、知識人の弱点を克服する新しい主体のあり方を見出していく。

後藤は「のこされた課題」として、「戦中派のインテリの貴族意識」が戦後派との「断層意識」を生んでいるとし、これを埋めて「幅広い戦後世代の思想」をつくること、「戦争責任論や、転向問題の究明」を「旧世代」との「理解点と、共通の場を見出す」ため取上げることがを主張した〔後藤 1957: 228-231〕。後藤は1955年当時高校教師で新書判刊行時は大学の非常勤を兼ね、その後塾の講師を経て専任講師、助教授とアカデミズムの階梯を昇っていく<sup>vii</sup>。その間継続的に研究と発表の場を与えたのは思想の科学研究会、中でも「戦中派」の鶴見を中心に久野ら「旧世代」から1930年前後生まれの「戦後派」までが参加した「転向研究会」であった。『転向』の序言で鶴見は「日本思想史上の流派の交替は、幾サイクルもの『理論信仰』から『実感信仰』への転向として理解される」とし、転向の問題を解くには「私的体験」と「公的原理」の交流を活発に

することが必要だとした [鶴見 1959a: 25-26]。鶴見にとって加藤や後藤の立場はこの問題を解く手がかりを与えるものであり、後藤にとって久野と鶴見は世代間の教養差を越えて共同しようとする理解ある年長者で、転向研究会は断層意識を克服する実験の場だった。

ところで抽象的原理への反発の例を思想史に辿れば、本居宣長の儒教批判など「感覚的事実」に基づく「イデオロギー暴露」がある。これを日本思想の「無構造の伝統」から明らかにしたのは丸山真男だった [丸山 1961: 19-21]。

### 2-3 実感信仰と理論信仰

岩波講座『現代思想XI』収録の「日本の思想」は「戦後」への導入部として書かれ、近代日本のイデオロギーを対象に源泉へと遡る [丸山 1961: 183]。丸山によると日本では「自己を歴史的に位置づけるような座標軸に当る思想的伝統は形成されなかった」 [丸山 1957: 5]。「無構造の伝統」は次のような思想の継起をもたらす。

新たなもの、本来異質的なものまでが過去との十全な対決なしにつぎつぎと摂取されるから、新たなものの勝利はおどろくほどに早い。過去は過去として自覚的に現在と向きあわずに、傍におしやられ、あるいは下に沈降して意識から消え「忘却」されるので、それは時あって突如として「思い出」して噴出することになる。 [丸山 1957: 9-10]

丸山は時代毎に有力な宗教と習合してきた神道が日本の思想的伝統を集約的に表現しているとする [丸山 1957: 15]。「国体」はこの「無限抱擁」性を継承し迅速な近代化と前近代性の温存を可能にした [丸山 1957: 24-32]。この両面に挟撃されながら自我のリアリティを掴むべく出発した日本の近代文学は、感覚的ニュアンスの表現が豊富な反面、論理的概念の表現に乏しい「国語の性格」や、合理精神や自然科学精神を持たないためリアリズムが「事実の絶対化と直接感覚への密着」となる「伝統」に加え、文学者が官僚制の「脱落者」または家と郷土からの「遁走者」であることによる「余計者」意識から「伝統的」心情や美感に著しく傾斜していった [丸山 1957: 37-38]。その帰結は以下のよう

## 第2章

になる。

あらゆる政治や社会のイデオロギーに「不潔な抽象」を嗅ぎつけ、ひたすら自我の実感にたてこもるこうした思考様式が、ひとたび圧倒的に巨大な政治的現実（たとえば戦争）に圍繞されるときは、ほとんど自然的現実に対すると同じ「すなお」な心情でこれを絶対化する [丸山 1957: 39]

このように丸山は「文学の実感信仰」が政治的現実は無抵抗になったと批判した。さらに「日本的な感性」からの反発を「一手に引受け」たマルクス主義も、理論が「崇拜」の対象となり「フィクションとしての意味を失って現実に転化し」たとする [丸山 1957: 40-41]。

自己の依拠する理論的立場が本来現実をトータルに把握する、また把握し得るものだというところから責任の限定がなくなり、無限の現実に対する無限の責任の建て前は、理論的無責任となってあらわれ、しかもなお悪い場合にはそれがあいまいなヒューマニズム感情によって中和されて鋭く意識に上らないという始末に困ることになる。 [丸山 1957: 42]

丸山は「コンミュニストの転向」も「思考様式からすれば、多くは伝統的な形で行われ」 [丸山 1957: 40]、「国体」や「輔弼」も「無限責任のきびしい倫理」から「巨大な無責任への転落の可能性をつねに内包している」と指摘する [丸山 1957: 22-28]。このように丸山は抽象的・普遍的な理論と、それを倫理的責任をもって構築する主体の不在を日本の思想の「伝統」として指摘し、「文学の実感信仰」と「社会科学の理論信仰」はその表裏であることを明らかにした。しかし反響はこの対比に注がれ、社会科学からの「実感主義」批判を強めることとなる。

### 2-4 「実感」論争

まずはマルクス主義陣営の反応を見る。田沼肇（1926-2000）は人口動態の分析から日本では新中間層より地主など旧中間層の方が多いと指摘しつつ、中

間層が増大しているとしても労働条件は労働者と同じかそれ以下で、組合への組織は可能だと結論づけた〔田沼 1957〕。他の論考でもマルクスがいかに関中間層の増大を見越していたかを文献解釈から証明するなど〔黒川 1957; 吉原 1958〕、労働者を革命の主体とし、浮動的な中間層を組織化すべきとの見方が堅持された。

これらと異なる観点から批判を展開したのは江藤淳（1933-99）である。江藤は実感主義は「肌にしみついた」「実感」を基準に現状を肯定する点で「昔はよかった」という「近代否定論と変わらない」とし、「具体的な行動への意志」や「時間の観念」を欠いた「人間蔑視の思想」であり、そこから「主体的な思考とか行動」は生れないと批判した。さらに、石原慎太郎の『亀裂』と志賀直哉の『暗夜行路』を例に、両作品には「巨大な感覚の集積であるひとりの自己と、そのまわりにかぎりなく小さく描かれた他人があるだけ」で、「階層的で同列的ではない」人間関係から『愛』や能動的、主体的な人間同士の連帯感という体系」は生まれないとし、「ファシズムに近い」精神構造を指摘する〔江藤 1958〕。江藤は、戦前と戦後の相違よりも相似を問題とすることで、「戦後派」の論理として展開されてきた「実感」に疑問を呈している。

思想の科学研究会では、江藤を招いて中間文化論に関する月例研究会がもたれた<sup>viii</sup>。後藤の報告によると、論争は「通路のない」まま終わったが、後藤は「同じ世代」の江藤との間に共通の「近代的人間像」があると指摘し、立場の相違は「逆説的な感覚」の有無によるとした。すなわち、自分たちは戦前的教養と中間文化を半ば身につけた「中途半端な世代」であり、「戦前的な理論」と「戦後社会のムード」への「二重の反感」が生んだ「スネモノ、カタワモノとしてのアイロニカルな感覚」は、それ自体ネガティブでスタティックなものだが、そこに居直ることによって「自己を客観化し、創造的な行動に転化」することができる<sup>と主張した</sup>〔後藤 1958〕。しかし後藤は江藤を「同世代」としつつ、自らの立場の根拠を世代に求めるため、江藤との相違は説明し尽されていない。

これに対し大野力（1928-2001）は、後藤の「逆説」の強調に違和を示し、自分たちは「純粹戦前派と純粹戦後派との間の、厳たる存在、日本の社会の将来にとって、重要な体験を持った意味ある存在」であるとの自負をみせる。加藤や自分と江藤との間に「年齢差の少なさにも拘らず、思想的世代でははっき

## 第2章

りした一線が画ける」として、江藤の場合「革命的教条主義などは全然相手にしなくてよい程、反体制側内部の民主的空気の時代に精神を形成した」とする。よって戦後左翼理論からの「転向」という中間文化論の積極性を江藤は評価し得ない。しかし大野は、中間文化論の弱さは実感主義より「現象主義」にあり江藤の批判はその一端を捉えていると評価する。すなわち中間文化論のいう「平均化」は年齢的に社会的地位が未分化のうちは妥当するが、戦後派とそれ以前の世代との根本的な相違とは言い切れない。それを言い切ることで「生々しい現実の矛盾、対立」が捨象されてしまうとして、社会科学的分析や歴史段階での評価を加味すべきだとした [大野 1959]。江藤は前近代から近代へ向う歴史の側から人間の主体性を量り、後藤は逆説的感覚としての実感に固着し、大野は社会の実体との関連を問う。

「戦前派」にあたる高見順（1907-65）は「丸山氏の見解は尻馬組とは違って、かならずしも実感排除ではな」としつつ、「抽象化作用」より「抽象化された結果」の重視が「理論信仰」とされるのに対し「抽象化作用そのものにも、一種の妄信的傾向がありはしないか」と問う [高見 1958: 36-39]。

文学も社会科学も、人間を対象にしている点では同じだというだけではなく、それぞれの方法は違っても、人間に関する概念（「真理」ではない）をひとしく豊富にするという点でも同じなのであり、その概念は一方は「イリュージョン」で一方は「真理」だという訳ではないのだが、社会学者はそれを認めることを潔しとしない。 [高見 1958: 40-41]

高見は、転向後も詩、評論、短編・長篇小説といった多様なスタイルで創作を続けてきた。社会科学と文学を「真理」への到達が約束されない試みとして等置する高見の姿勢は、これらがともにフィクションである自覚と、ストーリーに回収し尽せない現実の具体性の重視を示す。

これに対し橋川文三（1922-83）は、高見が戦中「便乗的文学者の空疎で精力的な『怒号』」の中「文学非力説」を唱えたのは「天皇制軍隊＝官僚の遂行する戦争にともなった解体的平準化に対して、一定の抵抗の意味」をもったが、いま再び「実感」を擁護するのは「逆行」であると批判した [橋川 1958a:

178-179]。橋川によると「日本文学近代の究極の美学的メタフィジック」となった「私小説」の「『実感』＝『日常経験』の美学」は、「ついに天皇制の内包する美的限定を突破することはなかった」。すなわち「天皇が疑うべからざる自然的制度であったのと対応して」「作家の『私』の『日常経験』があり、「作家が『私』の自然を信ずることは天皇制国家の自然を信ずることと微妙に一致した」[橋川 1958a: 176; 185; 1958b: 134]。

橋川は、「芸術的価値論争」以来の「政治と文学」論争は、「本質→実体→現象という思索方式の体系」をもつマルクス主義に対する「『現象』の叛逆」であったとする[橋川 1958c: 62]。しかし「私」と天皇制が上のような対応関係にある以上、マルクス主義を毀棄すると「こんどは『実感』の実体化に傾斜し、『民族』と『郷土』と『神話』のなかに『転向』してしまう[橋川 1958c: 65]。高見が「実感」を擁護するのは「ありし文壇、ありし共産主義者に対するほとんど体質的な郷愁——『昭和への郷愁』」だと指摘した[橋川 1958a: 179]。

さらに橋川は、「昭和への郷愁」の「イメージをともにしない読者大衆の登場」を指摘し、「新しい世代」の作家として 1935 年生まれの大江健三郎に注目した[橋川 1958a: 179; 184]。大江は橋川、加藤、江藤らとの座談会で、「伝統」と「状況」につき以下のように述べる。

僕にとって伝統がどのようにあらわれるかということ、アクチュアリティ(現実)の状況を考えるうえで、自分が一つの武器とすることができるものとして、現代日本に伝承された過去からの遺産の、どれを取上げるかということなんです。僕の取上げた側面が、僕の取上げ方を含めて、僕自身の伝統であるというほかはないと思う。[橋川、加藤、江藤、田口、大江 1958: 234]

また大江は、「実感」は「ものを表現する」側からすれば「議論以前の第一前提」だとして、「リアリズムの問題とおきかえ」るべきだと主張する[橋川・加藤・江藤・田口・大江 1958: 232; 235]。

リアリズムは表現者がいかに自分の実感を、普遍的な実感にたかめるか、



## 第2章

他者への説得力をもたせるか、という技術でしょう。それは実感否定というかたちさえとります。[橋川,加藤,江藤,田口,大江 1958: 236]

橋川は、大江の文学とその提唱する「共同体」が、「『実感』のレベルで考えられているものでなく、その強調は『世代』というよりも『状況』におかれている」こと、そして「『主体』の保証は、究極的なメタフィジクにより与えられたりしてはいない」[橋川 1958a: 185] 点を評価する。大江の文学とその読者の登場は、かつて文学が天皇制に絡めとられた事実を、「民族」や「神話」の実在を実感した自身の問題ともする橋川に、そこから超え出る可能性を示唆するものだった。

大江は文学により実感の普遍化を試みたが、同様の意図で「生活綴方」「生活記録」<sup>ix</sup>に取組んだのは鶴見和子（1918-2006）、鶴見俊輔ら思想の科学研究会の人々である。

### 3 「実感」を超えて——『思想の科学』における試み

#### 3-1 鶴見和子の生活記録理論

思想の科学研究会では50年代初頭まで、アメリカの社会学や心理学の手法で大衆の思想を分析していた<sup>x</sup>。しかし鶴見和子は、「あらかじめ用意してきた質問をして、統計をとってまとめた結果には、あまりにも網の目にもれることが多」く[鶴見和子 1954: 371]、また「あたかも、自己をふくまざる集団」として日本人を論じる「官僚方式」の思考に疑問と限界を感じていた。新しい方法を模索するなか生活綴方教育の実践記録を読んで感銘を受ける[鶴見和子 1952: 323]。

そこでは、一つの村、一つの都市の共通の生活実感をばいかいとして、そこに起る共通のもんだいをつきつめて話しあい、調べあうことによって、先生と生徒が、互いに自己改造を行なうような仕方の教育が成長していることを感じたからだ。[鶴見和子 1952: 323]



鶴見和子はこれを大人の「自己教育」に使おうと、主婦、工場や会社で働く人、先生、学生など「ことなる生活経験をせおっている」女性たちと「生活をつづる会」を立ち上げる。女性たちはそれぞれの生活の場で直面する問題を書き、それを持ち寄って討論する。そこで「えんりよなくたたきあ」うことによって、「自分の苦しみやよろこびが、他人の苦しみやよろこびにつながっている」ことを感じ、「自分の体験のイミを、社会的なひろがりの中で」把握できるようになる [鶴見和子 1953: 175-176]。

集団と持続とをとおして、自分の中の矛盾や分裂があかるみに出され、統一が生まれてくるだけでなく、自分の体験の社会的イミを認識し、実感として感じとることによって、私小説的態度におちいることをふせぐ。[鶴見和子 1953: 176]

このように鶴見和子の理論では、それぞれ異なる生活経験の「実感」を出発点に、集団の持続的な交流を通すことによって、それらが共通の社会的意味を有することを「実感」するというように、いわば二段階の実感が想定されている。

そこで目指された「あたらしい人間像」[鶴見和子 1953: 206]とはどのようなものであろうか。それは自身に関しては、「どんな問題でも、自己を含む集団の問題として感じ、考えられる」[鶴見和子 1954: 372]ようになることであり、より一般的には、「自分の考えを、はっきりいう態度」を保ち、「人をおとしめて、自分だけがよくなろうとしないで、自分のよろこびやかなしみが、自分の仲間のよろこびやかなしみにつながっていることを、自覚し、そのように行動できる人間、そうした人間と、人間同士のつながり」[鶴見 1953: 206]であった。「官僚方式」や競争主義、保身の枷を抜け出て自主的に発言し行動する人間同士の連帯が目指された。

1953年度の思想の科学研究会大会の座談会では、生活綴方における個人と社会のつながりが問題となった。石母田正（1912-86）の「真実の労働者の誇りは何か、それを労働者全体に知ってもらいたい」、「そういうはっきりした目的がどうしてもなければならぬ」との批判に対し、鶴見和子は以下のように述

## 第2章

べた。

私たちの観点は人間の生れ代りということ、その中で生きてる一人一人の人が新しい人間として生まれかわることが出来るか、そしてその姿をどうしたらよいかということを書きながら考えて討論し合って、自分がやってみることによって、新しい途を発見する。そしてまた、それを書くということにしていけば、その人自身が生れかわると同時に、その姿を書くことによって生れかわりの歴史、庶民の生れかわりの歴史を書くことができるのじゃないかという事が私たちの目標なんです。[上原, 国分, 石母田, 武田, 日高, 三浦, 無着, 武谷, 高橋, 関根, 駒尺, 乾, 磯野, 幼方, 鶴見和子, 鶴見俊輔 1954: 37]

このように鶴見和子は、「歴史」を啓蒙する立場と一線を画し、書き、討論し、行動し、考える循環の中で新しい生き方を発見する自己再生と、その積み重ねによる歴史の再生を目指した。

1950年代後半になると生活綴方は「実感主義」との「悪評高いレットル」を貼られるようになる[鶴見和子 1959a]。これに対し鶴見和子は、主婦の生活記録における「情緒と認識」の関係をこう述べた[鶴見和子 1959b: 146]。

生産の場の基準と、愛情の場の基準とをべつのものとして考える日本の男の思想のサムライ根性が、じつは、「実感信仰」と「理論信仰」とやらいいうダイコトミーを生み出した、一つの病源なのだと、わたしは考える。そうした男の思想のサムライ根性を直してゆくことが、生産の場でも愛情の場でも統一された人間でありたいとねがっている、主婦たちの運動の、一つの方向だとわたしは考える。[鶴見和子 1959b: 146-147]

このように鶴見和子は、「実感」対「理論」に象徴される二分法の思考を男性の旧式な発想だと批判し、統一された存在への志向を明確にする。安保以降、サークルは政党活動に「せつかに分裂吸収されてい」き停滞期を迎えた。鶴見和子はこの状況に際し、「体験」あるいは「経験」から抽象化をやり直して「あ

たらしい概念をつくりあげる」必要を説く。安保闘争は「国民のひとりひとりが歴史に積極的に参加するというあたらしい経験だった」として、「あたらしい地点」からの生活記録運動の「やりなおし」を提起した〔鶴見和子 1961; 1962〕。のちに鶴見和子は、自ら行った水俣病患者の聞き書きをはじめ、公害病患者や被爆者の聞き書きを生活記録の延長上に捉え、「小さな民」の立場から大きな問題に立ち向かう「内発的な」思想運動としての有効性を見出していく〔鶴見和子 1985; 1986〕。

鶴見和子は 1950 年代後半から「実感」の語の多用を避けたが、むしろこれを積極的に使い生活綴方の可能性を強調したのは鶴見俊輔である。

### 3-2 鶴見俊輔の「実感」

すでに 2-2 で久野と鶴見が「戦後派」によせた期待について述べた。ここではその期待と戦争責任追及の関係と、鶴見独自の「実感」の読み替えを見ていく。鶴見は 1956 年度思想の科学研究会総会の戦争責任についての討論で、いま戦争責任追及をする意義を以下のように述べた。

短期の建設は責任意識を忘れた方が、陽気で愉快にできますから早く出来ます。しかし長い建設のためには、こだわらなければいけないと思います。なぜならば、日本の国家は実質的なコースを繰返さなければならないのです。そのときにエネルギーの源になるものは、こんなにひどい戦争をして沢山の犠牲者を他の国からも出したし自分にも出した。このことのイメージがなければ駄目だと思います。〔思想の科学研究会 1957: 38〕

鶴見は支配層も反対勢力も「日本を日本らしい仕方でどうするかというイメージ」がないと批判し、「戦争責任という概念をテコとして使って」「岸信介のようなタイプの政治家」に「権力の場からおりに貫うことを強制」し、同時に「我々自身も鍛える」とした。すなわち、「歴史主義」をとれば「因果関係の中で」「責任を完全に回避出来るが、それでは「思想家」という「職業自身が無意味」になるとして、個人の「形而上的な責任」を重視する〔思想の科学研究会 1957: 36-38〕。それは以下のような内容を持つ。

## 第2章

私は戦争中に日本へ帰ってきたけれども、これは負ける戦争だということを感じていたわけです。これは無意味でひどい戦争なんだが、これを国家に対して巻返す力がどうして国の中から出てこないのかという問題をずっと考えていた。[鶴見・吉本 1967: 101-102]

鶴見は「肉体と理念がいっしょにならないと巻き返す運動はできない」と言い [鶴見, 吉本 1967: 102] 感情や認識と行動の不連続が戦中から持ち越した基本的課題であるとする。

久野収、藤田省三との鼎談において鶴見は、生活綴方が「特殊の中から普遍を生む」点で「戦後的な近代化方式の批判」だと評価しつつ、「日本的な『特殊』のひずみが出てきやすい」と指摘した。すなわち状況の中の「実感」から出発する生活綴方には「善意と受容の哲学」が流れており、それが進むと「自然から与えられる状況も社会から与えられる状況も区別せずに受け入れ」てしまい、「日本の民族を、あるいは現在の人間全体を、全体としてつっぱなす視点」が出てこない [久野, 鶴見, 藤田 1958: 166-175]。

これに対し、生活綴方の新しい方向として鶴見が注目したのは、樋口茂子の『非常の庭』<sup>xi</sup>だった。そこには、ある会社勤めの女性が、フィリピンで戦犯容疑をかけられた知人の助命運動を行い、成功して帰国したその人に結婚を申込みれるが、自分には戦争責任はないという言い方に「いつわり」を感じて気持が離れていく顛末が描かれていた。鶴見は「受動的な感情ではなくて、行動に対する絶えざる衝動」があり、「欲望ナチュラリズム」(一定の生活水準を満たすこと以外重視しない態度)を打ち倒していること、「国そのものを裁く立場」が「戦争体験者でないところから出て来ている」ことを指摘し、「非常に戦後的」だと高く評価した [久野, 鶴見, 藤田 1958: 176-178]。さらに鶴見は、「実感を超えるための手段」が実感の中になければならないとして、「行動の設計の概念」の必要を主張する。

実感から出発する行動のプログラムがあるわけです。計画された行動があつて、その行動の途上で、はじめてあう期待はずれのいろんな偶然的な実

感があって、そこで記録を書く。これが大人の綴り方の方法だ。[久野，鶴見，藤田 1958: 187]

鶴見において「実感」は、行動への衝動を孕み方向性をも決める凝縮された感情で、これを起点にプログラムをもって行動に乗り出すが、途上の気づきもまた「実感」であり、そこで書き、考えることによりプログラムを修正してまた行動に出る。この一連の過程を編み出す基底には、過去との対決においてしか「戦後」以降の社会のヴィジョンと行動のプログラムを組めないという強い負の感情があった。すぐれて「戦後的」な実感と行動のプログラムを自らのものとすることによって、鶴見は「戦前派」の政治家の無責任や、因果関係の中に責任を解消する「歴史主義」、あるいはアメリカの権威を笠に着た「民主主義」といった「近代主義」と決別し、自らの感情・認識と行動の不連続の克服を目指した。

### 3-3 「実生活者」と「市民」

1959年4月、中央公論社から第4次『思想の科学』が刊行された。「創刊のことば」は、「専門的思想家」と「実生活者」というカテゴリーを出し、従来思想は前者に独占され思想と生活を結びつけないため生産的工作ができなかったとして、「この問題の解決のために、この雑誌を役立てたい」と述べた。第4次には上坂冬子(1930-2009)、佐藤忠男(1930-)、大野力ら第3次に投稿で出た書き手が育ち編集へも回った。編集委員には松尾紀子(1932-)、高田佳利(1926-)ら専門思想家でない会員<sup>xii</sup>も加わった。

2号からは、当時トヨタに勤める上坂の連載「職場の群像」が始まった。編集後記で鶴見は、「自分の身のまわりから見るという方法で書かれた戦後史」で、「民主主義、自由主義、社会主義の理念」が「職場の出来事、具体的個人の言動としてにつめてとらえられている」と評した。3号の佐藤の「少年の理想主義について——『少年倶楽部』の再評価」につき松尾の編集後記は「少年の世界に反映された昭和の思想史の一断面」で「日本の教育のステレオ・タイプを見直させる視点を持つ」とした。いずれも個人の視点から社会の実体に迫る描写が評価されている。

## 第2章

この時期「実生活者」という自明の存在があったわけではない。佐藤は「ブルジョアになること」「労働者階級から脱出する」ことが「年来の夢」で、当初「インテリの一人のような顔つき」で流行歌やヤクザ映画を分析したと明かす。しかし、「大衆」の「弱点に実に巧妙にしのび込んでくる」ような映画を「客観的に評価できるインテリと対照的に、映画の作者にも、「そういう弱点をもった私自身、我々大衆自身」にも「憤激」した佐藤は、「あくまでも大衆の一人」として「自分自身の感動を基本とする批評」に取り組むとした〔佐藤 1955〕。このような佐藤の位置取りは、「専門的思想家でないもの」の「実感」を求める『思想の科学』に込められたものとなった。

大野力は、中学教師から工場労働者になり、工業関係の業界記者を経てフリーの評論家となった。転向研究会にも参加し、「戦後転向」の典型として、レッドパージ反対運動で東大を中退し、業界記者の職業の中に立脚点を見出していく弟・明男について書いた。大野は、戦後転向は物理的圧迫が弱い分、「自主性」の要素が強くなるとする。

この場合、個々の経験的実感の違いだけ自主転向の多様性が生まれ、その中に客観的正当性の基準が解消されるだろうという事態、また、社会との対応によって得られる個々の実感が、実はさまざまに変形された権力の側からの働きかけに基底的に影響されるだろうという事実、これらを前にして実感そのものをどう捉えるかが問題である。〔大野 1962a: 326〕

大野は「実感」を社会、権力との関係において捉える。弟の場合「止むをえず進んだ職業」の中に「自分自身の過去とつながる生甲斐」を見つけ、「産業機構の中で具体的な改善につとめている人びと」に共感し協力する方向へ向う〔大野 1962a: 322〕。大野兄弟と上坂らは思想の科学研究会内に「実務の中の思想」の会を立ち上げ、「政治的意識」に対する「産業的思考」の立場を主張した〔「実務の中の思想」の会 1960: 67〕。

60年安保に際して、『思想の科学』は緊急特集「市民としての抵抗」を組む。久野収は、市民とは「職業を通じてのみ生活をたてている人間」だとして、職業人と生活者の両側面を持つことを指摘した〔久野 1959〕。加藤秀俊は「平凡



で平和な日常生活を確保するために政治的行動に出る」「市民」が成立したと指摘した。[加藤 1960]。しかし今の生活の「維持」と社会「変革」は、一見相反するベクトルを持つ。「実務の中の思想」の会は、「ビルの外側」の街頭では安保反対運動が高揚し、「ビルの内側」の職場ではいつも通り業務が行われるという「余りにも異なる秩序と雰囲気」ととまどいながら、「首まで対米協調の経済体制につかっているという現実」と、体制に組込まれているゆえに「現実的プログラムの一端を担っているという、責任と可能性」を重視し「産業経済体制の中に潜る」ことを通して改善プランを出すと結論づけた [「実務の中の思想」の会 1960] xiii。

鶴見俊輔は同号で、敗戦直後に共産党が戦争責任を反共・容共の争点と抱合せたことにより超党派的結集を妨げ、「自主的な戦後」と、「戦争責任から比較的自由な政府」をつくり損ねたと批判し、「責任ある民主的な政治形態の確立」が第一だとして、「折衷主義のプログラム」を提唱した。政府批判の根拠は「私の中をたくみに底までくだつてゆけば国家をも、世界国家をも批判し得る原理があるということへの信頼」によるとして「国家をも見かえす私」の概念を提示する。鶴見は5月19日の強行採決に対する憤慨が自分を敗戦、満州事変の時点へ遡らせたとし、過去に対峙し自らの中に潜む可能性を中心におき「私のひずみからくる錯覚を日々新たに計算しながら」「私の複合をとおして社会改造の展望をつくる方法」を採るとした [鶴見 1960]。

以上第4次『思想の科学』における「実生活者」と「市民」の論理を見た。「実生活者」は生活の場の凝縮的なエピソードで歴史や社会を描き出すことを期待された。一方でカテゴリーの非自明性は筆者それぞれの自覚的位置取りを促す。安保闘争は政治を生活の場から捉える「市民」の論理をもたらし、状況と「私」に潜む可能性を肯定して漸進的な社会改善を目指した。

### 3-4 「実感」の消失と日常の思想

1962年4月、思想の科学研究会は中央公論社と袂を分かち自主刊行に移行した。「復刊のことば」は「高度に学問的な思想の研究と、生活の中の思想を同時に研究します」と宣言した。

翌月、大野は雑誌の方向性を論じた。「アカデミックなもの、生活綴方的な

## 第2章

ものとの二つをどのような関連で捉えるかは、あまり簡単ではない」とした上で、編集の論点を問題抽出と企画・実行の2つに分け、編集員の問題意識だけで問題を選択する「小じ〔ママ〕んまり主義」により前者が非常に弱いと批判した。大野は投稿とサークル運動をとおして「大衆のなかにある潜在的問題意識」を「生活のなかから鋭く掘り出してくる」べきだと主張する。職場を批判的視点から作品化し発表することは「日常の仁義に反する」とし、葛藤の末「自分の足で立つこと」を決めた上坂を反例に、「専門化しない素人ライターの厚い層」が必要だとした〔大野 1962b〕。

「新人」の専門化の問題は、論壇における「知」の変容が用意していたとも言える。鶴見俊輔は1959年末の段階で、かつてはプラグマティックな考えや哲学無用論を説くことが「異端」であったが「論壇の正統思想」がそういうものになってしまったため『思想の科学』の立場が「じょうはつ」しそうになっていると危惧を表し、「平均的なものになるために、小さな雑誌を続ける必要はない」と述べた〔鶴見 1959b〕。大野は、問題が鋭く掘まれていれば雑誌は「売れる」はずだし、生活綴方とアカデミックな論文も「互いになくてはならない組合せとなって行く」と見通しを述べる〔大野 1962b〕。現場からの問題抽出を重視する姿勢は、大野が思想の科学社の営業部長、取締役、社長となる60年代後半にかけて、『思想の科学』の主調の一角を形成していった。

丸山真男は鶴見との対談で、『思想の科学』が「型と形式をべっ視する内容主義」になったと批判した。丸山は戦後間もなくの『思想の科学』が「思想や学問の型」を壊したことを評価しながら、今同じことをすれば「マス・コミに対して全く無抵抗になる」とし、「在野のアカデミズム」は新しい型をこそ鍛えるべきだと主張して〔丸山 1967: 118-119〕、創刊同人として『思想の科学』に託した期待と、距離をおくようになった理由の一端を述べた。また、「日本的な経験の積み重ね」を通して「普遍的な機能をもった思想」をつくり得るとする鶴見に対し、「それは、日常的なものであって、特殊なものとはいわない」と指摘し「特殊性の強調が『ウチ』的日本主義になる」危険性を指摘した〔丸山 1967: 116〕。

1968年に出された会員向けパンフレットで鶴見は、丸山の批判を「適切」としつつ「型の尊重が妙な形式主義にみちびく危険もある」と警戒し、「形の上で

の貧しさ・軽さによって重要な思想をしりぞけない」立場を強調した。そして、「今は、敗戦直後のようにくっきりと状況全体をみわたせる時ではなく、「思想の流派をこえた反戦感情による自然の結びつき」が薄れている中、会を支える目的意識は、初期からの組織上の多元主義と意味の明確化の理想に加え、「日常性の重視」と呼ぶことができる、として、具体的に以下のように提唱する。

(1) 今の「私」の日常性をとうして思想の問題を、「私」にとって納得できるようにはっきりと考えよう。(明確化の目標)

(2) 他の日常性のうらずけをもつ「私」とのあいだの相互主体性の場を確保しよう。

いかなる思想のすじ道にたいしても、門をとぎさないことにしよう。(組織論上の多元主義) [鶴見 1968a]

鶴見は、「日常生活の主人公は私であり、その私の位置を明らかにしてゆき、『私』のいる歴史、『私』のいる記録、『私』のいる批評を書いてゆくことが、私から出発しながらもその考えを私性の中にとじこめないでかえって客観的なものにしてゆく」と述べ、思想の科学研究会を、「どこの方向に行つて来てかえってくることのできる『峠の茶屋』のような位置に店をはりつづけ」、純化されていない「まだらの思想をそのまま表現してたがいに意見を交換する場所」として捉えている。さらに、その仕事を積み上げて、「一つの思想を自分の生涯を通しての適用をもってとらえるという仕方であらうまれてくる体系性」、あるいは「そのような体系性が他の同種の体系性とどのようなかかわりをもっているかを記録してゆくという仕方であらう生じる体系性」の可能性も示唆している。

1972年3月、自主刊行移行後10年を境に、『思想の科学』は「言論・思想の商品化、出版の商業化の中でどのように自立し、自由な言論を実現するか」xivが問題だとして、第5次に区切りをつける。翌4月、第6次「創刊のことば」では思想雑誌を出す意義が以下のように示された。

私たちは、管理され操作されている日常性に批判的に対峙しつつも、そのかたくなさの底に息づいている生の豊かさを見定め、日常生活に根ざした

## 第2章

自主的な思想を創造するために、〈思想の科学〉の認識の方法をよりいっそう鍛えていきたい。

ここには日常性も社会の機制の一部であるという認識と、だからといって思想を生活と切り離れたところに求めるのではなく、日常生活のひだに意識をはたらかせて「生の豊かさ」を手繰っていかうとする志向がある。もはや、対概念として「理論」を想定した「実感」の实在性は薄れており、「私」に密着する思想そのものの真価が、この先問われてゆくことになる。

### 4. おわりに

以上、「実感」という概念の立ち上げとこれをめぐる論争、その問題点を克服する試みを見てきた。「実感」は1950年代後半、従来の階級観や所与の抽象論を否定する「戦後派」の論理として主張されてくる。その背景にはマルクス主義の正統性の揺らぎと、岸信介ら戦前からの政治家の返咲きがあり、その双方を否定して「戦後」以降の新しい社会のヴィジョンを求める「戦前派」と「戦中派」の思惑があった。

鶴見俊輔にあっては「実感」は当初、「戦後派」が自らの考えに基づいて行動しそのことに責任をとる点において評価され、その後行動への衝動を孕む点が強調された。それは一方で「戦前派」の無責任さと自らの区別を可能にし、他方では自らの戦争体験、すなわち感覚・認識と行動が結びつかず反国家的な行動をとれなかったことへの倫理的な責任の意識を保ちながら行動を駆動する役割を果たす。丸山真男は認識と実践を統合する主体の責任を重視し、「実感」への密着が状況追従をもたらすことを警戒する。丸山は超越的な価値を想定して認識を鍛え、鶴見は「私」の中に普遍的原理があることの信頼に基づいて実践を行う。究極的な価値のありかと、認識と実践の比重が両者の分れ目だった。

鶴見和子の生活記録理論の重点は、集団の持続的な交流による人間同士の信頼関係を土台とした自己改造にある。書き、話し、考え、行動してまた書く循環から生まれる、相手の言ったことに「分かる」と心からうなずき合えるような共同性、これが鶴見和子が「共通の生活実感」と呼んだ、旧来のマルクス主

義とは異なる連帯の基盤であった。このようなプロセスを経て得られる社会的意味の認識は、従来の学習にはない深さをもたらすと期待され、鶴見和子はその高次の認識のあり方も「実感」の語で表した。さらに鶴見和子は新しい概念づくりを志向し、理論対実感の対立を止揚する女性の論理や、水俣での聞き取りを経て「内発的」な視点の獲得へつなげてゆく。

中間文化論が縮減を指摘したところの「大衆」と「知識人」の溝は、1950年代から60年代に狭まりつつも存在し、前者に書かせ後者が評価を握るといふ非均衡な関係や、職場の日常を題材にジャーナリズムに乗ることの倫理の問題を孕んでいた。後藤宏行や佐藤忠男、上坂冬子らはこれらの問題を戦前・戦中派の知識人の期待とともに受けとめ、「大衆」、「実生活者」あるいは「戦後派」としての「実感」を前面に押し出してアカデミズムやジャーナリズム内で地歩を固めていく。やがてさらなる大衆社会状況の進展による溝の縮小は『思想の科学』から出た彼らにより広い活躍の場を提供したが、それは論壇における『思想の科学』の独自性の希薄化の危機でもあった。60年代、大野力らが主張した「実務のなかの思想」は、実感への権力の影響力、体制に埋没する危険性を逆手にとり、実務のエキスパートとして具体的なプログラムの責任を担うことにより社会改善を漸進させる立場であった。丸山から「型がない」との批判を受けながらも、『思想の科学』は「日常」と「実感」の自明性に批判的に対峙しながら、生活の中に息づく思想の断片をすくい上げ、自主的な思想をつくろうとする。

「知識人」と「大衆」の溝、「知識人」の圧倒的な教養と特権的な地位は、やがて何段階かを経て崩壊していく。それは倫理性を湛えた大きなストーリーとしての「思想」の終焉でもあった。しかし権威・権力の偏在が無化されたかのようなポスト・モダンの幻想は、経済的な「機会の均等」、政治的・倫理的な各人の「自由」の体裁が保たれているときにのみ実在性を持つ。長い「戦後」が終わりその前提がほころびを露呈してきた今、知識人の描くべきストーリーとそれを実現する方法につき「実感」論争が提起した問題をいま一度見直すことが必要だろう。

## 第2章

- 
- i 本章は、実感という概念の捉え方を世代論との関わりにおいて分析することを一つの目的とするため、各論者の本章中の初出箇所に生(没)年を併記する。
- ii 中野好夫「もはや『戦後』ではない」『文藝春秋』34(2),p.56-66; 「特集,『戦後』への訣別」『世界』(128)
- iii 『新社会学辞典』有斐閣 1993
- iv 「中間文化論」『中央公論』72(3), p.252-261; 「戦後派の中間的性格」『中央公論』72(11), p.231-241
- v 「アプレゲール意識のもつ言語感覚をめぐって」『社会思想研究』6(12); 「アプレ・ゲールの価値意識」『思想』(371), p.91-102
- vi たとえば「アプレゲール・アヴァンゲール」『日本評論』25(2),88-95、南博「アプレゲールの存在」『人間』5(12), p.142-147
- vii 「後藤宏行略年譜」『思想の科学会報』(125), p.24-25
- viii 1958年11月22日、12月13日、1959年2月28日。2回目に江藤を招いた〔後藤 1958; 大野 1959〕。
- ix 「生活綴方」は自主的な思考を促すため生活経験や感じたままを書かせる教育方法。『山びこ学校』(1951)を機に労働組合や農村の青年、家庭の主婦に「生活記録運動」として拡大した。(『広辞苑』第5版; 『日本大百科事典』オンライン版)
- x たとえば研究部「ひとびとの哲学中間報告」『思想の科学』1(8), (8), p.57-67; 1(9), (9), p. 43-53
- xi 樋口茂子 1957. 『非情の庭』三一書房
- xii 当時松尾は司書として都立日比谷図書館に勤務、高田は全国地方銀行従業員組合連合会(地銀連)の専従だった。
- xiii 大野らは同年10月号の特集「ビジネスに生きる立場」で現実に即し体制内から変革する立場をさらに主張したが、これに対し高田佳利は反体制側の柔軟ラインの可能性を軽視していると批判し、「組合に生きる立場」を主張した〔高田 1961〕。
- xiv 「終刊のことば」『思想の科学』5(128),(208)



### 第3章 転向研究会概観——前史・活動・成果

#### 1. はじめに

前章においては、「理論」に対する「実感」を拠り所とした戦後派の主張と、鶴見ら戦中派との連携の過程、その背景としての戦争責任論、そして実感を基とする思想の実験ともいべき生活綴方の展開と問題点、「実感」の消失と日常性の思想への展開を見た。本章および次章では、同じく『思想の科学』の休刊期を主要な活動期間とした転向研究会を取り上げ、小集団における共同研究という「思想の科学」の方法の特徴につき明らかにする。

1959年1月、鶴見俊輔を責任者とする思想の科学研究会内の小研究サークル、転向研究会（以下、転向研）は『共同研究 転向』（以下『転向』）上巻を上梓した。その特徴は転向を「権力によって強制されたためにおこる思想の変化」と定義し〔思想の科学研究会 1959: 5〕、戦前の共産・社会主義者のみならず自由主義者や国家主義者、戦後にまで適用範囲を拡大したところにある。

これに対する年長の知識人の評価は分かれた。上巻刊行を受けて行われた座談会で、本多秋五は、『転向』が従来の転向論議における「倫理的判断」を抜け出て「広い見地に立っている」点を評価したが、亀井勝一郎は同じ点を捉えて次のように批判した。

コミュニズムの立場でもいいし、キリスト教の立場でも、何でもいいが、自分の立場を持っている人ならば、もっと強烈なものがあるはずだ。それが弱さとして僕には感じられた。……思想の科学研究会というのは、思想のPTAみたいな感じがする。良い悪いは、判断はかまわない。全部、傍観者ではないか。〔亀井、埴谷、本多 1959: 1〕

「立場」の欠如は下巻収録の共同討議「現代世界と転向」で古在由重からも批判された。古在は『転向』のように転向のカテゴリーを広げると「転向というものの鋭い意味は失なわれてしまう」として「階級の見地の必要」を強調した〔思想の科学研究会 1962: 397〕。

自らの立場に基づく強い主張がないという評価は、ベ平連をはじめとする鶴見の「市民活動家」のイメージと一致しない。この違和は戦前の転向経験のある者と、ない鶴見たち、さらには安保闘争、ベトナム反戦運動など知識人が政治に積極的に関与した一時代を「過去」と見る世代の視点の差異によるのだろう。転向研が転向の「鋭い意味」を失くして幅

## 第3章

広く扱った理由は、「傍観者」的視点に還元されるのだろうか。

この論考では、転向研参加者が転向研究へと向かった経緯から、転向に含まれる複層的な視点を明らかにしたい。それはまた、彼らの戦時体験の多層性を照らし出していくことにもなるだろう。戦前の転向体験のない彼らが、どのような動機から転向を研究するに至ったのか。それは戦前、転向を行わざるを得なかった人々の視点とどのような部分で呼応し、異なってくるのか。これらを明らかにすることで、60年代にかけて転向問題が有した重みとともに、彼らが国家権力から逃れ出ようとした本源的な希求と実践の道のりを理解する手がかりを得たい。

### 2. 『共同研究 転向』に至るまで——会報から

ここでは『思想の科学会報』（以下『会報』）から初期の活動を概観する。転向研の開始は1954年11月のことだが<sup>iii</sup>、第1章で見たように、翌年1月に講談社から契約打ち切りの通知を受け〔鶴見 1955: 1〕、3月には『サンデー毎日』他に研究会と鶴見への中傷記事が出て〔思想の科学研究会 1955a: 2-3〕、次の版元が見つからないまま、1955年5月から上巻刊行直前まで雑誌『思想の科学』は休刊していた。会報は転向研の活動を同時期に伝えた唯一の記録であり、初期の活動とともに、メンバーが転向研究へと向かった理由や発想を読み取ることができる。鶴見は近著で、転向研では「若い仲間がそれぞれ自分の中に戦争後期の記憶を取り戻し、研究の自発的な動機とした」〔鶴見 2009: 3〕と回想する。その過程とはどのようなものであったのだろうか。

#### 2 - 1 初期の活動

転向研に関する記載が初めて現れるのは1954年10月1日発行の『会報』5号である。新しく東京にできる小グループとして「転向研究会」（責任者鶴見俊輔）が紹介された。「お話をきく会でなく、討論し、研究をすすめ、仕事をするあつまり」と受動的な学習でなく研究の場であることが強調されている。

初回会合は1954年11月5日に鶴見の勤め先である東工大の研究室で開かれ、「転向研究のプラン」に関するプリントが配布されて、鶴見によるオリエンテーションが行われた。その内容の一部を紹介した記事によると、転向には(1)幕末から明治維新、(2)自由民権運動の挫折から日清戦争まで、(3)満州事変以後から太平洋戦争まで、(4)太平洋戦争以後今日ま

での時代的な「四つの山」があるとし、それぞれに対する「典型的集団」とその中の「典型的個人」を選んで個人別、集団別、時代別に記述し、四つの山を通した「近代日本人の転向の記述」に達するとした。さらにこの記述を「より広い *general frame work* に結びつける努力をする」として「現代中国、ヨーロッパ、現代アメリカの転向との比較」、「庶民思想史の中の概念としての転向という概念の確立」が挙げられている〔転向研究グループ 1954〕。ここには、「転向」を従来の用法を突き抜けた、より一般的・普遍的な概念とし、これにより世界思想史や「庶民思想史」をも記述しようという意図が窺える。

一方、関西でも転向研究会が発足した。1954年11月21日の初会合には東京から鶴見も参加して上述の「転向研究のプラン」をめぐって問題意識が調整され、関西グループが明治大正期（前記転向の山の1、2番目）、東京グループは昭和および戦後の転向（同3、4番目）という時代分担が決まった〔松本 1955a〕。関西グループには前史があり、その前年5月号の『芽』では、当時鶴見が勤務していた京都大学人文研と近い位置にいた松本三之介、奈良本辰也、上山春平らが執筆して「転向」についての特集が組まれた。ここに人文研に助手として採用された多田道太郎、樋口謹一が加わって、転向の関西グループが結成される。しかし会報で追えるのは1955年4月の第4回会合までであり〔松本三之介 1955b〕、その後報告はなされず、活動は持続しなかったようである。

サンデー毎日事件の余波が収まり、1955年半ばに活動を再開してからの例会は、同じ研究室で行われる「群像づくりの会」<sup>iii</sup>と交互に隔週で開催され〔思想の科学研究会 1955a: 5; 判沢 1955〕、秋から群像づくりの会は「随時」となり、転向研は毎週開催されることとなる〔思想の科学研究会 1955b: 8〕。

活動再開から1年余が経った頃、鶴見は会の「常連」を挙げている。判沢、鶴見、今枝義雄が30代、あとは20代で、「なかばはつとめをもっている者、なかばは学生」であった〔鶴見 1956a〕。以下に主なメンバーの生年と転向研開始時、敗戦時の年齢<sup>iv</sup>を挙げる。なお藤田省三と安田武は出版の話が出てから加わった〔鶴見 2005: 166〕<sup>v</sup>。

	生年	開始時	敗戦時
判沢 弘	1919	35	26
今枝義雄	1921	33	24
鶴見俊輔	1922	32	23
安田 武	1922	32	23

### 第3章

藤田省三	1927	27	18
後藤宏行	1931	23	14
しまねきよし	1931	23	14
魚津郁夫	1931	23	14
横山貞子	1931	23	14
松尾紀子	1932	22	13
山領健二	1933	21	12
高島通敏	1933	21	12
西 勝	1934	20	11

この報告で鶴見は主に3段階の研究工程につき記している。

第一番目は「時代別の研究」であり、「昨年夏まで」つまり活動を再開した1955年春から夏にかけて行われた。

この作業は新聞を読むことから始まった。図書館や発行元へ出掛けて行きカード化する。カードシステムの導入は、次章で詳述するように、鶴見の前勤務先であった京大人文研の共同研究の影響だった。この作業の意義を、山領健二は以下のように回想する。

一緒に新聞を読むなかで、鶴見さんが面白い記事を見つけて、声をあげて笑う、それは鶴見さんがそのときにほんとうに発見されていたと思うのですね。わかりきったことならば、何も古い新聞を見ても面白くないわけでしょうから、それはやっぱり鶴見さんにとっては戦時期の日本の、いわば、つまり感覚的にはわかっていたかもしれないけれども、あらためて対象化するステップとしてすごく大事だったと思うのです。

[鶴見編 2005: 194]

鶴見、判沢など戦中、国外の戦地に赴いた者は、その間の国内の思想・政治状況を直接には知らなかった。加えて鶴見は、1938年から42年の滞米期間における日本の社会情勢と生活の変化にも通じていない。鶴見らより年少で戦中国内にいた者も、情報統制や空爆によるメディアの機能不全から、改めて新聞を読むことで新しい発見があったと思われる。

「声をあげて笑う」鶴見の発見の喜びは、若いメンバーにも共有できるものだったろう。

『会報』12号では、カードをもとにした年表作成が報告されている。その際、「権力と思想のかかわり合いが最も鮮明な形をとるのは、国家がある新しいコースを決めたときで

ある」との予測から、①満州事変前後（1931—32）、②北支事変前後（1937—38）、③大東亜戦争開始前後（1941—42）、④米軍進駐前後（1945—46）の4つのモデル時期が設定された。作成後の感想として「このモデルは一応正しい」としつつ、国家が新しいコースを設定してから転向の山を迎えるまでに「時間のずれ」があり、このずれを調べることで「思想が崩れるまでの過程、思想のひずみ具合」が明らかになるであろうとの見通しを述べている〔佐貫, 松尾 1955〕。

『転向』ではこの「ずれ」が明確化され、4つの強制力発動時期とこれに対応する転向の「頂点」が示された。すなわち①1931年の満州事変と1933年の集団転向、②1937年の日中戦争開始と1940年の新体制運動、③敗戦による権力移動と1945年8月15日の終戦決定、④逆コースの開始と1952年の血のメーデー事件直後であり〔思想の科学研究会 1959: 10〕、①が上巻、②が中巻、③と④が下巻に相当する。年表作成作業が『転向』の構成の元となったことが分かる。

研究の第二段階は、「今年春まで」つまり1955年秋から1956年春までかけて行われた「新人会、共産党、翼賛会などの集団別の研究」である。鶴見の報告が掲載された次の号には、佐貫惣悦による新人会についての報告〔佐貫 1956〕が掲載されている。

同報告では、「息のながい仕事にしたいと思って、出来上りの発表場所について約束していない」とあり、この時点ではまだ出版の話は具体化されていない。安田の回想によれば、安田が鶴見に誘われて転向研究会に初めて参加したのは高畠が「大河内一男と生産力理論」を発表した回であり、山領氏によるとそれは1956年10月26日のこととされているので〔成田 2012: 341〕、1956年春から秋の間に平凡社からの刊行が決まったと推測される。

そして「これから」つまり1956年春から第三段階目の「個人別の転向研究に入る」とした。しかし、それから上巻の刊行までには、2年半余の月日を要した。この点につき判沢弘は、1958年7月6日の思想の科学研究会総会で、転向研究会のメンバーは「私と鶴見、安田さんたちが戦中派であとは殆ど戦後派」であり、自分たちは転向体験は持っていないものの、「目げきしてきた」が、戦後派は「それを知らないという人達」なので、「追体験と申しますか、それをやるために一年以上〔実際は2年以上〕ついやしてきた」と述べている。だがようやく各ケースについての論文ができ、秋には出版されるだろうとの見通しを述べた〔思想の科学研究会 1958: 9-10〕。

彼らの転向研究の方法である「追体験」の元となったそれぞれの体験とはどのようなものであったのだろうか。

## 第3章

### 2-2 それぞれの体験

ここでは、「戦中派」の鶴見と判沢、「戦後派」の魚津郁夫、横山貞子、高嶋通敏、しまね・きよしの体験を見る。

#### 2-2-1 戦中派

##### 2-2-1-1 鶴見俊輔

転向研はハイキングや合宿を行っている<sup>viii</sup>が、1957年11月23、24日の那須行き2日目の朝に「宿の縁側」で交わされた談義には、転向研のメンバー、とりわけ鶴見を転向研究に向かわせた初発の問いを見ることができる。

外は風もおさまっていつのまにかよい天気になっていた。宿の縁側にも日がいっぱい射し込んで籐椅子に陣取っている人達は快さそう。捕虜が殺される。もしそれをとめればついに自分が殺されるかもしれない。そんな時に、果してとめる勇気をみんなもっているだろうか？縁側の一隅ではこんな話が出ていた。止めることのできるのは誰か、恐らく自分は止めることができまい、と判沢さんが口火を切ったのである。[山領 1958: 48]

議論の結論はここには出ていない。判沢以外の答えも知ることができないが、問いをもち出したのは鶴見であると推定される。鶴見は戦時中ジャカルタの海軍ステーションにドイツ語通訳の軍属として配置された。ある時、捕虜が病気になり薬不足から「殺せ」との命令が鶴見の隣部屋の同僚に下る。同僚はこれを遂行した。捕虜を殺すのは国際法違反である。

もし私にその命令が下ったら、平常心をもって「これは国際法違反ですよ。国際法を守ると日露戦争以来、言っているじゃないですか。そんなことやっていいんですか」と言えたか。危ないところなんですよ、この判断は。[鶴見 2009: 10]

鶴見はジャワに着任した1943年から胸部カリエスで帰還する1944年末までの心理を「恐怖」、「緊張」と言い表す。それは戦争の相手である米英に対してではなく、日本必敗を信じている自分の心の内部を周りに見透かされるかもしれない、同僚に密告されるかも



しれないという恐怖、人を殺せと上司に命令されたらどうするかという緊張だった。戦闘状態に入った場合、あるいは捕虜を殺せと言われたときには自殺しようと心に決め、鶴見は軍が取り扱っていた阿片をくすねて身につけていた。しかし命令が下ったら自分は臆病風に吹かれて殺したのではないだろうか。戦後、鶴見はその問いを引きずり続ける〔鶴見、小田 2004: 36-39〕。

『会報』17号には、1956年度の総会における討論「戦争責任について」の討論が収録されている。そこで鶴見は、戦争責任を「歴史主義」で考える、つまり歴史の「大勢」がこうであったからとの因果関係で責任を回避する立場に反対し、個人の責任を問うことの重要性を述べた。

人間の思想というものが筋が通ってなければいけないと私はそう信じます。(略)もしはっきりした根拠なしに立場を変えたら、徹底的にその人の変節を抗議してよいと思うんです。(略)これを明らかに満州事変以後の政治家、左翼の評論家も殆ど全部が破ったんです。(略)この次に戦争があって敗けたときにはまた破るのではないか。また、破った者と手を握ることができるかということ、私は昭和十五年から考えていたんです。私は恨み深い質ですから忘れないんです。〔思想の科学研究会 1957: 37〕

ここには、政治家・言論人が満州事変以降、思想の「筋」を曲げてファシズムの方向へ流れ、敗戦後は占領政策に沿って民主主義陣営へと復帰する形で2度「変節」し、そのことに無責任であることへの強い非難と不信が見て取れる。不信の原点は、「自由主義者」から翼賛体制の有力な支持者となり、戦後は保守政党の領袖の座に就き、公職追放と解除を経て鳩山内閣へ入閣を果たした父親の存在だった。

自分の温めていた〔転向の〕定義とは、思いついたのが1943年の2月ですから、もう私が軍属になってジャカルタの海軍武官府にいるわけだよ。そうすると、このときもやっぱり親父（鶴見祐輔）がテーマだな。(略)結局、剣を自分の背中から貫き通して、自分の対象になるものと同体に倒れて、切っ先が余れば相手に達する。〔鶴見 2005: 77〕

鶴見にとって転向は、戦前の狭義の左翼陣営の問題に限らない。戦争責任というパース

### 第3章

ペクティブで見た場合、主義を問わず、政治家・評論家の変節の問題として把握される。しかも思想史上の問題というよりも、そのような者と「手を握れるか」という政治的実践の課題として捉えられていた。「もはや戦後ではない」と言われた1956年において、戦争責任を問う意義には疑問の声もあった。これに対し鶴見は、「占領軍の力ぞえなぞないこれから徹底的に出さなければならない」と、極東軍事裁判のときに発言しなかった理由と、占領の終わった今こそ自分たちの手でやることの必要を強調した〔思想の科学研究会1957: 38〕。その根底には、前章で見たように、一方では追放解除により法的にも倫理的にも戦争責任をとることなく政権に返り咲いた保守政治家、他方で、戦前、反戦・反ファシズム勢力として、主としてコミンテルンの方針に従って運動し、失敗するも、戦後もコミンフォルムないし中共に運動のモデルを求める共産党、双方への不信があった。自身の戦地体験からの反事実的条件命題の問いかけと、父親を象徴とする満州事変以降の「自由主義者」も含めた政治家への不信、その延長線上にある自らの政治的実践課題が、鶴見の転向研究の強い動機となっている。

#### 2-2-1-2 判沢弘

転向研の戦中派の例として、判沢弘の例も見ておこう。前述の、転向研的那須への旅行中に出た話題で、「捕虜が殺される。もしそれをとめればついに自分が殺されるかもしれない。そんな時に、果してとめる勇気をみんなもっているだろうか」との問いに「恐らく自分は止めることができまい」と答えた判沢もまた、戦中の体験を戦後に引きずっていた。

判沢は戦争末期に学徒兵として応召し、幹部候補要員として満州に送られる。そこで、学徒全員の前で代表として講演を命じられた判沢は、「日本は東亜諸国の解放戦をたたかう程の理想主義を持ち合わせてはいないこと、その証拠は日本の朝鮮および満州支配を顧みるならば歴然たるものがあること」などを述べた。その後、下士官助教たちから連日のごとく虐待を受けるも、教官であった大尉は判沢の主張を容認し、半年の訓練後、判沢を「もっとも軍隊らしくない部隊」である長春の「気象聯隊」へと転属させた。他方、大尉が率いる原隊は、判沢が離隊して間もなくフィリピン諸島に動員され、全滅してしまう。判沢は、自分の戦争批判の思想を容認し、しかし軍人であるゆえに死地に赴いた大尉の存在が、「爾来私の胸の中に重く<sup>つか</sup>瘡えて離れない」と書いている。

さらに、戦中、判沢の戦争への「批判の眼」を支えたものはキリスト信仰であったが、復員後、占領下にある日本キリスト教会に接して以来、信仰は「指の間から砂のように」

消滅してしまう。それ以来、『信仰』とは、『思想』とは私にとって、人間にとって一体何なのか」という疑問が判沢の「生涯の課題」となった〔判沢 1967=1994: 17-19〕。

判沢は、復員後、故郷の米子で高校教師をしていたが、「帰省運動」で米子に来た鶴見俊輔と出会い、鶴見が京大から東工大に移る際、助手としてともに上京する。以後、転向研をはじめ、東工大の鶴見研究室で行われる複数のサークルに参加し、研究内容・サークル運営両面において鶴見を助けた。

判沢は鶴見同様、転向研活動時には、自身の戦争体験と研究動機を直接に結びつけて述べることはなかったが、転向を取り上げる意義については述べている。すなわち、近代日本の進歩運動の挫折は、「指導者の計算を裏切って続出した転向」にあり、戦後においても、「学生が就職後進歩性をぬぎすてるということが、運動ののびる支障になって」いる以上、「転向責任」を追求し、「転向に就ての法則性」を明らかにすることが、組織の組み方を考える上で重要であるとの認識を述べる。にもかかわらず、戦後の進歩運動は自陣営、身内への責任追求を行わず「転向問題を見捨てた」ことから、『全貌』などの反動派の雑誌の手で転向の事実が洗われ、批判されることとなった」という状況を踏まえ、「私たちは、進歩派の手になる、徹底的な転向事実の究明を通して、進歩的な運動の組織方法に何かを寄与したい」と述べる〔判沢 1954〕。転向を研究する動機としては、自己の体験もさることながら、この問題を顧みない「進歩派」と、転向が左翼にだけ起こったようにあげつらう「反動派」双方への批判の意図を有し、実践的側面に寄与しようとしていたことが分かる。

また判沢は別の場で、「先人の失敗の経験をよりよく生かす」という目標においては、「転向」と「戦争責任論」を取り上げる考え方は共通しているとも述べている〔思想の科学研究会 1958c: 9〕。

以上のように、転向研の戦中派世代の鶴見と判沢は、戦争体験を自らの内に沈潜させつつ、戦前・戦中の転向の事実を洗うことを通して、年長世代への戦争責任追及と新しい実践戦略の定立を同時に行おうとした。

## 2-2-2 戦後派

### 2-2-2-1 魚津郁夫

『会報』18号には、魚津郁夫が思想の科学研究会内のサークル「記録の方法の会」で1957年4月25日に行った、自伝の報告が掲載された。以下その概略を見る。魚津は自らが、戦時中は子どもだったにもかかわらず、「転向」したと考える理由を以下のように述べ

### 第3章

た。

それ〔転向〕は強制力による、思想もしくは具体的活動の変化として定義される。それは強制力による、権力との思想的対決の抛棄である。とすれば、私は戦時中に権力と思想的に対立したか。否。私は戦時中には少なくとも権力の望む方向に身を置こうと努力を続けていた。この意味では私は決して転向者ではない。しかし私は自分の思想もしくは具体的な行動を、強制力（暴力）によって変更したのだ。この意味では自分を「転向者」だと思う。〔魚津 1957: 8〕

魚津は 1931 年、和歌山県の山間の村に生まれた。その半生は「官僚的生き方」と「庶民的生き方」の間での賭けの連続であったと述べている。すなわち前者は「学校教育の基本的方針に合致し、そしてそれに生き甲斐を感じつつ、上からの統制を行う方向」、後者は「共同体の中に沈んで、学校教育に生理的な次元で抵抗しながら、しかもそれに押し流され時にはこれを利用し、それに満足し、結局は自己という小宇宙にのみ安住していく方向」であった。

魚津は小学生の時は修身教育を「全面的に正しい」と思っていたという。しかし現実の学級は腕力による序列からなり、ひとたび教師がいなくなると教師や天皇を題材に卑猥な話をした。この「学級共同体」（と魚津が呼ぶところのもの）を魚津は嫌悪し優等生 3 人とサークルをつくるが、学級共同体に知られて村八分になる。自分より腕力の序列において「下風に立つ」者とのけんかをけしかけられるなどの嫌がらせに屈し、サークルをつくってから半年後に学級共同体の首領に謝罪しこれに復帰した。魚津は「たまたまやくざな奴が共同体の中核になるような組に生まれた」ためだとして卒業までやりすごすが、この考え方は「我国の転向者達のあるものの気持に通じるものであろう」と書いている。

今は駄目だが、新しい機会に生れ変わったようにやろうという考え方、このような非連続的な時間の観念は、日本人に特有のものではないかと思う。……このような時間の観念、もしくは歴史のとらえ方が、敗戦とともに大多数の知識人が自分の戦時中の言動を忘れて、再び民主主義者として一斉にスタートを切った原因の一つであったろう。

〔魚津 1957: 17〕

卒業後、魚津は修身の教える「完全者」になろうと努力するがでせず、その責を自分の「弱さ」「罪深」さに帰して「倫理人間のミイラ」のようになったと述べる。この自縛から解放したのは田辺中学の歴史教師 K<sup>viii</sup>であった。K 先生は国体の優秀性をあげつらう講義をせず、時に教科書と正反対の評価を下した。しかし「K 先生は必ずしも生徒に人気のある先生ではな」く、「軍事教官が、お前達は天皇のために死ねと説くのに比して、やはり当時の生徒の意識からズレて感じられる点があった」という。

中学校には小学校のような学級共同体はなく、成績の良いものが尊敬され個人尊重の気風もあった。しかしここにも「舎生共同体」と魚津が呼ぶ共同体があった。寄宿舎生は町内から通う生徒に対し言葉のアクセントの違いや生活条件の低さからコンプレックスを持っており、団結が強かった。3 年時に勤労働員が始まり「第一小隊の隊長」として舎生から離れて号令をかけ、先生と並んで造船所へ向かう魚津の行為は、食糧事情の悪さからコンプレックスをさらに強めていた舎生共同体への刺激となり暴力制裁を受けた。その時のことを魚津はこう振り返る。

当時の寄宿舎は軍隊生活のミニチュアであり、上級生からはよくなぐられていたし、学校でも軍事教官にひどくなぐられたこともあった。しかし同級生の一人から、一つの大義名分をかさに着て、一方的になぐられたのは、非常な屈辱であった。しかも他の者達からも、それみたことかというような軽蔑の目をもって見られたことは、耐えられなかった。私は再び顔を上げることが出来なかった。[魚津 1957: 21]

小学校のときとは違って闘志は「簡単にくじかれた」。それはなぜか。「寄宿舎は、家からも、学校からも隔離された共同体であった」からである。「本当の腕力と腕力だけが物を言う」、隔離された閉鎖空間で、魚津は「半ばあきらめ、半ば安住」してゆく。加えて魚津は「やはり自分が悪かったのだ、じぶんが裏切っていたのだという念にとらわれていた」という。

断じて自分が正しいという自信のあるときには、決して転向は起らないと思う。民衆から遊離しているというコンプレックス、そういう心の片隅にある弱みの意識が、強制力をうけたときに心にひろがって来る。そしてその意識が転向へと駆り立て、しかも転向後は、このような意識が、転向を絶えずジャスティファイするように働くのだ。

### 第3章

[魚津 1957: 22]

K先生に同調するところのある自分もまた学校の正統な教育や他の生徒からズレているのではないか。この思いが魚津の第二の「転向」を用意したといえるだろう。

魚津がこの手記を書くまでには敗戦から12年を要している。ここにいたって魚津は、「一方に賭けておきながら、ついに暴力に屈してそれをすて、いま一方に賭け直した」ことへの自己嫌悪は変わらないとしつつ、「官僚的生き方と庶民的生き方のどちらをも否定する賭け」を設定していきたくとした。修身教育のような上から統率しようとする力に抗し、しかも暴力に屈せず、共同体に埋没しない思想の方法はあるのだろうか。魚津が転向研究に求めたものはこのような問いへの答えであったと思われる。

#### 2-2-2-2 横山貞子／高島通敏／しまね・きよし

魚津の「転向」体験が天皇制の、いわば表向きの倫理と、阿諛と屈辱、そして暴力が支配する現実の間での動揺であったとすれば、宗教的道德と現実、「大人たち」と「若い人」の間で、後者に望みを賭ける試みを模索するものもあった。転向研にやや先行して「身の上相談の会」にも参加していた横山貞子は、「めまぐるしい日本の変化の中で育って来た私達の年齢は、あらゆるものに対する不信と反抗とを養われてきた」と「大人たちへの不信」を述べている。そして、「自由な生き方への方向を阻む敵にむかっての共通の闘い」を若い世代としたいとしつつ、彼らの「古い道徳や秩序に対する不感症」ともいうべき「傍若無人の生活態度」に「傷つけられ、反発を感じる」と違和を述べる。横山は、身の上相談が「若い人達の自己改造にいちばん直接の手助けになる」しつつ、それを通して「まず私自身の自己改造をやりたいと意志」していると述べ、とくに自分の育った環境による「ピューリタンの道徳」の支配を逃れようと努力していると述べている [横山 1954]。魚津、横山、そして前章で見た後藤には、敗戦を境とする価値転換に適応する大人への批判的眼差しが共通している。

後藤は、50年代以降の革新運動の方針の混乱に翻弄され傷つきながら自己主張できない若者たちの心性を「戦後派」の「実感」と呼んで、これを尊重すべきことを主張した。実際転向研には、1950年代に入ってから共産党内の主導権争いと相次ぐ方針転換のあおりを受けて、学生運動の挫折の経験を経たメンバーが参加していた。

たとえば高島通敏は、転向研活動初期の1956年に、この研究が「戦前の日本進歩派の



惨めな敗北の記憶」に発しており、その基本的発想が「惨めな敗北を二度と起こさないためにこの敗北の主体的条件を究明すること」にあると述べていた [高島 1956]。しかし高島にとって「敗北の記憶」は戦前のそれに限定されるものではなく、自身の学生運動の挫折の記憶も関与していると思われる。すなわち、高島は 1950 年代前半に参加した学生運動が共産党内の対立を反映して分裂し、自分を「置き去り」にして崩壊していったと後年書いており、この挫折から高島の学問的関心は、原理や体系の追究よりも、原理的には正しいにもかかわらず運動が失敗し続ける原因の究明、「現実をよりよく操作するためにその構造を知る」政治学へと向かったと述べている [高島 1970: 58-59]。転向研の仕事は、高島が専門としてゆく計量政治学と手法を異にするが、原理よりも現実の観察に傾注する高島の研究態度の初発のところに、学生運動の蹉跌と転向研究が近接してあったことは注目に値する。

また、1950 年当時、東京外語大学の「細胞」として活動し、朝鮮戦争が勃発すると反戦学生同盟の委員長を務めたしまね・きよしは、開戦後に強まった党への弾圧と、コミンフォルム批判をうけた分派闘争の「ショック」を回顧して、以下のように述べている。

弾圧のために、数名の党員が脱落していった。(略) 身近の党員の転向を見て、わたし自身のなかに秘められている、転向への志向を自覚しないわけにはいかなかった。[しまね 1969: 69]

しまねは「所感派」にとどまるが、その理由は「党を割らない」ということ判断によるものだった。他方、旧制中学で同窓の旧友たちは「国際派」を支持するようになり、しまねは孤立する。絶交とはならなかったが「各派閥の上部組織の暗闇を反映して、それまでの楽しい付き合いではなくなった」[しまね 1969]。しまねは 20 年近く経ってこの時代を回顧するも、「書くことがたくさんあると思ったが、実際に書きだしてみると思うように書けない」、「思想化がまだできていない」と、語りがたさを吐露している。それほどに、共産党の分裂が学生に与えた衝撃と傷は大きかったことが察せられる。

以上、鶴見と、他メンバーの戦中・戦後の体験を見た。それぞれの体験は異なるが、敗戦を境とする価値転換に伴って（再び）変節する形で順応した年長者に対する批判的眼差しは共通している。さらに鶴見と魚津は閉鎖空間で受ける強制力の重みを知るゆえに自らも「転向者」の意識をもっており、そこから逃れ出るための思想、哲学を必要としていた。

### 第3章

横山、魚津は倫理の縛りからの自らの解放も模索していた。横山と対照的に判沢は、戦中に自身の戦争批判の態度を支えたはずの信仰の喪失の意味を問い、同時に、判沢の戦争批判を尊重しつつ軍人の使命に徹した人物の思想の深さに対峙する。他方、50年代初めの党への弾圧と、分派闘争による学生運動の挫折の経験を持つ者は、自らの内に転向への志向を抱え、あるいはマルクス主義の理論に替わる現実を捉える枠組を求めていたが、当時は多くは語られていない。こうして、様々な戦中、敗戦体験、戦後体験が交錯し、語りも含めてそれぞれのうちで抱えられながら、戦前・戦中のファシズムに対する抵抗と屈服の多様な軌跡の検証が、これからの実践に資するし、また必要であるというアクチュアルな認識に支えられて、転向研究が進められていく。

#### 3. 『共同研究 転向』各論文の検討

以上の個々人の体験を踏まえ、『転向』上巻の論文を検証する。目次は以下の通りである。

序言 転向の共同研究について（鶴見俊輔）

##### 第1篇 戦前

第1章 昭和8年を中心とする転向の状況（藤田省三）

##### 第2章 急進主義者

第1節 前期新人会員——赤松克麿・麻生久（判沢弘，佐貫惣悦）

第2節 後期新人会員——林房雄・大宅壮一（鶴見俊輔）

第3節 日本共産党労働者派——水野成夫（しまね・きよし）

第4節 一国社会主義者——佐野学・鍋山貞親（高島通敏）

第5節 ある大衆運動家——タカクラテル（魚津郁夫）

第6節 ある農民文学者——島木健作（西崎京子）

第7節 あるマルクス主義学者——河上肇（藤田省三）

第8節 日本浪漫派——亀井勝一郎（山領健二）

第9節 虚無主義の形成——埴谷雄高（鶴見俊輔）

##### 第3章 自由主義者

第1節 ある自由主義ジャーナリスト——長谷川如是閑（山領健二）

第2節 新興仏教青年同盟——妹尾義郎（しまね・きよし）

## 第3節 ある自由主義左派の知識人——三木清（魚津郁夫）

まず鶴見による序言「転向の共同研究について」で彼らの立場と方法を確認する。

## 3-1 立場と方法（鶴見俊輔）

鶴見は転向を研究するにあたっての自らの立場を次のように表明する。

私たちは、まず第一に、一般的なカテゴリーとしての転向そのものが悪であるとは考えない。むしろ、転向の仕方、その個々の例における個性的な展開の中に、より善い方向、より悪い方向が選ばれるものとする。[鶴見 1959a: 3]

転向を共産主義者に特有の現象とせず、したがって断罪すべき敗北の象徴として見ないという視点は、自分たちも転向者であるとの自覚から導き出された。転向は共産党をはじめとする急進主義者のみの問題ではなく、全体主義に身を委ねた点では自由主義者、保守主義者にも責任があるはずである。自分たちもその時はまだ公的な活動をしていなかったから「転向者」としての訴追を免れているに過ぎない。この自覚は、従来の転向の用法を破る、より広汎な定義づけを必要とした。そこで鶴見らは、転向を「権力によって強制されたためにおこる思想の変化」と定義し、被強制性と自発性の絡み合いとして捉える。これにより、時代・主義の制約を超えた、より一般的・普遍的な概念として転向を取り扱うことが可能になったといえる。

鶴見らが転向を研究する目的は、転向に至った道筋と他のあり得た可能性を明らかにすることによって、これを本人と研究者も含めた「公共の遺産」にすることにあつた。そのため「戦前の転向を追体験するという立場」をとり、その補助手段として私的体験からの類推を採用した。転向を遺産化する、すなわち転向を強いられる類似の状況に直面したときにこれをある程度まで操作可能にするためには、まず第一に転向を規範的にではなく事実として認めることが必要である。そのためには転向を引いた位置から観照するのではなく、ある状況で働いた強制力と思考への影響を実感しながらルートを検証することが有効であろう。

ここで注目されるのは、鶴見らが私的体験という極めて情感に密着したものを媒介とし

### 第3章

ながら、操作可能な認識のレベルに転向体験を引き上げようとしていることである。ここには科学と思想をめぐる逆説的な考え方が含まれている。すなわち通常、科学的なプロセスにあつては、対象を客観的に観察するためにある程度の距離をとる。そこには個々人の主観や個別の状況に左右されない科学的「真理」があるとの前提が働いており、これに到達するために極力主観が排される。しかし鶴見の思想史の方法における研究主体と対象との関係はこれとは異なり、むしろ転向者の置かれた状況に自らの体験ごと寄り添うことによって、ともすれば湧きがちな倫理的批判を削ぎ落としながら転向を事実として見極め、それを可能にした社会的心理的な条件をつかみ出そうとするのである。この逆説性は、彼らが単に思想史上の事実を明確にしようとしたのみならず、そこから自らの思想と行動への実践倫理を取り出そうとしたことからくる必然の要請であったともいえよう。

しかしこの方法には難点もあった。「追体験の試み」がその甘さゆえに前の世代、特に戦中の進歩派における転向を体験した年長者の心情を害するのではないかという点である。

私たちに「転向」のいがさの実感がないために、私たちの問題のあつかいかたが、前代の人々を怒らしてしまう場合も多いだろう。戦後派の若い者には転向問題をあつかう資格がない、という意見もすでに出ている。このような感じ方に事実上の根拠があるにせよ、私たちの目ざすべき方向は、転向体験のまったくない、一歳の赤ん坊、あるいはこれから生れてくる子供にも、転向問題の重みをわかってもらうということなのだ。(略) 自分たちのまったく経験しなかった重要な体験にたいして追体験するように努力することが思想史としての正統的な方法なのだ…… [鶴見 1959a: 5]

私的体験の相違による追体験の限界は踏まえつつ「追体験するように努力する」こと、前代の体験に身を寄せてこれを継承し現代と後代のために遺産化しようとする努力、その実践こそが思想史の「正統的な方法」であるとする主張は、共産党の歴史解釈と主体のあり方に対するアンチテーゼであったろう。その立場をより明確に示したのは、第1章の藤田省三による状況概説「昭和八年を中心とする転向の状況」である。

#### 3-2 状況概説（藤田省三）

藤田はまず、転向の思想史における最初の問題として福本イズムを取り上げた。その特徴は①「ズルズルベッタリの状況追従主義からの切断」、②「超越主義」、③「一元論的批

判主義・分裂主義」であるとする。①については「日本的共感」を排除しようとした自然主義の上に理論と組織を加えたのではなく、自然主義に代えて「理論主義」と「組織主義」を導入したために組織として社会から切れた点を批判した。②は「自己の超越を含めぬ日本からの超越論」であり、理論が学習によって担われる「学習主義」は左翼運動の指導者が一高、東大といった「制度通過型」のインテリであったことに起因し、「エピゴーネンの集団」しか生まれないとした。③によって「常識」を超越しようとした福本イズムはついに「常識」を無視するに至った」とする。彼らが対決しようとした日本の「常識」とは、「明確に規則化されていない儀式」であり「世間の習慣に合わせることによってコモン・マンとして承認される」ことであると藤田は言う。天皇制ファシズムはこれを巧みに利用して日本的共感を拡大再生産することに成功したのに対し、左翼陣営は常識と対決せず敗れることに主力を注いだ結果、投獄、家族の愛情という現実に触れると党から家族、村、そして国家へ、理論から実感へと転向してしまうと転向のメカニズムを解き明かした。

藤田たちが共同研究を進めていた 1950 年代、共産党では所感派と国際派が厳しく対立していた。藤田は共産党の体質の原点を「福本イズムの側面」、すなわち「状況＝大衆」から自らを切断し理論闘争に明け暮れる知識人の典型にみた。その批判は自分にも向けられている。

そのような転向の路線は、加藤弘之や徳富蘇峰を先駆として、近代日本における制度通過型の中小秀才の多くに見られる典型的な生き方である。明治以来の日本の浅く早く回転する「進歩」のコースは、これら中小秀才によって担われてきたのである。その結果、日本人の進歩観や自由観が大きな歪みを受けて、根本のところでは戦闘性を失っているのだ。したがって、私たちすべての制度通過型中小秀才は、戦争責任がない場合でもすくなくとも日本思想歪曲の責任をとらねばならない。[藤田 1959a: 46]

理論闘争による主導権争いに汲々とし、現実を直視せざるを得ない状況に晒されると学問・運動・思想ごと抛棄してしまうことを避け、「知識を機能させる仕方」を追求するため、藤田は過去の知識人の転向に着目する。以下藤田によってとり出された転向の類型を見よう。

小林杜人は「感性を軸にした日本のまじめ主義」の典型であり、外部世界と内部世界が分裂なく直通しているから、偽装転向や内心の転向を中途半端に止める力を持っていない

### 第3章

とする。

佐野学、鍋山貞親は状況によって態度が必然的に決定される「状況流出主義」で、自分の中に不動の地点がないので状況を操作することができず、「小ブルジョア」「大衆」を直截に社会的階層としての小市民や大衆に結びつけてしまう「実体的な大衆主義、小ブルジョア排除主義」であるとする。ある一つの視点から見た思想的諸立場が相互に重なり合うことができるという「思想把握の浮動性」（マンハイム）を認めないのは、「日本の左翼運動全般の自己批判すべき悪い思想的伝統」であり、「原則の名のもとに放恣な思想操作」を許してしまうと指摘した。

思想把握の浮動性を許さない思考は、不動のシンボルとしての佐野と鍋山の転向を党の敗北と捉え、さらにマルクス主義運動団体の敗北、原理一般の敗北としてしまう。藤田はここに「天皇制ニヒル・リベラリズム」が生まれたという。これはあくなき探求を続けるゆえのニヒリズムでなく「体系主義への欲求を前提としそれを放棄するところに生まれたもの」であり、新たな主義を探さないというだけで、天皇制理念の否定はしない。天皇制ニヒル・リベラリストの群は翼賛体制に向けて流れて行き、それを基盤に支配体制は「ニヒル・リベラリズムの親玉」である「重臣」による政府をつくって、状況追従のもと戦争への道が開かれたとする。

それでは真の自由主義者はどうであったか。主だった自由主義者のほとんどが帝大教授であったことに、藤田は自由主義者の劣勢を見る。弟子の多くは「支配的地位に吸収されていく運命に従順にしたがった」のであり、自由主義の抵抗力が集団的に存在していなかったことが統一戦線結成の可能性を狭めたと指摘する。勇気ある自由主義者は「沈黙への転向」を行ったが、長谷川如是閑は反ドイツ＝反ナチ的ファッションの線を貫きながらも日本主義の効用を説くことで大きく後退してしまったとした。統一行動の態度は羽仁五郎のような「大個人」の中で生かされるしかなく、これに近い線として清水幾太郎、山川均、青野季吉が挙げられている。

埴谷雄高、椎名麟三は「転向点に停止」した「転向の非転向」の例であるとされた。彼らが救いを天皇制社会のモラルの中に求めず、これを現世超越的かつ内面的救い（椎名は死とキリスト教、埴谷は東洋の超越者のイメージ）に発見したことは、農本主義者が反省＝謝罪の公示によって外部社会からの救いを求めたのと対蹠的であるとする。椎名の徹底懐疑主義ともいえる態度には「共産党が検討不必要な模範としている非転向者の思想に対する非常にひそやかな批判が含まれている」と評価した。彼らが転向しながら日本的世界



観に復帰・没入せず踏み止まったエネルギーは何か。藤田は椎名の場合は「転職専門家」、  
「社会からの脱落者」であることが「浮浪ニヒリズム」を可能にし、埴谷の場合には制度  
に依存せず、自己の観念力の試行錯誤を行うことを生活と考える思考が基軸にあったから、  
運動から自分の基軸に還ることによりアナーキズムを獲得できたのだとする。

以上のように藤田は、転向の条件と決定的な転向に至らず踏み止まるための条件を示し  
たが、純粋な非転向については分析していない。この点につき藤田は、共産党には宮本顕  
治のように調書さえ取らせなかったという点で「ほとんど完全に近い非転向者」もいるが、  
それよりも計画的ないし偶然的な条件操作を行うことによって転向を防いだ非転向者が多  
いとして、次のように述べた。

……戦後そのような非転向の条件についての検討は、行われたことがない。この操作  
を行えば、非転向をある程度まで技術化できるから、今後私たちが大量に非転向に近  
いコースを歩くことができるようになるかも知れないのだ。そういう操作を行わない  
ときには、椎名流にいうと、非転向者はみんな現実の自分が個人として神かあるいは  
死に近い存在だと考えているということになる。これでは「現実」とか「現世」とか  
「政治的社会」とかの意味は分らないことになる。運動指導者として失格となるでは  
ないか。[藤田 1959a: 64]

ここには、共産党が非転向・転向の問題を個人倫理の問題に縮減し、崇拜と断罪の固定  
した関係しか生み出さないことに対する藤田の痛烈な批判意識を見ることができる。

藤田が上巻に書いたもう1本の論文「あるマルクス主義学者—河上肇」（第2章第7節）  
では、河上が獄中においてもマルクス主義を捨てなかった理由として、「実生活上の種々の  
直接間接の支え」を重視した。すなわち河上が前勅任官教授であることは過酷な取り調べ  
を免れさせ、父が戸長という恵まれた家柄は家計を保障し家族の愛情を保たせた。マルク  
ス主義が階級・職業と人間の愛憎を同一化するのに対し、河上はパーソナルな愛情・好意  
を否定せず、それは「敵階級」の裁判長や判事にも適用される。藤田は、河上が人間世界  
を距離をもって観察する場合には唯物論がどこまでも妥当するとしながら、人間の内面世  
界にあっては愛情や宗教的真理の領域を認めることを、科学と宗教の「統一的把握」にお  
いて高く評価した。政治的实践から引くことは後退であることを認め、強い罪の意識を持  
ちながら『資本論』を翻訳することで、転向後の義務と課題を転向前との連絡上に立てた

## 第3章

態度を、「動的な非転向の体系」とであると評している。

藤田の状況論は転向の条件を割り出し、純粋な非転向以外の仕方でもそこから抜け出る道筋を照らし出した。党の思想上の悪しき伝統を直視したことは、藤田の党に対する批判の視点を深めつつそこからの離脱を用意した。藤田はポポロ事件を機に入党したが、安保闘争の際に谷川雁らと連名で出した声明「さしあたってこれだけは」がもとで党から査問を受け、すでに脱党届を出していたが「クビ」すなわち除名処分になった〔藤田・岡本 1998a; 1998b; 鶴見 2005: 168-169〕。しかしこの時点で藤田は既に、党から離れても弁証法を保持するという点で非転向を貫く方法を得ていたと言えよう。

『転向』が藤田の文章を本の「顔」ともいべき各巻の冒頭に付した理由は何だったのだろうか。藤田の転向研参加には異論も出たという〔鶴見編 2005: 166〕。しかし、『転向』が転向者個人への倫理的批判という従来の評価を突き抜けようとする意図を有する以上、その評価を握っている日本共産党、日本のマルクス主義の批判的考察は必須であり、これを他の主義との比較相対において、かつその欠点を自らの問題としての痛みをもって書ける者は、藤田以外にはあり得なかったと思われる。藤田の文章は、反権力のベクトルにおいて共産党と共有できる部分がありながらも距離をとらざるを得ない、『転向』の立ち位置を象徴的に示している。

### 3-3 各論

藤田によって示された、転向の条件と、そこから抜け出る筋道は、個々のケースにおいてより具体的に検討された。

#### 3-3-1 鶴見俊輔「虚無主義の形成——埴谷雄高」

すでに藤田により示唆された埴谷の「転向の非転向」の独自性と共産党批判の陰影は、鶴見の論文「虚無主義の形成——埴谷雄高」（第2章第9節）でさらに明らかとなる。

この論文は10本余りある鶴見の埴谷論<sup>ix</sup>のうち最初のものである。鶴見は埴谷雄高の転向は「一回かぎりの自己の転向に固執し、この転向を自己の立場によって記述し、評価することから、逆に日本の正史および前衛党史の転向観の中にふくまれる哲学を全面にわたって批判しようとする試み」として重要であり、その転向体験は「薔薇、屈辱、自同律」（「不合理ゆえに吾信ず」という3つの単語で定着されているとした。「薔薇」とはバラ色のイリュージョンとしての共産党参加、「屈辱」とは脱落としての転向、「自同律」とは

唯一確実な「自分は自分である」という論理だが、これさえも疑わざるをえず「自同律の不快」、すなわち虚無主義に至ったとする。

転向体験は埴谷の思想と表現にどのような影響を与えたのだろうか。この点につき鶴見は、刑務所での転向の過程で、埴谷は青年共産黨員としての完全な信仰主義から徹底的懐疑主義へ転換し、関心は現実の変革から現実について考える考えへ、政治・科学から文学・哲学へと移動したとする。とりわけ「古い」と見なしていたカントの「仮象の論理学」（先験的弁証論）に影響をうけ、「偽問題を作る領域を描き続けること」を自らのライフワークとして選び直した。『死霊』はこれを実践したメタロジックの書であるとする。そこには倫理的理想としての必然からの逸脱が、離脱後のメッセージを辿ること、すなわち現実の歴史の中に生かされなかった可能性を記述する反事実的条件命題で表され、それらの諸可能性を含めて個別性の総和として受けとめる「慈悲の倫理」が働いているとした。それは政治行動の非政治化、敵を味方に転化する条件、方式の研究であり、現実には適合可能であると指摘する。また作品中の「化石」、「石」など硬質なモチーフと「風」、「ぐにゃぐにゃ入道」といった捉えどころのないものの対比から、埴谷の人格は公式体系精神としての自我と逸脱精神としての自我の二重構造を持っており、日本の伝統にも同時代人にも結びつくことなく「一つの点」として自分を置くという「稀有の難事業」をなし得たのは、この「精神分裂病的気質」に負うところが大きいとした。

このような鶴見による評価に対し埴谷自身はどのような感想を持っていたのだろうか。冒頭で紹介した座談会で埴谷は、「データをよく集めて僕自身思いがけず驚いてしまったほど、実に克明にまた丁寧に分析」しているとしつつ、後代の者が書かれたものを整理して無理につなごうとすると「飛躍」が生じてくるが、善意と悪意の差が生じる基準は「スターリン批判直後の現時点」にあるとし、「一種の雰囲気の中における論理」とであると評した〔亀井・埴谷・本多 1959〕。はたして時代の雰囲気が鶴見をして埴谷に好意的な評価をさせたのだろうか。たしかに『転向』の転向観を世に問えた理由、読者に受け入れられた理由には、スターリン批判以降の共産党の正統性の揺らぎ、正当性の低下が作用したかもしれない。しかし鶴見の転向研究の発想の根は戦中にあり、かつその意図が共産党批判以上の枠を持っていること、また時勢に乗せずに判断を下そうとしたことは既述のとおりである。むしろ鶴見の埴谷論が「善意の解釈」をまとっているとするれば、鶴見の追体験という方法に起因するのであろう。鶴見は、戦中から引きずる「もし——」の問いを保持していくことを、そのまま自分の哲学上・政治上の課題とすることを、埴谷論を書くことを通し

### 第3章

て定着させたといえよう。

#### 3-3-2 その他の論文

急進主義者を扱った第2章のうち、判沢弘と佐貫惣悦による第1節「前期新人会員——赤松克麿・麻生久」の冒頭では、新人会について論じる意義につき、「彼らの日本社会変革のためのたたかいが、どの程度に有効であり、または有効でなかったのか」の検討は『革命』と『知識階級』という課題として、今後も引き続き重要な課題である」と述べて、そのアクチュアリティを強調する。

新人会を創立した赤松克麿は「透徹せる秀才」であり、時代を見通す眼のたしかさと、適応の素早さを有している。赤松の共産主義から右翼社会民主主義、国家社会主義、日本主義、そして東洋主義へのコースは、「状況追随主義」において一貫している。その出自（祖父が西本願寺の重鎮、赤松連城）から天皇に「親愛観」を抱く赤松は、天皇を「民族の代表者」としてつねに階級闘争の外に置き、軍隊を天皇の股肱と見做した。また、上層階級出身者として「くに」を展望する志向と、仏教を通じた文化伝統が重なりあって、赤松の中に「祖国」への魅力ある強烈な観念を醸成し、満州事変前後にはついに民族意識が階級意識を凌駕する。赤松はナチスが政権をとる2年前にすでにヒトラーのファシズムを賞賛しているが、そこには、民衆に先立って順応していく「先頭的状況追随主義者」としての赤松の本領があると指摘する。しかし敗戦を機に国家への信頼が赤松の中で地に落ち、アーナーキスティックになっていく。また、新人会に共通の性格であるところの観念的ストイシズムが、時代に背を向ける批評精神・反逆精神を生まず、全体主義・ファシズムと親和的であると指摘している。

麻生久は、天皇の威光を借用し、軍の武力を利用しつつ、無産階級を主体とする革命へのプランを設定したが、執筆者たちは、麻生が軍の反動性を認識することにおいて甘かったと指摘する。そして、農村中層地主の子弟として高等教育をうけることのできたインテリの「優越意識」とそれと裏腹な「罪障感」を動機とする社会運動の果てに、「日本の農村の救いようもない貧しさへの絶望感」から軍人との提携へと赴いたのではないかと推測する。その時麻生は、「無産階級の意図」を秘めながら「千番に一番の兼ね合いの気ぐみで軍との取引に立上ったのか」あるいは「軍のファシズム化の勢いに捲き込まれ、軍の音頭に歩調を揃えつつある自分がかすかに意識しながら（略）目標は『無産階級解放』にあるのだと、自己自身に思い込ませるにいたった自己欺瞞にあったのか」と問い、見分けること

は「微妙な問題」であるとしながら、「すくなくとも麻生自身は最後まで前者であると思いつ込んでいた」とする。論考は最後に、「戦中派たる筆者に湧ききたる感懐は、合法無産政党—社会民主主義政党として、これ以外に有効な反戦の道はあり得なかったのか?」「現在の『社会党』が、かつての麻生らの失敗した『無産政党』運動から、いったい何程のことを学びとっているのでしょうか?」と問うて閉じられている。

ここには冒頭の意義と照応して、現在の問題として転向を取り上げる視点が貫かれているが、偽装転向と転向の分かれ目の微妙さ、本人は「偽装」であるとしても現実的な有効な成果をもたらすことの困難が描かれているといえよう。

鶴見俊輔による第2節「後期新人会員——林房雄・大宅壮一」では林房雄が共産主義—ファシズム—自由主義の「二つのサイクル」の転向の典型とされる。日本では「自由主義・人道主義・芸術至上主義・虚無主義はきわめてほそぼそとした柱でしかない」ゆえに、これにつかまって時代の逆コースに対し身もちこたえることは困難であり、共産主義—自由主義の一サイクルの転向例は極めて少ないことが指摘された。

大宅壮一は前衛的知識人から傍観的知識人への転向、日本の新聞人・報道人の転向の典型であり、「日本の大衆と歩むなし崩しの転向」であるとされる。大宅の「天候観測の方法」は目の前の出来事のすぐ周りの状況を見る程度で直ちに診断を下す。状況への適応は時々刻々の転向をもたらすようにも見えるが、大宅の場合は自分の中に「大衆主義」と「反偽善主義」という原理を持っているとした。すなわち米騒動を見て「民衆の頭の中に自然発生的にわくもやもやとした情念と思想」を重視するようになったことは、「学問と新聞記事との中間領域の専門家としての独自の立脚点」をもたらし、「反偽善主義」は教育勅語に似たものに拡大使用され、「何々主義反対」とならないところが戦後日本の大衆の心構えに近いとする。大宅のケースは、大衆運動と手を切ってマスコミの中に住み、「職業の可能性を考慮することによって決定的な転向をさけ」た例であり、なし崩しであることを意識的に行えば「完全な非転向の一線をつくる」ことが可能であると指摘された。

しまね・きよしによる第3節「日本共産党労働者派——水野成夫」は、藤田に加え現役の共産党員によるもう一つの党批判となっている。批判の要点は、党が「主要闘争目標であった天皇制を理論として明確に把握しなかった」点におかれた。すなわち、天皇制の問題を君主制一般、さらには経済的階級所属の問題に単純化して政治的特質を全く看過したために、皇室が資本家のうち最大でないことで「曖昧な疑惑」が生じ、佐野学と鍋山貞親においてテーゼは「決定的誤謬」とされ転向に及んだとする。労働者派に対する日本共産



### 第3章

党の批判は「客観的にはすべて正しい」としつつ、日本の君主制の特殊性を考慮して自前の革命を構想した「労働者派もその党批判の正しい一面を持っていた」とした。

魚津郁夫による第5節「ある大衆運動家——タカクラテル」は、何度も弾圧を受けながら大衆解放の情熱を失わなかったタカクラが、当局を欺くつもりでした偽装転向は、「民族主義」、「生産力理論」と結びつくことで、結果的にファシズム体制に奉仕することとなり挫折したとする。

山領健二による第8節「日本浪漫派——亀井勝一郎」は、亀井が、転向は外的動機による政治的屈伏の問題ではないとして内面的現実の反省を唱えた点を捉え、これ自体が転向の方法になっていると指摘する。すなわち、亀井の転向ならびに転向観においては、外的動機の排除により、権力と自己との内的緊張が否定される。こうして、最も内面的なものを強調するところから出発した日本浪漫派は、その内面性を次第に喪失していったとした。私的な心情を無限大に拡張する論理としての「無分別の法」と「節度の美学」は、天皇制ファシズムにおける「欲望ナチュラリズム」と「無責任の体系」に対応しているとする。

同じく山領健二による第3章第1節「ある自由主義ジャーナリスト——長谷川如是閑」では、如是閑は封建より近代へという大状況においては「非転向」であるものの、転向は行われたとした。それは「歴史は繰り返す」という形の「状況の一般化」、「そのことは個人にある如く国民にもある」という形での「主体の一般化」に関わっていたとする。

魚津郁夫による第3節「ある自由主義者左派の知識人——三木清」は、三木がマルクス主義と他の哲学との関連を明らかにし、当時孤立状態にあったマルクス主義に学生、知識人を近づける大きな役割を果たしたこと、「アンビギュアス（多義的）」なスタイルで評論活動続けファシズムに対して柔軟な抵抗を続けたことを評価した。だが、民族主義的全体主義と自由主義を止揚して三木が生み出そうとした「新しい全体主義」は、具体的な手続きの構想を欠き、抽象的なレベルで折衷していく傾向に陥ったと指摘する。また多義的なスタイルは、戦争協力者であると目される一方、超国家主義者からは自由主義思想として絶えず攻撃を受けた。三木の職能に対する使命感に学びたいとしつつ、誠実だけが主体性を保つための十分条件ではないとする。

以上、上巻を通して見ると、知識人の転向の条件が浮び上ってくる。すなわち、東大新人会に代表される制度通過型・官学知識人は、指導者意識ゆえにもともと状況に密着し易い性向を持つ。しかし学習主義・権威主義でもあるので、社会と切れて理論を追求し、実体主義によるシンボルの連結は公式を生んで、一つの公式が行き詰ると対極の公式に反転



する。まじめ・善意であることは国の本音と建前を見分けられず「八紘一宇」の理念に巻き込まれ、失敗と知ると懺悔に終始して再起のエネルギーを喪失し、または反省して次の主義に「誠実に」邁進する。そこに責任意識はない。誠実に学問しても、自分の仕事が状況の中で持つ意味の推測を欠くと、思わぬ圧力、攻撃を被る。自分のスタイルを持つ場合でも、「国民」「民族」「合理化」など思考の準拠が国家権力の設定と重なる場合、権力側の枠のずらしに対応して無自覚・なし崩しの転向が起きる危険性がある。

以上の条件をふまえて、『転向』で示された転向をよりよく通り抜けるための道筋とは以下のようなものだろう。権威を借りた観念的な理論に頼らず、国家の理念枠にはまることを警戒しながら自分の中の原理を探す。普遍理念の堅持と生命を捨てることも辞さない完全・純粋な非転向は目指されない。ストイック、真面目、善意ゆえの転向を防ぐべく、ある種の狡猾さとしたたかさをもって状況ぐるみ自分を観察し、人間的な愛情とパーソナルな生活の領域を守って、自分の職能において可能なことを推し測りながら進む。このような道筋は鶴見たちのその後の実践にどのような影響を及ぼしたのだろうか。

#### 4. おわりに

転向研の転向研究は、メンバーそれぞれの、強制力と自分の思想とのせめぎ合いによる未決の問いと、共産党を核とする運動の戦前の失敗と戦後の挫折、体制の変化により主義を鞍替えする政治家、知識人、より大きくは大人たちへの抜き難い不信に端を発している。体験は世代と個々人により異なりながらも重なり合っていた。彼ら自身の体験は人格の統一性を妨げるほどの変節ではなかったかもしれない。しかし、再び生命や生活を脅かす圧力を国家からかけられた場合にどうするのか。戦中に積極的に戦争に加担し、しかも戦後は占領軍の威を笠に民主主義の旗を振った政治家が再び権力の座につく中、彼らはそれらの人々の変節の責任を追及するとともに、圧力に抗するためのプログラムを用意しておかねばならないとの危機感をもっていた。反国家勢力としては共産党があったが、その歴史法則に制約された主体のあり方は彼らに十分な答えを与えなかった。『転向』は思想史研究の書であるとともに実践哲学の書であり、マルクス主義の歴史哲学に代わる新しい思想史への模索でもあった。

1960年5月、新安保条約の強行採決に際し思想の科学研究会は「国民に対してと同時に自己の行為とその結果に対して責任をもつ新しい政府が生まれること」を要求する声明

### 第3章

を出す<sup>x</sup>。「声明理由」では「このような事態を黙過することはさまざまな思想の多角的交流の中からみのある成果をえようというわれわれの会の運動精神と原理的に矛盾し、会の存立意義を失わせるもの」に他ならないと述べた〔思想の科学研究会 1960a〕。

『思想の科学』同年7月号の論考「根もとからの民主主義」で鶴見は、「私の中をたくみにくだってゆけば国家をも、世界国家をも批判し得る原理があるということへの信頼」に基く「無党無派の市民革命」を提唱した。日本の憲法が市民の権利を保証して私生活を享受できるようにつくられていること、通常では国家主権と不可分とされている軍事力を持つことを禁じていることに着目し、「すでに与えられている憲法を守れという要求」を運動の根幹に据えた。これは「与えられた市民制度をもう一度自分たちのものとして認める」ための「新しい市民革命」であり、「憲法にあるような国家をひとまず実現するために努力する」ことをとおして国家批判の運動に達する「資本主義か社会主義かを主要な争点としない、折衷主義のプログラム」であるとする。

一人一人が自分の中に潜っていくことにより権力を見返す原理を得て、しかも「国家を見返す私」という原理そのものでなく、このような原理があるとの「信頼」を運動の根拠にすること、国家の強制力のうち最も直接的物理的な軍事力を抜こうという志向、既存の主義に拠るのでなく現状に照らして組み合わせの可能性を探る折衷主義、知識人でありながら個々の生活のパーソナリズムにおいて大衆と共通の基盤を得ようとする「市民」という存在様式、そのいずれもが『転向』で示された道筋に導き出された実践倫理になっている。

同年6月に結成され、鶴見はじめ判沢、安田、後藤、横山、松尾、高畠ら転向研メンバーが参加した「声なき声の会」のデモでは、安田作詩による「市民の皆さんいっしょに歩きましょう」という文言に始まるビラが配られた。そこには、「五分でも百米でもいっしょに歩きましょう」、「仕事は毎日忙しいし、その上デモに参加するなんて気はずかしいと思うけれど」、「不当な政治に抗議する意志があることをいっしょに歩いて静かに示しましょう」などの文言が続けられている〔思想の科学研究会 1960b〕。ここで目指された運動のかたちは、組織に属することを条件とせず、一人一人の市民が職と生活を守りながら、それぞれの意志と判断により可能な範囲で加わることのできる横並びのデモである。

『転向』が明らかにした理論信仰の問題は、理論そのものというよりも知識人＝理論が駄目だからその反対の大衆＝実感に行くという公式の対立構造にこそある。そこに転向の陥穽があった。これに対し鶴見の「無党無派の市民革命」、「折衷主義のプログラム」の主張と「声なき声の会」のデモのありようは、資本主義と共産主義、正統と異端、知識人と

大衆といった、左翼主義陣営内で自明とされてきた、運動目的と主体における二分法の構造自体をぼやかそうとする。知識人であっても前衛でなく、自分の職分を守って大衆と切れつつ大衆に寄り添う、中間的で折衷的な存在様式こそ、彼らが転向研究から得た実践的な回答であったろう。その曖昧な立ち位置は年長の進歩主義者からは弱く徹底していないと映ったが、彼らは個々人さまざまな大衆への同伴の仕方、距離の取り方を守ることにこそ賭けた。

彼らの政治的実践の場は思想の科学研究会外にあった。先の声明を研究会名で出すことには反対意見があり<sup>xi</sup>、思想運動としての状況への関わりの難しさを窺わせる。「声なき声の会」には多くの会員が参加したが、思想の科学研究会と同化することはなかった。にもかかわらず彼らがそれ以降も思想の科学研究会の会員であり続けたのはなぜだろうか。それは彼らにとって政治的な立場の相違そのものが自由の条件であったからだ。折衷主義は既存の主義の対立を無化する一種の弁証法であり、多元主義はその前提となる。「思想の科学」の多元主義は、「除名が行われたことがない、という事実によって、かろうじて今日まで」保たれているという〔鶴見 2009: 6〕。自由の弁証法ともいべき多元主義と折衷主義は、除名により「正統」を保ち、歴史の発展を自明の理として自らの前衛の地位を疑わない共産党へのアンチテーゼであったろう。国家による強制力が強く働いていた社会に生きた実感と、そうでない社会への希求において両者は重なる部分を持ちながら、共産党の「真理」の独占は目指す社会の差異を包み込むような実践上の連帯を困難にした。

権力による圧迫のありようは戦後 60 年余、『転向』から半世紀の間に変容した。しかし社会では様々な差異から絶えず「対立」が現前し、主義主張の相違により個人が排除される危険性は低下していない。自由への信頼を基盤に据え人間と社会の新しいあり方を模索した試みとして、『転向』は今も多くの示唆を与えてくれる。

---

<sup>i</sup> 本多はこの対談ののち、『思想』の書評で『転向』の最大の特徴は「倫理の脱色」と「革命の脱色」であると指摘した。「日本の自由主義者たちの『状況追随主義』をとらえる道をひらいた」ことを肯定的に評価しながら、「この本の執筆者のうちには、日本人というものが最近わかりかけてきて、面白くてたまらぬという趣きの人がある。それが自他を活気づけ、この研究を活気あるものにしていくという印象である」と、執筆者と「日本人」との距離にやや違和感を示し、「やはり『革命の脱色』という一点に問題が残ると思う。(略) 革命をテーマとする転向論が存在を主張するはずである。それとこれとは別々の道歩んで足れりとするべきか。それとも同心の大円と小円として重ね合わさるべきか。」と問うた。〔本多 1959 = 1964〕

### 第3章

- 
- ii 「東京のこれら二つのサークル〔「転向」と「群像づくり」研究サークル〕は、十一月に一回宛、東京工大鶴見研究室で会合を持ちました。」〔判沢 1954: 3〕
- iii 「群像づくりの会」は京都を拠点に 1953 年より活動してきた「列伝の会」の東京版と見ることができる。「列伝の会」の仕事は 1955 年 6 月の河出書房新書『民衆の座』にまとめられている。東京の「群像づくりの会」は転向研と同時期に活動をスタートさせ、鶴見の研究室で転向研と交互に隔週行われた。判沢の報告によると、1954 年 4 月 17 日の研究会には上坂冬子がよばれて、のちに中央公論社版の『思想の科学』に「職場の群像」として発表される作品が発表されるなどしているが、メンバーは後藤宏行、魚津郁夫、畑中幸子、横山貞子、松尾紀子、片桐譲、片桐庸子、判沢、鶴見と〔判沢 1955〕、転向研とほぼ重複している。『民衆の座』には鶴見と判沢の論考も入っており、列伝の会の成果がまとまったのを機に、東京では転向研究の方に力が入っていたものと推測される。
- iv 1954 年末および 1945 年末時点での年齢を記した。
- v さらに中巻で秋山清、下巻で大野力、松沢弘陽、白鳥邦夫、中内敏夫、原芳男、橋川文三が加わる。
- vi 使用例は巻末添付の資料 1, p.29 を参照。山領健二氏所蔵の資料にはカード(出典: 1945～1946 年の『毎日新聞』および『アカハタ』、担当: 鶴見・山領)、年表(まえがき、昭和 6 年・12 年・16 年を中心とするもの。昭和 20 年を中心とするものは欠落)、謄写版原稿(刊行時の節単位で改稿含め 55 部現存)が含まれる(2010 年 11 月 25 日山領邸にて確認)。
- vii 1956 年 5 月 20 日には丹沢〔西 1956〕、1957 年 10 月 13 日には長瀬〔松尾 1957〕、1957 年 11 月 23、24 日には那須〔西 1957; 山領 1957〕に行っている。また安田の回想によれば、1958 年の夏に箱根・宮の下の旅館に泊り、上巻発刊に向け「最後の追い込みに」合宿が行われた〔安田 1965〕
- viii K 先生は北山茂夫である(2010 年 3 月 25 日付魚津氏から筆者宛私信に拠る)。
- ix 主だったものは鶴見俊輔 2005. 『埴谷雄高』講談社に収録されている。
- x 『会報』27 号(1960.7.20)によると 5 月 29 日に起草され「各新聞社団体その他に発送」された。
- xi 『会報』26 号(1960.4.23)には、1960 年 3 月に作成された声明に対しての評議員の意見が掲載された。ここで上山春平は、「個人として安保改定に反対」であるが「思想団体としての性格をかたくつらぬくべき」であり「会として、反対声明を行うことには不賛成」との意見を述べている。『会報』27 号には会員の意見が掲載され、宮内政道、筑波常治が上山とほぼ同じ立場から声明を出すことに反対した。

## 第4章 転向研究会の共同性——インタビューから

## 1. はじめに

前章では、主に『思想の科学会報』から、転向研の初期の活動を跡付けた。そして、転向研究のモチーフが鶴見自身の戦争体験ならびに父親をはじめとする戦中の政治家、評論家らの変節への「恨み」に発していること、そして鶴見より年少のメンバーもまた、従来の用例とは違う意味での「転向」の自覚を持っていた例を見た。

転向研究の特徴は、「転向」を「権力によって強制されたためにおこる思想の変化」[鶴見 1959a:5] と定義することで従来社会主義者に限って使用されてきた「転向」概念を広く思想の変節に適用した点だけにあつたわけではなく、共同研究の組み方としての「戦前派一名、戦中派七名、戦後派十三名」[松尾,鶴見 1962:445] という世代編成にあつた。鶴見はその意図を次のように述べる。

転向は、たとえば近代文学同人におけるように同世代グループ間では積極的にとりあげられたが、世代間をつなぐテーマとして共同の考察の対象とされたことはなかった。しかし、このことをするのでなければ、日本の思想状況をつらぬく共通のタテの糸として転向をとらえることはできない。[鶴見 1957: 63]

このように鶴見は転向を「生きた遺産」[鶴見 1959a:5] にするため意図的に異世代の共同を図った。しかし刊行当時の評価は定義の是非に集中した [亀井ほか 1959; 大熊 1959; 荒ほか 1962]。転向という概念で世界史をも描き得るという構想は鶴見のものであり [鶴見 1959a: 26]、批判は個々の論文よりも鶴見の概念枠組みに向けられた感がある。共同研究としての評価は豊富な資料性の指摘にとどまった [K・S 1959; 小松 1962]。

近年でも『転向』は主として鶴見の体験や後の市民運動へのつながりで解釈されている [小熊 2002; 戸邊 2006a; 2006b] が、共同性の意義を汲み取るには、メンバーの過半数を占めた鶴見より年少の人々の思想と転向という問題の引き結び方を精察し、その上で鶴見の思想との関連を問うことも有用であろう。それは転向研の母体である思想の科学研究会の戦後 60 年の持続を考える上でも示唆を与えるものである。

本章ではまず次節で、鶴見が転向研究会の活動と同時的に発言した世代、戦争責任、戦



## 第4章

争体験とサークルについての意見を見た上で、インタビュー<sup>i</sup>を主たる素材に、鶴見個人の思想的モチーフが共同研究の課題となり、形となったプロセス、そこにおける鶴見より若いメンバーの意図との絡まり、そして『転向』に対する鶴見の現時点における評価につき検討する。

第3節では転向研における年少メンバーのうち、石井紀子（1932-、司書のち編集者、図書館学者）に着目する。石井に単独の著書はないが、転向研や雑誌『思想の科学』および思想の科学研究会との関わりについては『思想の科学会報』（以下会報）その他から知ることができる。また筆者は石井にも計3回のインタビューを行った<sup>ii</sup>。本節ではその成果も交えつつ、転向研の新たな側面を掘り起こしたい。

### 2. 鶴見俊輔を通して見る共同性

#### 2-1 戦争体験とサークル

上述のように鶴見は「転向」の世代縦断的な役割を重視した。そこには「われわれはばらの世代」を繋ぐ必要性の認識と、「明治以来の世代区分は、なくすししの転向のつきかきなり」であるから転向に重点を置くことで相互主体性を回復できるとの見通しがある〔鶴見 1957: 63〕。

1950年代後半は戦後の世代論の一つの山を形成しており〔大串 2008: 46〕その中心的論題に戦争責任論がある。村上兵衛は自分たち「戦中派」は戦争の傷を受けたが責任はないとして、「戦後派」との断層と「戦前派」の国家指導者に戦争責任を問う姿勢を明らかにした〔村上 1956〕。同年に吉本隆明らは文学者の戦争責任を俎上に乗せる〔吉本、武井 1956〕。しかし鶴見は「戦中派」としてではなく「ちがう世代、ちがう社会分野のもの結びつきをとおして、戦争についての体験のちがいをくらべあいながら、それらをつらぬく共通の戦争責任の意識に近づく努力」を繰り返すことを主張した〔鶴見 1959b: 81〕。

もともと鶴見にも「傷」はあった。戦争責任についての討論で鶴見が、満州事変以降、政治家と評論家が「はっきりした根拠なしに立場を変え」、「個人のインテグリティ」を破ったことへの「恨み」の心情を吐露していたのは、前章で見たとおりである。そして鶴見は、戦争の甚大な被害、多数の犠牲者の「イメージ」なしに今後の社会建設はできないと主張し、「岸信介みたいなタイプの政治家」には「戦争責任という概念をテコとして使って、権力の座からおいて」もらい、自分に対しても「形而上の責任」を問うとした〔思想の科



学研究会 1957: 37-38]。後に鶴見は転向研究のテーマは自由主義者から転じて「戦争の旗を振る」ようになった父・祐輔であると話した [鶴見ほか 2005: 77; 鶴見 2006: 15]。また自分についても、「わずか一年前には、とにかく反戦の立場を持っていた」のに帰国後に徴用されると「ジツとして」いたと批判し [鶴見ほか 2005: 77]、「捕虜を殺せ」との命令がもし自分に下されたら「人を殺したくない」と思いつつやったのではないかという「未決の問題」を引きずり続けてきたと語る [鶴見, 小田 2004: 37-39]。鶴見にとって「転向」は主義を超えた思想の変節、すなわち形而上の戦争責任の問題であり、その記憶を保つことで戦争に再び向わない社会をつくらうとする実践的意味合いも持っていた。

しかし 1950 年代末から 60 年代かけて鶴見は「自分の体験に固執」することを避けた。「日本に復しゅうしたい」といった「仲間だけに通じる暗号のような表現」は若い人々と共通の話をするのを妨げるからである。鶴見は戦争体験と取り組んできた例として「山脈の会」を挙げ、「戦争体験とは無関係に見える出来事から戦争体験をほりおこす方法」と「はっきりしすぎたプログラムがないこと」を成功因として挙げた。

それぞれのサークルは、ぼんやりした組織プログラムによって仕事を進める場合にも、みずからの過去についての記憶をしっかりとたもつならば、過去の記憶そのものが一種の習慣法の集大成として、規範をつくりだしてゆく。[鶴見 1963:55-56]

このように鶴見は、多様な戦争体験のあり方を認めてサークルで比べ合うことによって、新しい社会をつくる連帯の基盤にしようとした。

1963 年、思想の科学研究会に「集団の会」が発足し、月例会を続け、76 年に『共同研究：集団』を上梓した。ここで鶴見は規模が小さくよく会うことを要素とする「つきあい」をサークルの特色とし、「私有を超えた思想の交流」がある点を評価した [鶴見 1976: 7-9]。同会の天野正子は、70 年代半ばまでのサークルで人と人を結びつけた「自発性の契機」として次の 5 点を挙げる。

それは、戦争という体験縁であり、自分たちの暮らしの自由を脅かす社会的勢力に対抗的な「志」縁であり、ある種の文化目標という趣味縁であり、さらには生きることの息苦しさと苦勞縁であり、メンバー同士の差異や分裂という差異縁であった。

[天野 2005: 257]

## 第4章

転向研については、鶴見の意図からすれば戦争という体験縁、志縁、そして異なる体験を引き比べつつ結びついていく差異縁が指摘される。以下ではそれらに関する鶴見の見解を、インタビューから見てみよう。

### 2-2 モチーフの発生と「孤立」の空間

まずは鶴見のモチーフを確認しておく。鶴見は滞米中にアナキスト容疑で拘留されているが、その時は国家の戦争に関与しないし、戦争の目的としてはナチスドイツと同盟を結んでいる日本よりも反ファシズムを掲げるアメリカの方に正当性があると認識していた。しかし帰国後、鶴見の予測に反して鶴見は徴兵検査に合格し、軍属としてバタビヤ海軍武官府に配属されてしまう。鶴見はその官舎の中で思いついた転向というテーマとモチーフについて以下のように述べている。

すでに自分の身分としては転向している。いかなる意味でも戦争に関与しない、という立場から離れている。もう一つは私の家族ですが、親父が大政翼賛会入っている。家族的なもんですね。だから自分がもう、行動の形態としての転向、入っている。でその時思いついたんだけど私も私は小学校しか日本にいないんですよ。だから大学で受けたのは基本的に世界史ですね。でぱっと思いついたのがローマなんです。ローマのルシアンてのがいるでしょ、ルキアノス。そのへんが記録としてあって、そこから国家ってのができてからいつも個人が、あるいはもともとの群集っていうか、部落ですね、それが、その思想が押し曲げられていく。だから国家ができたときに転向は始まったと思った。そういう世界史の視点ていうのを私は読んだことなかったんですよ、これやろうと思った。[鶴見 2010: 3-4]

それから敗戦までの間、このテーマは鶴見の中で熟していった。その条件の一つとなったのは、軍隊の中での「孤立」であった。前章でみたように、鶴見は軍隊で、日本人という「敵」に取り囲まれて恐怖と緊張の日々を過ごした。しかし今回のインタビューでは、このような厳しい心理的圧迫を伴う孤立というよりは、むしろ思想的モチーフの成熟にはプラスになったところの、一人でいられる空間と時間の存在が指摘された。鶴見は、上司の前田精大佐から、夜中にラジオの短波放送を聞いて、敵が読むのと同じ新聞を作るよう

命じられる。

一人で考えたんです。でまったく孤立して、海軍の、その軍隊の中で同じことをやっていた。偶然私はほかの兵隊に入ってこられない部屋を持っていたんだ。[鶴見 2010: 5]

このように鶴見は「孤立」の条件が、自らのモチーフを核に、転向を視点とする世界史の記述の構想の成熟に資したと捉えている。

当初鶴見には、転向を共同で研究する意図はなかった。鶴見はインタビュー中、自分が「つき合い」のいい方ではないことを複数回言明している。雑誌『思想の科学』を創る際にも、メンバーを選び、働きかけたのは和子であり、鶴見はそこに、自分が戦中から温めてきた「転向」というテーマを入れたのだという。

つまり親父は追放されて出版社に関与できなくなったからそれを弟にやらせて雑誌をつくらせる、これ私の姉の提言なんです。私はつき合いわるいし、一日中こうやってぼおっと座っていて平気なんです。だから、雑誌やろうなんて考えないんですよ。すべてその段階では私の姉がやったこと。で動きだした。(略) 私は個人でやろうと思っていた、あたためていたテーマをそこに入れたの。それが転向なの。共同研究っていう考えは遅れて育ててきた。[鶴見 2010: 5-6]

こうして自らのテーマを発表する媒体を手にした鶴見だったが、それは初めから『転向』のような形態をとったわけではない。その一因としては、鶴見が『思想の科学』を始めてから転向研開始までのおよそ8年余が、思想(史)の方法としての分類・説明的な方法から記述的な方法への転換期に当たっていたことが推測される。すなわち、戦後初期においては、鶴見はその時々の支配的な価値観に便乗する「お守り言葉」の批判や、難解な学問言葉を排する運動といったように、主として言葉の点から日本の思想を改良しようとする一方、「ひとびとの哲学」にあるように、質問調査票にたいする答えを分類して、庶民の思想の「型」を抽出しようとしていた。しかし第2章で見たように、そのような方法への反省から、1953年から発行された『芽』では、名もない庶民の一生を綴る「庶民列伝」、そして庶民自らが生活の中の実感を記録する生活綴方といった、記述的な方法へと重心を移していく。思想の科学研究会では「庶民列伝ハンドブック」という、列伝を作る際の手引

## 第4章

を作ろうとするが、そこでは歴史を記述する際、分析の道筋が複数あること、それゆえに列伝づくりは1人よりも2人、3人とといったグループで違った観点を交流させながら進めることが望ましいとされた<sup>iii</sup>。「伝記の方法」についての討論で、鶴見は分析の「枠組」に関連して以下のように発言している。

「枠組」だけを持っている人は社会を変えてゆくことができない。その場その場でしなやかに変えてゆく人でないとダメだ。「枠組」だけをもっている人は、天皇制その他に支配されるのです。学生時代には大体資本主義は悪いと思っているが、就職したり結婚したりするとすぐ変るのです。生活の中できたえられたおじいさんほどの民主化もできないのです。先の人たちがどういう風に通ってきたかを調べることによって、われわれは「公式主義」から逃れることができます。[鶴見ほか 1954: 4]

鶴見はまた、「客観性の中にどうしても一面的な強調が出やす」く、「因習にたいするサッカー的的要求が民衆をよいものにして描かせる」ゆえに、「これからは積極的な悪徳をグッと描くことが必要」だとも述べている [鶴見ほか 1954: 3]。ここからは、『転向』で転向の歴史を遺産化するため「追体験」の方法が採用された意図の萌芽が見て取れる。すなわち、鶴見は歴史を記述する際に、マルキシズムをはじめとする「公式主義」によって民衆や「非転向」を「よいもの」として描くことを極力排そうとした。それによって先人の通って来たのと同様の問題に直面した時に、よりよい仕方を通り抜けることができ、その知恵が社会を変革する推進力になると考えたのである。

こうして転向研究は、鶴見の体験と父の変節をモチーフとして、新しい思想史の試みとして始まった。そしてそれは、鶴見の戦中ないし終戦直後の意図とは別に、小集団における共同研究の要素を含みこむものとなった。

### 2-3 成功要因——アイデオロギー・フリーな党内党

1954年11月、転向研究会の初回会合が行われた。その様子を鶴見は以下のように述べている。

その時かなりたくさん集まった、何十人って覚えてないんですが。名前のあるライタ

一がずいぶんいた。で私が趣旨を説明した。そしたら反論が出てね、非転向の人たちが苦しい状態にもかかわらず耐え抜いたということをやめる会ならやる、転向を中心としてやるんなら自分たちは参加しない。次の会には来なかったの。次の会にはもう今言った山領、魚津〔郁夫〕、後藤宏行、高島、みんな無名の、ま、学生ですよ。でその部屋は私の部屋で、私の助手の判沢弘がいたから、ほかに学習院から久野〔収〕さんの系統でね、西崎京子、西勝、これは久野さんの系統が、残った。つまりそういうものが中心になってこれが第2回以後、終りまで動かなかった、固定しちゃったの。

〔鶴見 2010: 10〕

山領氏の回想によれば、初回と第2回は鶴見がオリエンテーションを行い、そこにはトーマス・マンの『十誡（ダス・ゲゼッツ）』の翻訳<sup>iv</sup>の仕事のある加藤子明らも参加していたが、サンデー毎日事件で研究会の活動が一旦休止した後は来なくなったという〔石井 2009a: 4-5〕。鶴見はこの事件後の休刊期と転向研の活動期が重なっていることについて、「それは偶然、共産党のなかの内紛と民科のなかの内紛とがからんじやって、私にたいするスキャンダルがあった」としつつ、それまであったサークルが「壊滅状態」になる中、「転向研だけが、つまり全体のなかの一個の生きている細胞だな、それから盛り返した」と述べている〔鶴見編 2005: 194-195〕。鶴見にその持続要因を尋ねたところ、「私は性格的に人づきあいがいい人間じゃないんです。だからよくもったなあと思う」と感慨をもらしつつ、安田武が例会終了後、「二次会的」に学生たちに食事をふるまっていたことに触れ〔鶴見 2010: 15-16〕、共同研究における「党内党」の有効性に言及した。

党内党とはどのようなものだろうか。鶴見はそれを京大人文研で桑原武夫が主宰するフランス百科全書の共同研究<sup>v</sup>の経験から得たという。すなわち、「共同研究てのがこうあって、座長は桑原さんで、一つの傘っていうんじゃなくて、その傘の中にもう一つの傘」がある状態を指す〔鶴見 2010: 17〕。鶴見はそこで、フランス語に堪能な樋口謹一、多田道太郎と、共同してメモを作成し、発想の段階から回して使うという方法をとった〔鶴見 2010: 7〕。

このカード方式は転向研においても採用される。筆者が閲覧した山領氏保存のカードには、山領氏と鶴見により新聞・雑誌記事が分担して抜き書きされており、年表作成に役立てられたことが分かった。よって年表作成のために3~5名ずつ組まれたグループもいわば党内党だが、今回のインタビューではとくに重要な役割を果たした例が他に2つ、言明

## 第4章

されている。

一つは下巻の「第五篇 資料」に収録された人名録「転向思想史上の人びと」の元となった資料を読んだグループである。『転向』上巻刊行後、鶴見はある総理府の官吏から手紙を受け取る。彼の手元には、追放を免れようとした人による直筆の陳情書が溜まっていた。鶴見はこれを一旦預かり、これを読むためのしまね・きよし、横山貞子、そして転向研外のメンバーで見田宗介と4人のグループをつくった。[鶴見 2010: 9]

二番目には、鶴見が直接に党内党として挙げたわけではないものの、同様に資料を読むチームが作られた例として、転向の裁判長を務めた宮城裁判長の未亡人により日大の図書館に寄贈された転向調書を読むグループの存在が特筆される。鶴見はこの資料の存在をしまねにより打診され、図書館長に確認し、他のメンバーとともに閲覧の許可を得る。この時のグループは鶴見、しまね、藤田、高畠の4人であった。この調書は後に、中巻、下巻の資料的な裏付けにおいて大きな役割を果たしたという。[鶴見 2010: 23]

以上のように、転向研の中には、京大人文研のカードの共同利用を前例とする、グループに分かれての新聞・雑誌からのカード作りをはじめとして、下巻の人名録のもととなった追放免除の陳情書、中巻下巻の資料的裏付けとなった転向調書という重要資料を読む2つのグループ、そして安田武の二次会的なパーティといったいくつかの小グループが存在した。鶴見はその性格と役割について以下のように述べている。

だからわりあい共同研究っていうのは、そういう党内党をイデオロギー的な、反党みたいなものにしなければね、うまく使えるんですよ。つまり、アイデオロジー・フリーだったってことが、これはもう、始まりのころからの「思想の科学」の流儀ですがね、それがその、信頼感を壊さない、理由なんです。[鶴見 2010: 15]

ここで注意すべきは、鶴見のいう「アイデオロジー・フリー」という場合、マルクス主義のイデオロギーの教条主義的な信奉を排するとともに、マルクス主義者を排さないという意味でもあった。1950年代の共産党内部における分派闘争が学生運動に及ぼした影響については、すでに前章で触れた。鶴見はしまね、藤田について「共産黨員であるかどうかは、別に私は差別しない」と述べて、前述のようにしまねが中下巻の資料的裏付けに果たした役割とともに、藤田が上中下各巻の巻頭に書いた状況概説について「藤田がそれまでに書いたものの中でのトップのもの」[鶴見 2010: 10] だったと高く評価している。



もとより鶴見は当初からサークル運営における「遊び」の要素や「党内党」の効用を意識していたわけではない。自身が繰り返し強調するように、鶴見は「つき合い」のいい方ではなく、京大の経験を除いては、サークル運営のコツや戦略は持ち合わせていなかったようである。ところが雑誌が休刊し、「思想の科学」内の他のサークルがつぶれていくうち、鶴見はこのようなものの効用を体得し、認識してゆく。転向研の活動と並行して、当時「思想の科学研究会」の名で関根弘、武田清子と鶴見が『中央公論』に連載していたサークル雑誌評「日本の地下水」では、鶴見が、例えば京都大学グループの学風を「感動をとまなう結合」として取り上げ[思想の科学研究会 1958a: 260-261]、あるいは若い世代のサークルにおける遊びの要素が強い集まりに注目するなど[思想の科学研究会 1958b: 299-300]、鶴見が様々なサークルの様子を観察しながら成功のパターンを蓄積していく様子が分かる。鶴見は転向研究を進めつつ、サークルへの関心も高めていったが、それは第4次以降の「思想の科学」の方向性を決めてゆくことにもなった。

#### 2-4 歴史はバイオグラフィーである

前章でみたように、『転向』への評価は好意的なものばかりではなかった。とくに転向を体験した当事者からは、反発や違和も表明された。しかし、当時も鶴見はその反応を見越すかのように、上巻の序言において自分たちが後の世代の者が転向について追求することに「うしろめたさ」を感じることに、にもかかわらず、自分たちの経験しなかった重要な体験にたいして追体験するように努力することが、思想史としての正統的な方法であると言明していた[鶴見 1959a]。このインタビューでも鶴見はその立場を変えず、モチーフをもって、その人物に投入して歴史を描くこと、その意味で歴史はバイオグラフィー（伝記）であるとの考えを述べた。

バイオグラフィーはモチーフがあってその人物に自分が入らなければいけないでしょ。だから歴史そのものがそういう構造だって言うんだよ。歴史は人間がやったことの記録ですからね、歴史そのものがバイオグラフィーだって。[鶴見 2010: 2]

よって歴史はメモワール（回顧録）ではなく、その時には存在していなかった後代の人間が、自分の想像力によってその時代、その人物に自らを投入して書くものである。

## 第4章

この8年かかったプロセスでメンバーの中の最年少者が目覚めていったんですね。

(略) で考えてみると歴史っていうのはメモワールじゃない。メモワールってのは回想録でしょ。自分のやったことを回想して書く。歴史っていうのはその時に存在していなかった人間が、書く。つまり自分が想像力によってその中に投入して、その雰囲気をとらえる。(略) 歴史はレイタージェネレーションで書く。それがなんか分からないけど時代の息吹をとらえる力を持っている。[鶴見 2010: 19-20]

ここで鶴見のいう「目覚め」の意味については、高島、山領、後藤、魚津ら、のちに研究者になった者を含め、1931年から33年生れの転向研の「最年少者」が、ちょうど転向研活動中に彼らが学生から社会人となっていったことを考えれば、「能力がはたらき出す」というほどの一般的な意味で解してよいだろう。しかしここで、追体験という方法との関連においていま少し踏み込んで解釈すれば、たとえばフッサールの現象学において、「目覚めて生きる」とは、(生活) 世界に対して目覚めているということ、世界の中の客体と、自分自身とを「意識している」ということであるとされる。そしてその第一の仕方は、すべての関心が客体にまっすぐに向かう自然的態度、第二の仕方は、客体がさまざまな主観的な現れ方、与えられ方において、われわれに意識されているという点、つまり、世界がわれわれにとっていかに成立してくるのかということへの関心を打ち立てるということである。すると、後者においては、客体は自明にして寄与のものではなく、相対的妥当性、主観的現象、思念の変化において成立してくるものということになる [フッサール 1970: 513-515]。ここの「客体」を「転向」と置き換えて考えれば、「転向」を従来の固定した概念として捉えず、倫理的な判断を一旦取り払って追体験するということは、後者のタイプの目覚めを促したと推測される。

それを可能にしたものとは何だろうか。鶴見に、1950年代においてとくに重視していた「実感」について尋ねたところ、歴史を書くことに関連して以下のようにコメントした。

だから昔の実感に戻ることが歴史家の能力、優れた歴史家の能力の一部なの。(略) 実感をイマジナティブなものにしていって、使うっていうか生かすってことですね。それが歴史家の秘密なの。条件だと思う。[鶴見 2010: 24]

鶴見が歴史を書くに当たっての記述的要素の重視は、1959年当時よりも強まっているともいえる。すなわち、1959年の時点では、鶴見は転向の「質」に関わる記述としての、歴史的脈絡を考慮した個々の伝記に重きをおきつつも、転向の「量」的把握に関係し、「記述のフレーム」となる「型」の分類も行っていた。そこでは転向を類語から区別し、その形態（回数、鋭さ、期間、過程）や、主体の属性（年齢、性別、家族構成、パーソナリティなど）、状況（集合、行為、自覚・理論の有無、強制力の種類など）、年代・歴史、転向の評価により区分する様々な型が提示されている。今回のインタビューでは、このような「型」への言及は聞かれなかったが、それとの関連を想起させる発言はあった。すなわち、上記区分は「機械的かつ単純」なものから「より有機的かつ仮設依存性の多い区分」へと列挙されているが、今回言及された父親に対するまなざしの変化は、もっとも後者寄りの、評価のなかでも「価値判断を含む区分」による解釈の変更であるともいえる。

親父についても、ある、ユーモラスな感じがあるね。つまりね、親父はこういうこと言ってたんですよ、ヴェイン [vain (英)] な人間が一座の中にいると一座は明るくなる (笑)。ヴェインな人間ていうのは、例えばいばり屋ですよ、名声の好きな人間。(略) そうなのが仲間の中になるとなんとなく一座が明るくなる。私はこれはモラリストとしての非常に簡明な見事な表現だと思いますね。[鶴見 2010: 20-21]

鶴見は、価値判断を含む区分、すなわち「よい転向」「わるい転向」などという場合には、マルクス主義や宗教に基づく転向論議に見られるように、それぞれ特殊な仮説と価値判断の体系を想定しているために、一般的通用性をもちにくく、またしばしば深刻化し、固定化するので、たとえばうらぎり型の転向という場合に鍵括弧の中に入れるなど、用語上の仕掛けが必要であると述べていた [鶴見 1959a: 17]。

鶴見の場合、転向研究のモチーフは、自分の転向とともに、あるいはそれより大きな部分を父親の転向が占めており、父親に対しては終始批判的なまなざしを向けて来た。しかし自分の仕事が終わり、父親も死去して、鶴見のまなざしは変化する。それは、いわば父親の「嫌な」記憶を括弧に入れることにより可能になった変化であろう。さらに言えば、上記の鶴見の発言で父親を指して言った「モラリスト」も括弧に入れるのが妥当であると思われる。東大を一番で出て、ベストセラー作家となり、戦前も戦後も保守政治家として要職に就いた父親は、社会全体が転向する中でずらされていく善悪の基準に照らせば、常

## 第4章

に「善」を求める「モラリスト」であった。自身がベ平連はじめ数々の実践において「かなりかたくなに」貫いてきたからこそ、今になって善悪の準拠枠をずらして父親をユーモラスなイメージで見ることが可能になったものと思われる。

また、鶴見は「この8年かかったプロセスでメンバーの中の最年少者が目覚めていった」点を評価している [鶴見 2010: 19]。実際、鶴見が最年少者と呼ぶ 1931 年から 33 年生れのメンバーにとって、転向研は後年の研究の原点となった [後藤 1977: 338; 山領 1978: 311]。転向研のメンバーが様々な戦中、敗戦、そして戦後の体験を抱えて転向研究への赴いた様子は前章でみたとおりである。しかしながら鶴見にとって年少者の意味は必ずしも転向研の中に求められてはいない。鶴見は 2009 年の『思想』の特集でも挙げていた転向研メンバー外の柴田道子、さらに今回は乙骨淑子を例に挙げて、戦中の日本必勝のイデオロギーへの献身と、学童疎開さらには敗戦で「世論が裏返る」のを見て培われた年長者への不信、つまり「年少者の転向体験」が強い動機となって、彼らのその後の仕事がなされていると指摘する [鶴見 2010: 11]。

たしかに、すでに見たように後藤宏行は敗戦時の価値転換に際して、年長者とは対照的に適応に困難を覚えた体験から「戦後派」の「実感」を主張し、横山貞子も社会の変転の中で芽生えた年長者への不信について述べ、魚津郁夫も戦中の天皇制のイデオロギーと現実の狭間での苦悩を記していた。そして、高島やしまねにあっては戦後の学生運動の挫折の経験も転向研究への関心に結びついていた。

転向研究は、鶴見にとっては自身と父親の立場の変節をモチーフとしつつ、より社会的に重要な立場にあった場合に取り得る道筋を、追体験による伝記的な手法で表し得るか、さらにはそれを自分より若い世代と共になし得るかを問う実験的な試みであった。その際に鶴見は、年少者にとっては敗戦を境とする全体主義から民主主義への、いわば社会そのものの転向を目の当たりにした体験が彼らのモチーフとなったと捉えるが、これまで見たかぎりにおいても年少者の体験は多様であり、それらが重なり、関心が交錯しながら共同研究が展開され、その後のそれぞれの研究の原点ともなっていたと思われる。次節では、転向研究会の「常連」でありながら、『転向』に自身の名で論文を発表せず、その後も思想の研究者とはならなかった、その意味で転向研の「例外」ともいべき石井紀子のケースを見ることにより、転向研の新たな側面に光を当てる。

### 3. 石井紀子を通して見る共同性

#### 3-1 経歴

まずは石井の経歴と転向研および「思想の科学」との関わりを、インタビュー〔石井2009a; 2009b; 2010〕に文献で補足しつつ概観する。

##### 3-1-1 転向研に出会うまで

石井（旧姓松尾）紀子は1932年1月30日、和歌山県田辺市に父元吉、母満津の間に6人兄妹の末子として生れた。1938年、京大法学部に通っていた長兄が召集される。当時は学生の兵役免除が可能であったが、検事であった父はこれを肯んぜず、兄は「早々と」戦死した。父はこの一事を機に検事を辞し公証人になった。

一家は東京市杉並区西田町に引っ越し、石井は杉並第二小学校（のち西田国民学校）に編入、1944年に卒業し、都立武蔵高等女学校に入学した。翌1945年3月15日の東京大空襲で、新宿の辺りまで空が赤く染まるのを見て、「生き残りたい」と強く思ったという石井は、つてを頼り米沢に単身疎開する。それは厳格な家庭からの「家出」でもあった。

8月、敗戦により帰京、1950年に武蔵高校を卒業し、聖心女子大学と早稲田大学に合格、後者を選び文学部史学科に入学する。父親はこれに反対して学費を出さず、奨学金で通った。大学ではレッドパージ反対闘争が行われており、石井も歴研に入りデモ行進などした。しかし活動の中心はむしろ『資本論』などの輪読であったという。卒業論文はジャン・ジャック・ルソーについてで、一部開架式を始めていた国立国会図書館と大倉山の支部図書館に通って書き上げた。

1954年に早稲田大学を卒業し、時事通信に入社し、出版局に配属される。仕事は、占領政策の後を引く親米色の強い単行本の翻訳・出版だったが、石井はこれに疑問をもち、何らかの専門性を持つ必要を感じるようになったという。翌年3月職を辞し、慶応義塾大学に新設されていた図書館学科に学士入学した。

##### 3-1-2 「思想の科学」・転向研との出会いと活動

1954年5月に講談社から第3次『思想の科学』が創刊された。第3次は生活綴方、映画、ベストセラーなど大衆文化の分析、思想や政治経済をかみ砕いた「講座」シリーズなど、思想の主体を拓げる一方で従来の「思想」の敷居を下げる試みを行った。石井はこれ

## 第4章

に共感して思想の科学研究会に入会し、会報の呼びかけ<sup>vi</sup>に応じ同年11月から転向研究会に参加する。

前章第2節で見た3段階の作業のうち、第1段階は新聞・雑誌記事を基にした年表づくりで、前半は1955年の春から秋にかけて、転向関連事項をカード化する作業が行われた。後半は1955年夏から秋にかけてで、カードを突き合わせて年表が作られた。石井は1937年を中心とする年表を鶴見、今枝義雄、高島通敏とともに担当し<sup>vii</sup>、会報で年表作りの報告をした〔佐貫・松尾1955〕。

第2段階は1955年秋から翌年春にかけてで、時代別・団体別の転向経路の検討が行われた。

1956年3月からは第3段階に入り、時代・団体中の典型的な個人を選択して転向を再構成する。原稿は謄写版で配布され例会、合宿で意見を交換しながら修正されていった。

石井は翼賛運動の中で有馬頼寧を対象を選んで、本人へのインタビューも行き、400字詰め原稿用紙で本文115枚、注・年譜・参考文献13枚、計128枚の原稿〔松尾195?〕を書き、これに若干の手直しを加えた謄写版はメンバーに配布された<sup>viii</sup>。しかし、1957年に都立日比谷図書館に就職し、1959年に結婚するなど身辺多忙となり、出版の話が本格化した時には最終稿を書き上げることができず、安田武がリライトすることになる。『転向』中巻の「創立期の翼賛運動——有馬頼寧」の末尾には、以下の「追記」<sup>ix</sup>が付された。

転向研究グループで、有馬頼寧を担当していたのは松尾紀子である。松尾は、すでに百数十枚に及ぶ原稿を執筆、それは、私達の間で討論を経ていたが、その後、決定稿を書き進めることができなくなった。(中略)この松尾の原稿にもとづき、松尾自身の発想・叙述・資料の援用をできるだけ生かしながら、安田武がリライトし、結論部分に若干の補足を加えたものが本稿である。〔安田1960:151〕

石井は有馬に続いて室伏高信のインタビューもとったがこれも論文化に至らず、山領健二が引き継ぎ『転向』下巻の人名録の記述を経て『思想の科学』に論文として発表された。この論文の「附記」には、「本稿は最初、思想の科学研究会の転向共同研究の一部として準備され」、「特に資料については共同研究の友人石井絵梨氏〔石井絵梨は石井紀子のペンネーム〕に多くを負っている」と記載されている〔山領1962:67〕。



### 3-1-3 転向研以後の「思想の科学」との関わり

石井の転向研以後の「思想の科学」への関わりを個人史と突き合わせながら見てみよう。

1959年1月、講談社版の終刊から4年余の休刊を経て、雑誌『思想の科学』が中央公論社から刊行された。石井は永井道雄編集長のもと編集委員を務めた。

1963年、「思想の科学・市民学校」の企画運営に携わる。これは講師を招いて1ヶ月間週1回、全4回の講義を行う、社会人向け「現代版寺子屋」であった。石井は立ち上げと第2回までの運営に関わった [石井 1963b; まつお 1963]。

1964年に長男誕生。1965年に職場の企画係、1967年に整理係長となり有栖川新館（現・都立中央図書館）建設に向け整理体系の企画を行う。

1968年、小田実の提案<sup>x</sup>を受けて思想の科学研究会内に「占領研究サークル」が発足した。石井は他の司書とともに文献班<sup>xi</sup>を発足させ網羅的な文献目録を作ろうとしたが、『共同研究 日本占領』では重要指令・覚書の解題にとどまった [思想の科学研究会 1972:542-561]。

1973年、家庭では長男の養育をめぐり主にこれを担ってきた姉から不満が出る [石井 1986: 191]。同年5月に図書館を退職して緒方事務所に再就職し朝日新聞の索引制作に従事するが、1975年、朝日側の事情で事業は中止となった。

転職の過渡期にあって、同年8月から翌年まで思想の科学研究会会長を務めた。また、1975年3月に『会報』上で別冊<sup>xii</sup>『思想の科学』の『辞典の歴史と思想』を発案し [別冊思想の科学編集委員会 1975]、翌76年6月に年刊行した。1980年、思想の科学社の単行本出版担当となる [石井 1980]。

1976年、日外アソシエーツ入社。『現代日本執筆者大事典』、『近現代日本女性人名事典』などの人名事典、文献目録、索引・事典類の編集とデータベース構築に携わる。

1996年に日外アソシエーツを退職し、常磐大学、実践女子短大で図書館学を講じ2002年に退任。以後、「NPO 保存図書館・多摩」の設立に参加し図書館が廃棄する図書の散逸を防ぐ一方、地元横浜でハンディキャップを持った人たちの社会参加の支援と住民活動の拠点づくりを進める。「思想の科学」では雑誌の歴史をまとめる「三部作」<sup>xiii</sup>の編集に携わり2009年に完結した。

### 3-2 人生の倫理と「思想の科学」・転向研

以上、石井の経歴を概観した。以下では、石井の文章や語りの変遷に着目して、第1項

## 第4章

では戦中体験、敗戦体験の意味、第2項では信条と転向研、「思想の科学」とのつながり、第3項では女性の転向への問題意識、第4項では「実務家」としての自己規定につき考察する。

### 3-2-1 自立の志向

石井は「思想の科学」への入会と転向研への参加について以下のように語っている。

「思想の科学」への私の入会とか転向研への参加っていうのはね、十五年戦争の時流の中で育って、教育を受け、まあ大げさに言うと戦争体験っていうことだけど、まあそれを体験として自覚するような年ではなかったですよ、(略)だから、転向研っていうのは学習体験というか、そういうことです。[石井 2009a: 6]

このように石井は入会・参加の源には「大げさに言えば」戦争体験があるとしつつ、当時はそれを自覚できず、転向研で追体験的に学習することで初めて「時代の事実」を知ったと語った。具体的には以下の工程を指す。

私などは室伏高信とか三木清とか、全然読んだことのない（自分は西洋史専攻だったわけですからね）、そういうものを全部読んで、その後やった作業は、克明に新聞の記事や雑誌の内容とかを、みんなカードに書いていくのです。それをもとに年表をつくるのです。そうすると、勸進帳みたいな年表ができるのです。それで時代を刻み込んでいくというか、自分の小学校の時代が全部そこに刻み込まれていく。[鶴見編 2005: 197-198]

年表<sup>xiv</sup>にはカードの内容が「事項」として頁の左側3分の2に書かれ、残りは「備考」として空欄が設けられ書き込みができるようになっている。これにより「事項」の知識が共有されるとともに、各自の情報を追加的に記載することで自分だけの年表が出来上がることになる。

では、石井が刻み込んだ自分の時代とはどのようなものだろうか。あいにく石井の年表の所在は明らかでなく「備考」欄の記載が未詳なので、石井が自身の戦中・敗戦体験について書いたもの、語ったものから見てみよう。石井は1986年に女性管理職の体験を集め

た本の中で、次のように書いている。

そもそも、私の仕事哲学のルーツは、四十年前の敗戦です。一夜にして「大日本帝国」が崩壊し、それまで威張っていた軍人、教師、家にあっては封建的な父親などの権威が失墜し、また築き上げた財産、金銭が無価値になるぐらいの大変動が起きたのです。当時十三歳——食うや食わずやの混乱した世相の中で、漠然とでも考えたことは、頼りになるものは、自分の身につけた技術とか知識であり、一回限りの人生をとにかく自立して生きていくことだ、ということでした。[石井 1986: 188-189]

石井は別の機会にも「職業に対する哲学のルーツは日本の敗戦」にあり[石井 2000: 18]、「とにかく自立して」、「自分の身に何かつける必要性を痛感」[石井 2005:197] したと述べている。ここで注目されるのは、敗戦が自立の契機になったことが、どちらかといえば肯定的に捉えられていることである。1963年の「女の状況」と題した座談会では「敗戦がなかったら（略）さっさと早くから、お嫁にどっかへやられちゃったろう、敗戦があったばかりにというありがたさが身にしみている」[片桐, 乙骨, 松尾, 永井 1963: 18] と述べ、女性の「生き方の選びとり」の点で敗戦は正の方向に作用したと捉えている。

また、国民学校の宿泊訓練について、石井は卒業 60 周年記念論文集の中に次のように書いている。

私は六人兄弟の末っ子で、よその家へ一人で泊まりに行くことも無く、又生活の細々としたことはお手伝いさんや姉たちがしてくれるという育ち方でした。皆で蚊帳を吊ったり食器を片づけたりという初めての集団生活は、「自分でもやれる」という自信を与えてくれました [石井 2003: 53]。

この文集の冒頭、石井も名を連ねた編集幹事による序文では、1 期生が卒業してから終戦までの1年余は学童疎開、陸軍の駐屯、そして空襲による校舎の焼失など「母校は苦難と不幸の連続」だったとある。しかし文集には「楽しい」宿泊訓練や、皇居・靖国神社・明治神宮への「行軍」が「修学旅行の代わり」の「最良の思い出」となったことが綴られ、校庭に築かれた「アツツ島」が「大人の思惑とは関係なく」「恰好な遊び場となった」と紹介されるなど [東京都西田国民学校第1期生・同期会 2003]、戦時色はあるが物資の困窮

## 第4章

や精神的抑圧は前面に出てこない。

インタビューに同席し、石井より1年年少で同じく都下に住んでいた山領健二は、この文集を見た感想として、石井らが卒業した1944年から45年にかけて「戦争が激変」して物資が不足し、「こういう贅沢なことではできなかった」と語った。山領は半年間の集団疎開を経験しているが、それは「収容所と同じ」であり「今〔小学校時代の同級生と〕集まってもその時の話はあまりしない」という〔石井 2009a: 9-10〕。

また石井は米沢への単独疎開について、以下のように語った。

農村への勤労働員があつて、吾妻山目指して1時間半ぐらい歩いて行くんですよ。農家のところへ行って、夏の麦の草とりって辛い、麦の毛がチクチクチクチク刺さるわけ、それを取るわけね。それからお蚕もやりました。もう田んぼもやった、何でもやったわ。(略)そういう体験をやりましたから、もう何があつても生きていけるわと(笑)、疎開は私にとり生きていくことの自立の第一歩ですよ。〔石井 2009a: 12〕

以上のように、石井にとっては、敗戦体験が自立への志向の契機として捉えられ、さらに戦中の国民学校時代と単独疎開の体験が、遡及的に自立の第一歩として肯定的に捉えられているといえよう。

### 3-2-2 信条の模索

敗戦で自立の意志が芽生えたという石井だが、確固たるキャリア計画はなかった〔石井 1986: 189; 石井 2000: 18〕。石井は「思想の科学」との出会いを以下のように書いている。

私が「会」を知ったのは、昭和二十八年頃だったと思う。そして入会したのは、大学を出て、G通信社の出版局に就職し、アメリカの宣伝本を翻訳して出版するという仕事の流れの中で、私の「生きがい」について手探りしていた時であった。その魅力は、既存の哲学理論では取りあげられなかった私たちの身近な領域—職業観、あるいは漫画、ちゃんばら映画、ベスト・セラーなど—の問題をすくいあげ、それをプラグマティズムのもつ理論、方法論で整理、分析し、意味づけることにより、その中身に光を与える姿勢、エネルギーにあった。〔石井 1963a〕

このように石井は、1953年には「思想の科学」を知っていたが、入会は翌年になって「生きがい」を模索している時で、高踏的に哲学を論じるのではなく、身近な問題にアプローチする「思想の科学」の鮮やかな方法と姿勢を、魅力として挙げた。また同文で、職業と家庭を持ちながら「思想の科学」とつき合うのは、「自分の位置を見つめられる外からの視点」を持ちたいからだとも書いている。

1995年収録のインタビューでは、転向研参加当時の興味につき上記とほぼ同趣旨を述べた上で「自分が一生なにかを貫いて生きるには、という関心」があったと話す〔石井 2000: 18〕。さらに2003年のシンポジウムでは、転向研に入った動機が、より明確に職業の選択とつなげて語られた。

自分が一生それなりに道を極めていく方法とはどういうことなのか、たゆまないで、小さい信条を持ってそれなりに生き続けるとはどういうことなのかを知りたかったわけですよ。それで転向研に入ったのですね。それが動機です。

それで、私は、一年勤めて、自分はやっぱりプロフェッショナルとして立っていくと同時に、人びとの大学として機能していると言われているアメリカの公共図書館にひかれた。〔鶴見編 2005: 197〕

このように石井の中では「思想の科学」・転向研への参加と職業の選択が一体的に語られていく。両者に共通するのは「人びと」への志向であり、そちらの方を向いて仕事し続けることが、すなわち「小さい信条を持って」生きることと把握されている。

ところで石井は、「自身は民衆か」との問いには、「民衆」の定義が難しいが「世間一般の人民」、「労働者農民などの一般勤労階級」などがあるとした上で、「自分はちょっと違うと思います」と答えた〔石井 2010: 25〕。

この自覚は、転向研究における対象の選択とも関連していると思われる。石井は有馬頼寧を、「貴族の中でも労働者にシンパシーを持つような人物」と評している〔石井 2009b〕。有馬は旧藩主の華族の家に生まれながら貧困層のためのセツルメント運動を行い、近衛文麿とともに翼賛体制を設計・運営するも、戦局の進展に伴い有馬の理想は無用となって政界から去った。石井がインタビューした当時は杉並の邸宅に住んで「花をつかって売って」いる、いわば「花咲かじいさん、花売りじいさん」だったという〔石井 2009b: 9〕。

また石井は、有馬に続いて室伏高信のインタビューもとっている。室伏は社会主義から

## 第4章

出発したが、やがて「中間階級」を「国民大衆」に一致させる独特の国家社会主義を採るようになった。1942年に筆禍処分を受け、戦後に文筆再開を試みるもGHQから追放処分を受け、インタビュー当時は相模湖のほとりの山小屋にこもっていたという [石井 2009b: 9]。

有馬は貴族として労働者に同情し、室伏は階級論と国体論を統一して前衛たらんとしたものの、いずれも夢敗れている。民衆ではない者でありながら民衆のために策を講じた有馬、主体化を試みた室伏は、手段の是非や結果は別として理念的には石井や「思想の科学」の志向と重なるところがあるだろう。

2009年には石井は、自らの職業選択と「思想の科学」との接点について以下のように語った。

民衆の大学、図書館から育った人は佃実夫さんです。体験的に、独学として貫いた人は彼なんです。だから私は佃さんが恩師っていうか先輩、大先輩なんです。特にそのパブリックラブラリー、民衆の大学としての図書館という、そういうイメージと、思想の科学が目指している哲学の大衆路線、というのが私としては接点として納得できるものがあつた。それでライブラリアンの道を選ぶんです [石井 2009b: 3]

ここで石井は、接点をこれまで同様「民衆」「大衆」に求めながら、佃実夫を引き合いに出している。佃は石井にどのような影響を与えたのだろうか。

佃実夫は1925年に徳島県中郡新野町に生まれた。生来病弱で大病を繰り返し、青年学校を中退後、郵便局員、青年学校指導員、貸本屋等を経て徳島県立図書館に勤務、その後上京して1963年から1972年まで横浜市立図書館に勤めた。1959年には「ある異邦人の死」が芥川賞候補になるなど小説家としても活躍した [徳島県立文学書道館 2010:36-47]。「思想の科学」では1967年から69年にかけて会長を務め、68年から78年の占領の共同研究で主導的役割を果たし、79年、クモ膜下出血で急逝した。

多彩な顔を持つ佃だが石井にとっては「司書としての大先輩」であり、「文献探索学の途における師」であった [石井 1979: 17]。1969年、佃は『文献探索学入門』を思想の科学社から刊行し、レファレンス・ワークで培った文献・資料を探し出すヒントを紹介した。その前書きで佃は、この本の目的は「市民・学生が、図書館員の手を借りないで独自に文献・資料を探索する」のに役立つような「手引書」あるいは「虎の巻」の試作と、あるべ



きレファレンス・ワークの考察にあると述べた [佃 1969: 1-3]。図書館員や研究者だけでなく、一般の利用者にとってあるべきサービスを追究した佃の意志につき、石井は、「独学の道を通った人佃さんの原体験が、自己学習の場として公開された公共図書館への熱情を生み出した」と評した [石井 1979: 17]。

のちに石井は「情報社会の中に生きる私たちが、仕事や生活をしていくには・・・資料を探したり、調査する等々、“情報に先んじる、必要があり”、『すぐに探せる道具(ツール)』があったら便利」だとして、自身が制作する事典・索引や情報検索用データベースの有用性を述べた [石井 1986:186-187]。ここには、文献・情報を、探索に便利なツールを整備することで広く人びとに開こうとする、佃と同様の志向がある。

別冊『辞典の歴史と思想』の座談会で佃は、自分のつくりたい辞典として「渡辺崋山という項目を引くと、渡辺崋山のことは、わからないんだ、わからないんだけど、渡辺崋山のどういう全集が、いつ、どこから出ていて、伝記や研究文献にはどういうものがあるってことが一目でわかるような辞典」を挙げた [石井ほか 1976:170]。1978年に佃を編集委員の筆頭に日外アソシエーツから刊行された『現代執筆者大事典』は、文献計量的な方法による人物選出に加え、著作、研究文献など書誌の充実に佃の意図が見て取れる。

2010年、石井は「三部作」の出版記念シンポジウムの冒頭、刊行の意義を以下のように述べた。

休刊の最終ページに思想の科学社が、私共の運動が、日本の内外の情況並びに庶民大衆の行動に対してどのような影響を及ぼし、そして影響を受けてきたか、それについて新しい世代のエネルギーと知恵を結集して徹底的に多角的に検討する、このことが再出発の前提である、という旨の提言を行いました。そのためには、「思想の科学運動」の軌跡をたどることのできるツールというか、基礎的な資料を公に出すことが必要であります。 [記念シンポジウムを記録する会 2010: 12]

ここには「思想の科学」の哲学の大衆化と、民衆の大学としての図書館という自らの職業選択に接点を見出したのと同様の志向があるが、「思想の科学運動」の検討と、運動の軌跡をたどるためのツールの開放が等価でなく、後者を基底的に捉えているところに特色があるだろう。

## 第4章

### 3-2-3 女性として

『転向』では上中下3巻を通して女性の転向が描かれていない。この点についてはすでに上巻の序言でこの研究の「一つの欠点」として指摘されている〔鶴見 1959: 26〕。それは主として資料的な制約から便宜上対象を「公人」に限ったことにもよる〔鶴見 1959: 9〕が、この点につき鶴見は「国家権力の直接の強制力の下に転向すると言う形ではなく、ほとんど別のものと考えられる家庭内の諸力との出会いの中に転向してゆく過程を記述することが必要」と展望を述べた〔鶴見 1959:26〕。上巻が出てから11年、下巻からは8年を経た1970年9月、『思想の科学』の特集「現代転向論」には、元転向研のメンバーによるシンポジウム「『共同研究転向』その後」の記録が掲載された。このシンポジウムのねらいは『転向』以降にでた、転向研究のための文献・資料解題にあったが〔山領、石井、後藤、高島、安田 1970: 62〕、ここで石井は、女性の非転向を通じた例として山代巴と牧瀬菊枝が編んだ『丹野セツ』〔丹野 1969〕を挙げ、丹野の挙げた非転向の理由につき以下のように述べた。

……家族を遮断するんですね。また、結婚はするけれども家族として結びつかないで、いわば独身者としてやる、ということをや非転向の理由としてあげているんですが、これは重要な問題じゃないかと思います。つまり、家族をもつ生活人としての思想的原点とは何か、ということをや問題にしたいのです。〔山領、石井、後藤、高島、安田 1970: 68〕

ここには家族を遮断しない限り非転向を貫徹しないとすれば「家族を持つ生活人」は何を譲れない「原点」とすべきかという問いがある。

この3年後、石井は「ナースの資格を持ち、フル勤務につきたいという姉」と「正面衝突」し親戚からも批判されて〔石井 1986: 191〕図書館を退職し、転職を経て日外アソシエーツに就職する。『転向』増補改訂版に収録された共同討議に誌上参加した石井は、女性の転向例においては「家族との桎梏、あるいは夫の云うままに変化する姿、同士としての男性に利用される姿が浮かび出ており、解放されぬへい息状況の中での重くらしい圧力が、より鮮明に扱えられる」とコメントした〔思想の科学研究会 1978: 447〕。

1997年に日外アソシエーツから『近代日本社会運動史人物大事典』が刊行される際には、710人の女性が「独立した顔をもって描かれて」いる点を評価し、女性の転向には社会、

そして家族や伴侶、男性同士からの「二重の抑圧」という「男性とは別の独自の思想的問題が含まれている」と指摘した [石井 1997]。女性の非転向・転向への問題意識は、自らの職業と家庭の狭間での葛藤を通して深化していったといえよう。

ところで鶴見は「転向問題に直面しない思想」は「子どもの思想」であり「就職、結婚、地位の変化に伴うさまざまな圧力にたえて、なんらかの転向をなしつつ思想を行動化してゆくことこそ、成人の思想」だとして [鶴見 1959a:3]、「権力によって強制されたためにおこる思想の変化」 [鶴見 1959a:5] という転向研に共有された定義より広い転向観をもつが、石井は転職と「転向」の関係をどのように捉えているのだろうか。

1986年、日外アソシエーツのデータベース局文献情報部長となっていた石井は、女性は同じ会社においても昇進の保証がなく、かつ結婚・出産など複雑なライフサイクルを背負っているため、「転職作戦」こそが状況に合わせて実力を蓄え発揮する方法であるとした。そして転職をむしろ有効な条件に転化してキャリア生活を持続しえた条件として①小なりといえども自分の専門領域をもつこと、②家庭生活の維持に肉親の力を借り、その関係に応じて仕事を変えたこと、③人脈・キャリア・専門技術を生かせる仕事を探し続けたことを挙げた [石井 1986: 195-196]。

今回のインタビューでも転職に関する肯定的な評価は変わらない。石井は「自分は転向したと思っているか」との問いに対しては「転向を権力による、あるいは組織による強制力によつての思想上の変更と定義すれば」と『転向』同様の定義をした上で以下のように答えた。

そういう意味での転向はなかった。むしろ思想の自立という問題、これが私の中心問題だったわけね、生き方の選択の問題、ともいえますね。(中略) だからむしろ追体験という学習方法から、一生どういうふうにして貫いていくのかってものを得たと思いました。 [石井 2009b: 6]

しかし後日スクリプトに目を通した上で送られてきたメモ<sup>xx</sup>には、「結局私にとっての転向は、自分の職場という根拠地を変えざるをえなかったこと」であり、戦前の転向でも家族の問題は大きな要因だったとして、「それと通じると思います」と記されていた [石井 2009b: 32]。ここには、自分なりの信条を貫くことを転向研から学び保ってきた自負と、しかし家族との関係で職場を変えたことは戦前の女性の転向と同様の問題を孕むのではな

## 第4章

いかという洞察、ひいては転向観の動揺がある。

石井は転向研の存在につき「自分の人生にとって選択を迫られた時、転向研に入った自分のモチベーションに立ち返ってそれなりに自分で筋を通すことができる」「いわゆるベースキャンプみたいなもの」だと語っている [石井 2009b: 18-19]。石井の「転向」概念は変容しながら常に生き方の選択の妥当性を問わせ続けているといえよう。

### 3-2-4 「実務家」として

石井は、転向研で最終稿を上げられなかったことについて以下のようにコメントしている。

8年間の歳月の中で学生から職業人、結婚とかいろいろ人生の変化による出来事があって、それが最後までやれる人と私みたいに落伍しちゃう人とか、そういうものを許す寛容さ、これは鶴見さんがもともと持っていた、「思想の科学」が持っていたものだと思うんだけど、そういうものがあつた。 [石井 2009a: 2]

石井はこの点につき「不義理をした」とも語った [石井 2000:18]。リライトの経緯を尋ねると、石井は打診を受けた記憶がなく、鶴見と安田が相談して決めたのだろうと推測した [石井 2010]。安田も書いたように安田の論文はその大半を石井の原稿に拠っており、石井がそのことに拘泥しないのは以下のことと関連する。

私は文字で表現することに興味がない、なぜ編集が面白いかというと、わけ分からないものを形として組み立てていく面白さ。(略) 自分のテーマをはっきり自覚して、いろいろと行動して、形としてバンと示すことに興味がある。 [石井 2009b: 23]

このように石井は文字で表現するより編集者として形にすることへの興味と矜持を語る。しかしその興味は元々自明のものとして石井のうちにあったものではなく、石井が幾度の転職を経て仕事を続け、かつ「思想の科学」に関り続ける中で見出してきたものでもあった。

前節で見たように、石井の転向研以降の「思想の科学」への関わりの一つには、中央公論社版『思想の科学』の編集委員を務めたことが挙げられる。石井は編集後記に以下のよ

うに記している。

「創刊のことは」の中に見られる“思想、というコトバの氾濫、いや「思想の科学」の“思想、なるものによってすら、少々自家中毒をおこしかけ、近頃、一体全体、シソー、とは何か、ということを考えている。(中略)だが少くとも、その人間の生活感情に根ざし、常にその人間の行動を支える核みたいなものだろう。生き生きとしたもの、エネルギーというイメージと結びつくものだと思う。[松尾 1959]

「創刊のことは」では「専門的思想家」と「実生活者」という言葉が使われ、従来、前者が「思想」を独占し後者と「思想」を結びつけないために生産的の仕事ができなかったと書かれていた [「思想の科学」編集委員会 1959]。石井は思想を「人間」の感情に根ざし行動を支えるものと定義して、「創刊のことは」を批判的に捉え返す。

1963年、石井は『「思想の科学」と私』と題した文章で専門的思想家と実生活者の「上下の直線関係」、あるいは前者が「専門」に思想を製造・販売し後者は使い手にすぎないことに疑問を呈し、「思想とはその人間の精神のエネルギーの運動、各人の生活の中の発想がもっともにつめられたもの」と定義し、求めるのは「専門であるプロの技術」ではなく「持続するそのエネルギー」だと主張した。このような主張の背景には、天皇制特集号事件の処理への批判を『思想の科学』本誌に載せないのなら「会のつくりかえ」には参加しないという「思い上りで書かれた学者の文章」<sup>xvi</sup>への「強い憤り」があった。もっとも先の批判は、多元主義を旨とし民主性を重んじるはずの思想の科学研究会において、迅速な対外対応が求められる場面で非民主性が生まれてしまった矛盾に言及したものだ。石井もその内容を完全には否定しないが、むしろそのような批判は会報に載せるのが妥当であるところ、その「学者」が社会的影響力の大きい雑誌本誌への掲載にこだわったところに「知識、理論の上にあぐらをかいた人間の甘さ」を見出している [石井 1963a]。

1968年から石井は占領研究サークルで占領文献目録の作成を目指したが「激務の合間の仕事のため」難航し断念された [石井 2011]。これは石井にとって2度目の「幻の成果」となった。

1975年、『会報』上で石井は会長職への抱負を以下のように述べた。

もし、私が、自分の経験をいかして、いささかなりとも会に役立つことといえば、多

## 第4章

くの方々といっしょに仕事を進めていく時のつなぎ役、いわば進行がかりとしてだと思えます。(略) 私が心がけたいことは、「生活する市井人」として、集団「思想の科学」とどうつき合うかということです。会の存在を、三十台までに「通過する集団」としてでなく、その年代、各々の生活の忙しさや、その他の状況に応じて出たり入ったり、それなりのコミットを幾度もしうる「無定形集団」として抱えることができたらと思えます。それが「去る者も追わず、来る者を拒まず」という日本的知恵と寛容さにとんだ、この集団の一つのありようではないでしょうか。[石井 1975]

石井は1年の任期の間に、会報の地方編集[思想の科学研究会 1976a]を実現した。また、会の財政を立直すため、会費の前納を促し、緊急カンパを実施する[思想の科学研究会 1976b]とともに、会費の値上げを提案した[上野 1976]。

一方でこの間石井は、別冊『辞典の歴史と思想』を編んでいる。ここで石井は、「サブカルチャーの辞典」と題し、表文化と裏文化、正統と異端、中央と地方、強者と弱者、公と私で後者の範疇に入る辞典を取り上げ解説を付した。そして編纂者のタイプとして①柳田・折口らに源を発する「野の学問」と②異端やタブー視される対象に執着する「奇人・変人」、「反俗」の人の2つの流れを挙げた[石井 1976]。

この別冊の中で、元転向研メンバーのしまね・きよし(1931-1987)は「私のつくりたい事典」として「日本社会主義人名事典」について書いた。しまねは、当時制作が伝えられていた塩田庄兵衛らによる人名事典は「非転向者」を中心にしたものになるだろうとし、これに対し「わたしの人名事典」は「二流・三流の転向者」や「スパイ」を含め、「社会主義になんらかの形で関係があったひとをすべて網羅したい」、そして出典・索引を厳密に考証した「研究のための基礎資料としての研究事典」にしたいと述べた。それまでにしまねは、書物から社会主義に関係ある人名を拾い出し、その人物の行動や出典を記した「人名カード」を20000枚ほど作っていたが、隣家からの失火のために3000枚ほどを残して焼失し、新たに作り始めたところだった[しまね 1976:88-90]。

しまねは1951年に東京外語大学を卒業後、転向研参加時は高校教師をしていた。『転向』には上巻に「日本共産党労働者派—水野成夫」、「新興仏教青年同盟—妹尾義郎」を、下巻に「偽装転向について—神山茂夫」を著した。転向研後は、1964年に高校を退職した後、第5次『思想の科学』の編集長を3年間務め、のち予備校教師のかたわら幕末・維新～明治の転向から大正・昭和・戦後にわたる転向を取り上げ<sup>xvii</sup>、またいわゆるスパイを取り上げ



るなど<sup>xviii</sup>、独自の視点で研究を続けていた。

1983年1月21・22日に橋倉温泉で転向研の同窓会が開かれた<sup>xix</sup>。途上、石井らはしまね宅に寄り〔佐貫1983〕、しまねのカードを目にする。

柏市に住んでいた時既に三万枚ほど作られていて、不幸にも隣家からの火事で燃えてしまい再現不可能と聞いていました。それを作製し直したというのですから、ほとほとすごい執念に打たれました。これは、彼がそれまでに積みあげた読書体験の中から生まれたもので、人名、職業名などのほかに典拠文献名や掲載頁が記入されており、まさに文献人名索引とでもいうもので、資料調査と考証を旨とした彼の方法論の源のように思えました。何とか日の目を見せたい、こんな思いが私の脳裏をかすめました。

〔石井1987〕

人名事典や索引を手がけてきた石井から見れば、しまねのカードは「形」になる可能性を十分に有していた。石井は日外アソシエーツとの仲介に動き、旧転向研メンバーを中心とする『日本社会主義人名事典』の編纂が具体化し始める〔しまね1986〕。

カードを中心に『特高月報』や『思想月報』から名出しすると当初5万から6万名になると思われたが、すでにしまねは胃潰瘍におかされ、何度か小休止しつつ1985年8月に出されたプランでは5000名に絞り込み、しまねと旧転向研のメンバーに加え興石正、柏木隆法が中心となって執筆することとなった。しかし1987年11月にしまねの病状は悪化し死去、計画は白紙に戻ることになる。

石井は追悼文で、しまねの発想が「中央の活動と、その時々を中心人物にスポットをあてた、既出の運動史や思想史への根本的な疑問」にあり、「個々人の生活の陰や、消えていった人物のその後の人生を浮かび上がらせてこそ、本当の歴史を描くことができるという考え方」をもっていたと称し、これが完成すれば「明治以降の思想史をミクロの側から逆照射するものになるはず」だったと惜しんだ〔石井1987〕。

その後いいだもも(1926-2011)が編集代表を引き受けて計画は再稼働し、執筆者370名、編集者56人の共同作業〔いいだ1997〕により『近代日本社会運動史人物大事典』全5巻が完成した。その特徴は、しまねの発想を継いで、運動の周辺部の人物やマイノリティーの活動を多く取り上げたところにある。石井は『会報』に文章を寄せ、しまねの「

## 第4章

転向研究、の到達点としての人名事典への執念」がいだらを動かしこの成果を生んだと評した [石井 1997]。正史で扱われない人物の調査・考証に徹したしまねは「サブカルチャーの辞典」で指摘された第2のタイプの編纂者であり、石井はその「執念」を重視する。

1995年収録の「女性会長第一号」と題したインタビューで石井は「会を保っていくためには実務家が必要だな、と思い」会長職を引き受けたと話し、会の運営は「思想を糧にしている人よりも、実務をやりながらかかわるといの方が正常だと思います」と述べた。「思想」で食べる人と「実務家」の区別はかつて「専門的思想家」と「実生活者」を止揚しようした姿勢と相反するようにも見える。実務家としての自己定義は、自らが生活人・職業人でありながら研究に取り組み挫折した経験と、研究会の運営面での実績、そして佃との共同の仕事やしまねの研究を形にする経験を経て形成されてきたといえよう。

石井は「思想の科学」に関り続けてきた点につき以下のように述べている。

私は「思想の科学」がありがたいなあと思うのはね、休眠状態を許してくれるわけ。少し暇できたから手伝うわよ、手伝えるわよとか言って出てくる、出たり入ったりが自由なのよ。あいつはもう除名しましようなんてのはないわけだから (笑)。だからパーク的な組織です。(略) デラシネ的な動きの根みたいなものね、さっき言ったベースキャンプです。 [石井 2009b: 22]

このように石井は「思想の科学」を「パーク的組織」、「デラシネ的な動きの根みたいなもの」、さらに先の転向研についての表現を借りて「ベースキャンプ」と表現する。出たり入ったりが自由という点では 1975 年の「無定形集団」と相通じるが、つねに立ち返るベースキャンプ、「根」といった表現はさらに自らの存在と相即不離なものとして捉えているともいえよう。

### 4. おわりに

以上、インタビューを主たる素材として、「思想の科学」の共同性を鶴見俊輔と石井紀子それぞれの立場から照射した。転向研究は、鶴見にとっては自身と父親の立場の変節をモチーフとしつつ、より社会的に重要な立場にあった場合に取り得る道筋を、追体験による

伝記的な手法で表し得るか、さらにはそれを自分より若い世代と共になし得るかを問う実験的な試みであった。その際に鶴見は、年少者にとっては敗戦を境とする全体主義から民主主義への、いわば社会そのものの転向を目の当たりにした体験が彼らのモチーフとなったと捉えるが、年少者の体験は仔細に見ればより多様であり、それらが重なり、関心が交錯しながら共同研究が展開され、その後のそれぞれの研究と生き方の一里塚となった。研究者にならなかった石井の場合、戦争・敗戦体験の意味づけ、信条と転向研・「思想の科学」とのつながりは鶴見の見解からこぼれ落ちる部分を多く含んでいる。また女性の転向への問題意識の深化と「実務家」としての自己規定による「思想の科学」への貢献といった転向研以後の展開も、戦争責任と戦争体験への意識において世代間の架橋を重視した鶴見の意図をはみ出し、越えてゆくものであったといえよう。

石井は「思想の科学」と転向研への参加動機の源には戦争体験があるという。これは天野がいうところの「体験縁」であると一応はいうことができる。しかしその上で石井の語りを詳察すると、石井は敗戦による秩序や価値の崩壊が自立への志向を促し、戦中の体験は自立への第一歩になったと肯定的に捉えている。これは鶴見の「恨み」を伴う戦争体験の記憶の仕方とは反対のベクトルの意味合いを有しているといえる。

石井を転向研究へと促したものは自分がその中を生きながら知らなかった時代の事実を知ろうとする学習への興味であり、それは一方で戦争・敗戦体験の正の意味を見出させながら、他方で当時抱えていた職業の選択の問題と結びついて「民衆のため」に生きる生き方へとつながっていく。石井の中では「思想の科学」の「大衆化」路線と「民衆の大学」としての図書館という職場選択が一致して把握され、その接点には「独学」の原体験をもつ佃実夫が置かれる。自分の人生を統合的に把握しようとする傾向は、石井が「思想の科学」とのつき合いに期待した、外から自分を眺める視点の確保とも関係しているだろう。

石井は共同研究において自分の体験ではないものを追体験する中から信条を貫く生き方を享受した。石井はその後の職業人生を振り返り、家庭の問題に直面して転職を経つつも人びとに知を開く仕事に携わり続けたことで「小さくても」「それなりに」信条を貫いたという矜持を持つ。他方で女性の転向と家族の問題への意識を深め、その点からすれば自分の転職も戦前の転向に通ずる問題を孕んでいるのではないかと自問する。石井にとって「思想の科学」と転向研は自分の生き方を問う時に立ち返る「デラシネ的動きの根のような」存在であり、「転向」はつねにいかにかに生きるべきか、何に対して何を貫くべきか考える種を石井に提供し続けている。その意味で石井にとっての「転向」は内面的なものであり、鶴

## 第4章

見のように政治的・法的ではないにせよ体験ないし事実としての転向がまずあって、それをつねに意識にのぼせることで自分の規範とする場合と異なっている。しかし自分の体験の意味を反芻することで現在と未来の生き方の羅針盤としようとする志向は鶴見と石井で共通している。それは戦争体験の規範化を戦中派で完結させないようにしようとした鶴見の意図のある方向における実現化であり、「差異縁」が生み出した果実であったともいえよう。

石井が守り育てた職能は、書誌・考証に優れたしまねの仕事や、「思想の科学」の成果を検討する基礎資料を形にすることへもつながった。「思想の科学」の半世紀にわたる雑誌刊行、研究会としての60年以上の存続と成果の産出を可能にしたのは、名を表に出す研究者とともに、組織運営や、研究の前段階としての事実収集、後段階の書誌的作業に徹し、人脈を生かして研究を形にする「実務家」が関わっていたことが指摘されよう。換言すればアカデミシャンと実務家が混在する在野性が「思想の科学」の知の創造と産出を支えていた。両者間にはともすれば階層性が伴うが、佃やしまね、そして三部作に対する石井の評価からは、実務家こそが「思想の科学」の目指す民衆のための知の構築に貢献してきたという自負が窺える。

戦争体験と敗戦体験の意味はそれが問われた時代の文脈に規制を受けつつ個々人で多様であり、共同性のありようも時代や地域、さらにコミュニケーションツールを含む技術の進展によって変容する。より多くのケースを精察した上で多面的に考察していくことが必要だろう。

---

<sup>i</sup> 2010年1月11日 14:00-16:20 (同席者横山貞子氏、鶴見太郎氏)、場所は鶴見邸(京都)。

<sup>ii</sup> 第1回は2009年11月20日 13:00-15:00 (同席者余川典子氏、山領健二氏)、第2回は2009年12月16日 11:00-11:50、13:00-15:00 (同席者余川氏、終盤に山領氏)、第3回は2010年1月29日 11:00-12:00、13:00-15:00 (同席者余川氏)、場所はいずれも思想の科学社(新宿区百人町)。

<sup>iii</sup> 「庶民列伝ハンドブック試案」『思想の科学会報』(1), p.8-10, 1954-7

<sup>iv</sup> トーマス・マン著、加藤子明訳 1948. 『十誠 (ダス・ゲゼッツ)』世界の日本社, 196p.

<sup>v</sup> 成果は桑原武夫編 1954. 『京都人文科学研究所報告, フランス百科全書の研究: 1751-1780』岩波書店, 302, 18, 87p.にまとめられている。

<sup>vi</sup> 「東京の小グループ」『思想の科学会報』(5), p.4

- 
- vii 山領健二氏所蔵の資料により確認。
- viii 山領氏所蔵の資料による。資料2-②末尾に写真を掲げた。
- ix 成田龍一は東洋文庫版『転向』の解説で、この追記を引きながら「共同研究における信頼関係が培った代打執筆であった」と評している〔成田 2012b: 450〕。妥当な見解であるが、このリライトは、その後の石井の「思想の科学」の「実務家」としての関わりにも影響を及ぼしているのので、3-2-4で再び論じる。
- x 「シンポジウム、学問・思想の方法をめぐって」『思想の科学会報』(56)、小田の提案は10-11頁。
- xi 石井紀子・勝又美佐子（都立日比谷図書館）、稲村徹元・枝松栄・山口美代子（国立国会図書館）〔石井 2011〕。
- xii 自主刊行移行後、思想の科学研究会内のサークル・地方グループの研究成果は『思想の科学』本誌でなく別冊に盛られるようになった。
- xiii 思想の科学研究会索引の会 1999、鶴見ほか編 2005、思想の科学五十年史の会 2009の三冊を指す。
- xiv 山領氏所蔵の資料を参照した。
- xv 「追記」として第2回インタビュー（資料2-②）末尾に添付した。
- xvi 上記稲葉（当時東大新聞研究所助教授）の文章を指すと推定される。稲葉は「投稿が拒否されたらただちに退会する。掲載されたら研究会の『つくりかえ』作業に対してできるだけの責任を負う」という「緊張状態」に自分を置いて批判原稿を執筆し、掲載が拒否された翌日退会届を出した。その後鶴見から会報への掲載要請があったが「外部メディアにはのせないで内部メディアへ、という『執行部』の提案」は『集団エゴイズム』の発露だと批判している〔稲葉 1962:1〕。
- xvii しまね・きよし 1969.『転向: 明治維新と幕臣』三一書房; 同 1969.『民権思想と転向』紀伊國屋書店; 同 1976.『明治社会主義者の転向』東洋経済新報社など。
- xviii しまね・きよし 1983.『日本共産党スパイ史』新人物往来社など。
- xix しまねは参加者の報告を集めて謄写版の『転向研究通信』1号（1983年9月15日）、2号（1983年11月1日）、名を『サスビラ通信』に変えて3号まで出した。なお3号の日付は198年（1983年?）12月1日とあるが本文に「すでに二月になってしまい」とあるので1984年春の発行と思われる。

## 第5章

### 第5章 2つの天皇制特集

#### 1. はじめに

前章までに、「思想の科学」の「科学」の破綻から 1950 年代に試みられた、「思想」の解体としての「実感」を基とする生活綴方、あるいは世代と属性の異なる人たちの共同研究の場としての小集団の特徴を明らかにした。本章ならびに次章では、1960 年代以降の『思想の科学』の論調を明らかにする。

本章では「天皇制」<sup>i</sup>について考察する。戦後社会において天皇制とは何だったのだろうか。それはどのように捉えられ、語られてきたのだろうか。

終戦後、天皇は神聖不可侵の「現人神」から「人間」となり、日本国および日本国民統合の「象徴」と規定された。戦前には抑圧・抑制されていたところの、天皇制に関する自由な議論も解禁される<sup>ii</sup>。知識人はこれを打倒すべき体制として、あるいは日本の文化や思想が克服すべき問題として批判したが、時にそこには天皇個人への敬愛や戦前への郷愁、ないし戦争と敗戦をもたらしたものへの恨みや怒りといった心情も伴っていた。それゆえ時が下ると、天皇制をめぐる論議は、戦争体験をもつ世代とともたない世代との心情の裂け目、断絶が現れる場ともなる。赤坂憲雄は自らの世代は「希薄な天皇体験」しかないとして、前世代の天皇制の論じ方を「体験としての天皇制」、自らを含むそれ以降の世代の論じ方を「問題としての天皇制」と呼んでいる。これに対し吉本隆明は、世代の断層を越える体験の表現、記述の仕方による普遍的知の必要を主張し、鶴見俊輔、橋川文三、安田武ら「戦中派の戦争体験を語り継ごうという方向」における体験への固守、普遍性の考慮の欠如を批判した [吉本, 赤坂 1990: 105-109]。

近年では天皇制というよりも天皇像、支配構造というよりは天皇個人について解明しようとする試みが前面に出つつあるが<sup>iii</sup>、敗戦から昭和天皇死去に至る 40 余年間のある時点までは、天皇制は論壇において主要かつ広汎な話題と関連付けて展開されていた。これをそれぞれの文脈において明らかにすることは、戦後の論壇と知識人の関心および態様、そして「戦後民主主義」の歩みの一端をひも解くことになるだろう。

『思想の科学』の半世紀間の歴史のうち天皇制との関連で比較的認知度が高いものとしては、1962 年の新年号として企画編集された「天皇制」特集号を版元の中央公論社に断裁破棄された「天皇制特集号事件」が挙げられるだろう。第 1 章で見たように、印刷・製本



まで終わった段階で断裁破棄するという異例の処置と、のちに、中央公論社が公安調査庁と右翼の人物の求めに応じて当該特集号を閲覧させていた事実が発覚したことで、事件は思想・言論の自由の問題として反響を呼んだ。これを機に思想の科学研究会は思想の科学社を立ち上げて自主刊行に移行し、創刊号として当該特集号を刊行した。

だが当該特集号の内容については当時から現在に至るまで詳細に検討されたとはいえない。また天皇制という論点に限らず、『思想の科学』はしばしば中心人物である鶴見俊輔の思想とほぼ同視して論じられる<sup>iv</sup>。その際取り上げられるのは『共同研究, 転向』はじめ少数のものに限られ、ある論点について雑誌『思想の科学』での変遷を追う試みは充分ではない。もちろん編集への持続的関与と執筆頻度から鶴見の影響抜きに『思想の科学』の特質を語ることはできないが、雑誌に盛られたもの全てを鶴見一人の思想に還元してしまうのもまた矮小化した見方であろう。

本稿は、『思想の科学』における天皇制についての議論を、1960年代と70年代に組まれた2つの特集を中心に追うことで、「思想の科学」の持つ問題を戦後の推移の中であぶりだそうとするが、本題に入る前に次節で戦後の天皇制論の変遷を概観する。その上でまず、『思想の科学』の創刊同人であり、戦後いち早く天皇制について論じ、その後も様々な論及した丸山真男の主張を、『思想の科学』における発言を交えながら概観して問題系を抽出し、次に鶴見の立場を確認した上で、『思想の科学』の特集と連載を時系列で追い、問題系の変化や新たな視点の導入の過程を跡付ける。それにより『思想の科学』の特質の一端を明らかにするとともに、知識人の態様の変容、ならびに吉本が批判したような体験への固守と普遍性への考慮の欠落の当否についても考えたい。

## 2. 同時代の思想状況——天皇制論概観

「思想の科学」の天皇制論に入る前に、他の天皇制論について、とくに「思想の科学」における議論が本格化する1960年代前までに提示された論点を、その社会的背景とともに見ておく。

複数の論者が指摘するように、戦後初期は天皇制論の一つのピークを成している<sup>v</sup>。憲法改正が日程に上ると、諸政党は草案を発表した。戦後合法政党として活動を始めた日本共産党も1946年6月に草案を発表したが、その前文には「天皇制被支配体制」が「無謀な抵抗の侵略戦争」をもたらし、多くの人命を奪い窮乏に陥れたこと、天皇制は「人民の民

## 第5章

民主主義体制とは絶対に相容れない」ものであり廃止されるべきことが明記されていた。

対照的に、天皇不親政の伝統を強調して民主主義との親和性を強調したのは和辻哲郎、津田左右吉ら「オールド・リベラリスト」である<sup>vi</sup>。たとえば津田は、戦中の「天皇親政」は軍部と官僚が国民の皇室への敬愛を利用して創作したものであると批判し、「歴史的事実からすれば皇室は国民に権力をもって対したことはなく、「国民的結合の中心であり、国民的精神の生きた象徴」であるとして、天皇の戦争責任を否定するとともに、民主主義との両立が充分可能であり、むしろ国民の皇室への「愛」によって皇室の永久性を確実にすることこそが民主政治の徹底であると結論づけた [津田 1946]。これに対し高倉テルは、天皇制は封建的・絶対主義的な専制政治の上にたち、日本の地主と資本家の利益を代表する「日本最大の財閥」であり、権力の総体の頂点にいた天皇に責任がないということはないとして、津田を批判した。しかし同時に高倉は、「大むかしからあった」「皇室へのすうはい」が「政治的にりようされたから、ややこしく」なったが、本来これは「政治的な問題ではなく、文化的な、または教育の問題」であるとして、別個の考慮が必要であることを示唆している [高倉 1946]。ここで注意すべきは、高倉が経済・政治面における皇室の役割については共産党と同じ見解を取りながら、「皇室へのすうはい」が歴史的に存在し、戦中はそれを為政者が利用したことについては津田と一致しているという点であろう。

いずれの立場をとるにせよ、背景には戦後改革の最重要項目ともいべき憲法改正における「民主主義」との両立の可能性と、極東軍事裁判において天皇の戦争責任を問うことの是非と見通しが関わっていた。しかしながら裁判の召喚を免れる形で天皇の戦争責任が国際刑法上は不問に付され、日本国憲法に象徴天皇制が規定されて国内における法的基盤の整備を見ると、論争は収束していった。

1950年代に入ると天皇制に関する論議は再び活発化する。背景には、米ソの対立が鮮明になる中での再軍備の進展があり、天皇が再び軍の精神的シンボルとして浮上することに対する懸念が強まった。たとえば『思想』1952年6月号の「特集、天皇制」の巻頭に掲げられた「はしがき」は、講和条約発効の前後から、「いわゆる逆コースの風潮」「反動的な空気」が如実になっており、「天皇の権威をもとへもどそうとする気運がしだいに強くなりつつある」として、天皇制に関する研究の必要を主張する。そして、戦後間もなくの天皇制論はもっぱら天皇を「国家の権力の頂点をなすもの」として捉えていたが、政府およびマス・コミはむしろ天皇の「非政治的・人格的」な面をクローズアップして民衆に「具体的な親愛感」を喚起しようとしていると指摘して、「天皇制という非人格的な機構」を通じ

て「具体的な特別の人格である天皇がどのような政治的機能をいとなむか」という問題、ならびに「天皇制のイデオロギー的な面、国民のあいだにおけるその心理的な基盤」を明らかにするところに本特集の意義があると述べた。本特集中、最もボリュームの多い林茂と今井清一による「天皇の政治的地位」は上記第1の論点に関わり、昭和初期から敗戦に至る20年間に天皇が個々の政治的事件に際して果たした役割につき検討している。第2の論点に属するものとしては石田雄による「イデオロギーとしての天皇制」、南博による「天皇制の心理的基盤」、そして後述する、鶴見俊輔による「日本思想の特色と天皇制」が挙げられよう。

他方、天皇制を近代のものに限定せず古代以来の天皇、さらには「天皇」という称号が出現する以前にまで遡って、天皇の成立と存続の過程を問題にする議論も見られた。『日本歴史』の1952年6月号の特集『『天皇』の歴史的な性格』はこの点に焦点を当てており、豊田武による「中世の天皇制」と、先の『思想』の特集における安田元久による「封建時代における天皇」は、永原慶二により批判されることになる。すなわち、豊田と安田は、中世における天皇制の存続を、封建的支配者の欲した権威の源泉という側面と、伊勢参詣の普及という形での天皇尊崇意識の武士層から庶民層への拡がりから説明するが、永原は承久の乱を境に古代的天皇制の超越的な権威は存在しなくなり、権威の根源を神器に求めるような抽象的な方向に「逃避」「没落」したと見る。しかしながら室町政権の初期、地方領主層が地域権力として確立する兆しや、幕府が派遣した守護が大名化する動きを抑えるため、尊氏は武士たちの天皇の権威を否認するような行為を重罪として扱い、天皇制の権威を「再生産」したのだという。また、伊勢参詣については、関所の濫立に示されたような分断支配の排除、換言すれば「下からの国内統一と彼らの民衆的連他既成の形成という期待」を、「国民共通の神」に詣でることで表現した可能性を提示している〔永原1952〕。このような議論は、「民族」さらには「国民」の成立期に関わるものであり、独立に関連して立ち上ってきていると見ることができる。

しかしこれ以降、歴史学の分野において天皇制論は低調になっていく。この点につき網野善彦は、天皇ないし天皇制について論じること自体がその存在を強化するという「奇妙な」意識が働いたとして、戦後歴史学の天皇制への取り組みの不足を反省的に回顧している〔網野2002: 8-9〕。このような意識の背後には大衆社会状況の進展も作用している。1959年4月号の『中央公論』に掲載された松下圭一の「大衆天皇制論」は、前年の皇太子ご成婚に伴うブームを受け、「大衆社会状況においては、君主制もまた大衆君主制へと転化し、

## 第5章

君主はスターとなる」こと、そして、権力抜きで「君臨するのみ」の君主は、大衆の理想とならねばならず、それは「幸福な家庭」こそが大衆天皇制のシンボル価値であると主張していた [松下 1959]。これに先立ち松下は、大衆社会状況下で国民の関心の消費大衆娯楽への吸収が急速に進んでいると指摘し、「歴史的に特殊な国民的伝統を再編成」して革命コースを見直すべきだと主張していた。1950年代以降、共産党はレッドパージに対抗して火炎瓶闘争、山村工作隊など急進的な路線をとったが、1955年の六全協で放棄され、スターリン批判後はますます混迷を深めていた。マルクス主義の発展史観に拠る若い歴史学者らが「大衆の中へ」をスローガンに展開していた国民的歴史学運動もこれと消長をともにしており、次の具体的な革命路線を描けぬまま、大衆社会状況に巻き込まれることを警戒して、「天皇」や「日本国」について正面から論じることを回避するようになっていった。60年安保における全学連をはじめとする諸団体の共産党離れは、実践面においてもマルクス主義の影響力の低下を示すこととなった。

しかし1960年代後半になると、「明治百年批判」の文脈で再び天皇制の問題が浮上してくる。政府は1966年春から1968年秋に「明治百年式典」を行うべく準備を進めた。これに対していわゆる進歩派の知識人から反対の声が上がった。とくに集中的にこの問題を扱ったのは色川大吉、安丸良夫、鹿野政直ら民衆史の研究者が拠った歴史学研究会であり、その編集による『歴史学研究』は1967年11月の「明治百年祭批判: 現代ファシズムの批判と行動」に続いて1968年10月には「天皇制イデオロギー: 明治百年批判」と題した特集を組んだ。その巻頭、「明治百年祭」は「人民主権か天皇主権か、戦争か平和か、独立か従属かの重大な分岐点である1970年の前哨戦であるという本質をもっている」と指摘しつつ [歴史学研究会委員会 1968]、学問的には「天皇制イデオロギー」の形成・確立過程を民衆意識との関わりにおいて明らかにするべきだとした [編集委員会 1968]。ここには、天皇制を、明治以来の近代化がもたらした戦争、その敗北の帰結としての占領、対米従属というすぐれて政治的な視角から捉える観点と、明治百年祭と新安保条約更新という現実を目前にして、マルクス主義の想定してきた「歴史」の破綻とその要因をさぐる必要の認識が窺える。

1970年に入って天皇制の議論に新しい視角を与えたのは、文化人類学、とりわけヨーロッパ以外の地域の王権との比較研究である。『文化と両義性』をはじめとする著書で中心／周縁理論を展開した山口昌男は、論文「王権と象徴性」で、王権を穢れの浄化装置と見做す民衆の共同幻想を指摘して、支配／被支配の関係、さらにいえば被支配の形態として屈

服と抵抗以外のあり方を示唆した。

だが昭和天皇が死去すると、「昭和」という時代ならびに昭和天皇への関心が再び高まる。侍従や御用掛といった側近の日記という体裁をとった天皇の発言の記録<sup>vii</sup>や、昭和史を通観するドキュメント<sup>viii</sup>が刊行されて、いわゆる「昭和史ブーム」が起こった。その中で、改めて昭和天皇の戦争責任も俎上に上った<sup>ix</sup>。

以上のように、戦後における天皇制論は、占領期初期の戦争責任の有無を含んだ新憲法上の地位の問題という、昭和天皇そのものの扱いを前提とした議論と、独立、講和に際する民族のシンボルとしての天皇すなわち中世・古代にまで遡る「天皇」、そして皇太子の成婚に絡んで、裕仁でなく明仁のイメージをめぐる議論、1970年代以降の文化人類学における、近代の産物とは異なる古代的宗教王としての天皇、そして昭和天皇死去後の再び裕仁個人の人物像や戦争責任を論じたものというような変遷が見られた。そこには近代絶対制と古代的宗教王という権力と権威の両面性と、それでは論じ尽くせない、論者の世代や体験の投影、あるいは個々の天皇に象徴される昭和と平成という時代へのまなざしという残余の存在が看取される。このような複雑な諸相を持つ「天皇制」を論じることで、「思想の科学」は何をしようとし、何をし得たのであろうか。以下、丸山真男と鶴見俊輔の対比から見てゆく。

### 3. 丸山真男の「普遍的原理の立場」

1946年5月号の『世界』に掲載された論文「超国家主義の論理と心理」において丸山が問題としたのは「自由なる主体意識」の欠如であった。すなわち、官僚や軍人をして天皇制の国家機構を運転せしめる精神的駆動力は、遵法意識や社会分業に基づく職能意識ではなく、権威の究極的実体であり道徳の源泉とされるところの天皇への近接度による優越意識である。そこでは寡頭勢力も「被規定的意識しか持たぬ個人」により成り立っており、「我こそが戦争を起した」という「主体的責任意識」は成立し難い。また一般兵隊も外地へ赴けば「皇軍」として相対的に優越的地位に立ち蛮行を振るう。さらには究極的価値とされる天皇も「天壤無窮の皇運」という伝統の権威を負ってはじめて絶対的価値の体現として認められるため、そこに主体的自由は存在しない[丸山 1946]。これにより丸山は国民を戦争に駆りたてたイデオロギーの一端を明らかにしようとしたが、ヨーロッパ近代に自由な主体が確立していたことを前提に、日本においてこれが欠如しているとする視点は、



## 第5章

マルクス主義者から「近代主義」であり社会的認識を欠く「主体性論」であると批判された<sup>x(8)</sup>。また、天皇制の「理念」によって「一般兵隊」の「蛮行」まで説明するのは「仮構のイメージ」だとして、のちに吉本隆明からも批判を浴びた [吉本 1963→1969: 23-30]。

この点につき丸山は、『思想の科学』1967年5月号に掲載されたインタビューにおいて、明治以降の「近代主義」が結局は「欧米」という名の「外国主義」であったことと、それを自らの責任において断つ必要を認めつつ、「土着主義」もまた「外発」と「内発」という発想に固着し、「島国の根っこ」や「土壌」によりかかっていると批判した。さらに、外国主義になることがあっても「特殊性の強調が『ウチ』的日本主義になる」よりは「ましだ」として、普遍主義の立場を主張する [丸山 1967: 104-105]。ここには普遍と特殊、欧米と日本を対照させて後者への傾きを警戒する丸山の態度が明確に示されている。

しかし他方において丸山は、自らに「原爆体験の思想化」が欠落しているとも語った。丸山は1945年3月、2度目の召集を受けて広島市宇品の陸軍船舶司令部に配属された。8月6日の朝は点呼で広場におり、高塔に遮られて熱の直射や猛烈な爆風に曝されずに済んだが、その翌々日、「放射能になどということに無知」であった丸山は、爆心地近辺をさまよい歩く [丸山 1965]。1969年に肝炎で入院した丸山に取材した中国新聞の記者は、「記事<sup>xi</sup>にはしなかった」部分として、丸山は戦後患ってきた結核や肝臓疾患、白血球の減少は原爆と関係があるのではないかと疑いつつ、自分は「傍観者」「路傍の石に過ぎない」と言って「被爆者」と名のことへのためらいを見せていたと書いている [林 1998: 7-8]。

1967年のインタビューでは「原水爆戦争が共滅戦争だということは抽象的には考えて」きたものの「自分のなかの体験に裏付けられているとはいえない」とし、「戦争一般の残虐性ということのなかに原爆の問題も解消しちゃったんでしょ」と語る。そしてそれとは対照的に「普通、観念的といわれている民主主義とか基本的人権」は「ほとんど生理的なものとして、自分のなかにある」と述べた [丸山 1967: 109-110]。ここで丸山は体験と思想を対置しながら、自分にとっては後者の方が生理的だとして「普通」の見方をひっくり返す。この転倒の背景には、原爆体験も含む丸山の軍隊経験がある。

丸山は自らの軍隊経験につき、戦後まだ日の浅い1949年における『思想の科学』の特集「兵隊の解剖」の鼎談で以下のように述べた。

日本は独立国家である以上軍備を持つべきだということを物の判っているインテリでも言うのですがそういうことをいう人は日本の軍隊に入って悲惨な体験をしなかった



人じゃないかと疑うんです。本当に経験した人などは如何なる形でもあれ、日本が軍隊を持つということは真平だという、全人間的な反発感情があるのが当然じゃないかと思うのです。抽象的な議論としては幾らでも言えるけれども僕はどんな場合でも軍隊は御免だという感じだ〔飯塚, 丸山, 豊崎 1949: 82〕

ここで丸山は再軍備反対の根拠に「日本の軍隊」における「悲惨な体験」に由来する「全人間的な反発感情」を置いている。これは上述の丸山の体験の捉え方、とくに原爆体験の解消の仕方と相反するようにも見えるが、他面において、民主主義や基本的人権を丸山のうちに生理的ならしめたものの一端を言い表しているともいえよう。

昭和天皇死去後の 1989 年 3 月、丸山は自らの青年期における天皇および天皇制への心情を回顧した。その中で丸山は、張作霖爆破事件後の田中義一内閣の総辞職を決定づけたのは天皇だとしてジャーナリストの父・幹治が「天子さんはえらい」と言うのを聞いて以来、昭和天皇に好ましさを感じていたことと、大日本帝国憲法に規定されている立憲主義的天皇制を肯定していたことを記している。天皇制と天皇に対するプラスのイメージは、一高在学時に唯物論研究会の講演会に出席して検挙され、官憲の言葉から国体を否認する「国賊」は「虐殺」してもよいという考えが「常識」になっていることを知らされた後も「依然として続い」と振り返る。そして、「超国家主義の論理と心理」はその「思い入れ」への訣別であり、自分に対する「必死の説得」であったと述べている〔丸山 1989〕。ここからは、戦前・戦中の丸山における昭和天皇と天皇制に対する抜きがたい信頼と愛着が、いわば逆説的に戦後の丸山の普遍主義への志向を準備した様子が見えてくる。

このように丸山においては、特殊と普遍、体験と思想という対照軸に日本と欧米が重ね合わされ、後者から前者に批判的なまなざしが向けられているが、それは二つの体験——検挙事件を経ても変わらなかった天皇への好意的感情と天皇制への肯定的な認識、ならびに軍隊体験——を通してもたらされた志向であったといえるだろう。すなわち日本の軍隊という、基本的人権を蹂躪する行為に満ちた空間に身を置いた体験は、丸山をして超国家主義のイデオロギーの解明へと向わしめたが、天皇個人と天皇制に対し愛着の感情を持っていた丸山にとって、西欧由来の民主主義を核とする普遍的な思想への志向は、自らの感情とは異なる次元で天皇制を論じるために必要な、ある種の飛躍であったともいえよう。

## 第5章

### 4. 鶴見俊輔と生活綴方

他方、鶴見俊輔は、言葉の面から天皇制の問題と国家を越える思想の可能性にアプローチする。

創刊号に寄せた論文「言葉のお守りの使用法について」で鶴見は、戦前は「国体」、「八紘一宇」、戦後は「自由」「デモクラシー」といったように、「社会の権力者によって正統と認められている価値体系を代表する言葉」を、「自分の社会的・政治的立場をまもるために「意味がよくわからずに」使う習慣を「言葉のお守りの使用法」と呼び、これが日本でさかんである理由を「天皇制」に求めた。つまり、「お守り言葉」の多くは、勅語をとおして教育、メディアによって配給されたが、日本人は封建制から抜け出して間もないため権力に便乗しやすく、貧困のため教育水準が低く、しかも漢字まじりの難しい文句を分からないままに復唱する国語教育により、言葉の意味を漢字言葉のつくりだす情緒として捉える習慣があり、これが言葉のお守りの使用法が大きな力を発揮する基盤となったと指摘する。

さらに鶴見は、マリノウスキーの論文「未開人の言語における意味の問題」を引きながら、未開人が「自分の言おうとすることをこまかくつめたくぶんせきしてのべることをしない」のと同様、日本においても「言うべきことをあきらかに言葉にする習慣がなく」、言葉の意味はその言説があらわれた状況に依存するにもかかわらず、状況の吟味を行わないと批判する。そして最後に、「急進的政治家」はふるいお守り言葉の体系を崩そうとしているが、「新しいお守り言葉の系列によっておきかえるだけに終わるかもしれない」と戒めた〔鶴見 1946〕。

以上のように鶴見は、言葉のお守りの使用法が大きな力を発揮してきた条件を、日本人と日本社会のいわば「非近代」性に起因するものとしてとして否定的に評価した。しかしこの態度は「知識人」としての自分への批判的眼差しを経由して転回していく。

1952年6月の『思想』に発表された「日本思想の特色と天皇制」で鶴見は、村人、子供、および大学卒の「知識人」との会話記録から、天皇制の正当化は、天皇を「国の柱」、「国民のお父さん」と見る「美的比喩」、あるいは「何となく日本の国が安定する」「いろいろの点から捨てきれない」といった「私的」ないし「国民的感情」と結びついているとし、知識人も「意味構造上の差は、言葉の差ほどには明白ではない」と分析した〔鶴見 1952: 44-52〕。その上で「日本の知識人」の問題点を以下のように指摘する。

日本の知識人が、日本の庶民から思想的に分離しているように考えるところに、かれら（ぼくら）としての浮き上りの真の原因があるように思われる。「近代化」の必要を説くについても、ぼくら自身が近代化されているかのように考えて、日本の庶民の近代化をサトシテいるのは、ぼくらの思想が天皇制官僚としての言語的刻印をうけていることをしめし、かえって、ぼくらにある形での天皇制依存の状態のあかしとなっている。[鶴見 1952: 52]

ここで鶴見は自分を含むものとして「日本の知識人」をとらえ、「庶民」に対し「近代化」を説く啓蒙的な態度を批判している。鶴見はこのような批判からさらに進んで、「日本の庶民」の「文化的伝統を尊重」して「美的比喩の性質が自然にかわってくることにむかって、具体的に努力すべき」だとして、農村での貧しい生活を子どもたちが記した『山びこ学校』を紹介し、「美的比喩のわき出てくる根源の感情領域にはたらきかけている」点において重要であり「天皇制にたいしてもっとも重大な点で変革的」であると高く評価した [鶴見 1952: 52]。身近な問題である生活の貧困を表現する生活綴方と、大人の生活記録運動は、50年代前半の『思想の科学』の主要なアプローチの1つとなっていく。

鶴見の批判的眼差しは戦中の自分へも向けられていた。鶴見は戦中、軍属としてバタヴィア武官府に勤務していたが、ある日スパイ容疑で現地住民を含む数十人が捕らえられ、嫌疑が明らかにならないままに病人が出た。病床と薬の不足からこの病人は「白い粉」を飲まされ処分される。鶴見は中立国の住民を殺すことは国際法違反であるが、「それはよくないからやめなさい」と提案しても「採用されないことも分かっている」し、「危険におちる」と逡巡し結局黙ってしまう。「効果をうまぬとわかっている善行をくわだてることは、なさねばならぬ正義か。なさねばならぬことではないが、しかし黙って見ていることは正義と言うべきことではない」 [鶴見 1956]。鶴見はこのように振り返り、正義／不正義、効用の有無の認識からは行動の契機を生まないことを確認する。

久野収、藤田省三との鼎談で鶴見はさらに生活綴方についての理論を展開する。鶴見は、生活綴方は「アメリカからの持ちこみの、近代が挫折したのに対する当然の反動」であるとして、「生活の論理」すなわち「状況のなかにおける実感の論理」から出発する「実感主義」を採るべきだと主張した。他方でこの方法によると状況と連続的になり「最後には日本特殊そのものに流されて」しまうと欠点も指摘する。これを克服する手掛かりとして、

## 第5章

鶴見は樋口茂子の『非情の庭』という作品を取り上げる。この作品では「昭和三年生れ」の「ふつうのサラリーガール」である著者が、学生時代の知己が戦犯として処刑されることを知り助命運動に邁進する中で、兄弟を病気や戦争で亡くし、自分もまたカリエスを患い「とどざされていた感じ」から「自由」になっていく過程が記されていた。鶴見は「感情が非常に煮詰まった場合」には「行動に対する絶えざる衝動」が出て来て「国そのものを裁く立場」になり得るし、これが「戦争体験者でないところから出て来ている」点は「非常に戦後的」だとして、「生活綴り方の哲学」を高く評価した〔久野、鶴見、藤田 1956〕。

このように丸山と鶴見の天皇制をめぐる議論では、普遍と特殊、西欧と日本という対立軸が明確であり、丸山はつねに前者、鶴見は後者から発想しようとする。鶴見においてはここにアメリカの近代と日本の伝統、知識人と大衆・庶民、思想と実感という枠組みが重ね合わされ、後者に重きを置き、かつ軍隊体験といった意味での狭義の「戦争体験」をもたない人びととの連携の意図も含ませながら、従来の知識人の態様ないし戦中の自分のあり方を批判し、自らのプラグマティズムを練り直していった。

### 5. 「天皇制」特集号

以上、戦後における天皇制についての議論を概観し、丸山と鶴見が天皇制を論じる際の視点を対照した。

ここからは、『思想の科学』の特集と連載に密着して、天皇制論の変容と、『思想の科学』という媒体の特性の一端を明らかにしていく。

#### 5-1 内容

先述のように本号は1962年4月、自主刊行創刊号として出された。内容は9項目から成る。

- ① 藤田省三、掛川トミ子「対談、現段階の天皇制問題」
- ② 鶴見良行「戦後天皇制の存在と意味」
- ③ 平山昭次「天皇制とキリスト者」
- ④ 「成蹊大学学園祭公開討論会要旨、大学生はどうみるか」
- ⑤ 福田歓一「二十世紀における君主制の運命」

- ⑥ 石川裕明「中学生はどうみるか」(投稿)
- ⑦ 野間宏「クーデターと天皇制軍隊」
- ⑧ 葦津珍彦「国民統合の象徴」
- ⑨ 佐藤功「書評, 里見岸雄『万世一系の天皇』: その憲法改正案と天皇制」

藤田省三と掛川トミ子による①の対談では、天皇制とは「あらゆる規範的な考え方を融解させる機能を果すような制度」であり、「自然的」かつ「日本的」なものとして批判的に捉えられている〔藤田, 掛川 1962〕。

鶴見俊輔が生活綴方の出発点にあるものとして重要視していた「実感」はこの号においても一つのキー概念となっているが、その捉え方と評価は鶴見のそれとは異なり、一様ではない。上記①の天皇制の定義と重なるものとしては、鶴見良行による②が、天皇制の支配要因を「日本人の土俗的な信仰や思考様式」との結びつきに求めている。すなわち、「天皇は父である」という隠喩は「実感のうちに同一化」され、「論理的認識的な理解」でなく「心情的な共感」で実体化されているとし、「ナジミあいの実感」で貫かれる天皇制の伝統に「決着をつける」べきだと主張した〔鶴見良行 1962〕。他方福田歓一による⑤は、天皇制を「実感でなく客観的に」論じる必要を主張し、英国の王位と日本の天皇制を対照する。福田によると英国の王位は国民社会＝生活領域全体の複合体を象徴するが、日本にはそもそも国民が満足を感じるような安定した社会体制が不在だとして、天皇制の基盤の脆弱さを指摘している〔福田 1962〕。葦津珍彦による⑧は、本号で唯一、明確に天皇制を擁護する立場から書かれている。葦津は天皇制の存続の可能性を共和制との比較で論じるが、仮に大統領を選出したとしても天皇以上に尊敬できるかということ、「国民の実感が承知しない」、なぜなら「国民の間に動かしがたい国体意識がある」からだとして述べている〔葦津 1962〕。

他方、⑥の投稿文においては、「戦中派後期」の中学教師である筆者が、戦前派が持つ「天皇制への愛着」を批判する、世代論的なアプローチをとっている〔石川 1962〕。

以上のように本号における天皇制は、自然的で日本的なもの、あるいは日本人の土俗の信仰や思考形式である「実感」に結びついたものとして主として否定的に論じられ、その対極には、作為性の強い西洋の制度と、「客観的」で「論理的」な議論が想定されている。そこには近代への信頼と、伝統の忌避ないし警戒がうかがわれ、世代論の体裁をとる前世代への批判的まなざしもこの態度と微妙に交錯する。

異色なのは実感＝国体意識を根拠に天皇制を擁護する葦津論文である。文末に添付され



## 第5章

た編集委員会による附記によれば、「異なった立場を積極的にぶつけあい」「思想のより着実な成長と実りを求める、という思想の科学研究会の精神に立って」葦津論文を掲載したとある。さらに「この論文を出発点として、天皇についての論争を考えています」とあり、一般読者からも投稿を募っている。その後の展開を見ておこう。

4ヶ月後、「再び天皇制をめぐって」という小特集が組まれた。ここで橋川文三は、伊藤博文らによる国体創造の作為を強調し、「国民の国体意識」と「実感」を同視して天皇制支持の理由とする葦津を批判した〔橋川 1959〕。これに対し葦津は、翌年1月の小特集「三たび天皇制をめぐって」における論文「続・国民統合の象徴」で、伊藤博文が明治の国家機構整備に果たした役割を詳細に実証し、橋川は伊藤の役割を過大視しており、史料の引用の仕方は恣意的で「非科学的」だと批判した〔葦津 1963〕。第2章でみたように、当時、橋川は戦中に日本浪漫派に傾倒した自身の「実感」から抜け出る途を模索していた。よって橋川の力点は国体創造の「作為」の強調におかれたが、葦津の反論は橋川の実証性の欠如を「非科学的」として、非科学性、非客観性を示す概念としての「実感」批判に近い立場に傾き、両者は天皇制の心理的支持基盤となる「実感」を共有しながらすれ違ってしまった感がある。以後、この点に直接関連する議論は掲載されなかった。

### 5-2 反響

当該特集号発刊までの経緯の一般紙・書評紙における扱いは第1章で見たが、ここでは発刊後の反響を概観しておこう。

『朝日新聞』の「論壇時評」を担当していた都留重人は、まず1962年1月の時点で事件について触れ、「当事者双方の説明をきくまでは、論評を避けるべき」としつつ、雑誌廃棄の理由が編集ではなく嶋中事件の公判中という中央公論社側の「業務上の都合」にあると示唆し、「ここに思想の自由は、一つの減点を記録した」と批判した〔都留 1962a〕。さらに都留は、4月の同欄で『思想の科学』の復刊を伝え、「同研究会が、前途多難を承知で、截断（せつだん）された特集号の復元を第一号として、自主出版にふみきったことは、特筆にあたいする」と評価し、その内容についても「真剣な討議にあたいするいくつかの問題を提起」し、「問題を深くえぐって、私たち国民一般の思想をさそ」う「好企画」として紹介している〔都留 1962b〕。序章で述べたように、都留は第1次『思想の科学』の創刊同人で、その後も評議員に名を連ねており、有限会社思想の科学社の創設にあたっては出資者となり、事務所設置の便宜をはかるなど<sup>xiii</sup>、自主刊行を全面的に支えた会員の一人だ



った。

都留の、自主出版とその内容に対する好意的評価とは対照的に、埴谷雄高は「編集の企図」が「やや常識的」とであると苦言を呈する。埴谷は安保闘争以降の「知識人の退行現象」に言及し、天皇制特集号事件もまたその中の「ひとつの環」であるとしつつ、「大きな退行とそれに対する歯止めふうな端緒的な抵抗」があるとして、『思想の科学』が自立した雑誌となったのは後者の意味があるにもかかわらず十分に自覚されておらず、その「不十分な自覚のかたち」が内容に表われていると批判する。そして埴谷は、「私たちのなかの天皇制」という視点を提示して、戦後の天皇制の特徴は、「天皇が人間になったのとまったく逆に、あらゆるひとびとが可能的な天皇になった事態にある」と指摘する。埴谷は、「体系化される組織のすべて」のなかで、階層性が「固定化」され、「絶対化」されて、新しい「役名」が次々に案出されており、政党、組合、文学者の専門団体など「奇妙なことに、進歩的といわれるものほど」その傾向が強いと批判している [埴谷 1962]。すなわち埴谷は、かつて「天皇制」の打倒を掲げていたところの「進歩的」な団体が階層性において硬直化し、「天皇制」を撃つ実質的な力も権威も喪失しており、明言は避けつつもある意味天皇制特集号事件も中央公論社の階層性、硬直性によるところがあったのであって、そうであるからこそ自主刊行への移行は「歯止め」の意味を持つものの、『思想の科学』がその点を衝いていない点について不足感を表している。もちろん、当該特集号は事件前に編集されたものの復刻であるので、特集号事件自体による思想的深化を盛り込むことは、事件と復刊との時間的近接を考えると望み得ないが、60年安保時の緊急特集「市民としての抵抗」ほどには、この天皇制特集が60年安保後の状況と密接に関わっていなかったことは、埴谷だけでなく少なからぬ読者が抱いた感想であるかもしれない。

他方、60年安保闘争以降の「進歩的」ジャーナリズムと知識人の退行現象そのものとして事件への対応を批判する論調が、事件から数ヶ月を経て現れた。武井昭夫は、思想の科学研究会と中央公論社との間に交わされた「確認事項」について、「天皇制論議の自由に関わる側面をきれいに回避し」、「思想と表現の自由についての出版人と言論人の共同の社会的責任というより主要な問題をもの見事に欠落させている」と批判する。そして藤田による「親切過剰主義」との批判を経たのちも、中央公論社を取り巻く困難を「理解」する立場を取り消さず、「会員である嶋中鵬二氏もみとめるような確認事項を起草したことは正しかった」とする鶴見や関根を批判し、「多元主義そのものが集団エゴイズムを媒体にして集団転向の偽装に役立てられた」として「市民革命派の集団転向」だと批判する [武井 1962]。

## 第5章

これに対して吉本隆明は、『思想の科学』は、その無原則プラグマチズムの日本への土着化という一点においてのみ思想運動としての生産性をもちえてきた」のであり、その「多元的思考法」が、日本の唯物論の「観念的空論性の＜空洞＞を埋める役割をはたした」と「思想の科学」を援護する。そして、『思想の科学』事件にたいしても、『風流無譚』事件にたいしても何ら有効な反撃を組織しえずに、一片の声明書をもって事件処理を回避してきたものに、事件当時者を批判しえても非難はしえない」と、武井をはじめとする「市民主義者批判」を非難した〔吉本 1962a: 7〕。吉本隆明は前年9月から、谷川雁、村上一郎らと隔月刊の雑誌『試行』を刊行していた。上記の文章が掲載された号の編集後記では、「一般的に金づまりの傾向」にあるため「直接各号講読、予約講読を強く希望する」といったお願いとともに、「直接寄稿（投稿）を歓迎する。各号必ずそのような原稿は掲載されている」として「ディスジャーナリズム」の雑誌の意義を強調している。そして、刊行の持続を危ぶむ声や風評があることを断ったうえで、『試行』はつぶれないし、また、現在の状況でつぶしてはならないのである。この雑誌の存在の意味がつぶれたときは、あらたな形態への飛躍の場合以外には、ひとつの空白がやってくる時であると考えている。その空白はもちろん一雑誌の消長如何という片々たるものではないかもしれないが、『試行的なるものが亡びるのである。」と、自身の雑誌刊行が60年安保以降の状況における試行的な実践であるとの認識を押し出している〔吉本 1962b〕。『試行』はその後1997年12月の74号まで発行を続ける。安保後の状況の中、版元に経営を委ねることなく自力で雑誌を発行するという困難が、やむを得ない経緯とはいえ自主刊行へと移行した「思想の科学」に対する吉本の共感と信頼をたしかなものにしているといえよう。

### 6. 小田実の「人間」の原理

1960年代から70年代にかけての『思想の科学』における天皇制に関する議論で特筆すべきは、小田実による2つの連載である。1つ目は1967年1月から6月に6回連載し、2年のブランクを経て1969年6月に再開して翌月に終結した<sup>xiii</sup>「見えない人間: 私と天皇」全8回、2つ目は1972年2月と5月に掲載された「くらしとしてのファシズム」全2回である。ここで小田は、大衆／知識人、西洋＝普遍／日本＝特殊といった二項対立的な見方を無化し、あるいは組み替える、新たな視点を提示した。

## 6-1 「見えない人間——私と天皇」

小田の議論の前提となっているのは、久野収と鶴見俊輔による1956年の共著『現代日本の思想』における、「顕教」と「密教」の「二様の解釈」である。「顕教」とは国民大衆が初等教育と軍隊で教え込まれる「天皇を無限の権威と権力を持つ絶対君主と見る解釈」、  
「密教」とは高等教育に至って明らかにされる「天皇の権威と権力を憲法その他によって限界づけられた制限君主とみる解釈」を指す。久野と鶴見は、「密教は上層の解釈にとどまり、国民大衆をとらえたことは一回も」なく、昭和の超国家主義の台頭は、「密教の中で顕教を固守」した軍部が「天皇機関説のインテリくささに反発」した国民大衆を動員して「密教征伐」を徹底していく過程であると見ていた〔久野、鶴見1956: 132-134〕。

小田は「〔天皇〕機関説の世界のなかで生きて来ていたにちがいな」人物として「大正リベラリズムの時代に京都大法科を出た」「田舎弁護士」で、「終始一貫『日本は敗ける』という態度を保持した」父を挙げる。終戦の数か月前、その父の持物を小田が壊して言いあらそいになった際、小田は「苦しまぎれ」に「なんや、こんなものかて、父ちゃんのものやあらへん。天皇陛下のものや。」と言い放つ。終戦数ヶ月前の状況で、小田はまだ「大東亜共栄圏」と「天皇陛下のために死ぬこと」という大義名分を信じていたが、「空襲のなかでにげまわっているうちに黒焦げになって死んで行った人たちの死」との分離を無意識的に感取していた。すなわち日本は負けるだろうという父の「客観的論理」は日々証明されつつあり、先の放言は「没論理」の側にいる小田の「最後のあがき」とも言え、小田は「論理の象徴」である父が自分を打ち負かすことを予期し、期待しさえする。しかし予想に違い父は「絶句し黙ってしまった」。小田はその沈黙に「何かただならぬものを感じた」と回想し、「父という一人の知識人のもつ天皇機関説的な論理が私という大衆の天皇神格化の非論理、没論理のまえに敗北した」ということだったのだろうと解釈する〔小田1967a〕。

小田は、人々が天皇神格化、すなわち『現人神』としての天皇』に関係し始めるのは小学校に入ってからのことだとして、国語の時間に「アメリカの捕虜に同情する女の人たちは非国民だというような意味の標語」を「教師にほめられたいという打算のもとに」つくったときの「いやな気持」を思い出し、この時自分は「非常時」のもろもろが支配する「公状況」と、「平時」のもろもろをその原理とする「私状況」の「さけ目」に立っていたのだろうと推測する。しかし幼い小学生である自分をより大きくとらまえていたのは家庭という私的な場所であったとする。

小田は、鶴見がその戦後における教育の実践を高く評価していた東井義男が昭和19年

## 第5章

に出した「学童の臣民感覚」を批判的に取り上げ、東京空襲に際しての自分の感想は、母のもらした「えらいこっちゃ」という感想からも遠くないもの、「来よったな」というような怖れとも興奮ともつかないものであり、東井の言うような「神を恐れぬ不逞の米機が大君います都の空を汚した」といった『臣のいのち』に密着した感想では決してなかった」と否定する。

対照的に、昭和 11、12 年頃に書かれたある小学生の「兄さんの入営」という作文を取り上げ、「入営という『臣のいのち』の自覚の瞬間」が、兵士を送る「立ちぶるまい」の算段という「日常性のなかに拡散している状況」が描かれていると評し、「日本人に生れること」を次のように定義した。

おそらく日本の民衆の一人として、日本の社会に生れ、育つということは、こうした「国家」と「世間」、「公状況」と「私状況」、「たてまえ」と「ほんね」、「思想」と「実生活」等々の結びつきと対立を日常性を媒介にして処理する技術を生得のものとして身につけて行くことなのだろう。[小田 1967a: 108]

小田はこれに続き、「これを生得の技術として身につけることができなかつた人たち」、たとえば「朝鮮人の場合はどうだったのか」と問い、昭和 18 年に刊行された李石薫の小説「東への旅」を取りあげる。この作品には主人公・哲が出雲、京都、奈良、伊勢を巡りながら目にする「日本」の自然や建築の「美」への称賛が、詩の美しさへの感激や、下宿先の美しい娘・るみへの恋、目にしたそこここで一生暮らすことへのあこがれと、死することへの衝動とともに綴られ、遂には皇大神宮の「比類ない神々しさ」に「日本の国体の尊前さ」を感得し、「日本人なることの幸福であるべき信念を固め」、求婚するまでの顛末が描かれる。小田は「これだけ読んでも、『日本人になること』は『日本人に生れること』に比べてはるかにむつかしい」と感想を記している [小田 1967c]。小田のこの感慨は、この小説が私小説的な体裁を取るにもかかわらず公状況に大きく巻き込まれている点から出ているものと思われる。

小田はさらに、鶴見と久野の「密教は、上層の解釈にとどまり、国民大衆をとらえたことは一回もなかつた」という箇所にも異議を唱える。小田はここで安倍能成、柳宗悦、正宗白鳥ら「日本人として最高水準にぞくする知識人」であって『密教』的天皇観の教育を十分に受けて育って来た人たち」による天皇と会った際の感激を綴った文章を取り上げ、そ

ここに「父母が生きていたらどんなに喜んだだろう」といった表現と、「春風駘蕩」にして「秋霜烈日」といったような無限の仁愛と権威を備えた天皇の描写が共通していること、これらが戦後書かれていることから、彼らの中に「顕教」的天皇観が「深く侵入」していると指摘する。「密教」的天皇観の持ち主である知識人から見れば、父母のイメージは、「現人神天皇に合唱再拝する無知でどうしようもない」、「無垢の民族の魂」、すなわち「顕教」的天皇観の権化たる「大衆」であり、これとのつながりを持ち出すことで、自分もまた「顕教」的天皇観の持ち主であることを自他に確認させる無意識的操作が働いているのではないかと小田は推測する。しかし「大衆」もまた純粋には「顕教」的天皇観の持ち主ではなかったのではないかと。小田はそう問題を提起した上で天皇制の本質を以下のように結論する。

私は、やはり、国民大衆にあっても、「顕教」的天皇観と「密教」的なそれと二つがあったのだと思う。二つは切れ目なく、どこまでがはっきりとどちらということもないほどアイマイに日常性の中で結びついていて、むしろ、その結びつきにこそ、天皇制の本質があったのだろう。[小田 1967e: 103]

ここまでの記述で、小田は戦中に幼い小学生であった自分を、学校で教えられる戦争イデオロギーに代表される公状況と、家庭における生活を第一とする私状況にひき裂かれながらも、後者により前者を包み込もうとし、それによって非常時にあってもなるべく平時と同じ生活を続けようとする「日常性」を媒介にしてその裂け目を覆おうとする日本人の中の「大衆」として位置づけて来た。2年を経て連載を再開すると、小田は敗戦と「焼跡的状况」の中で自分が獲得した「人間」の視点に言及してゆく。「再開にあたって」との副題を冠した回の冒頭、小田は自分が天皇のことを考え出した一つの理由は「八月十五日前の自分」、「子供のときの自分」がわからない状態が長く続いていたからだと述べ、敗戦以降に学んだことを以下のように述懐した。

敗戦＝新日本の誕生は、私にとって、国家とか民族とかのワク組みをこえた思想の誕生ということであった。(略) 私が焼跡と闇市をうろつきながら学びとったのは、「人間は人間や」というきわめて判りきった事実であり、そこからなんであれすべてを出発させなければウソになりマヤカシになるという信念であり、ついでに言えば「古今



## 第5章

東西、人間万事平等、チョボチョボや」という哲学であった。[小田 1969a: 87]

ここで注意すべきは、小田の「人間万事平等」という哲学は、西洋由来の普遍的理想なのではなく、アジアを練り込んだものであった点にある。小田は戦後、「第二の『開国』すなわち占領下における「野蛮、特殊な日本に対して、文明、普遍の人類の理想の具現体としての西洋の乱入」の影響を受けてきたことを認めつつ、自分のいう「文明、普遍」はたとえば「朝鮮人」、「インドネシア人」、「インド人」を含みこむものであると主張する。そしてそのような自らの「哲学」が形成された背景には大阪の鶴橋や猪飼野界隈の「日本か朝鮮か判らぬところ」で育った環境があるとし、また太平洋戦争の「オモテムキの理想」としてのアジア人共栄の理想の「遺産」である可能性も指摘している。いずれにせよ、敗戦により「新しい日本」が始まったという意識に、そして見渡す限り平らな大地が広がり、形があるのは「中身がガラン洞の焼けビル」だけという「好都合な状況」が加わって、小田は「平等、普遍の人類の原理の視点」を獲得したと主張する [小田 1969a]。

連載の最終回となった文章で、小田は「特殊を前提として特殊に帰結するという循環論法」を批判する。すなわち「日本人というやつは」という論じ方はおおうにして「ダメである」というところに帰結し、「だから仕方がない」という責任解除が初めから含まれている。「日本の天皇(天皇制)というやつは」という論じ方も同様であり、ここからは「天皇、天皇制をただそれだけの問題として見る」、あるいは「自分とはまったく関係のないことがらだとみなす」考え方しか生まれない。この傾向は戦後の方が強いと小田は見ており、これに対し「人間というやつは」という論じ方で対抗すべきだと主張する。

次に小田は、自らが天皇制を特殊なものとして論じようとして失敗した例を挙げる。小田はアメリカの若い反戦運動家に、「内実はどうであれ、たてまえとしては」「その戦争[太平洋戦争]のあいだ、人々は天皇のために一身を犠牲にして死んだ」と説き、「日本の天皇と民衆の関係は他国の人間の理解を絶したものがあ」と結んだ。すると相手は、ベトナム戦争を見よ、と言って「星条旗のためにアメリカ人は一身を犠牲にして」「すくなくとも、そんなたてまえで死んで行く」と返し、小田は反論に詰まってしまう。このエピソードにより小田は、日本の天皇制、あるいは天皇と民衆との関係を特殊のものとして論じることが有効でないことを示そうとしていると理解できる。そして論は「この社会のかたち、たたずまい」の考察へと続いていく。

小田は「社会」というのは「日本の社会」だけでなく「アメリカの社会」、「ソ連の社会」、



「インドの社会」のこともあり、「どこかの会社の社会」、「大学の社会」のこともあると定義した上で、「社会のかたちというのはピラミッド」であり、それは「官僚制度と言いきってしまつてはあまりにも簡単すぎる」ものであり、「もっとひろがりのある」「私たちの精神の枠組さえも含んだことば」であるとする。小田は「昔は、私も四六時中、ピラミッドの垂直軸にからをびつたりとつけて生きて」いたゆえに、そのかたちは見えなかったこと、この連載を書き出した頃もベ平連を始めて日が浅くデモへの参加回数も少なかったためかこの「社会のかたち」が「今一つピンと来ていなかったこと」を明かす。そして「この社会のかたち」が見えるようになった契機を以下のように述べた。

社会のかたちというのはピラミッドで、そのピラミッドを見るのにもっとも適している位置は、横にひろがることはあっても上にはさっぱりと伸びて行かないデモ行進のなかだった。[小田 1969b: 101]

小田は続けてピラミッドでは「機能分担」により、めいめいの職分によって生きるという論理とそれが正しいのだという倫理が生れることを説明し、さらにピラミッドを「原理的に」とらえ、「ピラミッドは、人間がすべての問題に、正面からむきあうことを避けるためにつくり出したシステム」であるとする。最後に小田は、ホワイトハウス前で在郷軍人らがベトナム戦争に反対の意志を表明するために従軍証明書やリボン、勲章を大統領に突き返そうとしたが、これを受領したのは「抗議受領係」であり、大統領はデモ隊に自分で正面から向き合う必要がないこと、その意味では大統領は「アメリカの天皇」であるとして論を閉じている。

小田はこの連載によって、大衆が公状況と私状況の対立を日常性を媒介にして曖昧にし、むしろ後者によって前者を包み込もうとする営みのなかに天皇制の本質を見出した。そしてベ平連のデモの経験を経て、敗戦と焼跡で得た「人間」の視点とこの社会を外れた地点から見る自由を結びつけて展開してきた。ここで展開された思想は、「巻き込まれる側」からする「生きる思想」、すなわち「どうせ死ぬなら、それまで、なるだけ長生きして、なんとか安楽に生きていたい」というねがいを運動、政治、革命の根本に据えるべきだという主張へと結実する [小田 1972a: 101-102]。しかしこの「生きる思想」の重視は他面で、いかなるイデオロギーも「くらし」の中に包み込むことで、その功罪も、転換の意味も問わずに済むという事態になりやすい。その点につき警鐘を鳴らしたのが以下の連載である。

### 6-2 「くらしとしてのファシズム」

この連載により小田は、さらに「人間」の視点を深化させる。冒頭で小田は、「思想というものは無いのです。『思想』を持った人間がいる」と書き、「ふつうの人間」における「ファシズム」のありようにつき以下のように述べた。

「思想」よりも「行為」よりも、くらしそのものがそのまま「ファシスト」のそれになってしまっている。それがふつうの人間のファシズムのありようで、さらに困るのは、彼がそいつにきがついていないことでしょう。ことに、こういう傾向がきわまっているのは、日本のファシズムの場合ではないかと思うのです。[小田 1972b: 4]

小田は二・二六事件が「天皇制ファシズムを旗じるしにかかげた方が敗れた」点に注目する。つまり、日本のファシズムにおいては、「より明確、純粋に天皇制ファシズムであろうとした」思想と行動を、「ふつうの人間的なもの、市民社会的なもの、秩序的なもの、合法的なものにねじ曲げるかたちで出て来た」。「天皇制ファシズム」の「直接の下手人」ともいふべき東条英機もまた、天皇制ファシズムの「思想」や「行動」をもともと持っていたわけではなく、いつでも「体制」側において「たまたま出世して」「たまたま総理大臣になった」ゆえに、「世の中がそうなったとき」「世の中のえらいさんとともに」ファシストへと転化した。このように見る小田は、東条内閣の大臣や外交官といった「えらいさん」たちが、戦後「ねっからの平和主義者」であるような発言をし、敗戦による「切れ目」がない点に着目し、「すくなくとも、彼らの主観においてはそうだった」のであり、天皇について「ねっからの平和主義者」で「ファシズム嫌い」とされることについても「事実であろう」と認めつつ、むしろ「ねっからの平和主義者」だと考えていたゆえに戦争が始まり、「ねっからのファシズム嫌いだと思いついていたゆえに、世の中はそうってしまったのではないか」と疑問を發する。

連載の第2回はこのパラドックスへの答えともいふべき「民主主義とファシズムは奇妙に似通っているところがある」という書き出しで始まっている。ここで小田が言っている「民主主義」は「何よりもただひたすらに『多数決』の具現体」としての「民主主義」である。この意味での「民主主義」とファシズムは「数をたのみに」する点で共通し、いずれも「多数者」を後ろ盾に、それを武器として「少数者」をしめ出し、あるいは「しめ殺

す」。また「非国民」ということばを発することで「暗黙の共同戦線」が形づくられる点も同じである。そしてそのような「多数主義」的民主主義を小田はある朝視ていたテレビ番組にも見出す。そこでは、司会者とフロアには観客役の主婦たちが並んでおり、その日のゲストである3人の喜劇役者が浮気をするとかしないとかで一しきり「みんながゲラゲラ笑って」いる場面が映し出されていた。やがて司会者は3人に「以後、浮気をしない」との誓いを立てるよう言い、さらに「一千万視聴者をまえにして、はっきり誓って下さい」と迫る。フロアの主婦たちの「ゲラゲラ笑う顔」が大写しに映し出され、結局3人は誓いを書かされてしまう。小田は「司会者の中年男」が『一千万』の『多数者』を代表する大人物であったわけではないことを強調し、ここで彼は「安全な正義」を手中にしており、その上「一千万」という多数をうしろ楯にして正義が民主主義的に保障されてもいることは「立派」でありかつ「おそろしい」ことでもあると指摘する。つまりここでは正義と自分が同一視され、正義をなかだちにして自分と多数者が同一視される。しかし小田が「もっとこわい」こととして警戒しているのは、司会者よりもフロアの主婦、そして「茶の間で寝そべってテレビを見ている人たちが」、司会者のように「身銭を切」ることさえなく、「うなずき、笑うだけで、正義になり『多数者』になれる」ということである。小田は『彼女ら』、『彼ら』と他人事のようにいわない方がよいかもしれない。私だって」と断りつつ、「無言の同意、同意の表情、笑いもまた、『少数者』を十分にしめ殺し得る」という。

小田がテレビを挟んだ大衆の反応のはたらきようにこれほど警戒を示すのには、この文章が発表された年の初めに発覚し連日報道がなされていた連合赤軍事件の影響があった。小田はこの事件に関し、まず警察を批判して、「一日か二日ですんでしまうはずのリンチの犠牲者の死体の発掘作業を何日にもわけて行う」、「前日にいったん掘り出したものをもう一度埋めておいて、リンチ弾効の正義感に燃える記者に掘り出しホカホカのところを見せる」といったやり方に、「百パーセントの正義はわれにありというわけでしょう」、「正義が正義面をして歩くときほどこわいことはない」と警鐘を鳴らす。そしてまた、リンチ事件について「ひどいですねエ」という一言で、誰もが簡単、安易にひどくない側、つまり、正義の側にとともに身を置くことができると指摘する。小田は「ある出版社」に勤める人から聞いた話であると前置きしつつ、テレビの前で声高に「ひどいねエ」「あんな連中はやつつけてしまえ」などとしゃべりあっていたのは、社内で革新的な動きが起こるたび、それを押しつぶそうとする方に「無言の同意を返して」加わっていた人たちであり、そのような人たちが「リンチ事件でまるで魚が水を得たようによみがえった」のだという。逆に「い

## 第5章

つもは威勢のいい口をきいていた反戦派、革新派、あるいは革命派の若者」はテレビの前に行くことができなかった。それはその場でいっしょに「ひどいですねェ」と言わなければ「赤軍の同類」と疑われる雰囲気があからさまにあったからだという。小田はさらに、このようなメカニズムはリンチ事件そのものの内部にも働いていたと指摘する。小田はこれらの話を通じて、無言の同意の圧力と、多数者が「正義」を手にして一斉にしゃべりだすときに少数者として無言を守ることの危険という、無言のもつ両極的な機能を描き出していると理解できるだろう。

小田は文末で、「独裁を成立させるのは、たとえ暗黙のものであれ、『多数者』の同意である」として、「民主主義を成立させるのも『多数者』であるから、「民主主義もまた、極めて容易に独裁をつくり出し、独裁者をつくり出し得る」と結ぶ。小田がこの2つの連載で展開した議論は、「巻き込まれる側」からする「生きる思想」、すなわち「どうせ死ぬなら、それまで、なるだけ長生きして、なんとか安楽に生きていたい」というねがいを運動、政治、革命の根本に据えるべきだという主張ともつながっている[小田 1972a: 101-102]。この連載での言葉でいえば小田の「生きる思想」は、平時では生活が第一であり、非常時に移ってきてもなるべく平時と同じ生活をしたという「民衆の日常性の伝統」に立脚している。そしてファシズムは、秩序への反乱がおこった時それを押さえることで、民衆の願いを取り込む形で生起し、多数者を後ろ楯にした正義は肥大化していく。そしてそれは天皇制ファシズムそれだけの問題ではない。天皇制も、その打倒を掲げて来た革新運動もそれぞれ変質してゆくなかで、小田は天皇制ファシズムを支配層と自らを含む民衆も含めた「ふつうの人間」の内にあるものとして取り出し、正義を掲げない思想と行動を模索していったと言えるだろう。

### 7. 「日常意識としての天皇制」

1970年代は「一億総中流」や公害問題など、高度成長が人びとの生活に与えた功罪が意識された時期であった。『思想の科学』では「思想とは日常生活の中で生きてはたらいっているもの」としながら、その日常生活が「管理され操作されている」xiv ことに関心が注がれ、「企業社会」「管理社会」といったキーワードで現代社会の特徴を表すようになる。天皇制もまたそのような社会における適応と変容の視点から論じられるようになる。1977年4月号の特集「日常意識としての天皇制」は以下の16項目からなる。

- ① 日高六郎「追悼・竹内好さんの思い出」
- ② 久野収, 高島通敏「天皇制と言論の自由」
- ③ 栗原彰「再分配の幻想」
- ④ 田中克彦「天皇陛下の漢字」
- ⑤ 高史明「天皇制の呪縛を超えて」
- ⑥ 鶴見俊輔『「風流無譚」事件以後』を読んで」
- ⑦ 篠田浩一郎「内在的天皇制の解明と方法の問題」
- ⑧ 大野力「天皇制の“えらさゝ”と企業社会」
- ⑨ 藤田竜生「天皇制の中のリズム」
- ⑩ 田中宏『『国民統合』の装置』
- ⑪ 篠沢秀夫「ポルノ情動と庶民的日和見主義: 『風流無譚』の文体学的分析」
- ⑫ 五十嵐暁郎「西郷伝説の百年, 上」
- ⑬ 折原脩三『『天皇という観念』の横すべり』
- ⑭ 井上澄夫「タイの庶民の王室観」
- ⑮ 松浦総三「ジャーナリズムの敬語報道」
- ⑯ しまね・きよし「資料から見た天皇制論」

本号は「創立 15 周年記念号」と銘打たれており、自主刊行の契機となった天皇制という課題に改めて取り組もうとする意志が感じられる。また「日常意識としての」と冠していることから分かるように、本特集にはこれまでの、戦中のファシズムとそれを支えた日本人の心性と結びつけた天皇制、あるいはみずからの戦争体験における天皇体験の論述とは異なる、現在の日常生活ないしそこにおける意識における天皇制の含む機制のありようにアプローチしようとの意図がうかがえる。

①と⑥は天皇制特集号事件に関わる文章である。①は日高六郎が竹内好の追悼文として、事件以降、中央公論社への執筆拒否を共にしてきた経緯を振り返ったもの、⑥は鶴見俊輔が天皇制特集号事件の背景ともなった『「風流無譚」事件』からの顛末を振り返ったものであるが、日高が紹介するところの竹内のスタンスと、鶴見のそれとでは明瞭に異なる。①から見てみよう。

事件当時竹内は、中央公論社が雑誌を断裁破棄したことではなく、公安調査庁の人物に

## 第5章

見せた事実に対し「烈火のように怒った」。他方日高は、「じつは断裁事件の方が重要だと考えていたため、竹内の議論が当初はよく分からなかったとしつつ、「竹内さんは、官と民をはっきり区別していた」からであろうと推測している〔日高 1977: 5〕。

実際、事件当時の竹内の文章によると、「執筆者に無断で第三者、とくに公機関に見せるのはいかなる事情があるとも許せぬこと」で「全国民の権利を不当に犯した違法行為」であり、「私は、思想の科学研究会の会員としてでなしに、一言論人として、つまり言論によって国民の一部を代表する人間として、中央公論社のこの行為に嚴重に抗議する」〔竹内 1962:1〕とあり、中央公論社が雑誌を公安調査庁に見せたことにより、竹内はこの問題を市民間の問題から言論の自由の問題、さらにいえば公権力に対する国民の連帯の問題に引き上げたことが分かる。

対照的に⑥で鶴見は、『風流無譚』事件<sup>xv</sup>以降の中央公論社の動きは「自分をつつんで動く一つの事件」であったためこれに対し「女々しい態度」を持っていると述べる。鶴見と嶋中は小学校以来の友人であり 1961 年 2 月に起きた「風流無譚」事件の際も永井道雄とともに社告を作成した。その年の暮れに天皇制特集号の断裁廃棄の報を受けるまで鶴見は鬱病のため中央公論社とも思想の科学研究会とも交渉を断っていたが、報に際しての感想は「テロの被害者である嶋中と中央公論社を追いつめたくない」ということであったとして、「中央公論社をとりまく困難を理解」しそれまで発行してくれた「同社の好意に感謝」するとの文言の入った「確認事項」を起草した背景を述べている。この「理解」と「謝意」を示しながら袂を分かち流儀は「過剰親切主義」であり「自由を空洞化」させるとして藤田省三の批判〔藤田 1962〕を浴びることになるが、鶴見はここで改めて、当時の自分にとっては「嶋中鵬二を助けられない自分が重荷」であり、「言論の自由よりもその方が重かった」として、嶋中との「友情」を強調する。その上で、自主刊行により『思想の科学』は「古手会員の幼い時からの友人関係という習慣とは別の基礎」に重心を移したのであり、それは「制度としてだけでなく日常習慣としての天皇制をも批判し得る習慣の活発な成立をうながした」と述べる〔鶴見 1977〕。このように鶴見においては、竹内とは対照的に事件自体については自らの「女々しい態度」に対応の甘さを還元し、私的關係によって雑誌が運営されていたことを率直に認めながら、事業体として自主刊行する道を選んだことにより『思想の科学』は「天皇制」と対峙し得るものになったとの認識を示している。

②の対談では久野収と高島通敏が言論の自由と天皇制の関係について意見を交わしている。高島は、戦後とりわけ 1960 年以降、公的な抑圧は眼に見えない形に転化したと指摘



し、「穏便な社会的抑圧」である「天皇制的社会構造」にいかに対抗して自由な言論を創出するかが課題であるとした。そして、政党の新聞やミニコミがともに「商業主義」を「悪」として、「党派の論理」で「出版資本」や「ブル新」をたたき、あるいはミニコミが「私的な内輪のことを情念的にしか書かない」ことを批判し、「思想の科学社も自立して以来、商業ベースでやっている」が、その体験から「自由な言論の場を確保するというこの中には、もっと複雑な問題がある」と指摘した。そして、「企業社会」の「集団エゴイズムの上に実は象徴天皇制というものは居座っている」ことへの認識を促し、これに対抗する核となるのは「ヨーロッパ的な意味での理性的言論」ではなく「体の運動によって基本的に表現されるもの」としての「運動」であり、ことばと言論をその中に根付かせるべきだと主張する。ここで言論の自由とは、「民衆にとっては私から公のものに転化していく運動の過程」であり、「職業的言論人にとっては公のタテマエを崩し自分の中の私的な民衆的な根へと近づいていく過程」となる〔久野, 高島 1977: 7-16〕。高島は思想の科学社の設立当初から営業職を担っており<sup>xvi</sup>、「商業ベース」に乗せることも含め雑誌の刊行を一つの「運動」としてとらえた。

久野も高島の問題意識に呼応して「専門家」の民衆への「めくばり」の必要を強調するが、「普通人の言論が拘束、閉塞されているという問題と、専門家、いわゆる大知識人の対政治権力の問題とは質が違ふ」と指摘する。また久野は、「民衆レベルの言論の自由」における最大の問題は「相互の同調性の強さが各個人に加えてくる圧力」であり、これが集団の「外に対して閉じる性格」と「外に対する差別」を支持していると指摘する。そしてこの「閉じる性格」は集団である限り「日本人」も「思想の科学研究会」ももっているとして、個人の活動の自由を保障すると同時に個々人に「賢明さ」が必要であると主張する。すなわち、「集団の中で少し気にさわることなどがあると、すぐに外に飛んで出て、悪口なり世話役のいたらないところ」を「真相暴露と称して、放言する」やり方を批判し、「あくまでも集団にとどまって」「内側から、集団を開くようにもっと努力」しないと、集団は解体してしまうと訴える〔久野, 高島 1977: 17-18〕。天皇制特集号事件当時、久野は思想の科学研究会の会長として対応に追われ、批判の矢面にも立たされる役割にあった。後年久野はこの事件を振り返って「市民的自由を守り、実行する運動の一コマ」と位置付け、「この自由を玉砕の形でなく、さりとして瓦全の形でもなく粘り強く貫いていく」のは「かなりしんどい」「持続エネルギーの要る仕事」だったと回顧している〔久野, 高島 1995: 95〕。

他方で、戦後の「天皇制」の変容あるいはその機制に着目したものもある。たとえば折

## 第5章

原脩三による⑬は、天皇とは「天の真名井」という真善美の当体とされる「座」の観念であるとする。大正7年生れの筆者はこの観念を「敗戦までの最大のイデオログの一人」である憲法学者の笈克彦に学び、学徒兵としてこの観念のために死ぬという「死の論理」を持つようになった。戦後になって死の論理としての「天の真名井」は崩壊したが、「現実の矛盾」を「揚棄」し「人々の情念の均衡を保つ」ものとして「天皇という観念」は残り、社会が変容しても「横すべりしつつ自己を保つ」。これが筆者が「内なる天皇制」を克服し「外なるもの」とした後に残った結論だったという。筆者は「天皇制は相当永く存続する」と予測しつつ、「横すべり」を可能とするカラクリの中に自分たちが置かれていることに注意を促す〔折原 1977〕。

また栗原彬による⑭は、「玉音放送」を聞いた直後に「米兵への復讐を誓う」作文を書いた「天皇制ファシスト少年」と現在の自分との間に一貫性がないことに「ショック」を受け、天皇制を「他者」に仕立て、それを「鏡」に自分の心を映し出そうとする。栗原によれば、近代化により「聖なるものへの感受性」が減滅して「空虚な中心」が現出し、そこに戦前は「国体」や「大東亜共栄圏」、戦後は「科学者天皇」、「御睦まじい御一家」といった「日常的な天皇制のイメージ」が滑り込んで社会統合の働きを果している〔栗原 1977〕。

大野力による⑮は、「天皇とは『えらさ』の頂点なんだという認識を少年時代に持った」にもかかわらず「えらさ」への「怖れ」のような感覚が現在は消失している点に注目し、天皇を忘れた経済成長の追求が天皇を「幸福のシンボル」「秩序のシンボル」として復活・転生させたと指摘する。そして「一家企業主義」が競争論理の上に乗る自己集団優先の論理であること、成員の幸福追求願望による一体感を創出し、臨時工など異質の存在を排除していることを批判し、「自由とは人間らしく生きること」であって「幸福追求」の幻想とは異なると主張している〔大野 1977〕。

このように折原、栗原、大野の三者は戦中に少年期と青年期を過ごし、折原は戦後も縛られていた「内なる天皇制」から抜け出すため、栗原と大野はいつの間にか戦中の自分の感覚と現在のそれが隔たっていることへの驚き、違和からそれぞれ天皇制の変容過程の解明へと向かっている。

さらに、「日本」の周縁あるいは外側から天皇制を眺める視点も見られた。たとえば、「十五年戦争の期間が少年時代」にあたり、「天皇が、価値の最高」であって「それ以外は全く知らない」少年であった在日朝鮮人の高史明による⑯は、戦後、共産党に入党するが、「党中央」に「殉じて」闘ううちに他者を巻き込んで初めて「自分の天皇制的な精神構造」に

気づき、その解明へと向かう。高は、人間が社会で結ぶ関係は実体ではなく記号であるところの言語を媒介とした幻想的な関係だとし、天皇制は幻想関係の統合シンボルとしての役割を担っているとす。そして、李恢成の小説「またふたたびの道」が群像新人賞を受賞した際、江藤淳が「日本語がヘタだ」と評したことを挙げ、たしかに言葉が「ぎくしゃくしている」としながら、「日本語をつかいながら日本語にとりこまれずにすんでいる」ことによって「日本語を豊かにしている」点を評価し、「外からの目」により「日本語を広く開いていく」ことを主張する。さらに、日本語でうまく表現できず、朝鮮語も完璧に話せないことに以前は「負い目」を感じていたが、そのような「呪縛、宿命観」から抜け出して「朝鮮人が朝鮮人であること」をもう一遍考えさせてくれたのもまた日本語であったとして、「民族と民族語」、「天皇制と日本語をびたっと貼り合わせ」にしたような「閉じこめる働き」に対する、言葉の「開く力」の可能性を強調した [高 1977]。

井上澄夫による④は、タイ山間部に住む人びとにとって「タイ」、「タイ人」は自明のものではなく、前年の革命においては都市部の学生が地方の農民・労働者に近く接することで国王の威光から逃れていき、以前はデモ行進の先頭を飾っていた国王の写真が姿を消したと報告する [井上 1977]。これらは、「天皇制」を「日本」に特殊なものとして論じる枠組みを解体していく試みといえる。

以上のように、本号で「天皇制的」とは、さまざまな強度の抑圧、同調圧力を含む社会構造、または個を究極的な価値に収斂させてしまうような精神構造と、両者の対応を指している。戦後社会における天皇制への変容と、それに応じた自身の天皇体験の風化が相対化して語られるが、同時に、自らがその中に生き関わらざるを得ない社会、あるいは自らの内にある問題として捉えられており、15年前の特集号と比較するとより実践性を帯びているともいえる。

## 8. 女性の視点

1970年代は、ウーマン・リブの高まりにより国内外でフェミニズムが社会的影響力を発揮した時代であった。『思想の科学』は1960年代後半からフェミニズムの思想を取り上げ、1970年代に入るとより頻繁に「女」や「主婦」の視点を提示していく。なかでも1977年1月から1978年6月にかけて連載された「女性と天皇制」では異なる世代の女性によりそれぞれの体験・視点をとおした天皇制論が提示された。全18回の執筆者と題名は以下

## 第5章

のとおりである。

- ① 牧瀬菊枝「自分史の中の天皇制」
- ② 駒尺喜美「女にとっての天皇・家父長の姿」
- ③ 古庄ゆき子「村の大人と子どもたち」
- ④ 郡山吉江「反天皇制運動への視点」
- ⑤ 茨木のり子「いちど視たもの」
- ⑥ 一条ふみ「婆どの天皇は死んでしまったが」
- ⑦ 寺井美奈子「自立をはばむもの」
- ⑧ 河野信子「女の論理と天皇制」
- ⑨ 加納実紀代「“大御心”と“母心”：“靖国の母”を生みだしたもの」
- ⑩ 茅辺かのう「『天皇』に対置し得るもの」
- ⑪ 深見史「幻のふるさとを拒否する」
- ⑫ 佐方郁子「大きな悪としての『国家』」
- ⑬ 常世田令子「残滓？実は根なのだ」
- ⑭ 吉武輝子「弱者を強いられる女たち」
- ⑮ 横田幸子「天皇制の無化に向けて」
- ⑯ 亀山利子「教科書の中の天皇制」
- ⑰ 山本リエ「個人史の原型と向き合う天皇制」
- ⑱ 井上輝子「マイホーム主義とシンボルとしての皇室」

まずは編集部の意図を見る。佐方郁子による⑫の文中には、編集部から受け取った依頼状の内容の一部が紹介されている。それによると、本連載の意図は、「政治制度・イデオロギー、政治象徴としての天皇制論」あるいは「常民の情念や情動にその在所をもとめる」天皇制論にあるのではなく、「(女性の) 心性に内面化され日常生活を深層から律しているような発想形式や性格としての天皇制」に目を向けることにより、「真善美の規範に内在する天皇制の構造を内側から出してみる」ことと、「真善美の規範があらわれている私たちの日常生活の具体的な表情」をみてとることにあるというものであった〔佐方 1977: 100-101〕。つまり編集部は、天皇制に関する従来の議論の枠組を一旦無化して、それぞれの体験や、内面化された心性、日常生活といったミクロから多角的に照射することにより、

「天皇制の構造」ないしそれが内在する「真善美の規範」という普遍的原理と、相互の連繋のありようを明らかにしようとする意図をもっていたと理解できる。しかし本連載は、この意図を半ば達しつつ融解させるような方向を持つものだった。

たとえば近代文学研究者の駒尺喜美による②「女にとっての天皇・家父長の姿」は、前半で自分の父と母、そして自分との関係を振り返って「女にとっての天皇は家父長である」と規定し、その本質は腕力＝暴力であると指摘するが、後半では文学評論における「男性的偏見」と、女流作家の描くヒューマニズムに潜む家父長制に批判が注がれる[駒尺 1977]。駒尺の関心は自らの専門分野における「常識」に潜む男女の非対称な関係に向けられ、国家制度ないしイデオロギーとしての「天皇制」は解体の対象ではない。駒尺の、いわば大文字の「天皇制」に対する恬淡な態度は、天皇制教育を受けた世代にあたりながらも、「無教養」な家庭環境と、「劣等生」であったゆえに、「忠君愛国も良妻賢母も、言葉としては聞いていたが、自分の頭の中には受け止めていなかった」という事情も働いていると思われる。

自らを自覚的に地理的な「辺境」、あるいは社会の底辺とされる場に置くことで、社会構造を見極め批判する試みも見られた。たとえば西表島に移住して農業や日雇い労務に従事しながら月刊誌などに執筆していた深見史による⑩「幻のふるさとを拒否する」は、「天皇制」は「シマ統合のシンボル」であるが、女はどのシマ内部でも拒否される「よそ者」だとして、衣食住の暮らしを「より具体的に、納得のゆく形で生ききる」ことに傾注することで、「シマとシマの陰湿な関わりあいからのがれられる自由人」となる可能性を示唆する[深見 1977]。境界人であることの自覚から具体的な暮らしの充実を求めようとする姿勢は、戦略的なミクロへの執着によるマクロの解体ともいえる。

茅辺かのように⑩『『天皇』に対置し得るもの』も、「辺境」から天皇制を捉え返す試みである。茅辺は 1960 年代から北海道に移住して農業、水産業などの季節労働やアイヌの人びとの中で生活していたが、アイヌの女たちとは「生活や仕事に直接関係のある話ばかりをして」、戦争や天皇については「時に話されることはあったが、あくまで日常的な雑談の一つ」でしかないとして、「生存を根底から約する差別の中にあっては差別そのものを意識することはできず、意識しても、表現の手段は断たれている」と指摘する。そして、「生きることすべてにおいて差別されてきた人その人たちこそ、存在そのものとして、『天皇』＝天皇制に対置することのできる、人間としての根源的権利をもつ階層」だとする[茅部 1977]。茅部も深見同様、あえて辺境に移住し、社会の「底辺におかれている人たち」



## 第5章

の中に身を置くことで「天皇制」のはたらく社会を相対的に眺める視点を得ている。しかし、生活が被抑圧状況に浸かっている層からは抑圧の構造を客観的にとらえるのは不可能であると言いきることが、むしろその構造を強化する面も完全には否めない。

中近世歴史家の佐方郁子による⑫「大きな悪としての『国家』」は、「女性」と「天皇制」という問題の立て方自体に異議を申し立てる。佐方は、「母」や「妻」の立場での天皇制批判からは被害者の視点しか出てこないとして、国家対国民の枠組みの方が有効だと主張する。佐方はこれにより、戦争の加害者としての国策協力の事実そのものというよりは、それが戦後問われてこなかったことの意味を問題化しようとする。さらに佐方は、「日の丸」や「君が代」を「国家」が利用する相貌、あるいは万博など国家が主催する行事やオリンピックなどにも懐疑の眼差しを向けるが、このような佐方の『『国家』嫌い』の元には、「60年安保闘争の時代に学生であった」世代にとっての「樺美智子さんを殺した」国家があると述べている [佐方 1977]。ここには、権に象徴される善としての市民対悪としての国家という、ある種偶像化されたイメージがある。

他方、母性を含む女性性に強く執着して天皇制を捉える立場もある。連載を企画した編集委員の一人であった女性史研究者の加納実紀代による⑬「“大御心”と“母心”：“靖国の母”を生み出すもの」は、以前、自分の子が川で溺れかけ「奈落到ちるような喪失感」を垣間見た経験から、息子を失った嘆きを「生理的に共有」するとして、「靖国の母」の「母心」がつくられ母親たちが従わされていった機制に注目する。戦時下においては「母性讃歌」が氾濫し、「大御心は母心」といった相互規定と相互の無限の価値づけが行われた。それはともに共同幻想であったが、母たちがこれを受け入れたのは自らの内が「空っぽ」であったからだと言加納はいう。加納は昭和 10 年代における母たちの置かれていた状況に注意を促し、一方で都市では核家族化が進行しつつあり、「共同体での安定した位置」をなくした主婦たちを「何とはない不安」が覆っており、他方農村の母たちは、「生活の手段」である息子に執着していたにもかかわらず、「みんな」と同じく息子を戦場に送り出すべき「ムラの圧力」があったと指摘した [加納 1977]。加納は、以降も国防婦人会の組織化や女性言論人の言説を再構成した『女たちの〈銃後〉』、1976 年から「女たちの現在を問う会」で市井の女性たちに戦争体験を取材した『銃後史ノート』全 10 巻など、戦中の個々の女性たちの天皇制への巻き込まれよう、裏返せば間接的な「加害」のありようを仔細に掘り起こし記述してゆく。

同様に聞き書きの手法をとる吉武輝子による⑭「弱者を強いられる女たち」は、天皇制



が生み出す差別構造のありようを、従軍慰安婦、「大陸の花嫁」、戦争未亡人のケースから明らかにしようとする。吉武はこれらのケースにおいて、植民地、外地、経済格差といった、「弱者」をつくる複数の機制を提示するが、そのうちもっとも基底的なものは「女であること」だと把握している。さらに吉武は、「ある労組の委員長なる男」が「この不況期に女性解放などぜいたくだ」と発言したことを挙げて、「天皇制打倒を声高に叫んでいる男」が主導してきた革新運動へも批判的眼差しを向けた〔吉武 1977〕。

以上のように本連載では、それぞれの女性のミクロの観点から天皇制の構造やそれを包み込む思想を取り出そうとする試みはある程度達せられた。とくに母親たちが戦中に天皇制を支えた態様と心性が、聞き書きの手法をとおして可視化されたが、加害性すなわち国策協力の責任意識を高めるには国民対国家の枠組の方が適切ではないかという疑問も出された。一方、天皇制の男系の原理が助長したであろう女性差別の問題を認識し、そこから距離を置こうとすれば、「女性にとっての天皇制とは家父長制である」、「天皇制は女にとって差別の原点である」といった比喩を繰り返す必要が低減する様相も見られた。女性たちが批判の対象としたのは生身の男性の声であり、天皇制は権力や圧力の源泉というより対象の背景へと後退していった。

## 9. おわりに

以上、主として『思想の科学』誌上の天皇制に関する議論を概観した。戦争体験を一つの基底としながら、その主体は軍隊から銃後、知識人から大衆、男性から女性、実際の体験者からそれに耳を傾ける者へと拡大し、対象も戦前戦中の天皇制から戦後の大衆社会化を経由したそれへ、換言すれば実体としての天皇制から社会の中に構造化されたものへと移っていった。

丸山真男において天皇制は、権威の中心実体である天皇への近接意識により運転される国家機構を指し、そこでは自由な主体の責任意識が欠如していることが強調された。この天皇制批判は、戦前までの天皇への愛着と立憲君主制への信頼を断ちきる作業でもあった。西欧の近代に確立した自由な主体を普遍的な理念型として固持し、日本の特殊なものを警戒する姿勢の源には、軍隊経験があった。

一方、鶴見俊輔は当初、封建性を遺す「日本」と権力に依存的な「日本人」に対し否定的なまなざしを向けていた。しかしやがて自らを含めた知識人のあり方への反省を経由し

## 第5章

て、「日本の庶民」の実感を出発点とする生活綴方が「特殊から普遍を生む」可能性を高く評価するようになる。背景には「アメリカの近代」への幻滅があった。しかし鶴見が編集に携わっていない天皇制特集号においては、「実感」は状況と一体になってしまうような心性、非論理的、非客観的、非科学的なものとして否定的に捉えられていた。同特集において、唯一天皇制を擁護する立場の葦津珍彦は、「実感」を国体意識と同視して肯定的な論を展開したが、そのような意味での実感を戦中に強く持ち挫折した橋川文三とのやり取りにおいては、論点が実感対科学の軸に置き換わってしまい、議論が深められることはなかった。

小田実は支配原理としての天皇制ではなく、「民衆」の「日常性」こそが「天皇制の本質」であるとする。小田は敗戦の「切れ目」のない政治家、知識人に不信の目を向けて自らを「民衆」の一人とする一方、すべてを日常性であいまいに包み込もうとする「日本人」への批判的なまなざしも併せ持ち、「ふつうの人間」が「多数」を後ろ楯に「正義」を推進するときのおそろしさにも言及して、巻き込まれる側が容易に加害者に転じうることを示した。

1970年代の後半の『思想の科学』では、70年安保と高度成長を経た後の社会の変化を「企業社会」、「管理社会」といった言葉で言い表し、むき出しの暴力ではない穏便な社会的抑圧を「天皇制的」社会構造と呼んで、これにどう抗するかを実践的課題とした。この権力観ないし天皇制観の変化は、公機関による言論の自由の侵害に対し徹底的に抗議する意志を示し、場合によっては抗議のために筆も折る、竹内好のような「大知識人」と、商業的条件も含め社会的制約と日々対峙して、言論の内容のみならず伝達の媒体の運営にも「運動」の実体を見る「職業的言論人」としての高島通敏というように、知識人としての態様と実践の相違としても表れた。『思想の科学』の特徴の一つは両タイプの併存であり、両者は民衆への目配りにおいて共通し、また集団を権力闘争の場に変えないことに傾注した久野収のような存在が要の役割を果たした。

また1970年代後半の時点では、天皇制の戦後社会の変化に対応して変容しながら存続している機制を考察し、あるいは日本（人・語）＝天皇制という枠組を揺るがす新しい試みがあった。しかしその基底には、戦前の教育・言語体系の刻印と、「天皇制的な精神構造」を戦後に持ちこしたことによる戦後の革新運動の挫折もあり、そこからの解放の欲求、あるいは知らぬうちに解放されてしまったことへの疑問とわだかまりが動機として働いていた。

女性による天皇制論は、必ずしも自らの戦争体験から天皇制を論じないやり方を提示した。とくに、母として、女性としての共感を媒介にし、聞き書きの手法をとることで、「靖国の母」や「大陸の花嫁」の戦争への巻き込まれよう、つまり加担と被害の掘り起こしに新機軸が見られた。また、中央から隔たった「辺境」に身を置くことで、社会差別の構造を見極め、あるいは女性は疎外されてきたことを自覚的に受けとめ、具体的な暮らしの充実に傾注する形で「自由」になろうとする試みも見られた。他方で、母や妻といった立場で天皇制を指弾すると被害者の観点到偏り易く、むしろ国民ないし市民対天皇制をも含みこむ国家の形で把握する方が適切ではないかとの問いや、男性主導の運動、言語体系を批判するのに天皇制を持ちだす（「女性にとっての天皇制とは家父長制である」、「天皇制は女性にとって差別の原点である」など）のは、必ずしも有効でないという事情も看取された。ここで概観した女性たちの議論の多くは、女性の問題が天皇制の包摂する差別構造の一部を構成しあるいは相互に影響を与えていることを認証しつつも、むしろ問題を天皇制に還元せず、無化し融解するような志向をもっていたといえる。

『思想の科学』が思想・哲学雑誌として、あるいは思想運動として独自の意味を持ったとすれば、それはただ知識人が大衆に興味と理解を示したからではなく、発話の主体を広げながら一人称で語ることを持続し、それによって特殊から普遍への糸口をつかむ多様な切り口を見せたところにあるだろう。「天皇制」は少なくとも1970年代まではそれぞれの体験を一旦は回収して問題を紡ぎ出すプリズムのような働きを果したが、アクチュアリティは自明でなくなっていく。「女性と天皇制」以降、『思想の科学』で「天皇制」を冠した特集・連載は組まれていない。しかし昭和天皇の死去後の1989年8月には「天皇現象」という特集が組まれた。そこには、たとえば「自粛」をまさしく「現象」として多少の諧謔を含めて観察するような[野洲川1989]、本稿で見てきた主体の体験が色濃く反映された文章とは異なる色合いのものもあるが、昭和天皇の言葉をとおした戦争責任の問題の拡散過程の考察[加藤・黒川1989]や、濃厚な天皇体験を持たないという「ズレ」の意識自体を問題とするもの[辻1989]など、いくつかの問題系の引き継ぎも見て取れる。知識人／大衆、西洋／日本、近代／伝統といった分類における前者の優位が揺らぎ、二項対立的な枠組み自体が融解してしまったかのような現代において、主体の濃密な体験から紡がれる思想の可能性はあるのだろうか、さらなる探究の課題としたい。

## 第5章

<sup>i</sup> 一般的に「天皇制」とは、天皇が君主として存在する統治体制を指し、とくに明治憲法下において神聖不可侵の天皇が統治権を総攬し文武官僚が権力を行使する絶対主義的政治機構、ならびに天皇を統治と倫理の中心とする政治・社会体制を指す（『広辞苑、第六版』岩波書店 2008）。

<sup>ii</sup> 「天皇制」は「もともと批判陣営の用語」であり、使用が一般化したのは敗戦後のことと言われている [安丸 1992: 15]。初出に近い例としてはいわゆる「32年テーゼ」が挙げられ、「天皇制国家機構の粉碎」に日本の革命運動の第一の任務があるとされた [日本共産党中央委員会 1982: 37-62]。このように「天皇制」という語には批判的認識ないし打倒の意志が含まれていたため、戦中にはその使用は刑法上の不敬罪（刑法旧条文第2編第1章74条・76条）にあたる可能性もあり抑制されていた。

<sup>iii</sup> たとえばドナルド・キーン 2001. 『明治天皇、上、下』新潮社 566p., 582p.; 原武史 2000. 『大正天皇』朝日新聞社 298p.; 同 2005. 『昭和天皇』岩波書店 228p.

<sup>iv</sup> たとえば小熊英二 2002. 『〈民主〉と〈愛国〉：戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社, p.726, 730; 坂本多加雄 1996. 『20世紀の日本 11, 知識人—大正・昭和精神史断章』読売新聞社, p.300

<sup>v</sup> たとえば網野 2002: 8; 小熊 2002: 104; 根津 2013: 96。なかでも『中央公論』を中心に戦後の論壇史を審らかにした根津朝彦は、天皇制論のピークを1946年の敗戦時と52年の講和条約発効前後59年の皇太子夫妻の結婚の3期に分けている。『中央公論』はこれらの時期を通して総合誌の中で天皇制批判を主導する存在であったが、いわゆる「風流無譚」事件を境に天皇制批判をタブー化させる。「思想の科学」はこれとは対照的に、天皇制特集号廃棄事件の後同号を復刊したのみならず、60年代にむしろ積極的に天皇制に取り組んでいる点を評価している [根津 2013: 89-96, 198]。

<sup>vi</sup> 米谷匡史は、津田や和辻の天皇論は、天皇を「権力なき権威」とみなし、「不親政」の伝統を再発見＝創造することによって、天皇制を「国民化」し、象徴天皇制を積極的に擁護するものであったと指摘する [米谷 2002: 26-27]。

<sup>vii</sup> たとえば入江為年監修. 入江相政 1990-1991. 『入江相政日記, 1-6』朝日新聞社; 寺崎英成 1991. 『昭和天皇独白録: 寺崎英成御用掛日記』文藝春秋

<sup>viii</sup> 大型の企画としては講談社編 1989-1990. 『昭和: 二万日の全記録, 1-19』講談社

<sup>ix</sup> たとえば1975年に初版が刊行された井上清の『天皇の戦争責任』は、1989年5月に明石書店から『昭和天皇の戦争責任』として改題新版が出され、1991年には原題に戻して岩波書店の同時代ライブラリーに入った。昭和出版が1990年から翌年にかけて刊行した『昭和史叢書』全7巻は、第2巻と第3巻を昭和天皇の戦争指導と戦争責任の問題に宛てている。

<sup>x</sup> 「近代主義」批判の代表的なものとして「特集、近代主義の批判」『前衛』(30), p.41-64、「主体性」をめぐる清水幾太郎, 松村一人, 林健太郎, 古在由重, 丸山真男, 真下信一, 宮城音弥 1948. 「座談会, 唯物史観と主体性」『世界』(26), p.13-43

<sup>xi</sup> 丸山真男 1969. 「24年目に語る被爆体験: 東大教授丸山真男氏（当時一等兵）の思想と行動」『中国新聞, 夕刊』1969-8-5~6

- 
- xii この点につき高島通敏 1962. 「事務局だより」『思想の科学会報』(33), p.20
- xiii この回の末尾に「以下次号」とあるが、管見の限り続回はない。
- xiv 「創刊にあたって」『思想の科学』6(1), (209), p.1
- xv 『中央公論』1960年12月号に掲載された深沢七郎の小説「風流無譚」の中の表現が「不敬」だとして、1961年2月、17歳の元愛国党員が中央公論社社長嶋中鵬二の自宅に押し入り、夫人に重傷を負わせ、手伝いの丸山かねを刺殺した事件。
- xvi 高島通敏, 山領健二 1962. 「私の評議員日記」『思想の科学会報』(37), p.33

## 第6章

### 第6章 階級の解体と主体のゆくえ

#### 1. はじめに

前章では、主として60年安保後と、70年安保、高度成長後の天皇制論の変容を見ることで、知識人と、運動のあり方もまた変容していったことを確認した。本章では、中間階級、(新)中間層をめぐる議論を手がかりに階級観の変容の過程を跡付け、さらに、『思想の科学』で提起された新しい主体の詳細につき検討する。

近年、経済の低迷が続く中、非正規雇用の増加や貧困など「格差」の存在が再び注目を集めている。それに呼応して「(一憶)総中流」<sup>i</sup>に象徴される平等性の実体が問い直されるようになってきた<sup>ii</sup>。

中間層についての論争は戦後大きく2回起きている。1度目は1950年代半ばから60年代初頭にかけて「新中間層」<sup>iii</sup>の拡大とその政治的役割をめぐるものであり、2回目は1970年代後半で上の論点に加え「中流」の内容が問題となった。内閣府(元・総理府)が毎年行っている「国民生活に関する意識調査」<sup>iv</sup>の生活程度を尋ねる設問に対し、「中の中」が6割、「中」の範疇全体の答えが9割を超えたのは1973年のことである。以後70年代末まで高水準で推移し「総中流」の語が定着した。しかし中流意識は他の経済指標と異なり、以前と比較した相対感覚やマス・メディアが醸成するムードといった測定不能なもの関与する。それゆえ「総中流」が言われ始めると同時にそれは「幻想」であるなど実体の有無をめぐる論争が起きた。

本稿ではまず次節で、1970年代後半の論争に中間層をめぐる論点のあらましを見た上で、その起源を戦前の議論に探り、それが戦後の議論にどう引き継がれ、展開されていったかを追う。第3節では、1960年代から80年代の雑誌『思想の科学』とその研究・編集母体である思想の科学研究会における議論から、1960年安保闘争で提示された「市民」という概念の展開や、制度化されたものに対する「人間」というカテゴリー、さらには「人間」から疎外されてきた女性の書き手による問題提起を通して、運動と主体のあり方の可能性を見る。これらの議論は人びとの意識や社会の変容そのものに触れるものではないが、それぞれの論者の中間層へのまなざしを通して、戦後社会の戦前戦中の社会との連続性と変容の過程について考えてみたい。



## 2. 中間層へのまなざし

### 2-1 「討論・新中間階層」

新中間層をめぐる論点を、1977年8月22日から24日の朝日新聞夕刊に3回に分けて掲載された「討論・新中間階層<sup>v</sup>:その構造と動向と」、およびそれに先立ち同紙で紹介された4人の学者の見解<sup>vi</sup>に見てみよう。

司会の見田宗介は討論の冒頭で、「この論争はいわゆるロッキード選挙といわれて『中道』の各政党が進出した衆院選を受けて、保革逆転が事前にいわれた参院選の前という政治的な場で起こってきた」とし、この論争が単なるアカデミックなものではなく「アクチュアルな」意義をもっていると述べる。1976年12月の選挙で自民党は初めて過半数を割ったが、共産、社会も大きく議席を減じた。対して議席を伸ばしたのは公明、民社、新自由クラブ、無所属といった保革どちらにも属さない「中道」勢力であった。中道の躍進を支えたのは都市のサラリーマンを主とする「無党派層」に加え、以前は組織の縛りの強かった自治労や官公労、国鉄からも票が流れていると見られた。前年秋の毛沢東の死に続く文化大革命の負の部分の露呈は社会主義への評価に影響を与えており、他方で石油危機のインパクトから資本主義がもたらす不均衡な発展や環境・資源の限界が意識されるようになった。このような中、「革命」の現実性や「脱産業社会」への展望も含め、社会の次の段階のヴィジョンとその主体の明確化、そこに含まれる無党派層の役割が注目されるようになる。

この討論で村上泰亮は高度成長により生活様式が均質化し所得配分において平等化した、「中産階級」とは異なる存在としての「新中間階層」が成立したと主張する。この層は自らの存立基盤たる産業化の批判までには進まないため、従来の保守革新諸政党がその厳しい対立図式に固着するかぎり保守への吸収が進むと指摘した。しかしその過程は戦前の国家主義への編成の再現にはならず、新中間層は脱産業社会への移行を担う「つなぎの主体」の役割を果たすと見る。

平準化と均質性を強調する村上に対し富永健一は、新中間層が中産階級ではない点には同意しつつ、SSM調査（社会階層と社会移動全国調査）の分析結果をもとに、教育程度、職業威信、所得が比例せずクロスしながら分配されているとして「地位の非一貫性」を主張し、「多様な中間」の存在を指摘した。富永はこの層の政治的特徴を「政党離れしていかつ判断力の高い巨大な浮動票」であるとし、多元的な利害対立を抱える階層構造に適合する多党化の必要を説く。

## 第6章

これらに対し岸本重陳はマルクス主義の二元的な階級観が「硬直している」との批判を踏まえつつ、やはり雇用者か被雇用者かその中間すなわち自営業かという点が人の社会的位置を決める基本的指標だとする。そして大部分の中間層には中産性の実質はないとして被抑圧性を強調し、労働者階級のもとへ繰り入れられるべきと主張する。さらに現代の産業社会は東アジアへの搾取と石油に頼っているとして「油上の楼閣」を成り立たせている抑圧—被抑圧構造とその不安定性を批判した。

高島通敏は、1930年代のアメリカの大衆社会を典型とするニューミドルクラスの議論、すなわちホワイトカラーを中心とする新しい中間層が階級対立をこえた社会の政治体制の核心になるかの問題が、日本では1960年代の「イデオロギーの終焉化」により現実化したとし、中間層の分裂に焦点を当てる。すなわち、組織化された「管理社会」における新しい権力としての「パワーエリート」から大部分の中間層は疎外されているとし、中間層上層部とそれ以外の断層、一部キャリアと一生涯社員の企業内格差の存在を指摘した。

高島は戦後民主主義の二つの展開を指摘する。一つは「出世民主主義」で上記の格差と企業の集団エゴイズムを助長した。企業の生産至上主義は東アジアへの侵略的経済進出や公害を引き起こし、資源危機は集団エゴイズムを加速させファシズムの危険を孕んでいると指摘する。他方、戦後民主主義のもう一つの表れである「圧力民主主義」は保革の政党それぞれが経済的利益を代表し価値の喪失をもたらしている。管理社会においてはこの2つの「民主主義」により与党自民党をトップとするシステムが形成されている。高島はこのような社会で価値が体制により疑似的に体現された場合のファシズムへの傾斜に警鐘を鳴らし、新中間層が「中間」という「他者的な把握」を脱して「自分たちこそが社会の中央」であり「核になるという積極的な自負」を持って自覚的に形成できるかどうか新しい政治が始まるかどうかの分れ目だとした。そして市民運動や住民運動を例に、企業の生産至上的価値観から自由であり、戦後民主主義が自立を促した女性と青年の役割に期待する。

このように各論者の評価は異なるものの、旧中間層とは異なる中間層が社会の多数派を占めつつあり、そこに中産性の実質がないことについては一致している。それぞれの社会のヴィジョンとの関係でいえば、村上は「脱産業社会」を志向し平準化・均質化した新中間層がそれへの移行主体になるとし、富永は高等教育を受けた層への社会的評価の低下を指摘しつつ、その多様な地位と判断力の高さに新しい政治の可能性を見る。これらに対し岸本は社会主義の理想を堅持して中間層の労働者階級へ繰り入れを主張する。高島は現代

の管理社会、企業社会がファシズムをもたらす危険を強く意識する。生産至上主義を修正しようとする点で高島と村上の志向は交錯するが、中間層に対する村上の楽観的な評価に対し高島のそれは企業の生産至上主義に巻き込まれ主体意識を失っているとして危機意識が強い。このように論者たちはそれぞれの新しい社会のヴィジョンにおいて新中間層が重要な役割を果たすことを認め、あるいは積極的に志向しつつ、その属性について一致を見ているのは多数性のみでそれ以外の評価は分かれる。これらの相反する評価の淵源はどこにあるのだろうか。

## 2-2 戦前の中間階級論

日本においてマルクス主義の影響が濃厚になる以前の堺利彦、幸徳秋水らを中心世代とする明治社会主義にあっては、中間階級への言及は少なく新旧の区別も立てられていない。堺、幸徳らは「平民主義」を掲げ「門閥の高下、財産の多寡、男女の差別により生る階級の打破」による「自由」を実現するとした。平民は「多数」を武器に普通選挙、工場法案、労働組合、小作人条例を要求し、「少数の階級」はそれを傾聴すべきだとする<sup>vii</sup>。平民社が呼びかける対象は「車夫」、「巡查」、「女学生」、「新卒業生」、「受験者」、「基督教徒」、「小学教師」と多様である〔梅森 2005: 166-169〕。彼らの階級把握は少数の門閥家、有産階級対多様で多数の平民という図式にあり、いわゆる中間階級の一部は後者に包含され、独自の存在としては認められていない。

しかし中間階級への言及も皆無ではなく、堺や幸徳より 15 歳ほど若い大杉栄は以下のように述べた。

比較的に健全なる生を有する中間階級がイニシエチブを取って、被征服階級の救済の名の下に、その援助をかりて事を挙げる。あるいは被征服階級の絶望的反乱となって、中間階級の利用の下に事を挙げる。そしてその当然の結果は、常に中間階級が新しき主人となることによって終る。〔大杉 1913b: 3〕

このように大杉は中間階級が市民革命で果たした歴史的役割に一定の評価を与えつつ、結局は新たな征服と被征服の関係しか創り出さなかったとして、その偽善性を暴露する。さらに大杉は「原始時代」以来「征服階級と被征服階級との中間に在る諸階級」は「組織的暴力と瞞着との協力者」であり「補助者」であったとした〔大杉 1913a: 5〕。大杉が理

## 第6章

想とするアナキズムの達成は社会的圧迫の実感から生の拡充を欲求し叛逆に出る「真のストライキ」に拠るが、「中等社会の intellectuals (智識者)」はこのような実感を持たないにもかかわらず「餘計な出しや〔ママ〕 ぱり」をするため、「平民」や「manuels (手工者)」はこれを「蛇蝎視」しているとする [大杉 1914: 44]。このように大杉は後の区分でいうところの「旧」中間階級、知識人を含む「新」中間階級ともに理想社会実現を阻む存在として平民から区別し批判した。

大正期に入ると社会主義や共産主義に関する講座ものの出版が相次ぎ、マルクス主義の知識人が論壇に出てくる。「中間階級」の問題が多く議論されるようになったのは大正末期から昭和初年以降である。第一次世界大戦後の不況や金融恐慌に始まる大恐慌により、「大学は出たけれど」の言葉に象徴されるようなサラリーマンの窮乏化が問題となった。マルクスとエンゲルスは、中間層を含めプロレタリアート以外のすべての諸階級は、工業の発達に伴い競争が激化し「零落し、滅亡する」と予測していた [マルクス・エンゲルス 1962: 106]。それまで比較的高学歴高収入とみられていたサラリーマンが不況の打撃を受け窮乏化したことで、プロレタリアートへの同化の可能性が議論されるようになる。

この点につき多く言及した青野季吉は、中間階級は「ブルジョアジーやプロレタリアートの場合のやうに同質的な存在ではなくて、異質的な存在」であり、それゆえに「数的勢力も大」であるとしてその役割を重視する。青野は、マニユファクチュアを行っていたブルジョアジーが、大工業と近代ブルジョアジーの発生以降、小ブルジョアジーあるいは「旧中間階級」と呼ばれるようになったとし、その没落を説く。それとは対照的に、大工業の発展と統一国家の形成が生み出した新しい階級としてインテリゲンチヤ、サラリーマン、勤労大衆などと呼ばれる「新中間階級」の発生と増大を指摘した。そして、中間階級がブルジョアジー・プロレタリアいずれにも属さないという意味で「中間」でありながら新旧の別をはじめ、その内部に相当の異質性を孕んでいることを指摘し、旧中間階級の私的所有意識への執着を批判しつつ、新中間階級の技術や経営能力は社会主義社会においても生かすべきだとした [青野 1926: 19]。

ここまで明治社会主義とマルクス主義における中間階級に関する理解を見てきたが、いずれも革命の主体は「平民」やプロレタリアートであり、中間階級はこれに反する征服階級に属し、あるいはその貧窮した層はプロレタリアートに組み入れられるべきものであった。これに対し、平民の多数性、プロレタリアートの被抑圧性を取り込んで、まさに中間階級こそ多数派であり歴史の主体となるべきだとした立場もある。ここでは室伏高信の主

張を見ておこう。

室伏は人口の大多数は依然として小規模経営の農民であるとしてマルクスの予測は当たらないと指摘する。そして農民と知識階級および中小商人は異なる立場、利害、イデオロギーを持ちながら、金融資本主義の「被圧迫階級」として「一つの階級」が成立したとする〔室伏 1932: 294-299〕。すなわち室伏は中間階級に含まれる多様性を認めつつ、資本主義は産業資本主義から最後の段階としての金融資本主義に入ったとして、そこでの被抑圧性に於いてプロレタリアートに代わる主体としての中間階級の成立を主張した。

さらに室伏は「中間階級が国民の大半を成してゐる」ゆえに金融資本に対する運動は階級運動と国民運動を一致させるとする。その理想は農民的な「土地原価値観念」を基礎とする「共同主義、祖国主義、同胞主義、血の共同の意識」である〔室伏 1932: 303-304〕。

このように室伏の説は、中間階級をプロレタリアートに代わる新しい階級、さらに国民に擬して歴史の主体となることを主張したが、それは観念的な全体主義への傾斜を持っていた。ここには「臣民」という形で平等化を志向した北一輝同様、農民の土地への密着を国民の祖国への奉仕に読み替えていく契機が窺える。農村に基礎を置いた議論は、農業従事人口が減りつつも全就労者の 5 割を保っていた昭和初年において一定の説得力を持ち、もっぱら都会のプロレタリアートを基盤とするマルキシズムへのアンチテーゼの意義をもった。

### 2-3 欲望ナチュラリズムと階級意識

敗戦後、中間層の役割が再び注目されるようになったのは 50 年代後半である。中野好夫の評論中の言を借りて経済白書が「もはや『戦後』ではない」と書いたように<sup>viii</sup>、経済は戦後復興期を経て次の段階の入口に立っていた。政治を見れば、「鳩山ブーム」に湧いた 1955 年 3 月の第 27 回総選挙では民主党が第一党となったものの少数与党で運営に苦しみ、同じく大きく議席を減らした自由党と合同して自由民主党を結成した。対して議席を伸ばした社会党も選挙後再統一を果たす。これに共産党と労農党を合せた革新陣営は、鳩山首相が公約として掲げた憲法改正の発議を阻止できる 3 分の 1 議席を確保していた。新しい発展段階へのテイクオフの時期において、保革拮抗の「55 年体制」における票の行方を決める中間層の役割が再び注目されるようになる。

日高六郎は中間層の拡大を大衆社会の到来と政治的無関心の問題として論じた。日高は、資本主義の初期には被治者は政治に参加することを許されていないから自分の仕事に関心



## 第6章

を集中して政治に関らない「内がわに向けられた」無関心があり、資本主義が発達してくると「巨大な社会の動き」や「複雑な官僚機構」の中で個人は政治的に無力だという気持ちになってマスコミが提供する一時的な享楽や政治の内幕的な情報で満足する「外がわに向けられた」政治的無関心になるとの説を紹介した。日本の場合はこの二つの無関心が重なり合っており、さらに戦前以来の左翼運動の弾圧への恐怖も政治への消極性を招いているとする。このような状況での政治参加は職場のサークルにおける生活記録など「地味に着実にというのが出発点」だと結論付けた〔日高 1955〕。

1950年代半ば以降「俸給生活者」や「サラリーマン」の政治的役割について多く言及してきた大河内一男は、新中間層の中で中産的実質を持っているのは1割程度だとしつつ、他の9割も高い学歴と職制補助的勤務から他の賃金労働者に対して「差別意識」を持っていると指摘した。大河内は、消費ブームの高まりやオフィスの近代化につれ新中間層が実質はないのに意識の上で自らを資本と労働の間の「中間」だと思いこもうとしていると指摘し、敗戦後の組合運動の昂揚期にあっては「労働者」であると意識しようとしていたのと対応するとする〔大河内 1960: 119; 140-141〕。このように大河内は中産性がないものの労働者層とは異なる学歴と職務を持ち、ブームや職場の雰囲気にも影響される中間層「意識」を強調した。

田沼肇はマルクス主義の立場から、新中間階級の中に中産性の実質を持つ一部上層部の存在を指摘する大河内の見解には賛意を示しつつ、その他の部分については給与・労働条件が劣悪なため組合運動への組織が可能であると主張した。加えて日本の場合は新中間層よりも旧中間層の割合が多いとし、新旧両中間階級について資本主義の発達につれ窮乏化しプロレタリアート化するとしたマルクスの予測の妥当性を主張した〔田沼 1957; 1958〕。

このような見解に対し尾高邦雄は、1955年に行われた「社会成層と社会移動 (SSM)」調査の結果に基づき反論する。尾高は「他の先進国なみに、“新中間層”とか“ホワイトカラー”とかいわれる人々の割合がとみに増大してきた、という事実」とともに、「中間層」あるいは生活程度が「中流」であると自己規定する場合に二大階級の「中間」という意味は込められていないとして階級意識が希薄であることを指摘した〔尾高 1958〕。

加藤秀俊は、戦後の中高等教育の普及とマスコミの進展により知識人、プチブルと大衆の溝は狭まっており、この「中間的大衆化」により生れた「あたらしい市民層」は「職業・身分のいかにかわらず、かなり共通の生活価値」を持ち、「向上心の質」や趣味嗜好の点で「相当に平均化」していると主張した〔加藤 1957: 27-33〕。所得を見ても労働者・農



民層と中間層の所得は接近して相当に均質的なものになり、労働運動を通して中間層も労働者の意識を持つようになった。しかし革命の論理にはこの『大衆』の変貌がほとんど考慮されていない〔加藤 1957: 38-48〕。以上のように加藤は、従来の左翼理論が中間階級を従属的にしか扱わないのは「不当」とであると批判する。

加藤の左翼批判の源には、戦前戦中に共産主義が厳しく弾圧されて以後、体制批判の可能性が残されていた社会民主主義が、共産主義のような急角度の転向を経ず、なし崩し的に大政翼賛会に協力するまでになってしまったことへの疑問があった。加藤は「思想が急角度に異質的なものに変貌するものだけを『転向』と呼ぶ」ことに違和を示し、「とくに社会民主主義者のグループの多くは、一九〇〇年から一九三〇年ごろまでの間に、少しづつ変貌をとげて、ついに大政翼賛会のなかにまで入ってしまった」として、個人の感ずる摩擦の少ない「集団のかげの転向」を問題とした〔加藤 1953〕。このような疑問を基底として、加藤は従来の左翼思想が大衆を掴み損ねてきた理由を産業構造の変化と中間層の拡大を視野に入れない二大階級観にあるとして、中間文化論を展開したのである。

加藤の「集団のかげの転向」の指摘に、兼ねてより転向の概念で思想史を描く構想を持っていた鶴見俊輔は共鳴した〔鶴見 2005: 291-292〕。翌年11月、鶴見は思想の科学研究会内に「転向研究会」を立ち上げ共同研究をスタートさせる。

転向研究会で知識人の転向を、民衆の超国家主義への同調との関連で指摘したのは藤田省三である。藤田は民衆思想史の底流を「欲望ナチュラリズム」と名付け、天皇制ファシズムは対外的な危機感を煽りながらこれを共同体国家観へと吸収することに成功したとする。これに対し、東大新人会以来の日本の左翼知識人はそのエリート主義ゆえに大衆＝状況から超越して理論信仰をとり、しかし同じエリート主義すなわち国民の指導者になろうとする意欲ゆえに理論信仰から実感信仰へ反転し欲望ナチュラリズムに埋没してしまったとする〔藤田 1959a: 45〕。

では知識人は民衆、大衆に対しどのような距離を取るべきなのだろうか。この点につき藤田は、日本の進歩主義の「大衆路線主義の欠点は、まさにイデーとダーザインの分化が行えない」ところからきているとし、歴史を動かす主体としての大衆という理念上の意義を認めつつ、現存在としての大衆に対し「冷酷な眼」を失わないことが必要だとした〔藤田 1959b = 1998: 120-121〕。このように藤田は、合理主義、科学主義をもたらしたヨーロッパの自然主義とは異なり、政治的なものから逃げて身のまわりのことの実感に満足し体制容認になっていく狭い態度を「欲望ナチュラリズム」と呼び、知識人がそこへ再び埋没

## 第6章

することへの警戒を示した。

以上のように 1950 年代中盤から 1960 年代初頭にかけての新中間層に関する議論は、マルクス主義者でなくとも二大階級の存在を一つの規範として展開された。資産面での「中産」性のなさや、階級意識の薄さ、戦後の教育による所得・嗜好面での平準化・均質化といった従来の階級観を相対化する指摘がなされる一方、自らもそこに含まれるとされる知識人として、私的利益にのみ関心を注ぐエゴイスティックな大衆、多数派としての中間層からは自らを分離しようとする志向も現れる。前者は戦後民主主義により生れた「あたらしい市民」の可能性を現体制の資本主義下で模索しようとするものであり、後者には知識人から見た戦前戦中の民衆の振る舞いの記憶が重ねられているといえる。

### 3. 主体のゆくえ—1960–1980 年代の『思想の科学』から

前節の高島の議論にあった「管理社会」は、70 年代の『思想の科学』において社会を表象するキーワードの一つであり<sup>ix</sup>、80 年代に入るとその経済的側面が「企業社会」の語で表されるようになる<sup>x</sup>。以下、そのような社会と主体のあり方がどのように論じられたか見てみよう。

#### 3-1 市民と「伝統」

高島通敏は中間層が巻き込まれ加担している現代型の管理社会を、スターリニズムや戦中のファシズムとは異なる「柔軟な管理社会」と呼び [高島 1978: 7]、この桎梏から抜け出す可能性を戦後民主主義が自立を促した女性と青年のうちに求めた。このような高島の認識は学生運動における挫折や、60 年安保闘争で「思想の科学」から生れた「声なき声の会」の実践と関っている。

父親が左翼運動者を多く担当した弁護士で生活が苦しく、中学の時から働いてきた高島にとって、資本主義が「収奪の構造」であることは「自明のこと」であった。しかし 1950 年代前半の学生運動は共産党内の対立を反映して分裂し、高島を「置き去り」にして崩壊していく。この挫折から高島の学問的関心は、原理や体系の追究よりも、原理的には正しいにもかかわらず運動が失敗し続ける原因の究明、「現実をよりよく操作するためにその構造を知る」政治学へと向かっていく [高島 1970: 58-59]。それは一方で「時間割の関係で、まったくの偶然」にとった教養課程のゼミの教官・京極純一の流れを引く計量政治学の専

攻へとつながり、同じころ著作に触れた丸山真男の思想史への関心ともなった[高島 1972; 2003 = 2009: 277; 312]。知識人としての「悔恨」に基づき、無謀な戦争と敗戦という失敗を招来した精神構造を文献解釈から導き出す丸山の思想史は、若い高島に、自身の挫折体験と学問的関心の結びつきにおいても、自身の専攻とは異なる角度からの実証性においても魅力を与えたものだろう。

高島が思想史の分野で初めて公にしたのは、思想の科学研究会の『共同研究 転向』に書かれた一国社会主義と生産力理論についての論文である [高島 1959; 1960a]。研究の途上で高島は、この研究が「戦前の日本進歩派の惨めな敗北の記憶」に発しており、その基本的発想が「惨めな敗北を二度と起こさないためにこの敗北の主體的条件を究明すること」にあると書いた。対象を「思想家」に求める理由は、思想こそが「大衆を権力から切りはなし反対運動に組織する究極的な手段」であり、思想家には思想を社会に表明する「職業的責任」に加え、「内的契機」と「自己説得」において最も期待し得るからだとする [高島 1956]。ここには丸山が荻生徂徠や福沢諭吉ら思想家に注ぐのと同様のまなざしがある。

もっぱら思想家の主体性を問題とする高島の視点は、安保闘争中に小林トミらが始めた「声なき声の会」に参加する中で転回していく。高島はここに集う人のほとんどが「旧制中学 - 新制高校以上の卒業者」で「中間層」に属しており「国民階層の正確な縮図」ではないとしつつ、政治参与の方式としての「市民的行動様式」を共通に求め意識していることから「政治学的な意味」での「一般市民」であるとした。市民的行動様式を支えるものは「原理感覚」と「無党無派」の願望である。原理感覚とは、利益ではなく利益の争いの処理の仕方あるいは利益の表現についての権利の感覚であり、無党無派とは政党の下部団体となって統一的な目標に直ちに連動しないという意味である [高島 1960b]。このように高島は、女性や戦後の民主主義教育を受けた青年とともに運動の実践をしながら、「市民」の主体性を見出し理論化していく。

丸山は『声なき声のたより』に感想を寄せ、「声なき声は、声を上げた瞬間に、声ある声になる」として「人民（多数）と支配（少数支配）とを一緒にした民主主義の理念そのもののパラドックス」を指摘し、「日本には神の信仰による統一はなくても、悪魔の信仰による統一はある」として、「もっと理性を、もっと解体を」と提言した [丸山 1960]。新安保条約が批准され岸内閣が退陣して運動の波が引いていく中、高島は改めて丸山の発言を取り上げ、既存の政治組織との違いを明確にする。

## 第6章

組織化された声は強力であるだけ同時に、人間の一面だけへの限局をともなっている  
のであって、それは別な見方をすれば、つねに豊富な人間性への裏切りによって成立  
しているといえる。そして、声なき声とはまさに、こういう組織を生み出すところの  
基盤になるもの、素朴な人間そのものでなければならぬ [高島 1962: 172]。

このように高島は、声なき声の会の本義は組織化ではなく、しばしば組織が切り捨てて  
きた素朴で豊富な人間性の発露にあると主張した。

しかし声なき声の会もまた組織であり、円滑に運営しようとする「少数支配」が発生  
する危険は免れない。そこで高島が重視したのは、「欧米的な原理」でなく「日本的な経験」  
に根拠を持つ市民運動のあり方であった。高島は運動への参加を「お百度参り」(北添忠雄)  
とするような信仰と運動の結合を日本における「風土病」だと考えてきたが、「運動をやっ  
ているうちにだんだん考えが変わってきて、今ではそれに居直っている」ようになったと  
言う。しかしその病理には対処療法が必要であり、運動の指導者や世話人が「下からオル  
グされなくてはいけない」とし、意図的な「無責任のシステム」の必要を主張した [高島  
1968: 9]。日本的な信仰と運動の結合や、無責任のシステムへの言及は明かに丸山を意識  
したものであろう。

思想家よりも市民に政治的意味を見出すようになった高島の転回は、丸山政治学の解釈  
の変更を促した。高島はその魅力は初期の厳密な弁証よりも、講和問題や安保闘争にコミ  
ットしながらデモクラシーの論理に取り組み始めた点にあるとし、丸山の学問は「政治的  
指導者ではなく民衆において近代的精神が樹立されなければならないという問題意識」に  
基づいていると読み解く [高島 1972 = 2009: 279; 282]。

すでに見たように、高島は価値が体制側により疑似的に創出されるときファシズムが起  
こると指摘していた。高島は「大勢の持続を願う中間層化した労働大衆」が管理社会に対  
応して保守化することを警戒し、新しい社会ヴィジョンの核に、日本独自の「伝統」の上  
に立つナショナリズムを据えるべきだと主張する。それは例えば「ヒロシマ・ナガサキの  
体験と非武装憲法の理念」といった戦争体験に基づいた戦後の平和理念であり、日本の近  
代が達成した「教育の普及」と「高度の平等化」、「私的な銃器火器の放逐」や「国内紛争  
の平和的解決の程度」であるとする。高島はこのような貴重な資産を、民族的アイデンテ  
ィティの拠って立つ基盤あるいは向うべき目標として成熟させるべきだと提言した [高島  
1979]。ここには、天皇制に吸収されるような前近代的な共同性の慎重な忌避とともに、

明治以来の西欧諸国を理想とする社会ヴィジョンの描き方を否定する指向がある。特に後者は、自立した個人の存在を基礎に西欧のリベラリズムに価値を置く丸山に対するアンチテーゼと見ることもできる。

このように高島は、市民運動は素朴な人間の権利の感覚に発するとし、その基盤を戦後民主主義の「伝統」に求めた。そして組織の中心と周縁、上と下を意図的に入れ替えることによって少数支配を回避しようとする。同様に「人間」であることと運動の両立を志向し、それを職場における実務の熟達により可能にしようとしたのは大野力、その弟・大野明男、上坂冬子ら思想の科学研究会内の「実務の中の思想の会」の人々である。

### 3-2 実務と人間

実務の中の思想の会は60年安保闘争に際し、「ビルの内側」における平常の業務と、「ビルの外側」の運動の昂揚にとまどいながら、むしろ体制側の方が社会運営のプログラムへの責任と見通しにおいて優れている事実を認め、体制の末端である産業の現場に潜ることによって社会を改善していく方向性を打ち出した〔「実務の中の思想」の会1960〕。

現場に深く潜り込むことを通して社会改善を試みる「(小)状況主義」は、大野力が地域労働者の生活改善に取り組み始めた1948年当初からのスタイルでもあり、当時の共産党の運動方針でもあった。大野は桐生の中学教員をしていたが学校に出てこない子供がいること、町の基幹産業にもかかわらず労働者の生活が劣悪であることへの「関心」から工場労働者に転身し、女工を組織化して運動を推進した。しかし1950年代半ば以降、経営側が合理化の一貫として労働者の生活改善を進め、高度成長が始まると、生活の向上は急テンポになされ運動の成果を追い抜いていった。大野は運動よりも「管理者のサイドからの頭の使い方」に関心をもつようになる。もっとも大野は管理が運動よりも大切だということではなく、「管理とは秩序の維持並びに改善機能」であり、それが現実に適合し得ない時は、個人の「これはおかしい」という発想から始まる連帯により秩序の変更を求めるとして、管理と運動は相互関係にあると見る。よって管理と運動の安易な「和」を排し、対立によるコミュニケーションや管理から運動への変身、転換を許容しようとした〔大野1973〕。

実務の才を使うことによって企業や官僚組織の中で生活改善を図っていく可能性を主張する大野らに対し、あくまでも「下から」運動することを主張したのは高田佳利である。高田は戦後のサークル活動が、「統制」と「習慣」で動いてきた従来の優等生中心の組合運動とは異なり、「手間をかけた落第生的な活動」に基底を置いて自発的な協力関係を可能に



## 第6章

してきた点を重視していた。しかしながら 60 年代に入ると経営側がこの機能に着目し、組合に代わって活動費を支給して労務管理の一環に取り込み、他方で経営側の意図に合わないサークルには許可を与えず場所を貸さないなど不利益を与えるようになっていた。高田は『革命家』が日常生活を考えないと思ひこむあまり、ビジネスの合理化にうちこむことに方向をかえる」のは「逃亡奴隷」になることだとして、あくまでも「労働者が、そのおかれた立場で、その状況の中で状況を打開する主体の確立」をすべきだとし、サークルにおける学び合いを重視する自らの立場を堅持する [高田 1961a;1961b]。

大野の立場はマルクス主義陣営からも批判された。上田耕一郎は、大野の立場は「タテマエ」としての反体制の立場も棄ててしまっているとして、「小状況主義は、多元主義を媒介として、第二の特徴として保守主義への転化傾向を表面化し始める。そしてこの過程は、同時に市民民主主義的潮流との分化」の過程だとして、「思想の科学」に「重要な思想的危機」が訪れていると指摘した [上田 1962]。

また、大野のように職業を生き甲斐と結びつける発想を「会社コンミュン」とし、その全体性への傾斜に危機感を表したのは小田実である。小田は思想の科学研究会の会員ではないが、ベ平連の活動や総会への参加・発言を通して「思想の科学」と近い位置にあった。小田は大野を交えた対談で、むしろ仕事の外の領域に出て、管理被管理の関係の外に立つ第三者、例えばアジアの視点を持つべきことを主張する [大野・中岡・『人間として』同人 1972: 77]。小田は世の中の大多数のふつうの人間が持っている「なるだけ長生きして、なんとか安楽に生きていたい」という願望を「生きる思想」「生きている思想」だとし、これを踏みにじられたと実感した時、人びとははじめて運動に立ち上がるとした。よってその根拠は個々人の実感にありながら、国家を超える連帯もあり得るとする [小田 1972a: 52-73]。小田の運動論は制度・理論・観念といった制度化されたもので構築されてきた政治運動を、そこから解き放たれた一人一人の生身の人間としてとらえ返そうとするものである。その基底となる「生きる思想」は高島が「原理感覚」よりも根源的ともいえるが、既成の理論、観念に拠らず実践から運動論を構築する点は共通する。

それぞれの主張には戦争体験と敗戦、戦後の混乱期の体験が大きな影響を与えている。「戦争末期の少年飛行兵」だった高田は、敗戦で軍国主義から民主主義へと転換した価値の「落差」を埋めるのにサークルが果たした役割を重視していた [高田, 石井 1976]。小田は大坂の空襲、敗戦で自分が「巻きこまれる側」にいることを自覚し、この自覚を基底に「長いものに巻かれながら巻き返す」可能性を志向する [小田 1973: 73-78]。大野はこ



の後も管理と運動、ビジネスと人間らしさの両立を追求するが、80年代に入ると、60年代に自分が呼びかけの対象としていたと同年代のビジネスマンは「戦中から戦後にかけての、大混乱期の共通経験」により「民主主義への意志」の共有が前提でき、だからこそ管理の立場での改善といった状況主義の先鋭さを掲げ得たが、それが無い若い世代は状況主義を支える「精神的なバネや大局観を失いかねない」と危機感を示す〔大野 1985〕。戦後民主主義の継承の限界については高島も指摘している。高島は「思想の科学」や国民文化会議など、戦後出発した文化運動の多くが世代交代できず、90年代以降終息していったことに言及して、自らの世代は「戦後民主主義の輝きを少年時代の原体験として」持ち、「閉塞化してゆく時代への危機意識があった」とした〔高島 2000 = 2009: 107〕。

このように「思想の科学」では、現体制の末端で実務を担おうとする方向と、経営管理側から距離をとって抵抗の足場を組む志向の両方が存在していた。しかしそれは拠点をどの状況に置くかの違いであり、それぞれの状況における一人一人の感覚、発意や営為を重視し、組織的な目標に安易に収斂させない点では共通している。その基底には戦争体験、戦後体験をくぐったことによる民主主義への信頼があった。「思想の科学」は前衛 - 大衆の図式から逸脱する「市民」「人間」「実務家」といった多様な主体が思想として立ち上がる場であった。そしてそれぞれの実践の場は職場や組合、あるいはベ平連といった「思想の科学」の外に求められていた。

### 3-3 人間とは誰か——女性の問い

職業により、あるいはそれ以外の部分の充実により人間らしさを取り戻そうとするこれらの主張に対し、「人間」というカテゴリーから疎外されてきた女性の立場からの反論が見られた。

駒尺喜美は文学をはじめあらゆる学問分野にダブルスタンダードがあると告発した。駒尺は「女」として括られることへの不快を示しつつ「女性学」の必要を認め、日本女性学会の立ち上げに参加した〔駒尺 1980: 1981〕。

加納実紀代は「子持ちパートの自立論」で、低賃金水準に置かれるパートは効率や出来を追求するほどに非人間的な労働形態に陥るとして、職業倫理と人間意識を統一する困難を主張した〔加納 1974; 加納, 河野 1979〕。そして、主婦は生産と消費の循環構造において消費の専門者に置かれていることを確認した上で、生活とりわけ食に最も近い立場にいる点を利用して、分業生産された商品の消費者に甘んじることなく生の全体性を回復

## 第6章

しようとする [加納 1979]。また加納は、戦中によい母であろうとすることで息子を戦地に送り出し結果的に超国家主義の加担者となった「靖国の母」について、息子を失った嘆きを「生理的に共有」するゆえにこだわるとして、「母なるもの」への幻想を壊し「人間的な生活」を創り出すことを主張した [加納 1977]。政治に巻き込まれる存在としての女性を超えていこうとする加納の関心は、「女性の現在を問う会」の立ち上げと、そこでの聞き取りによる『銃後史ノート』『銃後史ノート戦後篇』へとつながっていく。

女であり母であることを積極的に肯定して、「子育てという伝統的で保守的な仕事」の現場から思想の可能性を問うたのは高橋幸子である。高橋は「革新」の意味を問われて、「月並み」で「紆余曲折な暮らしの偶発性の中に、金に頼るといふ域を抜けた生活能力や助け合い、感動の共有をどれだけ再生していけるか」だとし、「封建制保守性を斬るのではなく、私たちや私の中に埋もれている去ったものからの意味の再発見」であるとする [高橋 1978]。高橋は放課後の子どもたちに自宅を開放して私塾を主宰し、自然と人間同士の触れ合いの中で子どもが見せる反応に向き合って「衣食住の生活力」と「人間関係の運営力」が育ちゆく過程に寄り添っていく [高橋 1982]。

すでに加納が主婦の生産からの疎外を指摘していたが、まさにその点に女性独自の視点の根拠を求めたのは上野千鶴子である。上野は「総中流」の陰で企業間格差という身分社会の形成が進行しており、この新しい疎外は企業社会の外に立つ女性の「ハズレモノ」の視点が発見した男性すなわち「抑圧者の不幸」だと指摘した [上野千鶴子 1984]。上野は『思想の科学』誌上の連載「マルクス主義フェミニズム」で「女性解放のための理論構築というひとつの実践」 [上野千鶴子 1986: 87] を試みたが、やがて自分のメディア『女性学年報』に比重を移し『思想の科学』から遠ざかっていく。この点につき上野は、『思想の科学』の読者は多様で顔が見えず、もっと「互いの思いに頷き合う人々」に書いたものを届けたかったと語った [記念シンポジウムを記録する会 2010: 55:78]。

上野が言うような多様性は、「思想の科学」が意図的に求めてきたものでもあった。「思想の科学」は折に触れ、自分たちが「多元主義」の団体であると規定してきた<sup>xi</sup>。1976年4月、『思想の科学』の30年の歩みを回顧した討論で高島はこの点に関し、「ナショナリズムとインターナショナリズムあるいはコスモポリタニズム」、「抵抗」と「実務」の立場、「大衆の情念や実感」と学問の「型」といった「相反するテーゼが両立したまま残っている」と指摘した [上野・日下部・南・高島 1976: 174-175]。高島の指摘はこれまでに見てきた高島と小田、あるいは大野と高田の相違を明確に指摘しているといえる。

このような相反につき、「思想の科学」の研究・編集の両面にわたって中心的な役割を果たしていた鶴見俊輔はどのように考えていたのだろうか。同じ討論に紙上参加した鶴見は、「思想の科学」の多元主義が「縮小再生産する道をとらないほうがいい」とし、新しい方向として、「違う仕事、違う生活をもっている者の話し合いの中からでてくる哲学」、「日常思想を主観的なものにとどめないで相互主観性の場を作る、インターサブジェクティビティ」が打ち出されてきているとして、その「混沌」を評価した〔鶴見 1976: 188-189; 193〕。そして「サブカルチャー」を文化の中心に置くことを提案する。

裏通りの文化をはっきり中心に据える方向にきたのじゃないか。それを「サブカルチャー」といってんだけど、これは英語の社会学の用語とぜんぜん違う。裏店の文化というのか、表通りで店舗をはれないような、そういう文化なんだな。それを中心におく。つまり、人間が生きているところには必ず思想があるということね〔鶴見 1976: 190〕。

鶴見はこのように述べ、「人間が生きていることに役に立つ」という観点から、家庭における女性の基礎的な仕事こそ「創造的」だとし、「女のように創造的でありたい」と思うことによって男も創造的になれると提案した〔鶴見 1976: 191〕。このような鶴見の視点は、目覚めたものから目覚めていない者への呼びかけの形態をとる啓発型の文章と、感覚に密着して身辺から概念の意味を捉え直す文章の共存を可能にしていた。しかしどちらかといえば鶴見は後者への評価が高かったことが読み取れる。よって『思想の科学』はどちらのタイプの書き手にも書き始める機会と発表の場を与えたが、前者のタイプは書き進めるうちに自身の主張と呼びかけの対象が明確になると、他の団体や媒体に活動の場を移していった。

#### 4. おわりに

以上、社会、運動とその主体の問題を中間層に関する議論を中心に見てきた。多数という属性は明治社会主義においては平民、マルクス主義ではプロレタリアート、国家社会主義では国民に付与された。それらはいずれも、少数の目覚めた知識人が目覚めていない多数に向けて社会変革の主体となることを説くという啓蒙の枠組みを持っていた。1950年代

## 第6章

中盤から 1960 年代初めの新中間層をめぐる議論では、戦前戦中の知識人のあり方と、それと一体になった転向の記憶が一つの動因となって、知識人のエリート主義と民衆のエゴイズムに対して批判的な視線が注がれた。また戦後復興以後の経済社会体制の選択の時期にあって、「革命」の現実性に関しあるいは社会動態、または階級意識の面からのアプローチがあった。いずれにせよこの時期まではマルクス主義が理想の社会と知識人のあり方に関する一つの規範として働いていた。しかし 1970 年代後半に至って古典的な意味での貧困がほぼ解決し、有権者の投票行動が保守・革新の二項対立図式で描けなくなってくると、中間層をめぐる議論にも新しい評価軸の導入が求められようになる。その一つが戦後民主主義の評価であった。

高島通敏は戦前戦中の失敗を基底とする戦後民主主義の成果を「伝統」化することを志向する。大野力らは敗戦と戦後の混乱期の苦闘の中から作られてきた体制を壊すのでなく、産業の現場にもぐることを通して人間らしさを実現しようとした。それは職業の生きがいへの昇華ともなるが、高田佳利、小田実により職業への没頭はかつての「臣民」同様、全体性への傾斜を持つと指摘された。大野もその危険性については認め、戦中戦後の混乱期の共通体験が失効した後は歯止めが利かなくなると危惧する。

高島と小田の間にはナショナリズムによる統合とインターナショナリズムによる連帯の比重の違いがあり、大野と高田の企業に対する姿勢にも譲れぬ一線があった。相反する立場の共存、混沌の維持こそが「思想の科学」の「多元主義」であり、戦争体験に基づく民主主義への希求、制度的なものへの反発と自らの場における実感の重視と実践において共通していた。「思想の科学」の多元主義は、戦中の天皇制国家主義とともに、解釈や運動方針に統一性を求める従来の政治運動のあり方へのアンチテーゼでもあった。よって普遍的な歴史に動員されるマッスとしての「人民大衆」ではない、日常生活における主観がそれぞれの実践契機となる主体として「市民」「実務者」「人間」の概念を立ち上げ、主張した。

アカデミズム、ジャーナリズムにおけるマルクス主義の影響力が薄れてくると、『思想の科学』はそれまでの主体とは異なる日常生活と創造性を有する新しい主体として女性の書き手呼び込む。しかし「裏通りの文化」に甘んじてきた不公正を告発する女性たちにとって、『思想の科学』の読者は呼びかけの対象として多様に過ぎ、特定の目標とそれに共感する仲間、読者を求めて『思想の科学』から離れていった。

近年、当事者の発話はネット上に溢れているが、その内容をフォローする読者の存在がなければそれはただの個人的つぶやきでしかなく社会性をもたない。以前は活字にする技

術やコスト面の要請から知識人や編集者の後押しが要ったが現在ではそのハードルは下がった。しかし発話者と読者の間のコミュニケーションの成否が多く言葉の力にかかっていることに変わりはない。

「中間階級」「中間層」「中流」によって語られていた主体像や大衆像は、戦後の知識人や官僚、ジャーナリズムにいた人々が抱いた幻想や欲求を反映したものであるとともに、それによっては括り尽くせないものの存在を逆照射しているともいえる。変革を理論の上でリードしようとし、マスを把握しようとした戦後知識人のあり方が、その解体を経て今また問われていると思われる。

---

<sup>i</sup> 「1億」は日本の総人口が約1億であったことから全国民の意に用いられる（『広辞苑第6版』岩波書店2008）。戦中の『朝日新聞』に例を取ると、「一億国民」の言葉が頻用され、戦況が悪化してくると「一億玉砕は神風特攻の精神を精神とする意味」（1944年11月25日朝刊2頁）、「一億玉砕の主決戦」、「一億特攻の最終決戦」（1945年7月15日朝刊1頁）との表現が見られる。敗戦後の談話で東久邇宮首相は「一億総懺悔の秋」との表現を使った（1945年8月30日朝刊1頁）。大宅壮一（1900-1970、評論家）は普及しつつあったテレビの低俗性に触れて「『一億総白痴化』運動が展開されている」（1957年2月2日付『週刊東京』）と書き流行語となった。

<sup>ii</sup> 戦後日本における格差に関する言説を網羅的に紹介したものに盛山和夫・原純輔・白波瀬佐和子編著『リーディングス 戦後日本の格差と不平等』第1-3巻（日本図書センター2008）がある。第1巻第3章は1950年代後半の中間階級論、第2巻第2章は1970年代後半から90年代前半にかけての中意識と中流論争から、社会学の論文を掲載している。盛山は第1巻第3章の解説で、当時の議論がかみ合わなかった一因が英語では単一の「ミドル・クラス」に「中産」「中間」「中流」と様々な語が充てられたこと、その混乱が70年代以降の中意識論争でも再現されていることを指摘した〔盛山2008: 192〕。

<sup>iii</sup> 「中間階級」「中間階層」「中間層」と訳される *mittelstand* (独)、*middle class* (英) は、一般的には社会成層の中間に位置する諸階層を意味し、メルクマールとしては資産、教養、収入などが考えられる。マルクス主義の用語では当初、所有と生産関係の観点からブルジョアジーとプロレタリアの間の農工商業自営層、中産階級、プチブルジョアジーを指していた。しかし産業構造の変化に伴い資本家・経営者と労働者の中間にあって経営補助、管理知的作業に従事するホワイト・カラーが大量に生み出されてくると、この人々を「新中間階級/層」、従来からの小資産を持つ自営業層を「旧中間階級/層」と呼ぶようになった（『現代政治学事典』ブレーン出版1998；『広辞苑第6版』岩波書店2008；『日本大百科全書オンライン版』小学館）。

<sup>iv</sup> 調査結果は内閣府ホームページ <http://www8.cao.go.jp/survey/> で閲覧できる。

<sup>v</sup> 記事中「中間階層」と「中間層」はほぼ同義に用いられているが「中産」はこの限りではない。

<sup>vi</sup> 村上泰亮「新中間階層の現実性」（1977.5.20）；岸本重陳「新中間階層論は可能か」

## 第6章

---

(1977.6.9)；富永健一「社会階層構造の現状」(1977.6.27)；高島通敏「新中間階層のゆくえ」(1977.7.14)

vii 「宣言」『平民新聞』(1),1；「平民の武器」同(3),1

viii 中野好夫 1956.「もはや『戦後』ではない」『文藝春秋』34(2), p.56-66；経済企画庁 1956.「五 結語」『昭和 31 年度経済白書』至誠堂

ix たとえば特集「管理をくずすスタイル」『思想の科学』6(17),(225)；「管理社会＝現代の呪縛」『思想の科学』6(97),(305)など

x 特集「『企業社会』入門」7(42),(379)；「企業社会」7(67),(404)など

xi 「思想の科学研究会—回顧と展望」『思想の科学』4(1),(45),88-95；「討論 思想の科学と戦後の三十年」『思想の科学』6(61),(269),172-187 など



## 終章 「思想の科学」の変遷と意義

前章までに、「実感」、「天皇制」、「中間層」といった論点、ならびに転向研究会に代表される思想の科学研究会内の小集団に着目して、「思想の科学」における思想の内容およびその方法の特徴を問題別に明らかにしてきた。本章においては、これらの論点を時系列で追いつながりながら総括し、「思想の科学」が論壇ないし戦後社会の中で果たした役割とその思想（史的意義）について検討を加えたい。

### 「科学」の失敗

戦後、知識人たちに克服されるべきものとして意識されたのは、日本社会ならびに国民の「非近代性」であった。それは、のちに丸山真男が「悔恨共同体」と名付けたように、敗戦をもたらした日本の「近代」の失敗への知識人の悔恨、反省に基づき、また戦中は輸入・紹介が抑えられていた欧米の学問を今後は積極的に採り入れて、欧米並みの近代を再構築しようという意欲にも支えられていた。1946年に創刊された『思想の科学』も例外ではなく、英米思想の紹介とその日本社会への適用を方針に掲げ、書評や合評会のもようを掲載し、さらにはアメリカの分析哲学と社会心理学の手法を導入して、質問票調査から職業別の人びとの性向を割り出す「ひとびとの哲学」と題する調査報告を載せるなどした。

彼らが対象としたのは「思想家」の思想ではなく、「歴史の創造に直接間接に参加する多くの人々」、すなわち「大衆」の思想であり、これに「経験科学的」に、すなわち観念的ではなく、現実到大衆の行動を規定し、行動としてあらわれて来るものとして把握しようとした。

だが、第1次の売れ行きが落ち込んで終刊を迎えると、鶴見姉弟の中にこれまでの観察主義的な方法と、それをよしとしていた「官僚的」な自己に対する反省が湧き上がってくる。ちょうどこの時期、戦時下に弾圧された生活綴方が復興期にあった。この方法においては、知識人である鶴見らが大衆を観察するのではなく、大衆自身の言葉で身近な問題を表現させることに眼目があり、その表現から鶴見らは「天皇制官僚」的な自己の言語と思考を改造することを目指した。その過程で発見されたのが生活の中に生起する「実感」であった。当時、石母田正らマルクス主義歴史学者たちが唱道した国民的歴史学運動においてもまた、生活記録が歴史学習の方法の一環として注目されていたが、そこでは革命の主

## 終章

体となるべき意識に目覚めさせることが「科学的」な認識であるとされていた。これに対し鶴見和子は、生活における実感を出発点にしてそれぞれが書き、互いに討論し、行動し、考える循環の中で新しい生き方を発見する自己再生と、その積み重ねによる歴史の再生を目指し、鶴見俊輔は、強い感情が煮詰まった場合には行動へとつながっていく点を重視し、それが「戦後派」「戦後世代」から出て来ている点を肯定的に評価するようになる。和子の営みは、正統ともいべきマルクス主義の思想体系をいったん拒否した上での歴史の再構築の試みであり、俊輔の場合は、アメリカの分析哲学の手法を捨てて、日本の大衆の実感を基底とするプラグマティズムをつくろうとする試みであったといえよう。

### 知識人と大衆の溝

大衆の実感に自発性、自主性、変革への芽を見出し自らも自己改造しようとする鶴見姉弟の意図に、竹内好の国民文学への志向が合流して、第2次、第3次『思想の科学』は生活綴方を主要内容に据えるが、その意図に反するように、研究会内の知識人と大衆の溝はこの時期むしろ深まっていく。

「生活の中に入り、その問題をくみ取り、協同して法則を探究」する思想運動を目指すべく、会員2名の推薦という入会条件を取り払ったところ、会員数は急速に増大した。その中には、共産党や民主主義科学者協会から軸足を移して来た者も含まれていた。その結果、個人的な人脈でつながった知識人のサロンとしての性格は薄れ、丸山や武田清子、石本新ら元からいた会員からは、具体的な研究活動や成果を出さない会員に対する不満や懸念、そのような会の形を容認する鶴見に対する批判が出た。「サンデー毎日事件」の処理を受けて地方の会員からも「評議員層」と「一般会員」との間に「ぬきがたい断層」が指摘されるなど、亀裂は決定的となった。この点につき鶴見は、断層は「論理」と「生活」が隣り合せにあるような構成の脱落によるものであることを認めつつ、それが「構成の立派なものに成長する」ための骨格を成すとして、安易な統合や架橋をしない構えを見せた。

以上のように、戦後間もない1946年の創刊から50年代半ばに至るまでの時期の「思想の科学」における「大衆」ないし「戦後派」の「実感」がもつ可能性への注視は、「思想」ないし「理論」の保有者としての知識人との溝をむしろ浮き彫りにしていく過程でもあった。鶴見ら編集委員によって取り上げられた「優れた」投稿は、知識人が備えるべき普遍的な知として取り上げられたのではなく、あくまでも「大衆的な」「すなおな」綴方として

の評価を受けた。そして佐藤忠男や上坂冬子のように、そのような「大衆性」を自覚的、あるいは半ば無自覚的に活かして、『思想の科学』への投稿を皮切りに、文筆の世界に入る者も出てきた。他方、「大衆的」なるものを取り込もうとする姿勢、それらの大衆と連帯して新しい社会を建設しようとする意欲は、マルクス主義とも共通し、共産党の内紛の過程で党からはじかれた人たちをも許容することとなった。彼らの多くは職場や大学での運動経験、すなわち「思想の科学」が欲したところの「大衆」とのつながりを持っていた。大野力らは「思想の科学」への大衆性の媒介者として、執筆者、のちには編集委員として重要な役割を果たしていくことになる。彼らの存在は、「思想の科学」に共産党とは異なる仕方で大衆を取り込む知識人集団としての性格を与えることになった。

### 大衆観の揺らぎと「市民主義」

だが、「思想の科学」の、大衆の可能性を注視し、マルクス主義とは異なる社会変革の道筋を模索する知識人集団として性格は、1950年代後半以降、高度成長が本格化してくるのに伴って、徐々に動揺していくことになる。大衆社会化、あるいは週刊誌、新書、ムードミュージックといった中間文化的なものの登場と消費者層の拡大は、知識人が「前衛」となって大衆を牽引し「革命」を起すという従来の運動の設計に変更を迫るものであった。また、各経済指標が1955年には戦前の水準を回復したことを受けて、経済白書が「もはや『戦後』ではない」の語を引用して話題になったように、復興優先の保革協調期が終わりを迎える中、知識人にも改めて理想とする社会のあり方ならびに大衆との関わりようが問われることとなった。

それはマルクス主義の階級観に修正を促す言説として表れた。加藤秀俊は、戦後の中高等教育の普及とマスコミの進展により、向上心の質と趣味嗜好の点で「相当に平均化」した「中間的大衆」ないし「あたらしい市民層」が生れて知識人と大衆の溝が狭まったと主張し、これらの層は所得の面では労働者・農民層と近似して「労働者意識」を持ちつつあるにもかかわらず、左翼理論が依然として「中間階級」を従属的にしか扱わない点を批判した。

加藤の中間文化論は思想の科学研究会における月例研究会で複数回取り上げられ、そこでの議論の内容は会報に掲載された。その中で後藤宏行は、加藤と同年代ながら、自分は中間文化と戦前的教養の相半ばする「中途半端な世代」であるとし、「実感」に拠る「戦後

## 終章

派」であることを強調する前年までの主張からの揺らぎを見せる。他方大野力は、従来の左翼理論からの「転向」という積極性において中間文化論を評価しつつ、教育程度、趣味志向において「平均化」しているという加藤の主張の楽観性を批判し、社会に出て地位が分化してからの「生々しい現実の矛盾、対立」を加味すべきだと主張した。

加藤の「中間的大衆」の概念は、鶴見の大衆観とも異なるものであった。『思想の科学』が休刊していた50年代半ばから後半にかけてのこの時期、鶴見が発言する主たる媒体の一つは『中央公論』であり、そこで鶴見はサークル誌紹介欄の「日本の地下水」を連載し、また生活綴方の鼎談なども行っているが、民衆の実感を要諦とし、あるいはそのような実感が主として戦後世代から出て来ていることを評価する立場を変えていない。その上で鶴見は、戦中派の戦争体験に固執することを慎重に回避しながら、戦後派と連携するための小集団の運営方法を全国から寄せられるサークル誌からも摂取し、それを転向研究会をはじめとする思想の科学研究会内の小集団において実践していった。

このように、「思想の科学」内の大衆観は揺らぎ分裂していくかのように見えたが、これらが60年安保の際、「市民」という概念において一致をみる。1960年7月の特集「市民としての抵抗」で久野収は、5月19日以来街頭をうずめた「市民」は、従来の少数の前衛に率いられる「大衆」とは異なるとの認識を出した。すなわち市民とは「職業を通じてのみ生活をたてている人間」だとして、職業人と生活者の両側面を持つことを指摘しつつ、今般の運動では主として職分的市民意識が具体的行動としてあらわれた点を評価した。

久野の職業人としてのエートスを重視する見解の延長上には、大野力、上坂冬子ら「実務の中の思想」の会の主張を置くことができる。彼らは安保闘争の際、通常通りの仕事が行われている「ビルの内側」と、運動に昂揚する「ビルの外側」、いわば産業と政治の間を往復し、その落差にとまどいながら、「本筋」としては職場から離脱するのではなく、あくまで経済産業体制の中の職場にとどまって、専門家として実務に徹することを貫いて改善のプランを出すべきとの結論に辿り着く。

対照的に「市民」の生活者としての側面を重視したのは加藤秀俊である。加藤は、デモの拡がりや「平凡で平和な日常生活を確保するために政治的行動に出る」「市民」の成立と見ていた。

従来「市民」という語は西欧中世の中産階層ないし近代における資本家階級の「ブルジョア」として左派からは否定的に使われていた以上、「大衆」とは異なる主体を立ち上げようとする意図は解し得ても、当然には代替し得ない。そこで「思想の科学」では、「市民」

から有産階級の意味を抜き、職業と生活という構成要件を導入し、職場と地域を往復する存在としての「市民」を創出した。

安保闘争は鶴見の大衆観にも影響を与えた。同号で鶴見は、終戦直後に共産党が戦争責任と反共・容共の争点と抱き合わせたために超党派的な結集をはかれなかったと批判する。鶴見がここで批判している共産党による統一戦線の不成功は、終戦直後のみならず、眼前の安保闘争においても再現されていた。そこで鶴見は、「私の中をたくみにくだってゆけば国家をも、世界国家をも批判し得るという原理」への信頼を運動の前提とし、思想の「私的な根」をとおし「無党無派」で国家に対峙することを主張する。まずは「責任ある民主的な政治形態の確立」を求めることが大切だとして、「資本主義か社会主義かを主要な争点としない、折衷主義のプログラム」を提唱した。ここで鶴見が運動の基底に据えているのは、知識人と大衆との差異を踏まえた連携の戦略というよりは、一人ひとりの「私」が持つ自然権的な普遍価値であり、それまでの持論であった大衆の実感には触れていない。それは、実感の対概念としての「理論」と「科学」を握るマルクス主義と、それまで対抗し、それゆえに相補的でもあった関係性の解消も意味していた。

### 「公器」としての雑誌

上記のように、60年代に入ると鶴見は実感という概念を強調しなくなり、生活綴方という方法も誌面から消えていった。かわってこの時期、大野力らにより、企業や官庁といったホワイトカラーの「現場」の問題を取り上げるべきことが強調されるようになる。現在の経済産業体制を承認し、職場における専門家として実務に徹するなかで社会改良を進めようとする大野らの主張は、その基底に、戦後の社会運動に挫折した体験を持つ者としての、従来の革新運動の理論と実践に対する抗議の意志が携えられていた。その意味で、鶴見はマルクス主義の「科学」から自由になったが、「思想の科学」で見た場合にはそうではなかった。上田耕一郎らマルクス主義を堅持する立場からは、大野らの「状況主義」は「多元主義」という名の妥協であり後退であるとの批判を受け、会内からもあくまで「下から」、つまり労使では労の立場で問題を扱うべきだとの批判が出た。

天皇制特集号事件では、個人的なつき合いでむすびついた集団であるところの「思想の科学」の限界が露呈された。実際に対応に当たった久野、市井三郎、高島通敏ら会長ならびに評議員は、嶋中事件以来、中央公論社が置かれている状況を理解した上で袂を分かとう



## 終章

としたが、その対応と、他の会員と執筆者に諮らずそれを決めたプロセスについても会の内外から批判を浴びた。自主刊行への移行は、この経済システムの中で、ときに政治的な状況にも存在もろとも巻き込まれる危険も折り込んで、思想運動として出版を行うという、「思想の科学」にとっての新しい実践の始まりであった。

64年から67年に編集長をつとめたしまね・きよしもまた、学生運動で共産党の内部分裂により「傷」を受けた一人だった。60年安保闘争後の共産党の退潮と、新左翼運動と大学紛争が高まる中、しまねは運動と理論の問題を繰り返し取り上げる。67年末からは鶴見が編集を引き継ぎ、ベ平連の若いメンバーが加わって、反戦・反米・反基地の特集が頻繁に組まれた。自主刊行移行後、雑誌は思想の科学研究会の機関誌の役割を強めた一面、誌面の具体的な内容は少数の編集者と執筆者によって左右されざるをえず、それに対する不満は会内に蓄積されていった。大学紛争で構内に機動隊が導入された局面において、会の目的である多元主義に反しているという理由で特集が編まれた際には、会内から疑義の声が出た。この時期鶴見は、会の新たな目標として「日常性の重視」と「相互主観性」を唱えたが、会員には大学や高校の教員が多いとはいえ、当事者としての関与と、全学連への共感には温度差があった。

研究会は、地方の読書会も含め研究グループの連合としての性格を持っていた。他方、雑誌『思想の科学』は社会的な「公器」としての存在であり、刊行を続けるには利潤も生まなければならないため、まとまった研究成果を載せることは難しい。雑誌にもっと研究会の要素を反映させようとさまざまな試みがおこなわれたが、結局、発表の場として「別冊」がつくられ、研究会から編集代表だけを送り企画編集は社が行う「第6次体制」に落ち着いた。

### 運動と「人間」、戦後民主主義と天皇制論の失効

安保条約が改定され岸内閣も退陣すると運動の波も引いていき、行動する市民に仮託した大衆の姿は捉えにくくなっていった。そのような中、従来の組織的な運動の中でそぎ落とされていた「人間性」を運動に反映しようと、「声なき声の会」の運営に持続的に関わった高島通敏は、運動への参加を「お百度参り」とするような「日本的」な信仰を見直していく。のちに高島は、日本の近代が達成した教育の普及や平等化、私的な銃火器の放逐や国内紛争の平和的解決の程度、さらには広島・長崎の体験と非武装憲法の理念といった戦



争体験に基づいた戦後の平和理念も繰りこんで、戦後民主主義の「伝統」を民族的なアイデンティティとして再構築しようとする。

鶴見の自然権的な抵抗権の主張に、「日本」の信仰や体験の特殊性に依拠する高島の主張は、簡単には接続され得ない。より親近性をもったのは、小田実の「人間」の原理であった。小田にとって「日本の民衆」とは、公状況と私状況、思想と実生活の間を媒介する「日常性」の技術を持つものであった。小田は、自分もそうであるものとしてそのような民衆の態様を承認しつつ、焼跡で得た「難死の思想」を経由して、「古今東西、人間万事平等、チョボチョボ」といような平等の哲学、そして「なるだけ長生きして、なんとか安楽に生きていたい」という「生きる思想」「生きている思想」に接続していく。そこでは日本の特殊性が主として西洋由来の普遍性と対向するのではなく、日本の特殊性の根拠ともなるべき普遍性が、主としてアジアの人々との共通の地平において措定されている。小田は「思想の科学」主宰のシンポジウムにパネラーとして参加したり、まとまった連載を持つなど「思想の科学」の近くで活動したが、入会することはなかった。その一因として、高島の主張に見られるナショナリズムへの志向と、小田のインターナショナリズムとのベクトルの相違が挙げられるだろう。

また、戦後の社会運動の挫折の経験からくるマルクス主義の理論へのコンプレックスも、小田にはなかった。小田は、開高健、真継伸彦、高橋和巳らと発行した同人雑誌『人間として』で大野らと意見を交換した際、職業意識と生きがいを直結させる「人間らしさ」の主張に対し、「会社コンミュニオン」への献身に終始する危険性と、そのような献身において、従来の革新運動に批判的でありながら同様の問題を孕んでいることを指摘した。

もっとも大野も、1980年代になると、自分の状況主義は、戦中から戦後にかけての混乱期の共有体験に基づく戦後民主主義への意志の共有という前提があつてこそ出来ていたと述べ、自らの立場の拠って立つ基盤が状況の変化とともに掘り崩されているとの認識をみせるようになる。

高島のナショナリズムの再構築への志向にしても、体制側によって創出される疑似的な価値に、大勢、主として経済的なその持続を願う「中間層化した労働大衆」が同調することへの危機感に裏打ちされていたが、戦争体験に基づく戦後民主主義の「伝統」の存在を主張しなければならない程に、それが風化していたことの証左でもあった。

第7次の出発にあたり、第6次体制を解消し、雑誌と思想の科学研究会とのつながりを回復して「反ファシズム」を掲げたのは、彼らが戦後民主主義の失効を実感しつつあった

## 終章

ことの表れであった。

かつて「日本ファシズム」と同じ意味で、あるいはともに使われていたところの「天皇制」への批判は、もはやここには見られない。『思想の科学』では、60年代、70年代に2回の「天皇制」特集を組んだ。前者での天皇制は、大衆社会に順応しつつある変化が指摘されてはいた。だが、戦争体験、敗戦体験の記憶がまだ濃厚であって、状況と一体になってしまうような、非論理的、非客観的、非科学的な「日本人」の心性としての「実感」と相即して語られ、克服すべきものとして否定的に捉えられていた。後者においては、70年安保と高度成長を経た後の社会における、むき出しの暴力ではない穏便な抑圧が「天皇制的」社会構造と呼ばれ、これにどう抗するかが実践的課題であるとされた。しかし、その時点でもすでに、元・皇国少年により、天皇制の呪縛からの解放が、戸惑いを交えて述べられていた。以降、天皇制が特集として取り上げられることはなかった。

### 知識人の再生産と、その相対化

以上のように、「思想の科学」は大衆の思想の可能性を注視し、発話を促し、研究サークルや雑誌の読者から編集、書き手へと循環させて、知識人の講じる外来の「思想」と「理論」とは異なる感覚と認識をことばに紡ごうとし、進歩史観の「科学」に縛られない、自前の運動を実践していった。しかし、佐藤忠男が赤裸々に語っていたように、「思想の科学」に投稿を通じて登場した「大衆」は、「知識人」への上昇志向を内在させていた。先述の「溝」も、そのような志向が前提にあるとき、より鋭く意識化される。50年代から60年安保までの「思想の科学」は、「労働階級」の出身であることや「戦後派」を掲げる者たちを媒介に大衆性を獲得しようとするが、その戦略は知識人の輪郭を曖昧にする。つまり、たしかにそれは知識人と大衆の間にある層を取り込んで高踏的な知識人集団とは違うものに「思想の科学」を変えていったが、実はあらたな「知識人」とヒエラルキーを再生産し続けたともいえる。

ヒエラルキーは、雑誌の内容にも反映していた。60年代後半、丸山真男は「思想の科学」が型・形式を欠いた「内容主義」に堕していると批判する。それに対して鶴見は、型の重視は「妙な形式主義」へと傾く危険があると答え、思想を「日常生活」の側から捉えて記録し、積み上げて、体系性を作り出すとして、日常性と相互主観性を重視した。そして、「表通りで店舗をはれないような」「裏通りの文化」を中心に据えるべきだと主張する。

アカデミズム、ジャーナリズムにおけるマルクス主義の影響力が薄れてくると、『思想の科学』は、それまでの主体とは異なる日常生活と創造性を有する新しい主体として、女性の書き手を呼び込む。そこにも、目覚めたものから目覚めていない者への呼びかけの形態をとる啓発型の文章と、感覚に密着して身近から概念の意味を捉え直す文章が混在していたが、「裏通りの文化」に甘んじてきた不公正を告発する女性たちにとって、『思想の科学』の想定する読者は多様に過ぎ、前者のタイプは書き進めるうちに自身の主張と呼びかけの対象が明確になると、他の団体や媒体に活動の場を求め、「思想の科学」から離れていった。

しかしながらそのようなヒエラルキーを揺るがす存在もあった。本論文中では、石井紀子、しまね・きよし、佃実夫ら「実務家」の働きにそれを見ることができる。石井らは、社会改良の意志において「実務の中の思想」の会と共有する部分を持ちながら、現経済体制の肯定を強調することはなかった。石井・佃の場合、図書館の司書業務、そして書誌データベースの構築といった職業を通し、またその職能を共同研究を形にすることに活かすことによって、しまねの場合は、自主刊行移行後の編集長として書誌に優れた特集号を送り出し、後年は社会主義に関連した人物を網羅する人名事典の書誌作成に没頭することで、思索の前提となる知の普及における「実務」の重要性を主張し、かつその有効性を示した。もっとも石井らの「実務家」の主張は、思索、思想する者である知識人への上昇志向や対抗心に支えられていたわけではなく、研究者と実務家の両輪が、研究会の組織としての運営と、思想団体としての知の発信に必須であることを、機をとらえて発言してきたに過ぎない。このような「実務家」の存在が、ヒエラルキーを抱え込む「思想の科学」の分解を抑止する一端を担ったと言えるだろう。

自由にものを考えて言うことを阻むものに抵抗する「反ファシズム」の旗印は、言論の自由への圧力が見えにくくなった現在においては、画餅にもなりかねない。そしてこのような時こそ、高島が危惧したように上からのナショナリズムが駆動し浸透する余地が生れてくる。戦後民主主義から学ぶということは、まさに鶴見がインタビューで歴史家の条件について述べたように、まずは当時の状況に自己を投入し、想像力を駆使して、彼らが受けた強制力、圧力、そこから逃れ出ようとした希求の強度を実感することが求められているのかもしれない。本論文は、この試みの端緒についたばかりである。

本論文で「思想の科学」の全論点をカバーしきれたわけではなく、もとより全貌を捉えるには戦後の論壇と社会の変容の横断的かつ通時的な把握が必要であるが、それは今後の

## 終章

研究に委ねることとする。ただ本論文により、鶴見をはじめとする知識人の集まりとしての「思想の科学」というイメージよりは、多様な主体の関与と活動の様相が提示できたと思う。今後はここで捉えきれなかった新たな主体と論点の再発見、その背景の解明を通し、戦後思想の複眼的な理解を進めることとする。

## 主要文献：

- 井口一郎編 1946-1948.『思想の科学』先駆社  
 天野幸男編 1948-1951.『思想の科学』先駆社  
 思想の科学研究会編 1953-1954.『芽』建民社 } = 『思想の科学・芽, 復刻版, 1-4』久山社
- 思想の科学研究会編 1954-1955.『思想の科学』大日本雄弁会講談社  
 「思想の科学」編集委員会編 1959-1961.『思想の科学』中央公論社  
 『思想の科学』編集委員会編 1962-1996.『思想の科学』思想の科学社  
 思想の科学研究会 1982-1985.『思想の科学会報, 復刻版, 1-4』柏書房  
 思想の科学研究会索引の会 1999.『思想の科学総索引 1946-1996』思想の科学社

## 参考文献：

(本文中で出典が明らかな場合は省いたものもある。)

- 青野季吉 1926.「中間階級論」大宅壮一編.『社会問題講座, 7』新潮社  
 葦津珍彦 1962.「国民統合の象徴」『思想の科学』5(1), (81), p.50-59  
 葦津珍彦 1963.「続・国民統合の象徴」『思想の科学』5(10), (90), p.63-73  
 天野正子 2005.『「つきあい」の戦後史』吉川弘文館, 286,6p.  
 網野善彦 2002.「社会・国家・王権」『岩波講座天皇と王権を考える, 1: 人類社会の中の天皇と王権』網野善彦ほか編. 岩波書店  
 荒正人ほか 1962.「共同討議, 現代世界と転向」『共同研究: 転向, 下』思想の科学研究会編. 平凡社  
 いいだもも 1997.「自画自賛, 近代日本を創り出し・近代日本を超え出ようとした1万5千人を記憶する全5巻の紙碑: 序にかえて」『近代日本社会運動史人物大事典, 1』近代日本社会運動史人物大事典編集委員会編. 日外アソシエーツ  
 飯塚浩二, 丸山真男, 豊崎昌二 1949.「日本思想における軍隊の役割」『思想の科学』1(21), (21), p.71-82  
 石井絵梨 1987.「夢も果さず逝ってしまったじゃないの、極楽とんぼ」『思想の科学』7(94), (431), p.102-103  
 石井紀子 1963a.「『思想の科学』と私」『思想の科学会報』(39), p.4-5  
 石井紀子 1963b.「趣意書 B 案」『思想の科学会報』(39), p.11  
 石井紀子 1975.「おねがい」『思想の科学会報』(78), p.1-2  
 石井紀子 1976.「特集, 辞典の歴史と思想: サブカルチャーの辞典」『思想の科学』6(63), (21), p.172-200  
 石井紀子 1979.「文献探索学の師: 佃さんへ」『思想の科学会報』(94), p.16-19  
 石井紀子 1980.「単行本の出版について報告とお願い」『思想の科学会報』(100), p.7-9  
 石井紀子 1986.「はじめに『職場』ありき、終りに『仕事』ありき！」『わたし、女性管理

## 参考文献

職です。』学陽書房

石井紀子 1997. 「“転向研”に始まり、“人物大事典”に終わるか」『思想の科学会報』(142), p.2-3

石井紀子 2000. 「女性会長第一号」『思想の科学会報』(148), p.14-20

石井紀子 2003. 「私の生き方に影響を与えたあの時代」『卒業 60 周年・記念文集』東京都西田国民学校第 1 期生・同期会編, 発行

石井紀子 2009a. 「転向研究会について: 第 1 回」(横尾夏織によるインタビュー), IC レコーダー120 分, A4, 27p.

石井紀子 2009b. 「転向研究会について: 第 2 回」(同上), IC レコーダー170 分, A4, 34p.

石井紀子 2010. 「転向研究会について: 第 3 回」(同上), IC レコーダー180 分, A4, 35p.

石井紀子 2011. 「『思想の科学』とのつき合い年表」2010-6-27, 思想の科学サークル戦後史研究会. A4, 2p.

石井紀子ほか 1976. 「座談会, 辞書を考える」『思想の科学』6(63), (271), p.157-171

石川弘明 1962. 「中学生はどうみるか」『思想の科学』5(1), (81), p.43-47

市井三郎 1962a. 「経過報告」『思想の科学会報』(32), p.2-5

市井三郎 1962b. 「いわゆる『公安調査庁事件』についての報告: 抗議の経過について」『思想の科学会報』(32, 追加), p.35

稲葉三千男 1962. 「訣別の銃撃戦へ」『週刊読書人』(437), p.1-2

井上澄夫 1977. 「タイの庶民の王室観」『思想の科学』6(74), (282), p.143-150

上田耕一郎 1962. 「プラグマティズム変質の限界, 中: 『思想の科学』の示すもの」『文科評論』(8), p.55-62

上野千鶴子 1984. 「家族の中の企業社会」『思想の科学』7(42), (379), p.40-48

上野千鶴子 1986. 「マルクス主義フェミニズム, 1」『思想の科学』7(73), (410), p.78-87

上野博正 1976. 「報告, 今年の総会から」『思想の科学会報』(82), p.1-2

上野博正 1996. 「創刊 50 周年記念号／第八次終刊号編集後記」『思想の科学』8(39), (536), p.334

上野博正, 日下部文夫, 南博, 高島通敏 1976. 「討論, 思想の科学と戦後の三十年」『思想の科学』6(61), (269), p.172-187

上原専祿, 国分一太郎, 石母田正, 武田清子, 日高六郎, 三浦つとむ, 無着成恭, 武谷三男, 高橋甫, 関根弘, 駒尺きみ, 乾孝, 磯野誠一, 幼方直吉, 鶴見和子, 鶴見俊輔 1954. 「生活綴方運動の問題点」『思想の科学』3(4), (36), p.26-39

魚津郁夫 1957. 「自伝: 転向」『思想の科学会報』(18), p.7-27

梅森直之 2005. 「平民社『非戦論』のゆくえ」『帝国を撃て: 平民社 100 年国際シンポジウム』論創社

江藤淳 1958. 「実感主義は人間的か」『中央公論』73(3), p.278-287

大串潤児 2008. 「戦後日本における『世代』論の問題領域」『歴史評論』(698), p.44-57

大熊信行 1959. 「転向について」『図書新聞』(486), p.2



- 大河内一男 1960. 『日本の中産階級』 文藝春秋新社, 252p.
- 大杉栄 1913a. 「征服の事実」『近代思想』 1(9)
- 大杉栄 1913b. 「生の拡充」『近代思想』 1(10)
- 大杉栄 1914. 「籐椅子の上にて」『生活と芸術』 1914-5
- 大野力 1959. 「月例研究会における現段階での『中間文化論』論議について」『思想の科学会報』 (24), p.1-6
- 大野力 1962a. 「学生運動の推進者」『共同研究: 転向, 下』 平凡社
- 大野力 1962b. 「これからの『思想の科学』」『思想の科学』 5(2), (82), p.10-15
- 大野力 1973. 「管理と運動に問う」『思想の科学』 6(17), (225), p.2-14
- 大野力 1977. 「天皇の“えらさゝと企業社会」『思想の科学』 6(74), (282), p.56-65
- 大野力 1985. 「ビジネスと“人間らしさ”」『思想の科学』 7(67), (404), p.25-30
- 大野力, 中岡哲郎, 同人 (小田実, 真継信彦) 1972. 「管理社会における労働」『人間として』 (10), p.56-77
- 大橋健二 2009. 『「格差」の戦後史』 河出書房新社, 229p.
- 小熊英二 2002. 『〈民主〉と〈愛国〉: 戦後日本のナショナリズムと公共性』 新曜社, 966p.
- 小田実 1967a. 「見えない人間: 私と天皇, 1」『思想の科学』 5(58), (138), p.102-109
- 小田実 1967b. 「見えない人間: 私と天皇, 2」『思想の科学』 5(59), (139), p.104-111
- 小田実 1967c. 「見えない人間: 私と天皇, 3」『思想の科学』 5(60), (140), p.101-109
- 小田実 1967d. 「見えない人間: 私と天皇, 4」『思想の科学』 5(61), (141), p.103-110
- 小田実 1967e. 「見えない人間: 私と天皇, 5」『思想の科学』 5(62), (142), p.97-104
- 小田実 1967f. 「見えない人間: 私と天皇, 6」『思想の科学』 5(63), (143), p.102-109
- 小田実 1969a. 「見えない人間: 私と天皇, 再開にあたって」『思想の科学』 5(88), (168), p.85-88
- 小田実 1969b. 「見えない人間: 私と天皇, 7」『思想の科学』 5(90), (170), p.97-102
- 小田実 1972a. 『世直しの倫理と論理, 上』 岩波書店, 224p.
- 小田実 1972b. 「くらしとしてのファシズム, 1」『思想の科学』 5(127), (207), p.2-11
- 小田実 1972c. 「くらしとしてのファシズム, 2」『思想の科学』 6(3), (211), p.97-105
- 尾高邦雄 1958. 「日本社会の階層的構造」 日本社会学会調査委員会編. 『日本社会の階層的構造』 有斐閣
- 折原脩三 1977. 「『天皇という観念』の横すべり」『思想の科学』 6(74), (282), p.129-142
- 片桐ユズル, 乙骨淑子, 松尾紀子, 永井道雄 1963. 「女の状況」『思想の科学』 5(11), (91), p.16-23
- 加太こうじ 1981. 「第七次『思想の科学』創刊にあたって」『思想の科学』 7(1), (338), p.1-2
- 加藤典洋 1996. 「創刊 50 周年記念号／第八次終刊号編集後記」『思想の科学』 8(39), (536), p.334-335
- 加藤典洋 2013. 『ふたつの講演: 戦後思想の射程について』 岩波書店
- 加藤典洋, 黒川創 1989. 「昭和天皇の言語」『思想の科学』 7(119), (456), p.4-21

## 参考文献

- 加藤秀俊 1953. 「集団のかげの転向」『芽』1(6・7), p.22-23
- 加藤秀俊 1957. 『中間文化』平凡社, 208p.
- 加藤秀俊 1960. 「日常生活と国民運動」『思想の科学』4(19), (63), p.28-35
- 加藤秀俊, しまね・きよし, 市井三郎, 高橋甫, 多田道太郎, 山田宗睦, 後藤宏行, 後藤文利, 鈴木正, 大野力, 鶴見俊輔, 森秀人, 北沢恒彦, 加太こうじ, 見田宗介, 安田武, 渡辺一衛, 伊藤益臣, 判沢弘 1966. 「雑誌活動の履歴と今後, 思想の科学の二十年」『思想の科学』5(50), (130), p.121-151
- 加納実紀代 1974. 「子持ちパートの自立論」『思想の科学』6(29), (237), p.68-75
- 加納実紀代 1977. 「女性と天皇制, 9: “大御心”と“母心”」『思想の科学』6(80), (288), p.100-109
- 加納実紀代 1979. 「生命のみえる世界をとりもどすために＝主婦の自立」『思想の科学』6(110), (318), p.2-13
- 加納実紀代, 河野信子 1979. 「〈出口〉をどこに求めるか: 極致の労働現場から」『思想の科学』6(107), (315), p.10-29
- 亀井勝一郎, 埴谷雄高, 本多秋五 1959. 「権力 転向 人間: 思想の科学研究会の共同研究にふれて」『週刊読書人』(259), p.1-2
- 茅辺かのう 1977. 「『天皇』に対置しうるもの」『思想の科学』6(81), (289), p.111-119
- 川島武宜 1950. 「社団法人思想の科学研究会創立に際して」『思想の科学』1(22), (22), p.3-4
- 記念シンポジウムを記録する会 2010. 『読む人・書く人・編集する人: 『思想の科学』50年と、それから』思想の科学社, 254p.
- 久野収 1960. 「市民主義の成立」『思想の科学』4(19), (63), p.9-16
- 久野収, 高島通敏 1977. 「対談, 天皇制と言論の自由」『思想の科学』6(74), (282), p.7-18
- 久野収, 鶴見俊輔 1956. 『現代日本の思想』岩波書店, 229p.
- 久野収, 鶴見俊輔, 藤田省三 1958. 「大衆の思想」『中央公論』73(7), p.166-190
- 久野収, 畑中幸子, 後藤宏行 1955. 「思想講座 4 観念論」『思想の科学』3(12), (44), p.40-51
- 栗原彬 1977. 「再分配の幻想」『思想の科学』6(74), (282), p.19-24
- 黒川俊雄 1957. 「新中間層の諸問題」『思想』(398), p.31-51
- K・S1959. 「転向論の前史を超えて」『日本読書新聞』(986), p.1
- 研究部 1948. 「ひとびとの哲学についての中間報告, 1-2」『思想の科学』1(8), (8), p.57-67; 1(9), (9), p.43-53
- 高史明 1977. 「天皇制の呪縛を超えて」『思想の科学』6(74), (282), p.32-40
- コシュマン, J. ヴィクター 2011. 『戦後日本の民主主義革命と主体性』葛西弘隆訳, 平凡社, 402p.
- 後藤宏行 1957. 『陥没の世代: 戦後派の自己主張』中央公論社, 248p.
- 後藤宏行 1958. 「月例研究会レポート」 「中間文化論における個人像について」『思想の科学会報』(23), p.12-20
- 後藤宏行 1977. 『転向と伝統思想: 昭和史の中の親鸞と西鶴』思想の科学社, 341p.
- 駒尺喜美 1977. 「女にとっての天皇・家父長の姿」『思想の科学』6(72), (280), p.100-109
- 駒尺喜美 1980. 「神島二郎氏『家族論』への疑問」『思想の科学』6(121), (329), p.33-40

- 駒尺喜美 1981. 「なぜ女性学か」『思想の科学』7(5), (342), p.2-8
- 小松茂夫 1962. 「驚くべき資料の蒐集」『週刊読書人』(423), p.4
- 佐方郁子 1977. 「大きな悪としての『国家』」『思想の科学』6(84), (292), p.100-108
- 坂本多加雄 1996. 『20世紀の日本 11, 知識人: 大正・昭和精神史断章』読売新聞社, 380p.
- 佐藤忠男 1955. 「大衆としての自覚から」『思想の科学』3(12), (44), p.75-79
- 佐藤忠男 1962a. 「もう一つの編集後記」『思想の科学』5(1), (81), p.144
- 佐藤忠男 1962b. 「雑誌のこと」『思想の科学会報』(37), p.27-28
- 佐貫惣悦 1956. 「転向研究: 新人会について」『思想の科学会報』(14), p.7-8
- 佐貫惣悦 1983. 「(3)佐貫惣悦」『転向研究通信』(1), p.7-10
- 佐貫惣悦, 松尾紀子 1955. 「転向研究会東京グループ報告」『思想の科学会報』(12), p.4-8
- 思想の科学研究会 1955a. 『思想の科学会報』(8), 8p.
- 思想の科学研究会 1955b. 『思想の科学会報』(11), 8p.
- 思想の科学研究会 1955c. 『思想の科学会報』(12), 8p.
- 思想の科学研究会 1957. 「1956年度総会における討論, 戦争責任について」『思想の科学会報』(17), p.1-46
- 思想の科学研究会 1958a. 「サークル雑誌評, 日本の地下水」『中央公論』73(2), (736), p.256-261
- 思想の科学研究会 1958b. 「サークル雑誌評, 日本の地下水」『中央公論』73(10), (744), p.296-301
- 思想の科学研究会 1958c. 「1958年度総会における討論, 思想の科学研究会の性格と方向について」『思想の科学会報』(22), p.1-52
- 思想の科学研究会 1960a. 「声明」「声明理由」『思想の科学』4(19), (63), p.2-3
- 思想の科学研究会 1960b. 「事務局日誌抄」『思想の科学会報』(27), p.10-14
- 思想の科学研究会 1961. 「第四次『思想の科学』廃刊にあたり両者間の確認事項」『思想の科学会報』(32), p.1
- 思想の科学研究会 1962a. 「声明」『思想の科学会報』(33), p.1
- 思想の科学研究会 1962b. 「臨時集会議事録: 天皇制特集号廃棄について」(33), p.2-17
- 思想の科学研究会 1976a. 『思想の科学会報』(80)
- 思想の科学研究会 1976b. 「報告三つ」「評議員会日誌」『思想の科学会報』(81), p.22; 32
- 思想の科学研究会編 1959. 『共同研究: 転向, 上』平凡社, 382p.
- 思想の科学研究会編 1960. 『共同研究: 転向, 中』平凡社, 492p.
- 思想の科学研究会編 1962. 『共同研究: 転向, 下』平凡社, 530, 24p.
- 思想の科学研究会編 1972. 『共同研究: 占領』徳間書店, 599, 9p.
- 思想の科学研究会編 1978. 『共同研究: 転向, 下, 増補改訂』平凡社, 591, 26p.
- 思想の科学研究会索引の会 1999. 『思想の科学総索引 1946-1996』思想の科学社
- 思想の科学研究会, 思想の科学社 1981. 「第六次『思想の科学』終刊のことば」『思想の科学』6(129), (337), p.112

## 参考文献

- 思想の科学研究会評議員会 1969. 「よびかけ」『思想の科学会報』(62), p.1-2
- 思想の科学五十年史の会 2009. 『「思想の科学」ダイジェスト 1946～1996』思想の科学社
- 「思想の科学」編集委員会 1959. 「創刊のことば」『思想の科学』4(1), (45)
- 『思想の科学』編集委員会 1996. 「創刊 50 周年記念号／第八次終刊号編集後記」8(39), (536), p.334-335
- 「実務の中の思想」の会 1960. 「ビルの内側から」『思想の科学』4(19), (63), p.65-74
- しまね・きよし 1966. 「組織と思想の問題」『思想の科学会報』(49), p.1-3
- しまね・きよし 1969. 「共産党のなかで」『思想の科学』5(88), (168), p.68-69
- しまね・きよし 1976. 「特集, 辞典の歴史と思想: 私のつくりたい事典, 日本社会主義人名事典」『思想の科学』6(63), (271), 85-90
- しまね・きよし 1980. 『「思想の科学研究会」年表, 2』『思想の科学』6(118), (326), 101-111
- しまね・きよし 1986. 「戦前社会主義人物事典編纂について」『転向研究通信』(1), p.20-23
- 清水幾太郎 1950. 「機械時代」『思想』(314), p.1-12
- 女性の現在を問う会 1977-1985. 『銃後史ノート, 1-10』女性の現在を問う会
- 女性の現在を問う会 1986-1996. 『銃後史ノート戦後篇, 1-8』インパクト出版会
- 関根弘 1962. 「インテリスターダラ節を排す」『日本読書新聞』(1145), p.5
- 高倉テル 1946. 「天皇制ならびに皇室の問題」『中央公論』61(8), (690), p.7-28
- 高田佳利 1961a. 「組織の中の知性」『思想の科学』4(25), (69), p.35-41
- 高田佳利 1961b. 「下からのクニづくり」『思想の科学』4(28), (72), p.15-20
- 高田佳利, 石井紀子 1976. 「高田佳利さんと語る」『思想の科学会報』(79), p.1-29
- 高橋幸子 1978. 「『私』をつき動かすもの」『思想の科学』6(89), (297), p.20-21
- 高橋幸子 1982. 「みみずの学校」『思想の科学』7(13), (350), p.6-12
- 高島通敏 1956. 「『転向論』について」『思想の科学会報』(15), p.5-8
- 高島通敏 1959. 「一国社会主義者」『共同研究: 転向, 上』平凡社
- 高島通敏 1960a. 「生産力理論」『共同研究: 転向, 中』平凡社
- 高島通敏 1960b. 「声なき声の会の政治体験」『図書新聞』(562), p.2
- 高島通敏 1962a. 「私の評議員会日記」『思想の科学会報』(34), p.13-16
- 高島通敏 1962b. 「声なき声の二年間: あとがきにかえて」『またデモで会おう』東京書店
- 高島通敏 1968. 「70 年安保に立ち向かう思想: 60 年闘争の思想的決算」『思想の科学会報』(60), p.3-10
- 高島通敏 1970. 「職業としての政治学者」『思想の科学』5(101), (181), p.56-64
- 高島通敏 1972=2009. 「主体的市民のための学問」『第三文明』1972-10
- 高島通敏 1978. 「管理民主主義の政治構造」『思想の科学』6(97), (305), p.2-11
- 高島通敏 1979. 「政党の衰退と日本の保守化」『思想の科学』6(104), (312), p.2-11
- 高島通敏 2000=2009. 「四十周年を迎えた国民文化会議」『国民文化』(472)
- 高島通敏 2003=2009. 「巻頭言」『それぞれの高島政治学』
- 高島通敏 2009. 『高島通敏集, 5』岩波書店

- 高見順 1958. 「社会科学者への提言」『中央公論』73(5), p.32-41
- 武井昭夫 1962. 「特集, 現代知識人の行動と責任: 市民民主主義の解体: 安保闘争後の市民派知識人の動向と批判」『現代の眼』3(7), p.34-40
- 竹内好 1962. 「思想団体の原理と責任」『週刊読書人』(415), p.1
- 田沼肇 1957. 「日本における『中間層』問題」『中央公論』72(14), p.195-207
- 田沼肇 1958. 「『中間階級論』の展開」『現代の中間階級』大月書店
- 辻信一 1989. 「遅れてきた天皇」『思想の科学』7(119), (456), p.29-39
- 佃実夫 1969. 『文献探索学入門』思想の科学社, 161,137p.
- 津田左右吉 1946. 「建国の思想と万世一系の思想」『世界』(4), p.29-54
- 都留重人 1962a. 「論壇時評」『朝日新聞』1962-6-22
- 都留重人 1962b. 「論壇時評」『朝日新聞』1962-4-24,
- 都留重人 1983. 「『思想の科学』に寄せた期待」思想の科学研究会編. 『思想の科学会報, 2』柏書房
- 鶴見和子 1952=1998. 「生活綴方教育に学ぶ」『図書』1952-10
- 鶴見和子 1953. 「日本人の文学意識, IV: 婦人」『岩波講座文学, 2』岩波書店
- 鶴見和子 1954=1998. 「話しあい書きあう仲間」『エンピツをにぎる主婦』毎日新聞社
- 鶴見和子 1959a. 「『エンピツをにぎる主婦』とその後」『現代教養全集, 月報 6』筑摩書房
- 鶴見和子 1959b. 「寝ていて考える」『新日本文学』14(3), p.145-147
- 鶴見和子 1961=1998. 「生活記録運動のこれまでとこれから」『日本の記録』(1)
- 鶴見和子 1962=1998. 「新しい地点からもう一度」『月刊社会党』(55)
- 鶴見和子 1982. 「『戦後』の中の『思想の科学』」思想の科学研究会編. 『思想の科学会報, 1』柏書房
- 鶴見和子 1985. 「生活記録運動の意味」『新日本文学』40(10), p.20-29
- 鶴見和子 1986=1998. 「生活記録運動の戦後と現在」『国民文化』1986-1
- 鶴見和子 1998. 『鶴見和子曼荼羅, 2』藤原書店, 664p.
- 鶴見俊輔 1946. 「言葉のお守りの使用法について」『思想の科学』1(1), (1), p.15-25
- 鶴見俊輔 1952. 「日本思想の特色と天皇制」『思想』(336), p.44-53
- 鶴見俊輔 1954. 「転向研究のプラン」『思想の科学会報』(7), p.10
- 鶴見俊輔 1955. 「事務局から」『思想の科学会報』(8), p.1-2
- 鶴見俊輔 1956a. 「転向研究グループ」『思想の科学会報』(13), p.10
- 鶴見俊輔 1956b. 「戦争のくれた字引き」『文藝』13(12), p.13-28
- 鶴見俊輔 1957. 「戦後日本の思想状況」『現代日本の思想』岩波書店
- 鶴見俊輔 1959a. 「序言, 転向の共同研究について」『共同研究: 転向, 上』思想の科学研究会編. 平凡社
- 鶴見俊輔 1959b. 「戦争責任の問題」『思想の科学』4(1), (45), p.79-87
- 鶴見俊輔 1959c. 「『思想の科学』一九五九年: 投稿を中心として」『思想の科学』4(12), (56), p.74-79



## 参考文献

- 鶴見俊輔 1960. 「根もとからの民主主義」『思想の科学』4(19), (63), p.20-27
- 鶴見俊輔 1963. 「サークルと学問」『思想』(463), p.48-56
- 鶴見俊輔 1967. 「編集後記」『思想の科学』5(68), (148), p.120
- 鶴見俊輔 1968a. 「目標についての提案」思想の科学研究会『思想の科学・趣旨と活動』
- 鶴見俊輔 1968b. 「編集後記」『思想の科学』5(74), (154), p.120
- 鶴見俊輔 1969. 「編集後記」『思想の科学』5(87), (167), p.120
- 鶴見俊輔 1976a. 「なぜサークルを研究するか」『共同研究: 集団』思想の科学研究会編. 平凡社
- 鶴見俊輔 1976b. 「思想の科学と新しい哲学の方向」『思想の科学』6(61), (269), p.188-193
- 鶴見俊輔 1985. 「意図を超える結果」思想の科学研究会編. 『思想の科学会報, 3』柏書房
- 鶴見俊輔 1977. 「『風流無譚事件以後』を読んで」6(74), (282), p.41-45
- 鶴見俊輔 2005. 「投稿をとおしてみる『思想の科学』」鶴見俊輔編, 『思想の科学』五十年史の会『「思想の科学」五十年: 源流から未来へ』思想の科学社
- 鶴見俊輔編, 『思想の科学』五十年史の会 2005. 『「思想の科学」五十年: 源流から未来へ』思想の科学社
- 鶴見俊輔 2006. 「記念講演, 若き哲学者の占領期雑誌ジャーナリズム活動」『Intelligence』(7), p.4-19
- 鶴見俊輔 2009. 「態度と知識: 『思想の科学』小史」「『思想の科学』の原点をめぐって」『思想』(1021), p.2-41
- 鶴見俊輔 2010. 「転向研究会について」(横尾夏織によるインタビュー), IC レコーダー140分, A4, 28p.
- 鶴見俊輔ほか 1954. 「討論, 伝記の方法」『思想の科学会報』(2), p.2-5
- 鶴見俊輔, 小田実 2004. 『手放せない記憶: 私が考える場所』編集グループ SURE
- 鶴見俊輔, 吉本隆明 1967. 「どこに思想の根拠をおくか」『展望』(100), p.96-111
- 鶴見良行 1962. 「戦後天皇制の存在と意味」『思想の科学』5(1), p.16-23
- 鶴見良行 1964. 「思想の科学社営業からお願いと報告」『思想の科学会報』(42), p.7
- 転向研究グループ 1954. 「転向研究のプラン」『思想の科学会報』(7), p.10
- 東京都西田国民学校第1期生・同期会編, 発行 2003. 『卒業60周年・記念文集』
- 徳島県立文学書道館編, 発行 2010. 『没後30年「知の希求者・佃實夫の仕事」展』
- 戸邊秀明 2006a. 「転向論の戦時と戦後」『岩波講座アジア・太平洋戦争, 3: 動員・抵抗・翼賛』倉橋愛子ほか編. 岩波書店
- 戸邊秀明 2006b. 「思想の科学研究会編『共同研究: 転向』」岩崎稔, 上野千鶴子, 成田龍一編. 『戦後思想の名著50』平凡社
- 中村智子 1976. 『「風流無譚」事件以後: 編集者の自分史』田畑書店
- 成田龍一 2012a. 「解説1, 『共同研究転向』発刊まで: 転向研究の時代」『共同研究転向, 1: 戦前篇, 下』平凡社
- 成田龍一 2012b. 「解説2, 『共同研究転向』の刊行とその影響」『共同研究転向, 2: 戦中篇,



- 下』平凡社
- 成田龍一 2013.「解説 3, 『共同研究転向』の完結とその後の転向論」『共同研究転向, 3: 戦後篇, 下』平凡社
- 西勝 1956.「丹沢行: 転向研究グループの山ある記」『思想の科学会報』(14), p.11-12
- 西勝 1957.「転向研の那須行」『思想の科学会報』(20), p.45-48
- 日本共産党中央委員会 1982.『日本共産党の六十年』日本共産党中央委員会出版局, 737p.
- 根津朝彦 2013.『戦後「中央公論」と「風流無譚」事件: 「論壇」・編集者の思想史』日本経済評論社, 381p.
- 野洲川止 1989.「大喪の礼・ハリガミ考現学」『思想の科学』7(119), (456), p.84-90
- 橋川文三 1958a.「実感の文学を超えて: 現代文学における主体の問題」『文学界』12(6), p.172-185
- 橋川文三 1958b.「実感・抵抗・リアリティ」『新日本文学』13(6), p.132-135
- 橋川文三 1958c.「文学史と思想史」『思想』(409), p.55-65
- 橋川文三 1962.「国体論・二つの前提」『思想の科学』5(5), (85), p.99-109
- 橋川文三, 加藤秀俊, 江藤淳, 田口富久治, 大江健三郎 1958.「『実感』をどう発展させるか」『中央公論』73(7), p.226-237
- 林立男編 1998.「丸山真男と広島: 政治思想史家の原爆体験」広島大学平和科学研究センター, 75p.
- 判沢弘 1954.「『転向』と『群像づくり』研究サークルの報告」『思想の科学会報』(7), p.3-4
- 判沢弘 1955.「列伝(及び群像)づくり研究会報告」『思想の科学会報』(8), p.8
- 判沢弘 1967=1994.『精選復刻, 紀伊國屋新書, 土着の思想』紀伊國屋書店, 222p.
- 日高六郎 1955.「政治的無関心について: とくにインテリの場合」『思想の科学』3(9), (41), p.36-44
- 日高六郎 1962.「嶋中事件一周年に: 『思想の科学』廃棄問題」『日本読書新聞』(1130), p.1
- 日高六郎 1977.「追悼・竹内好さんの思い出」『思想の科学』6(74), (282), p.4-6
- 深見史 1977.「幻のふるさとを拒否する」『思想の科学』6(82), (290), p.103-111
- 福田歆一 1962.「二十世紀における君主制の運命」『思想の科学』5(1), (81), p.34-42
- 福岡良明 2009.『「戦争体験」の戦後史』中央公論新社, 286p.
- 藤田省三 1959a.「昭和八年を中心とする転向の状況」『共同研究: 転向, 上』平凡社
- 藤田省三 1959b.「あるマルクス主義学者: 河上肇」『共同研究: 転向, 上』平凡社
- 藤田省三 1959c=1998.「大衆崇拜主義批判の批判」『民話』1959-2
- 藤田省三 1962.「自由からの逃亡批判」『日本読者新聞』(1143), p.1
- 藤田省三 1966.『天皇制国家の支配原理』未来社, 196p.
- 藤田省三 1998.『戦後精神の経験, 1』みすず書房, 462p.
- 藤田省三, 岡本厚 1998a.「連載戦後精神史序説, 1」『世界』(644), p.185-194
- 藤田省三, 岡本厚 1998b.「連載戦後精神史序説, 2」『世界』(645), p.257-266
- 藤田省三, 掛川トミ子 1962.「現段階の天皇制問題」『思想の科学』5(1), (81), p.4-15

## 参考文献

- 藤野寛 2009. 『言葉の力』をめぐる考察: 第二次世界大戦直後の言語表現／言語批判 『思想』(1021), p.42-66
- フッサール, エドムント 1970. 「ヨーロッパの学問の危機と先見的現象学」 『世界の名著, 51』 細谷恒夫訳, 中央公論社
- 別冊思想の科学編集委員会 1975. 「編集委員会からの呼びかけ」 『思想の科学会報』(76), p.62-63
- 編集委員会 1968. 「編集後記」 『歴史学研究』(341), p.95
- 本多秋五 1959=1964. 「共同研究『転向』の書評」 『思想』1959-7
- 本多秋五 1964. 「共同研究『転向』の書評」 『転向文学論, 第2版』 未来社
- まつお・のりこ 1963. 「第二回市民学校について」 『思想の科学会報』(41), p.10-12
- 松尾紀子 1957. 「転向研の『長瀬行』」 『思想の科学会報』(19), p.23-24
- 松尾紀子 195?. 「有馬頼寧」 原稿用紙, 128p.
- 松尾紀子 1959. 「編集後記」 『思想の科学』4(3), (47), p.96
- 松尾紀子, 鶴見俊輔 1962. 「転向研究グループについて」 『共同研究: 転向, 下』 平凡社
- 松下圭一 1957a. 「史的唯物論と大衆社会」 『思想』(395), p.43-63
- 松下圭一 1957b. 「マルクス主義理論の20世紀的転換」 『中央公論』72(3), p.142-157
- 松本三之介 1955a. 「関西グループ報告, 1, 1954年12月20日: 転向研究会」 『思想の科学会報』(8), p.6-8
- 松本三之介 1955b. 「転向研究会: 関西グループ報告, 2」 『思想の科学会報』(10), p.2
- マルクス, カール, エンゲルス, フリードリヒ 1962. 「共産党宣言」 『世界教養全集, 15』 宮川実訳, 平凡社
- 丸山真男 1946. 「超国家主義の論理と心理」 『世界』(5), p.2-15
- 丸山真男 1957. 「日本の思想」 『岩波講座現代思想, 11: 現代日本の思想』 岩波書店
- 丸山真男 1960. 「感想三つ」 『声なき声のたより』(4), p.8-9
- 丸山真男 1961. 『日本の思想』 岩波書店, 192p.
- 丸山真男 1965. 「二十世紀最大のパラドックス」 「八月十五日はまだ終ってはいない: 八・一五記念国民集会の記録」 『世界』(239), p.198-202
- 丸山真男 1967. 「語りつぐ戦後史, 5: 普遍的原理の立場」 『思想の科学』5(62), (142), p.105-119
- 丸山真男 1969=1996. 「24年目に語る被爆体験: 東大教授丸山真男氏(当時一等兵)の思想と行動」 『中国新聞, 夕刊』1969-8-5~6
- 丸山真男 1989. 「昭和天皇をめぐりきれぎれの回想」 『'60』(14)
- 丸山真男 1992. 「同人結成のころのこぼれ話」 安田常雄, 天野正子編. 『「思想の科学」・「芽」別巻, 戦後「啓蒙」思想の遺したもの』 久山社
- 丸山真男 1996. 『丸山真男集, 16』 岩波書店, 412p.
- 丸山陸男 1970. 「雑誌『思想の科学』について」 『思想の科学会報』(65), p.3-7
- ミルズ, チャールズ・ライト 1958. 『パワー・エリート, 上下』 鶴飼信成, 綿貫譲治訳, 東京

大学出版会

村上兵衛 1956.「戦中派はこう考える」『中央公論』71(4), p.20-33

室伏高信 1932.『中間階級の社会学』日本評論社, 306p.

盛山和夫 2008.「中間階級論: 解説」『戦後日本の格差と不平等, 1』日本図書センター

安田武 1960.「創立期の翼賛運動: 有馬頼寧」『共同研究: 転向, 中』思想の科学研究会編. 平凡社

安田武 1965.「実録『転向』研究会, 2: 食欲の巻」『思想の科学会報』(47), p.4-6

安丸良夫 1992.『近代天皇像の形成』岩波書店, 309p.

山領健二 1957.「那須行二日目」『思想の科学会報』(20), p.48-50

山領健二 1962.「ジャーナリストの転向: 室伏高信論」『思想の科学』5(4), (84), p.57-67

山領健二 1978.『転向の時代と知識人』三一書房, 314p.

山領健二, 石井紀子, 後藤宏行, 高島通敏, 安田武 1970.「シンポジウム, 『共同研究転向』その後」『思想の科学』5(106), (186), p.62-79

横山貞子 1954.「若い人たちのための身の上相談」『思想の科学会報』(5), p.7-8

吉武輝子 1978.「弱者を強いられる女たち」『思想の科学』6(86), (294), p.102-111

吉原二郎 1958.「『新中間層』の再検討」『前衛』(137), p.122-128

吉見俊哉 2012.『現代社会学ライブラリー5, アメリカの越え方: 和子・俊輔・良行の抵抗と越境』弘文堂, 187p.

吉本隆明 1962a.「情況への発言: “終焉、以後」『試行』(6), p.2-11

吉本隆明 1962b.「後記」『試行』(6), p.97

吉本隆明 1963=1969.『丸山真男論, 増補改訂版』一橋新聞部

吉本隆明 1969.「丸山真男論」『吉本隆明全著作集, 12』

吉本隆明, 赤坂憲雄 1990.『天皇制の基層』作品社, 244p.

吉本隆明, 武井昭夫 1956.『文学者の戦争責任』淡路書房, 248p.

リースマン, デイヴィット 1964.『孤独な群衆』加藤秀俊訳, みすず書房, 289p.

米谷匡史 2002.「津田左右吉・和辻哲郎の天皇論: 象徴天皇制論」『岩波講座天皇と王権を  
考える, 1: 人類社会の中の天皇と王権』網野善彦ほか編. 岩波書店 289,19p.

歴史科学協議会編 1968.『歴史評論総目録. 創刊号-200号』校倉書房, 139p.

歴史科学協議会 1999.『歴史科学体系 33, 民科歴史部会資料集』校倉書房, 268p.

歴史学研究会委員会 1968.「『明治百年祭』にたいする本会の基本態度」『歴史学研究』(341),  
p.1

## 資料 インタビュー

### 1. 鶴見俊輔氏インタビュー（2010年1月11日）

付・質問用紙

### 2. 石井紀子氏インタビュー

① 第1回（2009年11月20日）

② 第2回（2009年12月16日）（付・追記）

③ 第3回（2010年1月29日）

付・質問用紙

## 鶴見俊輔氏インタビュー

時と場所：2010年1月11日 14:00-16:20、鶴見俊輔邸（京都）

同席者：横山貞子氏、鶴見太郎氏

### \* 本題に入る前に—注意点、質問票への評価

鶴見：〔テープ始〕それをコントロールすることをね、あの一、話し相手がなんとなくそれを怠っちゃうのをこわいと思うんですよ。それで考えたんだけどね、一つは、これ補聴器ですがこれを入れて使います。もう一つはね、それでもあなたの質問から私がずれて話をするっていうね、ずれに対してすぐに言って下さい。つまり、あ、筆談ですね、紙に書いてね。

横尾：はい。

鶴見：それは、自分の話の趣旨から離れてるっていうことを、あなたが私に注意してください。

横尾：はい、分かりました。

鶴見：それですと眼鏡使いますから大丈夫、文字は読めると思います。ただ自分がメモした、自分の文字が読めるかどうかの問題なんですけど。

横尾：(笑)

鶴見太：じゃまず補聴器を。

横山：まずお茶を。熱いうちにどうぞ。

横尾：いただきます。すみません、もう録音を入れさせて頂いてよろしいですか。

横山：それはどうぞ。今日はあいにく私朝入れ歯が壊れましてね、だからあんまりお話しできない。あの、今日は俊輔に集中して。

横尾：はい。

鶴見：この質問票ははっきりした構造を持っていて、とてもいいもんだと思います。

横尾：ありがとうございます。

鶴見：で、私は太郎に太郎は目利きだなんて言ったらね、いや僕は関係ないっていうんですよ、だから(笑)あなたの実力なんだ。

鶴見太：あの一、島先生からの紹介を受けて、あの瀧川政次郎の弟子だった人が社会科学部にいるんですよ。

鶴見：へえー。

鶴見太：法制史の島善高先生。その先生の紹介を受けたと。

鶴見：いや、私はこれ、全体見て構造があると思って感心したんですよ。で自分のメモは書いてあるんですけどね。

鶴見太：ではひとまず順番を追って。

## 資料1：鶴見俊輔氏インタビュー

鶴見：そうですね、これによって考えてます。

横尾：はい。

### \* モチーフの発生と成熟

鶴見：はじめモチーフの発生ですね。これとっても重要なんですね。モチーフなしで歴史が書けると思っている人非常に多いんですよ。加藤周一がアメリカに行ってね、イギリス人の秘書に、イギリスの伝記は非常にいいって言ったんですね。そしたらその答えは歴史そのものがバイオグラフィーだって。それは加藤周一はとても感心してそれ書いていたんだけどね。でバイオグラフィーはモチーフがあってその人物に自分が入らなければいけないでしょ。だから歴史そのものがそういう構造だって言うんだよ。歴史は人間がやったことの記録ですからね、歴史そのものがバイオグラフィーだって。で、これには、この転向研究には明らかにモチーフがあるんです。で私は交換船で帰ってきたんですね。それがアメリカ出発は1942年の6月10日なんです、ニューヨークから出たの。でニューヨークにしばらく留まっていて、日本に着いたのは2ヶ月半かかっているから。アメリカを出るときはちょうど大学の卒業式の日だったんですよ。もちろん私は不在ですよ。だけど都留さんがおなじ船に乗って「大丈夫だよ、君は出てるよ」って。

太郎：あ、卒業の名簿に出てるってことです。

鶴見：都留さんケンブリッジからまっすぐに交換船乗ったから。で都留さんの言葉で私は確認したんです。で2ヶ月半かかっている間にアメリカ出る時はまだ19歳、と、あと15日余してたんです。2ヶ月半かかっている間に満20歳になった。で日本に着いてから私は区役所行ったんですよ、帰って来たこと届けに。そしたら（笑）それは知恵が足りないんだけど東京都最後の徴兵検査に間に合います（笑）徴兵検査行ったんですよ。そうすると本当にもう、片足ないとかいう人だけが丙種なんです。で私は第二乙合格って言われたんだ。これはアメリカを出る時に計算していなかったことなんです。でこれは参ったと思った。私は、日本が負ける時に負ける側にいたいと思って出てきたんですが、負ける群衆の中にいるって考えていたんだけど、兵隊になっているとは思わなかった。で人を殺したくないわけです。でそのうち一つ、当たっているかどうか分からないんだけど海軍に志願しようと思った。それで海軍のドイツ語の軍属、通訳ということで志願した。というのはなぜドイツ語かっていうと、ま私は大学ではドイツ語が外国語科目だったんです。で日本はドイツとね、つながっていたんですよ、3つの方法で。1つは飛行機なんですけど、これ失敗したんです。飛行機落ちたんです。2つ目は封鎖突破船、blockade runner っていうんですけれども、これ第一次世界大戦の時からもかなり活躍したんでドイツの特技なんですよ。でそれは私は使えたんです。つまりジャワへ行くのは封鎖突破船で行ったんだ。でジャワに行くとジャカルタっていう所、バタビヤですね、その頃。潜水艦の根拠地だったの。ドイツから地中海を通ってこう来る、ドイツの潜水艦がバタビヤでいっぺん止まって兵隊は上陸するんですね、バタビヤに。だからそこに使おうという考えが海軍の上の方に



はあって私を採ってくれたんだけど、行ったらね、ジャカルタ在勤、もともとはバタビヤ在勤海軍武官府という所があるんですけども一番上の人は大佐で前田精っていうんです。精は精しいっていう字、米偏です。

横山：ちょっと待ってください。あの、汝の伝記になってしまうんじゃないの。

鶴見：いやそうじゃない。深く関るんだ。そんなに（笑）、そんなに、そんなに脱線していない。でこれが自分の考えで、海軍は大本営発表に困っていたんですよ。嘘の発表するでしょ。それバラバラで現地の軍官はそれやっていると、撃沈したっていうの向うから上がってくる。困ってるんですよ。それで前田精、それが武官府100人ほどの一番上の人ですよ、大佐なんです、最後少将だった。「敵の読む新聞と同じ新聞作ってくれ。」で私の部屋にはほかの人は入れないようにして、よる夜中短波放送聞いてるんです。イギリス、アメリカ、重慶、中国ですね、インド、でそれを聞いてメモをとっておいて次の日、朝、武官府に出勤すると陸軍が捕虜を使ってやった同じような放送の記録がこのぐらいあったのね。けどだからあの一、外国語、殊に英語教育がもう戦争中から劣悪になっているでしょ。こんなにとっても読めないんですよ、陸軍は。あの、大学出いっぱいいるんですがね。で私は前の日に自分の耳で聞いたものを自分でメモとったものをもとに毎日新聞作っていたの。敵が読んだ新聞。それが仕事なんです。で、この仕事に就く前にジャカルタ、今バタビヤですね、

太郎：いやバタビヤが当時でジャカルタが今ですよ。

横尾：そうですね。

鶴見：バタビヤは、はじめバタビヤ海軍武官府だったんだけど途中で名前変えてジャカルタになったの。同じ所です。着いてしばらくしてね、武官府の廊下においてね、官舎ですが、俺はすでに転向してる。それでアメリカで捕まっているんですよ。その時は私は自分はアナキストだから国家の戦争には関与しない、公平に採点してみるとナチスを敵にしているからアメリカの戦争目的の方がナチスと結託している日本の戦争目的より上だ。それで捕まらないですむと私は思ったんですよ。それはアメリカの学校行っているからそう思ったの。それが浅いんです。それで捕まって牢屋入れられちゃったんだ。さてそこで、交換船乗って帰ってきて、で軍属なったでしょ。すでに自分の身分としては転向している。いかなる意味でも戦争に関与しない、という立場から離れている。もう一つは私の家族ですが、親父が大政翼賛会入っている。家族的なもんですね。だから自分がもう、行動の形態としての転向、入っている。でその時思いついたんだけど私は小学校しか日本にいないんですよ。だから大学で受けたのは基本的に世界史ですね。でぱっと思いついたのがローマなんです。ローマのルシアンてのがいるでしょ、ルキアノス。そのへんが記録としてあって、そこから国家ってのができてからいつも個人が、あるいはももとの群集っていうか、部落ですね、それが、その思想が押し曲げられていく。だから国家ができたときに転向は始まったと思った。そういう世界史の視点ていうのを私は読んだことなかったんですよ、これやろうと思った。

## 資料1：鶴見俊輔氏インタビュー

横尾：それは廊下で、その廊下で思いつかれた・・・

鶴見：そう、官舎の、官舎の廊下で座っててね、ぱっと思いついたんですね。ドイツ語で言うとアインファウンドだね。ぱっ、ぱあっとアイデアが上から下がってきたんですよ。これを書こうと思った。だからそれはね、妙なことだけれど山領〔健二〕さん覚えてるんですよ。山領さんは東大の西洋史出身なんです。で彼は1年生の終わりぐらいに、高島〔通敏〕、山領ってのは同級生です。もう一人後藤宏行もそう、魚津〔郁夫〕もそう。4人はみんな東大の同級生。で山領さんは西洋史だと聞いて、自分の考え方で言うと転向っていうもので世界史を見たいと思っているの、国家出現以来の。でその話をしたんですよ。そういうことでずうっと戦争中、2年半ありましたね。そのテーマをずうっと自分の中に、熟してたんです。

### \* 共同研究の偶然性

鶴見：だけど、ここに書いてありますね、「集団でやるのは初めからのプランか」。そうじゃないんです。それ偶然です。

横尾：え？

鶴見：集団でやろうなんて考えたことないんですよ。いや私は、アメリカに行った時からそうですが、つき合いのいいほうじゃないし。で実際（笑）実際にね、小学校しか出ていないんだよ。ものすごい勉強しなきゃやってけないわけよ。で、あの、つき合いはほとんどありません。大学の講義だけです。講義終わると下宿帰っちゃう。日本も小学校だけですから友達はありません。実際は小学校の友達で私は終りまでキープしてあるんですけども、それは永井道雄、嶋中鵬二、それから小説家になった中井英夫。中井は全集を2種類持っていますが、私はものすごく偉い奴だと思っているんですよ。彼の親父は施政長官です。東大教授から抜かれたんです。親父を毎日罵倒する日記を書いている。それも場所は三宅坂ですから陸軍参謀本部の中の暗合兵として書いているんですよ。この勇気ってのはもう凄まじいもんですね。それは『彼方から』っていうんで文庫本でも出てますね。中井全集に出ています。

横山：『彼方より』だと思っんですね。

鶴見：『彼方より』、そう。私は中井を自分よりはるかに優れた人間だと思っていますよ。だけどその時は（笑）知らないんだ。むしろ中井の親父から影響、助けられたんだ。私の最初の本っていうのは上の人の命令で、海軍の兵隊はみんな困ってんですよ。太平洋バラバラで島があるでしょ、その守備隊見ると上から飛行機が来て爆弾落とすでしょ。南方の島に適切なカモフラージュをする植物はないか、その問題出されて、私は植物学科出身じゃないですよ、哲学科をкаろうじて卒業しているだけなんです。けどしょうがない。その根本資料を、まオランダ語っていうのは英語に似ているからね、ある程度分かるんですよ、それを元にして南洋に適するカモフラージュ植物、仮装用植物っていうパンフレットを書いた。それが（笑）私の最初の著作なんです。それが（笑）、まあそういうふうに、

暮らしてたんですね。だけど主なことは敵が読む新聞と同じものを作ってくれ。それを毎晩、短波放送聞けるのは夜12時から3時ごろまでですね。

鶴見太：ちょっとだいぶ話がずれてきて、一人でやろうと思ったのかつてことです。

鶴見：分かっている。でその前田精はどこまで私の思想を知っていたか知らないが、そういう任務を私に持ってきたんです。でさて、転向の研究をやろうっていうのは私にとっては世界史全体の一つの窓としてローマ帝国が始まってからずっとやれるはずだと思ったんです。国家あるところ必ず押し曲げられた個人の思想がある。だから転向は世界史の中のいたるところ、個人がまだ成立しなくても部落っていうか原始人の部落っていうのは、原始部落っていうのは決して大きくないでしょ。その人たちの思想ってのはあるわけでしょ。それを国家は潰しますね。だから世界史全体を貫く一つの視点としてこれ出せると思ったんですよ。それが始まりなんです。でしかもその時まだ20歳だから、体力に自信があった(笑)、80幾つまで生きてこれだけ毫碌するなんて思ってないから。一人で考えたんです。でまったく孤立して、海軍の、その軍隊の中で同じことをやっていた。偶然私はほかの兵隊に入ってこられない部屋を持っていたんだ。でその考え方はずっと続けたんですが、戦争が終わった、終わっても私はほとんど友達いないんですよ。で『思想の科学』っていうものは私の姉がつくったの。姉は女性だから兵隊にならないでしょ。で自分で戦争万歳って言わない人のリストを作っていて、彼らの書いたものもいっしょに、私が二度のリエス手術を受けて送還された時にぽっとくれたんですよ。ですから私は丸山真男の有名な論文、武谷三男の三段階理論、これはティコ・ブラーエについてですね。それから渡辺慧の、あのピエール、何だったっけ(笑)、あのラジウム発見者。

横山：ピエール・キュリー。

鶴見太：ピエール・キュリー、マリア・スクロフスカですよ。

鶴見：そうそう、マリアの旦那。

鶴見太：ピエール・キュリー。

鶴見：そのマリアが書いた夫の伝記をその慧は訳した。

横山：ああ。

鶴見：で渡辺慧はフランス留学生なんでマリアの講義を直接聴いている。でそういう人たちが戦争中の仕事を私の姉は溜めててぽっと渡してくれたんですよ。で丸山、武谷三男、渡辺慧、それに昔から知っている、アメリカで知っている都留重人、武田清子、これ一緒に交換船で帰って来た、5人でしょ。でわれわれ2人、7人でしょ。それが創立メンバーなんです。つまり親父は追放されて出版社に関与できなくなったからそれを弟にやらせて雑誌をつくらせる、これ私の姉の提言なんです。私はつき合いわるいし、一日中こうやってぼおっと座っていて平気なんですよ。だから、雑誌やろうなんて考えないんですよ。すべてその段階では私の姉がやったこと。で動きだした。で初期の論文っていうのは、去年だったかな、『思想』の特集[「特集、『思想の科学』の原点をめぐって」『思想』2009, (1021), p.2-84]をしたんですよ。それだと、あれ、教授が向う側だから、向うの説はね、私はそれ考えた

## 資料 1 : 鶴見俊輔氏インタビュー

ことなかったんだけどあなたの仕事、思想の科学の 1 号 2 号に出したものだ、フランクフルト学派に似ているって言うんです。それ考えたことなかった。卓見だと思し実際そうだったと思う。でその延長で、私は個人でやろうと思っていた、あたためていたテーマをそこに入れたの。それが転向なの。共同研究っていう考えは遅れて育ててきた。

鶴見太：ほおー。

### \* 京都のグループと『芽』の転向特集

鶴見：で仲間は誰にするか、私は京大にいたんです。人文研にいて偶然、若い秀才がいるんですね、学生で、大学院の学生だけど、多田道太郎っているでしょ。私と 2 才しか離れていない。ものすごい出来るんですよ。それから私と同じように戦争中の孤立、味わったの。東大にいたんですね。東大ってのは先生を含めて戦争万歳だから彼はもう駄目だと思って一人でフランス語のプルースト読んでたんだよ。プルーストは翻訳なかったんだけど彼は一人で読み上げてんですよ。でその人間が京大人文研の共同研究受けてきたんですね。で私は英語の試験受け持って、桑原さんがフランス語の試験受け持った。で飯食いに下りてきて、桑原さん言うのに「出来る奴いたかい」って言うの。みんなその戦争帰りだから外国語ができないんですよ。「一人いた」って私が言うと「多田だろう」って言うの（笑）。だから、

鶴見太：ちょっと、あのう、もう 30 分かかっているんですけどまだ 1 個も質問答えていない。ちょっとこれは非常に困ったことです。

鶴見：はい、ここでだ、京都のグループがあったって話したでしょ。京都のグループに人文研の助手、共同研究のメンバーだった多田と樋口〔謹一〕が入っている。そのほかに東京から来て大阪市大にいた松本〔三之介〕、松本とはあとで『日本の百年』でいっしょになりますね、このときは助手に小沢信男が入るんですよ。だから、それ後になって来るんだけれども、京都のグループがあるのは、もう一人上山春平が入っていますね。上山っていうのは、私は 5 年で京大辞めるんですが、桑原さんは「君のあとどうしようか」って言うんだよね。「上山春平をとってもいいか」、つまり桑原さんっていうのはそういうの常に相談する人なんですよ。そりゃもう、願ってもないことだと思って。だから私のあと上山春平入ったの。まあそういうふうにして、京都でいくらか、京都に 5 年いましたね、つき合いのあった、他に言うと奈良本、

横尾：はい、辰也さん。

鶴見：うん、それと林屋〔辰三郎〕。特に奈良本は幕末から明治ですから、転向研に絡むんですよ。実は現在私は江戸時代末期から明治への転向が日本思想史の最も重大な局面だと思ってんです。今そう思ってんです。だからその時の勘は間違ってた。でその仕事は京都で会合があると同時に『芽』っていう雑誌に奈良本書いてるでしょ。上山も書いてる。つまり勝海舟とか佐久間象山、これがテーマですね。私は自分たちがある程度手掛けた明治以後の転向、あるいは大正とか昭和の転向よりももっと重大なものは幕末だと思う

んです。そういう仕事やってない、今考えるところ。

鶴見太：ま、1でいうとやや下の方の答えにクロスしてるかなあ。

鶴見：ですからそれは『芽』をご覧になれば出てます。だけど共通のモチーフがねえ、京都のメンバーに無いから、私が東京に抜けちゃうと結局、仕事にならなかった。そういうモチーフの問題につながりますが、私の場合には、親父が張作霖爆殺の時には議会にいて反対して総理大臣をこう追い詰める、ことやったんだけど、あと続いてないんですよ。そのことは、私にとって嫌な記憶として残った。それがモチーフです。だからそのモチーフから離れることはなかった。

### \* 京大カードの起り

鶴見太：ではそろそろ2番にいきましょう。

横山：これね、この真ん中辺はほぼ話したのよね。

横尾：そうですね。

鶴見：京大カードはどうしてできたのかね（笑）。私は京都で街歩いててねえ、文適堂っていう文房具屋にぶつかったんですよ。そうして入ってたらね、いろんな紙扱ってんですよ。でその時思いついたんです。アメリカ人の学生はね、カードを使うんです。で、こういうカードを大量作ってくれるか、自分で入って聞いたんですよ。もちろん作ります、どういう紙がいいんですかってこういう紙。それから京大行った時にね、桑原さんに相談したんです。そしたら桑原さん言うには「文適堂ってのはとてもいい文房具なんだよ」って言うんだ。知らないんだ私は（笑）。それでカードを、ま、1万枚とかなんとか注文したの。で学校が払ったの。それで私が考えたのは、私は多田、樋口と2年しか離れていないんだ、共同してメモをつくらう。っていうのはね、私はドイツ語は読めるんだけどね、フランス語ダメなんです。でその2人の学生は多田道太郎と樋口謹一だからフランス語自在に読むんです。樋口謹一の役割って決して低く見ることでできませんよ。樋口ってのは、フランス百科全書ってのはね、こんなでかい本なんです。で重くてうちに持って帰れるもんじゃないんです。私は泊まり込みで読んだんだけど、とにかくフランス語の力がひ、ないんですよ。樋口と多田はあるんだ。で樋口はたくさん読んでジョクール [Louis de Jaucourt] という人物が一番たくさん項目書いて、いろんな項目書いて（笑）、ジョクールなくしてはフランス百科全書はできないというのを発見したわけ。多田道太郎は重要なのは歌と言語との共同発生、それをルソーが書いてるんだ、言語起源論。そのルソーでふつう引かれないその論文を多田道太郎は単独でほとんど全部要約して出した。それはその、カード使ってやったってわけ。だから樋口・多田・私の間には同じカード使う、プールしながら発想の段階で回すってことができるようになった。でこれは転向研の時も使います。ものすごくたくさんカードを作る [使用例は p.29 の写真]。

鶴見太：そのカードは今どこいったんですか。

鶴見：いや（笑）、多田道太郎にも聞かれたんだけどもとにかく（笑）うちは狭いし、あ



## 資料1：鶴見俊輔氏インタビュー

れはどこにいったかって多田道太郎に聞かれたんだけど要するに捨てちゃったんだと思うね。文適堂との縁はそれで、それが京大カードの起こりです。それがあとで、その頃からのつき合いがある梅棹に来るでしょ。梅棹はあとで人文研にも入りますね。で梅棹がそれをさらに、何を書くかって項目をきちんと立てて、それが京大カードってものに市販されるようになるのは梅棹の力なんです。

### \* 編集者のこと—鈴木均、児玉惇

鶴見：それで、「費用は平凡社以外から出なかった」、これが重大なんです。あの、今下巻持ってないけど、

横山：そこにお持ちになってますよ。

横尾：はい。

鶴見：下巻の後ろに書いてあったと思う。

鶴見太：つまり今でいう科研とか財団の補助金は受けていないと。

横尾：あれですか、あの石井さんと書かれた文章ですか、お探しになっているのは。

鶴見：「転向研究グループについて」。

横尾：あ、はい。

鶴見：これは松尾紀子と鶴見俊輔の共同、私が書いたものを松尾さんに読んでチェックしてもらったと思う。これはかなり重要だと思う。でお金は、私は鈴木均という人とわりに早く京都の頃からつき合いがあったんですよ。彼は海軍中尉です。で九州の方で砲台一つ扱っていたの。砲台一つ扱うっていうのは部下がいるでしょ。部下との接触がとて、ま、大切なんですよね。それがこん中に持ち込まれた、その人間関係は。鈴木均は簡単に怒ったりなんかしないんだ。むしろ彼の部下になった児玉とんっていうのは（笑）すごく怒るんだよね（笑）。それはね、児玉ってのはすでに詩集1冊持っている。

鶴見太：児玉とんってどう書くんですか。

横山：あつし。

鶴見：難しい字だ。

横山：あの示偏の。

鶴見太：分かった。

横山：あの立心偏。

鶴見：でね、児玉惇の詩はなかなかいいんですよ。でね、自分はもう詩集持っているし、転向研に来ている若い連中よりも自分の方がライターとして上だと思っているから簡単にこう、行を動かされるっていうのはとても困るんですよ、手を入れて。

横尾：あー。

鶴見：でケンカしちゃうんだ。だから高畠とけんかしたりもう、山領は、けしてケンカしないんだよね（笑）。山領ってのはね（笑）単純に人望から言えば一番好かれている男なんだ。高畠は好かれられないね。頭良すぎるんだ。あれはね、入ってきた時に丸山さんからちゃ



んと注意されたの。「これは秀才だからつぶさないでくれ」って（笑）。それは私が気ちがいじみてるから秀才が来てもつぶしちゃうと思ってるんだ、丸山さんは。藤田省三についてはね、「これはいい男です」。一人一人にそう言うてるんだ、丸山さんてのは。橋川文三はね、これは丸山さんのうちに行ったら橋川が来てて先客だったんだけど、「これは橋川君、評論家」って言ったの。つまり一つ一つこう、あるんですよ。つまり高島の場合、めっちゃくちゃに成績のいい男なんだ。それでトップでしょ、つまり昔銀時計があるときだったら銀時計組ですよ。頭いいかわりに生意気なんだ（笑）。大体いろいろ口出すでしょ。そうするとあの、憎まれ口きく奴がいてね。山領そういうことしないから、大変に、・・・

### \* 人名録ができるプロセス

鶴見：あ、それでね、その今の〔下巻の〕後ろに人名録があるでしょ。あれとても重要なんです。なぜそこに人名録が入ったか、人名録ができるプロセスは書いてない、わざと。というのは『転向』上巻が出るとね、かなりの評判になったんですよ。で私は手紙もらったんですよ、総理府の官吏から。私のところに転向についての絶好の資料があります、それ追放を免れようとして陳情書が、直筆の陳情書が溜まってる、これをそのまま、分散されて歴史から隠滅されるのはよくない、お見せしたい、で彼と上司の課長と。

鶴見太：名前は分からない？

鶴見：名前覚えてたら、あの（笑）。

横山：覚えてます、今出てこない、顔まで出てくるけど名前が出てこない。〔右記、後日横山氏が補足「志垣民郎氏でした。」〕

鶴見太：あ、そうですか、はいはい。

鶴見：それは北海道みどり小学校の校長の息子で生活綴方運動ってそこまで続いているんですよ、で彼は『戦艦大和ノ最期』を書いたあれと東京高校の同級生。

横山：あ、吉田満君と。

鶴見：あの、彼の追悼録にも名前出してる。それで課長と一緒にやって来たんだ。場所は新橋のそばだったよ（笑）。そこで話を決めてその資料を全部いっぺん預かって見せてもらうことにした。でそれを読むのに4人のグループをつくったんだ。それはもう転向研の外なんだけど、4人のメンバーで私が覚えているのは見田宗介、彼女、私、もう一人しまねきよし。この4人で山と積み上げられた自筆の、自分は追放は値しない、許してくれっていうのを赤尾敏まで含めて全部書いてんですよ。それを読むことができたのが、下巻の人名録に使ったものなの。どこでどうして、でこれは現職の官吏でかなり上の位置ですからね、名前書かなかったんだ、わざと。だけどこれはとても重要です。彼ら2人なんだからね、彼と課長なんだから。ちゃんと課長を連れてきたことが面白いでしょ。戦後ってのはそういうものなんですよ。この、会社の中でこうなってるってわけじゃないんですよ。これは重要な資料だ、これが隠滅されるのはよくない、そういう正義感ですね。赤尾敏まで書いてんだ。えーとそれからあれも書いてたな、藤山愛一郎。とにかくそれが、この無

## 資料1：鶴見俊輔氏インタビュー

記名の人名録のもとです。

### \* 藤田省三の参加、年少者の意味

鶴見太：じゃあその、自分より一回り若い、高島〔通敏〕さんとか山領〔健二〕さんとかがメンバーに加わることで得たものっていうのは。

鶴見：そうそう、それもね、偶然なんだ。あのちゃんと松尾さん書いてんでしょ、『思想の科学会報』ってものに。一種の立て看みたいにして、何日から転向研究会を始めます、興味のある方は来て下さい、で場所は東京工大の私の部屋。その頃の大学って自由なもんでね、私はそういう目的で自分の部屋使えたんですよ。でその時かなりたくさん集まった、何十人って覚えてないんですが。名前のあるライターがずいぶんいた。で私が趣旨を説明した。そしたら反論が出てね、非転向の人たちが苦しい状態にもかかわらず耐え抜いたということをやる会ならやる、転向を中心としてやるんなら自分たちは参加しない。次の会には来なかったの。次の会にはもう今言った山領、魚津〔郁夫〕、後藤宏行、高島、みんな無名の、ま、学生ですよ。でその部屋は私の部屋で、私の助手の判沢弘がいたから、ほかに学習院から久野〔収〕さんの系統でね、西崎京子、西勝、これは久野さんの系統が、残った。つまりそういうものが中心になってこれが第2回以後、終りまで動かなかった、固定しちゃったの。であとで、完全に入っていないかっていうと、一人（笑）あとから入ってきたな、藤田省三が、藤田省三がギリギリの時に。横山さんの家が目黒の鷹番町にあって、そこでメシを食わしてくれたから（笑）みんな集まった時に、藤田省三が入りたいと言っているけど入れてもいいかと私が動議出したの。そしたらね、安田〔武〕が反対したんだよ。もうこれで閉め切りだ、そんなこと言うなら自分の女房も入れろって言うんだよね。で女房ってのはアメリカ行っちゃってアメリカ人と結婚して、した人なんだ。私が強引に言って藤田が入ることを賛成してもらった。それが、偶然のことなんだけど、成功の大きな理由です。

鶴見太：えーと藤田さんが入った経緯ってのをもう少し説明して。

鶴見：藤田はこの転向研究に興味を持った。それで、藤田は共産党員です。共産党員がね、こん中で言うとしまね、藤田、この二人は共産党員です。共産党員であるかどうかってことは、別に私は差別しないんですよ。ね、あの、藤田は入ってきてからものすごく活躍するし、大体彼話うまいんだよ雄弁家なの、だからもう一座は活気づくしね。で上中下の状況論全部書いたでしょ。もう大変なことです。藤田がそれまでに書いたものの中でのトップのもですよ。

鶴見太：え、藤田さんは丸山さんに教わってこの研究会に来たのか。

鶴見：そうじゃない。藤田は入って来た時に丸山真男から言ってきたの、「これはいい男です」。高島の時（笑）「これは秀才です、よくできる、つぶさないでください」（笑）。

鶴見太：藤田さんはどのルートで転向研を知ったのか。

鶴見：それ難しいねえ（笑）。巷間の噂というものがあるんだよ、それが大学の助手やなん

かから流れてくるんだ。その証拠に、私は、東京工大はテクノロジカルだから、あの一、お金がつくんですよ。京大行った時はなかったんだけど。それをね、転向研に使ったんだ。ですからそのお金を持って、転向研のメンバー連れて、あの、神保町の古本屋街をずうっと歩くんだ（笑）。それでね、欲しいものを・・・

鶴見太：えーとでは、若い世代は分かりましたが逆に10年ほど上の世代、秋山清さん、久野収さん、この辺の年長者の参加協力についてはどうだったか。

鶴見：あのね、若い人の意味はね、スティックアウトしないと意味はとれないかもしれない。その頃の仲間という柴田道子と乙骨淑子。柴田道子は『谷間の底から』って岩波から出てるでしょ、学童疎開についての本です。それは『思想の科学』にも書いたのが始まりです。で彼女は学童疎開について、先生がいじめたり、いろんなことがあったんですよ、そういうこと全部書き込んで。だから年長者は信頼できないっていう考え方を持ったんです、それは非常に強い動機として。だから『思想の科学』って雑誌そのもの書いてますね。やがて彼女は本にするし、彼女4、5冊本あると思う。銀行員と結婚して長野に行つてね。いろんな面白い方なんだけれども、読者の中に被差別部落の子がいたんですよ、それとの結びつきについて、彼女の名著は被差別部落の歴史、家族の中の伝承を書いたり、一冊あるでしょ、三一から出てる〔『被差別部落の伝承と生活』〕。だから、被差別部落、そういう、踏み込んで結局、狭山事件まで突っ込む。でその実験の中で心臓発作を起こして死ぬんです。ものすごく一本気な人でね。あれ学校はね、共立女子大。共立女子大から羽田闘争まで行くんですよ、羽田の道は狭いっていう。乙骨のほうはね、乙骨の親父を私は偶然軍令部で一緒なんです。でこれはね、年をくってるものだからね、私みたいな臆病風の吹いてる人間とちがって大きな声で言うんだ、「鶴見さん、この戦争は負けるとぼくは思ってたけど君はどう思う」。もうつらいんだよ、こういうことね。私は黙ってますよ。もちろん負けると思っています。そういうこと平気で言う男なんだよ、えらい男なの。彼は101まで生きてね、立派な男だった、でその娘が乙骨淑子なんだ。でこれは『ぴいちゃあしちゃん』っていうの書いたし、清水真砂子が児童文学史の中で非常に高い評価を出してるね。つまりその辺はみんな年少の転向体験持ってるんですよ。いったんは日本が勝つと思って全力を尽くして、そしてしかもその中でインチキなことが、その戦争協力の中であって、それを知っている。そして負けた後にひっくり返る。それを、やっぱりね、乙骨と柴田っての見たときちゃんと裏付けとれる。それは転向研入ってないけど、転向研入った中でも似てるわけ、それは、年少の中で言えば。高島、これね、信州上田の出身なんだ。あれね、真田幸村の兄貴がいたでしょ、城主になった、あれ〔真田信之〕の子孫なのよ。だから、で、一族の中に琴の名人がいたり面白い人なんだ。それから大審院院長なんてそういうのも出てる、秀才の家系なんだ。で彼の親父は新人会員なんだ、だから大正時代の、親父は弁護士になってかなりうらぶれて、ま、転向体験だな、そのセカンドジェネレーションなんです。で自分自身も、この、世論が裏返るのを見ていたでしょ。その辺が山領、魚津、西、この辺で共通なんだ。

\* 年長者について—秋山清、古在由重、久野収

鶴見太：で久野さんとか秋山清とか上の世代の問題はどうなんでしょう。

鶴見：年長者の話。年長者はとても重大なんだ。秋山清っていうのは、大正の終りから昭和の初めにかけてのアナ・ボル論争っていうのがあったの知ってるでしょ。葉山嘉樹とかそういうのは、平林たい子っていうのはアナ系だ。その中に、ボルの方に論争に負けて移っちゃうのがとても多いんですよ。秋山清はアナの立場を貫いてる。でなぜ貫けたっていうとね、九州から出てきてねえ、丸ビルのエレベーターボーイになったんだけど、震災の時にね、閉じ込められちゃって（笑）大変苦しかったって言ってたけどね、とても親孝行なんだよ。お母さんと一緒に住んでいて、だからアナの仲間がね、秋山を誘わなかったの、山村工作隊やなんか事件があったときに。彼は牢屋に入ってない。あんな親孝行なの獄に入れちゃったらお母さんが残されちゃってかわいそうじゃないか。だから秋山の詩の中にはお母さんが出てくるとてもいい詩がいくつもある。で彼は貫いてますよ。山本五十六が死んだ時の詩とかそういうものがちゃんとね、即物性を持ってる。ザッハリッヒカイトですね。決して万歳とか、しかも戦い抜かなきゃいけないとかそういうの書かない。でこの秋山が自分で入って来たのよ。初めて会ったのはね、私がとても偉いと思って支持してきた石川三四郎の葬式の時、秋山はアナとして黒旗で棺を覆って、黒旗に覆われた石川三四郎の棺を畑をずうーっと貫いて背負って送ってったね、そのことを今も覚えてる。そして後の集会で彼はこういうこと言ったの。石川さんと自分はそんなに接触して話をする機会がなかったと。とても残念に思う。石川さんのことをこれから考えていきたいっていうのを追悼の会で言って、「石川三四郎を偲ぶ」っていうパンフレットあるはずですよ。その時に来て事務をやった。つまり彼がねえ、転向研自発的に入って来たの。そしてね、彼が私に誰がオーセンティックで誰がオーセンティックじゃないか、人の真贋を見分けることを教えてくれたの。私は明治大正の人間じゃないから、その時に簡単に寝返る人について私は自分の洞察力持ってないわけ。でそれを私に与えてくれたのは秋山なんだ。彼には、立派なこと言っているけどあれは戦争中にひっくり返って日本必勝なんて唱えてた奴だよ、それは菊岡久利についてそういうこと言った。だからこれは危ない、これははっきりしている、その区別をちゃんと教えてくれた。そういう人を何人か、若い人は必要なんだ。私にとっては京大に来てからの桑原武夫がそういう人だったの。あの人は今に調子いいこと言ってるけど簡単にひっくり返るよ、っていう年長者について、いろんな情報を与えてくれた。

鶴見太：古在由重さんについてはどうですか。

鶴見：古在さん、ていう人は彼自身が貫いた人です。彼は転向調書をつくっていますがある限定付きでつくっているんですよ。彼は京浜労働者の運動で捕まった。だから古在さん自身が戦争中の経歴が転向と分類されるようであっても貫いている人なんです。で古在さんの仕事は偶然私はアメリカに行く前に読んで知っているんですよ。つまり三笠書房から出ている唯物論全書で『現代唯物論』〔永田広志著〕っていうのと『現代哲学』っていうのを

書いてる。で『現代哲学』っていうのをそこで買って読んで、アメリカに持ってったんです。でアメリカで講義がね、そこで扱われている現物の人が出てくるわけ。例えばカルナップなんてのは古在さん読んでちゃんと扱っているんですよ。で非常にきちんとして歪めないで要約してんですよ。で古在さんてたいした人だなあて思った。でアメリカで大学に行っていてね、大変な人だと思った。

鶴見太：えーと古在さんが転向研にどういうルートで加わった。

鶴見：転向研に、あの繰り返し、ちゃんと答えを言ってるし、この座談会〔「共同討議、現代世界と転向」『共同研究：転向、下』〕で引かれていると思う、自分の出てる。して古在さんの考えは転向の概念の規定に独自の考え持ってたね。転向は2度目である。初めのもともとの思想を持っている人間がマルクス主義に転向する。そうしてファシズムが起こった時に2度目に転向する、ひっくり返る（笑）。だから、諸君の言っている転向は2度目の転向である。ね、そうちゃんと言っていると思うけど、それはすごいと思うよ。また古在さんの経歴からいってやっぱりすごいこと言うなあと思った。で最後共産党から除名されてるんですよ。つまりそういう、いつでもこう、権威に従うことしないから、立派な人だと思ふね。

【事後付け足し（2010年1月14日付け鶴見太郎氏からのメールより転載）】

久野収さんが研究会について果たした役割は、大正時代から戦前昭和にかけて当時の若い知識人・学生の間で飛び交っていた「ゴシップ」について細かな事例を教えてくれたことです。それら「ゴシップ」をやがて転向する人々にあてはめて、当時の「ぶれやすい」知識人像を抽出するのに大いに寄与した。

\* サークルの持続要因

鶴見太：えーとでは、転向研というサークルの、サークルを維持するためになんか工夫したことはありますか。これはそちらの方はよく知っているでしょ。

横山：いや、工夫はしてないと思うね。

鶴見：よくみんながまんしてくれたねえ。

横尾：あの、ハイキングなんていうのは、あれは誰が企画を。

鶴見：そうそう、いくつも旅行してますね（笑）。

横尾：誰が企画するんですか、ああいう遊びのところは。

鶴見：私は性格的に人づきあいがいい人間じゃないんです。だからよくもったなあと思うんだけど。率直に言うとね、転向研珍しく女性がいるでしょ、女性による研究会というのは当時、昭和25、6年〔実際は昭和29年末始動〕かあ、少ないんですよ。

鶴見太：えーとそれも偶然なんですか、女性がいたっていうの。

鶴見：偶然です。

横尾：全部偶然（笑）。



## 資料1：鶴見俊輔氏インタビュー

鶴見：なんだな、率直に言って、彼女は美人だったんですよ。

横尾：ええ、ええ（笑）。

鶴見：だから彼女と西崎さんと松尾さん、3人女性がいたでしょ。それやっぱりアトラクションだったんでしょうねえ。

横尾：あ（笑）、それ自体がですか。

鶴見：好きだったのは安田じゃないかな。安田はね、転向研が終ってみんなが乗って帰るから途中で池袋で降りてね、けっこうみんなとっしょに飯食ってんですよ。安田はね、別に裕福じゃないんだけど細君が働いてんの。今もいるでしょ、安田つたゑっていの。彼女が立教の図書館で働いてんの。だからなんとなく学生にふるまえたわけ。で彼はうまいものっていのよく知ってるわけ。それで池袋近辺のそういう飲み屋でふるまってたんだと思う。

鶴見太：あれやっぱり安田武さんが企画者だったらしいです。

鶴見：私は金町に住んでたから早く帰らなきゃならない。飯に参加してない。だけど安田武のパーティーが二次会的にあったみたい。

横尾：あー。

鶴見：出発は大岡山ですからねえ、遠いんですよ。

### \* 判沢弘の役割

鶴見太：えーとではもう一つ、同じ年代で判沢さん、判沢さんが果たした役割。

鶴見：判沢さんはまったくこの部屋の主ですね。

鶴見太：東京工業大の助手だったってことですね。

横尾：はい。

鶴見：あの、京大にいた時に、あの時だと破防法ですね、破防法反対全国遊説っていうイベントをね、京大の経済学部学生の西村和義が始めたんです。私のとこ来たんですよ。私は人文研なんですけど。で、二人で考えてね、学生も教師も金をとらないで向うで受け入れてくれるさまざまな場所に行って、破防法が成立しないような演説会開こう、でその企画は成功した。その年と2年目と2年続いた。今もその志を継いでいるのはオウム事件の時の河野義行、彼はサリンを撒いたっていう疑いを警察から受けて、しかも彼の細君はまったく意識不明になったんだ。それでも彼は破防法適用にはっきり反対した、オウムに適用するのは、ああいうえらい奴が日本人にはいるんだなあて私はとっても感心したんだけど、やっぱりそういうのは、一人残るって感じですねえ。稀な人ですよ。

鶴見太：で判沢さんが転向研で果たした役割というのは。

鶴見：判沢さんは、その破防法反対の全国遊説が、私が西村和義に言われてカバーしたのは鳥取県なんです。鳥取県の人口3000人以下の村々を回った。でそれが最後打ち上げの時、わりあいに大きい市、米子市で打ち上げた。米子市で受け入れ態勢をつくってかなり大きい集会を準備してくれたのが判沢弘なんです。でその縁でつき合いが生じて彼は私が京大



から東京工大移る時に自分で言ってきたんですよ。自分を助手にとってくれないか、私の助手。で彼は早稲田の西洋史出身なんだ。で彼に来てもらったんです。私より2つ上です。それで彼は大人（たいじん）の気風があるからね。だからやっぱり何となく人を安心させる力がある。でこの転向研の中では下巻で彼は右翼の人を、津久井竜雄やなんかを書いているでしょ。それはとても面白いものだと私は思います。右翼に対しても私は差別したくないんだ。だから今書いているのも鈴木のお、あの辺は私は評価しています。

鶴見太：あ、鈴木くにおです、鈴木邦男。

鶴見：鈴木邦男か。この津久井竜雄っていうのは右翼の運動家としてもちゃんと筋が通っているし戦後の身の処し方も筋が通っているっていうのが判沢の見方です。で私はそれはいいと思ってるんです。だから役割はそうですね。

#### \* 人文研の共同研究の影響——党内党

鶴見太：では3番のあたりにもう行きましょう。

横尾：一つだけ移る前にですね、これはありましたか。あの、京都とは何か違うようなことを

鶴見：ティーム・サーヴェイって私は知らないんだけど。

鶴見太：いやいや、あの、一つ上。

横尾：こっち〔質問票②の2番目〕とかですね。あの、これはいかがでしたか。

鶴見：これはね、黒川に言われて気がついたんだけども。

鶴見太：黒川創さんですね。

鶴見：やっぱりありますね。つまり桑原さんのところで共同研究を務めたでしょ。ちょうど軍隊の組織でいえば私がタスクマスターっていうかな、曹長格なんですよ。この、兵隊と接触、直接に接触する。だから文適堂のカードもそういうふうにして、共同利用する。そういうやり方で、樋口、多田と私とはいつも組んでたわけですね。つまり党内党なんです。共同研究てのがこうあって、座長は桑原さんで、一つの傘っていうんじゃなくて、その傘の中にもう一つ傘あるんですよ。だからちょうど転向研でいうと最後の志垣民郎の話を受けて、あの、根本資料もらったでしょ、預かったんだけど、返した。そういうものを使えたっていうのは党内党、つまり党内党っていうのはその場合、しまね、外から見田、これ統計使うのうまいからね、彼女と私、4人です。だからわりあい共同研究っていうのは、そういう党内党をイデオロギー的な、反党みたいなものにしなければね、うまく使えるんですよ。つまり、アイデオロジー・フリーだったってことが、これはもう、始まりのころからの「思想の科学」の流儀ですがね、それがその、信頼感を壊さない、理由なんです。だから考えてみると安田武がつくったうまいもの食うパーティーだって党内党なんです。

横尾：(笑)なるほど。

鶴見：安田武の役割は飲み屋に連れて行ってここの飲み屋はいいぞ、ここの寿司はうまいぞっていうのを教える(笑)、いくらか足し前は払うってこと、それが彼の役割だったと思

## 資料 1 : 鶴見俊輔氏インタビュー

う。

鶴見太：じゃあその京大の人文研の共同研究っていうのになくて転向研にあったものっていう。

鶴見：それはね、黒川に言われるんだけど、桑原さんの影響はあったと思う。桑原さんてのは雰囲気をつくる、とてもうまいんですよ。なんとなくこう、その人がいると愉快になってくるという。あれ、山登りからきたんでしょうね、山のパーティーから来たんだと思う。私はほんとに3日でも4日でも黙ってて平気だから、全然そうじゃないんです。つまり単純に人文研で言えば桑原さんが私を使った、私が桑原さんから学んだ。で黒川創がいうように桑原さんから学んだことを転向研に、で生かした。そう言えると思う。

### \* 書籍化の経緯

鶴見太：では③番に。

横尾：そうですね。それじゃあ③番のですね、もうあのさつき、秋山さんのことは言っていたので。

鶴見：『転向』を出すまで。

横尾：そうですね、書籍化の。

鶴見：初めにね、まず私は出版社との契約、平凡社との契約は私1人でつくった。それは京都にいた時から鈴木均とつきあいがあったから。で初めね、1年でできる(笑)って言ってたの。全然私は見通しがなかった。8年かかったんだから。だからよく鈴木均はがまんしたと思う。彼が課長です。

横尾：それはあのいつ頃から。

鶴見：(笑)とにかく1年でってはじめ通したのを彼ががまんしてくれたんだなあ。いや初めから、出版は、相手が課長ですから責任がある。

横山：Whenって聞いているのよ、でしょ？

横尾：そうですね。

鶴見太：正確な当初の契約における出版の年ですよ。

鶴見：契約作ってたんじゃないかなあ、それを私がまた。

鶴見太：暫定的にでも1958年か9年か。

鶴見：もっと前。

横山：もっと前だと思う。私がアメリカに行ったのが56年でしょ。でその頃、きん(均)ちゃん、とん(惇)ちゃん来てたから。

鶴見：きんちゃんとんちゃん(笑)。

鶴見太：57年頃。

鶴見：あの鷹番町の会議がそれに入る直前だったんだよ、あれが目安だ。

横山：あれは私が帰ってからですよ、帰ってからです。

横尾：最初横山さんがお入りになった時はなかったんですか。

横山：えーと、おそらくなかった。

横尾：本にしなきゃって感じではなかった。

横山：なかったですね、ええ、いつかするという。

鶴見太：じゃ成果発表への、その執着っていうのはなかったの、当初はなかったんですか。

横山：いやそのグループの中で発表してみんなから反応が返って来ることが最高の楽しみ。

鶴見太：ははあ。

鶴見：あれには前評判てのがあるんだよ。前評判があるってことが分かったのが、その、研究費を持って神田の古本屋を歩く時に転向関係の資料がどんどん値が上がってくんだ。それはいっしょに歩いた若いメンバーの自信を非常にしっかりしたものにした。自分たちがやっていることが若い研究者の評判になっているんだって自信持ったの。

#### \* 橋川文三の参加、メンバー補強

横尾：あの、ちょっと進めていきますけれど、橋川さんはどうして入ってきたんですか、自発的。

鶴見：橋川も当時共産党員だった。共産党員の目黒鷹番町の私の姉のところに

鶴見太：鷹番町？

鶴見：原稿頼みに来たんです。『潮流』って雑誌があつて。

横山：鷹番町にうちを借りてたの。

鶴見：で私が鷹番町に姉と弟と妹と 4 人で住んでた。

横山：偶然ですよ。

鶴見：谷さんといううちの 2 階に住んでた。そこに橋川が訪ねてきた。偶然私の姉はいなかった。で私が対応したの。それで知ってんです。2 度目は丸山さんのうちに行ったら先客で彼がいた。で丸山さんの紹介は「これは橋川君、評論家」。

横尾：でもう、それで橋川さんは転向研に入りたいと言ったんですか。

鶴見：橋川は自然につき合い仲間。その頃ね、いっぺん、出版社も大学も戦争で破壊されてるからあんまり区分がはっきりしなかったんですよ。だからたとえば転向研で旅行、那須の旅行に、そこにあると装丁家の田村義也が来てたりね。田村義也の所属は岩波書店の編集者(笑)、岩波新書出してたの。そんなの平気なんですよ入っても。だから区分性があんまりないんです。

横尾：あの、これ [質問票③の 5 番目]、上巻をつくるときと中下巻をつくるときで同じようにやったんですか。

鶴見：一冊作るとね、がくっと腰が抜けた感じがあつたんですよ。

横尾：これですね、ここ。

鶴見：同じメンバーで次ってことなかなか、いけないんで、一冊ごとに補強しないといけないの。トレードしてくんです。

横山：この週 1 は続いたと思います。

## 資料1：鶴見俊輔氏インタビュー

横尾：あ、そうですか。その、メンバーが少しずつ変わりながら。

横山：増えはしたけれど減ったことはないと思うんです。

横尾：あー、じゃどンドン。

横山：あ、掛川トミ子さんは途中からいなくなったかもしれない。

鶴見太：私は知りません。

横山：それは他の人の記憶と突き合わせてみないと。

横尾：はい、そうします。

鶴見太：山領さん。

鶴見：相手が鈴木均でなければなかなかそういうことも（笑）動かすことできなかったと思う。

### \* スタイルの不統一

鶴見太：えーと、それこそ、こう言ったらなんですが集まってくる原稿がだいぶそれぞれ質が違っていると思うんですが、そういうときの配置の仕方に苦慮された、苦慮したってことはないんですか。

鶴見：ある種の凝集力が働いていくので合宿なんて計画したりするとみんな来たんですよ。ずいぶん合宿やったと思うけれど、そうするとその時にガリ版印刷でそれぞれの個別的な論文があって、それを回し読みをして批評をするんです。それが大学教授が学生の仕事に手入れをするのとちょっと違うんですよ。やっぱりそれを集団で、ああ自分でまずいなとおもうことを、自分で直していくきっかけになるんです。例えば教養の違いというのは大変なもんなんだよね（笑）、市村はねざえもんなんて人（笑）。

横山：市川さるのすけとかね。

横尾：しまねさん（笑）。みんなそこで直すんですか、直さない。

横山：あの、それはもう八方から飛んできますよ。えーなんで一なんて言って。

鶴見：山領さん、魚津さん、しまねさん、みんなそのガリ版の、あの、元をつくってると思う。そこで合宿で批評されることで自発的に直っていったね。

横山：誰かが手を入れて直すということはしていません。

鶴見太：していないんだ、あ、それはすごい。

鶴見：全体として手を入れてスタイルを統一するということは私はしてない。むしろ

横山：だからこんななんなんよね。

鶴見：児玉惇がケンカするとかね、そういうのはあったけど（笑）、児玉惇にしたらこのでこぼこが気に食わないんだな。

横山：そう。

鶴見：だけど鈴木均はやっぱり全体の器量があつてね、あまりそういうトラブル起こさなかった。彼自身がもの書く能力あつて、彼自身著作があるんだけど。

横山：これが追加の質問ですね。

横尾：そうですね、じゃ④に入っていく感じで。

鶴見太：追加分ですか。

横尾：はい、追加も含めて。

鶴見：(笑) そういう批判はもう上巻出た時からあったね。多田道太郎がやってきてこんなバラバラじゃ困るなあって。ぼくが入ってやろうかって言ったことあった。

横尾：それで、どうお返事されたんでしょう。

鶴見太：その多田さんの入るか否かについてはどう返事をしたのか。

鶴見：多田道太郎は話のスピリット分かってるし、『芽』という雑誌は全部、多田道太郎と私の共同編集だったと言っていい。それから関西の転向研何回かもったときも多田道太郎はつねにいた。だから、今ですよ、今考えてみると、あの、吉宗以後の江戸時代の中の転機が転向にとっての最も重大な精神の胎動の時期だと思う。私はそう思っている。だから明治以後を近代と考える考え方に今私は反対です。あの、幕末のあの動きっていうのはアジアの中でいえぼとっても重大じゃなかったでしょうか。それはいま全部が終ってから考える。

**\* 最年少者の目覚め、歴史はレイタージェネレーションで書く**

鶴見太：④番に入りましょう。

横尾：そうですね、じゃあ、あの。

鶴見：どういうふうに評価するか。この8年かかったプロセスでメンバーの中の最年少者が目覚めていったんですね。で重要な部分を担ってるでしょ。そういうことは戦後の動きの中で研究者の中ではあり得るはずのことです、変転の中で。でよく見ればあるんだと思います。ただ、そういう文献通じてないから、はっきり言えないけど。この転向研の中で最年少者、つまり松尾、西崎、彼女、魚津、

横山：最年少は高島さん。

鶴見：誰？

横山・鶴見太：高島さん。

鶴見：高島、山領、後藤、この中で目覚めていってるでしょ。こういうプロセスは今の研究者全体として考えて、インテリの中で目覚めている人間てのは、同じようにいると思う。でも私は広くきちんと読んでないからはっきり言えないけど、転向研でわずか十数人の集団のなかでそういう経験があったことは、もっと広くあるんだと思います。

横尾：あの、もう一度転向研のようなことを、もう一度やりたいと思ったりとか、その後ですね、あの。

鶴見：誰がリーダーになるんですか、現在八十幾歳の私が。

鶴見太：いやいやだから、転向研終わったあとまたその後ということ。今現在を起点にするんじゃないんですよ。

鶴見：転向研のあと。

## 資料1：鶴見俊輔氏インタビュー

鶴見太：終えたあと。

鶴見：転向研のあと一生懸命やったがなあ（笑）、けっこう一生懸命いろいろやってんですけどねえ（笑）。

横尾：そうですね（笑）。

鶴見：えーと、だから今もあると思う。そういう目覚めがね。で考えてみると歴史っていうのはメモワールじゃない。メモワールってのは回想録でしょ。自分のやったことを回想して書く。歴史っていうのはその時に存在していなかった人間が、書く。つまり自分が想像力によってその中に投入して、その雰囲気をとらえる。これが難しいんですね。だけど考えてみるとすぐれた歴史は必ず、その、雰囲気、時代の匂いまでよくとらえていると思う。ものによってとらえられて。だから、ギボン（ローマ人）じゃない。リットン・ストレーチーはエミネント・ヴィクトリアンではない。ただ彼の親父はエミネント・ヴィクトリアンだった（笑）。そういう、歴史はライタージェネレーションで書く。それがなんか分からないけど時代の息吹をとらえる力を持っている。だから司馬遷なんてね、ずいぶん、自分が生きている時代じゃないもん書いてんですよ。司馬遷の『史記』ってそういうもんでしょ。昔からそうなんですよ。

### \* 父親に対するまなざしの変化

鶴見太：えーとそれでは2番目にうつりましょう。

横尾：2番目というかそういう目をもったことが生き方とかその後の研究に

鶴見：吉本が

鶴見太：あ、失礼、ちょっとあの、転向研で得た成果ってのが自分個人のその後の営みに何か影響を与えたか。

横尾：ここですね。

鶴見太：④の一番終りのところですね。なんか書いてるようですけど。

鶴見：あると思う。転向研の、は、私の親父の転向を対象としてそれがつねに念頭にあって、モチーフなんですよね。だけど今、仕事が終っちゃって、こう、親父も死んじゃってと考えると、私は親父について、あるいは親父よりだいぶ立派な人だと思う永井道雄の親父について、差し替えたでしょ、それは永井道雄は非常に貴重な資料くれたからだけれども、だけど、彼はもちろん相当に立派な人だと私は思っているし、親父についても、ある、ユーモラスな感じがあるね。つまりね、親父はこういうこと言ってたんですよ、ヴェイン〔vain（英）〕な人間が一座の中にいると一座は明るくなる（笑）。ヴェインな人間っていうのは、例えばいばり屋ですよ、名声の好きな人間。

鶴見太：ま相当、すれた意見です。

鶴見：そういうのが仲間の中にあるとなんとなく一座が明るくなる。私はこれはモラリストとしての非常に簡明な見事な表現だと思いますね。たしかに、非転向のじいっとした人間が5、6人集まったら一座は明るくないですよ。自分について謙遜して、自分の業績を誇



ることなく。ただあいつをやっつけてやった、あいつより俺の方が偉いなんて言う奴がいると、一座は明るくなる。

横尾：(笑)

鶴見：ね、親父にしてはこれは名言だなと思うんです。だからそういうものとして私は親父を見るようになってきた。それは転向研が出てからこれで何年になるのかなあ、60年

鶴見太：いやいや50年

鶴見：もうほとんど半世紀だ。

横尾：そうですね、半世紀ですね。

鶴見：親父に対するまなざしは変わった。

### \* 「転向芸」というとらえ方、母との合奏

横尾：ご自身の生き方はその後。

鶴見太：難しい質問ですね。

鶴見：私はわりあいにかたくなに貫いたと思うけど、例えば、1942年以來アメリカに戻ってない。ま、そういうことは、生きてるうちはけっして戻らないと思う。向うからの誘いはあった。だけど、行くことによって失うものも多と思った。自分の中で崩れていくもの。だからいくらかたくなに過ぎたと思う。だからたとえば転向研の中でね、若いメンバーで後藤宏行、いるでしょ。彼は一冊本出しましたがね。あの、転向研進行中に出した、あれ『陥没の世代』の中で出ている概念はね、転向する能力っていう概念なんですよ。転向する能力を能力として評価する。それは当時のわれわれからするとそういう考えはメンバーの中では、少数派だったと思うね、だけど後藤宏行のその概念の出し方は面白いと思う。今になればそう思う。

横尾：あの・・・

鶴見：結局いろんなことをやりたいと思ったけど転向の共同研究っていうのが私としての最大の仕事だったんじゃない？また思想の科学の数あるサークルの中でこれがピークだと思う。

横尾：あの〔書いて提示〕どのような、鶴見さんにとってどのような場でしたか。

鶴見：人生そのものをね、いくらかユーモラスな考えとしてとらえていくと、転向もそれぞれ芸をしているんだと、思うようになったかな(笑)。で私はあんまりその芸が上手じゃないんだ。自分の人生に転向芸を生かすってほうじゃあないと思う。だから森毅でいえば、鶴見さんとぼくと似てんだけども鶴見さんはなぜ日本から追放されるようになったかっていうと愛嬌がなかったからだよ。だから森毅も似たような仕方で高校から北大の助手まで行ってそこからいっぺん禄を失って京大に拾われたわけでしょ。いつも彼には愛嬌があるんだよ。だから私には愛嬌が足りなかったんじゃないかな。

横尾：(笑)でもそれでよかったですと思われませんか、転向芸が身につかなくて。

鶴見：転向ってのはまず近代以後の日本のインテリのトレイト、特性ですね。それを

## 資料1：鶴見俊輔氏インタビュー

きり出した。それが依然として日本の大学出のインテリには分かってないんだ。それは残念だけど、その特性をはっきりピンでとめたって意味では仕事になったんじゃないか、と思うんです。だけどもっと愛嬌のある言い方があったんじゃないかなあ（笑）。

横尾：うーん。

鶴見：だから私の親父に対してもガチンコで対してうちを出ちゃったんだけど、もう少し愛嬌があればよかったなあ、と思うんですよ。だから考えてみると私は自分を、おふくろとの合奏として自分を考えるんです。おふくろは生真面目な人で、正義だけを要求した。でもそれと合奏しているから私はバカ殿様にならないで済んだ。

鶴見太：合奏って合い奏でるってほうです。

横尾：はい。

鶴見：だからおふくろとの合奏が自分の人生だったって気がする。

横尾：調子を合わせたということですか。

鶴見：え？

横尾：お母様の調子と合わせたということですか。

鶴見：うん、そう。全然違うように見えて。

横山：結果としてそうなったのではないですか、合わせようという意味はない

鶴見：ほとんど自分の分身のようにして寄り添って生きたって感じ。つまり

横山：（床の間のかけ軸を指す）

横尾：そうですね、私も先ほど、かけていらっしゃるんだなあ。

鶴見太：ま、これ新年でちょっとおめでたい言葉なんで（笑）。

横尾：あー。

横山：元旦吉書、書き初めですね。

横尾：私あまりくずし字を読むのが得意でないんですけど、最初の字はあれは。

鶴見：「鶴は舞う、千年の木、亀は遊ぶ、万才の池」。これはねえ、考えてみると女性に言えることだと思うんですよ。男は孤独だと思う。一種のはぐれ雲だと思う。女はああいうふうな千年の木、万才の池に、というイメージを抱けるんじゃないかなって気がする。だから親父に対してもう少し親切にしてやればよかったなあっていう、ユーモアを含めたイメージを今は持っていますね。それは転向を書いた時には思いもよらないことだった。

横尾：それは書いてから何年をしてから気付いたことですか。

鶴見：つい近ごろ。それはね、河合隼雄もう死んじゃったんだけど、河合隼雄の本が文庫本になって出ているでしょ。あれを読んでいるうちにだんだんに、河合隼雄と話をしている気分があって、彼がつくった私の新しいまなざしなんです。だから京都に来て私に影響を与えたのははじめに梅棹、あとは河合隼雄なんですけど、河合隼雄は死んでも私の中で動いてんですよ。

## \* 「実感」と歴史、しまねきよしの役割

横山：そろそろワインドアップした方がいいんじゃない？

鶴見太：そうですね、ちょっと疲れて。

横尾：そうですね、それじゃ最後のところだけ。今河合さんて出ましたけど、あの後藤さんとかがおっしゃってた「実感主義」っていうの今どういうふうに。

鶴見：つまり最年少の人間も自分の実感としての転向というものをとらえることができたんですよ。それが転向研究の成果だったと思いますね。だから今の若い人も実感として、江戸時代の後期に非常に大きな変動があってこれで新しい日本を作らなくちゃいけないというように変わってっただしよ、あれをとらえることができるんじゃないかと思うんです。できると思う。だけど、まあ、新聞記者や何かが書いてるのを見ると、少ないね。ことに新聞記者は大きなかたまりとして、スパンでとらえること出来ないんじゃないかな。幕末から今までを考えると200年のスパンでとらえなきゃあ。いま明治維新以後でとらえるでしょ、あれじゃ駄目だと思う。だけど200年のスパンでとらえなければ、明治維新という日本文化の中で非常に重大な変化、変革というものをとらえる史眼というものは出てこないんじゃないかな。

横山：お茶をどうぞ。

鶴見：だから、われわれの中から、藤田、高島、しまね、しまねがなぜ重要かっていうとね、実は私が「今日日大の図書館長と会うよ」、しまねに言ったんですよ。ああそれじゃあ、転向の裁判長をやった宮城裁判長が亡くなって、その未亡人が政治家になったのがいるの、その文献を日大に寄付したって聞いている、それを探してくれと。でしまねに言われて、私は別の用事で行ったんだけど、図書館長と会った時に「こういうことがあると聞いているんですが」、「あります」って。で自分で図書館長が地下室に案内してくれたの。と、バアアアっと、転向調書の山があったんですよ、自筆、それは検事に誘導されたものなんだけど。こういうものが眠ってるんですよ。私は大変に驚いた。それで帰って転向研の仲間と言って、何人かが日大に通ってそれを見る手はずを、許可を私がもらっといたの。これは使われています。例えば一つ覚えてんのはね、高田保って人がいたんだ。自分が転向するってその理由はね、自分は妻を愛する、自分は妻との生活を楽しまたい、きちんと転向調書に書いてんですよ。そんなのもうたつくさんある中で、高田保ひとつだね、ぶらりひょうたん。だからそういうことは、通った中で発見するわけ。だからしまねの役割ってのは非常に大きいんです。そういうその、なんだか知らないけど彼は小学生中学生から、外語一つなんだけど、外語の仏文科なんですよ。ところがね（笑）、バートランド・ラッセルの訳に彼入っていますよ、英語もできるんだ、つまり学校秀才なんだ。だから文献について非常に詳しく知っている。だから今のしまねがいなければ、この『転向』の中巻下巻の、ことにあとでね、資料的な裏付け、資料固めできなかったと思う。非常に大きな役割を果たしている。

だから昔の実感に戻るものが歴史家の能力、優れた歴史家の能力の一部なの。実感として

## 資料 1 : 鶴見俊輔氏インタビュー

はこうあったらどうかな、だけどそれは、優れた小説を書くのも同じじゃないの？トルストイはナポレオン戦争を経験した人じゃないですよ。彼の祖先にはボルコンスキーなんかいたんだけど、トルストイ自身はセバストポリの戦いは経験しているけど、ナポレオン戦争を経験したわけじゃない。だけどああいう『戦争と平和』というのは、そういうものだ。今小田実の『河』っていうのを読んで、3巻ものの2巻の終わりまで来ているんだけど、小田もそういう能力持っている。あれ、関東大震災のなか始まるんですか。そして2巻の中国革命、これは小田が経験したことじゃない。小田にはそういう能力ある。

横尾：そうすると鶴見さんはずっと実感主義、ずうっと実感ていうの大切なものだと。

鶴見：実感をイマジナティブなものにしていって、使うっていうか生かすってことですね。それが歴史家の秘密なの。条件だと思う。

### \* 埴谷と丸山が共有した種

横尾：実感と行動はどうですか、行動、アクションとの関係は。

鶴見：実感と行動を切ってしまうってやり方が、埴谷雄高のやり方。丸山真男は、実感をイマジナティブに使う。しかも2人の共有した種は同じ1つの種なんです。中学生としては不良で、新宿の名画座に行ったら（笑）「カリガリ博士」っていう映画やってたの。それを、台詞をつけたのは徳川夢声なんだ。

鶴見太：活弁の時代ですね。

鶴見：あれは徳川夢声は府立一中卒業して一高を受けて落第したんだ。

鶴見太：いや徳川夢声じゃないでしょ、丸山さんでしょ。徳川夢声？

鶴見：徳川夢声は府立一中出て、一高落第したんだ。だからドイツ語できないんだ（笑）。せいぜい府立一中の英語だけだ。でそれがドイツ語の脚本渡されたの。それが黒川の、黒川じゃない、「カリガリ博士」なんです。でそれを試写室で見てんの。分からないなりに自分で脚本書いた（笑）、台詞を。で、出て来て真っ暗になった中で誰か女が殺される。「人ごろし〜」て大きな声でぶわあ〜と響きわたるんですよ。それに不良中学生で、中学生は映画見ちゃいけないことになってたんだけど、埴谷雄高は見てた。丸山真男も見てた（笑）。もう、魂を締めつけられるような、体験だったの。だから丸山真男は座談会でそのことに触れている。「天才徳川夢声」って言ってんだよ（笑）。天才って言葉は、丸山は高島にだって使わないよ。「これは秀才だから」って言ったの。

鶴見太：なんか声色まで使っているんですよ、その座談会では（笑）。

横尾：あ、そうですか。

鶴見：だから「人ごろし〜」ての暗闇の中で。それが、一方でそれから共産黨員になってファシズムと闘う埴谷、をつかまえ、一方でファシズム研究者として、それをファシズムの中でずうっと見つめていた丸山真男。不思議なことがあったわけ。だからそれ、それは実感でしょ。新宿の名画座で、行っちゃいけない映画を見に、2人の中学生が、それぞれ打ち合わせも何もなくお互い知らず、見てた。でその実感が、その後の彼らの人生に生かさ

れた。丸山真男のほうは座談会に出てくる。「天才徳川夢声」って書いてんだよ（大笑）。

**\* 吉本に及ばず、島木論及ばず**

鶴見太：じゃ、ひとまずこのあたりで。

横尾：はい、そうですね、時間が。

鶴見：いや何か、脱線したと思って。聞き直すことありませんか。

横尾：あの、先ほど言いかけられた、吉本隆明。

鶴見：あ、吉本。吉本の転向論が出た時は驚いたねえ。一人であれだけのことをやるんだから。であの時私の実感はね、われわれ転向研から、中野重治の転向を扱う人を出さなくてよかった（笑）。ものすごい見劣りするもんね、たぶん、誰がやっても。われわれの中でいえば、おそらく力があるのは藤田と高島なんだけれども、両方とも及ばず。吉本に及ばず。高島は大河内論、大河内の転向ではものすごい傑作ですよ、あれは。藤田の場合にはあの序説3回ってのは非常な傑作です。だけど、吉本の転向論てのは（笑）、違う方法でぐうっと入ってるね。ああ、われわれが扱わなくてよかったと。

もう一つ、今になって扱えばよかったと思うのは島木健作だな。

鶴見太：島木はあるじゃないですか（笑）。

横尾：あの、西崎さん。

鶴見：及ばず。

鶴見太：あ、そうですか（笑）。

鶴見：今のもう少し成熟した目で考えれば島木ももっとちゃんとかけたと思う。だって島木を読んで感激したからこそ、佐久〔総合〕病院てのできたんですよ。

鶴見太：えと、若月俊一でしたか、あの戦後ずうーっと長野県の佐久病院、地域医療の。

鶴見：東大の医学部の医局にいた彼が、島木を読んで感激して、「生活の探究」ですね。佐久に行って、農民の病気を診断する、その運動を起した。そういうことを含めた島木論は、できるはずだ。ことに「黒猫」と「赤蛙」、この2つを織り込んだ島木論ができれば。「黒猫」と「赤蛙」と転向とどういう関係があんのと、そういうふうに考えちゃあ、だめなんだ。やっぱりイマジナティブに、その、心の底の通路ってものをちゃんととらえられれば、もっと優れた島木論ができるはずだ。今になって思う。私は島木愛読してたんだけど、当時それだけの知恵はなかった。

**\* 下巻**

鶴見：今となっては一番貴重なのは下巻ですね。これは手に入れる必要があると思う。今日申し上げた特ダネがここで使われているっていうこと。

横尾：そうですね。

鶴見：だからほんとに、目利きの人がいたら下巻だけ買っちゃうとかいうのが（笑）いいんじゃないかな。



\* 現代と転向、転向研究

横尾：例えば私たちのような年代のものが『転向』をテキストにして、先ほど言われた島木の場合のような、書き直していくってような試み、してもよろしいですか。

鶴見：それは新しいジェネレーションのイマジナティブな力を持って人がそういうふう  
に考えれば、たしかに今は総転向の時代なんですよ。つまり、これはパブリックフィギュア  
の転向だけ扱ったんですが、国家の枠に入った日本人が、明治以後、日露戦争の時から  
できちゃって、それがアメリカに負けた後も

横山：ここに書いたんですよ。

横尾：あ、ありがとうございます。

鶴見：アメリカに負けた後も国家に、を、鋳型を作られた型として今も残っている。したがって  
転向は起っている。ただ、当時と違って、さらに気付かれなくなっている。実感が薄  
れている。だからそういうことを揺すぶり出す力を持っているリーダーがいれば、歴史  
としての転向は書ける。

横尾：そうですね、はい。

\* 永井柳太郎への差し替え、加藤陽子の尾崎秀実論

鶴見：そうだな、永井道雄が私に言ったんですよ。私が送り返されてくる12月いちじつな  
んだけど、そのすぐ後に永井柳太郎は死んだんです。そばには永井道雄しかいなかったん  
です。で彼はこう言ったんだって。「ぼくの一生は失敗だった、君に言い残すことは何もな  
い」。私はそれを永井道雄から聞いて、柳太郎ってのはえらい奴だなあって思った。だから  
堺枯川〔利彦〕が亡くなった時もちゃんと葬儀に大臣として行っているんですよ、議  
会で問題になってる。そういう聞いたことも、聞いたもんだから私は『転向』のなかで差  
替えたんです、永井柳太郎のところ。尾崎秀実については加藤陽子がいま書いてるのは新  
しい知見を含んでいる。今の『en-taxi』で見ると、加藤陽子がいい線いってる。

横山：『en-taxi』のグラビアページの座談会〔加藤陽子、佐藤優、福田和也「新シリーズ、歴  
史からの伝言、1：尾崎秀実から再考する：『東アジア共同体』という“視線”』〔en-taxi〕(28)〕。

横尾：ああ。

横山：うん、メンバーが

鶴見：だから今から考えてみると、転向する能力ってのはあるんじゃないかって言った後  
藤宏行が言ったことは、一つやっぱり、一本取ってるな。私は一本取られたと思う。

横尾：『陥没の世代』で

鶴見：え？

横尾：『陥没の世代』で言われてましたか。

鶴見：そう。いや、その中、あれの思想ですね。とにかく歴史はメモワールじゃないんで  
す、回顧録じゃない。そこにいなかった人間が書くんです。それ感心しましたよ、その、  
加藤陽子が入ってる座談会。



横山：今出ているやつです。

鶴見太：最新の『en-taxi』ですね。

横山：これ季刊だけ。

鶴見太：そのはずです。

#### \* 除名なし、ゲーアナルシスト

鶴見：こないだの早稲田の会〔『思想の科学』はまだ続く：『思想の科学』五十年史三部作 完結記念公開シンポジウム 2009-10-24〕でも私が司会者に頼んどいたんですよ。私を指さないでくれ、だから（笑）終わりの打ち上げの時に、短いのはちゃんと書いておいたんだ。つまり64年間1度も除名したことがない。

横尾：そうですね。

鶴見：それを続けてほしい、それだけなんだ。だけどそれは、かなり微妙な、精神の流れなんです。除名する癖っていうのは、何か原理的なものがあるって超状況的な原理を信仰していて、それを自分が体験しているとゆう思い上がりがあるって初めて除名する。そして、やがて除名で済まなくなると、ぶっ殺しが始まる、内ゲバですね。それからなんとかして、思想の科学を、そこから免れるようにしたいと思って、今のところ免れている。で、その源流は何かって言うと、武谷三男なんです。つまり、『世界文化』っていう京都にあったしゅう〔集（団）〕、ものを、武谷三男がそれを体現している。あれは別にソビエトロシアのスターリン主義がつくったものじゃないんです。まったく自発的に京都につくった、京都自前の人民戦線なんです。だから内部での内ゲバみたいなものが起らない。それを、思想の科学も継いでるんだ。だけどそれを自覚的に継いでるかっていうと（笑）そこがあやしいねえ（笑）。

横尾：（笑）

鶴見：今の思想の科学の中に、もう目利きは乏しいんじゃないかな。元（もと）つくったのは初めは7人ですけども、7人の中に目利きがいた。それは武谷三男、都留重人、渡辺慧、丸山真男。ことに渡辺慧っていうのは私を啓発したんですね。それは、私はフランス語はよくしないんですけども、ゲーアナルシスト〔gout anarchiste〕って言葉があって、つまりアナ気質、アナ気質の人間っていうものは（笑）、なんか、決ったこととは別のことをいいたくなるんですよ。その気分が集団のなかに保たれていれば、内ゲバは起らない。

鶴見太：その主義とか主張ではなくてもっと気質の段階でアナキストというのがあるんだという。

横尾：あー。

鶴見：だからアナキズムという思想体系というのは不可能だと私は思ってる。あるのは、ありうるのはアナ気質、ゲーアナルキスト。で、その意味では渡辺慧は非常に大きなものを私に残したと思う。

横尾：それは好奇心と似た、好奇心気質。

## 資料1：鶴見俊輔氏インタビュー

鶴見：彼は全体としてそうですね、彼は共産党に対してものすごい反感持ってんですよ（笑）。あまり悪く書くんでは岩波の『思想』がボツにしちゃったんだ。

横尾：あの「アンパニウス」って。

鶴見：アンパニウスだ。〔参考：渡辺慧「原子党宣言」『中央公論』1948-2〕

横山：そう。

鶴見：あれ学習院の小学校なんだけど、アンパンってあだ名だったの。

横山：（笑）

鶴見：それで、だから。

横尾：アンパニウスはかく語りきと（笑）。

鶴見：だから初めの7人。ことにその中の4人に目利きがいた。今思想の科学の会員は100人ちょっといるんですけど、その中に目利きはいるのか？私は疑いを持っています。だから、あの日、1回だけ発言したのはそのことなんですよ。

横尾：除名はしませんと。

鶴見：そしたらあそこに出てこない人で、伝え聞いてちゃんと手紙書いてくれた人がいたね。それは大竹しのぶっていう山脈の系統の。

横山：大竹つとむ〔勉〕ではないの。

横尾：勉さん、土浦に住んでいらっしゃる。

鶴見：そうそう。そしてそれを受け取ってるんですね。ふたりになっても除名しない。

横山：（笑）

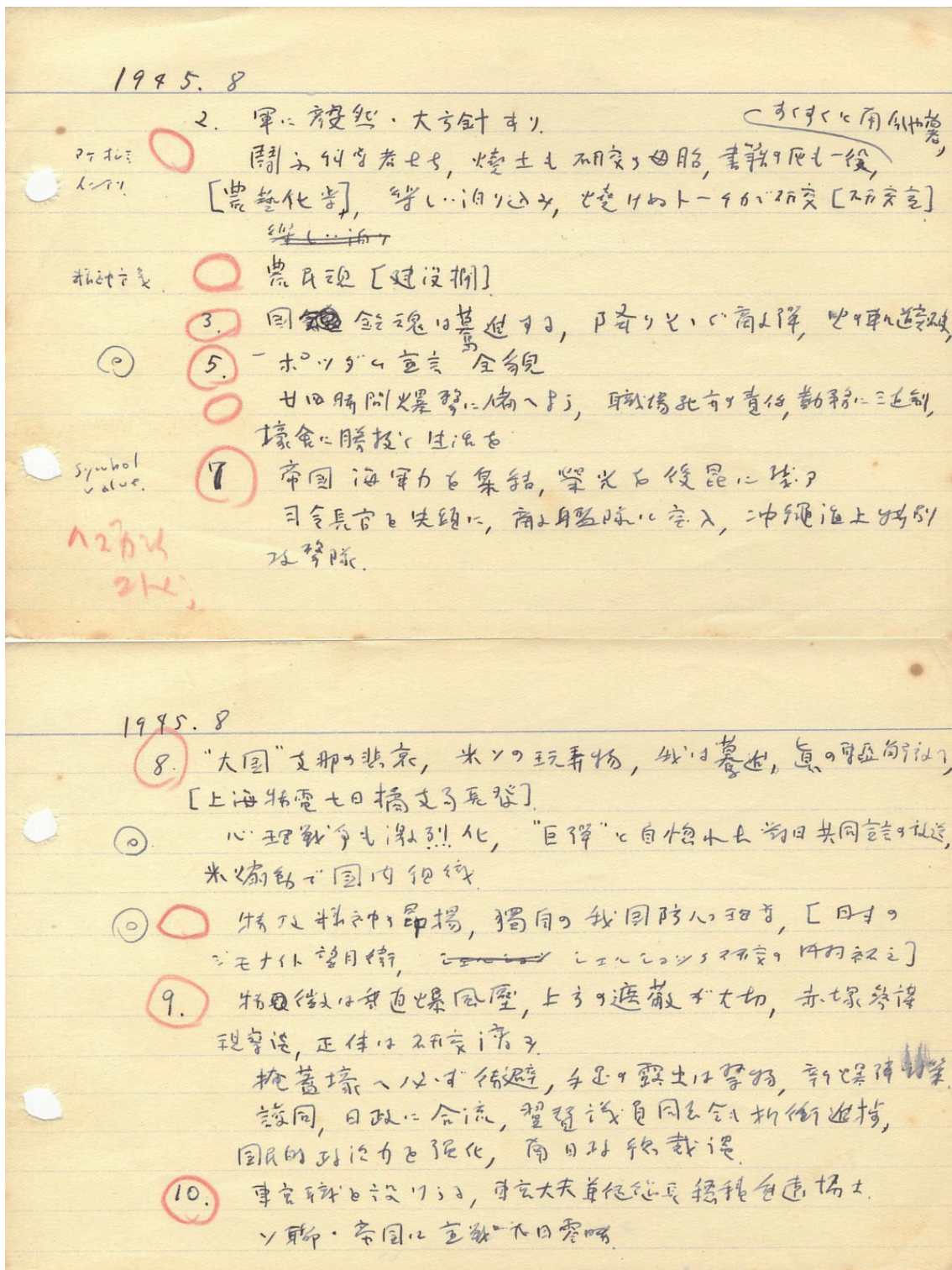
鶴見：ふたりっていうのは（笑）あの7人のなかのもやいを考えれば、私の姉と私なんですよ（笑）。彼女が私を除名したらひとりになる（笑）。

横尾：鶴見さんは除名したいなっていう衝動をもったことありますか。この何十年かの中で、どうしても。

鶴見：私は除名動議をしたことないです。ただ、あれが運動が大きくなるとね、私はオリジンはブルジョア出身でしょ、だからああいう奴っていうのが、あったんですよ、何度も。

鶴見：いや、今日はよくいらっしゃいました。

横尾：どうもありがとうございました。



カード（山領健二氏所蔵）

写真は鶴見の担当箇所、1945年8月2日～10日の『毎日新聞』からの抜き書き。年表作成に生かされるとともに、1945年8月～9月分は久野収との共著『現代日本の思想』（岩波書店、1956年）185頁～188頁にも使われている。



## 鶴見俊輔さんへの質問

### ① モチーフの発生から研究の始動まで

- ・ 転向研究のモチーフは父親で、ジャカルタの海軍武官府にいらしたときに「目次がぱっと浮かんだ」と発言されています。具体的にどのような場面、どのような気持ちから発想が湧いてきたのですか。
- ・ 戦中の左翼運動に限らず幕末、明治から戦中の自由主義も含めて戦後まで、さらに世界史まで視野におさめた普遍的な「転向」概念はいつ頃からどのように芽生え、育ったのですか。

### ② 共同研究のスタイルと共同性

- ・ 新聞や雑誌を読む段階で「京大カード」を使ったとのことですが、京大人文研の経験はご自分が共同研究を行う上でどのように影響しましたか。
- ・ 転向研と人文研で共同研究のスタイルに違いはあると思いますか。あるいは違うものにしよという気概はありましたか。
- ・ 人文研での経験以外に生かされた経験や知見はありましたか。アメリカ流のチーム・サーヴェイなどは念頭にありましたか。
- ・ 費用は平凡社以外からは出なかったということですが、アカデミズムの内部でやらないことにこだわりはありましたか。
- ・ 転向研究は最初から個人でなく共同でやろうと思っていたのですか。共同でやることの意義はどのようなところにあつたと思いますか。
- ・ ご自分より 10 歳ほど若い方々との共同の中でどのようなことを得たと思いますか。また秋山清さん、久野収さん、古在由重さんから年長の方々の参加・協力についてはどのような感想をお持ちですか。
- ・ 若い人が多く当初学生だった人も職業持ちになっていくなど「異集団」「複合集団」ともいふべき転向研において、年長者・責任者としてサークル維持のために工夫したことはありますか。
- ・ 同じ年代の判沢さん、安田さんはどのような役割を担ったと思いますか。

### ③ 『転向』を出すまで

- ・ 報告はガリ刷りで残したそうですが書籍化の意図は最初からありましたか。
- ・ 在野のアカデミズムの成果である『転向』中の論文はスタイルもレベルも著者によって様々です。一冊の中での配置やバランスにつき配慮されましたか。
- ・ 平凡社の鈴木均さんはどのような役割を果たしたのですか。
- ・ 藤田省三さんが入られた経緯を教えてください。『転向』における藤田論文の意義をどのようにお考えですか。
- ・ 中・下巻をつくる際にも上巻のとき同様、週一度の会合は続いたのですか。

- ・ 秋山清さん、橋川文三さんなど中・下巻でのライター補充は依頼によるのですか。下巻で参加されたという白鳥邦夫さん<sup>v</sup>には論文はありませんがどのような参加の仕方だったのですか。

#### ④ 評価と影響

- ・ 鶴見さんは「戦争責任の問題」<sup>vi</sup>で戦争責任を世代論として追及せず、かつ過去の責任の究明を未来の行動計画へとつなげようとしています。このような観点から『転向』をご自身でどのように評価しますか。
- ・ 当初 2000 部出せばいいと思ったのが全 3 巻で 10 万部売れたといっています<sup>vii</sup>。この数字の開きを当時どのように受け止め、現在考えていらっしゃいますか。
- ・ 『転向』の特徴や意義はどこにあると思いますか。近代文学や吉本隆明など他の転向研究と比べてどのような相違や共通性があると思いますか。
- ・ 転向研の活動と論文執筆はその後のご自身の生き方や研究にどのように投影されていると思いますか。

以下は転向研究そのものについてではありませんが関連してお聞きします。

よろしければお答え下さい。

- ・ 鶴見さんは一般的な区分では「戦中派」ですが<sup>viii</sup>ご自分では 1956 年時点で「第一次戦後派（戦中派）」であり「第二次戦後派（純粋アプレゲール）」とあわせて「戦後派」に区分されています<sup>ix</sup>。その意図はどこにあったのですか。現在はどのようにお考えですか。
- ・ 転向研活動中の 1957～8 年ごろ、鶴見さんは大人の生活綴方の方法として後藤宏行さんや加藤秀俊さんが主張されていた「実感主義」、そこに潜む行動の契機を重視します<sup>x</sup>。戦後派の実感主義への期待は転向研における若い世代との共同とも関連がありますか。

#### 追加質問（2010/1/10 メールにて送付）

##### ④について

- ・ 転向研究をやった意義を現在の時点からどのように考えていますか。
- ・ 『転向』以後、転向という問題とその研究に対する考えや問題意識の変化はありましたか。

<sup>i</sup> 鶴見俊輔・思想の科学五十年史の会『源流から未来へ』（思想の科学社 2005）77 頁；鶴見俊輔・上野千鶴子・小熊英二『戦争が遺したもの』（新曜社 2004）242 頁；「特別企画・鶴見俊輔と占領期雑誌ジャーナリズム」『インテリジェンス』第 7 号（紀伊國屋書店 2006）15 頁

<sup>ii</sup> 「転向研究のプラン」『思想の科学会報』7 号（1954. 12. 1）10 頁

<sup>iii</sup> 鶴見・五十年史の会前掲書 193 頁

<sup>iv</sup> 鶴見・上野・小熊前掲書 243 頁

<sup>v</sup> 鶴見・五十年史の会前掲書 166 頁

<sup>vi</sup> 「戦争責任の問題」『思想の科学』1959. 1

<sup>vii</sup> 鶴見・上野・小熊前掲書 242 頁

<sup>viii</sup> 例えば小熊英二『〈民主〉と〈愛国〉』（新曜社 2002）599 頁

<sup>ix</sup> 久野収・鶴見俊輔『現代日本の思想』（岩波新書 1956）190 頁

<sup>x</sup> 例えば久野収・鶴見俊輔・藤田省三「大衆の思想」『中央公論』1958. 7

## 石井紀子氏インタビュー第1回

時と場所：2009年11月20日13:00-15:00、思想の科学社（新宿区百人町）

同席者：山領健二氏、余川典子氏

山領：（鶴見俊輔氏から石井氏へのハガキを音読）

「おたよりありがとうございます。山領さんと協力して転向研の歴史をのこされること、とてもうれしいです。あのグループの八年は、私にとって、思いつきの場であり、生涯忘れることがありません。共産党の細胞をきゅうくつに感じていた藤田省三にとって思わぬ自由の賜物で、そのために三巻をつづけて、当時までの彼の最高の作品をもらえたのです。満二十才の高島通敏の二つの論文は彼の将来を予告する仕事でした。この仕事の実現を祈ります。二〇〇九年十一月一二日 鶴見俊輔」

石井：若い方から転向の研究をやりたいという申し出があつてそれが始まりますという報告をしました。このシンポジウムと同時並行でもないんですが、去年の暮れまでに世界的な視点から見た転向研究についての小さい集会を横浜でやりたいというお考えがあつたんですよ。というのは私が歩けないから、きっと彼女は横浜なら大丈夫かなということで、それで考えてほしいというレターがきました。山領さんとどうしようかって言っていたんだけど、シンポジウムのことが進んできたんで、あれはなしでいいですよと横山さんを通じておっしゃったんですね。それでほっとしました。だけど、そういう視点だけじゃなくて、若い人がなぜ今転向の研究を見直してみたいと考えているのかを中心にやれますよ（本当は鶴見さんに聞き書きとりたいと言いたいんだけど、それプレッシャーになると悪いと思ったから）、そういうことは可能だと私は思いますと、鶴見さんに書き送りました。その返事なのね。

### \* 転向研の特色（持ち味）とは

石井：本日は一応ご参考までに手書きのメモ〔p.252 図1〕を作ったものですから、それを見ながら進めたいと思います。まずは冒頭で転向研究と転向研究グループについて話します。転向研究グループについてはすでに、増補改訂版の後ろの方〔M・N, S・T 1962.「転向研究グループについて」『共同研究, 転向, 下』平凡社〕に書いてありますし、会報の中でも鶴見さんは触れていますね〔鶴見俊輔 1956.「転向研究グループ」『思想の科学会報』(13), 10〕。だからそれを見ていただければわかると思いますが、鶴見さんにとっての転向の研究グループの意味というか、その特色というか、独自性について入る前に触れておきたいと思います。鶴見さんにとってはこのグループがたぶん、忘れ難いものだったと思うんですね。私が類推するにはそれまで鶴見さんは桑原さんのもとで、京大人文研において、さんざんアカデミックな共同研究というのをやってらしたわけですよ。カード式の記録



方法もそういうところで使った手法だと思うんですが、それとまったく違った形での研究のモデルをつくりたかったと思うんです。つまりアカデミズムの枠内でない一般の研究者というか一般の在野の人たちを入れた研究グループをつくりたかったんじゃないかなと思います。お若かったですからね。自分が描いたモデルづくりにそのエネルギーを注いだと思うし、転向というモチーフがすでにお父様の鶴見祐輔の、自由主義から大政翼賛会に至っていく、そういう過程について非常に怒りを持っていらしたわけですから、転向研究というのが、彼のモチーフになったんじゃないかと思います。

このグループの特徴としてはまず第1に、転向の経験者じゃなくて、戦時下で育ったけれどもそのことを知らない若い世代がどのようにそれを受けとめたか、でそれをどういうふうにつないでいくか、ニュートラルな視点での研究を望んだんだと思います。そういうことに希望を持つことができるのかどうか。

2番目には、3分の1が大学所属の専門的研究者、3分の2が職場にいる副業的な研究者です。これは8年目に21人のメンバーが参加した中で戦中派が7名、戦後派が13名、戦前派が1名という混成チームでした。グループのまとめのところ〔M・N, S・T前掲文〕で、この混成チームをやっていくにはとても大変だというような事を書かれているんですね。それぞれどれくらい時間を割けるかが違うので大学人と職業人との共同研究は難しい。しかし、大学所属の研究者のみからなる集団によって同時代の転向研究がなされるということの逆説を、私たちはいくぶんかつきくずすことができた、ということを書いていらっしゃるわけね。私なんかこの生原稿〔「有馬頼寧」、資料2参照〕は出て来たんですが、これを本用書き直すことができなかつたのは、当時結婚と就職と全部が重なっている時期でした。山領さんもたぶん職場で相当大変な時期だったと思います。

山領：僕は組合の副委員長だったからね。

石井：だからね、そういう状態にあるわけですよ。3番目には新しい方法論とか仮説を立てて、知識のない若い世代をどうリードしていくか、そのリーダーとしての役割ですね。したがってアカデミックな研究者たちでは考えられないような遠足とか合宿とか（笑）、そういうゆとりも適宜加えて、いわゆるサークルとしての運営を鶴見さんは行ったと思うんです。それが3点目の特色だと思います。

それから4点目が、8年間の歳月の中で学生から職業人、結婚とかいろいろ人生の変化による出来事があって、それが最後までやれる人と私みたいに落伍する人とか、そういうものを許す寛容さ、これは鶴見さんがもともと持っていらした、思想の科学研究会が持っていたものだと思うんだけど、そういうものがあつた。あいつは原稿出さなかつたから除名だとか（笑）ということがない。

山領：僕なんか何回も除名だ。

石井：私なんて結局出せなくて安田武さんがリライトして下さったのですが、この間、私は落伍者なんだけども一番大きな顔していますねって（笑）鶴見さんへの手紙に書いたんですよ。

## 資料2-①：石井紀子氏インタビュー第1回

それから5点目は20年後に再度フォローしている。共同研究の成果に対して20年後にもう一回フォローしましょうなんてことは、転向という主題が主題だから、時代が変わることによって転向の定義も枠組みも違ってくるということはありませんけれども、それでもやはり20年後にきちっとフォローするということはありませんね。

山領：それは増補改訂のことですね。

石井：そうです。それで、私が類推した鶴見さんにとっての転向研究の意味というのは今挙げたような事じゃないかと思います。山領さんどう思う？

山領：伺っていて異論は全くない。

石井：分かりました。それでコピーをとってくださった〔メモの〕Ⅱのはじめ。

### \* 鶴見氏にサークル運営の見通しはあったか

山領：石井さんがおっしゃったことに何か今日には僕に出て来いということと言われたし、石井さんはほとんど報告を準備なさって横尾教授のところまでゼミが行われてるって感じ（笑）、僕は全然勉強してこない、普段から勉強してこない学生として参加すればいいって思っていたんですよ。そういう意味で、なんていうか、一つだけ加えればね、鶴見さんがサークルの中心だということ間違いはないし、普通の意味で「やろうよ」って言いだしっぺだったってことは間違いありません。誰から出てきたものでもない。鶴見さんの助手だった判沢さんが鶴見さんこれをやったらどうですかって助言したとかね、そういうことはたぶんない。鶴見さんが初めからやろうと思ったことをやろうと言って、それにみんなが賛成した形で集まってきたということだと思いますね。だから鶴見さんが中心だったことには間違いはないんだけど、ただ鶴見さんはサークルの運営についてね、見通しを持っていたかっていったらそれは全然ないから、サークルということについて言ったら鶴見さんは全くの試行錯誤、それまでの自分の経験はもちろん生きてしょうけれど、それは京都での経験だからね。京都でのサークルの経験というのが土台になっていると思う。それは何ていうか、研究の方法についても、それから人の組織についても、それまでの鶴見さんの広い意味での思想の科学の経験というものが、ほとんど鶴見さんには軍隊を除けば唯一の経験じゃないですか。あるいは小学校の時の経験というのはあったのかどうか分からない。小学校の時というのはお山の大将の一人でしょう。それからアウトサイダーでしょう。

石井：アメリカの大学生活の中ではどうなっていたかしら。

山領：アメリカの研究生活というものはやっぱり他の人からは孤立して勉強したんじゃないでしょうかねえ。

石井：猛烈に勉強したって書かれてありますね。

山領：書かれて残されているものから見ると、猛烈に勉強してそれによって認められていたんでしょうけれども、なんか人と一緒に楽しくグループをつくってやるというのは、あの時代だから日本人の社会の交際はあったと思いますけれどもね、それは他の人と協力し合って何かやるとか、仲良く楽しむなんてことはないんじゃないか。鶴見さんの、牛乳 1

本自分の下宿に置いてひたすら本を読んでいるって、そういう感じがしますね。そこへ FBI が入ってくるというようなそういうイメージは拭えない。ですからそういう生活があって、鶴見さんが基礎は思想の科学の経験が、京都であっただろう。もう一つ付け加えるとすればあとはフリーハンドで、東京の奴はどんな奴か分からないでしょう、ある意味では。もちろん出来上がっている人達は7人で組織していたんだけど、けどそれはちょっと立場が違いますからね。今度は若い人たちが東京で加わってくるという、それはある意味では初めてだと思う。だから最初の段階で、しかもね、始めたばかりでひと揺れあったわけですね、つまり自分自身のスキャンダルをでっち上げられて。だから全部やめちゃってもおかしくないという、人がいなくなってもおかしくないという状況だったのでしょうか。

山領：直前にですね、それが正月ぐらいに始まるのですから、すると11月ですから、初回会合が、2回やっただけじゃないかな、2回か3回やっただけだと。僕がはっきり記憶しているのは1回目は鶴見さんが「転向研究のプラン」を用意して。あれは鶴見さんの字じゃなかった、秘書の清水さんですね。それで鶴見さんがびっしり報告、というかオリエンテーションをやった。で毎回皆が順に引き受ける報告で、その報告は文字にして残そうという、つまりガリ版で刷って報告は残そうという話です。それで僕はなかなか大変だなあって思ったのを覚えています。

石井：だけどガリ版切るのあなたやっていたじゃない。

山領：そうそう。謄写版は僕やろうと思ったけれども、とにかく内容のあるものを報告するのがなかなか大変だなあって思った。

石井：そうよね、特徴としてそのことも付け加えないといけないわね。

山領：それから人で言うと、この人は僕も研究したいと思っているんだけど、加藤子明という人がいたんですよ。この人は非常に不思議な実力のあるライターで、たぶん結核だったと思うんだけどね。それで早く死んじゃった。登場の仕方がすごい面白いんですよ。トーマス・マンの翻訳で出てきた人なんです。『十誠』というのを翻訳したのね。それが最初の本じゃないかと思えます。

石井：その人がどう関わったの。

山領：加藤子明氏はおそらく宮城〔音弥〕さんのグループにいた人じゃなかったかな。

石井：その人が参加していたのね。

山領：そう。加藤さんが僕は師範代みたいな人だなあって思って見ていた。

横尾：転向研においてですか。

山領：そう転向研の第1回目の時ね。それで2回目も鶴見さんが報告したかもしれないんだけど、その終りに、ずっと鶴見さんに報告してもらったから、集まった人たちがどうして転向研に関心を持っているかということ報告しよう、それぞれ準備してこようって、そういう提案をしたんです。それについて鶴見さんはそうしてくれとも何とも言わなかったように思うけれども、そこにいる感じでは加藤子明さんはなんというか師範の代理風だ

## 資料2-①：石井紀子氏インタビュー第1回

ったな。

石井：でもいつの間にか消えちゃった。

山領：いや、それでもうそれが最後で来なかった。その日限りだった。だからその宿題についてはやってきたかというふうに言われずに済んでぼくは何もしなかったけれども（笑）。つまりそれでもう翌年まで休みになっちゃった。そして再開するからと言われて。だから鶴見さんの印刷物が2回出たと思う。最初のオリエンテーションは、プリントは、2回続けて鶴見さんが。

横尾：同じプリントで、ですか。

山領：いや、ひとつながりのもの。確かそうだったと思う。

横尾：あの会報に載っていた「転向研究のプラン」〔『思想の科学会報』(7), p.10〕は。

山領：いや、あれは要約ですからね、あれとほとんど内容は同じだけれども、しかしもっとレジュメ風に要点だけのものが2回出た。ガリ版で2枚か3枚ずつぐらいで出た。そういう風に記憶している。それがナンバー1とナンバー2になっていた。

石井：鶴見家に残っているかな。

山領：いや、それは佐貫〔惣悦〕さんとかね、引っ越しをあまりしていなかった人は持っているかも。事務局を60年代にやったのが失敗でね、会報とかそういうものをみんな会の事務局に寄付しちゃった。どうなったのか分からない。

石井：当時の配布物を佐貫さんに聞いてみよう。

山領：会の最初の方の会報を製本したのは僕なんですよ。とにかくね、鶴見さんは手探りだったと思う。サークルについては京都の経験がもたっていて手探りだったと思う。そういう意味では見通しなかった。

石井：見通しはなかったわね、だからいろんなこと考えたわけよ。

山領：だから石井さんがおっしゃったのはその通りなんですけれども、もう一面で言うとうどうなるか分かんない。それから、僕らに書かせようと思っているでしょ。研究させようと思っているけど僕らは全然何もやらなかったわけだから。毎回「何もやってありません」というようなことを言って。もしそうだったら鶴見さんは失望落胆して。

横尾：次の年の6月の会報には山領さんの亀井勝一郎の報告がかなりの形で出ていますが山領：それがだから間に一遍、会を続けるか続けないかということ聞かれるような状況があったわけです。退会するかしないということが確かめられることがあったんですから。総会があったりして。で落ち着いて、じゃあサークルを再開しましょうということになり、その時に判沢さんに「また始めますからあなた報告して下さいよ」って言われた。

横尾：思想の科学研究会がサンデー毎日事件で揺れたとき転向研自体もどうするかという。

山領：いや、そんなことはない。転向研をどうするかなんて相談した覚えはないよね。ただ石井さんと横山さんに呼び出されて会ったよね、今日みたいだ。「ちょっと来てよ」ってそういう感じでそれでどっかで会いましたね。それで、僕は別に研究会もやめる気はないし転向研究も続けるよというふうに話したような気がする。

ただ石井さんがよく整理して下さったのはその通りなんだけれども、もう片っぱ、一面で言う鶴見さんも海のものとも山のものとも最初は分からなかっただろう、というのは集めた人を鶴見さんは東大の哲学科には誰がいるから誰を呼ぼうとかね、政治学には高島君がいるから呼ぼうとかそういうことは全くない、誰についてもないんです。判沢さんだけでしょ、判沢さんは鶴見さんの助手になっているから当然参加したでしょうけれども、あとは全部、何行かの転向研究をやりますという会報の記事〔「東京の小グループ」『思想の科学会報』(5), p.4〕を見て来た人たちです。しかもしまねさんなんか大事な人の一人だけでも少し遅れて入って来た。何ヶ月か遅れて入って来た。僕はしまねさんが最初に来た時のことを覚えていますよ。

#### \* 思想の科学への入会と転向研への参加（質問項目2-①）

石井：思想の科学への私の入会とか転向研への参加というのはね、ここに書いてあるように十五年戦争の時流の中で育って、教育を受け、まあ大げさに言うと戦争体験ということだけど、体験として自覚するような年ではなかったですよ、けどまあ戦争体験に源を発していると言っていいでしょう。否応なく戦争、敗戦、復興という歴史の隅に生きていたということですね。そしてけっこう戦後の重要事件を目撃しているんですよ、たまたまね。ま、あとでお話しますけれども。克明な年譜が出来ないんで申し訳ないから、未完成なまま「歴史の残像」というか、安田常雄さんが使ったキーワードなんですけどね、要するに画像として映像として頭に残っているものね、そういうものを中心に辿ってみましょうということ。歴史の流れの隅に生きていたということは時代的にはね、軍国主義から一変して民主主義への大転換という歴史的なエポックのはざまに生きていたということです。言ってみれば思想の大変動ですよ、だから時代としては転向の季節と言っていいと思うんです。強制力によって転向するとか共産党の転向とかいうだけじゃなくて、時代全体のうねりとしてやっぱり転向の季節というか転向の時代というかそういう時代だったと思います。だけど私は小学校から女学校の時代ですからこういうことを問題意識をもってしっかりと受け止めたということではない。文献とか新聞とかを通して追体験することで初めて時代の事実を知ったわけですよ、学習体験ですよ、だから。転向研というのは学習体験というか、そういうことです。全く知らなかった時代の、こういうことがあったんだということを振り返ってみるということ。遡っていくという、小さい時から育ってきた時代というのをね、そういうのがまず冒頭にあると思います。思想の科学に入会することや転向研に参加することのそれが基本になっていると思うんですね。

#### 1 思想の科学、転向研に出会うまで

##### 1 - ① 戦時の生活と敗戦後の生活

##### \* 出生から

石井：全体の質問については簡単に『源流から未来へ』の中で私が語っています〔「討論,



## 資料2-①：石井紀子氏インタビュー第1回

『世界転向』以降の水位へ」鶴見俊輔編、『思想の科学』五十年史の会 2005. 『「思想の科学」五十年：源流から未来へ』思想の科学社、石井の発言は p.196-199)。あれを参考にして下さればいいと思うんですけども、少し細かく言いますと、思想の科学、転向研に出会うまで、まず「十五年戦争の中で育つ」というのがありますね。この表〔資料2参照〕は左に年が入っていて、真ん中に私のことが書いてあって、右の方に主要な時代的事件というのが補足して書いてあります。私は1932年1月30日、満州事変の翌年、上海事変の月、和歌山県の田辺市で生まれました。

山領：ああそうですか。

石井：父は検察官、検事ですね。母は旧熊本藩のご祐筆の娘、兄弟は兄3人姉2人の6人兄弟です。で、たまたまこの頃、南方熊楠が生きていたんですよ。私は満3歳までしかそこにいなかったから熊楠の記憶はありませんけれども、姉ははっきりと覚えています。

山領：これは驚くべき偶然だなあ。転向研は田辺の人がものすごくたくさんいるんだ。

石井：(笑) そうよね、でもこれとは結びつかないと思うんだけど。3才の記憶、1936年ですね、この時にはもう八王子に父が転勤していましたので、八王子の官舎の坂道を、兄がスキーに乗せて滑ってくれたんですね。その白い雪が鮮やかに残像として残っているんですが、それが2・26事件の日だったんです。すごい雪でしたから。

それで1938年、戦争とのかかわりでは、満7才の時、昭和13年6月24日ですね、一番上の兄は姫路高校から京大の法学部に入る頃で、私は母が43歳の子供だったので、すごく心配だって言ったら「僕がみるから大丈夫だよ」って言った兄が早々と戦死しちゃうんですよ。この兄の徴兵はのがれられた。叔父(母の兄)の大塚維精は貴族院議員でしたので、口を利けば学生として召集を免れるから、そういうことをしたらどうかと父に勧めたんだけど父は頑として、「検察官の子供にそういうことはさせられない」ということでした。その上中耳炎になったりして少し歳をくったんで徴兵にひっかかったんです。それで出征して戦死しちゃうんですね。

横尾：あの、お父上のお名前と伯父さまのお名前がちょっと。

石井：父は松尾元吉(明治12年生)です。伯父は大塚維精(明治17年生)です。この伯父は朝日の人物事典で出てくる。この人たちは熊本とか大分から村をあげてとかいうことで当時の東京帝国大学へ入学するわけです。だから郷土の榮譽をにない、志を立てて日本を背負うエリートの道をすすむ。父は図らずも東京帝国大学で鶴見祐輔さんと同年なんです。でいずれもみんな法学部や政治学部に入る、ということですね。で、ところがそのすごい厳格な父が、やっぱりこたえたんでしょうね、長男の死によって「人を裁けない」と検事を辞めたんですよ。そして公証人になるんです。東京の西田町に引っ越して、横浜の公証人として横浜にやってくる、で長いことここで公証人を務めるんですけど。だから私は今もって兄に会いに靖国神社に行くんですよ。今でもこの兄がね、ほんと生きてくれたらと毎日思うんですが、でもやっぱり時代がだめでしたね。あそこで生きてたとしても、そのあとの戦争で必ずや死んだと思うのね。戦争とかかわりがあったんですね。その間に片



一方ではもう自由主義者に対する弾圧とかそういうのが始まっていたわけです。1940年には父に連れられて紀元二千六百年式典に行ったんですが、もうそのあたりから大政翼賛会的なものが始まっているということがあります。

それで1943年、昭和18年に国民学校制というのが出来て、私はもともとは杉並の西田町というところに住んでいましたから、新設された西田小学校に5年6年ということで移るわけです。当時の記録をまとめたものがあります〔p.27 図2〕。夏には学校へとまりこむ集団合宿訓練がありました。

横尾：こういうのは疎開とはちがって宿泊訓練という。

石井：そうです。

山領：少年団で「殖民」とかというよね、宿泊訓練。

石井：穴を掘って土をもり上げアツツ島というの築いて、それでみんな竹槍持ったりしているでしょう。

横尾：ちょっと知らないですね。疎開はよくいわれますけれども宿泊訓練とか、殖民？

山領：少年団のね。

石井：小学校5、6年でね。こういう生活よ。

山領：石井さんの時代の方が、そういう意味では訓練は組織的だったんだ。僕らの頃は組織的計画的な行事がだんだんやれなくなっていた。

石井：そうですね。それでこれはクラスメートに作文をつのって、それで作ったんです。同級生の花崎皋平さんも書いています。

山領：北大の先生で、大学紛争のときに辞めた人でしょう。

石井：東大で唯物論研究会に入っていた。

山領：花崎さんというのは僕の高校では一年上にいた人です。

余川：この学校は今もずっとあるんですか。

石井：爆撃で焼けますが今もあります。

山領：〔花崎さんは〕病気でもしたのかなあ。ぼくより1年上だった。

石井：そうかな。昭和6年生れで6年と7年生れが同じクラス。

山領：そうか、ぼくらは7年と8年だから1年上なわけね。

石井：そう。ここに書いてあるように集団合宿とか、オリエンテーリング、行軍ね。例えば班に分かれて磁石を持って小学校の校舎から井の頭公園まで行けど。全部自分たちで考えてやらなきゃいけないわけ（笑）。

横尾：あれは今遊びになっていますけれども。

石井：そうじゃなくて訓練だった。

山領：あれはヨーロッパの少年団が起源でしょ。

石井：そうね。それからナチスの少年団、ヒットラーユーゲントの訓練。

山領：日本の少年団運動というのはね、ヒットラーユーゲントと手を握っているんだね。それで明治維新精神という古い少年団とけんかするようになる。なかなか複雑なんだ。

## 資料2-①：石井紀子氏インタビュー第1回

石井：それ以外に薙刀をやらされるとか、それから校庭を耕して麻を植えて麻の茎を浸して繊維を作るとか。

山領：一種の生活教育でしょ。

石井：そう生活教育。体験教育というか。

山領：集団体験だね。

石井：そういうのが5, 6年生の日課です。

山領：ぼくがもっとも恐れていたものだ。(笑) ぼくはなにしろ好き嫌いがあるんでさ、食べ物が、自分の好きなものしか食べないの。

横尾：こういうのは、じゃあ山領さんなんかは。

山領：ほんの1年ぐらいの違いですけど、そのくらい戦争が激変するんです。こういう贅沢なことはできない。

石井：贅沢よね、たしかに。

山領：うん、今でも子供達にこういうのをやったら人気が出るかもしれないでしょう。

石井：(笑)

山領：だからこういう物質的な豊かさがあればやれるんだけど、僕の頃は例えば柔道やるっていても柔道着がないとか。剣道やるっていても胴も籠手も何にもないからね、麻の寒い半袖の体操着を着て、受身の練習だけするんです、うちの学校は。畳の上で。

石井：まだ合宿でお米持ち寄って炊事するとかはできた時代だものね。

山領：それで僕らは空手みたいな、みぞおちを殴るといふのをやる、こうやってパッと(笑)。

余川：そんなに、なんか困窮されたというか、急激なんですね。

山領：そう、急激ですよ。石井さん時代とたった一年の違いで差が出て来る。

石井：合宿は父母がうちから蚊帳とか布団とか持ちこんでやったんですけどね。

山領：それは今ね、クラブ活動でやるのと一面は似ているからみんな喜んで付いていくんだよね。

石井：ちょっとこんなの初めてだから珍しいでしょ。

山領：制服がきれいだね。僕の時代は制服がどんどんだめになった。

石井：山本五十六が死んだときには代表でお家に弔問に行ったのよ。

一同：えー(笑)。

横尾：そういう時代、ですね。小さい子供もそういう。

余川：でも面白い。

石井：パソコンがうまい人がいてその人が全部版下作ってくれて。

山領：いや、もしかしたらそういう教育がそういうことに生きているのかもしれない。

石井：共同作業？

山領：共同作業というか少年団教育がね、逆に言うと今記録を作る力になっているかもしれない。

横尾：そうですね。この笑顔も笑いなさいと言われているわけではなくて。

石井：ないわよ、自然よ。笑えって言われているわけじゃないんだから。(笑)

横尾：行事ですね、今でいうと運動会とか。1年2年の差というのがそこはかなり影響しちゃったように。ただの遠足といえば遠足、合宿といえば合宿のような感じですよ。

山領：石井さんたちはだから集団疎開はしていないでしょう。

石井：うん、していない。

山領：ね、僕らは集団疎開をしたから、これを今度は24時間、年単位でもやるわけですよ。

石井：しかも食べるものがない中ね。

山領：そう、それはもうね、収容所と同じですから、勝手に出かけられないんですよ。一歩も外に出られないんですからね。そうするとね、今集まってもその時の話はあんまりしない。もっと小さい時の話はよくするけどね。

横尾：山領さんは疎開はどれくらい。

山領：僕は半年だけです、6年生だから。だからまだいいんです。だけどそれより若い、ぼくよりちょっと若い世代は

石井：ゆりはじめさんとかね。

山領：そう、1年半とかね、つまり戦争終わってすぐ帰ってこれないから。僕は戦争中の3月にもう帰ってこないと中学に入らなくちゃいけないでしょう。それで中学に入ったらもう要するに準戦力になるんだから、そこは早く6年生は戻さなくちゃいけない。

石井：工場とかね。

山領：大人扱いにしなくちゃいけない、それで子供ではいられない。子供でいた人はずっと10月まで引っ張られるから、ぼくよりも半年長いんです。それはだからそれが小学校2年生だったり3年生だったり4年生だったりしたら大変でしょう、小さいからね。

石井：戦時中の生活というのはそういうことですよ。さらにね、ここに書いてあるように昭和19年、1944年に都立武蔵高等女学校に入るわけです。最初はね、テニスコートがあったりして、わりにのんびりテニスをしていたんだけど次第に農作業や薙刀という時間が多くなるわけ、特に農作業ね、トウモロコシ作ったりとかいろいろな作物をつくった。武蔵境から歩いて15分くらいのところで、まだあの頃は武蔵野の面影が残っていて。

山領：畑ばかり。

石井：畑ばかりね。そこに新設された学校で、今は武蔵高校っていっていますけれどね。その当時からもう敵機は来ていましたからね、塹壕の中に避難しました。

山領：あの、中島飛行機があるから。

石井：そう、中島飛行場がすぐそばだから。

山領：中島飛行機の工場が。

石井：そうするともう、バンバンバンバンって高射砲が打ち上げられて、飛行機が落ちるのを見ましたから、そういう時代ですよ、まさに。もう勉強どころじゃなくなってくるわけ、だから農作業とか薙刀訓練とか。で今でも覚えているんだけど、アメリカ兵がパラシュートで降りてきたらそれに向けて薙刀や竹槍をこうやればいって言うのね(笑)。

## 資料2-①：石井紀子氏インタビュー第1回

山領：孫悟空並みだ。

一同：(笑)

石井：昭和20年3月15日の東京大空襲の時は西田町一丁目というところに住んでいたんだけど、ちょうど近衛さんが住んでいる荻外荘の裏手。

山領：荻外荘ね。

石井：荻外荘の裏手に田んぼがずっと広がっているんだけどそれを隔てたところに住んでいたんですよ。周りは大体農家が多いわけ。麦畑がもう一面に広がっているような、そういう所ですね。

山領：ぼくはそこを自転車で通学していた。

### \* 単身疎開から終戦へ

石井：ああそう。3月15日に東の空を見たら真っ赤なわけね、とにかく新宿あたりまでやられているわけだから。それで私はね、私ひとり生き残りたいと思ったの(笑)、なぜか知らないけれど、絶対生きのこるぞと。それとうちの父親が非常に厳格でしたから、もう家出したい、こんな家にいたくない。で、とにかく私は一人でどこでもいいから単身疎開するからと言った。それで米沢というのはたまたまうちの兄(次男)が米沢工専の時、元米沢藩の家老の家の下宿していた。そこは娘がいないし、お嬢さんをお預かりしましょうということになったんでしょうねえ。それでもものすごい雪が降った日に一人で、行ったことのない所へ行きました。その時は列車の窓から出入りした。

山領：そうそう。

石井：で乗ったらもうどこへも動けない。人がぎっしり詰めているわけだから。

横尾：疎開する人達で。

石井：そう。トイレ行くにも窓から出ないといけない。

山領：大体座席のこういうところに人が立っているんだ、こう坐っていればここには人が立っている、それはその時代の汽車のごく普通の、安定した風景。

横尾：それはやはり戦時だから、東京から地方へ向かって。

山領：東京から出て行く。僕は長野県、今度は6月くらいから往復するんですが、往復って時々東京に出てきたいと思って、なんだけどその行ったり帰ったりする時はね、戦中、戦後もそうですけれどもそういう混み方ですね、ほんとに。

石井：だからね、福島県境はとにかくジグザグジグザグ登っていくわけ。でやっとの思いで着いてみたらものすごい雪なのね、何年ぶりの大雪。ホームで初めて会ったこともない人と会うわけだから。

山領：それは大変ですね。

石井：なんであんな勇気があったんだろう。絶対にこのうちは出てやるという気持ちで行った。そこは老夫婦二人で、立派な蔵があるすごいお家です。裏に畑がある、米沢藩は家老といえどもちゃんと自分でね、自給できるような暮らし方です。いろんな木も植わって

いるし、畠もあるしというそういう所へ行ったわけ。雪の上歩くというのは大変なのよね、(笑)慣れないと歩けないの、怖いんですよ、カンカンに凍っているわけだからね。春になるとしよいこを背負って山に入っているいろんな山菜を摘んだりする。私は6人兄弟の末で姉が2人いましたし、お手伝いさんもいたから、うちの事なんかしたこともないわけね。高等女学校のお裁縫、姉が全部やってくれていたし(笑)何にもできない子どもだったわけよ。だけどそこ行ったら全部自分でやらなきゃいけないわけ。お米研ぐことから何から。とくに農村への勤労働員があつて、吾妻山目指して1時間半ぐらい歩いて行くんですよ。農家のところへ行って、夏の麦の草とりって辛い、麦の毛がチクチクチクチクこう刺さるわけ、それを取るわけね。それからお蚕もやりました。もう田んぼもやった、何でもやったわ。そしてこんな大きな握り飯が出るのね(笑)。

山領：そうそう、農家の握り飯というのはうまい。

石井：そういう体験をやりましたから、もう何があつても生きていけると(笑)、疎開は私にとり生きていくことの自立の第一歩ですよ。

横尾：13歳ですね、まだ。13歳になったばかり。

石井：そうね、45年ってことは、生年が32年だから、13、4歳だね。

横尾：やっぱり東京にいても動員、農作業とかあつたんでしょうか。

石井：東京に残った人達は中島飛行機とか軍事工場に動員された。

山領：石井さんの世代まではね、工場に動員された。それからね、工場動員はもう1年上の世代まではそうでしたけれども、石井さんと同じ学年の、僕らのすぐ上の花崎皋平さんなんかは時には駅前の家を引き倒す、金づち1本をね、ここへ入れて登校するんですよ。

石井：そう、縄をかけてね。

山領：そう、それを引っ張る。

横尾：それは延焼を避ける。

山領：そう、延焼を避けるために駅前の広場がたいていあるでしょ、中央線なんかはずうっと。あれはどこもこの時にできた。もともとは駅の近くまで家があつたんです。

石井：そう、家が密集していた。

山領：それを壊したのはあの時だ。それはもう総動員法だか何だかとにかく命令一つでやれるわけですから。

横尾：それは補償はあんまり。

山領：補償はしたでしょうけれどね、いくらかは。とにかく、僕は小学校6年くらいで覚えていたけれども高円寺の町の通りがずーっとね、もう壊される予定のところの人が出て、家具とかガラス戸とか戸障子とか外してみんな売っているわけ。

石井：ああ(笑)そう。

山領：そう、あらゆる売れる物はみんな売っちゃおうという。そういう時期があつた。

石井：そうですね、ほんとにそういう時期ですね。

余川：1944年の後半ぐらいから。

## 資料2-①：石井紀子氏インタビュー第1回

山領：1945年から夏にかけてぐらいですね、変わってくるのは。

石井：それでね、最後にやったのはね、何しろね、だだっ広い平地が多いわけでしょ、だから川から小石を担いで、飛行場づくりですよ。われわれがしょいこで小石を背負って来るわけ（笑）。それでそれを土の上にはばらまくわけ。そうすると住民の人たちが石のローラーを縄で引っ張って地ならしをする。

山領：運動会で使っていたようなやつだね。

石井：それで飛行場づくりというのをやらされた。でも飛行場ができる前に終戦になった。今でもね、川の側を歩いていると、のびるとか食べれる草というのが分かるわけ。だからね、スーパーの棚からなんか無くなっても、あれがあるから食べれるわ、生きていけるわという自信がある。

山領：とにかく昭和18年くらいからね、給食は僕なんかは給食に出たのはたんぼぼの味噌汁と、それからその頃はクジラがあつてね、サイコロのようなクジラの脂が浮いたたんぼぼの味噌汁ってのはうまいよ。

石井：（笑）肝油飲まされたり。

山領：そう、肝油はありましたね、あの頃。そう、考えてみると、だから石井さんの話を聞いていると僕は一年ずれているけどほとんど同じことをやっていますね。

石井：そういうことで私にとってはね、自分で何でもやっていけるという、こういう戦時体験がなければ戦後の生き方がなかった。

余川：そうですね、お嬢様で終わって。

石井：お嬢様とかまあ（笑）オンバ日傘でおわっちゃったわね。それで5月にね、私の母校の西田小学校が焼けるんですよ。どうしてかというと兵隊用の宿舎になっていた。それでね、私は帰って見に行つて驚いたんだけど、焼けているのは小学校とそのまん前の2軒の農家だけで周りは全く焼けていない。爆弾は的確にそこだけしか落ちていない。もちろん西田の小学校を焼く前に2カ所ぐらい焼けていますが、的確にそこだけしか落ちていないの。これはびっくりしましたよ、残像としても今でもその光景が残っている。

山領：むしろ焼け残った地域ですよ、全体としては。

石井：だって空襲なんてない所だもの。

山領：そう、あの辺は焼け残った地域なんで、それは例外的に焼かれちゃったんですね。

石井：例外というか狙いが的確なのよ。

余川：そこだけは燃やしておこうって思って（笑）。

石井：当時の「ニューヨークタイムズ」を見るとすごく克明な空襲の日付と場所が個別個別に分るそうです。

横尾：一軒一軒どこに何があるかというのが。

石井：だからすごいスパイ活動とか諜報活動していたんでしょうね。ところで日本は「撃ちてしままん」とか言って、戦争始めたんだけどどう終わらせるかなんて全く考えてない戦をやったわけです。8月6日に広島に原爆が落ち、伯父（大塚維精）は中国総監



として赴任していたけれども殉職したんです。広島一大きい家ってのが官舎になっていたため、ものすごい太い柱の下敷きになった。

山領：大黒柱だ。

石井：伯父は出勤するんで車に乗ろうとして、ハンカチを忘れたって取りに入った時にやられた。だからその梁の下で、火が燃えるまで生き残っていたのよ。伯母や従弟2人は廊下とかわりに屋根が軽い所にいたのよ、3人で梁を持ち上げようとしても持ち上げられず、黒い布に火がつき、伯父が「逃げろ」と言う、目の前にしてのがれた。それで、とにかく生き残ったんですよ。私が看取った姉は、九州の方にお嫁に行っていたんだけど、旦那が軍医で召集されて、おしゅうとさんと二人連れて唐津の方に疎開していたんだけど、あんまりひどいんで窓からね、帯をたらして逃げ出した（笑）。それで汽車に乗って広島伯父の所に寄ったわけ。そしたら伯父が危ないよと、とにかく危ないから早く立てと言って、それで命が助かったの。

山領：立てというのは東京へ帰れと？

石井：うん、東京の実家に帰ってきたわけよ。その翌年、伯母を預かりました。伯母たちは幸い川につかたりして地獄のような中をのがれ海軍病院に収容された。実際ああいう体験した人たちというのは全くこのことを語らなかった。

余川：語れないよね。

石井：ひどくて語れないのよ。だから語れるというのはそんなにひどい目にあわなかったか、だから語り始めたのは相当後になってからですよ。

余川：今やとですものね、60年経ってから。

横尾：8月15日にはあれ〔敗戦の詔勅〕をお聴きになったんですか。

石井：何を言っているのかよく聞こえないのよ。

横尾：それは一応ラジオの前に集まって。

石井：一応ね集まったんだけど聞き取れないのね。何しろ暑くてセミの声が今も耳に残っています。まあ終わったということは分ったのよね。それで9月に女学校に戻るんですけどね。その時に私が戦争体験で得たことは「見ざる聞かざる言わざる」の結末とはこういうことなんだと、それから西田小学校の焼跡からは日本の情報がいかに欠如していたか、だから情報が重要なんだなということ、さらにやっぱり自立しなくてはならないということです。アンシャンレジームが全部崩れるわけだから、新円切り替えでお金の価値もなくなって、今までたくさん蓄えていたものなんか全然役に立たないじゃないかというわけ、だから、とにかく自分の身に何かつけるしかないということです。ある意味で敗戦は女性にとっては自立するきっかけを与えられた（笑）。

横尾：チャンスだった。

石井：敗戦とか戦争とかというのは、ちょっと余談になりますが、とにかくそれまではお嫁さんはうちから一步も出られないような生活でしたが、男はどんどん戦争に行っちゃうんだから隣組にしろ何にしろ女が出て行かなきゃならない。そういう意味では女が初めて、

## 資料2-①：石井紀子氏インタビュー第1回

自分の家の外の世界を知ったということがあるわけね。職場だってそうじゃない、チンチン電車も運転しなくてはならない。だからそういう点で戦争によって男がいなくなったという意味は大きいですよ。女の人が家から外に出て行かざるを得ない。隣組の防火訓練ですと言えば、おしゅうとさんだって出ちゃいけないって言えないもん（笑）。

山領：それにやっぱり食料を女性が握っていたのは強い。

石井：そう、強いね。

山領：そりゃあお父さんはこれだけよというのがちゃんと言えるわけだから。

一同：（笑）

山領：それはすごい大事なことで、実際食べ物は手に入らないんですよ、その普通のルートでね。つまり秩序がちゃんとある時は、要するに男性秩序でしょ。だけど別のルートからいろいろと物を手に入れないと生活ができないんですからね。それは日常の生活の実力がないとダメでしょ。

横尾：石井さんのお父様は戦争中はもう公証人で横浜で事務所を構えて、兵隊にとられなくて済んだ、行かなくて済んだわけですね。

石井：だってそういう世代だよ、明治12年生れだもの。

山領：転向研の若い方の僕たちぐらいの世代というのはみんなそうですよ。父親が兵隊に行かされるにはもう年をとりすぎている。

横尾：むしろ自分の方がゆくゆくは行くという。

山領：そうね、もうすぐ行くという年ごろでしょうね。それからまだ行くにはちょっと間があっても、僕みたいにね、次の戦力。

石井：うちの次男なんかは鉄道関係技術者だからそんなにすぐには引っ張られないけど、最終的には相模原の軍隊に丙だか乙だか知らないけど入隊しました。塹壕掘っているうちに終戦になっちゃったから外に行かずに済んだけれども。三男の兄は外国へ出たいという人だったから、いち早く亜細亜大学の前身のところ入って、それでシンガポールに出ていました。

横尾：それでお帰りになって。

石井：それでそのあと学徒出陣になって飛行機乗りになり霞ヶ浦に入隊しましたが、生き残りました。

余川：『転向』で書かれていたけど大野力さんが陸軍の学校にいらしたんですよ。だからあれくらいの年代で。

山領：陸士でしょ。

余川：陸士であの方が上の方ですよ、年齢的には。だから戦争体験ってそういう感じ。

山領：まあ大正生まれが動員の対象でしょうね。鶴見さんが23歳でしょ、戦争終わったとき。

余川：本当に女性は、そういう意味で言うと外に出ていなかったんですよ。

石井：だからこの戦争というのは女性にとっては女性の解放とか社会進出の点で大きいことなのよ。

山領：とくに都市の女性の人ですよ。

石井：そうですね、農村はちょっとね、違いました。

山領：それで第一、高等女学校を卒業して、今の高2ぐらいですけれども、結婚するまでというのはうちにいたわけでしょう、基本的に。

石井：そうそう、家事見習いというのね。

山領：それは中等教育を受けているのは一種特権階級だけれども、とにかく中等教育を受けた人がうちにいて、家事を見習う、母親から、というのが許されなくなった。つまりそれはみんな働きに行かされた。

横尾：山領さんは敗戦は、以前伺った時に解放感があったとおっしゃいましたが。

山領：それはありました。ぼくはともかくなんていうか子供の時からすごい勝手な人間で（笑）。攻撃的に勝手ではないんだけど絶対に自分が嫌なことはしないという我儘があるもんだから、それがもう本当にね、辛かった。解放感はありました。8月15日には長野県に行っていたから。農村の暮らしも辛かったですよ。

石井：私、解放感というのとはちょっと違ったなあ。

山領：ずいぶん僕は知っていることを黙っているとかはたくさんあったんですよ、それは。

石井：（笑）

山領：それから集団疎開したんでね、家族と切れたんです。集団疎開していた時は自分の家はいない間に焼けちゃうと思っていたんで、そうするともう親にもはぐれるしね。これはもう世の中で誰を頼りにして生きていくかというのは本気で考えたんですよ。誰か頼りにするつもりでいたけれど、結局僕はね、疎開先の寮母さんのところへ行こうという考えだった（笑）。でもう、うちに帰った時には母親との関係が少し変わっていた。つまり逆に言うて行くまでは母親にすごい甘えていた、末っ子だったんでね。母親と離れたね（笑）。

石井：（笑）母親離れね。

山領：というのはね、母親は僕を見送りに来れなかったんですよ、それはどうしてかというとな、僕が集団疎開に行く日というのが姉の結婚式だったの。それで僕は結婚式に出たいって言ったら学校からそんなことは許されないって言われた。で、一人で行ったでしょ。朝行っといでって学校へ家を出てそれっきり帰ることは許されないのですからね。だから、もうこれはね、うちはとても頼りにならない。

余川：なるほど。

山領：もうこれはだめだと思った。

横尾：自立をするチャンスだった。おうちはそのときどちらでしたか。

山領：杉並です。さっき言った西田小学校のわりあい近く。それで僕は今の都立西高校ですから。当時の第十中学校という。そこを選んだのはうちに歩いて帰れるからという。歩いて一時間くらいね、子どもの足で。自転車だと20分くらい。

石井：西田のどのあたり？

山領：西田の五日市街道あるでしょ、あれをバーっと走って行くともう西高校の所行くん

## 資料2-①：石井紀子氏インタビュー第1回

です。だからあの辺の麦畑の所うまく突っ切る、杉並区役所の裏行くと早いです。いくつも道があつてね。石井さんの行つた学校は僕は知っていますし、あの辺は景色が今でも目に浮かびます。

石井：ええ、麦畑ばかりでね。

山領：そう、麦畑ばかり。ほんとに、杉並の中でも農村地帯。近郊農家みたいな。

石井：そうですね、割に大きな農家があつた。

山領：僕の学校も畑の真ん中に建つた学校ですからね。だからほんとに杉並から向うは完全、武蔵高校もそうですね、畑の中。武蔵境なんか両側、北側はいくらか開けていて南側は完全に駅まで畑。第一、南口はなかつた、未開発で。北側は青梅街道や五日市街道なんかがあるから発達していた。

石井：あの駅の前自転屋さんへ日本の飛行機が落ちたのよ。

余川：山領さんの行かれた小学校はなんていう小学校だったんですか。

山領：僕ですか、豊島師範学校附属小学校という学校で、九州から帰つてきて東京のことは詳しくない僕の母親が、親戚に強くすすめられて、僕は突然そこを受けなきゃならなかつた。でうまく落つこつただけでね、くじ引きで入つた、補欠だったもんだから。

余川：そこから通つてらしたんですか。

山領：通つた。だから電車も大変でしたよ。混んでてね。学校の帰りにはうちに帰るのに寄り道して帰るつてのはずいぶん楽しんだ平和な時期もありましたけれどね。

横尾：疎開先はどちらでしたか。

山領：集団疎開はね、これも石井さんが行つていた武蔵高校からそう遠くないひばりが丘つてのが今ありますけど、あれのちょっとそば、東久留米市です。そこに、師範学校の錬成施設があつて、そこが要するに神棚があつてね、30畳ぐらいの広い畳の部屋があつた。もっとあつたかな、50畳ぐらいあるのかな。ともかく100人の小学生がね、布団を並べて寝るんですよ。それで朝起きると廊下にその蒲団を積むんです。そういう風な暮らしを半年やつたの。6年生だから遠くに行かないですぐ帰つてこれるように。

石井：そうかそうか、中学だからね。

山領：そう、それで経費もかからないのかな、あれ、学校の施設でしたから。で逆に言うと温泉旅館みたいな所に行つた人はもうちょっと違つた環境にあつたんでしょうね。錬成施設に、こう、半年暮らすつてね。僕のいた錬成施設は畑が付いているんですよ。畑作りの訓練するような。だから農業しながらその広間で授業を受ける。つてやつて、まあろくすつぽ何にも勉強しなかつたですねえ。だから野球なんかやつたりしていたからね。

余川：そういう所は風呂とかそういうのはどうなるんですか。

山領：風呂は大きな風呂があつて、その風呂に要するに片っぱしから入る、集団で入る。

余川：で、ごはんもちゃんと作ってくれる人がいて。

山領：そうです。まかないの人が、村の人が雇われて来ていて。でその人たちが『キング』なんて雑誌を持っているわけね、でそういうのを借りて読むというのが楽しみでね、唯一

の。というのはみんなが持っている本はお互いに貸し借りして半年いるとあきちゃうんですよね。で、江戸川乱歩なんていうのはなかなか勢力がないと手に入らなくてね。僕なんか伏せ字を読んでやるというので貸してもらえたこともありました（笑）。

石井：昔から読んでいたんだ（笑）。

余川：ほんとね（笑）、今も。

横尾：解読者。あともう一点。長野はどういったご関係のお方が。

山領：ああそれはね、僕の叔父の部下の人が、その村の有力者の息子で、その人のお母さんが探してくれた農家の蚕室です。蚕室で二階はごそごそ蚕が桑の葉をたべている、一階がこれぐらいの部屋、この隅に台所があるの。で台所って高くないんですよ、この床より低いんですよ、流しが切ってあって。でそこに窓がちょっとあってね、でそこから庭から水が引いてある、でそれが水道のように一応なってて、おばあさんがそこに一人で住む隠居所ってしていたんだけどもそこを空けてくれて、僕の祖母と僕の2人で暮らす。で母は疎開できないわけですよ、つまり防空消火のために東京の家は空っぽにはできないから。空家にしたらもう接收されちゃうわけですね。焼けた人が東京たくさんいるわけで、僕のうちはもとは大家族だったから土建会社が入っていましたよ。で昔の座敷には工務部とか、茶の間には営業部とかちゃんと表札があった。

一同：あー。

横尾：エンジニアのお父様は。

山領：僕の父は要するに東京の本社から飛ばされて、1939年から45年まで中国で、出先の工場へ行かされていた。それで中国の工業地帯で日本軍に接收された工場があって、軍管理の工場の技師をさせられていた。のちに日中の合弁会社をつくって、それで合弁会社の工場長をしていたらしい。だから6年間、僕は小学生の頃は父が家にいなかった。で時々帰ってくる。

石井：敗戦前に帰っていらっしやっただの。

山領：いや、敗戦前年のね、1944年の12月が誕生日で、昔は誕生日で定年になるわけですね、その時55歳でね。ところが船がなくて帰れないんですね、簡単には。で結局延び延びになってね、翌年の敗戦の年の6月に、ようやく帰って来た。

石井：じゃあ危ないところだったわね。

山領：ええ、それで退職金をもらってね、これから退職金で悠々と暮らそうと思ったらそれがインフレーションでたちまち十分の一とか百分の一に。

石井：（笑）ダメになっちゃった。

山領：そうなんちゃってもう食えなくなったでしょ。で戦後もう一回働いたわけですよ。77歳ぐらいまで。敗戦直後には石鹼を自分で作って売るということを考えた。ある日「できた」って言って石鹼ができたんだよ、粉石鹼が。それで（笑）僕は立ち会って見ましたけどね、洗濯だらいいになんかカチカチのものができてね、でカチカチのものを金槌で砕いてすりこぎで粉にして。でそれを篩にかけてふるって、袋に詰めてね、1袋10円とか20



## 資料2-①：石井紀子氏インタビュー第1回

円とかで売る。ひっきりなしによその人が来てそれを買って行く。それでね、いくらで売っても構わないから自分の腕一つで転売する闇市商法ですね。でこっちは10円とか12円とか卸しでお金が入って来るわけですね。現金商売ですからね。インフレ時代にそれは成功してね。もちろん営業は会社で退職前に同じころ退職した人がやってくれて、父親はもっぱら品物をつくる、工場長兼労働者でね。で僕なんかそれを助けて暮らしていた（笑）。  
石井：なるほどねえ。

山領：僕は父を尊敬したね、あらためて。大学ノートを持ってきてね、毎日開いて見てたんですよ、多分、明治末年の学生の時のだね。で、なんかそれが役に立ったみたいね。原料はもとの会社に卸してもらったんです。それはほんとにしばらく暮らしを支えたんですよ、5年くらい。いや、僕の話はもうこれくらいで、で今石井さんのお話を伺っていて思ったのは、要するに今の石井さんの話から10年経っていないんですよ、転向研始めたのが。ね、1954年ですから大体10年後ぐらいでしょ、石井さんが女学校に入ってから。僕でいえば小学校卒業して10年目ぐらいに転向研は始まったんだよ、ね。

### \* 敗戦後の生活——新制高校から大学へ

横尾：敗戦からの時期のことを伺ってよろしいでしょうか。

石井：1945年から49年、女学校から新制高校に切り替わるわけですが、だから私が新制高校の第1期生なんですよ。その時は女学校で卒業してもいいし、もう1年いて新制高校で出ますかという選択ができたんです。でとにかく、45年9月に武蔵高女へ復学したんですね。でそれが最後の女学校なんです。だからクラスメートの半分くらいは女学校で卒業した。私のところは女子校でしたから教師がね、昨日まで「撃ちてしやまん」なんて言っていたのに急にね、いきなり民主主義ですなんていう豹変は表面的には見えなかった、もちろん教科書は全部墨塗りですからね。だけど私の小学校のクラスメートの男子の人に聞いたら男子校はもうあからさまにその日を境に教師がくるっと変わったというのね。教練教えていた奴が事務員なってヘコヘコしていたって、そう言っていました。そういうことはないけれどもともかく、旧体制が崩れていく状態ですから。とくに食糧危機の中で姉にくつついて、着物を持って千葉へ買い出しに行ったりしました。親切にしてくれる男性なんかもいて、今考えてみれば、小平事件なんてあの頃あったんだから、ね、怖い話でした。千葉から買ってきたお芋をふかして、姉たちが乳母車に乗せて売ってみたりとか、いろんなことやりましたよ。それで、私たちはアメリカからの配給のウィンナーやさけ缶の缶詰とかで暮らしていたわけだから。

山領：配給は食べるものは何でもめちゃくちゃに配給された。つまり米の代わりに砂糖が配給されるとかね。つまりある意味では上等な物が突然来たりね。

石井：だけど肝心の米とかそういうのがない。

山領：そう、肝心の腹がいっぱいになる物はないという。そういう状況があったんじゃないかな。僕は長野県にいて、東京の友達が様子を知らせて来てくれるもんで、様子は少し



は分かりましたけれどね。敗戦になって砂糖がばっと配給になったというハガキをもらったんだ。共同通信の記者になっているけどもね、そいつは。ともかくそういう風だったんじゃないですかねえ。

横尾：そうするともう闇市をやらなきゃいけないような状態なわけですね。

山領：それはもうそうです。ともかく現物経済ですよ、基本的に。

横尾：物々交換していかなきゃいけないわけですし。

石井：そう、それでね、配給だけでやった人は山口判事のように飢え死にしてしまった。

横尾：彼はそういう闇市はやらないという正直さで。

石井：そう、闇物資はやらないという。

山領：それからやれないという人がいるでしょ。つまりね、物が手に入る方法を知らない人はね、とつてもきつかった。ただ敗戦後はね、要するに闇市に行けば物はある。あとはお金の問題。これ給与生活者というのはお金のほうが、インフレーションというのはほんとに大変でしたからね、今インフレーションなんかあったら年金生活者は大変なことになる。

石井：墨塗り教科書を使った教育を受けたわけですよ。でまあ懸命にひもじい中をかくぐって勉強した。ただね、すばらしかったのは学徒出陣で帰って来た学生たちが教師として教えて下さった。たとえば一橋の大学院にすすんだ縫田清二。

山領：縫田清二。

石井：キブツの研究家で有名な縫田清二。

山領：ああ、僕のところにも来たよ、縫田さん。

石井：それで私が初めて西洋史にめざめた。

山領：ダブルの背広着ていた。

石井：そうなの、すごくハンサムな人だった、それで海軍にいたからコートもすてきなコート着ていた。

山領：僕は高校の時フランス語をはじめて教わったんです。非常勤講師で見えた。

石井：縫田先生から夏の宿題で思想家を取り上げるという課題が出た。〔武蔵境〕駅前に中森書店という共産党系の書店だったんだけど、たまたまそこで日本評論社の文庫でロシアのチェルヌイシェフスキーという思想家の著作を手にしたのね、それを書いて出したんです。それが縫田さんの目にとまって、それでこういう研究もなかなかいんじゃないって言われたり。それから畑中良輔なんて有名な声楽家が声楽を教えていたんですよ。また梅崎春生の弟さんが美術を教えるとか。あとから名を成す人たちが若かりし時に、教育していたわけ。とくに私は東大のサンデースクール、今でいえば学習塾みたいなもんね、みんな学徒出陣で帰って来た学生たちが、糧を得なきゃならないんだから、始めたのね。授業は25番教室とか東大の中の教室でやったわけ。そこで宮沢賢治の詩を教え、サマセット・モームの作品を読ませる、ヘレニズムとヘブライズムの講義やパスカルなど、知的好奇心をくすぐるすごい教育を始めたんですよ。それで高校に行くよりも私はそこに通いつめ高校

## 資料2-①：石井紀子氏インタビュー第1回

で問題になったり（笑）。

横尾：それは何年くらい。

石井：それは高校1、2年ね。

山領：高1ぐらいの頃。

石井：そう、それでそのあと、だって女学校と1年で卒業になったんだから。授業以外にコーラスはある音楽はある、バレーボールもやってみたりとか、部活的なものもあった。

横尾：すごい活動的ですね。

石井：それでそこでみんな大学受けたわけですよ。

山領：1948年とか9年ぐらいですよ。

石井：そう、昭和24年。

山領：24年ですねちょうど。

石井：（笑）いや夢中で学んだね。でその後、それを持続して、例えばパスカルを読む会とかそういうのをずっと続けていましたね。駿台予備校で有名な先生も出だし、寺沢とか外交官になった人とかいろいろな人が輩出しましたよ。

横尾：夢中にやったというのはやはりその前の渴望感があったからですか。

石井：そうですよ、だってもうほんとにね、ひもじさの中なんだけど歴史とかそういうものに対する興味、新しいその学問を学びたいという興味、ほかに遊ぶことなかったから（笑）、物なんてなかったんだから本読むかそういう所に行くか、です。チェルヌイシェフスキーについて論文を書いたことが西洋史とか思想史とかというものに目を向けるきっかけになりました。

山領：縫田さんは何を教えていたんですか。

石井：だから課外で社会思想史。

山領：ああ、課外のやつだ、自由研究とかというのがあった。

石井：そう、あったでしょ。

山領：うん、そう。自由研究という科目を作ったことがあった。午後は2時間。

石井：そう、で夏に何か書けという。

山領：そう、それはあったね、先生が勝手なことやるという。僕はDNAというのはそのとき初めて習ったの（笑）。

石井：それ以外、三鷹の駅前で署名運動なんかも一生懸命やったりした。

山領：それはあれでしょ。都立が区立になるという。

石井：あ、それですか。

山領：うん、つまり中学校、小学校を、新制度になったときに区に移管するのに反対するという。

石井：そうだったっけ。

山領：うん、で都立のほうがえらいと思っているんだよね、僕たちも。で区立の中学というのをなんだかパツとしないと思っているもんだから、何だか大きいところの方が偉いと

思っているから、反対運動というのに動員されてね、やりましたね。それからあのコミュニティチェストというのをやらされたでしょ、赤十字の共同募金。

石井：あ、やったやった。

山領：ああいうので街頭に出る訓練にはなったね。

石井：でも初めて署名運動をやるんで大変で、私なんてその頃片一方で歌舞伎に夢中だったから、歌舞伎役者の本名をみんな書いちゃったりして（笑）。

山領：なんか高円寺の角でどなったの覚えていますね、区立移管に反対しますという。それで結局学校がどうなるのか分かんないんですよ、ぼくなんか。つまりね、旧製の制度がなくなるんじゃないかという。教育使節なんか来たりしてね、アメリカから。でそうすると入学試験なんかはうまい具合に逃げられるんじゃないかというのは僕はそう感じた。あの旧製の高等学校がね、なくなるんじゃないかという。

横尾：それが嫌だったのではなくて。

山領：嫌ですよ。つまり落ちるために受けるようなもんだもん、僕なんかはね。つまり自分が勉強していないことはよく知ってるから、必ず落ちると思っているわけね。僕は戦前の一高なんです、兄が一高生だった。一高を受けろという圧力があるわけでしょ、家族のね。でとてもそんなのには追い付かないことはもう小学校卒業以来分っているわけね。集団疎開以来勉強はまったくしていないんですから。世の中のどさくさの方がもう目を奪っててね、とにかく毎日が珍しいという感じがあって、ただそれだけなんですよね、僕なんかは。石井さんより1年低いですからね、精神年齢はもっと低いんだな（笑）。学校で起こること自体が面白いのはね、動いているからですね。つまり意外なことが毎日起こっている感じがあってね、それが面白かった。あのとにかく、興味本位でいうのはよくないんだけど、いきなり自殺する上級生が出るとかね。演劇少年だった人だけけど、ドラマチックなんだ。全校生徒が集まって校長先生の説教を聞いている時にね、この頃君たちはたるんでいるという、その時に先生が走ってきて耳打ちなんかする、すると急にさっと全体の空気が変わってね、何百人もいる、中庭の運動場で。で何だか分からないけど一応はかっこうだけついて解散になって、で何だろうって。しばらくすると上級生が自殺したそうだという話が伝わってくる。

横尾：それは哲学的な動機で？

山領：青酸カリ自殺なんだ。つまりね、こういうものが戦争中からずっと、あの何て言うかな、実は崩れているわけです、秩序が、戦中から。物の管理とか日本中がガタガタになっているわけでしょ。それで僕らのような未熟な者が危険に近づける条件がある。だから、何て言うかな、今とは全然違って今はお金があるからお金があれば小学生だってね、危険な物品が手に入るとかそういうことがあり得るわけだけれど、その当時だと反対でお金がなくても好奇心のあふれている中学1年生とか2年生とかが、ドキドキするような事がね、身近で日々起こるわけですよ。もう一方では今度は学校の名前が変わるそうとか。第十高等学校と称していたのが西高等学校と変わるわけですけどね、でそういう情報なん

## 資料2-①：石井紀子氏インタビュー第1回

か大きな新聞から入って来るよりも学校新聞なんかで横から情報が入ってくるわけですよ、意外なところから。試験がどうなるかとかね、そういう面白さがある不思議な時代だったんですね。

石井：そうね、確かに。

山領：だから積極的に外へ、今度は学校の外に出て行くと、石井さんのサンデースクールみたいに面白いものが外には沢山あるんですよ。知的な刺激に満ちたようなのもあれば、もっと別の誘惑もあってね。(笑)僕は中学2年くらいまで切手を集めていたんですけどね。戦後古い手紙がたくさん家にあるのを見つけて、その切手をみんな取るとずいぶんコレクションになって、それを大事にしていた時期があってね。切手屋というのがあるのを知って友だちと行くでしょ。それで「クラブ」というものがあることを知るのね、収集家の。でそれは安い会費を払えばすぐなれるので会員になるとね、会合があってね、出て行ってみるとね、あの、三井高陽とかね、三井財閥の、日本で一二を争う切手収集家が同じ席にいますよ。それで入札をするわけね、それでこんな箱に自分のいらぬ切手を入れて値段かなんか付けると、それを買う人が出てくるのね。で僕らも安い物買うんですけど買えるんですよ。買うだけじゃなくて初めて売り買いをする経験をした(笑)。

石井：学ぶということ以外に興味、私なんて歌舞伎に夢中になった。今から言えば3代ぐらい前の人たちだけど、歌舞伎の若手俳優たちが活躍しはじめたので、その会に出たり、また上演が禁止されていた「忠臣蔵」が解禁になったというので観に行くとか。片一方ではサンデースクールに行く。いろんなことの興味というか知的な好奇心が旺盛でした。

横尾：歌舞伎なんかは占領になって数年はダメだったんですか。

石井：仇討や切腹はダメだったの。それでそれが解禁になるんですよ、「忠臣蔵」が通しで可能になったのは割に早い時期よ。

山領：48年ぐらいからね。

石井：結局占領軍の中にそういうことについて知識のある人がいた。

山領：そうですね。

横尾：必ずしも軍国主義や家父長的でないものも。

石井：あの頃は占領軍による検閲がきびしく、切腹とかそういう言葉があれば全部ダメなのよ。『思想の科学』なんかもひっかかっているのね。押収された資料はプランゲ文庫として保存されています。

横尾：批判的に使ってもダメなんですね。

石井：言葉があれば全部ダメなの。

山領：そうでしょうねえ。キーワードを引っかけてるんですね。

石井：でもあれは驚いたな。壁新聞とか隣組の回覧版まで全部検閲している。

山領：それはね、すごいです。僕もね、見に行きましたけど、ワシントンまで。ほんとにすごいですね。

石井：実はね、49年7月15日三鷹事件を目撃するんです。どうしてかという武蔵境か

ら帰るのに電車が不通になってしまい、それで荻窪まで線路を歩いて帰らないといけないわけよ。それで通ったら、三鷹の構内に電車が転覆していて縄が張ってある。その横を通って帰ったんですよ。クラスメートの亀井さんのお父さんが殉職なされた。

山領：つまり轢かれたわけ？電車の暴走で。

石井：そうです。また太宰治が飛び込んだ桜上水は学校の側でした。

山領：三鷹の。

石井：でこのころ右傾化が始まって、下山事件、三鷹事件、松川事件と、松本清張の『日本の黒い霧』に書かれてる事件が全部続出しているわけですよ。三鷹事件は凶らずも電車が転覆したその日の午後にその現場を通って行ったわけ。

横尾：その頃の報道から事件の不可解さが気持ち悪いなってことは感じましたか。

石井：あんまり新聞に書かれてなかった気がする。

山領：ともかく新聞は全部共産党が悪いというか、とにかくあの当時は共産党陰謀説というのが全体の新聞のトーンですよ、あらゆることについて。僕はその頃新聞に対して批判的で、つまりそれに対してもずーっと批判を持っていた。

## 1-② 大学生生活

石井：1950年、昭和25年から29年が早稲田の大学時代ですね。これはレッドパージ反対と学生運動の季節です。実はね、私は聖心女子大学にも合格していたんです。で聖心の方が発表が先だった。科目は国立理系並みの試験ですが面白い試験でしたけどね（笑）。

横尾：ああ、全部やらないといけない。

石井：そう、それでちょっと余談なんだけれども面接はシスターが英語でやる面接でした、むこうのシスターですよ。それでちょうどその頃、寮を建設していたんです。だから入れば全寮制で、もう生活の中でアメリカ行かなくても訓練されるようになっていた。そういう時代でした。面白いのよだって、日曜日が2日目の試験だったのに、その中で信者の方いらっしやいますかって手を挙げさせて、信者の方今から御礼拝始めますと言って礼拝堂へ連れて行かれる。それで帰ってきてその人は別に時間をとって試験する、面白いねって思ったんだけど。受験には推薦がいるんですよ、で伯母がいろんな方を知っていて、でたまたまその推薦人が理事長さんだったのね。早稲田と両方に入っちゃった、どうしようと言ったら、姉があんた早稲田に行きたいんだったらこのお金持って早稲田へ走ったらって言うわけ。それでうちかえったらもう勘当もんだというわけで、理事長さんに平謝りで謝った。

山領：横尾さんも勘当だ。

石井：学長さんに話したら、お嬢さんが行きたい方に行くのがいいですよってことで収まったんだけど。もう（笑）。早稲田に入ったら、事件がいろいろ起きて、まず朝鮮戦争が始まった。これは怖かった。

山領：そうですねえ、あれは怖かった。



## 資料2-①：石井紀子氏インタビュー第1回

石井：また戦争が始まるのかともすごい恐怖心があった。

山領：あったね。

石井：大学に入ってまず「イールズゴーホーム」という運動、アメリカからイールズという教授が来て日本全国の大学を演説して歩くわけです。これに反対した。とにかく前期試験のボイコット、行って見たらとにかくバァーッと教室の前の扉に、机を全部立ててバリケード築いてという。何を習いに来てんだか分かんない（笑）。その頃アメリカではここに書いてあるように「アスピリン・エージ」といわれマッカーシー旋風が吹きあれていて、のちに都留重人さんも議会に呼び出された。その結果レッドパージによって党员やシンパの人たちが各職場から追われたわけ。大学に入学するやいなや「イールズゴーホーム」、レッドパージ反対、連日座りこみですよ。それで試験ボイコットでしょ。教授のところの手分けしてこういうことで試験ボイコットしますからよろしくと説明に行くわけ。あちこち説いてまわるわけね。その座りこみの中に早大事件が起るのね。私は交替で帰ったんですが、どっちかという二部の学生が座りこんでる時間帯に、素手の学生にむかい警官が棍棒で殴りこんだわけです。翌日雨が降っていたんですけどね。

山領：6月30日。

石井：そう、雨の中に血がたまっているわけ。それを見て私は絶対に警官は許せないという怒りがこみ上げた。この当時の学生運動というのは純粋な学生運動だと言われた時期ですよ。しかしやっぱり一方で共産党员になった学生たちは、その中のコミンフォルムの対立にまきこまれた。それは国際派と・・・。

山領：主流派、所感派だ。

石井：そう。党员の学生は追放されたり、演説した委員長は退学処分になってある日突然いなくなる。当時は下駄ばきデパートだった東急百貨店の食品売り場で、委員長がアルバイトしているという光景があったわけですよ。

横尾：追放というのはどこから。

石井：大学から、停学処分、退学処分で追放される。私は歴研の会員でしたが、『資本論』読んだりなど輪読が中心でした。共産党员になっていれば全然別だったと思うのね。そうすれば絶対に巻き込まれたと思う。だけれど私は党员にはならなかったから、どっちかというまあノンポリでもないけれども学習には参加している。一番怖かったのは歴研で5月1日のメーデーに旗を持って参加するわけ。GHQの前をジグザグ行進やるとMPが銃を構える、撃たれても不思議じゃないくらいで本当に怖かった。それで日比谷公園で解散です。1952年5月1日のメーデー事件に巻き込まれた級友が1人います。各駅に全部警官が張りこんで参加した学生をつかまえる。その結果、停学処分などをくらうわけ。

山領：そうねえ。あの日はほんと中央線の各駅。大久保、東中野、みんなそうだった。

石井：そうです。それでこのあたりから日共の火炎瓶闘争や山村工作隊が始まり革命前夜のような状態になってくるわけです。今でも西洋史の連中と集まることのあるのですが、あの時はすごかったよねーとかあの時の写真見ると、なんか地下に潜ってる（笑）連中が



並んでるような顔しているね、いや一あのときは屋根裏に、新聞紙にくるんで銃を隠したんだとか、そういう話をきくわけです。だから学生の中でもいわゆる武装闘争というのかな、そういうものが出てきた時代ですね。一方、7月には破防法が成立する。

山領：メーデー事件の後ですね。

## 2 思想の科学、転向研との出会い

石井：思想の科学との接点は大学3年生のときにアメリカ史をとったんですよ、でその先生のレポートを書かなくてはならなくなった、安田武の妹が親友で、彼女がプラグマティズムのことを教えてくれた。じゃあジョン・デューイでも調べるかということで、鶴見和子さんの『デューイ研究』を初めて読んだわけです。それで鶴見和子さんの名前を知った。この時早稲田の西洋史の学生と、東大の教養学部の学生が交流していて、そこで共同研究をやるから誰かレポーターを出してくれというので、私がジョン・デューイについてそこで発表したんです。でその時に東大のチューターが明石康さん、国連の事務次長となった人です。

横尾：まだ『思想の科学』の読者ということではない。

石井：そうです、講談社版からの読者です。

横尾：その頃はやっぱり雑誌は『世界』とかをご覧になっていた。

石井：もちろんそうですね。それ以外に『思想』とかね。『中央公論』などを読んでいました。

横尾：いわゆる人生雑誌にはあまり興味が。

石井：興味なかったですね。

横尾：やっぱり平和とか。

石井：そうです。講和条約とかが結ばれる前ですから。当然就職先ではそういう論文が出ますね。それに対してどう答えるかということがあります。血のメーデー事件も比較的身近というか、自分のクラスメートが巻き込まれる、それから銃をかまえたMPがほんと怖かった。

横尾：銃を構えられるというのは体験がないから。

石井：もうね、特にすごい屈強なMPが立っているわけでしょ。

横尾：ああそれはもう体格が。

石井：ほんとうに怖かった。それと朝鮮戦争が始まってまた戦争があるのかという恐怖はありましたね。

山領：それは僕はもうどう逃げるかという。

石井：(笑)

山領：本当に暗澹たる気持ちになったのを覚えている。

資料2-①：石井紀子氏インタビュー第1回

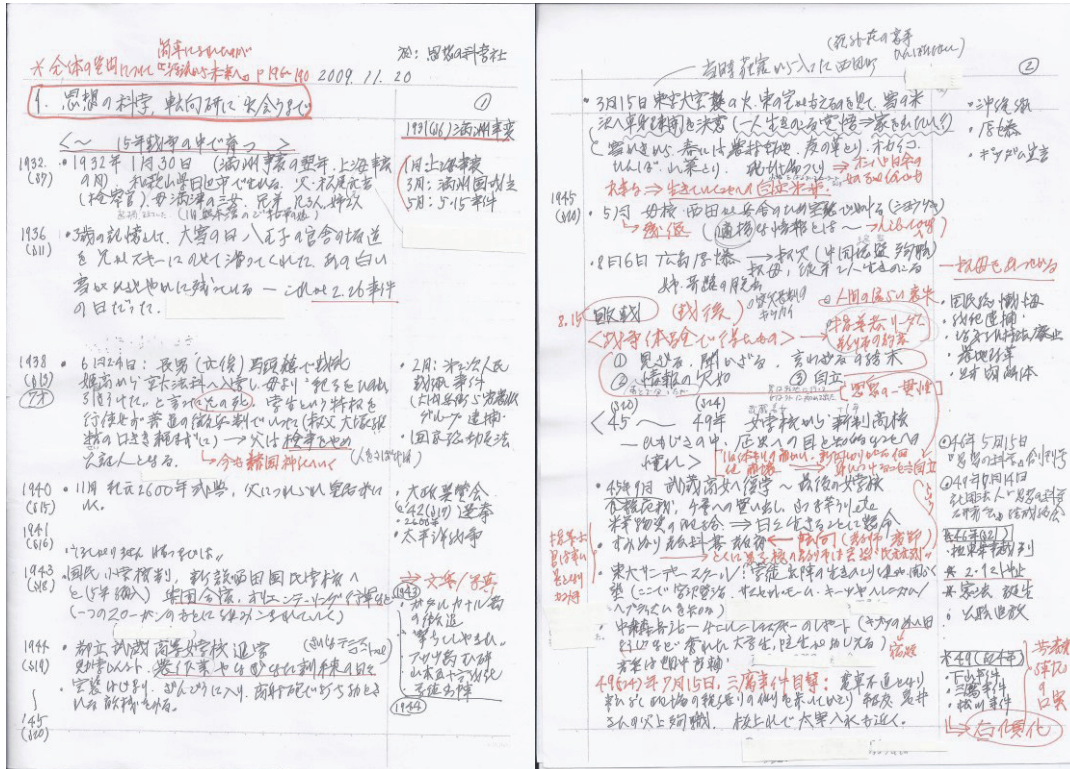


図1 石井氏作成のメモ（部分）。1・2回目使用分はA4で14頁、3回目使用分は5頁。

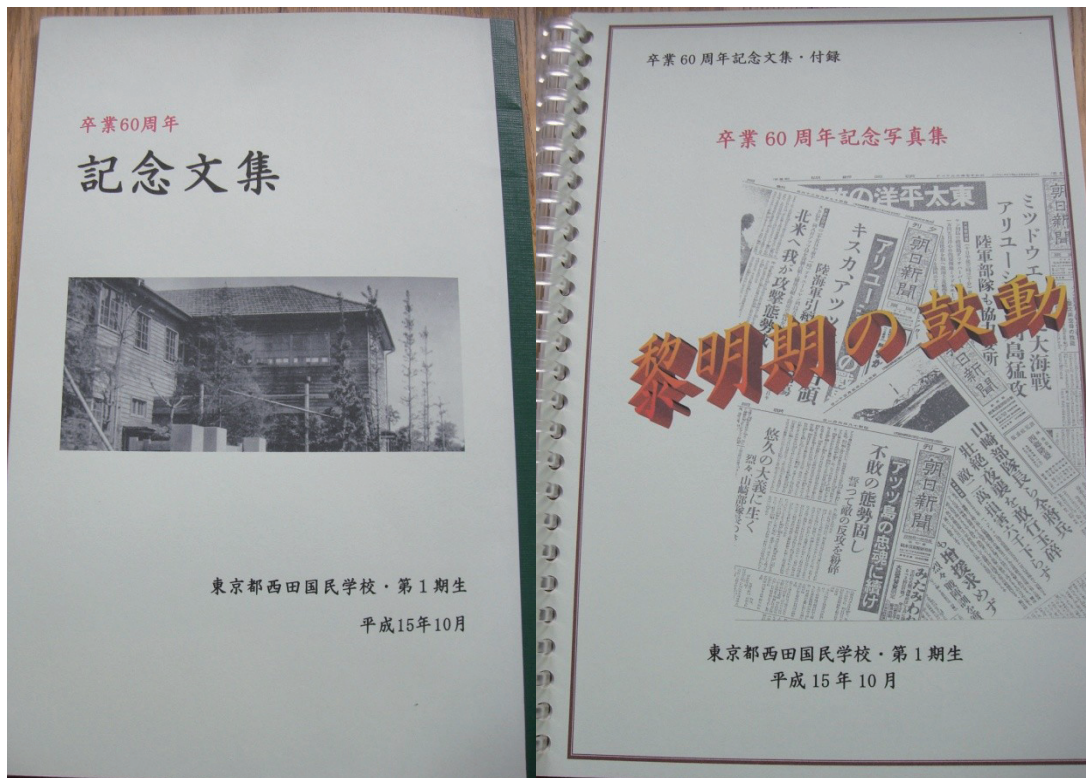


図2 東京都西田国民学校第1期生・同期会編，発行2003。『卒業60周年記念文集（付録，写真集，黎明期の鼓動）』

## 石井紀子氏インタビュー第2回

時と場所：2009年12月16日 11:00-11:50, 13:00-15:00、思想の科学社(新宿区百人町)

同席者：余川典子氏、終盤に山領健二氏

### 2 思想の科学、転向研との出会い

#### 2 - ① 動機

横尾：前は転向研と出会うまでのところ、前史が大事だと思ったのでかなり詳しくお話頂いたんですけども、今回はついに転向研。

石井：思想の科学、転向研との出会いについてですが、私はちょうどその時就職して、昭和29年3月に時事通信に入社しました。入社試験は東大内の大講堂でした。女一人しかとらなかった。すぐ辞めちゃうとは思っていなかったのでしょうか(笑)。

横尾：あの、試験はもっと女性の方いらっしたんですか、試験自体は。

石井：試験の時にはいた、と思う。英語のヒヤリングなどあったんですが全然駄目でした、通信社だから語学を重視したんでしょうね。1954年3月の卒業生は大変な就職難の時代なんです。他に私は日本経済新聞とか放送関係とか通信関係受けたんです。日経は面接まで行ったんです。ところがね、質問されたのが「あなたお裁縫は出来ますか」ということなのね。要するにそういう時代です。婦人記者は家庭欄を受け持つ。で私は「出来ません」と答えてめでたく不合格。大変面白い試験でした。ある状況が説明されてそれを何字の記事にまとめろとか、緊張感がありました。当時、職業婦人、今死語になってしまった職業婦人なんかはどっちかという軽蔑されるというか、お嫁に行けませんよというのと同義語なわけです。そういう時代に、一生仕事を続けたいと考えたわけだから、変わっていた。だけれども私としてはさしたるキャリア計画を持っていたわけではない、とにかく何か仕事に就いて働き続けたいということがあった、これはこの前お話ししたように、要するに敗戦によって全部既存のシステムが崩れたわけです、家なんかは父が非常に厳格な人で家父長制でもないけどそういう風な組み立てになっていたわけで、それが崩れる。例えば新円切り替えというようなことによって、もうお金の価値が、タダ同然みたいになるわけです。ということはお金を持っていてもだめだし、家族に頼っていてもだめだし、自分の身に何かをつけるということ、これしかない、と考えていました。だから自立することが第一歩。でまあめでたく時事通信に入り、出版局に回されたわけです。それでその仕事というのは何かというと、主としてGHQ、まだ占領下ですからね、GHQから日本の占領政策に沿った原書が渡されて、それを翻訳して出版する仕事为主だった。他に家庭医学や洋裁の本などの実用書も出していましたから、その改訂版を出す仕事もありました。時事年鑑など年鑑の担当もあったけれども私は単行本のところに回され、単行本を受け持つことになったんです。一番売れたのが『日本旋風』、井上勇氏の訳ですけど、ベストセラーになったんです。その中でこういう仕事をしていていいのかなという気持ちがあった。



私としては、一生仕事を続けたいということと同時に、積み上げていく仕事をしたいということがあった。東大のサンデースクールで一緒だった友人が、お茶の水女子大を出て平凡社に入って「綴方風土記」とか「世界の子ども」を担当していましたが、これは積み上げる仕事です。ケニアからこどもの作文を取り寄せて訳すとか、こういう仕事もあるんだなということを感じた。年鑑を担当している大竹さんという女性の方が、私が悩んでいると、じゃああなた、本社が日比谷の市政会館の中であって、そこで取材記者になることも出来るけれど、取材をやるならばあなたは芸能人の家の前に何時間も立って記事を取ることが出来るって言われて、あっそれはできないなど、さんざん悩んでいたわけ。つまり一生それなりに自分で貫いていく方法と、小さい信条でもそれを通して生き続けることを知りたかったわけです、それを戦中戦後の体験したことの中から見つけることができるかしらと考えた。もう一つは早稲田にいる時にデューイの著作に出会ったわけです、それで哲学とか思想が、いわゆる象牙の塔の中で限定されたものじゃなくて、デューイの言っているコモンセンスのレベルで捉えられているってことが非常に印象に残ったんです。その二つがあった。1954年5月に講談社版の『思想の科学』が創刊され、書店で平積みになっていましたからさっそく手に取ったわけです。あ、こういう哲学の大衆路線化ということがあるんだと、いうことを知りました。そして7月には『会報』1号が出て、会員ならびにサークル相互の活動についてのお知らせがありました。でちょうどその頃、思想の科学に入会し、そして転向研に興味を持ち、それに入ることになったわけです。1954年の10月には転向研の東京グループが結成されているわけです。11月5日に第1回の会合が行われ、出席したわけです。行ってみたら奥に黒シャツみたいな黒いセーターを着て、どかつと座っている人がいて、あーヒゲだらけのすごいおじさんがいる、と思ったらそれがしまねさんだった（笑）。

横尾：判沢さんではなくてしまねさん。

石井：ええ、判沢さんが事務局をして下さっていて、どうぞどうぞって言ってくださったんだけど、部屋に入った右手の席に集まりを持てる所があってそこに座っていたの彼だったわね。それから片桐さん、片桐ユズル夫妻が最初の頃出席していました。私は早稲田大の食堂でよく2人でパンかじったりなんかしてるの見てたから、片桐さんが印象に残っていますね。あと見るからに秀才の高島さん、後藤宏行さんは復員崩れみたいな格好して編上げの軍隊靴はいて、割に老けた感じでした。あと山領さんが最初のメンバー、安田武さんが入ったのは後ですからね。あと私が親しかったのは学習院大の西崎京子さん。西さんも久野さんのお弟子でしょ、久野研究室に出入りしてたと思うんですけど、西崎さんもたぶんそうだったんじゃないかな。2週間に1回の会合が開かれるということになるんですが、一方私は職場にはまだ勤めていたわけですが、とくに女性は何か資格がなくては大げだ、何か自分で専門を持つ、プロフェッショナルの道を通さないと一生続けていけないという思いが強くなっていました。出版局は神田神保町のところにあり、そこから歩いて何分のところに中央大学があるわけです。司法の道に進むというのは、父がそうだ

ったから聞きに行ったわけです。実は司法試験を受けるにはどうしたらいいんでしょうって言ったら、あんた夜学なんかに通ったって駄目だよって言うわけね(笑)。昼間の1年から入り直して、司法試験を受けるコースと法科のコースとは1年からあるわけです、そしてナントカ会に所属して猛勉強しない限りは絶対だめだよって言われた。父が生きていたらきっと後押ししてくれたと思いますが〔昭和〕28年に亡くなっていましたから、これは駄目だなー、4年間も勉強するというのは周りの状況からみても許される話ではない。とにかく女が働くことだっただめだという時代だから、断念せざるをえない。そんな時たままた、新宿の紀伊国屋書店(当時木造2階建て)に行く途中でクラスメートの草鹿さんに会った、後でロシア文学の草鹿外吉さんの奥さんになる方ですが、でどうしてるという話になって、今時事通信に行ってるこういう仕事をしていると話したら、今自分は東洋大学の司書コースに通っているという話を聞いて、ライブラリアンの仕事を知り、それから調べ始めたわけです。日本で最も専門的にそれを教育する所はどこだということで慶応大学にライブラリー・スクールがあることが分った。占領軍は文化政策の一環としてライブラリー・スクールをどこに設けるかということで東大、京大、慶応、同志社などさんざん調査をしたわけ。最初は東大という線が出たんですが戦前のリーダーを輩出したところでだめだということになり、やっぱり福沢諭吉の「人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず」という精神のある慶応に決めて開設された。私はさんざん調べた結果、慶応に入れば全部アメリカから教師が来て教えてるわけで、近代的な図書館学を学ぶにはやはりアメリカなんです。いわゆる書誌学的な伝統的な図書館学はこれはヨーロッパです。だから、戦後はドイツにしてもどこにしても占領軍が行ってその新しい、アメリカの図書館学を植え付けていったわけです。私はアメリカの図書館学、とくにパブリックライブラリーに惹かれた。開拓時代に学校があるわけじゃない、学校制度はあとで作られるのであって、1731年にベンジャミン・フランクリンが自分たちでお金を出し合って図書を買ってフィラデルフィア図書館会社を創って本を貸し借りするところから発祥しているわけね。それを土台にしてパブリックなシステムになる公共図書館が置かれると、公共図書館がいわば民衆の大学の役割を果たす、いわば民衆の大学的存在であるパブリックライブラリーに私は大変に興味を持ったわけです。民衆の大学、図書館から育った人は佃実夫さんです。読書や図書館をとおして、独学を貫いた人は彼なんです。だから私は佃さんが恩師というか大先輩なんです。特にそのパブリックライブラリー、民衆の大学としての図書館という、そういうイメージと、思想の科学が目指している哲学の大衆路線、というのが私としては接点として納得できるものがあった。それでライブラリアンの道を選ぶんですが、日本では弁護士に比べると専門職としては認められてない(笑)、アメリカではちゃんとプロフェッションとして尊敬されている。今は情報関係のほうが盛んになったので値打ちが落ちたみたいですが。思想の科学と転向研入会の動機です。

横尾：ちょっとこのレジュメ〔p.252 図1に部分を掲げた石井氏作成のメモ。以下同じ〕においてですね、CIE・・・

## 資料2-②：石井紀子氏インタビュー第2回

石井：あ、そうそう、そのこと忘れちゃいけないんですが、そのパブリックライブラリーを最初に身近に体験したのが、ちょうど有楽町の日東紅茶のビルの1階にあったCIE図書館ですよ。そこはね、もう赤々とストーブがついてて、入るともちろん暖かいんだけど、とにかく雑誌でも本でも全部手にとって読めるわけ、貸し出しもする。それで、あっこういう図書館なんだ、開放的でね、だから熱心に通いましたね。あれは一つの明かり、ともしびみたいな感じだった。誰でも入れるし、もちろん英語の本しか置いてないけど、全部借りられました。なにかクエスチョンがあれば全部ライブラリアンが答える。あっこれがね、いわゆるパブリックライブラリーなんだということを実感しました。

それともう一つは、これは貴重な経験だと思う。赤坂離宮にあった国会図書館。早稲田大学での卒論を書くときから利用していた。入口が大理石の階段で赤じゅうたんが敷いてあるところを登って行くわけ(笑)、そうするとね、昔はなんとかの間なんとかの間だったんでしょね、そこは全部ぱたっと開閉する網戸があって自由に入れる開架室で、閲覧活動を開始していたわけです。その大理石の階段を登る横のところにちょっとしたコーナーがあって、本の貸出をしていたんです。だから私は卒論に必要なホイジンガの『中世の秋』をあそこで借りました。人類文化に対する独特な視点が、私の卒論「ジャン・ジャック・ルソー」論の基礎になりました。トイレに行こうと思うと、何階も下の地下をずうーっと歩いてって(笑)、そのトイレがご立派でびっくりしました。庶民が入れなかったところを開放していた時代です。考えらんないでしょ、今は迎賓館になっています。羽仁五郎が国会図書館の入口に、ドイツのハイデルベルクの大学図書館にあった「真理はわれらを自由にする」という言葉を掲げ、彼が中心になって国会図書館がつけられた。そういう精神があった。占領軍の政策のもとに全部開放されたわけです。ああこれが図書館なんだ、アメリカの場合には身近に図書館が設けられている、カーネギー財団が寄付して、パブリックライブラリーというのがニューヨークだけでも分館がたくさん張り巡らされて、本が借りられて、いろんな講座もあるし、家に飾る絵まで貸し出す。

横尾：あっそうなんですか。

石井：そうよ、いま日本もやっているけれど、絵画の複製なども貸し出します。

横尾：県立美術館が貸してくれるとか。

石井：いえ、美術館でなく図書館、パブリックライブラリーでやってるところがあります。だから図書館というのが生活それ自体に入り込んでるわけです。つまり図書館を頼りにしているいろんな生活活動をやっているわけね。ま、知的なことから趣味的なことまで含めてということです。だから日本でも一時、「民衆の中に図書館を」(笑)というスローガンがありました。時事通信社は女性一人を採用したのにさっさと辞めたのだから早稲田からもう女性はとらなくなるんじゃないかみたいな(笑)。

横尾：ええ(笑)、そうだったかもしれませんね、数年間は警戒されたかも。

石井：あの頃の入社試験というのはもちろんいろいろあったんだけど、身元調査ってのがすごかったですよ、興信所が周り中聞いて歩いて。今でもやってるのかもしれないけどね。



余川：そうですね職種によってはねえ。

石井：やっぱりそういう時代だったのよ。

横尾：通信社というのはやっぱりなおさら。

石井：当時社長は長谷川才次氏。連合通信が戦後分れた時、どっちかという共同通信のほうかフリーというか、自由主義者の人たちがいったんでしょうね。で時事通信はどっちかという右がかりな人たちがいったのかな。

横尾：機能も違うという感じですか。

余川：ずうっとそういう感じですね、なんとなく今もね。

石井：今まで述べたようなきっかけで思想の科学と転向研との出会いがあった。

横尾：少し不思議に思うのはですね、思想の科学がちょうど大衆化を目指した時で、それと民衆のためのライブラリーの接点というのはすごく理解できるんですが、転向というのはちょっと毛色が違う・・・

石井：うん、転向というのは私にとっては生き続けていく時、貫いていくものは何なのかを考えたかった。

横尾：ああ。

石井：ということはどうしても知りたかったというか。

横尾：そちらの興味ですね。民衆というよりご自身の生き方の問題として。

石井：戦前の弾圧についてみんな知らないわけだから。それはしまねさんみたいに黨員だった人は、戦後の運動の中で分裂や除名など身をもって自分が転向という問題とむきあったでしょうが、黨員でない、ノンポリ学生にとっては外からの圧力によって思想を変えるという視点じゃない。山領さんはどう考えているのかしらないけれども。

横尾：そうですね、山領さんは大学がとにかく面白くなかったと。他の人は地方から出てきていて、東京生れ東京育ちの僕はちょっと白けちゃって、いつもこう、教室の隅の方について、なんか面白くないなとくすぶってという。

石井：それでたまたま教室で高畠さんと出会い知り合うのよね（笑）。

横尾：高畠さんは特別な奴だという言い方をされていましたね。

## 2 - ③ 転向したと思っているか

石井：それで次は、転向したと思っているか、という設問ですね。転向を権力による、あるいは組織による強制力によっての思想上の変更と定義すれば、私は前にも言ったけれど歴研で黨員になっていればこの問題と対決していたと思います。せざるを得なかったと思う。屋根裏に銃を隠したり山村工作隊として武力闘争へと進んでいく時代でしたから。だけど歴研では黨員には入ってないし、一方混成合唱団に入って国立音大の人たちとオペレッタかなんかししたりしていたから。

横尾：国立音大の方たちと早大のサークルですか。

石井：早大の混成合唱団は今でもあります。（笑）そのときいっしょにコーラスやっていた

のが安田武の妹、なのよ。この人はほんともうソプラノ歌手になってもいいような声の持ち主だった(笑)。そういう意味での転向はなかった。むしろ思想の自立という問題、これが私の中心問題だったわけです、生き方の選択の問題、ともいえますね。どの道を選んでいくのかと、3つも4つも選択肢があるときにどの道を選ぶのか、そして自分なりの道をつくっていくのか、そういうことですよ。だから思想の一貫性というのかな、ま、大げさに言えばですよ、そういうふうなものです。むしろ追体験という学習方法から、一生どういうふうにして思想を貫いていくのか、それを得たと思いました。あの占領下のときは、いろんなことであったと思います、特に共産党関係は一変して弾圧されましたからね、最初はみんなとにかく日本共産党に入党しようという時代でした。東大の出隆という有名な哲学者まで共産黨員になった時代だから。そういう風潮というのかな、それが今度一変して弾圧に入るわけでしょ。そしてあの三鷹事件や下山事件などが弾圧の謀略として仕掛けられていくことになります、それで地下に潜らざるを得なくなるわけです。権力の強制というのはそういう形というか、見えなくなるというかね、一般の人々にとれば何か言ったから、例えば日本はダメになるぞって言ったからと引っ張られる時代ではないから。だからどちらかというとならば60年代70年代はもうなし崩し的な現象です、運動の中心にいた人はすさまじい相克があったと思いますけども、一般の民衆にとればそういうものがもう見えない時代に入ってきているわけです。

横尾：それが見えなくなっているという意識はやっぱりあったわけですか。何か違ってきているという。

石井：それはもう、あったわね、実際に、時代の空気として感じてました。思想の場合、いったい何がコアになっていくのかと。

横尾：見えない圧迫、圧迫が見えなくなることによって安全ではなく、むしろ・・・

石井：むしろ自分として何を芯としなければならないかという、それを見極めなきゃだめでしょう。何を土台として、何を根拠とするのか。

横尾：そういうことを固めなきゃという漠然とした気持ちはもう始めるときからあったと思われませんか。

石井：だからこれについての重要な論文というのは高畠さんの「転向研究：未完の完結」です。

横尾：こちら、短いものですけど。

石井：短いものだけど核心をついています。「転向研究：未完の完結」真の変革とはそもそも何か、その方法は・・・という私たちの内なる思想のレベルにはね返ってくると。とくに重要なのは、シンポジウム「共同研究転向、その後」という1970年9月号の座談会です。これは高畠さんが60年後の状況をどういうふうにとらえているかというね、そういうことが出ていて、で私はここに引用しましたが、あの5つの視点ということはずごく大事な指摘だと思います。安田武さんも増補改訂版に付けた座談会に出てるけれども、転向という問題を人間のアイデンティティというか主体性というか内面のあり方の軸でとらえ

直すと、というようなことを発言している、国民全体、民衆の転向ということを切り離せない、発言していらっしゃるのね。ここらへんでマージナルというか、そういうものが見えなくなってきている。

横尾：高島さんがこれ書かれたのは天皇制特集号の後ですよ、そういう危機感の中で書かれている。

石井：もちろん、彼は事務局長でしたからね。『源流から未来へ』の転向論の時には高島さんは病のため出られませんでした。高島さんがいらしたら絶対こういうことを言っただろうと、大変残念で彼の発言を挙げたんですよ。

横尾：ここに石井さんが簡潔にまとめられて、現在の問題と。

石井：まあ、合っているか間違っているかは分かりませんが（笑）。

横尾：いえ、すばらしい要約だと思って読んでいたんですけども。

石井：これがやっぱり一番重要な文献ですね。

横尾：安田さんのものも引かれていますけどどこにありますか。

石井：安田さんはね、増補改訂版のうしろに座談会が付いてるでしょう、振り返って。ここ発言している。

横尾：民衆の転向と切り離せない。

石井：うん、そういうことは見出しではないですが。

横尾：ここが少し読みづらくて・・・国民全体、民衆の転向ということと切り離せない。

石井：「僕自身は転向研究をやっていた頃、あるいは山本有三をその中で書いたころの問題意識とほとんど変わっていないなあと思う」と。「問題はおおざっぱに言ってさしあたり二つあって第一に先ほどからの話にもちょっと出ていたけど本多秋五のように民衆の転向という問題ですね」。この辺からの引用だったと思う。「転向の問題は国民全体、民衆の転向ということと切り離しては考えられない」。

横尾：はい、ありがとうございます。

石井：この座談会は私が司会をやらなければいけなかったんですが、仕事上どうしても出れなくなり突然山領さんにふったもんだから（笑）、山領さんがここに書いてるでしょ（笑）。したがって、事前にメモを全部準備してみんなに送ったんです。石井メモによればとか、非転向の軸は何かという石井さんの提案についてどう考えるかなどと触れられています。私はここでは女性の転向が落ちてますということを紙上参加で触れたんですけどね。

横尾：このお名前〔石井絵梨〕は。

石井：あ、ペンネームだった。仕事や職場では石井紀子を使うけど、そうでないところは石井絵梨にしましょうと決めたのですが、あんまり使わなかった。書くことしなかったから。

### 3 転向研の活動と成果

#### 3 - ① 作業過程

## 資料2-②：石井紀子氏インタビュー第2回

石井：次は転向研の活動と成果についてというところですけど、要するに転向研の活動は昭和29年、1954年の11月から開始になったわけです。私はこの時時事通信の出版局に勤務していたのですが、すでに慶応大学にあるライブラリースクールに学士入学しよう、ということは決めていたわけです。私の人生のひとつ、ライブラリースクールに在学中の2年間というのが、転向研の作業とか執筆がなされた中心的な期間になっているんです。このライブラリースクールはアメリカの占領政策のもと設立された専門教育の機関ですから、教師は英語で教えるわけ。もちろん通訳つきですが、ただその宿題たるや大変な量です。

横尾：アメリカ式ですね。

石井：例えば子供の児童図書の話だったら来週までに10冊読んでそのアブストラクトを書けとか。だから転向研の作業を私よくこの時やってたと思う(笑)。どうやってやってたのな、ほんとかな(笑)って感じ。

それで作業プランですが、『転向』の下巻で転向グループについては触れていますが、作業プランについても書いていますよね。これは第1期、第2期、第3期とあって、第1期は古新聞を読んで転向年表を作成する。さらにたしか、雑誌のバックナンバーもチェックしたんです。それから2期は団体と傾向別に転向経路を各自の研究対象として選択する。それから第3期。それぞれの時代と傾向を代表する個人を選んでその転向を再構成すると。この3つが作業プランの大きなものとして出たわけです。山領さんが記憶していると思うんですけど、第1期については1955年の春から夏をかけて秋ぐらいまでやったと思うんです、あと2期が1955年秋から次の年の春、3期が56年の3月から、だと思います。それから2番目に具体的な作業方法なんですけど、まずここにあるように年表作りです。たぶん新聞ごとに担当して何年から何年というふうな分担だったと思うんです。で最初のころは勤めを終わってから、あるいは学校を終了して、夕方から上野図書館の新聞・雑誌閲覧室に行ったわけです。1930年以降の転向に関連する事項を、たぶん京大カードだったと思いますが、鶴見さんが京都の人文研で使ってたカードだと思うんですよ、それに1件1枚、書いていったわけです。3・15に検挙されるということがあれば1件1枚全部書いていったわけです。

横尾：それは新聞の記事を書き写しているんですか。

石井：その記事のアブストラクトです、要するに見出しとか、リード部分です。ここに書いてあるようにがらんとした旧上野図書館の地下に新聞・雑誌室があるんですけど、大きい火鉢に炭がガンガンガン燃かかれていて、その横で立って、こうやって1頁1頁めくって書いていくわけです。帰りは信頼できそうな男性が帰る頃(笑)、付いていき、駅まで駆けていくという状態でした。私は勤めとか学校があったから夜作業をやっていたんですけど、ほかの方は昼間も随時来て作業をしていらしたと思います。

2番目に雑誌記事のチェックカードを作りました。これは例えば清水幾太郎、三木清、室伏高信などの言論人あるいは林房雄や島木健作などの小説家、文芸評論家亀井勝一郎、そ

ういう人が『中央公論』のほか雑誌に書いた論文をバックナンバーを全部調べて、著作カードをつくる。つまり書誌カードです。私は初めて室伏を知って、どういうふうに記事が豹変していくか、カードをとることで分かったわけです。一種の索引カードの作成です。その作業をやってる当時私は慶応のライブラリースクールに学士入学をし、モーレツな宿題の中、平行して作業をしていたわけで、良くこなしたと、思います。さらに、思想の科学にちなんで図書館の科学サークルを結成しました。それで転向研の研究の中の一つのキーワードとして「掘り下げる」というキーワードがあった(笑)。物事を掘り下げる。それでこの図書館の科学サークルでも文部省の補助金をとり、小田原の市民の図書館意識を調査のためお寺で合宿した時に掘り下げる、掘り下げるという言葉がはやったんです。

横尾：並行していくわけですね。

石井：そうです。1955年10月ごろから夜間の図書館通いを開始して、1956年7月17日、有馬頼寧のインタビューをしました。だから作業の3番目として出てくるのがインタビューなんです。これについては会報に書いてないでしょ。

横尾：書いてないですね。本人にやっているのは存じ上げませんでした。

石井：知ってる人が少ない。でまず有馬頼寧へインタビューしました。翼賛体制の中心人物の一人である有馬頼寧を取り上げインタビューをとったんですが、この人はどっちかという革新性、貴族の中でも労働者にシンパシーを持つような人物なんです。それまでインタビューなんてしたことないわけだし、鶴見さんに教わったわけでもない(笑)。よくぞあそこまで行ったもんだと思います。体当たりで。有馬頼寧はその頃、杉並のすごい門柱がある広大なお家に住んでいらして、花をつくって売っていたのよ、花咲かじいさん、花売りじいさんと自称しておられた。でそこへ訪ねて行って、それで翼賛会の関係とか、それまでご自分が行ったセツルメントなどの運動について聞き書きをとった。

横尾：インタビューの年月日は後ろの注に安田さんが書いていらっしゃるね。

石井：続いて室伏高信のインタビューをやりました。これは年月が不明なんですけどね。戦後、戦犯に引かれるので当時室伏は逼塞していたんです。相模湖を見下ろす山小屋みたいなところに一人で住んでいた。そこに登って行って、それでインタビューとったんです。ほんとに粗末な小屋ですよ。それで確か、室伏のお嬢さんが早稲田に入っていた。このインタビューや資料は山領さんにお渡しして、山領さんが室伏高信論〔山領健二 1962. 「ジャーナリストの転向：室伏高信論」『思想の科学』5(4), (84), p.62-79〕を書いて下さった。

横尾：ガリ版で研究報告ということも書いてあります。

石井：あ、そうそう、例会での研究発表をガリ版刷りで残すというのが作業として大きなことだったわけです。会合は夜10時ごろまであるわけよね。ここに書いてあるように、出入り口は全部扉が閉じられてて、銀行みたいなすごい昔風の重い扉なんですよね、唯一の脱出口はトイレの窓しかない、男性陣がまず這い上って下に降りて、それで女性陣を押し上げて受け止めるというトイレの大きな窓からの脱出というのは毎回やっていたわけで



## 資料2-②：石井紀子氏インタビュー第2回

す。ガリ版刷りは、山領さんが切って刷っていたんじゃないかな。

横尾：インタビューなんかは高島さんはあえてしなかったと。

石井：うん、彼はね、個人の内側に入り込まないという研究姿勢だった。

横尾：対象としてあえて突き放すと。

石井：彼の研究の方法論としてはそうだった。だからインタビューをとった人は少ないのかもしれない。

横尾：やり方はまったく自主性に任されていたんですか。

石井：研究対象の人物を決めたら、こうしちゃいけないあしちやいけないということはなく、自分なりに研究をすすめることができる。

横尾：有馬頼寧なんて大物ですけれども、石井さんの個人のツテでアポをとったんですか。

石井：直接体当たりしたのよ（笑）。

横尾：そうですか（笑）。伯母さまのツテとかは使われたりせず。

石井：使わない。たぶん直接こういうことで研究しておりますけども、こういうことを聞きたいという手紙を出した。そういうことであまり物おじしない時代じゃないかな。

横尾：そうでらしたんでしょうね（笑）、たぶん。そういうやり方は高島さんなんかとは対照的なわけですけども。

石井：うん、たぶんね、山領さんなんかインタビューとってないんじゃないかな。あと安田さんが書いていたと思いますが、その後鶴見さんとインタビューをとった。誰も彼もインタビューとりに行ったということはない。だって、インタビューとりたくても死んだ人物を相手にしている場合もあるから。島木健作なんて生きてないんだからとれないわよね。亀井勝一郎は生きていたけど文献的に資料的に調べたんだと思う。

横尾：そうですよね。ちょっと今うしろのところ〔安田武 1960.「追記」「創立期の翼賛運動：有馬頼寧」『共同研究，転向，中』平凡社〕を見てみますけど。有馬頼寧・・・後藤隆之助。

石井：そうそう、それです。

横尾：「有馬頼寧とのインタビューは、松尾紀子が、一九五六年七月十七日に、後藤隆之助とのそれは、鶴見俊輔、安田武が一九五九年九月三十日に行ったものである。」

石井：そうですね。

横尾：鶴見さんはじゃあ・・・

石井：鶴見さんは『民衆の座』などで最初のところから竹下智恵子とかインタビューとっているじゃないですか。

横尾：インタビューをしたかについてはほかの方にも聞いてみます。

石井：そう、聞いた方がいい。

横尾：はい。

石井：でも対象が死んだ人物だったらだめですね。西さんは石原莞爾でしょ。魚津さんは誰を書いたんだろう。



横尾：タカクラテル。

石井：タカクラテルはあの頃生きていたのかな。

横尾：けっこうまだ生きていますよね、この頃。

石井：そうそう。

横尾：私もちょっと驚いたんですけど、けっこう生きている人を書いてしまうという。

石井：(笑)

横尾：死んでいれば楽というか(笑)。魚津さんタカクラテルですね。

石井：タカクラテルは生きていたのかしら。

横尾：これも確認します。あの、有馬頼寧を選んだのには何か理由があるんですか。

石井：翼賛体制の関連の資料を見ると、中心的な人物はこの人だなというのが分かるじゃない。また個人的にも経歴的にも近衛とちがい非常に面白そうだから、ということもあります。

横尾：それはある時点までやった時に自分で選ぶんですか。

石井：うん、そうよ。私はこの人をやりますと。西崎さんは島木健作をやりたいとかというように。

横尾：それは自由に、自分の関心のあるところを選べると。割り振られたわけではないのですか。

石井：全然全然。で、どうしてもやらなきゃいけない人物で、誰もやらなければ鶴見さんとか、あるいは適切な人を選んで参加してもらおうとか、こうして藤田省三さんとか他のメンバーが拮がっていったわけです。

(中座していた余川氏が戻る)

横尾：今体当りのインタビューのお話を。

余川：ねえ、すごいですよね。

横尾：それがもしかしたらあの、原稿と安田さんのリライトと微妙に・・・

石井：突き合わせていくと。

横尾：やろうと思っています。このレジュメでもう一つ、有馬頼寧のインタビューのところですけど、花を作っている・・・

石井：そうなの、そのころ有馬さんは花つくって売っていたのよ。とても気さくな方でしたよ。

### 3 - ②③ 追体験、心に残った工程

横尾：自分が直接的に知らず体験していないことを再構成する困難がおりだったかと思うのですが。

石井：特別に、転向について歴史的に研究していたわけではない。転向研に入ってから作業を通じて初めて追体験したわけですから、あっこういうことだったのかというふうに吸収するのが精一杯ね。索引カードを作ったりという新しい方法論は大学では学ばなかった

## 資料2-②：石井紀子氏インタビュー第2回

手法ですよ、そういう調査研究の方法から迫体験、それをとおしてもう新発見の連続、あの人があれ、こういうものを書いていたの？あの人ね、だって清水幾太郎なんかピカピカに光っていた時代でしょ。彼も戦時中こういうことやっていたんだとか、こういうこと書いていたんだとかという発見。

横尾：不思議なのは山領さんは西洋史、石井さんももともと西洋史ですね。西洋史学を選んだのはやはり時代的なものでしょうか。日本史よりもそちらに興味がおありだった。

石井：うん、私はたまたま、高校の夏休みでロシアのチェルニシェフスキーを取り上げて書いたでしょう。それをきっかけに西洋史に興味をもった。卒論は、フランス革命でジャン=ジャック・ルソーだった。日本史をやり直そうと思わなかったのはなぜだろう。たぶん、日本史の有名な教科書〔遠山茂樹ほか 1955.『昭和史』岩波新書、岩波書店〕が出たじゃない、いかに日本が悪いことをしてきたかという視点で書かれた(笑)、今でいう自虐的な史観というか。ああいうのがあったからかな。でも当時はこれを全面認めていました。

横尾：ちょうどその時に戦中の。

石井：この本は当時のベストセラーですよ。それを関係なく西洋史をやろうということを決めていた。

横尾：でもここでまたどちらかというすでに歴史になっていることをやるというのは・・・

石井：だけど自分に振り返ってみれば、戦前のある現象についてやらざるを得ない自分が生きていて、小さい信条でも持ち続ける生き方をするにはどうするかといったらやっぱり、戦前戦中のことを知るしかない。転向研というのがたまたまそういう機会となった。

横尾：これは4番のその後の生き方への影響にもつながっていくんですけども、やはりそういうことへの答えは西洋史の中にはなくて・・・

石井：そうですね、ジャン・ジャック・ルソーの中に答えがあるわけじゃないですね(笑)。

横尾：信条を持って生きていくとかいうことは、もっと自分と地つながりの・・・

石井：そうそう。

横尾：背中にあるような、歴史の・・・

石井：だけど、じゃあと言って日本史を正統的にアカデミックに研究するのではなく、転向というふうなのぞき窓から遡っていったわけでしょ。

横尾：のぞき窓ですね。

石井：それで4番目がどの工程が一番心に残りましたかということですね、それはもう上野図書館での作業です。

横尾：今でも女の人が一人で夜、上野公園というのは。

石井：こわいよね。今の方が特にこわい。

横尾：そうですか。

石井：あの頃はやっぱりねえ、生きるのに精いっぱいだったから人を殺してまで盗るなんて考えなかったのかなあ。地下道には浮浪児もいたしねえ。

横尾：そうですねえ。

石井：みんな生きるということだけに大変だったから。そういうモラルというのが全然違うんでしょね。

横尾：今の方が危険だと。

石井：そう。それからやっぱり2番目のインタビューですよ。まあ体当たりの経験ですね。

横尾：やっぱりこれはやってよかったと今でもお思いになりますか。

石井：ええ、思いますよ。やっぱりその肉声に接するというか、その人の表情とか声とか、そういうのに接するのは人を研究する場合にとっても大事なことだと思います。でもこれについてはね、異論があって、そういうふうにも人の心情まで、転向した人の心情まで入り込むのはどうかという意見が、あとの座談会に出てるでしょう。そういうことはあの時やらなかったねということについていくぶん逡巡してる、という様子は感じられるじゃない。後藤さんがあんまり個人的なことに入りすぎているんじゃないですかと発言したりしている。

横尾：そうですね、難しいところですよ、対象としての歴史というのはなかなか。

石井：本人にとって負だと思っているようなことを聞くわけだから、なかなか難しいわね。でもやっぱり私なんか鮮やかに思うのは、高村光太郎なんかすごいよね、私は彼がこもった山小屋を見に行っていたことがあるけど、すごい粗末な山小屋です。一茶が暮らしていたような、もう寒い雪の中にうずもれるような所なんですから。あの落差はすさまじい。

横尾：文学者の戦争責任についてはこの頃ちょうど吉本さんがやられるわけですよ。

石井：そう。文学者の戦争責任。

横尾：やっぱりかなり思想の科学のスタンスとは違って、重なる部分、共鳴できる部分もちろんあるとは思いますが、吉本さんの方が前の世代に反発することによって自分を立てるといような姿勢が強いですね。

石井：そう、だから言っていることに非常に刺激的で魅力的な面がある。吉本の著作を読んでみてああいいなって思ったもんね。

横尾：ああ、そうですか。

石井：で今私は坂口安吾を読み直したんだけどもうすごいね、『白痴』などに書かれている戦時中の生き方というのは。戦争中もどてら姿で暮らしていたのよ。

横尾：坂口安吾の創作は戦前戦中あまり変わっていないんですか。

石井：そう、そんなに戦時体制によって謳い上げるなんてことなく、例えばどてら羽織って空襲の後の焼けあと、死体がね、ゴロゴロしているとこ歩いて行くし、絶対に協力するなんていうことは一切ないわけだから。だからああいう生き方というのはどうなんだろう。

横尾：これは『転向』ですけれども、やっぱり『非転向』というのもあれば対照物として面白い。

石井：そう、非転向といえるのかな。要するに坂口のああいう生き方の中にあるものはな

## 資料2-②：石井紀子氏インタビュー第2回

んだという、ことだよね。私なんか、『青鬼の禪を洗う女』という作品が大好きで（笑）何度も読んだんだけど。今回『白痴』も読み直してみても、白痴とばかにされた隣家の女房が彼のうちに駆け込んでくるわけ。でその人を連れて、焼跡の街を駆けてくという内容だが、あれは何なんだろう。そういうのに比べれば高村光太郎なんか真珠湾攻撃などを高らかに謳い上げるわけだから。そして戦後は岩手の花巻の先の雪の中に埋もれる山小屋にこもってしまう。ほんとにすごいとこです。高村光太郎書誌を北川太一さんという方が作られたんで日外でそれを出版した。高村光太郎を読んで、それで訪ねて行ったんだけどね。それから3番目に合宿なんですよ。

横尾：これは・・・

石井：1956年ころかなあ。箱根の強羅でやった合宿に私も参加したんですけど。

横尾：安田さんも書かれていましたね。

石井：ああそう。

横尾：たしか「食欲の巻」〔安田武「実録『転向』研究会, 2」『思想の科学会報』(47), p.4-6, 1965-7〕でしたか。

石井：ああ、そうか、安田さんのね。

横尾：「箱根・宮の下の旅館に泊って、合宿の研究会をやったことがある。一九五八年のことで、研究会もようやく軌道に乗りだし、平凡社から上巻が発刊する目鼻もついて最後の追いこみに、偶々夏休みを利用して合宿した」と。

石井：じゃあその前にやってるのかな。

横尾：その前にもありますか、宮の下じゃなくて強羅で。

石井：強羅だったと思う、山領さんに聞けばはっきりするんだけどね。

横尾：ここに追い込みと書かれていて。

石井：安田さんは来ていたかな。藤田さんはいた。その時の写真が出てくると分かるんだけどね、写真はちょっと取り出すのが大変だからできないんだけど。なぜかという横山さんがアメリカに発つ前に合宿した。

横尾：アメリカに行くというのはありましたね、会報の記述が〔「横山貞子氏は七月十三日横浜出港、アメリカ留学の途に向われます。」「NEWS」『思想の科学会報』(15), p.14, 1956-7-14〕。

石井：早稲田大学のそば、ちょうど穴八幡に行く手前の右手にアバコというビルがあってそこに勤めていた。それでたしかアメリカに行ったと思います。でその前に駅前の茶店みたいなところで私と会って話をしているから。これは横山さんに聞けば分かるんだけど（笑）。

横尾：西崎さんもアメリカに行かれましたよね。

石井：はい、西崎さんもアメリカに行った。突然電話がかかってくると何事かという電話で、いつもあの人電話かけるときは何事か起こると言っていた（笑）。

横尾：会報に那須行き〔西勝「転向研の那須行」；山領健二「那須行二日目」『思想の科学

会報』(20), p.45-50, 1958-1-20] とか長瀬行き〔松尾紀子「転向研の『長瀬行』』『思想の科学会報』(19), p.23-25, 1957-10-25] は載っているんですけど。

石井：そうなの、残っているんだけど合宿の記事はあんまりないでしょ。

横尾：安田さんの記述だけからだと 58 年の宮の下合宿になっちゃうんですね。

石井：その時に安田さんがいたという記憶がない。

横尾：安田さんがお入りになる前、強羅で早い時期に 1 回あったかもということですか。

石井：うーん、というのはほら、横山さんがアメリカに行ったのはこの年だなあって書いてあったと思ったし (笑)。

横尾：横山さんは 57 年の 9 月に転向研究会に復帰したとあるので〔「執筆者紹介」『思想の科学会報』(19), p.28, 1957-10-25; 安田武「実録・『転向』研究会, 4」『思想の科学会報』(49), p.8-11, 1966-2〕、先ほどおっしゃるように留学前に合宿しているとしたら 56 年あたりですね。つまりそれは安田さんが入る前ですね、きっと。

石井：入る前だと思う。

横尾：だから石井さんがレジュメに書かれている 1956 年夏ごろ箱根というこれがおそらく最初の合宿。

石井：だろうと思う。

横尾：じゃあ記録にない合宿もあるのかしら。

石井：夏であったことはたしかねえ。

横尾：丹沢行きはありますね、56 年 5 月。

石井：うん、丹沢行きはある。

横尾：それとは別に夏に合宿があったと。

石井：そう、写真が出てくればなあ、分かるんだ。まあその合宿では論文を読み上げたり討議したり、これ以外におかしかったのは (笑) とにかくお食事が出てご飯がたくさん残るととにかくそれを全部おむすびにして (笑) 夜食に備えると、いうふうなことやったのが非常に印象に残ってる。(笑)

横尾：(笑) まだ皆さんお若いですし。そこに藤田さんは。

石井：そうね、藤田さんはいらしてた。

横尾：安田さんは追い込みって書いてらしたんですけど、そうではなくて遊びの合宿もあったんですか。

石井：遊びじゃなくてやっぱり研究のための合宿でした。

### 3 - ④ 転向研が続いた理由

横尾：ちょうどこの時期はほかのサークルは停滞していてなぜ転向研だけが続いたと思われませんか。

石井：ちゃんと続いた理由。転向という問題が単なる研究対象じゃないということなんです。メンバー各自が自分の生き方というか、その一貫性というものを貫くという視点で転



向の跡付けを行っているということです。だから転向を自分の問題、自分が生きる問題と切り離せないわけ、だと私は思います。それでその結果を自分の進み方に投影させるということだったと思う。例えば鶴見さんのその後とかね、高島さんの生き方を見れば判ります。高島さんは素晴らしい方でした。ものすごい秀才で転向研に現れた時、一番若いのに鶴見さん相手にちゃんと論戦を張るわけだから。ほかの連中ははいはいって聞いているだけね（笑）。鶴見さんの講義をご説ごもつともとか聞いているわけでしょ。ところが彼は最初から大河内一男などについて論陣を張るわけです。私は東大のエリート的な生き方が好きでなかった。山領さんは縁の下力持ち、ガリ版切ったりする仕事をなさる人なんです。集会の時に夏はね、たらいにスイカ浮かべといてそれを切るとか（笑）、そういう事を彼は黙々とやる人なのね、何にもてらわずに。かたや目から鼻抜けるような秀才でしょ。

横尾：それがいやだと？

石井：お見事です。だって丸山真男さんなんかもね、目をかけていらしたわけでしょ。だからあのまま行けば東大の政治学の教授になったわけよ。それを立教大という私学に行き、しかもベ平連とか声なき声の会とかそういう運動を政治学を実践するというのでやった人です。わたしがああって思ったのは、日外に就職してから政治学関係の文献目録を作ろうと思って彼に相談に行ったのね、もうその頃高島さんといったらお偉いわよね。で電話したら「いいよ」という、いろんな人の相談にぱつとの人なのね。そういう面が分かったのと、そのお父様が、戦前、無産階級の人たちの弁護をしていらして、大変だったという話を知って、アルバイトもけっこうして高校をずいぶん苦労してお出になったという、話を聞いて、ああって。だからすごい人間味がある人なのよ。困ってる人があったら手は出すよという。松尾さんそういうことで悩んでるのか。あんな忙しい人が、いいよ、中村屋で何時に会おうとか言って電話してくれて。そして必ずね、著書を送ってくれて私もせっせと感想を書くわけ。年賀状を寄こしてくれてそれには彼が作った和歌や俳句が書いてあった。それである年には、これとってあるけどね、もうこの国を出たいという意味もありましたよ。ほんとうにすばらしい人だった。ああいう人には二度と会えない。しまねさんだって結局ここにあるように、転向研究が終わってからも一人でコツコツと、明治時代まで遡って研究を続けた。その関連の書籍を読むたびに関係記事を全部カードにした、何の書籍の何ページに誰が載っているというようにね。いわば「文献人名索引」、いずれ彼はそれを集大成したかったわけです。そのカードは3万枚になりました。すごい献身的な奥さんが支えたんです。

横尾：すごいですね。

石井：当時柏に住んでいた。でその時奥さんは昼間先生をして夜もまた働いてというような生活をしてらしたんだと思う。隣から火事が出て3万枚のカードが焼けたのよ。それで普通だったら断念するでしょう（笑）、諸橋徹二なんかも焼けて戦後また作り直したんだから、そういう人もいるんだけど。しまねさんが甲府に引っ越し、転向研の同窓会をやるために訪ねていった。私は早めに着いたので、しまねさんが焼けた3万枚をつくり直した



ので見てほしいと持ってきた。すごいねって絶句。彼はこの仕事は娘にも手伝わせるよって言ったから娘さんはちょっと（笑）かなわないんじゃないかなって思ったりしたんだけど。転向という視点から社会主義人名事典を作りたい。収録人物の転向体験を中心に記述をした事典だよと熱心に語った。そういう仕事をずっとやっていた。その夢を実現せずにしまねさんが亡くなってしまい、私は「夢も果さず逝ってしまったじゃないの、極楽とんぼ」『思想の科学』7(94), (431), p.102-103』という追悼文を書いたんだけど（笑）。

余川：そうですね。

石井：そう。誰もこんな人物事典を引き受ける人いないと書いたら、いいだももさんが引き受けたんです（笑）。1989年から7年におよぶ執筆・編集の大作業の結果『近代日本社会運動史人物大事典』全5巻の大冊が完成しました。だからすごいですよ、そういう意味では貫いたということだね。『小林多喜二を売った男：スパイ三船留吉と特高警察』が彼の遺稿です。すべて転向研から発している。

横尾：レジュメのここ、転向は「単なる研究対象でない」、「傍観者でなく、各々が自分の身に引き寄せて」何をすると？

石井：「肉化する」。肉化というのも変なんだけどね、身体の一部とする、観念じゃないということ。

横尾：そうですね。

石井：この頃、藤田さんから、『思想』に論文を載せたらどうか、研究者の道もありますよと言われたんですが、私はそういうことに関心ないから、実践する、ものは書かないという（笑）、実務の道を選んだということ。山領さんに言わせれば翼賛会について論文がなかったから珍しいから載せるって言ったんだよってこの間言うから（笑）そうかもしれない。

横尾：そうですね。

石井：やっぱり高島さんはすごいよね。誰もまねができない。あれだけの才能を持ちながら、あれだけの行動をやった人はいない。だからやっぱりお父さんの戦前の体験があったんだと思う。

余川：今高島さんの七夕記というのがあって、立教で毎年やるんですよ。その卒業生とかが、あのなんていうか地方の田舎のそのそこで政治活動をしてたりする、そういう人が話したりすることもあるって、高島さんのゼミというのかそのグループはそうやって、あ、すごかったんだなって。

石井：すばらしかったわね、お葬式の時もゼミの人たちが語ったこと。

余川：あの卒業した、亡くなった後のそういうのがすごいなあって。

石井：種を蒔いていった。ああいう人は生きていてほしかった。

余川：そうですね。

石井：やっぱりね、そういうことってあるのね。日比谷図書館の側の広場はデモ隊の出発点であり集結地でした。60 安保のときは道路一杯広がるフランスデモをやったけれども、70 年安保は様相が違いましたからね。なにしろ翌日出勤すると、公園の敷石という石がは

## 資料2-②：石井紀子氏インタビュー第2回

ぎとられていて催涙弾が残っていて、その中出勤して行くんだからすごい状態だったのね。で私はね、辞めてからも十何年、日比谷図書館の屋上に戦車が出てくる夢をよくみてうなされた。60年安保のとき私は、昼勤めていて夜デモに行くわけだけど、歩きながら、竹内好という人がこの、今この土地に生きていたという思いがあるのね、竹内好がいるということが、自分が生きていく中で、この人がいる、この同じ大地のところに踏みしめているんだよとを感じる。高嶋さんはそういう人の一人でしたよ。

横尾：はい。

石井：続いた理由の2番目。昨日、しまねさんが作った年表〔しまね・きよし1980.『思想の科学研究会』年表, 1~3』『思想の科学』6(116), (324), p.124-135; 6(118), (326), p.101-111; 6(121), (329), p.115-127]をつくづく眺めていて1956年5月20日、東京の転向研グループを中心とする会員有志のヤビツ峠ハイキングというのが書いてある。転向グループはかなり数多くのレクリエーション的なハイキングを行っている。このような遊びが会報も途絶え、財政的にも苦しい研究会の中で転向研グループがサークル活動を続けていく一つの要因ともなったであろうということが書いてあります。だから最初に転向研の特色の中で私が話したように、こういうことはほかのサークルではなかったと思います。鶴見さんが何度もお手紙にあの8年は忘れられないと書いておありになるように。だから2番目に挙げてもいいかもしれない。

横尾：そうですね。

石井：そう。56年の5月20日。ええとしまね年表、ここにあるでしょ。

横尾：ええ、私も家にコピーしてあるので。

石井：これね。いやこれはよくできている、すごいなあ。こういう仕事はほんとにできないわねえ。

横尾：こういうお仕事をされるんだなという一端が。

石井：彼はそうなのよ。

横尾：はい。

石井：こういう年表はもう作れない。

横尾：そうですね。

石井：まあいくら断片的にできるかもしれないけど。

横尾：転向研の年表というのをつくるにあたって、しまねさんの年表は下敷きになると思うんですね。

石井：レクリエーション的なハイキングを行っていることが転向研グループがサークル活動を続けていく一つの要因ともなったであろうということです。

### 3 - ⑤ 転向研の研究の特徴

石井：これは冒頭に話しました。

横尾：そうですね。

石井：近代文学の同人、平野謙とか埴谷雄高とか、荒正人はプロレタリア文学者で党员だということで、転向経験があるわけですがけれども、転向について若い世代とのグループ研究じゃないでしょ。完全に同世代ですよ。あくまでプロ集団の体験を伝えるという視点に立ってますよね。つまり転向というものを次の世代がどう受けとっていくか伝えようというところに発想があり、全て違う軸足に立っている。特色は最初に言った通りなんです。まず実証主義的な研究、2番目にニュートラル、3番目にグループ研究である、4番目に本として結実させた。そして5番目にさらに19年後にフォローアップしたこと。というこの5点が特色でしょうね。

横尾：その伝える相手というのは、まさに石井さんたち若い世代にということですか。

石井：そう。だからね、日清日露、日清戦争の体験をね、聞いているようなもんだって山領さんが言うわけ(笑)。今あなたが聞いているのも、昔々ね、戦争があつてねというふうに(笑)。転向研があつたんだよって。

一同：(笑)

横尾：石井さんたちはなぜ戦前の研究したんだろうって興味持っていたんですが、たしかに自分の関心を考えるとそんなに不思議なことではなくて。

石井：不思議なことじゃないでしょ。だからあなたたち若い人が、転向研を研究したいと言うので、えーどうしてとかって思ったけど。

横尾：身に覚えが(笑)。

石井：そして今いい時期ね。関係者がなくなっていくからね。80歳までが限界だと思う。

横尾：そうですね、今ちょっと遅かったかなというぐらい。

石井：そうなのよ。もう10年早ければね、皆さん生きていらしたのよね。

余川：そうですねー。

石井：だから思想の科学の中で今最後なのよ。私や山領さんや魚津さん、佐貫さん、西さん、横山さんが死んだら聞く人がいなくなります。

横尾：平均寿命というのは平均なんで、ここまで来たらこの先長いということも。

石井：いやー。

余川：(笑)

横尾：期待しているんです。

#### 4 その後の生き方への影響

##### 4 - ① 転向研究によって得たもの、その後の歩みに与えた意味

石井：まず1番に転向研究において得たものということなんですけども、私の歳にしては転職が多い。4回ぐらい転職しています。

横尾：時事通信から、図書館に入られて、日外・・・

石井：3回かな。

横尾：時事通信から都立日比谷・・・

## 資料2-②：石井紀子氏インタビュー第2回

石井：緒方事務所、それから日外アソシエーツ。自分の人生にとって選択を迫られた時、転向研に入った自分のモチベーションに立ち返ってそれなりに自分で筋を通すことができる。転向研はいわゆるベースキャンプみたいなものです。

横尾：これがすごい面白い表現だなと思います。ベースキャンプというと一回帰ってきてエネルギーをもらってようしまた行くぞ、というような。

石井：私は時事通信をやめてライブラリアンとして働く場を公共図書館に決めましたが、その根底には資料や情報を一般の人々に公けにしていこうということがありました。就職で場というか根拠地を4回も変えたことは、広くいえば「転向」にあたるかもしれませんが、根底に立ちかえりそれなりに生き方を貫く選択をしたとは思っています。都立図書館を肉親との関係でやめざるをえなくなり、緒方事務所に移った。この仕事は朝日新聞の新聞インデックス（索引）の制作でした。「ニューヨークタイムズ」と同じようなインデックスを日本でなぜつけれないのか。「ニューヨークタイムズ」のインデックスは膨大なものです。小田実さんが占領研の時に、すごい索引がある、日本の空襲についてあれで引いて調べれば全部が分かると話された。で私はその時日比谷図書館にいたから、「ニューヨークタイムズ」の索引は買うべきであると言って（笑）入れさせたんだけど、「ニューヨークタイムズ」の索引を使うと、例えばブッシュが大統領選に出ようとするするとブッシュが過去にどういう発言をしたかなど全部インデックスで分かるわけ、どういうことをやってたかということも。そういうふうに使えるわけね。日本はそんなことしないわね、マスコミも含めてみんな忘れちゃうんだから。でその「ニューヨークタイムズ」のインデックスを、私の先輩が外務省の資料室にいた時に徹底研究するわけ。彼はIBMの機械を入れて早くから外務省の情報のデータベース化を考えた人なんです、それで病気になり、肝臓をやられ休養中に「ニューヨークタイムズ」のインデックスを徹底して研究して朝日新聞社の人と一緒に日本ですよ、面白いけどね。暮れも正月もない、新聞が発行されている限りすぐに索引をつくる。「ニューヨークタイムズ」のインデックスは無料ですが、朝日は年鑑と同じ様に売れるものと思っていたので、販売が思わしくなく止めてしまった。その後何をしようか、今からコピーライターにでもなるかななんて思ったり迷ったんだけど、自分がライブラリアンとして、情報や資料を探すツールづくりが日本では定着してないということを痛感していたわけです。アメリカには100年以上の歴史を持つウィルソンカンパニーというインデックスとかビブリオグラフィーの専門の会社があるわけです。日外は日本のウィルソンカンパニーと言われたんですが、やっぱりその道に進んだわけです。

横尾：緒方事務所と日外はどういったことで。

石井：これは関係なかった。で私が入ってから、いろいろのインデックス作るのに手伝ってもらったという関係でした。緒方さんは今の筑波にある図書館情報大学出身。

横尾：図書館情報大学。

石井：うん、昔、図書館職員養成所という頃の出身。日外の大高社長もその出身なので

先輩後輩の関係です。

**\* ほかの研究会**

石井：研究会は転向研以外は、柳田国男を読む会とか読者の会というのがあったんですけども、私は散発的にしか参加できない、持続的に一つのサークルに属してということにはなかったわけ。つまり日比谷図書館に入ったけれど、日本に新しいパブリックライブラリーを作るといっても何もお手本がないわけ、だからすべて自分たちで考えて、むこうの文献を読んで実践するという作業ですから24時間営業みたいなもんです。家に帰ってもそういうこと考えているから、とても研究会に出ている状態じゃない。この中で、研究会ではないんですが中公版の編集委員をやらされた。

横尾：59年の年頭からですね。

石井：59年の最初からですか。編集委員に生活者というか実務家を入れたのね。だから高田佳利さんとか私とか、片桐さんが入りました。中公側は担当が粕谷さんでした。でその頃、佃さんなんか投稿していらして、その投稿を読んで「これはこういうところが書き込んでいない」とか（笑）生意気なことを言っていたんです（笑）。こんのそうさんが覚えていて、松尾紀子という人から原稿についてこういうふう指摘されちゃったとかいうのを話してらしたわね。びっくりした、そんなこと言ったんだと思って。それから市民学校の第一回の立ち上げですね。そのあとなぜか会長やらされたんです。上野さんが頼みに来て家に泊まり込んだので（笑）、受けなきゃということになった。

横尾：来て、帰らないんですか。

石井：うちの連れ合いがこいつが引き受けたら思想の科学研究会はつぶれますよと言った。だってそれまで社会的に名の通った錚々たるメンバーが会長でしたから。

一同：（笑）

横尾：何ておっしゃっていたんですか、上野さんは。

石井：上野さんは自分が事務局長やるから一緒にやってくれって言ったと思う。

横尾：それでゴリ押し（笑）。

石井：それで寝こんでしまって（笑）。

余川：やっぱりすごい、なんて言うのかな、実務家だしエネルギーもあるし、上野さんがいないような部分いっぱい持っていたらしゃるって思ったんじゃないかしら。

石井：（笑）

余川：なんか言っちゃなんだけどやっぱり観念的なところいっぱいある方だから。

石井：そうね。

余川：たぶんそうですね。私上野さんと一緒にね、折原さんのところにも会長やって下さいって言うのについていったことある（笑）。

石井：あらそう（笑）。そうね、折原さんだって実務家だものね、もともと銀行員として優秀な方だもの。



## 資料2-②：石井紀子氏インタビュー第2回

横尾：会長お受けになったときはもう折原さんは・・・

余川：いえ退職まだ、まだ。東京銀行まで行って会って、そしてね、ずっと歩いてどっかあのかた市川のほうだったから川のほとりを歩いたの覚えている。

石井：それで引き受けてみたら、会費の納入率が30%なんてひどい財政状態。これはもう絶対に会費を取り立てるぞと思った（笑）。

余川：そういうことはできなかつたんですね、きつとね。

石井：だから思想の科学の思想的な面の立て直しじゃなくて財政的な立て直しです（笑）。

横尾：やはり実務家で（笑）。

石井：たったひと月何円、タバコ何箱にも該当しませんというアピールを出した。

余川：コーヒー1杯いくらって書きましたね。

石井：ね、やったね。それでけっこう集まり、それで2年ぐらいやれたんです。

横尾：でも日外に入られてすごくお忙しい年ですね。

石井：あのすごい、会社。日外に入ってから20年間は朝9時半から夜は8時、9時、休日出勤、泊まり込みとかをやってたわけですから、とてもほかのところに出るなんてことはできないわけね。会の活動するなんてこともできない。私は思想の科学がありがたいなあと思うのはね、休眠状態を許してくれるわけ。少し暇できたから手伝うわよ、手伝えるわよとか言って出てくる、出たり入ったりが自由なのよ。あいつはもう除名しましょうなんてのはないわけですから（笑）。だからここに書いてあるようにパーク的な組織です。要するに公園、出たり入ったりできる、そういう意味のパーク。

横尾：閉じてないんですね。

石井：でも私の研究会とのつき合いは結婚生活より長いんですから。だから私にとって出たり入ったり自由という、デラシネ的な動きの根みたいなもの、さっき言ったベースキャンプです。勤めている間は時間がなく、会にかかわれませんでした。結局、比較的評議委員会に出られたのは退職後、70歳過ぎてからです。安田会長は個人的にもね共感のもてた人だから。私もシンポジウムとか手伝った。だからこの転向研がなかったならば、私はまったく違った生き方をしたでしょう。やっぱり猛然もう1回考え直して司法の道に進んだかもしれない。

余川：ああ、そうですねえ。

石井：それでおそらく女性の鬼検事で（笑）名をはせたかもしれない。

一同：（笑）

横尾：それも

余川：似合ってるかも（笑）。

一同：（笑）

### 4 - ② 転向の持つ意味、枠組の有効性の変化

石井：戦前は転向の定義というのは権力の強制によって、それに伴う思想や態度の変化と



ということですが、特に6、70年以降、安保以降、高度成長時代に入るともうそういうものが、見えなくなってきたり、なしくずし的な思想の変化、ということで転向の定義もメルトダウンしていきます。だから吉本隆明は思想の自立ということを行い、藤田省三さんは転向概念の自由化というか、枠組のくみかえが必要だということを行っています。70年の思想の科学のシンポジウムでも、みんながさんざんそのことを言っている。

#### 4 - ③ 現在どのように思想の自立を保っているか

石井：私は文字で表現することに興味がない、なぜ編集が面白いかというと、わけ分からないものを形として組み立てていく面白さ。形として表現できるという面白さなんです。日外でも社長は夢みたいなこと言うわけ。でそれを形にするのが私です。こういう形だよって行って形として突きつけるという、そういうことに興味がある。だからどっちかという自分のテーマをはっきり自覚して、いろいろと行動して、形としてバンと示すことに興味がある。

横尾：その面白さは図書館よりももちろん日外のお仕事の方があるわけですね。

石井：そうね、合っていたんだと思う。みんながよく言ったわよ、あなた16年も役人の生活で我慢したねと。だからね、私は図書館に勤めている時は偏頭痛が年中おきるし(笑)、もちろんあの有栖川図書館を建てるため7年間、いろいろ調査をしたり折衝したりして形にもっていく努力をしたり実践的には全力投球しましたが、非常にストレスがあったんだと思う。民間で働いたら倍以上の働きでしょ、給料は安いし、だから実質的に給料は4倍ぐらい違うわけ(笑)。それでも偏頭痛は治りました。それだけ我慢していたんだと思う。といってもまあ図書館は比較的自由だから、自分達のやりたいことやれるところだから良かったけれど、役人には絶対なれないでしょうね。だから、今思想を保っているというのは、一つは図書館のプロフェッショナルとして働いた土台を生かして、図書館資料の保存運動を黒子恒夫さんと一緒にやっています。都立中央図書館たるところがこともあろうに書庫増設の予算がないので14万冊を廃棄するという暴挙に出たのですから、まさに現代の焚書です。

横尾：それはもったいないですね。

石井：とんでもないですよ。蔵書というのはやっぱり一定の目的というか方針で組み立てられているから役に立つんで、それをバラバラに解体したらダメなんです。今回も多摩図書館にある地域資料を、分散し希望する所へあげてしまう。だからそういうこと阻止する運動をやったり、NPO保存図書館多摩を黒子さんたちといっしょに立ち上げて、とにかく図書館の存在の根源となる資料を保存して、要求する人たちに供給できる体制を市民で作りましょうと動いています。住民の貴重な税金で購入した蔵書なのに、一介の社会教育部長がこれは廃棄しますと宣言する、どこにその様な権限があるのでしょうか。効率効率を優先し、書庫を建てられないから捨てればよい。建てられなければ空教室など活用すればよいのに、組合もまた原理主義だからちゃんとした書庫を建てなければと要求するから

## 資料2-②：石井紀子氏インタビュー第2回

よけいダメなのよ。

横尾：実現不可能なことを。

石井：そうそうそう、予算がとれないことをね。

余川：そうですね、学校を利用すればねえ、ずいぶんとたくさん入れられるかもしれない。

石井：そうよ。だからそういう発想がない。もうほんとに東京都はだめですね、だから私は思い切って都立図書館はやめたほうが良いと言っている。

横尾：そうですねえ、お金使って結局ゴミにしちゃう。

石井：そう、そして中途半端なね、貸出はしないわ何はしないわって。それじゃ行かなきゃ見られないという昔の図書館じゃない。

横尾：でも諦めないで働きかけて。

石井：言い続けなくちゃしょうがないもの。2番目には地域に生きるということなんですけれども、東横線の地下化に伴って跡地をどう利用するかという問題がおこり、8年ぐらい区民としてかかわっている。反町駅前に小さいけれども、集会ができるような拠点をつくって、さらにハンディキャップの方たちがつくったクッキーやぞうり、子供服、皮細工ものなどの販売を支援して、その横に集会ができるような拠点を立ち上げ、その運営に事務局としてかかわっています。あとは思想の科学の若い人たちが取り組んでることへの応援、最後にいろんなことを残さないといけないという気持ちになりました。

横尾：それじゃ3番目にそれがくるということで。

石井：(笑) 思想の科学の記録を充実したい。

横尾：この長い戦後はほかの国にはないことなので、『転向』といっしょで今やっぱりバトンタッチしていくことが必要で、そういう面でたぶん私は『転向』にすごく興味があるんです。

石井：そうねえ、あなたみたいな後輩が出てくれて、嬉しいですね。

余川：ああ、そうですね。

石井：それでこれは確認しないとイケないのですが、しまねさんの年表の中で、昭和32年3月11日から『日本読書新聞』に、研究会・サークルの紹介という連載が載っている。それで最初の11日は「個人の歴史」で筑波常治さんが書いている、そういう個人の歴史の聞き書きをやったのね、次〔18日〕が判沢さんの「身の上相談」、それから〔25日に〕小森健吉さんが「小集団」、「転向」は〔4月1日に〕私、松尾紀子が書いている。

余川：コラムみたいな感じで。

石井：ええ、それから弁証法と近代論理学を市井三郎さんが最後〔4月8日〕に書いている。これがあの当時のサークル活動です。

横尾：雑誌がない時期だからここに。

石井：『日本読書新聞』のバックナンバーを見れば分ります。

横尾：早稲田に入っています。見てみます。

\* 個人史との突き合わせ

横尾：それから並行して話しましょうとおっしゃったこの突き合わせであるものですが、レジュメに⑥の1、2、3とありますが。

石井：えっと途中まで話したんだっけ。

横尾：そうですね、少しまだのところを話していただけたらうれしいんですが。

石井：有馬頼寧のインタビューのところまで話したのよね。

横尾：そうですね。

石井：1957年（昭和32年）には総会で戦争責任についての討論が行われた。この時は私は慶応大学を卒業する前ですが、卒業して就職が決まる前には博報堂の図書室の分類つくり資料整理のアルバイトをやっていました。

横尾：そして都立日比谷図書館ですね。

石井：57年（32年）10月25日、当時会報にこれ〔松尾紀子 1957. 「転向研の『長瀬行』』『思想の科学会報』(19), p. 23-25〕を書いているのですが、私は都立日比谷図書館に日本初の司書職採用制度により司書補で採用され、日比谷図書館に入るわけです。でどういう仕事をやっていたかという、まず受付から学生室などの館内奉仕です。とにかく近代的な公共図書館が出現したわけで、本は手に取れるし暖房もあるし冷房もあるでしょ、食堂は安いし。だから開館する2時間ぐらい前からすごい行列です。学生たちは勉強部屋もない時代だから。

横尾：そうですね。

石井：その年にいわゆる昇格試験があって司書に昇格した。でこの時に、中央公論の『思想の科学』の編集委員やっていたかしら。

横尾：いえもうちょっとあと。

石井：それから58年には団体貸出の仕事をしていました。

横尾：それは学校にとか。

石井：じゃなくてね、島への貸出。

横尾：離島。

石井：そう離島、大島、三宅島、八丈島。本を段ボールに入れて送り島内を巡回しているわけです。その巡回本をチェックしに、船で行くとか。9月には結婚をした。

横尾：ご結婚はどのようにしてお聞きしてもよろしいですか。先ほど東大生とは絶対結婚したくないって（笑）おっしゃっていましたが。

石井：私は早大を卒業して時事通信に勤めてから、フランス語をもう一回やり直したいと思った。それで平凡社のお友達に聞いたらサンデースクールの中にいるじゃないって言うんで、それで今の彼が外語のフランス語を出ていたから紹介されて個人的に学んだ。ヴァレリーを読むことになった。ヴァレリーには時事的な評論が沢山ある。例えば第二次世界大戦についてのヴァレリーの所感とか。小林秀雄的な評論、例えばドガの評論とか、明快なフランス語で大変面白い。彼は浅草生れの生粋の下町っ子です。だから私が育ってきた

## 資料2-②：石井紀子氏インタビュー第2回

環境と違う価値観を持っていて権威を振りかざすとかそういうことはないわけ、それで、結婚した。今になって思うとやっぱり、価値観が相当違うことを痛感させられる。昔の結婚の知恵というのは正しかったとつくづく思う（笑）。三島への貸出とか山谷への貸出の仕事のかたわら、60年安保の時には私は組合の機関紙を担当していました。

横尾：図書館の。

石井：そう、組合機関紙。だから60年安保に参加しようという呼びかけ記事を書いていた。それで次に大きいのが職場図書室闘争というのがありました。労働局の局長が館長になり、彼の発想というのは東京都には日本の中小企業の98%が集中しているので、その職場に本を貸し出そうということです。本を100冊単位にセットにして本箱ごと貸し出し、それを巡回させ入れ替えていくわけです。そういうことを始めた。大変いいことなだけけれど、資料の予算はついたけど人がつかないので、人員獲得のため辞表を胸に入れて組合活動をやったわけです（笑）。

横尾：あー。

石井：でこのあたりで『転向』中巻が刊行される。東京都内の隅から隅まであらゆる職種の中小企業の現場をくまなくまわった。ほんとにこういう経験というのはないと思う。例えば、馬喰町とか、そういう問屋街の中にも入り込んで、狭い路地の中を本箱を運んでくわけ。また荒川を越えて、荒川の先にはなめし皮とか差別されている人達の職場がある、それから石鹼を作っている所や薬品工場が多かったです。全く反対に多摩の方は府中飛行場とかそういう所まで行くわけです。今でも覚えているのですが、吉祥寺にコピアという企業の工場があって、どこに置きますかと言ったら、2階の工場の所に置いて下さいと言われて、階段をよじ登るわけ。

横尾：えー。

石井：運転手と2人だからよじ登るしかない。そういう仕事をしていたわ。都内の中小企業を隅々まで見ました。大田区はね、鋳物工場が多い。どういうことやってるかという、砂を敷き詰めたとこに、熱した鋳物の型を突っ込んだり出したり突っ込んだり出したり、さらに水の中つけてる、一日中そういう作業です。

横尾：それは別に、組合運動に役立つような本というんじゃないわ。

石井：ない。

横尾：目的は違う。

石井：そう、読書。

横尾：読書であってその人員獲得のために組合活動、運動をされて。

石井：そう、人員を獲得するために。

横尾：それでいくらか、人員は付いたんですか。

石井：だから、ストライキを起こして、電話が鳴っても取らないわけ（笑）、課長に取らせる。これはもうクビになるなと思ったから辞表を胸にしていた。

余川：それでその百冊の本は、あの、なんていうか有効に読まれたという。

石井：そうです。一番こわかったのは山谷のドヤ街の旅館にも貸してくれという要請がきた時です。山谷視察に一人で行った（笑）。こわかったねあの時は。それであのドヤの中の全部を見て、人が集まるところに置くことになった。それがねえ、本がよれよれになって返ってくるのよ。で、もちろんなくなる。でもやっぱりそれだけ読まれたのね。もちろん貸出したのは大衆小説です。

横尾：それはじゃあ、職場ごとに大体こういうのがお好きだろうというのを考えて。

石井：いえ、読物中心に実務書とかいろいろとりそろえてセットを組む。でその時に集団就職で出てきた若い人が「根っこの会」を作り、そこにも関った。

余川：あ、でもその話面白いですねえ。

石井：働くということはこういうことなのか、私たちの知らない職場を見て刺激を受けました。

横尾：ええ。

石井：あの大田区の鋳物工場は一日中水出しっぱなしでやっているわけだからねえ。問屋街は問屋街でせまい所を本を運んで行くわけですから。

横尾：それは石井さんの発想だったんですか。

石井：それは労働局長だった人が館長になって発案した。それはいい発想だった。一日中車でまわっていたから私は2回流産したんです。

横尾：先ほど偏頭痛っておっしゃっていましたがけれどもやっぱりいろんなストレスとか身体的だけでなく心のことも。

石井：車が一番悪いんじゃない。朝10時に出かけたなら夕方帰ってくるという仕事です。お昼は荒川のところでのんびりお弁当かなんか食べるけど（笑）、それでまた荒川越えずうっと回っていく。暑いでしょうからこれを飲んで下さいなんて言うと、ぶっかけ氷にかけるあの黄色の毒々しいシロップだったりして。

余川：（笑）

横尾：大丈夫かなというよな。

石井：（笑）持って帰った。かつては都立図書館は近代公共図書館のパイオニアとして新しいサービスを展開していたのに、今はひどすぎます。1963年には第1回の市民学校の企画・運営グループとして動きました。

横尾：ですね、原案をこの前見て、これ石井さんのものなんですけど〔「趣意書 B 案」市民学校運営委員会 1963.「市民学校設立経過メモ」『思想の科学会報』(39), p.11〕。

石井：あらそうなの（笑）、忘れてました。

横尾：A案が横山さんの起草で、B案が石井さんの起草なんですね。

石井：こちら辺がそうだね、あ、全然違いますね（笑）。

横尾：すごく、やりたいんだという気持ちが伝わって来るんですけども。

石井：そうです。「コモンマンの哲学」というかデューイのことが残っていたんですね。

横尾：そうですね、私これ最初、鶴見俊輔さんの影響かと思ったら、どちらかというのと和



## 資料2-②：石井紀子氏インタビュー第2回

子さんの方なんですよね。

石井：そうです。

横尾：最初高島さんからですね、お話が出てくるのが。1962年9月10日、第1回提案者会議、「高島前事務局長が以前から考えながら多忙のため実現できなかった公開講座形式の学校の構想の話をする。同席の石井紀子、松本市寿、横山貞子氏、それに私」山領さんです。「は、かなり具体的なイメージを持つようになった。」一度社会に出てしまった人がどういうふうに分かるとか。自分で学び直すか。

石井：そういうことねえ。生涯学習という発想がない時代ですからね。

横尾：そうですね。石井さんご自身は何回ぐらい出られたのかなと。

石井：私はね、川喜田〔二郎〕さんの講座は責任を持って全部やりました。だけどその次あたりからは勤めとの関係で出られない。最初のとば口を立ち上げただけだと思う。

横尾：第1回、第2回まではやっていたらいいと思います。川喜田先生のもとにアタックグループをつくったりとか。土台をつくっていたんですね。

石井：まつおのりこで書いているんですね。

横尾：こっち〔「第二回市民学校について」『思想の科学会報』(41), p.10-12〕はまつおなんですね。

石井：うんそう、ね。ちゃんとやってたんだ(笑)。

横尾：やってますね。すごく熱い気持ちでやっていたらいいので、この前〔2009年11月30日〕くろこさんがサークル戦後史研究会に市民学校のことをお話にいらした時に、本当は山領さんと石井さんがいらしたればもっと立ち上げの様子があったかと。

石井：どっちかというところ、くろこさんは聴講生というか聴きにいらしていたから。そこから思想の科学に入った。

横尾：だから市民学校の聞き取りはもう一回やってもいいねなんてことを道場さんと話しているんです。

石井：へえー、こんなことやってたんだね、こんなことちゃんと書いてたんだ。

横尾：書かれていますよ(笑)。

石井：やっぱり、図書館に勤めただけのことはあるわね。学校教育でなく社会教育の中で誰にも指示されない自由な学校が欲しい。

横尾：あと、組合活動の影響もあるのかなと。「安保以後のとりとめのない状況の中で」運動が下火になっていると。

石井：うん、そう。賃上げでね。そうか、やっぱり横山さんと全然違う(笑)。

横尾：かなり違うんですよね。

石井：ええ、やっぱり自分が民衆の大学である公共図書館という場にいたからで、今言っていたようなことを現場でやっていたわけです。

横尾：やっぱり今のお話聞いてようやく。ちょっとあのトーンが高いんですね、石井さんの方が、横山さんよりもですね。



石井：ほんとうに中小企業というのはすごい、すさまじい職場です。その中でみんな黙々と働いているわけ。あれを見なかったら、ああいう仕事に関らなかったらずいぶん考え方が違うと思う。

横尾：ご自身も何か学びたいという欲求もやっぱりそういう中で出てきたんですか。

石井：そう。だって走り回っているばかりじゃしょうがないわ。頭がばかになるでしょ(笑)。ここに書いてあるように、ちょうど安田さんがせっせと書いている時に私はその新館、今の有栖川図書館を建てるために奮闘努力していた。1967(昭和42)年に係長に昇格し新館の整理体系を考えると忙殺されるわけです。美濃部都政が67年に誕生しているわけです。70年安保闘争が激化、公園の敷石がはがされ、すごい状態でした。翌日出勤すると、催涙弾の煙が公園全体にたちこめている。公園の柵なんか取られているし壊れている。

横尾：それは学生なのか社会・・・だれがやったんですか。

石井：学生。

横尾：なんかどっちかというとな安保というとな60年の方が大きかったてイメージですが。

石井：でも70年がすごかったね。

横尾：過激で。

石井：過激。60年はフランスデモをやっていた。もちろん国会への突入、樺さんの圧死などああいうところは修羅場だったけれど。フランスデモは道路いっぱい全部手つないで歩くというのだから、棍棒を持って殴りかかるというのはそのフランスデモのときは殆どなかったわけ。国会内や周りのところはすごかった。どうして今ね、こんなにひどい状況の中で大衆運動が起きないのかと思う。老人たちも、誰か、社会党でもどこでもいいから、声をかければ集まるというわけ。だけど院外活動をやらないでしょ。

横尾：やらないです。ただこの前銀座歩いていたら、あれは雇用のことだと思いますが。

石井：だけどあれだって大規模なものじゃないじゃない。連合が旗振ってるわけじゃないじゃない。

横尾：ただ思ったより長かったんです列が。今まで短かったんですが。

石井：連合とか自治労などが号令をかけてやらないじゃない。だめだよ。

横尾：やっぱり非正規職員を多くした、小泉改革でもってもう組合がちっちゃくなっちゃったんで。今また組合自体が違う形態を模索していますよね。

石井：一方地元では、1971年から72年にかけて飛鳥田市政のもとに日照権運動をしました。

余川：横浜で。

石井：今住んでる上反町でマンション建設により日照がおかされるということです。

横尾：これはまったくの地元でのご活動ですね。

石井：そう、で結局課長試験をこれでファイにってしまった。

余川：そうなんですか。

## 資料2-②：石井紀子氏インタビュー第2回

石井：そうなの。課長試験ってすごい難しくてね、30%しか通らない試験。ものすごい猛勉強しないと駄目です。男の人なんか雨戸閉め切って勉強したとか（笑）そういう逸話が残るぐらいです。飛鳥田市政でその日照権の運動やったんだけど飛鳥田さんの下にいた役人が、両方にいいように言って、結局クビになってしまったけど。1973（昭和48）年、有栖川新館開館、9時に美濃部知事がやって来て挨拶してくれたんですが、この美濃部都政が誕生したことによって、区市町村立図書館に補助金が出て、それで今のように身近に沢山図書館ができた。美濃部都政が図書館行政に果たした役割は大変なものなんです。あれがなかったら今のように全都的図書館ネットワークはできませんでした。

余川：ああ、そういうことがあるから今削ろう削ろうとするんですね。

石井：そういうことね。有栖川が開館した時も面白かった、美濃部さんが読むメッセージを全部作って（笑）、美濃部さんをお願いに行かなきゃならない。すばらしい開館式ができたんですけど、それを終えて5月に退職をするわけです。この頃はもうとにかく親戚中からあなたが仕事にかまけて子育てを聖路加出の姉におしつけているから彼女が働けない、辞めたらと言われた。

横尾：あ、あの一番上のお姉さま。

石井：しょうがなく辞めた。でそれと同時に『朝日新聞』のインデックスを作っている先輩からぜひ手伝ってほしいと言われ、それでそっちに行ったんですが、まあ大変よね、今までの何倍も働く（笑）、とにかく新聞だから毎日毎日インデックス作らなくちゃならない。日本でも新しい仕事でしょ。でもね、すごく面白かったのは、今でも覚えているんですが、朝日新聞社の分社が有楽町の駅前にあり出版関係の仕事をしていた。でその時〔1974年8月30日〕に丸の内の三菱重工のビルが爆破された。何事かというんでみんなが駆け付ける。そうすると夕刊にすぐ載るでしょ。と同時に、これのキーワードどう付けるか、「三菱ビル爆破事件」とか、そういうキーワード決めないといけない。

横尾：それは付けてから、後日、改訂したりすることは。

石井：キーワードは事件名でぱっと付けるでしょ。全部その関連の記事はその事件名に付けることによって検索できるようにするわけです。

横尾：じゃキーワードは一旦決めたらそのまま行くということで。

石井：もちろん、例えば最初は「自殺」が「殺人事件」に変わることもあり、途中でキーワードが変わる時は参照を付けて関連して検索できるようにします。そういうテクニックもある。

余川：ああなるほどね。

石井：それで20字ぐらいでその記事の要約を書くわけ、そういう仕事をずっと続けていた。でもそれ面白かったよ（笑）、毎日動いてる社会と密接に関係しているから。図書館を辞めたら前にも増して、うちに新聞なんか山と積んで、昼夜分かたず索引取ってるわけでしょ。お正月なんか大変よ、三が日なんかじゃないじゃない、いつにもまして量の多い新聞が出るので（笑）。

横尾：量多いですねたしかに。

石井：辞めて初めて私と息子が向き合った。

山領：おうちにいらっしゃるようになった。

横尾：おうちで全部やられていたんですか。

石井：いや、行ってたんですけどね。

山領：自由になったの。

石井：こんなに大変な仕事だというのが分かったのね。

山領：見えるようになった。

石井：何しているか見えるようになった。

山領：図書館じゃ囲まれてて見えないわけよね。

## 追記

〔インタビューの校正を進める過程で、石井氏より以下の文章追加のご要望を頂いた。インタビュー中に挿入することも検討したが、追記 1 は石井氏が自身の転職を女性の転向と家族の問題の観点から、追記 2 は情報探索ツール作りの仕事の意義を転向研究とのつながりの観点から、まとまった文章の形で回顧している点が重要であるため、そのままの形で掲載することとした。〕

### 追記 1：転職、転向と家族の問題

結局私にとっての転向は、自分の職場という根拠地を変えざるを得なかったことです。プロフェッショナルとして民衆の大学である公共図書館を選んで、その道で、その場で仕事をずっと続けることを考えていたんですけど、結局やめざるを得なかった。親せきや家族、とくに姉から「この子をどうするのよ」って言われた。それですよ、引きずり下ろされた。家族の問題というのは、戦前の転向でも大きな要因だったと思う、特に女の人の場合。だから、女の人で非転向を貫く久津見房子かな、家族持たなかったでしょう。それと通じると思います。

### 追記 2：転向研究と、情報探索ツール作りの仕事とのつながり

私は図書館を辞めてから「朝日新聞記事索引」の仕事を経て、情報を探すツール作り専門出版社日外アソシエーツに入り、以後 20 年間辞書・事典、書誌・索引や人物情報、書籍、雑誌論文などのデータベース構築の編集者として働いていました。先に述べた、しまねさんの遺志を継いだ『近代日本社会運動史人物大事典』のほか戦前・戦中の個人の転向の軌跡を文献でたどるために欠かせぬツールとして、福島鏗郎、大久保久雄共編『戦時下の言論』2 巻を 1982 年に刊行しました。福島さんは雑誌の収集家として著名な方ですが、そのために神田神保町の会社にガードマンとして勤め、徹底して雑誌の収集に力を尽くした方です。戦後は国会図書館により雑誌記事索引が作られ、今ではオンラインやネット検索が可能ですが、戦前については作られていません。唯一、体系的継続的な索引は、「東京堂月報」と「読書人」に掲載された“支那事変関係記事索引”“第二次欧州大戦関係記事索引”“大東亜戦争関係記事索引”で、これらは昭和 12 年 9 月号から 19 年 4 月号までをカバーしています。さらにそのあと 12 月までを 130 種類の雑誌から採録追加した『大東亜戦争書誌』3 巻を底本として、発言者名のもとに再構成したツールです。

まさに、戦中「誰が、いつ、どこに、何について」発言したかが、ひと目でわかり、支那事変勃発から大東亜戦争末期にいたる歴史的状況下で、政治家、財界人、軍人から文化人に至る約 2 万人 7 万件の言論活動が文献により実証できる唯一のツールで、転向研究のことが私の頭になかったら、単に著者名索引にとどめこんな企画は思いつかなかったでしょう。例えば、高村光太郎を引けばその思想的な軌跡が読み取れます。私にとって忘れがた

い刊行物です。

鶴見さんは帯の文章で、「私たちは今の自分にとって都合のよいところに故郷を求めたがる。しかし、1931年から45までの戦争時代は、うたがいようもなく、私たち日本人にとっての故郷である。／その故郷の地形を知り、その時代の先人の精神の動きをたどりなおすことは、私たちの現在と未来を見さだめるために必要な仕事である。／この時代の著作を今の自分の都合にあわせて簡略化せず、くりかえしもとの影に戻ってとらえなおすために、たよりにできる地図が、福島鏗郎・大久保久雄共編の「戦時下の言論」である」とのべています。



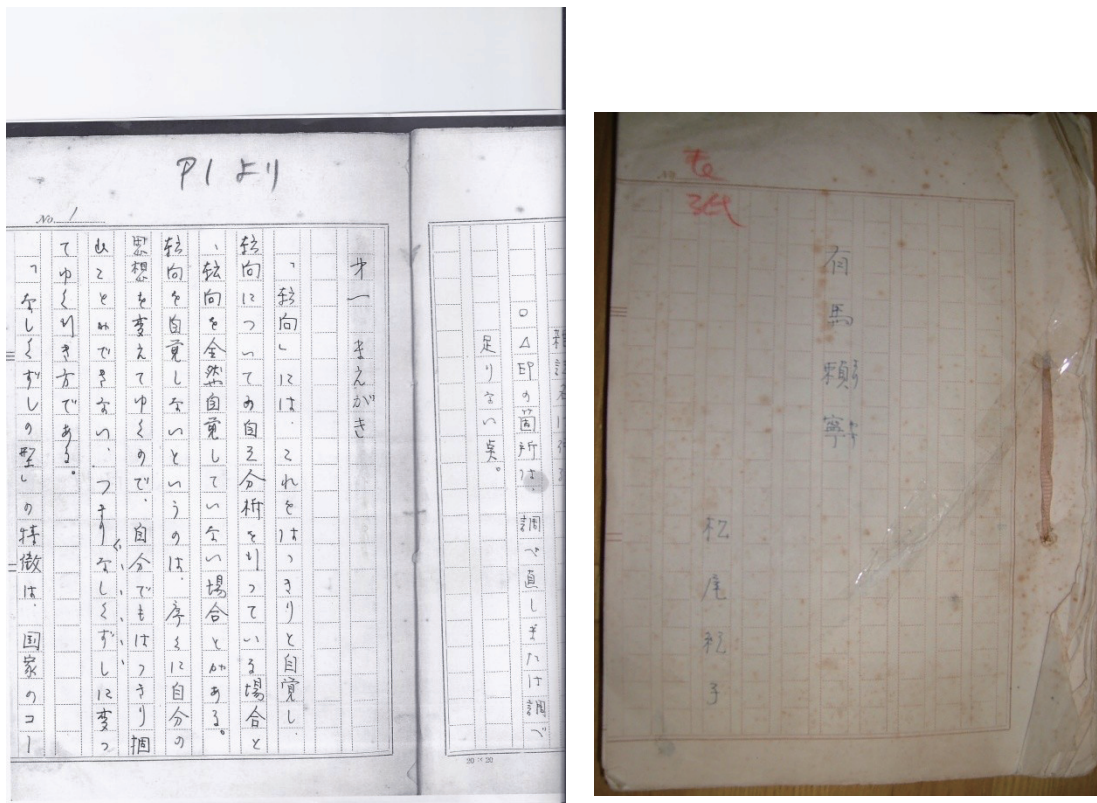


図1 松尾紀子「有馬頼寧」，原稿用紙，128p.（石井紀子氏所蔵）

謄写版作成前の清書と思われる。細かい訂正が下の謄写版に反映されている。

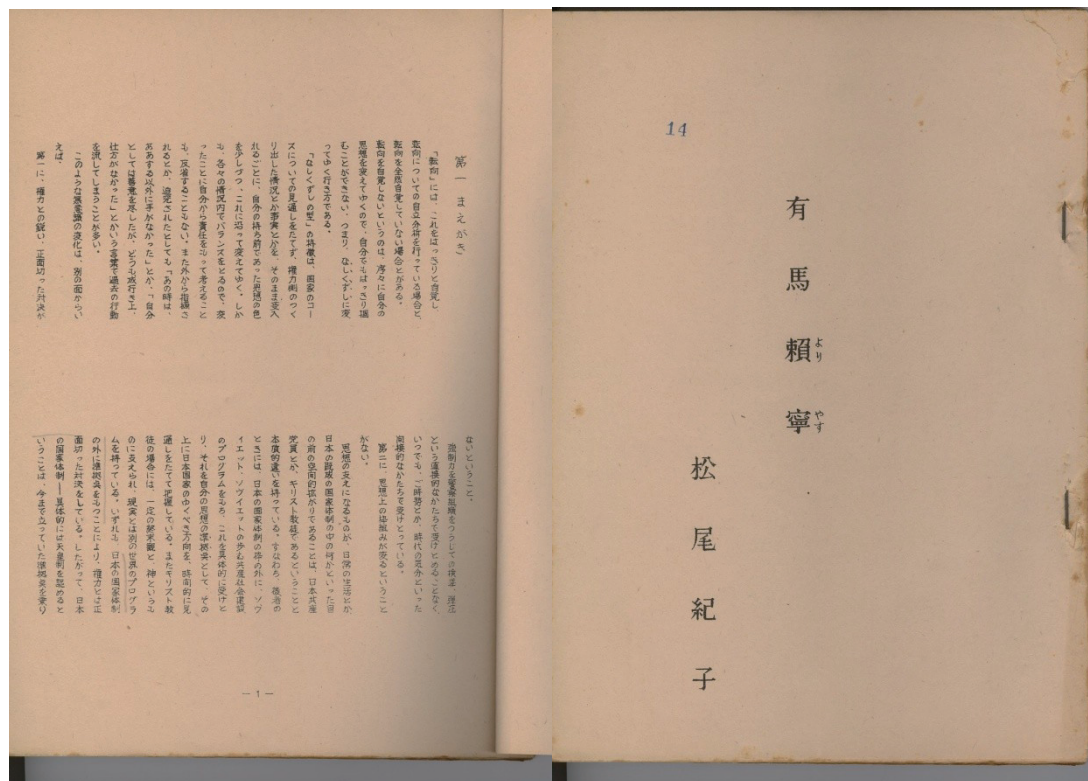


図2 松尾紀子「有馬頼寧」，謄写版，B5，50p.（山領健二氏所蔵）



## 石井紀子氏インタビュー第3回

時と場所：2010年1月29日 11:00-12:00,13:00-15:00、思想の科学社（新宿区百人町）

同席者：余川典子氏

### 追加質問1 - ① 思想の科学入会と転向研参加はどちらが先か

石井：思想の科学と転向研のことで、「思想の科学への入会と転向研への参加どちらが先でしたか」ということなのですが、思想の科学への入会は、講談社版が5月に出ていますね、それでそれを見たんですから、そのすぐあと6、7月ごろじゃないかと記憶しています。

横尾：講談社の頃というのはハガキとかで入会するんですか。

石井：いやいや、申し込んだはずですよ。そう記憶しているんです。それで転向研の第1回会合は11月ですから、たぶんその前じゃないかと思えます。

### 1 - ② メンバーの印象（第2回インタビューp.2で触れたメンバー以外）

石井：それからそのいろいろとね、その人名が出てきますよね、その当時の。ここ〔p.252 図1に部分を掲げた石井氏作成のメモ〕に書いたんですけども、佐貫さんとか畑中さんとか魚津さんとはあまり親しく話さなかったように思います。佐貫さんと魚津さんは出てらしたけど畑中さんはそんなにずっと出ていなかったように思うのね。で掛川さんはもう研究者として、先輩というか、研究者としての道を進んでいらしたから、たぶん会合には出ない、まあ出たとしても自分の担当のところをお話になる程度で、定期的には出ていないはずですよ。だから、原稿を寄せたりとかそういうことだったというふうに思います。それで今枝さんなんですけど当時たしか墨田かあの辺りの市立商業高校、正式名称は山領さんに聞けば分かると思うんだけど〔東京都立京橋商業高校、現・晴海総合高校〕、その教師でらしたのね。だからサークルメンバーの中では社会人でしたね。しかも兵隊経験もあったんです。だから兵隊についての書いてらっしゃるでしょ〔「兵隊の転向」『思想の科学会報』(12), p.2-5〕。たしか丹沢だったと思うんですが沢登りで落下したんです。そのせいで下半身不随になった〔会報には以下の記述がある。「旧転向サークルの今枝義雄氏は、七月一日妙義山に登山中おちて重傷を負い、附近の病院に収容されました。そこでの診断では見通しがくらく、二、三の新聞には、腰椎骨折と出ていましたが、最近今枝夫人からいただいたお手紙によれば、病状の見通しはあかるくなったそうです。下谷病院にすでに移られた由、一日も早く全快されることを祈ります。』『思想の科学会報』(35), p.23, 1962-7-15〕。それで私、病院に駆け付けたんですが、あの頃ですから、足をこうやって懸垂で吊らされてるわけ。お母様とご夫人が付き添って、もうこの、寝たままの状態でらしたのね。で結局はそのまま回復なさらなくて、ずっと自宅療養で車いすの生活をなさったわけ。今でも生きてらっしゃるんだけど、去年西さんと山領さんが訪ねてます。〔2011年10月逝去〕

横尾：あ、そうですか。

## 資料2-③：石井紀子氏インタビュー第3回

石井：藤沢に住んでんのかな。

余川：そう、あの辺ですね、藤沢じゃないけど〔藤沢市辻堂〕。後藤さんがお元気だった時も山領さんとよく行ってらっしゃいましたよね。

横尾：あら、じゃあこの方も、もし山領さんから話がつけば、お話を伺うことができるかも。

石井：そう。私も去年行きたいと言ったの。足が痛いから行けなくて西さんと山領さんが行ってくださった。

余川：ずうっと昔山領さんからお聞きして、お嬢さんがいらして、お嬢さんが漫画家だったっけ〔川名香津美氏〕・・・ちゃんとした仕事、ちゃんとしたっていったらなんですけど。

石井：彼は車いすだったんだけど、いわゆる家庭教師的な教える仕事、そんなに大勢を教えていらしたんじゃないと思うんですけど、そういう仕事をずっと続けていらしたんです。年賀状が必ず来ていたんですけど、今年は来なかった。だからあるいは、もうね、かなりのお年ですから。

余川：そうですね、これ見たら兵隊経験ありですものね。

石井：だから鶴見さんたちと同じぐらいの年でしょう、89歳ぐらい。〔鶴見氏より1歳年長の1921年生れ〕

横尾：少し上だったかもしれませんね、鶴見さんより。

石井：85歳ぐらいかもしれないし。これ山領さんに聞けばよく情報が分かりますので、近況まで含めて聞いて下さればと思います。でもしあなたが訪ねていくようなことがあれば私もその時ついていきたい（笑）。

横尾：はい、ぜひ。

石井：横山貞子さんは同志社でらしたから京都が中心だったんです。身上相談など初期のお仕事は京都です。京都の同志社の関係のグループと言うんでしょうかね、そういうところに入っていたから、私も直接、お目にかかることは転向研以外になかった。彼女が、私がライブラリースクールに入った年に、慶応の英文科の大学院に来られた。弟さんや妹さんたちも慶応です。東横線学芸大の鷹番町にお子さんたちが住むお家をちゃんと借りて、たしかお手伝いさん来てたんじゃないかな、そこで住んでらしたわけ。弟さんは亡くなられたとおっしゃられたけど、たしか慶応の医学部出身なんです。それで妹さんが私の後輩で図書館学をお出になった。そこで転向研のお鍋囲む会みたいのもやったような気がするんだけど。まあ常々の会合じゃなくて、なんかそういう時に集まった感じですよ。

横尾：やっぱり独り暮らしじゃないから集まれたというところが。

石井：そうですね。それから親しくなってここに書いてあるように鷹番町の家でお食事会をしたり集まっていました。東京にいらしたから、箱根の合宿なんかにも彼女は出られていたわけです。それからアメリカに留学した。長いこと関西に暮らしていたのでつき合いはとだえていましたが、一昨年（2019年）の総会の時に出てらしたのね。

余川：去年も。

石井：ええ、去年もいらしたけど一昨年たしか何十年ぶりにお会いした。

余川：神楽坂でやった総会は一昨年かな。

石井：2、3年前、3年前ぐらい。

余川：でもあの、その後全部一緒に見えられていませんでした？あれから。

石井：その時ね、何十年ぶりに会った。そう、2年前のときは池袋でやったでしょ。でその時は彼女が早めに帰るとおっしゃられ、私が杖ついていたものですからタクシーで送って下さった。それからメールで近況やらご報告をお送りしています。

余川：私がお送りする時はご存知かと思いますがっていつも書いて送ってた（笑）。

横尾：大体ご存知で。

石井：ということです。だからこの絆というのは大事にしていきたいなと思います。お互いそんなに人生が残っているわけじゃないですから、と思っているところです。

### 1 - ③ 途中から加わったメンバー（藤田省三氏、安田武氏以外）、④しまね氏の参加時期

石井：それで、途中から加わった方なんですけど、詩人の秋山清さんを覚えています。研究会に出てきて下さって非常に闊達に報告をして下さったんです。私も秋山清さんて初めてそこでお目にかかったんですが非常に印象に残っています。オープンな雰囲気、飾らないし、やっぱり詩人というかそういう感性のある方だと思いました。

横尾：そうですね、秋山さんもきっとオープンにするつもりで来てらしてるわけですし。

石井：そうね、すごくすてきなおじいさんよ。おじいさんて言う失礼だけど（笑）。

余川：でもそのころからあの、おじいさん。

石井：そういう感じね。片桐夫妻は途中から出なくなった。

横尾：そうですね、何も報告は。

石井：最初の頃2、3回来ていらした。この間お話したように、早稲田の学食で、二人でパンを互いに食べていた人が来てるって感じだった（笑）。

横尾：あの一つ、山領さんの記憶と少し違うのが、山領さんはしまねさんが少し遅れて入って来たっておっしゃるんですね、でも石井さんは最初からいらしたと。

石井：私最初に行った時に、非常に印象的だったから。しまねさんの詳細年表にあるかな、年譜〔石井紀子、後藤宏行、山領健二 1988。「しまね・きよし著作中心年譜」『思想の科学会報』(120), pp.28-34〕。追悼号のためにつくった。

横尾：参加した正確な時期というのは出てないんですね。

石井：参加時期出てなかった？

横尾：54年11月に『思想の科学』に投稿されたことは出ているんですが。

石井：そうね。

余川：あれですね、しまねんさんは一生懸命ほかの年表作ったけれども自分自身のことは（笑）。

横尾：意外に灯台もと暗しというところかもしれません。この年譜は石井さんと山領さんと後藤さんがおつくりになったんですね。

石井：そうなの。

横尾：石井さんはやっぱり、黒いセーターを着てヒゲだらけの、という強い印象が。

石井：そうなの、まあその何回目だったかという記憶はないんだけど、たしかにね。

## 資料2-③：石井紀子氏インタビュー第3回

横尾：初登場で印象深いということは間違いない。

石井：とっくりの黒いセーター着ていた。

横尾：大きい方なんですか。

石井：いや、背はそんなに大きくない。後藤さんが一番堂々とした体格をしていました。

### 1 - ④ 中下巻へは関わったか、週1の会合は続いたか

石井：で次に中下巻つくる時というのは、私は当時日比谷図書館の職場でものすごい忙しく奮闘していましたから出られませんでした。週1の会合もやってなかったんじゃないか。

### 1 - ⑤ 佃実夫さん、黒子恒夫さんとの出会い、思想の科学という場

石井：それで次に佃さんとの出会いなんですが、あのここ [p.252 図1に部分を掲げた石井氏作成のメモ] に書いてあるように、中公版の雑誌に佃さんが59年8月号に「戦時下の読書日記」を投稿したわけね。でそれで初めて佃さんて名前を知ったわけです。それで私生意気にそれに対して批評かなんか加えて送ったりしたの覚えているんですけど。でこの時私は日比谷に勤めていたわけです。でこの時他に編集委員として片桐さんが入っていたのかな。

余川：持って来ましょうか、ちょっと。

石井：あ、索引〔思想の科学研究会索引の会 1999.『思想の科学総索引 1946-1996』思想の科学社〕ね。

余川：索引ね、置いておけばいろいろと便利だから（笑）。

石井：全部原稿を読んでコメントを送っていた。私なんかそれをすっかり忘れていたんですが、こんの・そうさんがね、去年だか会合で「そういえば原稿について松尾紀子という人からご指摘頂いちゃって」とか言ってたから（笑）あらそういうことやってたのねという。覚えてるのね、やっぱり相手は。

余川：それはそうですよ（笑）。

石井：怨みに思っていたのかもしれない（笑）。

余川：そんなことはない（笑）。

石井：ということで、その時に初めて佃実夫さんのお名前を知りました。佃さんが勤めていらした徳島県立図書館というのは、当時ユネスコの実験図書館に指定されていたと思います。でこの館長は蒲池〔正夫〕さんでなかなかの文化人でね。鶴見さんや知識人を京都から呼んだりして講演会をやったりとかそういうことやってらした方なんです。蒲池さんも図書館人としては有名な方です。それで、私が都立中央図書館に勤めてるってことを佃さんは知っていて、横浜の方に引っ越しするので、ついてはその日比谷に入れませんかということで、それで私もいろいろ聞いてみたら年齢制限があつてだめで、で横浜の方が条件があうので、横浜市立図書館に転職してらしたわけです。

余川：あ、そうなんですか。

石井：で奥様も横浜でお仕事を探したわけ。そういう経緯がありました。それから佃さんとご一緒したのは占領研のほか、辞典の雑誌の特集とか別冊〔「辞典の歴史と思想：作る人

と引く人の対話』『思想の科学』別冊(10), 6(63), (271)]です。それから私が勤めていた日外アソシエーツで出した日本で初めてのコンテンポラリー・オーサーズ『現代日本執筆者大事典』、アメリカではコンテンポラリー・オーサーズとあって、執筆者の経歴から文献が全部載っているツールですが、そういうのを今度日本でも作ろうということになって編集委員に入っていて、お仕事をご一緒したんです。仕事をとおして佃さんに非常に教えられた、やっぱり私の大先輩ですから。『辞典の辞典』〔佃実夫, 稲村徹元編 1975. 『辞典の辞典』文和書房〕では彼の指導で解説解題を書く訓練をしました。だから佃さんとは雑誌『思想の科学』を通じての出会いというのがあって、それ以降ずっとプロフェッショナルとしてのお付き合いが続いたということになります。

横尾：他の方々ともありましたか。思想の科学という場所で期せずして出会って、プロフェッションでつながる、という。

石井：ないですね。黒子さんの場合にはそういうつながりじゃなくて、私が慶応に入った時に、カマボコ兵舎みたいなどころを利用してやってる図書館があるよと教えられ、川崎のあたりを訪ねた時に黒子さんと出会った。彼は北海道で新聞記者をしたのち、図書館の世界に入られた方なのね。その後保谷図書館の館長になられたので保谷を訪ねて行ったりというつながりなんです。その後彼が市民学校に入られたのち会員となられたので、非常に親近感があることになったわけです。で今でも2年前に立ち上げたNPO 共同保存図書館多摩で一緒にやっている。

横尾：じゃあ、ちょっと違うんですね。

石井：ええ、ちょっと違いますね、やっぱり佃さんとは雑誌の投稿から始まって、ということですね。それで結局家族ぐるみで今でもお付き合いが続いています。

横尾：今も奥様〔佃陽子氏〕は川崎に。

石井：川崎じゃなくて横浜。けっこう転居するのがお好きな方で(笑)。

横尾：そうですか(笑)、お元気ですね。

石井：あの、非常に活発な快活な方です。

余川：そうですね。

石井：それで筆の力がおありになる。だから結局佃さんが亡くなった後、彼女がエッセイ、小説も書かれている。

余川：なんかエッセイスト賞みたいなのももらったことありますよね。〔1989年、「通過駅・上大岡」で第20回日本随筆家協会賞受賞〕

石井：佃実夫伝をまとめた。

余川：ええ、思想の科学社から出た『リスボンに青い風：最後の「文学青年」・佃実夫と私』(1998)です。

石井：同人誌をお出しになったりとか、いろいろな活動をしてらして今も1、2本は小説を書いていらっしゃる。だから佃さんが培ったものを、彼女が受け継いで、作家というか、もの書きになっている。

横尾：もともと奥様はどういう出自の方なんでしょう。佃さんはパブリックライブラリーにすごく力を入れてやられていたわけですが。



## 資料2-③：石井紀子氏インタビュー第3回

石井：彼女は小学校の先生。

横尾：もともと大衆とか民衆とかそういう寄りの方では

石井：彼女の場合そういうことは意識してないと思う。お父様の仕事の関係で、シンガポールとか外地にも住んでらした。

横尾：戦時中ということですか。

石井：戦時中。だからわりに、考え方のスケールが大きい。

余川：そうかもしれませんね、うん。それで徳島で出会われるんですよね。

### ④ 安田さんの妹さんと、思想の科学、安田さんとの出会い

横尾：あのもう一つ横道にそれでもいいですか。これ再追加質問で、これも混ぜ込みながら伺いたいんですが。その、場としての思想の科学と人のつながりですね、安田武さんの妹さんというのは、早大の。

石井：早稲田の同級生。

横尾：それで安田武さんと思想の科学というのはあちらはあちらでこう、偶然。

石井：そうそう、偶然ね。

横尾：全然、安田武さんの妹だからというのでは。

石井：ないのよ。思想的な意味ではお兄さんと切れていた（笑）。湯河原に尾崎一雄が住んでいて、安田武さんは要書房の編集者として活躍されていて、尾崎さんと非常に親しかった。

### 1 - ⑥ 『思想の科学』の中で第何次、いつごろが好きか

石井：やっぱり自分が編集に関わった時代です、中央公論版の最初のところにあたります。この時は結婚していないですから松尾紀子という名前ですけどね。でこの中ではやっぱり谷川雁の「工作者の論理」〔1959年1月号〕、これはほんとに感激した、職場に勤めていたから。それと上坂冬子さんの「職場の群像」が〔1959年2月号から〕始まりましたね、新人賞第1号です。推薦の言葉を書きました。それから60年〔7月〕の「市民としての抵抗」という特集。

余川：うん、これはやっぱり鶴見さんの構えが違いますね。

石井：鶴見さんの編集後記が中央公論版の思想の科学の編集委員会について触れている。

横尾：その前は休刊していますよね、ずっと。

石井：永井道雄さんが編集長だったと思います。

横尾：石井さんは途中でご結婚なされているんですね、59年の8月。

石井：そうです。

横尾：このまた忙しく慌ただしい時期に編集委員を。

石井：（笑）

横尾：この「工作者の論理」でT氏ってやっぱり鶴見さんに向けているんですか。

石井：どうなんだろう、たぶんそうでしょうねえ。

横尾：簡単に普遍的なものとか個別的なものをくつつけれると思うなという、なかなか辛口

な。編集後記にはこういうことも書いていますね、『思想の科学』独自のスタイルを創り出すため、私たちは毎号編集の上で実験を重ねてゆきたい」『思想の科学』編集委員会「編集後記」『思想の科学』4(2), (46), p.96]。

石井：あ、ここにはメンバーが書いてないですね。

横尾：でもこの後みなさん編集後記を書かれてますね。[第4次の編集後記の執筆者は1959年1月の1号から順に、①永井道雄、②鶴見俊輔、③松尾紀子、④日高六郎、⑤関根弘、⑥片桐ユズル・永井道雄、⑦高田佳利、⑧佐藤忠男、⑨松本三之介、⑩粕谷一希、⑪佐藤忠男、⑫和田恒、1960年①松本三之介、②粕谷一希、③鶴見俊輔、④野中正孝、⑤佐藤忠男、⑥久野収、⑧藤田省三、⑨荒瀬豊、⑩粕谷一希、⑪中村智子、⑫野中正孝、1961年①荒瀬豊、②大野力、③市井三郎・大野力・荒瀬豊、④藤田省三・中村智子・倉沢爾朗、⑤多田道太郎、⑥市井三郎・大野力、⑦荒瀬豊・市井三郎、⑧市井三郎、⑨大野力、⑩市井三郎、⑪市井三郎、⑫市井三郎]

石井：書いている。投稿規定も記されています。

余川：はい。

石井：それとやっぱり70年代女性の問題。サブカルチャーや「辞典の歴史と思想」[別冊10, 6(63), (271), 1976-6]とか、聞き書[「方法としての聞き書」臨時号, 6(111), (319), 1979-10]などの特集では、文献解題をけっこうやりました。「辞典の歴史〔と思想〕」でサブカルチャーの辞典の解題を書くのに、図書館のレファレンスブックの棚を頭から全部見ていった。

横尾：へええ。

石井：あれは勉強になった。それでもうね、宮武外骨の『ありんす語辞典』などを見つけたわけです(笑)。

横尾：はい。

石井：いや、面白いんだよね、辞典の編集者の怨念というか執念が見えるわけです。

余川：それぐらいじゃないとできないということですよ、そうですね。

石井：あの仕事はサブカルチャーの辞典という視点で見ていったから面白かった。

余川：今でもあるかしら、ありんす語なんて。

石井：あの、保存されているわよ。

横尾：60年代は石井さんご自身はあまり関らなかった年代なんですか。

石井：書いてないわね、書けないの忙しくて。編集委員会に出ていくのと原稿読みで精一杯。

横尾：60年代はしまね編集長の時代で・・・

石井：中央公論版は59年から60年[59年1月から61年12月まで]。

横尾：そうですね。自主刊行に移ってからの62年から70年くらいの間というのは。

石井：あ、そうだね、こっから線が引けるんだね。

横尾：引けるんですね、それでその間はちょっと固いような感じがするんです。しまねさんのもとで社会主義とか国家主義とかを思想的にがちり掘り下げて、少し硬い感じがあって。70年代に入ると・・・

資料2-③：石井紀子氏インタビュー第3回

石井：やっぱりここはね、編集者の吉田貞子さんががんばったんです。

横尾：ああ、そうですか。

余川：やっぱり時代ですよ、ウーマンリブが出てきて。

石井：ウーマンリブが巻き起こって、時代よね。

余川：それで60年代の頃って学生運動とかそういうのがあったからですよ。

石井：そう、安保があってそのあと。

余川：だから思想の科学もそういうのいっぱいやっていますよね。

横尾：そうですね、繰り返し。

余川：新左翼とか言われた時代でしょ。

横尾：そうですね。

石井：好きなのは、まあ59年代（笑）というか、60年代じゃないのね。

横尾：59年代（笑）。

石井：それで80年代になってくるとだんだん読まなくなって（笑）、90年代になるといやになる（笑）。だから送られてきてもさあっと見て、気に入った論文だけ読んで捨てちゃうっていうか。このあたりは我々の年代の人はあまり読んでいないと言ってたわ。

横尾：「欲望三部作」〔「有名になりたい」8(7), (503), 1993-8、「彼女がほしい」8(8), (504), 1993-9、「お金がほしい」8(9), (505), 1993-10〕とか。

余川：だからそれはテーマの付け方をそのように付けたので、それこそ前だったら「好き嫌いの現象学」〔6(123), (331), 1980-10〕とか言ってきたのを、なんていうのかな、直接的にテーマをそういうふうに付けるようになって来たのよね、と私は思っているの。だって『思想の科学』は、編集方法は変わってきて長いものを載せなくなってくるとかいろいろあるんですけども、基本的にはあまり変わらないんじゃないかと思うんだけど（笑）。だからね、そういうのが受ける時代だったんですかねえ。私なんかもそれこそ分かってても分からなくても（笑）難しく書いてあるって方がいいという世代じゃないですか。それで、そういうふうじゃないねえ。

横尾：石井さんも、そのなんていうか軽みが合わなかったというか。

石井：そうね、軽みが合わないというかねえ、それで雑誌のイラストや体裁もカラーをふんだんに使ったごてごてした感じになった。

余川：そうですね、割り付けなんかも違ってきましたもんね。なんか私もあれはあんまり好きじゃ……。なんか今は週刊誌もそうだって言ってたからそういう時代なんでしょうね。でかいロゴ使ってババババっとあれするような、そういう感じになってきましたね。それこそそれなりにこの時代の人たちが書いててねえ、なんだけども。

石井：例えば斎藤、なんでしたっけ、女の人。

余川：斎藤、綾子（あやこ）さんだっけ。

石井：あれなんか衝撃的だったからね、結核病棟のセックスを、よくぞあれは書いたというか、あれだけは印象に残っています〔斎藤綾子「結核病棟物語、1～18」『思想の科学』7(91), (428), 1987-7～7(113), (450), 1989-2〕。

余川：そうそうそう、『思想の科学』ではあれを皮切りにみたいな感じでね、あれは面白か

ったですよ。

石井：面白いけど衝撃的でしたね。

余川：その前から「セックスの深みから」〔6(35), (243), 1974-9〕とかそういうのあったんですよ、70年代の頃からね。それがあってその後は今でいうと性同一性のような、そういうことも『思想の科学』はわりと取り上げてきたし。だからそういうこともいっぱい入ってくるようになりました。時代が時代だったのかもしれない。

石井：70年代で女性の問題で登場してきたのは加納さん。

余川：加納実紀代さんね。それからやっぱりあの、なんだったっけ、埼玉の市議員になっている、ああいう人たちも。

石井：うんそう、小沢遼子。

余川：田中美津とかそういう人たちもたくさん書いたし。

石井：ウーマンリブにかかわった女性たちのリーダーは殆んど登場している。吉田さんがよくやってくれたからよね。

余川：ねえ、がんばったんですよ。女こども路線とか嫌味いわれたりしたんでしょうけどね（笑）。

横尾：そうですね。

石井：余川さんも一緒に行ったでしょ。新宿にそういう女性解放の人たちが集まる居酒屋みたいなところがあったじゃない。

余川：ええ、ありましたね。

石井：ほかにもあって、そういう所へ行ったわよ。

横尾：そういうのに対して男性の会員なんかは。

石井：一緒に来た人もいてね。

横尾：雑誌の女性の特集なんかに関しては吉田貞子さん。

石井：そう、やっていましたね。渋谷の居酒屋みたいなところも面白かった。私は会社（日外）の女性たちを何回か連れて行ったけど。

横尾：話はそういうことばかりってことはないんですか、ただ飲む。

石井：いや、やっぱりそういう人たちが集まっているから、職場においてどうなのとか、それから刊行物なんかもそういうものが全部置いてあるから情報入手や交換には役に立つ場所でした。

横尾：情報交換、情報収集。

石井：そう、私は加納実紀代さんと戸田杏子さんには、新宿の薄暗い酒場で会った。

余川：「魔女の家」だかなんかそういう感じの。

石井：そう、「魔女の家」。そういう人たちが、登場してきた。

余川：それでやっぱり時代としては全部、そうだった。

石井：それから小堀〔恵美子〕さんね。

余川：高橋幸子さんの「みみずの学校」はその後ですね〔7(13), (350), 1982-2〕。

横尾：編集委員と編集者は違うわけですよ。

石井：もちろんそうよ。編集委員というのは研究会から出るわけ。で編集者は実務担当だ

## 資料2-③：石井紀子氏インタビュー第3回

からね。

余川：研究会の会員の方でなくても例えば加藤〔典洋〕さんとかやって。けっこう70年代ぐらいからずっとそういう意味ではいろんな人が入って。

石井：編集実務やる方が社のスタッフです。

### 2 - ① 同級生の党員をどのように見ていたか

横尾：次は学生時代の。

石井：あ、そうか、放送通信の仕事を選んだ理由ですか。

横尾：それはちょっと先で、学生の時の。

石井：ああ、そうね、入党者はエリートでしたかということですか。

横尾：そうですね、委員長がある日突然退学処分になって、東急の食品売り場でアルバイトしていたというお話は伺ったんですけども。

石井：当時エリートという言葉がなかった。

横尾：あー。

石井：あの頃は使ってないと思います。あの人はエリートねとかいう会話は皆無だった。

横尾：それはやっぱり敗戦でいなくなっちゃたってこと。

石井：そういう意識じゃない。

余川：戦前なんかの共産党の人は、ま、エリート、今話に残っている人はみんななんかこう、バックに、家が大金持ちとか（笑）。

石井：そう、地主の息子とかね。

余川：そういう人多いですよね、女の人はちょっと違うかもしれないけど。でも女の人もそうですね、だからそういう運動に関われたとかね。ある種みんなそういう教養もあったというか。

石井：学歴がね、まずあるわね。

余川：ねえ、そういうイメージですね。だからその戦争を経た後というのはちょっとどうか分からない。

石井：エリートという言葉は使ったことはないと思う。だからエリートって言葉が使われ出したのはつい最近で、古くないんじゃないかな。

横尾：初出を今度みてみます。知識人も雪崩をうって入党した時期なので、そういう憧れとかがなかったのかなという。

石井：憧れはあったでしょうけれどエリートという言葉は使わなかった。鶴見さんはエリートよとかそういうことは口に出さなかったように思います。

横尾：はい。

石井：同級生の党員の問題なんですけど、はっきり党員という情報はないんです。だからなんとなく口コミであいつは党員らしいと、入っているらしいと、いう感じでした。

横尾：公言もしないんですね。

石井：ここにあるように歴研の中であの人は党員らしいというか口コミ的な情報が流れた。

横尾：どこかやっぱり、正直に言うと何をこうむるか分からないという。



石井：そういうことだったのかもしれない。共産党内部の対立がすごかったから。

横尾：権力からというだけではなく。

石井：国際派とか。で、ここにあるように学生自治会委員長などは、かっこはいい。みんなの前で演説したり、アジテートするわけでしょ。だけど退学処分になって、そのあとデパートの総菜売場にいると、ね、エリートという姿ではない、というふうに思います。まあ山領さんが同じ時代にエリートという言葉（笑）を使っていたかどうかというのは興味あるけど。

横尾：そうですね。今度聞いてみます。

石井：うん、そうですね。

#### ㊦ 歴研でのデモ参加

横尾：でいくつかその、学生時代に関連してですね、先ほどお渡しした追々加の質問を見ていただいてよろしいですか。まずメーデー事件の時ですけど、銃を向けられたという。あれで結局、皇居のまわりまでは行かずに別れたということですか。

石井：そう、あれはそうですね。デモはいまの第一生命ビルの中に GHQ がありその前を通るわけです。日比谷通りをとおり日比谷公園で解散。

横尾：で事件が起こったのはその日比谷公園。

石井：メーデー事件の時の行進だったかどうかちょっとはつきりしないんですよ。

横尾：もしかしたらその日だけではなくて。

石井：そう。5月1日に来れば労働者もみんなやっていたわけだから。そうだったかなという気もちょっと今しているのね。

横尾：とにかく歴研の方々と一緒にやったと。

石井：そう。歴研の旗を持ってデモに参加するわけだから。

横尾：その旗は歴研という旗ですか、主張を書いているようなものではなくて。

石井：いや、そうじゃなくて旗よ、フラッグ。

#### ㊧ 早稲田に行った理由

横尾：あともう一つ、聖心と早稲田とで、おねえさまが行きたい方に行けばと言って下さった時にどうして早稲田のほうに行きたいと思ったんですか。

石井：私は女学校から高校を出たわけです。その女学校の教員室の雰囲気嫌いだったわけ。

横尾：分かるような気がします（笑）。

石井：だから、絶対女だけの学校には行くまいと決めていた。

横尾：教員の？そのものではなくて。

石井：うん、だから教員室の雰囲気が嫌いだったから、こういう雰囲気の女学校、とにかく女だけの学校には行きたくない。

横尾：それはやっぱりあれですか、女の子はこういうふうにしなさいという上からいうような感じに対して。

## 資料2-③：石井紀子氏インタビュー第3回

石井：なんだか、いやな感じなのよ。分からない？

横尾：私女子校じゃないんでちょっと。

石井：教員室の雰囲気よ。

余川：そうですね。私の娘が女子校。結局あれですよね、序列もすごくて。やっぱり今でも、ちょっと前、10年ぐらい前だけれども、謳っている文句はね、「国際派の女性をつくって」どうとかってすごいいいこと言ってるんだけど、やっぱりそのね。

横尾：「国際派」(笑)。

余川：そう、謳ってるの。でもやっぱり昔からいる女の先生が力を持っててという感じみたいですね。

石井：そうね、私たちの頃は教えていた先生が戦時中はお作法とかなぎなたを教えいていた。終戦後変わったといってもそれは変わらない、でそういうふうな雰囲気が嫌いだったのね。ぜったい女の世界には行かないと(笑)。

余川・横尾：(笑)

石井：女だけの世界には行かない。感覚的なものでしょうけども、そういうことで選んだわけね。

横尾：あの、中高とかお裁縫をお姉さまが全部やってくれてという(笑)。あれなんかもやれないとかやらないというのがあったんですか。

石井：やれないのよ。

横尾：やれないんですか(笑)。

石井：やってくれる人がいたからやらないの。やってくれる人がいなけりゃやるわよ、そりゃあ(笑)。

### 3 - ① 最初の職場を選んだ理由

石井：「日経新聞」と時事通信社を受けた。とくに自分としてジャーナリストになりたいとか、そういうキャリア計画があったわけではないんです。働き続けるということについて強い意思がありましたけれども、特に自分はジャーナリストとして活躍するんだというような強い意思はなかった、というのが正直な話です。

#### ① 自分の身に何かつけようという意志

横尾：そのことに関連して追々加質問なんですけども、より確実な人と結婚するというのじゃなくて自分の身につけなきゃという発想ですね、強い、発想じゃなくて意志ですよ、それはどういうところから。

石井：それはだってほら、前にもお話ししたように、戦争ですべてが、無価値になるわけでしょ、自分の身につけてる以外のものはお金にしても、父親や家族、社会的ステイタスにしても、全部崩れたわけですから、だから、頼れるのは自分の身に付けたものでもって生きていくしかないよ。

### 4 - ③ 父の生き方

横尾：家父長制が壊れるということを具体的にお聞きしてもよろしいですか、そのやっぱり父親の威厳がなくなるとか。

石井：そう、それはありますよね。

横尾：社会的にも、公証役場にいらっしゃったわけですけども、元は司法畑だということもあまり戦後は通じないというか。

石井：あの、実はね、うちの父を見ていたら、あの司法畑や警察庁とかそういう官僚組織の中でやるタイプでなかったと思います。だから早く弁護士とか、組織をはなれた職業を持っていたら、もっと彼は自由に闊達にできたのかなという気はしているわけです。司法官というたとえばね、朝お迎えがきて父は馬で出勤していた時期もあります。

横尾：えっ、そうなんですか。

石井：父はいろいろな趣味持っていて馬術もやっていましたから。馬に乗っていくんだよね。馬丁がちゃんとして、引いていくわけです。お昼は給仕さんが二段構えのお弁当を取りに来る、そういう生活です。

横尾：それは田辺のころ。

石井：田辺じゃなくて、千葉でも。

横尾：ああそうなんですか。

石井：そうなのよ、だからね、今考えられているような検察官とは違う。つまりね、検察官がなぜ給料が高くて社会的に優遇をされていたかという、汚職をしないってことです。つまり、経済的にもある程度、恵まれていると言うとおかしいけれど保障されている、社会的な地位も保障されている待遇です。その世界を、兄の戦死を機に辞めて一介の公証人になったわけでしょ。そうするとやっぱり、公証役場で事務の人も使わなきゃならないし、横浜で公証人役場を開いた時に、「迅速懇切丁寧」と看板に書いた。キャッチフレーズです（笑）。

横尾：いいですね（笑）。

石井：そういう人だったんです。だからあとでちょっと触れますけど、非常にアイデアがある人でしたね。

余川：ああ、なるほどね。

石井：組織からはみ出すタイプ、合理的で、アイデアがある人だった。ずっとあのまま組織にいたら地方まわりで終わったんじゃないかと思った。私なんか母に連れられて岩村通世さんとか法務大臣になった方のおうちに行きましたけれど、そういうことになる人は、正義感もほどほどにたゆめて、その組織を昇り詰めてく出世コースに昇っていくところがないとダメなわけです。うちの父は直情径行で、正しいと思ったことはもう通す人でしたから、だから向かなかったと思います。早く公証人になって、依頼人やお客様が来て、その要望に応じて、司法的なプロフェッショナルな視角や見識を使って仕事をしていくのが向いていたと思います。

### 3 - ② 書籍の仕事を選んだ理由

石井：それで、次が、書籍の仕事を選んだ理由。

## 資料2-③：石井紀子氏インタビュー第3回

横尾：そうですね。積み上げるというお仕事の中でも書籍というものを。

石井：時事通信では書籍係に配置されたわけです。

横尾：そのあと図書館と、ずうっとですね。

石井：ええ、そうです。

横尾：日外と。本というものにこだわる。

石井：そうです。

横尾：ええ。

石井：書籍という形だと残ってくでしょ。

横尾：それはやっぱり空襲とかで焼けてしまってもどこかしらに、売った本であれば残る。

石井：形が残るんですよ。

横尾：それは必ずしも敗戦だけではないわけですか。

石井：そうですね、やっぱり本に興味があったと思います。例えば卒論をまとめるのにやっぱり文献というのは大事なものだということが分かるでしょ。で私なんかはフランス革命をやったから、そういう関連のフランス語の本というのは、当時は大倉山図書館というのが、(今も大倉山文庫って残ってるんですけどね、)当時は国会図書館分館だったんです。でそこにしかないのね。あとでもまた出てくるんですが、ほとんどね、都立日比谷図書館にしても明治以来の本は全部焼けたほか、都内の図書館は空襲で灰燼に帰したんです。

余川：うーん。

横尾：ええー。

石井：そういう時代で残ってたのは、高校の時に利用したんですが、九段坂のところ到大橋図書館というのあったんですね。これは私立の図書館ですが非常に蔵書量が豊富な図書館です。そこに通いつめてましたね。

横尾：残っている所に分け入って行くという。

石井：そうそう。

横尾：今の高校生なんかしないですね(笑)。

石井：だって当時ほかに娯楽もないわね。本を読んで勉強すると、いうことしかないじゃないですか。あとはね、おなか空いてんだから(笑)。日々の関心事といえば食糧をどう確保するかとかそういうことです。

### 3 - ③ CIE 図書館

石井：それで次に「CIE の図書館に行ったのはどなたかの薦めがあったのですか」。これは全くありません。ここに書いたように日本の図書館は空襲で壊滅状態で、お話したように大橋図書館は蔵書が残っていたので、せっせと通い詰めたわけです。ところが当時の図書館というのは大橋図書館もそうだったんですが、本が全部しまわれているわけ。今の大学図書館のようにオープンアクセスじゃないです。でも大橋図書館はまだね、パチンコ玉式というんですが、金網が張ってある向う側に本の背が並んでいて、欲しい本の背を押すことができた。けどそれ以外は、国会図書館はじめレファレンスブックと一部分は開架になっていますが、あとは全部出納式だから、魅惑的な題だと思って出したらなんだつま

らない本だとか(笑)、出納はそういうやりとりで終わっちゃうのね。CIE 図書館というのは、日本で初めて近代的な図書館としてそこに出現したわけです。これはいま有楽町のちょうど日劇のあたりかな、日東紅茶がある、その角の所の1階でしたね。とにかくね、開いている時間も長い、夜も開いているから、そうすると真っ暗な中にそこだけ光があって、で入るとストーブがあかあかと燃えてて暖かく、で本は全部オープンアクセス、開架になっているわけです。雑誌も全部手にとって見られる、そういう図書館が出現したんですよ。

横尾：ほんとにじゃあご自分で見て入って行ったという。

石井：そうなんです。

横尾：たしかに出納式とオープンアクセスではまったく違いますね。

石井：それでやっぱり暖かいのよね、火があかあかと燃えていて(笑)。きれいなグラビアの雑誌が並んでいて、何か分からないことがあればレファレンス担当のスタッフがインフォメーションの窓口に行って教えてくれる。もちろん貸出もあるので本をうちに持って帰れるわけね。今はどの図書館もそうなるけど、当時は図書館内でしか読めない状態でした。

横尾：例えば女学校の図書室みたいなところは。

石井：なかった。教室の隅に置いてある程度で、一部屋をとってライブラリーなんてのはない。教育のカリキュラムに練り込まれた学校図書館は戦後アメリカから持ち込まれた発想だから。図書館法ができたのは昭和25年で、その時に初めて近代的な図書館の姿というのが具体的に示されるわけです。

横尾：ああ、そうなんです、当然学校にあるなんてのは戦後のものなんです。

石井：そう。もちろん小規模の文庫みたいなものはありました。学級文庫みたいなものは置いてあったけど、一部屋をとって、何年生でもすべての学年の生徒がそこのライブラリーに本を借りに行くとか、いろいろ質問して先生に教えてもらうとかいうことは昭和25年以降に始まったわけです。

横尾：ありがたいですね、そう考えると。

石井：うん、考えられないでしょ。だからほんとに戦前の図書館というのは、本の倉庫みたいな、蔵書をただ囲って保存している所でした。上野図書館も納税をしている人とかある程度利用制限があったわけです。

横尾：CIEは貸出もすると。

石井：もちろんそう。

横尾：身分証明とかは。

石井：うん、簡単な確認で保証人も必要ない。学生証を見せ住所が確認できれば登録できた。赤坂離宮を利用した国会図書館も各室を活用しオープンアクセスになっていました。だからそういうことがもう珍しいことだし、2階に上る大理石の階段の下の所に貸出用の本が置いてあって貸出していた。私がこのまえ話したようにホイジンガの『中世の秋』などは国会図書館から借りたわけですよ。

横尾：貸出用は貸出用で。

石井：別になっている。だから初めてそこに、近代的な図書館の走りみたいな場所が出現



## 資料2-③：石井紀子氏インタビュー第3回

したわけです。これがアメリカで言っている、市民のための図書館、民衆の大学の図書館の姿です。

横尾：それは慶応に入る前に。

石井：もうそういう経験があったわけです。

横尾：はい。

### 3 - ④ 紀伊國屋書店

石井：それから「当時の書店、特に紀伊國屋書店はどのような場だったと思いますか」ですね。

横尾：そうですね、なんかみんなそこにいたとこの前おっしゃっていたので。

石井：うん、通った。知識人はそこへ集まったのよ、知識人というか活字に飢えている人たちが。というのは、街の書店の多くは壊滅していたわけです。

横尾：たたんじゃったところが多かったんですか。

石井：たたんだというか焼けて再建されていない。

横尾：そうですね、売るものが。

石井：そう、整備されていなかったんですね、だから新宿に二階建ての木造の紀伊國屋書店が開店した時には、もうみんなそこへ押しかけたわけです。大体本に飢えているんだから。

横尾：それこそそれは手にとって見ていいわけですよ。

石井：そう、もちろん大丈夫よ、今の売場とおんなじだから。今の売場はもっと立派になったけど。やっぱり知識の宝庫としての書店という位置付けでした。

横尾：そこで、東洋大学の司書コースを受講中の同級生の方と会われて。

石井：うん、そう。

横尾：他の方にも偶然会ったりすることはあったんですか。

石井：私はね、早大のクラスメートの草鹿さんとか安田武の妹さんやその義姉のたきゑさんとかそういう人にしか会っていません。

横尾：でもやっぱりそういう偶然が起る場所ではあったんですね。

石井：あったわけ。だって知識を求める人たちが集まっていたわけだから。場所は今のあの伊勢丹の並びの、2階建てです。紀伊國屋書店として残っている所ですよ。

横尾：じゃあ周りにまだほんとにビルとかはなくて、木造の。

石井：そうよ、周りにはふつうの商店なんかが並んでいる時代。

余川：そうですねえ、私もそういうふうに聞きました、まだ闇市があって。

石井：そう、駅前には闇市があったりねえ。よく通ったのは紀伊國屋書店の前のところに、5階にのぼって行くと洋画だけの映画館があって、「天井桟敷の人々」とか「オープン・シティ」とか、ナチズムに抵抗した人たちの映画とかそういうのが封切されて、夢中で見にいきました。紀伊國屋書店の社長・田辺茂一の家はもとは角筈の炭屋だったのね。

横尾：またちょっと面白いですね、紀伊國屋とかあの辺の戦後の様子は。

余川：そうですね、ええ。

## 3 - ⑤ 慶応の図書館学、アメリカへのまなざし

石井：それから「占領軍のプロパガンダ出版はいやだという思いと、占領軍の文化政策のもとに設けられた慶応の図書館学に通うのは矛盾しませんか」という質問ですが、CIEの図書館はまさに占領軍の文化政策の実践の場だったわけです。でそのCIE図書館は大坂とか、日本各地に設けられるわけです。これはだから占領政策のもとに、まあ一つのプロパガンダ的な機関ですよ。たしかに慶応大学におかれたライブラリー・スクールも占領軍の文化政策の一環であり軍の方から予算が2年間ぐらい出ていたんです。これについては作家・今日出海の娘さんの今圓<sup>まどろこ</sup>さんの研究論文があります。

ライブラリー・スクールというのは専門の分野ですから、直接軍人が関るわけでない。だから当然その日本におけるライブラリー・スクールというかそういう養成学校を設けるには、ALA（アメリカ図書館協会）というプロフェッションの団体があります、そこに依頼して、調査団が来日します。国会図書館も含めて図書館のあり方について、報告書というか答申書を提出します（ブラウン報告書）。それにもとづいて指導が行われたので、直接軍の指導じゃないわけです。プロフェッショナルな人たちがきちんとプロフェッショナルな専門家を日本に育てるために教育しましたから、軍のポリシーと（笑）、関係ないわけです。

横尾：はい。

石井：日本における近代公共図書館の普及と、そのための人材を育成する、ということだったんです。占領軍からの費用は2年で打ち切りになったんですが、その後もきちんと大学としてそれを残してくれるという所が慶應大学だったわけです。

横尾：ALAの人たちは実際にこっちに来ていたわけですね。

石井：ええ、ALAに属する専門家が教授として全部教えたわけです。

横尾：通訳がついて。

石井：そうです、でもギトラーさんというキャップになった人はあまりにも永年日本で教えたため帰った時は向うであまり優遇されてなかった。難しいもんですね。

横尾：その時と、今に至るまでのアメリカについての感情は。

石井：アメリカについてはあまり意識しなかった。同級生は、東北大出てとか津田塾を出てから入っているわけですね。日本ではそうじゃないけれども、アメリカの図書館学の場合には、大学院コースなんです。あとになり筑波は大学院をつくりましたが。フルブライトで留学をする人が多いわけ。私はアメリカに留学したいということはある程度考えなかったんですが、図書館学を学ぶならアメリカだと、いうことは自明の理でした。そしてパブリックライブラリーは、民衆の大学としての拠点という認識がありました。ヨーロッパは王室や貴族の図書館からそれを一般の人に開放するという形で来てるわけです。けれどアメリカは、自分たちでお金を出し合って組合立みたいな会員制の図書館というか私設の図書館をつくるわけです。どうしてかという、開拓地の中で学校制度というのは最後にできるわけです。だからまず自分たちでお金を集めて、本を集めて勉強するという私設の図書館、プライベートライブラリーが先に出来るわけです。そのあと学校制度が整備されていく中で、パブリックライブラリーもきちんと公立として認められていくと、いう経過

## 資料2-③：石井紀子氏インタビュー第3回

をたどるわけです。1731年にベンジャミン・フランクリンが、フィラデルフィア図書館会社というのを建てるわけですが、これがそもそもその始まりなわけです。

横尾：もともと日本にはロイヤルの図書館というのがないわけですが。

石井：いやあるじゃない、貴族の個人文庫。足利学校とか金沢文庫とか有名な文庫として、今も残ってるでしょ。

横尾：あ、そうか。武家の文庫や藩校が元になってということですね。

石井：貴族の文庫のほか武家が子弟の教育のために設置した藩校。

横尾：ああ、そっちの系統がありますね。

石井：1872年、大阪や横浜に新聞の縦覧所が民間人によって開かれ、同じく1872年に書籍館開設が日本の公共図書館の始まりと言えます。明治末から大正期にかけて、アメリカで公共図書館を学んだ人々が巡回文庫などを実施しますが、戦前は国家による思想善導の場であった。利用制限もあり、閲覧は全部出納式で、本の倉庫とって良い。誰でも無料で自由に身近に利用できるようになったのは戦後です。図書館の略字は国構えにトと書くのですが、囲いの中に図書があるということです。

余川：ああ。

石井：私がアメリカに対する憎しみというのは、原爆の問題なんです。これはもう戦争犯罪として告発したい、告発すべきだと思っているわけです。

横尾：そうですね、無関係ではいられなかったわけですし。

石井：大体ねえ、胎内被曝によって何世代にもわたって影響が残るといえるのは、民族抹殺、ジェノサイドです。補償の問題にしてもいまだに解決してないじゃない。その当時半徑何キロに立ち入った人しか認めないというようなばかなことを決めた。うちの叔父なんかも、爆心地に兄を捜しに東京から行くわけ。そういうような人が被爆するわけね。

横尾：やっぱりその後、不調を抱えられて。

石井：そう。伯母をはじめ従兄弟たちも癌で早くなくなりました。だからとにかくこの問題というのは、きちんとアメリカを告発しないといけないと思います。一人生き残ったところは生き地獄のことは語りません。オバマ大統領が広島原爆資料館へ来るかどうか知りませんが。

余川：ねえ、うん。

横尾：まあちょっと。

石井：ダメじゃない？そんなことやってたら（笑）もうなくなっちゃうんじゃない？政権が。

余川：そこがねえ、なんか、だって、平和賞貰った時に戦争するって言う人だもんね、あれはねえ。

石井：それでノーベル平和賞受賞ですからね。

余川：ねえ。

石井：矛盾してる、おかしい。

余川：矛盾してる。なんか宣戦布告したみたいだねえ、あの時あそこ〔イラン〕に。

石井：それでまあ、ちょっとここに付録として書いておきましたけど、アメリカの場合に

は広い国土に点在する歴史の古い大学図書館と、開拓地での住民サービスに徹したパブリックライブラリー、この二つがあるわけです。多分、コロンビア大学にしてもどこにしても住民にまで本を貸すようなことなことはやってなかったと思いますが、今は大学図書館は登録すれば住民に図書を貸します。

横尾：それは日本でも？

石井：日本でも法政大学などが地域の住民に貸出をしています。藤沢市立図書館と慶応大学は、キャンパスの図書館が連動して、こっちにないものは向うで借りるという提携やっています。

### 3 - ⑥ 職業を持つことに対する家族の意見

石井：母が父の公証人の仕事を戦前から手伝っていました。だから夫婦共稼ぎみたいなものです。父が死んだ後も、母はそのキャリアを見込まれて父の同僚だった人で東京の八重洲に公証役場を開いていた方からずっと手伝って下さいと言われて、70歳ぐらいまで東京へ通ってたんです。

横尾：お父様も手伝ってもらうことに関しては了解してらしたんですか。

石井：だって家内工業みたいなものですから。家族も一生懸命書類綴じるこよりを繕ったり、やりました。

横尾：ああーそうですか。

余川：昔はそうでしたね。

石井：だから母が仕事持つということについて、とくに反対とか早くお嫁行きなさいということは言わなかった。姉は戦争未亡人で聖路加を出て、ナースの道に進んで、ブラジルに行く移民船に乗り込んでましたからね。

横尾：行ってまた帰って来るといことですか。

石井：そう。喜望峰まわって行くので航海終わるのに5カ月位かかった。その船は日本の船じゃない、ノルウェーとか、北欧国籍の船。スタッフというか士官はみんな外人、その下に下級船員として香港の中国人とかが働いている。ドクターは、香港からアメリカに留学してドクターの資格をとった船医さんが乗っていた。それに付いて行くナースです。

横尾：じゃ指示は全部英語で。

石井：もちろんそうですね。各農村から募集された移民の方たちを横浜、神戸、それから九州によって載せる。九州は炭鉱離職者ですね。それから沖縄に寄る、さらに香港寄って乗せていくわけですよ。

余川：ふううーん。

横尾：ノルウェーの船でも白い人たちは乗って来ないわけですか。日本と中国あたりの人を乗せて行く。

石井：移民です。

横尾：協定がきつとあったんでしょうね。

余川：やっぱりそれは船がないから借りるというか、利用したんでしょうね。

石井：朝鮮戦争のころは姉は座間のキャンプの病院に勤めていて、前線から飛行機で移送

## 資料2-③：石井紀子氏インタビュー第3回

されてくる兵隊たちの看護にあたっていた。そのあと辞めて昭和27年ごろには乗っていたと思う。私が日比谷図書館に勤めた頃には日比谷にある船会社に給料取りに行ったりしていたから。

横尾：それでその後お辞めになったんですか。

石井：5、6年乗ってたと思う。それで陸に上がったんです。

横尾：それは聖路加で行かれていたんですか、赤十字ですか。

石井：彼女は外国に出たいという気持が強かったから、米軍のキャンプに勤めれば、そういう情報も入ってくるわね。でたまたま、日赤を出た看護婦さんで、その外国船に乗っている人がいるというのを知ったらいいんです。それでタイプライターを叩いて、履歴書をせっせと船会社に出して、その人が下船したので、その後をついだ。

横尾：ちょっとお姉様のことになってしまいうんですが、旦那様はお医者さんで、軍医でいらして、その前から看護婦の免許を持っていたんですか。

石井：いや、持っていない。戦後です。だから広島伯父のところへ泊まらないで早く出なさいと言われて原爆をのがれ、危機一髪です。そのあと聖路加行ったんです。

横尾：看護婦という職業は自分で生きてくことを第一義に考えて選ばれたんでしょうか。

石井：でしょうね。人が好きな人だったから。人に関わる仕事というのがありましたよね。それで自立して自分が食べてかなければならないから、手っ取り早い話ね、教員になるか看護師さんになるか（笑）。

横尾：そうなんですネ。

石井：あとは美容師だわねえ（笑）。

横尾：旦那様の職業ともつながりがあるのかと。

石井：それはあると思うけど資格は戦後です。それから私のすぐの姉は戦時中に栄養士の資格をとりました。だから戦時中は被服廠などに栄養士の資格で勤労働員されていました。羊羹持って帰ってくるとか（笑）してましたけどね。姉妹など周りの女性は職業とか資格を持っていたわけですよ。

横尾：そうですねえ。

石井：働くことについてほとんど抵抗がなかったのと、父や兄が死んでましたからね。

横尾：お父様は1958年に。

石井：ううん、昭和27年。

横尾：1952年ですね。

石井：けれど親戚はすごくガアガア言ったわね。そういうところ入ったらお嫁に行けないよとか、世間一般は職業婦人というレッテルを貼る時代だから。そうね、女学校の同級生の中で働き続けている人は少数です（笑）。音大行ってファドの第一人者になった柳貞子さんなんていうのは、歌い手として一生貫いているけれども。職業としてずっと勤めているというのは非常に少ない。

### 3 - ⑦ 紹介で結婚するという選択肢

横尾：以前お話に出た伯母さまやご親戚の紹介で結婚するという選択肢もあったんですか。



石井：当時、混血の方、クォーターかな、大島さんという斜陽夫人がいたのね、その方が仲人の仕事していたので、伯母はその方を差し向けて、栄養士の資格持っていた姉は、そのお世話で結婚しました。これは東大出というのに母が惹かれたため良くなかった。

余川：(笑)

横尾：良くなかったんですか(笑)。

石井：私については聖心女子大も、池上の中学校も行かないという、いわば伯母の口利きに対してすべて裏切ったからもうあの人はダメって感じ(笑)でした。そういう仲人業というのがそのころ流行った。

横尾：じゃあご主人は全くご自身で見つけられたわけですね。

石井：うん、そうよ。

#### 4 - ① 父の出自

石井：父の戸籍は、母が亡くなった時に戸籍をいろいろ集め、さらに姉が亡くなった時また私が全部集めた。それで父の履歴書が出てきたんだけど、大分県宇佐郡高家村という地名が今も残っている。出身は大分県の宇佐郡、渡辺という姓ですが、渡辺綱の末裔と言われているのね。すごい豪農だったらしく、その土地から駅までほかの人の土地を通らないで行けたと言われています。9人の末子ですから、長崎県の伊良林神社、松尾神社の養子になって松尾姓になりました。

横尾：ああ、そうなんですか。

石井：ところがかなしいかな、その松尾神社のお嬢さんが死んでしまう。私は渡辺に戻りますって父が言ったら、神主さんがぜひ松尾家を継いでくれと言うので、母がお嫁に来るわけです。

横尾：神主さんのお役目はどうなったんですか。

石井：だからそれは譲ったわけです。神主さんがぜひあなたみたいな人が、名前を残して継いでほしいといったのでしょうね。地方から東京帝国大学に入学する人は滅多にいないんだから。

横尾：最初から優秀な子だから望まれたんですか。

石井：そのあたりは知らないけど。父の母というのは文字も書けなかったといわれていますが、村人が言ったことは全部記憶してて、とくに機織りの細かい織り方は全部記憶していて娘たちに教えたと言われています。

余川：やっぱりそういうあれですね。

石井：じゃないかと思う、私は記憶力ダメー。

余川：(笑) あ、でも似てらっしゃるんじゃないかって話聞いてて思いました。

#### 5 - ② 家父長制が崩れたということ

石井：「敗戦で家父長制が崩れたということは具体的にどういうことですか」と言うと、暴力的なスパルタ的な亭主関白ではなくなってきたんです。どっちかというところどもの教育にしてもなんにしてもスパルタ的な方だったから。私なんかはやられなかったけど(笑)

## 資料2-③：石井紀子氏インタビュー第3回

姉なんかもひっぱたかれてたし。

横尾：女の子でも。

石井：そりゃそうよ、昔は、関係ないわよ。男の子は並べられてなぐられていたし。

横尾：ああ、そういうのはやっぱり変化があったんですね。

石井：そうです。それから進む道に対しては口を挟まなくなっただけです。私が大学へ行くと言って、聖心女子大に行かなかったのが勘当されたんだけど、早大の月謝は出さないぞという、それじゃ奨学金で行くわと宣言した。

横尾：あ、そういうことがあったんですか。

石井：そう、入学金は姉のすすめで聖心女子大へもっていかず早稲田に納めちゃった。

余川：(笑) ふーん。

横尾：同じ屋根の下だけれども、もうこれ以上学資は出さないと。

石井：それで入ってみたら、学問するどころじゃないじゃない、レッドパージ反対で毎日バリケード築いたり (笑)。

横尾：そうですよね、だからちょっと後悔されたりとかあったのかなって。

石井：私はなかった。

横尾：ないんですか。

石井：ええ、私は女の学校行くの嫌だったんだから、ひたすらそれで (笑) 出るしかないじゃない (笑)。

横尾：そうですか (笑)。

### 4 - ③ 父の生き方

石井：大変厳しい人でした。非常に面白かったのが、家庭内で何か起るじゃない、なんかちょっとなくなりましたとか、うちの母が父が帰ってくるなりそういうふうに報告する。

余川：報告なさるのね。

石井：そうすると犯人は誰だって言うのよ (笑)。

余川：(笑) やっぱりそういう言い方 (笑)。

横尾：まったく真面目におっしゃっているんですか。

石井：そう。

横尾：そうですか (笑)。

石井：印象深いのは父が藩校にいた時からとったノートが残っていたんですが、戦後紙がなく私なんかノートとるのに困るわけ。それでそのノートを利用したんですが、このノートのとり方が見事でね、両開きでこっち側にビシッとこう整理されて内容が書いてあって、対面に自分のコメントなどが書いてあって、見開きになっているわけよ。でその裏が全部使えるわけ。英語で取られているわけね。

横尾：あの今、藩校の時代からおっしゃいましたか。

石井：藩校の時代からノートが残っていたわけです、大学へ入る前に。英語で教わっていたわけ。つまりあの頃は教科書がちゃんとしていないから外国の教科書を使ったんだと思う。だから全部英語で教育されていたんでしょうね。特に九州、熊本あたりは宣教師が多

いですからね。

横尾：はい。

余川：はあーあ。

石井：当時独法が主流ですが、英法に入ったんです。非常に合理的な人。でさらにアイディアマンなんです。だから例えばね、公証人のいろんな書類というのは、繰返す文言が多いわけね。一定のフォーマットがある。だからそれを手書きでやるんじゃなくてきちんとその文言のゴム印を作っちゃうとか。それでバタッと押せばいいわけね（笑）。それから紙縫りの作り方も非常に合理的な方法を教えてくれた。

余川・横尾：ふううーん。

石井：それからもう一つはね、好奇心がものすごく旺盛な人だった。だからね、テニスが流行ればテニスやる、馬術が流行れば馬術やる（笑）、弓が流行れば弓術、だから道具が全部納屋に残っていましたもの。そういう人だったね。

横尾：ほんとに優秀でいらっしゃるんですね。

石井：優秀というか、すごくアグレッシブな人だったんでしょうね。だからどちらかというところと貴族院議員になった母の兄はもっと謹厳実直な感じでね、いかにも内務省（笑）って感じでしたけど、それに比べるとうちの父は型破りでしたね。

横尾：伺っていると生き方として転向はない感じですか。息子さんのことで辞められたわけですが。

石井：彼にとっては長男の戦死で検察官をきっぱり辞めたというのが一つの大きな転向というか転機でした。つまり、検察というのはさっきお話したシステム、そういうものに自分は乗らないと、いう点から。

横尾：官僚的な生き方からビジネスへ。

石井：そう。兄を死なせてしまったということについて、自分はもう人を裁くことをできないという自責の念があったと思います。

横尾：身近な男の人の生き方として、石井さんの生き方にも影響がありますか。お父様の場合変り身という意味での転向ではないですよ、それはある意味自分の・・・

石井：自分の決断ね。道を選びますということよ。

余川：それはそうですね。

横尾：環境がこうだからしょうがないとかいうことではなく。

石井：だから迅速懇切丁寧という（笑）キャッチフレーズ、キャッチコピーを（笑）電柱に貼ってあるのよ。

横尾：すごいですよね。

余川：すごいですねえ。

横尾：東大生の中にも起業する人っていますけど、そういう感じもありますね、ベンチャー的な（笑）。

石井：だからやっぱり、判事さんなんかから公証人になった人とはやり方とか態度とか全然違うわね。それで公証人を定年で辞めてからは弁護士になるわけですが、その時だってね、ほんとに若い弁護士事務所の先生に、腰弁というかそういう形で付くわけです。自分

が今までの仕事のことは毛にも出さないで、もう一からやり直すという生き方です。

横尾：あら。

余川：ふううーん。

石井：そういう人でしたね。今までのことに一切こだわらないというか、なんでしょね。あるいはそういうものをばかにして批判していたのか(笑)。ふつうは男の人というのは前にこういう仕事をしていたとか自分は偉かったとかそういうのにこだわるのよね。生涯学習やってみるとよく分かる。

余川：(笑)なるほど。前ナントカでしたって。

石井：そうそう。すごくこだわる人が多い。けれどそういうことがなかったわね。でここに書いてあるように、彼が言っていたのは“Be silent”ということ(笑)、それから「ヘルファスン」という言葉ね(笑)。これはもう耳にタコができるぐらい聞かされた。

余川：あ、そう。

横尾：「ヘルファスン」も「静かに」ということなんですか。

石井：“Be silent”はそうね。「ヘルファスン」ってなんだったかなあ。ちょっと調べないとわからないわ〔verhalten=行儀〕。それから最後の質問でいいですか。

横尾：はい、お願いします。

#### 5 - ① 石井さんご自身は民衆ですか

石井：民衆の定義というのが難しいですが、世間一般の人民とか民衆のことを指すと思いますが、とくに労働者農民などの一般勤労階級を指すという定義をしている辞書があります。それが一番具体的なものを指しているのかなという気はしますけれども、自分はちょっと違うと思います。下町の人と結婚しましたが、価値観が違いますね。若い頃はお互い理解し合おうと努力しますが、年をとると元へ戻ってしまう。私の育った家というのはお手伝いさんが1人から2人住み込んでいたわけです。お手伝いさんは40年頃までいました。望まなくてもどうしてもうちの娘を預けてお料理とか家事を教えてほしいと頼みこまれてね。

横尾：あ、昭和の40年ですか。

石井：だからうちの息子なんかはお手伝いさんで育っているわけです。母は職業持って東京まで通っている。で私も図書館に勤めており、姉も病院へナースとして通っているわけですから、家の事をしてもらうにはお手伝いさんが必要でした。

余川：ふーん。

横尾：そうですか。

石井：みんな、地方からは是非そういうおうちに置いて料理見習とか家事見習をさせていただきたいと、いうんで来るんです。それでとくにうちの伯母のうちは常時3人ぐらいいましたからね。伯母の使いにくい人たちがうちへ来るのよ、お下がりで(笑)。

余川：(笑)そういうのが。

石井：個性の強い人とか、意地張っちゃう人とかね。戦後28年頃まで居なかったんですけど、その後お手伝いさんが来てました。

横尾：そうですね。

石井：それで前に住んでいたお手伝いさんの姪が来るとかね。長年居て、帰す時は鏡台などの嫁入り道具を持たせたりします。うちの母に学んだことは、お手伝いさんにしても何にしても彼女たちを差別しない、家族同様にすごく可愛がったというか大切にしていました。社会一般ではそういうのは「うちのお手伝いは」とかなんとか言って、はじいたり差別するでしょ。食事は別だとか、うちの母はそれはなかった。

横尾：やはりお出になった家がきちんとされてるんでしょうね、細川家の御祐筆だという武士のお嬢さんでいらっしゃるから。

#### ㊦ リライトの経緯

横尾：足した2問をお願いしたいんですが。

石井：安田さんがリライトしてくれることになった経緯というの私も細かいことは知らない。鶴見さんと安田さんが相談したんだと思う。それでどうしても翼賛会についてはこれを出さないとだめだという話になったんだと思います。それで、当時編集者は安田さんぐらいだった。あとは学生であったりサラリーマンだったりで、編集のプロは彼以外になかったと思います。

横尾：ああ、そういうこともありますね。

石井：これは推測ですけども。

#### ㊧ 共通の見方

横尾：あともう一つ、内容的に、鶴見さんが近衛文麿、安田さんが有馬頼寧と山本有三について書かれています、いずれも良心的あるいは誠実で善意であるけれども具体的なプランを欠いていて結局状況に巻き込まれていくという同じタイプの転向で、鶴見さんと安田さん、それと石井さんが書かれたのは共通の見方ですよ。これも安田さんが掛け持ちしてリライトできた理由でしょうか。

石井：たぶんね、近衛をやっていたら翼賛体制とは結びついてるわけだから、表裏一体でしょ。有馬にしても公家の出ですし。

横尾：そうですね。石井さんなんかは「坊っちゃん的」と書かれていますね、弱さとか自分の無力さというのでもって言い訳して諦めるという。それはその鶴見さんの近衛論とも自然に関わってくるわけですけど、それはあの例会の報告の中で醸成された一つの見方ですか。

石井：どうかな。

横尾：それぞれに…

石井：それぞれに違ったと思う。個別研究ですから。もちろん翼賛体制全体については、共通の認識を持ったけれども、研究方法としては一人一人の生き方を追っているから、共通の視点でやりましょうということにはなかった。

横尾：この原稿にはもうみんなの意見は盛り込み済みなんですか。

石井：そう、この形にした時は盛り込み済みの形です。



## 資料2-③：石井紀子氏インタビュー第3回

横尾：このリライトは石井さんの見方をきちっと継いでくれていますよね。それは共通の見方が基盤になとなかなかできないことかと思ったので。

石井：なるほどね、そこは私も気がつかなかったけどね。

横尾：これ書くまでに週1回の会合をどのぐらい、ずうっとやってらしたんですか。

石井：どのぐらいだろう。これ書くときにはいろいろ抱え込んで大変な状態でした。会合は東大の近くのルオーという喫茶店の2階でやっていたんだけど、あの頃私ももう結婚の問題なんかがありましたから遅れて行ったりとかしていました。

### ㊦ 書き上げた時期、㊧ 山領氏の室伏論

横尾：大体これ書きあげた時期は57、8年ぐらいですか。

石井：原稿に日付が入っているとすればぼっちりなんだけれど、日付を入れてないからだめねえ。

横尾：大体1955年の秋ぐらいから図書館通いが始まって、次の年には有馬にインタビュー、続いて室伏。

石井：室伏ね、うん。

横尾：にもインタビュー。山領さんがお書きになったというのは下巻巻末の資料「転向思想史上の人びと」ですね。

石井：山領さんは室伏論書いてない？

横尾：室伏論という形では。

石井：そしたら雑誌の方に書いてる〔山領健二 1962.「ジャーナリストの転向：室伏高信論」『思想の科学』5(4), (84), 57-67〕。

横尾：ああ、そうですね。

石井：うん、それで生きてる。

横尾：はい。

石井：そこで私の材料は全部渡しましたから。

横尾：そうですね、下巻のあれだけだと手に余りますよね。

石井：うん、たしかそう。

横尾：この原稿をお書きになった頃はもうプライベートの方でお忙しい。

石井：本当にそうだったわね。

横尾：でも書き上げるまでは自分が執筆者で行くという感じではあったんですか。

石井：ああ、これ書いた時はそうね。だけど本の形に書き直せと言われた時はもうできない状態ですから。

横尾：ああ。それでおそらく話し合いがあって、安田さんでいいですかという。

石井：それはなかったと思います。

横尾：そうなんですか。

石井：だから私もありがたうってお礼もしなかったような気がする(笑)。

横尾：(笑)しない代わりにあら、ちょっと私のなのにといい気持ちはなかったんですか。

石井：なかった。だってノルマに対して自分はもう絶対達成できないという状態でしたか

ら。

余川：でも連名にするとかですね。資料はみんなこっちから出ているのとかね。

石井：そんなこと考えない。そのことよりこっちのこのの方が大変だったから（笑）。

余川：そうなんでしょうね、きっとね、それでそれこそそっちの道で生きていくってことでもない。

石井：そう。あの藤田省三さんが『思想』に発表した方がいいよって言って下すったと話したら、山領さん曰く、「翼賛運動の研究が他に無かったからですよ」って（笑）。「そうね」って（笑）。

余川：でもやっぱりそれだけ大変なことだった。手をつけるだけでもみんなうんざりするぐらいのねえ、気持だった。

横尾：関わっている人も膨大で。

余川：ええ、そうですねえ。

石井：そうね、大変だったわね。この後『翼賛運動史』とか結構ぶ厚い本が出ましたからね。

横尾：そうですね、これを読むと翼賛運動というのはいろんな方向のものが集まって、上のほうで翻弄される有馬、近衛というのがよく分かります。

#### ㊤ 書くことに執着しない

横尾：だけど藤田さんの勧めなんかもあっても、そのあと論文を書かれるってことはなさらない、執着されない。

石井：そうですね、とにかく現場で忙しく働いていたから。朝から晩まで都下の中小企業をくまなく回る「職場図書室」に追われていましたからね（笑）。

横尾：そっちのプロフェッションでもう動き出したから。

石井：そう、動き出しましたからね。

余川：その、亡くなったお父様に、人が好きだったんじゃないかという、石井さんもそうなんですね。

石井：うん、そうね（笑）。

余川：現場のそうやって動くことを。

石井：そりゃそうね。今でも覚えているんだけど、地方から集団就職で出てきた人たちが会をつくってたんですね。そのメンバーの結婚式とかにも呼ばれましたから。

余川：うん、うん。

#### ㊥ いつ頃まで参加したか

横尾：いつぐらいまで転向研に参加されていたんですか。ご結婚後もしばらくは。

石井：いや、参加していない

横尾：那須なんかは行かれてないんですか、58年1月ですが。

石井：那須は行きました。

① 現時点での自稿への感想、参加意義

横尾：今ご自分で読み直されて当時の有馬頼寧への見方についてどう思いますか。

石井：うん、まだ読み直してる。

一同：(笑)

横尾：あるいは今振り返って転向研に参加されたことの意義、現時点から見てあれをやったこと、あるいはこれを世に出したことの意義についてどう思われますか。

石井：まずこういう論文をまとめたことは、文献をどう使って人間を描いていくか、まとめていくかという点で大きな体験になったと思います。

横尾：そうですね。

石井：ええ、このように一人の人間の生き方をまとめていくということは職業的忙しさに追われこのあとやれませんでした。この間も息子に言われちゃった。あんたひと頃石井花子について書くっていついたがどうなったのか。

横尾：石井花子さんというのは。

石井：ゾルゲの愛人。

横尾：ああ、はい。

石井：1984年から15年がかりで『近現代・日本女性人名事典』にかかわっていて、その中で花子さんのこと書きました。これはすごい人がいると思いました。それで「石井花子」の資料を集めたのですが、人物伝は実現できませんでした。

横尾：辞典作りにおいて、ご自分が執筆を担当されるにしても編集されるにしても、転向研の経験は役に立ちましたか。

石井：あ、そうですね。伝記の集め方や書誌の作り方などについては当時はやみくもに自分流でやっていたわけですから。

横尾：今はその辺はうんと厳しくなられて。

石井：鶴見さんからは論文の書き方、というような指導は一切なかった。

余川：ああ、そうですねえ。

石井：一切ない。

横尾：だからまったく注が付いていない方とかもいらっしゃいますよね。

石井：ああ、そういうことね。それから引用の仕方とかについてのアカデミックな書き方なども彼からの教示はございませんでした。

余川：ずーっとそのスタイルは一貫して今もそうですね。

横尾：ああ、あまりその書き方、テクニックの指導はしない。

余川：ええ、じゃないかしら。きっとその、注を付けるとかね。

石井：そう。

横尾：でも鶴見さんご自身の注はすごいですよね。

石井：それはやっぱり日本でなくアメリカできたえられたアカデミシャンだもの。

余川：それから、鶴見さんの索引に対するこだわり方ね。

石井：そうそうそう。

㊦ 活動を兼ね得た理由

横尾：いくつかまだお聞きしたいんですが。

石井：はい。

横尾：忙しい中でも転向研の活動を兼ねることができた原動力は何だったのでしょうか。

石井：私はね、基本的にね、一つの道に夢中になれない人なの。つまり、ここで突き進んでいるものを見ている自分が欲しいのよ。だから、日比谷図書館でライブラリアンとして勤めながら、それを見る自分の場、それが思想の科学であり、私にとって中心、軸なんです。

横尾：ああ、ちょっとこう、普段とはずれたところから。

石井：ええ、要するに二つないといやなの。一つだけで真っ直ぐに、テクニカルに、いわゆる職人として進むというふうな真面目さがない。この道何十年とうことは出来ない。だから私は図書館の仕事の中で、目録作業なんか大嫌いです。私は同じパターンで繰り返していくというのは耐えられない。仕事の最初の最初のステップを組み立てていくのはうまいというか燃えますが、そのあと維持していくのは他の人にやってくださいと（笑）。私はメンテナンスは苦手なんです。だから常に、自分が今勤めている、今主にしている根拠地以外もう一つ根拠地を持つ。そこから見ようという、そういうことね。

横尾：それはけっこうお若い頃から気付かれていたんですか。自分はそうした方がいいなあという。

石井：なんか自然にそうなったのね。そういう別の場が欲しいと。うーん、だからそれは、この職場で嫌なことがあってもあれがあるさという（笑）のとおんなじよ。私にとってはもう一つ別の場がある、そういうことです。

横尾：そういう知恵は、あの、ご自分の。

石井：そうですね、自然に身についたんでしょね。

横尾：たしかにそうなんですよね。

石井：だから日比谷にいても思想の科学をやめないというのはそういうことね。で今度、思想の科学一筋で行くんじゃない、私には思想の科学じゃない場がある、生き方としてずるいわね。

一同：（笑）

余川：え、でも、そういうふうじゃないとね、いけないわけだから。なんというか、成立しないんじゃない。

石井：だからやっぱりね、安保のころなんか、前にも話したけれど、この同じ地に竹内好という人物がいるんだというような実感。これはこっちの場を知っているからね。思想の科学というのを通じて竹内好さんというのを知っているからですね。

横尾：たしかに、自分自分で集中していくと、曲がっていることに気付かなかったりとか、斜めになっていくのに気付かないということがああると思うんです。

石井：だから私はバランス感覚という言葉が好きなんです。やじろべえみたいの。

横尾：ああ、そうですね。

余川：うん、そう思いますよ。思想の科学にこんなだったら、たぶんすぐやめています

よ。

石井：(笑) 愛想がつきてね。

余川：そういう感じしますね。

横尾：それは石井さんだけでなく。

余川：石井さんだけでなく、なんか、要するに、ちゃんと確固たる場、みんな持っているわけだからね、職業的な場と、それと思想の科学とのバランスとかね。そうじゃないとね。

横尾：今もそうかもしれませんね、若い人たちも。

余川：今もそう。そうでないとそれほどのものはここからは得られないし、ねえ。

横尾：それほどの(笑)。

余川：その、全人生をかけてというようなものじゃない。

石井：そうそう。

余川：だからね、鶴見さんの性格もありますね、これがそれこそ新興宗教みたいな感じだったら、全てをここに(笑)とかね。

横尾：あ、全生活を。

余川：そう全生活を。でここから出ていってどうとかってね。

石井：そうね、職場からお金持ってね。

余川：そういうふうに言えば(笑)、だけどそうじゃない、まるで反対だからね、鶴見さんてね。

横尾：そうですね。

石井：だから私やっぱり自分は職人として中途半端なんだと思う。

横尾：ええー？

余川：そんなこともないと思う。そうですか？

石井：やっぱこの道何十年とやってきた人は偉いと思う。

余川：(笑) そういう意味のね。でも石井さんだってそういうふうに言えば言えますよ。

石井：うん、でもつねにほかのこと考えている(笑)。ばかなこと言ってるとか(笑)。だからそういう、場というのがやっぱりその生きていく知恵かなあ。それだったら玉砕しないですよ。

横尾：そうなんですな。

余川：うんうんうん。

横尾：それだったら転向しないですね、鋭角の転向がない。中巻なんかはそういうもののオンパレードですもんね。誠実で、集中して、そしてくるっと背を向ける。

石井：だから、その私が今読んでるね、阿片王の本〔佐野眞一 2008.『阿片王：満州の夜と霧』新潮文庫，新潮社；佐野眞一 2010.『甘粕正彦 乱心の曠野』新潮文庫，新潮社〕も、本当に左翼くずれがいかにか駄目だったかという人物がずい分出てきます。鍋山などの左翼くずれが一番始末が悪い。信頼できないと書かれています。

横尾：そうなんですか、鍋山なんかもだめなんですか。

石井：だってそのあと右翼的な方向に走るばかりでなく、生活としてもちゃんとしなかつ



たから。小遣いせびるみたいな、出入りをしたりとか。

横尾：ああー、悲しいですねえ。

石井：うん、でも面白いよ、あの本二つ読むと。満州国の問題は日本の戦後史をやるときにのがれられない問題です。

#### ㊦㊧ 「掘り下げる」他のキーワード

横尾：「掘り下げる」というキーワードが出てきたんですけども、研究会の中で他にこういう言葉はありましたか。

石井：「強制力」とかそういう言葉です。あの鶴見さんが定義なさった中にちりばめられている言葉はけっこう使われていました。

横尾：「掘り下げる」なんていうのも。

石井：たしかそうなのよ。

横尾：やっぱり鶴見さんが出してくることが多いんですか。

石井：けっこうね、鶴見さんはそういう言葉をつくるのがうまいじゃない。

横尾：「掘り下げる」なんていうのは「山脈の会」のイメージがあるんですが。

石井：あ、そう。

横尾：ええ、「君は君の足下を掘れ、ぼくはぼくの足下を掘る」という。

石井：ほんとう。

横尾：ですけどこの頃はまだまったく関係ないですよ。

石井：うん、関係ない。今でも覚えているんだけど、鎌倉で図書館の科学サークルで合宿した時に、みんなで海岸行って「掘り下げる」、「掘り下げる」なんて言って（笑）。貝かなんか探した。

一同：（笑）

横尾：それは石井さんがはやらせたわけですか。

石井：そうなのよ（笑）。

#### ㊦㊨ 有馬頼寧を選んだ経緯

横尾：有馬頼寧は杉並、荻窪でしたか。

石井：そう、荻窪ね。

横尾：やっぱり地理的な近さというのも題材に選んだ一因ですか。

石井：それはないと思う。やっぱり翼賛運動ということに興味があったわけだから。その中から人物が浮び上ってくるわけだから。あ、この人面白そうと思った。

横尾：その選択はご自分でなさった。

石井：ええ、そうです。

#### ㊦㊩ ライブラリースクールの人数・男女比

横尾：で、もうほとんどお聞きしまして、あと2問です。ライブラリースクールの1クラスの人員は。

## 資料2-③：石井紀子氏インタビュー第3回

石井：30人です。

横尾：30人、はい。男女比でいうと。

石井：30人中で30%ぐらい女性いたのかなあ。

横尾：あ、男性の方が多かったんですか。

石井：その当時は占領下の沖縄から留学してくるわけね、そういう人たちもいた。要するに県や大学などから学んで来いと派遣された人たちもいたし、それから職歴のある人などが多かった。男性の場合、下から来た人は少なかったかもしれない。

横尾：ああ、そうですか。

石井：1年で卒業する特別学生も入れて33名中女性は15名で約45%でした。

### ㊦ 敗戦時の感覚

横尾：一番上の設問が残りました。敗戦時の感想を山領さんなんかは解放感っておっしゃいましたけれども、石井さんはちょっと違ったなというふうにおっしゃったんですね。

石井：ばんざーいって感じではない。

横尾：たとえばその時の感覚を表すとすると。

石井：感覚よね。これでうちに帰らなくちゃいけないわという（笑）。

横尾：帰れる、ではない。

石井：家出したんだから（笑）。

横尾：帰らなくちゃ、ですか（笑）。

余川：あー、そうっか。

石井：あの厳しいうちへ帰らなくちゃならない。

横尾：チクチクしながら麦畑で作業しても、そっちの方がよかったんですか。

石井：そういうことね。自立して一人で生きていくという。やりたいことやるというのに反して、あの厳格なうちに帰るのかという思いでした。けども、帰ってみたら皆生きるのに必死だから、それどころじゃないわけ（笑）。

横尾：（笑）

石井：だから私ね、もう履歴書は面倒くさいからさ、疎開したと書かない。

余川：うん、そうですよね。

石井：たった何カ月かだからね。半年くらいでしょ。

横尾：ええ。疎開した期間遅らせるとかそういうことはなかったんですね。

石井：それはない。でも一応、米沢高等女学校に転校はしたのよ。

横尾：あ、そうですか。

石井：転入したの。

横尾：学校へはほとんど行かれてないわけですか。昼間はその、ご近所の団体に入って。

石井：授業はちゃんとやりましたよ。だけれども勤労奉仕や畑仕事、山菜とりなど多い生活だった。

横尾：あー。

石井：そしてまた武蔵高等女学校に戻ったんですね。

横尾：住居の変遷だけ確認しておいてよろしいですか。最初田辺でお生まれになって。

石井：うん。それから八王子。

横尾：八王子にお移りになったのが3歳、1935年ですね。それから千葉。

石井：千葉にはね、幼稚園に入った年。

横尾：幼稚園は千葉で、その後が横浜ですね。

石井：ううん違う。杉並第二小学校。杉並の西田町に住んでいたんです。そして27年に横浜ですね。今のうちですね。

横尾：お父様がお亡くなりになった。

石井：それが27年12月です。

横尾：移ったあとお亡くなりになった。

石井：そうです。移ってしばらくして。しかしこういう死に方もいいよね。

横尾：急に。

石井：脳溢血だから。

横尾：そうですか。

石井：朝、私が大学行く時に、なんか気分が悪いと言って、お手洗いで倒れたのかな、それで、あ、大変だわって言って、それじゃあ大学行かないでいる？って言ったら、いや大丈夫だよって言う、で帰ったらもう亡くなっていた。

余川：ふうーん。

石井：ああいう死に方はいいねえ。その間際までねえ、弁護士の仕事を一生懸命やっていた。

横尾：やっぱり知らず知らず激務でいらしたのか。

石井：いや、やっぱり血圧が高かったからね。で今みたいに降圧剤飲むとか予防的なことやってないじゃない。

横尾：そうですねえ。そういえばその頃家で血圧を測る人もあんまりいませんよね。

余川：そうですよね。

横尾：いくらお姉さまが看護師免許を持っていらしても。

石井：ほんとにああいう死に方はいいね。バリバリバタンてのはいいね。

横尾：バリバリバタン（笑）。

石井：ほんとそう思う。

横尾：でももう学資なんかはお父様のお世話になっていらっしやらなかったから。

石井：そうそう。食べることはね、しょうがないわね。

横尾：大激変ということはなかったですか、家計的には。

石井：大激変ね。だって結局兄たちは兄たちで東京の方で独立していたでしょ。私たちは父と母と3人でいて、で父が亡くなってから姉が帰って来た。

横尾：やっぱり、お父様の世代のそういう生き方とかも含め、興味は尽きないです。山領さんのお話なんか聞いていても面白いですね。

石井：ね、面白いね。石鱈つくったという話とか。

横尾：（笑）

資料2-③：石井紀子氏インタビュー第3回

石井：だからそういう戦後の時代というのがあったのよ。

横尾：ですね。

石井：みんなが生きていくことに必死な時代の方がいいのかもしれない。

横尾：(笑) そうですね。

石井：時間がありすぎると、ばかなこと考える人もいるから。

横尾：時間があって豊かになればいいですけども、こう、下に下に考えていったりすると厄介ですね。

**質問事項：**

(便宜上時系列を追って項目を区切りましたが、実際にお伺いする際には会報などを見つつ自然な流れでお話していただければと思います。)

**1 思想の科学、転向研に出会うまで**

- ① 戦時の生活と敗戦後の生活はどのようなものでしたか。
- ② 大学生活はどのようなものでしたか。逆コースからレッドパーズ、血のメーデーに至る時代をどのように過ごしていましたか。

**2 転向研との出会いにつき**

- ① 思想の科学ならびに転向研入会の動機を教えてください。
- ② 歴研と思想の科学で、客観的（組織やルール）、主観的（印象や石井さんにとっての意味）に何か違いましたか。
- ③ ご自分は転向したとっていましたか。今思いますか。思った、あるいは思うとしたらそれは何から何への、どのような転向ですか。

**3 転向研の活動と成果につき**

- ① 会報上の報告を見つつ、抜けている作業などありましたら教えてください。
- ② 戦前・戦中の転向を扱うにあたって当時を追体験する困難はありましたか。
- ③ 研究から論文執筆に至る過程において、どの工程が一番心に残りますか。
- ④ 雑誌が休刊期で思想の科学内の他のサークル活動が滞る中、転向研が続いた理由はどこにあると思いますか。
- ⑤ 転向研の転向研究の特徴はどこにあると思いますか。近代文学や吉本隆明など他の転向研究と比べた場合にどのような相違と共通性があると思いますか。
- ⑥ 『転向』上巻はスターリン批判以降の状況の中で出版されますが、研究時、あるいは出版時に政治情勢、言語空間の変化を意識しましたか。

**4 その後の生き方への影響につき**

- ① 転向研究によって何を得たと思われますか。  
その後のご自身の歩みにおいてどのような意味を持ってきたと思いますか。  
それは思想の科学研究会の存在がもつ意味と違いますか。
- ② 転向研が活動していた時代とそれ以降で、転向の持つ意味、思想を測る上での転向という枠組みの有効性は変化したと思いますか。
- ③ 現在、どのようにご自身の思想の自立を保っていますか。



追加質問：

1 思想の科学と転向研のこと

- ① 思想の科学への入会と転向研への参加はどちらが先でしたか。
- ② 転向研の初回からのメンバーで印象に残っていた人としてしまねさん、判沢さん、片桐ユズル夫妻、高畠さん、後藤さん、山領さん、親しかった方として西崎さん、おそらく久野さんの関係ということで西さんを挙げていました。  
『会報』13号にはこの会の「常連」として今枝さん、佐貫さん、掛川さん、畑中さん、横山さん、魚津さんも載っています。これらの方々の印象をお聞かせください。
- ③ 途中で加わった人は藤田さん、安田さん以外で誰かいましたか。
- ④ 中・下巻を作るときにも石井さんは関りましたか。週1回の会合は続いていましたか。
- ⑤ 佃さんや黒子さんとの出会いのように、在野のアカデミズムというだけでなくプロフェッショナル同士がつながる場としても思想の科学は機能していたと思いますか。
- ⑥ 第何次、いつごろの『思想の科学』が一番好きですか。

2 学生時代

- ① 学生で入党した人はエリートという感じでしたか。同級生の黨員をどのように眺めていましたか。

3 プロフェッションの選択に関連して

- ① 当初なぜ放送通信の仕事を選んだのですか。
- ② 積み上げる仕事のうちでも書籍に携わる仕事を選んだのはなぜですか。
- ③ CIEの図書館へ行ったのはどなたかの薦めがあったのですか。
- ④ 当時の書店、特に紀伊國屋書店はどのような場だったと思いますか。
- ⑤ 占領軍のプロパガンダ出版はいやだという思いと、占領軍の文化政策のもと設けられた慶応の図書館学に通うということは矛盾しませんでしたか。  
当時のアメリカへの思いはどのようなものでしたか。その後、そして今、アメリカをどのように見えていますか。
- ⑥ 職業を持つということに対するご家族の意見はどのようなものでしたか。
- ⑦ いくつもある道の一つに伯母さまのお世話による結婚というのもありましたか。それに対する考えはどのようなものでしたか。

4 お父上のこと

- ① お父上はどちらのご出身ですか。
- ② 敗戦で家父長制が崩れたということは具体的に家庭にどのような変化をもたらしましたか。
- ③ お父様の生き方をどのように思っていますか。同じ司法畑の人として高畠さんのお父様の生き様と絡めて見たことはありますか。

- 5 ① 石井さんご自身は民衆ですか。

## 再追加質問：

- ㊶ 敗戦は解放感というのとはちょっと違ったとおっしゃいましたが具体的にどのような感じでしたか。
- ㊷ より確実な婚家を求めるのではなく自分の身に何か付けようと思ったのはなぜですか。
- ㊸ 聖心でなく早稲田の方に行きたいと思った理由を教えてください。
- ㊹ 1952年のメーデーでは歴研のデモに参加し途中で別れたのですか。
- ㊺ 安田武さんの妹さんとは早大で知り合ったのですか。思想の科学、安田武さんとのつながりは偶然ですか。
- ㊻ ライブラリースクールの同級生は何人くらいでしたか。男女比はどれくらいでしたか。
- ㊼ 山領さんによるとしまねさんは遅れて参加したとのことですが、初回からいらしたと記憶していますか。
- ㊽ 忙しいなか転向研の活動を兼ねることができた原動力は何であると思いますか。
- ㊾ 「掘り下げる」というキーワードは誰からどのように出てきたのですか。
- ㊿ ほかに研究の中で生まれたキーワードで印象に残るものがあれば教えてください。
- ㊶ 有馬頼寧の住居は杉並ですが、転向研の前からその存在に馴染みはあったのですか。
- ㊷ 石井さんのインタビューを渡して山領さんが書いた室伏高信論というのは下巻収録の「転向思想史上の人びと一略伝」中の記述を指すのですか。
- ㊸ 転向の原稿はいつ頃書き上げたのですか。
- ㊹ 転向研へはいつ頃まで定期的に参加していたのですか。
- ㊺ 今ご自分の論文を読み直してどう思いますか。
- ㊻ なぜこのあとあまり「書くこと」に執着しないのですか。
- ㊼ 安田さんがリライトすることになった経緯をおしえてください。
- ㊽ 良心的・誠実・善意の自由主義者の持つ脆弱さという共通の見方は話し合いの中で醸成されたものですか。

## あとがき

## あとがき

本論文を構成する各章の初出は以下のとおりである。ただし、本稿に入れるにあたり加筆修正した。

序章 書き下ろし

第1章 『思想の科学』における多元主義の展開と大衆へのアプローチ  
『早稲田大学社会科学部創設 40 周年記念学生論文集』2006-11-15, p.199-208

第2章 『実感』論争と『思想の科学』『社会学研論集』(16), p.148-163

第3章 「思想の科学の転向研究」『社会学研論集』(14), p.180-195

第4章 第1節 書き下ろし

第2節 「思想の科学・転向研究会の一側面：石井紀子を通して見る共同性」  
『社会学研論集』(19), p.82-97

第5章 『思想の科学』における天皇制論『ソシオサイエンス』(19), p.142-157

第6章 「階級の解体—中間層論と『思想の科学』『社会学研論集』(17), p.102-117

終章 書き下ろし

本稿をまとめるまでに、学内外の多くの方々にご教示・ご協力を頂いた。

本稿は、未だ歴史化するのに十分な時間を経たとは言いきれない時代を扱っている。そうであるからこそ、活字化されたものだけでなくインタビューも交えるなど、歴史学と社会学が混濁するような方法を用いらざるを得ず、またそうできることが、本研究を進めるにあたり自身が感じた魅力でもあった。このような研究は学際性を重んじる社会科学研究科であればこそ可能になったものであり、何より、自らが歴史化され対象とされることを受け容れて下さった鶴見俊輔氏、石井紀子氏をはじめとする方々の寛容があってこそだった。

研究の過程においては、指導教官である内藤明先生、副指導教官の田村正勝先生から多くのご指導・ご教授を賜った。とくに、戦後の論壇と運動における主要な論点の一つである、「知識人」と「大衆」の別と、その関係性が孕む問題については、学士課程の終盤から内藤ゼミに入れていただき、未だ問題意識を散漫な形でしか表せない頃から先生にご示唆頂き、それから10年余りの間にゼミの方々との幾多の討論を経て、次第にその複雑な様相の一端を理解できるようになってきたところである。また、『思想の科学』という題名自体に含まれるパラドックスについても、『思想の科学』に興味を持ち出してまだ間もないころに田村先生から頂いた難問であり、本稿でようやく整理の緒についた。両先生の辛抱づよいご指導とゼミの方々にご心より感謝申し上げます。

本論文の少なからぬ部分は、鶴見俊輔氏と石井紀子氏へのインタビューから得たものに負っている。石井氏は計3回、約8時間に及ぶインタビューに応じていただいた。拙い質

問に対しても毎回十分に準備をして臨んで下さり、質問の意図をも越えて多くのことをお教え頂き、さらにテープ起しの整理にあたっては、何度も校正を重ねていただいた。インタビューから校正の過程を通しての石井氏からの多くのご示唆とご教導なくして、本稿は成立し得なかった。深く御礼申し上げます。

また、思想の科学社社長の余川典子氏には、インタビューの場所を快く提供いただき、全3回のインタビューにご同席いただいた。余川氏には、昨年夏、思想の科学社の引越しに伴い『思想の科学』本誌もお分け頂いた。ここに謝意を表します。

石井氏のご紹介で、横山貞子氏を介して鶴見氏に質問票をお取り次ぎいただき、書面ではなく直接お会いする機会を得たことは、鶴見氏のご高齢かつご多忙であることを考えると、存外の僥倖であった。インタビュー当日には、お忙しいなか横山氏と鶴見太郎先生のご同席を賜った。鶴見太郎先生には、2009年度に演習「日本史学研究」を聴講させて頂く中で、「転向」を論じることの意味について数多くのご教示を頂き、その後山領健二氏をご紹介いただくなど大変お世話になった。インタビュー経験の浅い筆者の進行はまことに拙いものであったが、鶴見先生がたえず進行を気にかけて下さり、横山氏が鶴見氏のお答えに随時補足をして下さって、2時間以上におよぶ充実したインタビューを採らせて頂くことが出来た。またインタビューの起こしにもお目通し頂き、ここに掲載することが可能になった。厚く御礼申し上げます。

転向研究会に関する資料は、山領健二氏に閲覧をお許しいただいた。手書きのカード、謄写版の年表、原稿など貴重な資料を閲覧させて頂き、作業の過程を裏付けることが可能となった。また研究会の折などに何くれとなく当時のお話を伺えたことも、本論文の背景となる状況の理解を助けることとなった。記して感謝申し上げます。

なお、こうして研究をまとめ上げることが出来たのも、早稲田大学の充実した教育・研究環境の御蔭である。とくに、『思想の科学』をはじめとする雑誌のバックナンバーに自由にアクセスできたことは、大変恵まれていた。早稲田の知的環境の開放性は、一度大学を離れてからもう一度学ぼうとする筆者のような学生を受け入れる学士入学等のシステムの充実にも表れている。そして何より、学士課程から博士課程までを通して、学生の関心・疑問にどこまでもおつき合い下さり、より豊かな地平へとお導き下さった社会科学部・研究科の諸先生方に、尊敬と感謝の念を表したく思います。

2013年7月31日

横尾夏織